

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第173集

上品野西金地遺跡

2013

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第173集

か み し な の に し か ね じ
上品野西金地遺跡

2013

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター



〈巻頭写真1〉 茶壺（祖母懷茶壺）

丘陵南斜面の遺物集積から出土した（787）。上品野西金地遺跡における大窯製品の代表的な器種の一つ。振りを加えた縦耳を四方向に付し、縦耳間に柄杓を用いて灰を豪放に流し掛けている。

上品野西金地遺跡



〈巻頭写真2〉 出土遺物集合写真1（壺・甕類）

上段は貯蔵具の甕。内外面に鉄釉を施し、灰を流し掛けする。

下段は茶道具の茶壺（祖母懷茶壺）。三耳壺と四耳壺、縦耳・横耳・振りを加えた縦耳を付したものがある。



〈巻頭写真3〉 出土遺物集合写真2（壺類、端反皿）

上段：鉄釉を施した筒形容器、徳利・双耳徳利、双耳壺。筒形容器には徳利を重ねて焼成した痕跡が残る。
下段：皿類の主体を占める端反皿。焼成不良品が多い。2個体を釉着させ、穿孔を施した特異な個体もある。

上品野西金地遺跡



〈巻頭写真4〉出土遺物集合写真3（鉢類）

上段は主要な生産品目の擂鉢。ⅠA類、ⅠB類、Ⅱ類によって構成される。
下段は各種の鉢類。



〈巻頭写真5〉出土遺物集合写真4（鍋・釜類、燭台）

上段は内耳鍋と釜。釜には使用痕跡が明瞭なものも多い。

下段は燭台。受皿部は仕切りがないもの、同心円状・「一」字状の仕切りがあるものが認められる。

上品野西金地遺跡



〈巻頭写真6〉 上品野西金地遺跡遠景

桑下東窯跡、桑下城跡が同一丘陵の西方に連続して展開する。左手は中馬（信州）街道沿いの集落。

序

瀬戸市は愛知県尾張地方の北東部に位置する中規模都市で、陶器そのものが「瀬戸物」と呼ばれているように、日本有数の窯業生産地として栄えてきました。また、「瀬戸物」の生産は産業の枠にとどまらず、当地の景観、文化、生活、信仰にも深く根付き、歴史を語るうえでも決して欠くことのできない存在となっています。このたび、瀬戸市北東部の上品野地区において一般国道 363 号線道路改良工事が行われることとなり、愛知県埋蔵文化財センターは当地区の上品野西金地遺跡の発掘調査を実施しました。

上品野西金地遺跡は同じく当センターが調査した桑下城跡、桑下東窯跡に連続する遺跡で、発掘調査においては、これらの城跡や窯跡と同様に、戦国時代の遺構と遺物を確認することができました。出土した茶壺をはじめとする戦国時代の陶器はことのほか残りが良く、「瀬戸物」の生産史にとって資料的価値が高いものも少なくありません。本書はこの成果をまとめたもので、今後、本書の成果が学術的に活用され、ひいては埋蔵文化財の保護につながることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、地元住民の皆様をはじめ、関係者及び関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して、厚く御礼を申し上げます。

平成 25 年 3 月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 加藤高明

例 言

1. 本書は、愛知県瀬戸市上品野町に所在する上品野西金地遺跡(遺跡番号 3710:瀬戸市教育委員会 1997『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』)の発掘調査報告書である。なお、当遺跡に連続する桑下東窯跡B区の調査成果も併せて報告する。
2. 上品野西金地遺跡の発掘調査は、一般国道 363 号線道路改良工事にかかる事前調査である。範囲確認調査は愛知県土木部道路建設課(当時、現愛知県建設部道路建設課)より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが、発掘調査は愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター(当時、現公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター)が実施した。
3. 調査期間は範囲確認調査が平成 10 年 2 月 17 日から 3 月 1 日、3 月 23 日から 27 日、発掘調査が平成 18 年 9 月 11 日から平成 19 年 3 月 27 日である。報告書作成にかかる整理作業と報告書の編集作業は平成 22 年 4 月から 6 月、平成 23 年 4 月から 11 月に実施した。
4. 調査面積は範囲確認調査が 100 m²、発掘調査が 3,400 m²である。
5. 調査担当者は範囲確認調査が北村和宏(主査)・小澤一弘(主任)・後藤英史(調査研究員)、発掘調査が小澤一弘(主査)・早野浩二(調査研究員)である。
6. 発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター
愛知県建設部道路建設課尾張建設事務所 瀬戸市教育委員会・財団法人瀬戸市文化振興財団
7. 発掘調査において、佐伯建設工業株式会社(現あおみ建設株式会社)より調査業務全般の支援を受けた。支援体制は以下の通りである。
中村光敏(現場代理人) 大浜良介(調査補助員) 伊藤陽肇(測量技師)
8. 報告書作成にかかる整理作業において、出土遺物の実測・トレース、出土陶器の正射画像(オルソ画像)作成を国際文化財株式会社、出土遺物の写真撮影を金子和久氏(有限会社写真工房・遊)、出土陶器の復原・修復を株式会社スタジオ三十三、金属製品の保存処理と蛍光 X 線分析を株式会社東都文化財保存研究所、各種自然科学分析をパレオ・ラボにそれぞれ委託した。
9. 発掘調査、報告書作成の過程で、次の各氏、各機関からご指導、ご協力を得た。
青木 修 井上喜久男 小川裕紀 河合君近 藤澤良祐 財団法人瀬戸市文化振興財団
10. 本編の執筆は、第 4 章(2)の有舌尖頭器の記述と第 5 章(5)を川添和暁(調査研究主任)、第 5 章(1)・(2)をパレオ・ラボ AMS 年代測定グループ、同(3)を佐々木由香・バンダリ スダルジャン(パレオ・ラボ)、同(4)を黒沼保子(パレオ・ラボ)、それ以外を早野浩二(調査研究主任)が担当した。
11. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いたものを踏襲した。なお、使用する遺構記号は以下のとおりであるが、厳密な統一性はない。
SB:建物、P:柱穴、SE:井戸、SK:土坑、SD:溝、SW:石垣、SU:遺物集積、NR:自然流路、
SX:その他不明遺構
12. 発掘調査および本書で使用了座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠した。ただし、表記は旧測地系(日本測地系)による。
13. 本編で使用する土層の色調については、『新版標準土色帳』を参考に記述した。
14. 発掘調査の記録(実測図、写真等)は、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。なお、遺跡の略記号は「2SKN06」である。
15. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 Tel 0567-67-4164
16. 本書の編集は早野浩二が担当した。

目次

第1章 調査の概要	1
(1) 調査の経緯	1
(2) 調査の経過	2
第2章 周辺の環境	4
(1) 地形・地質	4
(2) 歴史	5
第3章 遺構	11
(1) 遺跡の構造	11
(2) 縄文（弥生）時代の遺構	21
(3) 古代の遺構	23
(4) 中世の遺構	24
(5) 戦国時代・近世の遺構	26
第4章 遺物	40
(1) 概要	40
(2) 古代以前の遺物	40
(3) 中世の遺物	41
(4) 戦国時代の遺物	43
(5) 近世の遺物	124
(6) 木製品	130
(7) 金属製品	132
(8) 桑下東窯跡B区の遺物	139
第5章 分析・考察	144
(1) 出土木材・種実の放射性炭素年代測定	144
(2) 土器付着物の放射性炭素年代測定	148
(3) 大型植物遺体	151
(4) 出土木製品および炭化材の樹種同定	155
(5) 品野盆地周辺の後期旧石器時代から縄文時代草創期の石器群	164
(6) 縄文時代の貯蔵穴	167
(7) 古代・中世の遺構・遺物	168
(8) 桑下東窯跡・上品野西金地遺跡の土坑墓	170
(9) 上品野西金地遺跡と大窯期前半の遺物	173
第6章 まとめ	185
遺物一覧表	186
写真図版	201

〈挿 図 目 次〉

第 1 図	遺跡の位置	1
第 2 図	調査前の地形と試掘坑の配置 (1:1,000)	2
第 3 図	瀬戸市の地形・地質 (1:15 万)	4
第 4 図	品野盆地の遺跡 (1:25,000)	8
第 5 図	上品野地区の遺跡 (1:10,000)	9
第 6 図	春日井郡山田庄上品野村絵図	10
第 7 図	主要遺構配置図 (1:800)	11
第 8 図	調査前地形測量図 (1:500)	12
第 9 図	遺構全体図 (1:500)	13
第 10 図	調査区土層断面位置 (1:800)	14
第 11 図	調査区土層断面 (1:200)	15
第 12 図	桑下東窯跡 B 区基本遺構図 (1:200)	16
第 13 図	基本遺構図 1 (1:200)	17
第 14 図	基本遺構図 2 (1:200)	18
第 15 図	基本遺構図 3 (1:200)	19
第 16 図	基本遺構図 4 (1:200)	20
第 17 図	倒木痕 282SX (1:50)	21
第 18 図	貯蔵穴の分布と周辺の土層断面 (1:100)	22
第 19 図	縄文(弥生)時代の貯蔵穴と柱根 (1:50)	22
第 20 図	401SB 柱穴 (1:50)	23
第 21 図	掘立柱建物 378SB (1:100)	23
第 22 図	掘立柱建物 329SB (1:100)	24
第 23 図	掘立柱建物 329SB 柱穴遺物出土状況 (1:20)	25
第 24 図	掘立柱建物 379SB (1:100)	25
第 25 図	掘立柱建物 329SB 柱根 (1:20)	25
第 26 図	平坦面 004SX と土坑(墓) 群 (1:50)	27
第 27 図	004SX 下位の平坦面と土坑(墓) 群 (1:50)	27
第 28 図	平坦面 004SX の土坑(墓) (1:50)	28
第 29 図	平坦面 005SX 土層断面 (1:50)	28
第 30 図	平坦面 035SX と土坑(墓) 042SK・145SK (1:50)	39
第 31 図	斜面南東隅付近の集石土坑(墓) 群 (1:100)	30
第 32 図	斜面南東隅付近の集石土坑(墓)・銭貨出土状況 (1:50)	31
第 33 図	土坑(墓) 513SX (1:50)	31
第 34 図	土坑(墓) 513SX と周囲の平坦面 (1:100)	32
第 35 図	東斜面遺物集積 330SU (1:100)	33
第 36 図	東斜面遺物集積 330SU 遺物出土状況 (1:50)	33
第 37 図	南斜面 480NR 遺物出土状況 (1:100)	34

第 38 図	南斜面 480NR 土層断面 (1:100)	35
第 39 図	暗渠 510SX (1:50)	36
第 40 図	丘陵下位の平坦面 1 (平面 1:100/ 土層断面 1:50)	37
第 41 図	丘陵下位の平坦面 2 (1:100)	38
第 42 図	丘陵下位の掘立柱建物 (1:100)	38
第 43 図	桑下東窯跡 B 区井戸 SE01 (1:50)	39
第 44 図	上品野西金地遺跡出土遺物の構成	40
第 45 図	縄文時代の遺物 (1:1/1:2)	41
第 46 図	古代の遺物 (1:4)	41
第 47 図	中世の遺物 (1:4)	42
第 48 図	器種分類・碗皿類 (1:4)	44
第 49 図	器種分類・碗皿類以外の器種 (1:8)	45
第 50 図	遺構出土遺物 1 (1:4)	48
第 51 図	遺構出土遺物 2 (1:4)	49
第 52 図	天目茶碗の形式構成	50
第 53 図	天目茶碗 1 (1:4)	51
第 54 図	天目茶碗 2 (1:4)	52
第 55 図	丸碗・平碗・その他碗類 (1:4)	53
第 56 図	山茶碗・灯明皿 (1:4)	54
第 57 図	緑釉小皿・緑釉挟み皿・腰折皿 (1:4)	56
第 58 図	端反皿 1 (1:4)	57
第 59 図	端反皿 2 (1:4)	58
第 60 図	端反皿 3 (1:4)	59
第 61 図	端反皿の形式構成	59
第 62 図	端反皿 4 (1:4)	60
第 63 図	丸皿・稜皿 (1:4)	62
第 64 図	その他皿類 (1:4)	63
第 65 図	擂鉢の分類	64
第 66 図	擂鉢の形式構成	64
第 67 図	擂鉢の底径度数分布	64
第 68 図	擂鉢底部内面の櫛目の分類	65
第 69 図	擂鉢 I A 類の櫛目の構成	65
第 70 図	擂鉢の口縁部形状の分類 (1:4)	66
第 71 図	擂鉢 1 (1:4)	68
第 72 図	擂鉢 2 (1:4)	69
第 73 図	擂鉢 3 (1:4)	70
第 74 図	擂鉢 4 (1:4)	71
第 75 図	擂鉢 5 (1:4)	72
第 76 図	擂鉢 6 (1:4)	73

第 77 図	搦鉢 7 (1:4)	74
第 78 図	搦鉢 8 (1:4)	75
第 79 図	搦鉢 9 (1:4)	76
第 80 図	搦鉢 10 (1:4)	77
第 81 図	搦鉢 11 (1:4)	78
第 82 図	搦鉢 12 (1:4)	79
第 83 図	搦鉢 13 (1:4)	80
第 84 図	搦鉢 14 (1:4)	81
第 85 図	搦鉢 15 (1:4)	82
第 86 図	搦鉢 16 (1:4)	83
第 87 図	搦鉢 17 (1:4)	84
第 88 図	搦鉢 18 (1:4)	85
第 89 図	搦鉢 19 (1:4)	86
第 90 図	その他鉢類 1 - 鉢 A (1:4)	88
第 91 図	その他鉢類 2 - 鉢 A (1:4)	89
第 92 図	その他鉢類 3 - 鉢 B ・ 鉢 C (1:4)	90
第 93 図	その他鉢類 4 - 鉢 C (1:4)	91
第 94 図	その他鉢類 5 - 鉢 C (1:4)	92
第 95 図	その他鉢類 5 - 鉢 C (1:4)	93
第 96 図	桶 ・ 片口 ・ その他の容器 (1:4)	94
第 97 図	鍋 1 (1:4)	96
第 98 図	鍋 2 (1:4)	97
第 99 図	釜 1 (1:4)	98
第 100 図	釜 2 (1:4)	99
第 101 図	釜 3 (1:4)	100
第 102 図	茶釜 ・ 風炉 (1:4)	101
第 103 図	燭台 1 (1:4)	102
第 104 図	燭台 2 ・ 灯籠 ・ 瓦 (1:4)	103
第 105 図	甕 1 (1:4)	105
第 106 図	甕 2 (1:4)	106
第 107 図	甕 3 (1:4)	107
第 108 図	甕 4 (1:4)	108
第 109 図	甕 5 (1:4)	109
第 110 図	茶壺 1 (1:4)	110
第 111 図	茶壺 2 (1:4)	111
第 112 図	有耳壺 ・ 筒形容器 (1:4)	112
第 113 図	徳利 1 (1:4)	114
第 114 図	徳利 2 (1:4)	115
第 115 図	その他壺類 ・ 茶入 ・ 宗教具 (1:4)	116

第 116 図	狛犬・水滴 (1:3)	117
第 117 図	匣鉢の分類 (1:4)	118
第 118 図	匣鉢の構成	118
第 119 図	窯道具類 1 (1:4)	119
第 120 図	窯道具類 2 (1:4)	120
第 121 図	窯道具類 3 (1:4)	121
第 122 図	窯道具類 4 (1:4)	122
第 123 図	土師器皿・土師器鍋 (1:4)	123
第 124 図	近世の遺物 1 (1:4)	125
第 125 図	近世の遺物 2 (1:4)	126
第 126 図	近世の遺物 3 (1:4/1:3)	127
第 127 図	近世の遺物 4 (1:4)	128
第 128 図	近世の遺物 5 (1:4)	129
第 129 図	木製品 1 (1:8)	130
第 130 図	木製品 2 (1:4/1:2)	131
第 131 図	錢種の構成の比較	132
第 132 図	錢貨の構成元素の比較	134
第 133 図	錢貨 1 (1:1)	135
第 134 図	錢貨 2 (1:1)	136
第 135 図	錢貨 3 (1:1)	137
第 136 図	錢貨 4 (1:1)	138
第 137 図	桑下東窯跡 B 区の遺物 1 (1:4)	141
第 138 図	桑下東窯跡 B 区の遺物 2 (1:4)	142
第 139 図	桑下東窯跡 B 区の遺物 3 (1:4/1:1)	143
第 140 図	測定試料	148
第 141 図	関連遺跡位置図	164
第 142 図	品野盆地周辺の後期旧石器時代石器 (1:2)	165
第 143 図	品野盆地周辺の縄文時代草創期石器 (1:2)	166
第 144 図	古代の遺物出土分布	168
第 145 図	中世の遺物出土分布	169
第 146 図	土坑墓の分布 (1:2,000)	171
第 147 図	桑下東窯跡と小金山窯跡との組成の比較	176
第 148 図	遺物出土分布 1	178
第 149 図	遺物出土分布 2	179
第 150 図	遺物出土分布 3	180
第 151 図	遺物出土分布 4	181
第 152 図	桑下東窯跡と上品野西金地遺跡の位置関係 (1:2,500)	184

〈挿 表 目 次〉

第 1 表	大窯期前半遺物集計表 1 (破片数)	46
第 2 表	大窯期前半遺物集計表 2 (個体数)	47
第 3 表	播鉢 I A 類の櫛目の相関	65
第 4 表	播鉢の櫛目の構成と本数との相関.....	67
第 5 表	銭貨一覧表 1	133
第 6 表	銭貨一覧表 2	134
第 7 表	桑下東窯跡 05 B 区大窯期前半遺物集計表 (破片数).....	140
第 8 表	桑下東窯跡 05 B 区大窯期前半遺物集計表 (個体数).....	140
第 9 表	測定試料と処理	146
第 10 表	放射性炭素年代測定と暦年較正.....	147
第 11 表	測定試料と処理	149
第 12 表	放射性炭素年代測定と暦年較正.....	150
第 13 表	出土した大型植物遺体.....	153
第 14 表	樹種同定結果一覧.....	156
第 15 表	出土材の樹種構成.....	159
第 16 表	器種別の樹種構成.....	159
第 17 表	上品野西金地遺跡と上品野遺跡の貯蔵穴の種実	167
第 18 表	品野盆地における中世集落の遺物組成	169
第 19 表	桑下東窯跡・上品野西金地遺跡の土坑墓.....	171
第 20 表	上品野西金地遺跡と桑下東窯跡の組成の比較 (破片数)	174
第 21 表	上品野西金地遺跡と小金山窯跡の組成の比較 (個体数)	175

〈本文写真目次〉

写 真 1	祖母懷茶壺出土状況 (T11)	2
写 真 2	調査着手前の状況	3
写 真 3	南斜面の遺物集積の調査	3
写 真 4	丘陵部分の調査	3
写 真 5	土層断面の記録作業.....	3
写 真 6	桑下城跡の調査	9
写 真 7	桑下東窯跡の調査.....	9
写 真 8	出土した大型植物遺体.....	154
写 真 9	出土材の顕微鏡写真 (1)	161
写 真 10	出土材の顕微鏡写真 (2)	162
写 真 11	出土材の顕微鏡写真 (3)	163

〈巻頭写真図版〉

- 〈巻頭写真1〉茶壺（祖母懷茶壺）
〈巻頭写真2〉出土遺物集合写真1（壺・甕類）
〈巻頭写真3〉出土遺物集合写真2（壺類、端反皿）
〈巻頭写真4〉出土遺物集合写真3（鉢類）
〈巻頭写真5〉出土遺物集合写真4（鍋・釜類、燭台）
〈巻頭写真6〉上品野西金地遺跡・桑下東窯跡遠景
〈CD 添付画像〉印花文の正射画像（オルソ画像）

〈写真図版目次〉

上品野西金地遺跡調査区全景	203
古代以前（縄文時代・平安時代）の遺構	204
中世の遺構	205
戦国時代・近世の遺構（西部の丘陵部分）	206
（集石）土坑（墓）1	207
平坦面 035SX	208
（集石）土坑（墓）2	209
東斜面遺物集積 330SU	210
東斜面遺物集積 380SU・東斜面土層断面	211
南斜面 480NR 全景	212
南斜面 480NR 集石全景・土層断面	213
南斜面 480NR 遺物出土状況	214
南斜面 480NR 集石検出状況・南斜面 007NR 遺物出土状況	215
丘陵下位の平坦面	216
中世の遺物・戦国時代の遺構出土遺物	217
戦国時代の遺構 035SX 出土遺物	218
戦国時代の遺構 513SX 出土遺物	219
大窯期前半の遺物1（天目茶碗1）	220
大窯期前半の遺物2（天目茶碗2）	221
大窯期前半の遺物3（丸碗・平碗等）	222
大窯期前半の遺物4（山茶碗・灯明皿）	223
大窯期前半の遺物（縁釉小皿・縁釉挟み皿）	224
大窯期前半の遺物6（腰折皿）	225
大窯期前半の遺物7（端反皿1）	226
大窯期前半の遺物8（端反皿2）	227
大窯期前半の遺物9（端反皿3）	228
大窯期前半の遺物10（端反皿4）	229
大窯期前半の遺物11（丸皿）	230

大窯期前半の遺物 12（稜皿・その他皿類）	231
大窯期前半の遺物 13（播鉢 1）	232
大窯期前半の遺物 14（播鉢 2）	233
大窯期前半の遺物 15（播鉢 3）	234
大窯期前半の遺物 16（播鉢 4）	235
大窯期前半の遺物 17（播鉢 5）	236
大窯期前半の遺物 18（鉢 1）	237
大窯期前半の遺物 19（鉢 2）	238
大窯期前半の遺物 20（鉢 3）	239
大窯期前半の遺物 21（浅鉢・その他鉢類）	240
大窯期前半の遺物 22（その他の容器）	241
大窯期前半の遺物 23（内耳鍋）	242
大窯期前半の遺物 24（釜 1）	243
大窯期前半の遺物 25（釜 2・その他釜類）	244
大窯期前半の遺物 26（燭台）	245
大窯期前半の遺物 27（甕）	246
大窯期前半の遺物 28（祖母懷茶壺）	247
大窯期前半の遺物 29（有壺壺・筒形容器 1）	248
大窯期前半の遺物 30（有壺壺・筒形容器 2）	249
大窯期前半の遺物 31（徳利 1）	250
大窯期前半の遺物 32（徳利 2・双耳壺）	251
大窯期前半の遺物 33（茶入・小壺・耳付水注・花瓶・仏餉具・香炉）	252
大窯期前半の遺物 34（狛犬・水滴）	253
大窯期前半の遺物 35（窯道具類 1）	254
大窯期前半の遺物 36（窯道具類 2）	255
近世の遺物 1	256
近世の遺物 2	257
石器・石製品・木製品	258
銭貨 X 線画像 1	259
銭貨 X 線画像 2	260

第1章 調査の概要

(1) 調査の経緯

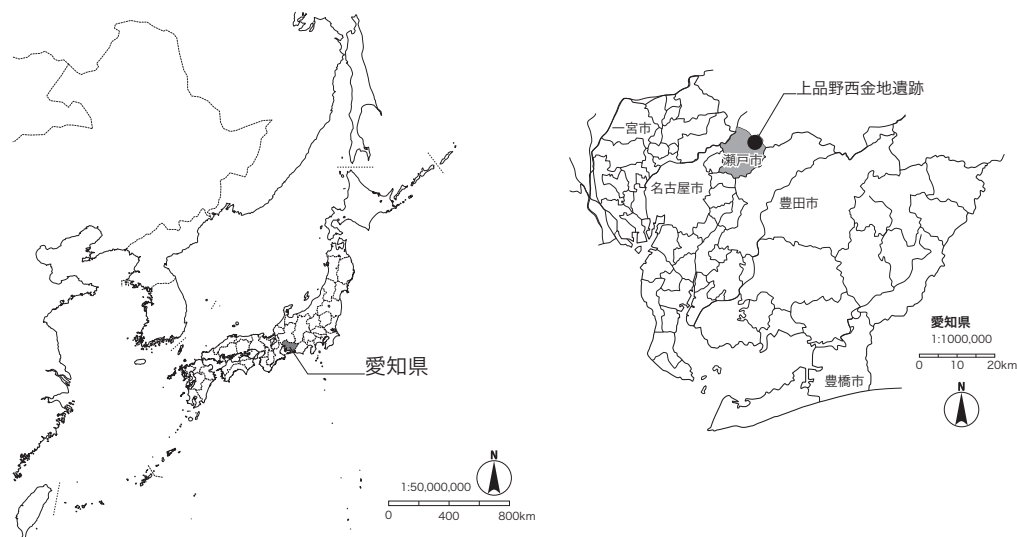
上品野西金地遺跡は瀬戸市北東部の上品野町地内（北緯 35 度 10 分 50 秒・東経 136 度 54 分 01 秒）に所在する（第 1 図）。遺跡は平成 4 年 9 月から平成 9 年 3 月にかけて瀬戸市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査において確認、登録された「中世～近世」の「散布地」で、地目は「水田・畑地」である。

範囲確認調査を含めた発掘調査は一般国道 363 号線道路改良工事に伴う事前調査である。上品野西金地遺跡を含めた桑下東窯跡、桑下城跡、上品野蟹川遺跡の 4 遺跡の範囲確認調査は平成 9 年に愛知県土木部道路建設課（当時、現愛知県建設部道路建設課）から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センター（当時、現公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。調査期間は平成 10 年 2 月 17 日から 3 月 1 日、3 月 23 日から 27 日で、調査面積は 100 m²（担当：北村和宏・小澤一弘・後藤英史）である。

発掘調査は平成 18 年に愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（当時、現公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。調査期間は平成 18 年 9 月 11 日から平成 19 年 3 月 27 日で、調査面積は 3,400 m²（担当：小澤一弘・早野浩二）である。

文献

瀬戸市教育委員会1997『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』
北村和宏・小澤一弘・後藤英史1998「瀬戸地域範囲確認調査」『年報 平成9年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
北村和宏1999「上品野西金地遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報14 平成9年度』愛知県教育委員会・財団法人愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二2007「上品野西金地遺跡」『年報 平成18年度』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター



第1図 遺跡の位置

遺跡の位置

調査の経緯

範囲確認調査

発掘調査

(2) 調査の経過

範囲確認調査

範囲確認調査は平成10年2月17日から3月1日と3月23日から27日に、水野川に面した低地部分と丘陵部分に設定したT01～T15の試掘坑を重機によって掘削し、遺構・遺物の有無を確認する方法で実施した(第2図)。その結果、水野川右岸の低地部分に古代・中世の集落遺跡の存在が想定され、丘陵部分において、窯道具類を含む大窯期前半の大量の遺物が出土したことから、用地内上方には大窯期の窯跡の存在が予想された。



写真1 祖母懷茶壺出土状況(T11)



第2図 調査前の地形と試掘坑の配置 (1:1,000)

発掘調査は平成18年9月に事業者による丘陵部分の伐採後に地形測量を実施し、10月2日に桑下東窯跡から連続する遺跡西部の丘陵部分から着手した。丘陵部分は付近に窯跡の存在が予想されたこともあって、地形を考慮して要所に土層観察用の畦を設定した。表土は重機によって掘削したが、遺物が地表に露出している地点とその付近は人力によって掘削した。地表に一部が露出していた耕作地に伴う石垣については、残存状況が良好な部分について、全面を露出させた状態を写真撮影によって記録し、記録後に撤去した。

発掘調査

丘陵斜面周辺においては、窯道具類を含む大量の大窯期前半の遺物が大量に出土し、調査区周辺に窯跡の存在が予想されたが、遺物集積の下位からも近世の遺物が出土すること、未使用の陶器に加えて明らかな使用痕跡が認められるものが認められることなどは、遺跡の成因や性格の適確な判断、調査の主眼や方向性の決定を困難とした。また、散在する巨大な花崗岩の転石、丘陵側からの湧水と度重なる壁面の崩壊なども遺構・遺物の精査に困難を来した。

遺構・遺物の精査と併行して、遺構平面図、土層断面図、遺物出土状況図等の作成、遺構検出状況・遺物出土状況等の写真撮影による記録作業を実施し、遺構・遺物の精査が完了した段階の11月27日と平成19年3月2日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。そして、3月23日に記録作業を含めた調査、3月27日に調査区の埋め戻しが完了した。

記録作業

出土遺物については、窯道具類を含めた全ての遺物を採取し、洗浄は発掘調査期間中に現地で実施した。洗浄した遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにおいて仮収納した。

整理作業

遺物の分類・接合・実測・復元・図版作成・写真撮影・収納等の整理作業、報告書の執筆・編集は平成22年4月から6月、平成23年4月から11月の計11ヶ月の期間内に実施し、平成25年3月に本書を刊行した。

報告書作成・刊行



写真2 調査着手前の状況



写真3 丘陵部分の調査



写真4 南斜面の遺物集積の調査



写真5 土層断面の記録作業

第2章 周辺の環境

(1) 地形・地質

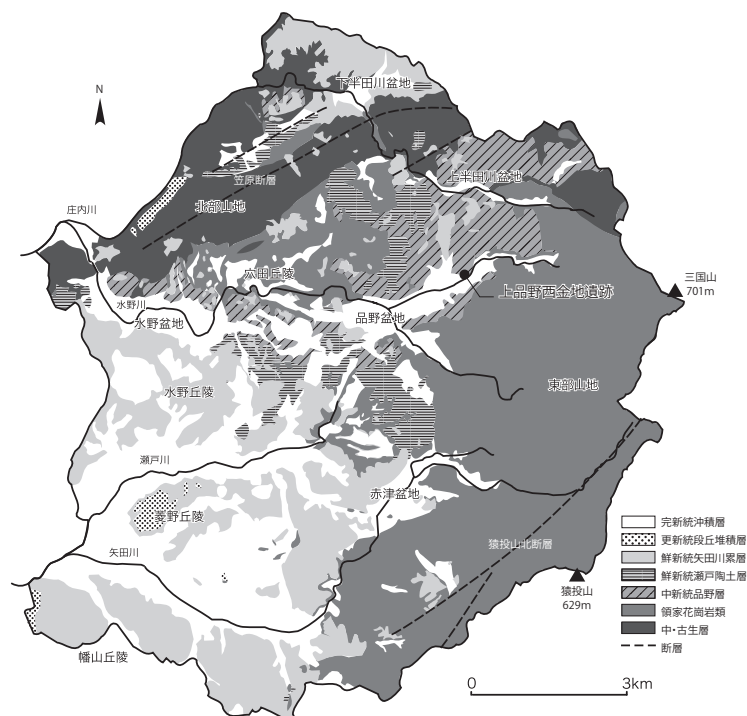
尾張東部丘陵

三国山（標高 701m）と猿投山（標高 629m）から西に派生する尾張東部丘陵は、北から穴田丘陵、水野丘陵、菱野丘陵、幡山丘陵と呼称される（第3図）。猿投山、三国山の山陵付近に発して、尾張丘陵北部の穴田丘陵と水野丘陵を分つ水野川は蛇ヶ洞川と合流後、庄内川と名称を変え、伊勢湾に流下する。

丘陵地には中央構造線陸側の内帯（領家帯・美濃帯）が広がり、美濃帯の古・中生層と中生代白亜紀から新生代古第三紀の領家帯の花崗岩類を基盤岩として、それらを新生代第三紀中新世後期から第四紀更新世、完新世の堆積物が覆っている。上品野町付近の丘陵地は新第三系中新統の品野層からなる。

品野盆地の地形

丘陵地内は基盤岩類に囲まれた盆地状構造を示す地形が認められ、盆地は北から下半田川盆地、上半田川盆地、水野盆地、品野盆地、赤津盆地と呼称される。品野盆地は瀬戸市片草町から白岩町を通じ、上品野町、中品野町、品野町に至る北東―南西方向に延びた盆地状構造を呈する。盆地底は標高約 180 m の狭長な谷底平野を形成する。上品野西金地遺跡は新第三系中新統である品野層が形成する丘陵地と完新統からなる盆地底との境界付近に位置し、調査地点における丘陵上の標高は約 210m、低地部分の標高は約 200m である。



瀬戸市史編纂委員会1986『瀬戸市史』資料編二自然、愛知県1997『愛知県活断層アトラス』より作成

第3図 瀬戸市の地形・地質（1:15万）

(2) 歴史

旧石器・縄文時代

品野盆地における遺跡形成の端緒は、上品野遺跡の丘陵上の谷状地形において検出された台形様石器を含む後期旧石器時代の石器群である。続く縄文時代の遺構・遺物は盆地内の主要な遺跡において広く確認されている。盆地西端の品野西遺跡においては、明確な遺構は検出されていないが、縄文時代草創期の有舌尖頭器、木葉形尖頭器を主体とする石器群に加えて、縄文時代早期末葉から晩期前半の土器が断続的に出土している。近隣の落合橋南遺跡においても、中期末葉、後期、晩期の土器と石器が出土している。その他、盆地東部の上品野遺跡蟹川遺跡において、後期前葉から中葉、後期後葉から晩期後葉の土器、上品野遺跡において、縄文時代中期後半、後期後葉、晩期の土器がごくわずかながら出土している。なお、上品野遺跡において検出された低湿地型の貯蔵穴4基は縄文時代晩期中葉から弥生時代中期中葉のいずれかの時期に利用されたものと考えられている。

上品野遺跡

品野西遺跡

貯蔵穴

弥生・古墳時代

盆地内において、弥生時代前期から中期の明確な遺構は検出されていないが、前期の遠賀川系土器が上品野遺跡、条痕文土器が上品野蟹川遺跡、中期の土器が上品野遺跡と品野西遺跡において出土している。弥生時代後期の遺構・遺物としては、落合橋南遺跡において竪穴建物1棟、上品野遺跡において焼失建物2棟を含む弥生時代後期の竪穴建物5棟が検出されている。古墳時代前・中期の遺構・遺物はほとんど確認されず、品野西遺跡において古墳時代前期後半の土器がごくわずかに出土しているのみである。

弥生時代前期

弥生時代中期

弥生時代後期

古墳時代前・中期

古墳時代後期から終末期には盆地西部の丘陵上に天白古墳群が造営される。天白1号墳は水野川流域と矢田川流域に多い擬似両袖式の横穴式石室を埋葬施設とする古墳で、7世紀前半の築造と推測される。

古墳時代後期

天白古墳群

古代

古代における水野川流域の領域は尾張国山田郡の領域、『和名抄』による山田郡志談郷に属していたとされる。なお、山田郡は1548年から1570年の間に廃止され、春部郡と愛知郡に分割される。

山田郡志談郷

7世紀以降、盆地内には、品野西遺跡、落合橋南遺跡、上品野遺跡等の各遺跡において竪穴建物と掘立柱建物から構成される比較的安定した集落が形成されるようになる。品野西遺跡において出土した簾状重弧文軒平瓦は、7世紀後葉の寺院の存在を推定させるもので、寺院は古代における品野盆地の開発の端緒となった可能性がある。品野中部遺跡の試掘調査においても、品野西遺跡と同時期かそれにやや後続する時期の瓦が出土している。

古代寺院

その品野西遺跡は8世紀末葉が集落の盛期で、大型竪穴建物が検出されたことに加えて、「豊」と記した墨書陶器、「𠂔年福口」と記した刻書陶器（𠂔は則天文字）、風字硯、馬形や斎申など、公的な施設に関連する遺物も出土している。上品野遺跡は10世紀後半が集落の盛期で、総柱建物2棟を含む5棟の掘立柱建物群と区画溝が検出され、溝内からは「吉」、「春」などと記した多数の墨書陶器が出土している。上品野蟹川遺跡においては、河川から「遠方」、「文室門」、「山寺」などと記した8世紀末葉から10世紀後半の墨書陶器が出土している。その他、桑下城跡においては8世紀後葉の瓦塔が出土している。

墨書陶器

桑下城跡の瓦塔

中世

中世の窯跡

品野盆地においては、馬ヶ城地区など盆地南西部の丘陵を中心として13世紀以降に山茶碗専焼窯、14世紀前半に古瀬戸併焼窯が展開し、窯業生産が活況を呈するようになる。14世紀後半以降、窯の基数は減少し、盆地南東部の丘陵上に宇トゲ窯跡、鶯窯跡など中・後期の古瀬戸併焼窯が分布するようになる。上品野西金地遺跡が立地する同一の丘陵には丘陵西部に上品野E窯跡（尾張型山茶碗第8・9型式）、丘陵南端に桑下窯跡（古瀬戸後IV期新）が分布している。

中世の集落遺跡

中世の集落遺跡の調査事例はごく少ないが、盆地西部の緩斜面に立地する落合橋南遺跡においては、尾張型第4型式から第7型式、12世紀から13世紀の掘立柱建物1棟と溝、柵列等が検出されている。水野川対岸に位置する上品野遺跡においては、沢に面した緩斜面において区画溝を伴う総柱建物3棟を含む掘立柱建物群が検出されている。上品野遺跡の中世集落は第6型式から第7型式、13世紀に存続したとされている。盆地西部の品野西遺跡においては、15世紀を主体とする中世墓群が確認されている。中世墓群は土坑墓、火葬施設、火葬施設墓から構成され、中世後期の葬送を具体的に示す良好な事例となっている。また、上品野西金地遺跡の上位の丘陵上に立地する菩提寺旧境内（菩提寺遺跡）は踏査などを通じて、中世または戦国時代に堂宇等が存在したことが推測されている。

品野西遺跡

菩提寺旧境内

戦国時代

桑下東窯跡

上品野西金地遺跡に隣接する桑下東窯跡は大窯第1段階を中心に操業した窯跡で、窯体1基と窯体上位の尾根上に石敷を施した平坦面、竪穴状の作業施設、多数のロクロピットと想定される土坑が検出されている。その他、盆地内の大窯期の窯跡として、上品野西金地遺跡が立地する丘陵西端に西窯1号窯跡（大窯第1段階）、盆地西部の丘陵上に円六窯跡（大窯第1段階）、勘助窯跡（大窯第2段階後半から大窯第3段階）、落合窯跡（大窯第3段階）が分布する。これらの大窯期の窯跡は盆地内の集落近傍に散在して分布する。特に桑下東窯跡は、桑下城に隣接または桑下城内という特異な立地条件が注目されている。なお、盆地内において、大窯第3段階後半以降の大窯は確認されていない。

大窯期の窯跡

桑下城

桑下城は上品野西金地遺跡が立地する東西方向に長い尾根上に築かれた平山城で、東西約220m、南北約100mの規模と推定されている。平成16年度以降の発掘調査においては、大規模な堀と土塁、曲輪、櫓と番小屋、庭園、井戸、礎石建物などの各遺構が検出され、菊花双鳳鏡、鋤形台などの優品も出土している。品野城は水野川の対岸の丘陵上に築かれた山城で、桑下城と品野城の立地関係、遺構形態から桑下城が館城、品野城が詰め城、または両城が一連の「科野の城」であったと理解されている。近世の地誌類によれば、品野城には享禄年間に織田信秀の家臣坂井時忠が入ったが、享禄2年（1529）松平清康がこれを陥落させ、以後、永禄3年（1560）に織田信長によって攻略されるまで松平氏の居城として機能したとされる。桑下城は松平清康により品野城を与えられた松平内膳の家老永井民部、または在地領主長江氏の居城とされている。なお、品野窯中興の祖である加藤十右衛門基村は、応仁年中、品野城主長江氏の保護下に窯を築いたとされ、在地領主が大窯の築窯に関与したことも予測されている。

品野城

長江氏

加藤十右衛門基村

地誌

「品野」は古く山間傾斜地を意味する「しなの」に由来し、中世の史料では「志那野」、「科野」、「志名野」などと表記されている。「品野」の用字は近世以降で、三国峠に近い高地から、春日井郡上品野村、中品野村、下品野村として呼称された（『寛文村々覚書』）。上品野村は、信州海（街）道（中馬街道）沿いの村として、「信州岩村街道通りニアリ、街道両側ニ農家建ナラヘリ、竹木ハナシ、今地（金地）島本郷ハ町通りニアリ、又街道ヨリ右ニ桑下左ニ中村ト云処アリ、総体小百姓ハカリニテキタナキ村ナリ、戸口多クシテ佃力足り他村ヘ掟田地ハナシ、農業ヲ以テ専ラ生産トス、其内ニハ商売ヲ兼ル者モアリ、此村ヘハ濃州明和領曾木村、岩村領水上村・細野村・猿爪村、御領大川村アタリヨリ、白炭鍛冶屋炭ヲ著出オキ、印場村・大森村辺ノ者買ニ来リテ、ソレヲ名古屋ヘ著送レリ、当村ニテモ馬持タル者ハ駄賃付ヲシテ渡世ノ助トセリ」（『尾張徇行記』）と記されている。

上品野村

中馬街道

春日井郡上品野村絵図の「城根」とある「城」は桑下城、「かま下」とある「かま」は桑下東窯を示すものと思われ、街道に面した「今地（金地）」にかけての旧道は、「往古ヨリ人馬荷物継来候」とあるように、かつては中馬の継場であった。また、「上人古塚」、「をはか」は丘陵に墓地が点在していたことを示す（第6図）。

今地（金地）

第2章文献

加藤唐九郎編1972『原色陶器大辞典』

瀬戸市1985『瀬戸市史』資料編一 村絵図

瀬戸市教育委員会1990『上品野遺跡』

愛知県教育委員会1994『愛知県遺跡地図（Ⅰ） 尾張地区』

瀬戸市教育委員会1997『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1997『品野西遺跡』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第13集

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1997『落合橋南遺跡Ⅰ』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第14集

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1998『上品野蟹川遺跡』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第16集

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1998『落合橋南遺跡Ⅱ』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第17集

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1998『市内遺跡調査報告Ⅰ』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第20集

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1999『上品野蟹川遺跡Ⅱ』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第21集

岡本直久2001「中世後期の火葬墓～品野西中世墓の位置付け～」『研究紀要』第9輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

岡本直久2003「品野西遺跡出土簾状重弧文軒平瓦について」『研究紀要』第11輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター2005『上品野遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第132集

瀬戸市2005『瀬戸市史』資料編三 原始・古代・中世

岡本直久2006「瀬戸市内出土の古瓦―品野中部遺跡及び若宮遺跡出土遺物の整理報告―」『研究紀要』第13輯 財団法人瀬戸市文化振興財団

瀬戸市2007『瀬戸市史』通史編 上

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター2008『上品野蟹川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第142集

宇佐見守2009「文献資料からみた桑下城と品野城」『研究紀要』第10号 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

公益財団法人愛知県教育スポーツ・振興財団愛知県埋蔵文化財センター2011『桑下東窯跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第164集

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター2011『上品野B窯跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第170集

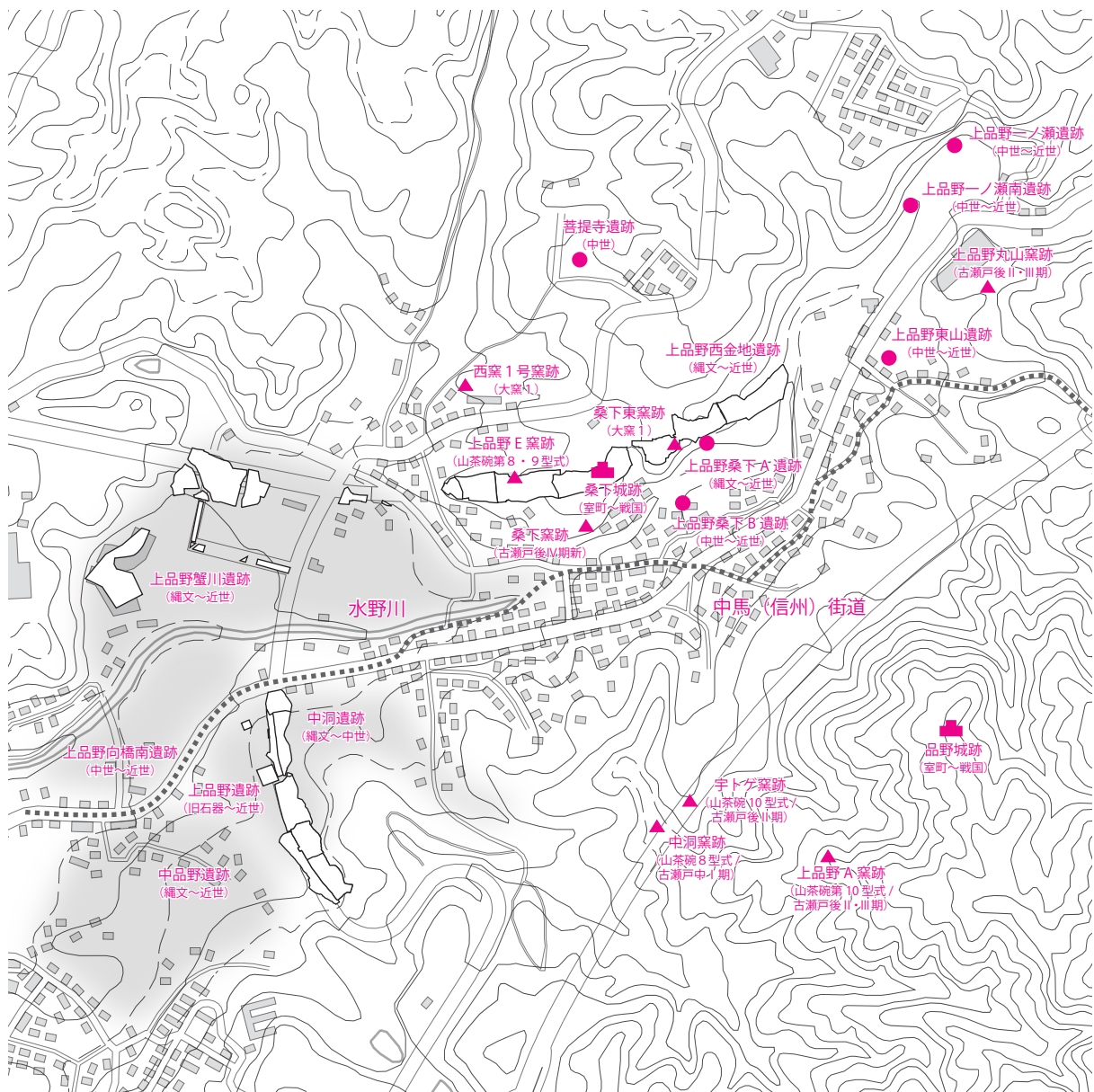
伊奈和彦・鶴飼雅弘・宇佐見守・蔭山誠一・武部真木2011「瀬戸市上品野町菩提寺の調査」『研究紀要』第12号 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター



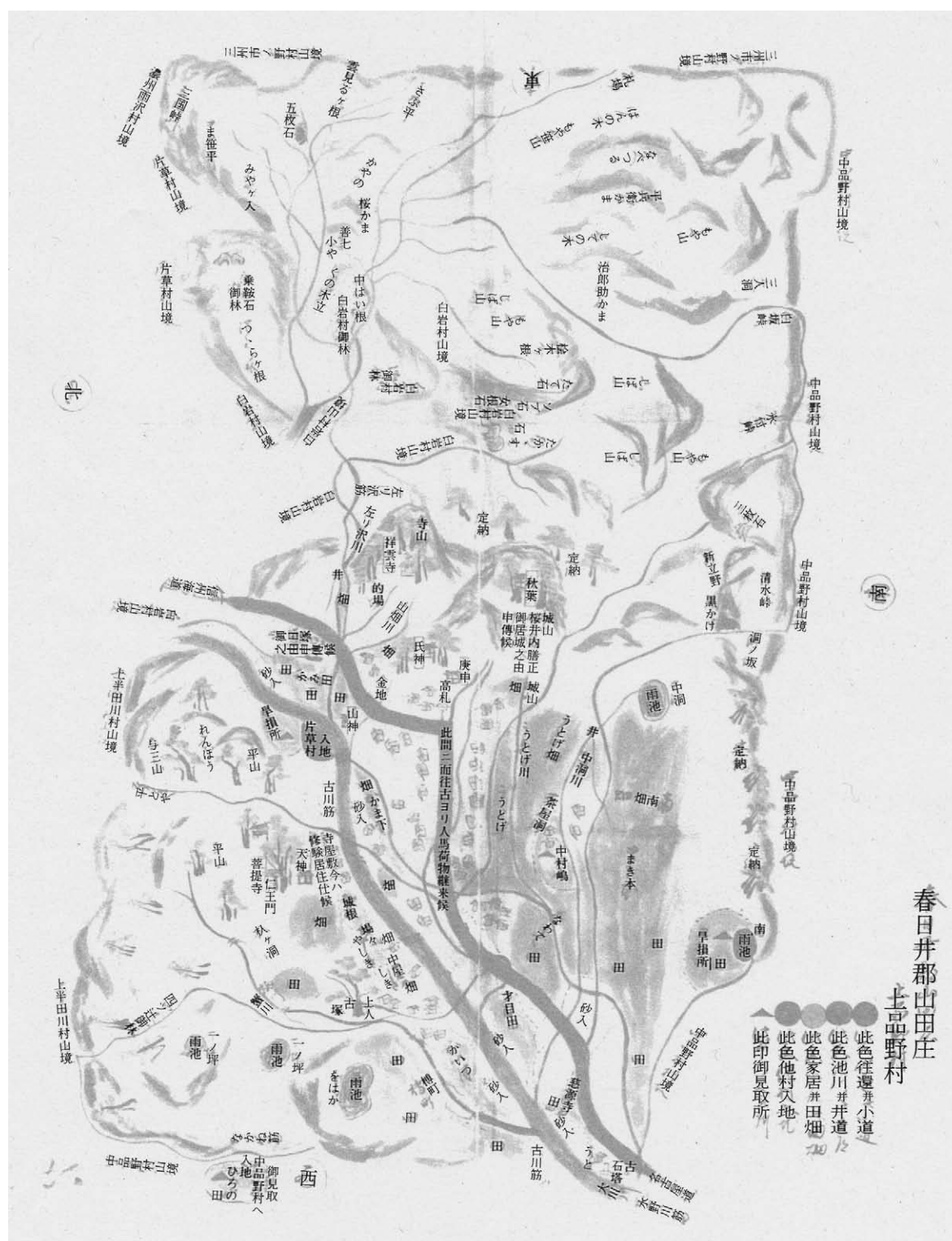
写真6 桑下城跡の調査



写真7 桑下東窯跡の調査



第5図 上品野地区の遺跡 (1:10,000)



第6図 春日井郡山田庄上品野村絵図

第3章 遺構

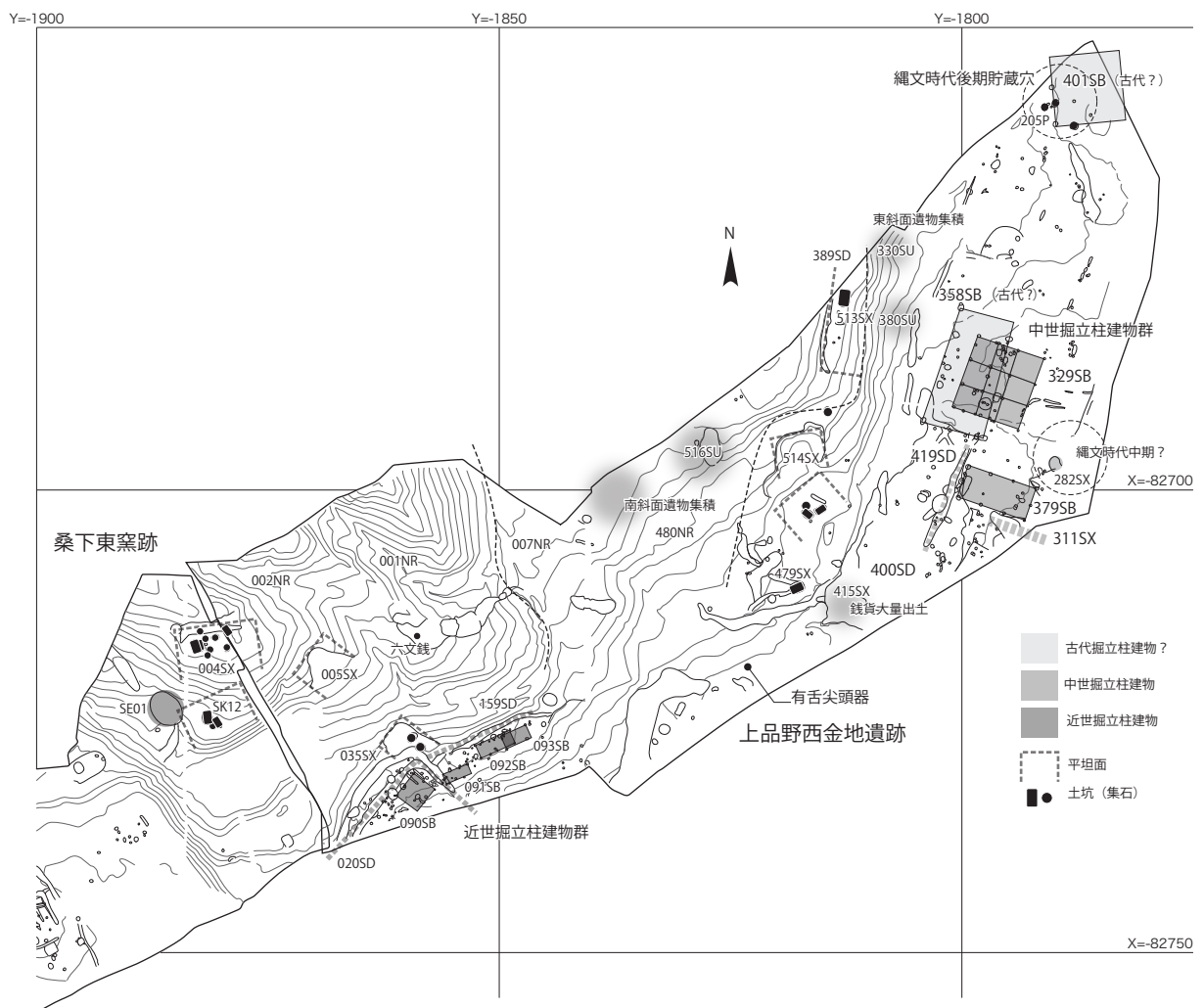
(1) 遺跡の構造

上品野西金地遺跡は水野川右岸の低地から丘陵斜面に立地する。調査区は、小谷007NR以西の丘陵部分（遺跡西部）、007NR以東の斜面部分（遺跡中央部）、水野川に面した低地部分（遺跡東部）に大別され、検出された遺構・遺物の質量も大きく異なる（第7図）。

西部の丘陵部分は桑下東窯跡の急峻な東向き斜面から連続する丘陵で（丘陵の西半は桑下東窯跡B区として調査）、丘陵斜面の上位・中位には小規模な平坦面が点在する。平坦面には数基の土坑（墓）が群集し、同様の土坑（墓）を伴う平坦面は桑下東窯跡、上品野西金地遺跡として調査した丘陵全体に分布する。土坑（墓）は古瀬戸後Ⅳ期新から大窯期前半に帰属するものが多いと推定されるが、近世に帰属するものも含まれる。丘陵斜面の下位には丘陵を開削、斜面を造成して形成された近世の居住地が展開する。

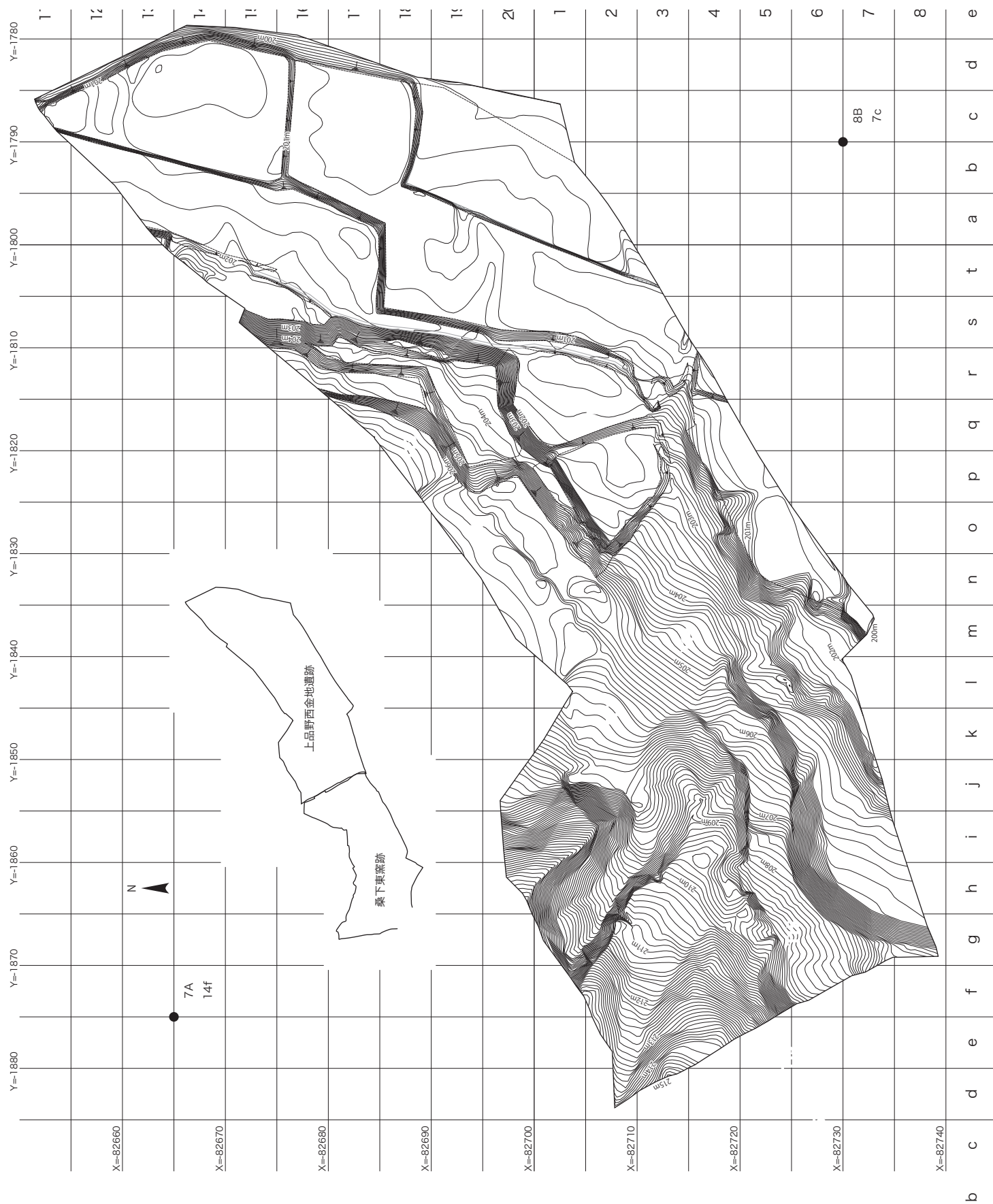
調査区の地形区分

西部の丘陵

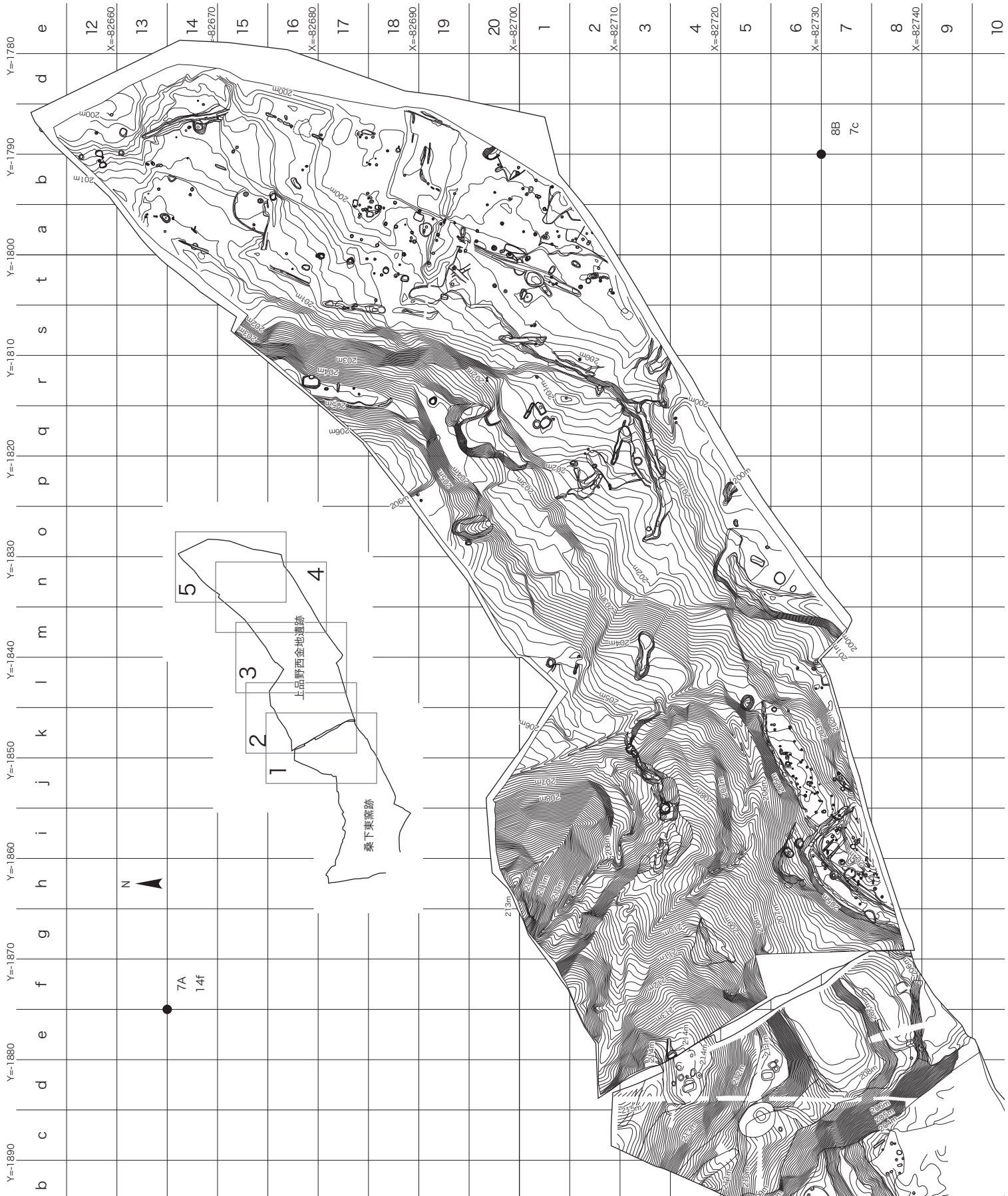


第7図 主要遺構配置図 (1:800)

上品野西金地遺跡



第8図 調査前地形測量図 (1:500)



第9図 遺構全体図 (1:500)

中央部の斜面

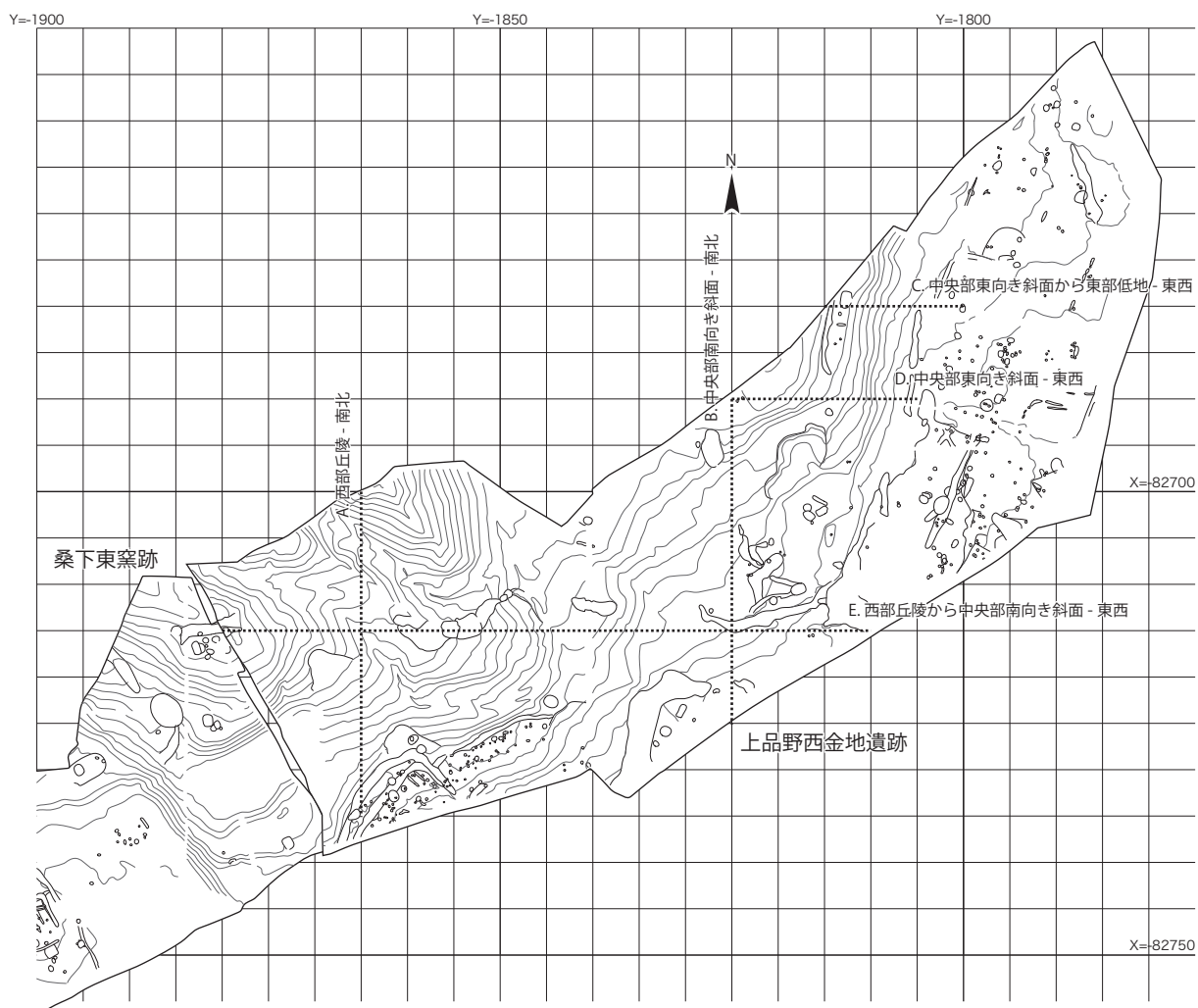
007NR 以東、中央部の南向き・東向き斜面は数段の平坦面が造成され、平坦面背後には石垣が積まれていた。現況の平坦面と石垣の下位にも石組・石列が埋没していたことから、斜面は崩壊、流出を繰り返し、幾度かの造成が施されたようで、崩落土中や造成土中には大窯期前半を中心とする大量の遺物が包含されていた。大窯期前半の遺物は残存状況が良好で、焼成不良品や挟み皿・匣鉢などの窯道具類も多く含まれていたことから、近在における大窯の操業に関連すると推測される。

東部の低地

水野川に面した東部の低地部分は主として中世の遺構が展開する。他に縄文（弥生）時代、古代の遺構・遺物が散在する。

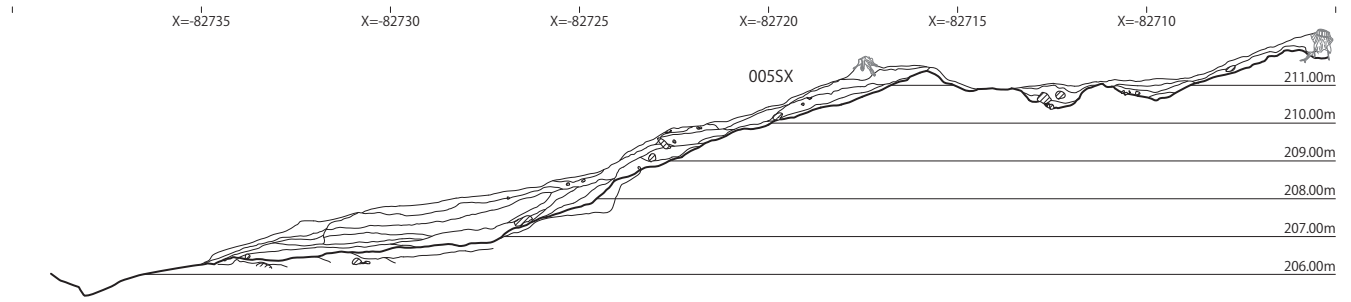
層序

層序も調査区の各部分で大きく異なる（第 10・11 図）。西部の丘陵部分は基盤層上を赤色土壌が覆う。中央の斜面部分は還元状態にあったことを示す灰色を基調とした粘土質の堆積層、東部の低地部分はシルト、粘土を主体とする堆積層が認められる。また、小谷 002NR や南向き斜面の 480NR などの堆積層中に花崗岩の転石が多く含まれていたことは、背後の丘陵の基盤層の風化が進み、表層が風雨などによって容易に流出する状態にあったことを示す。

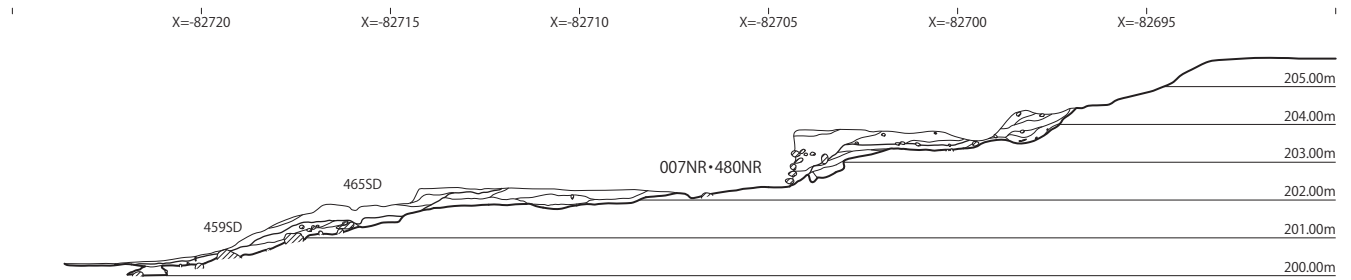


第10図 調査区土層断面位置 (1:800)

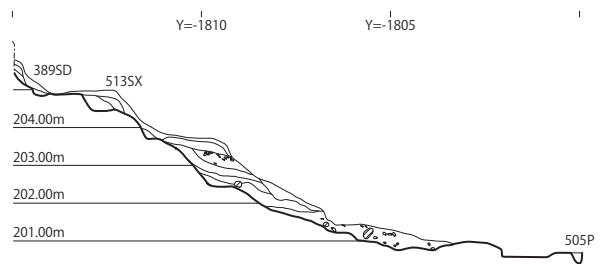
A. 西部丘陵 - 南北



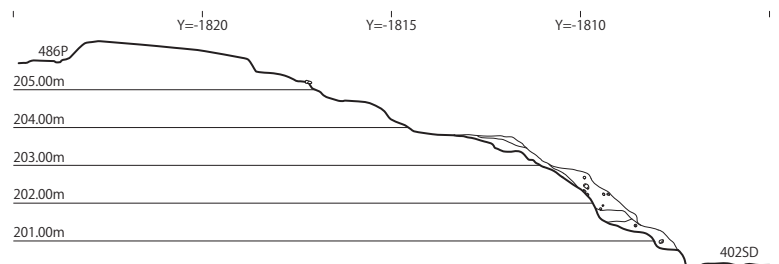
B. 中央部南向き斜面 - 南北



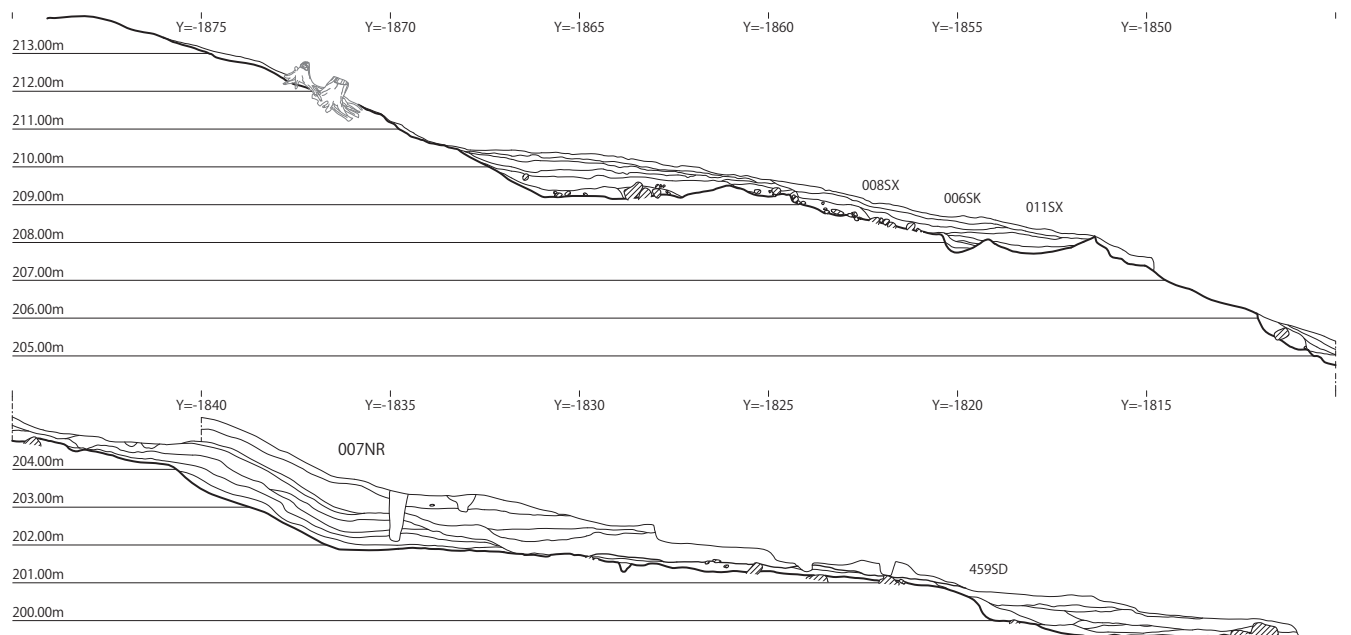
C. 中央部東向き斜面から東部低地 - 東西



D. 中央部東向き斜面 - 東西

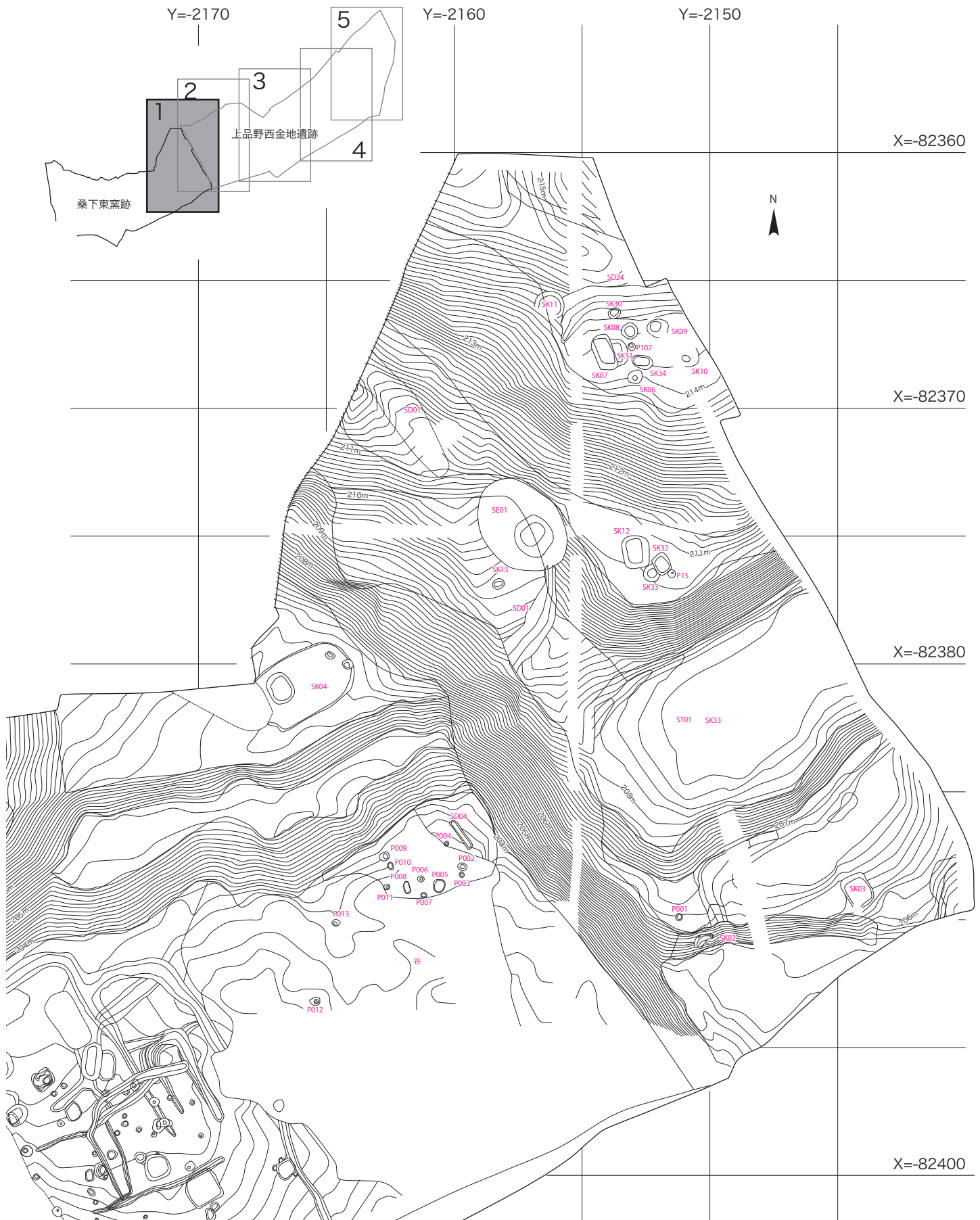


E. 西部丘陵から中央部南向き斜面 - 東西

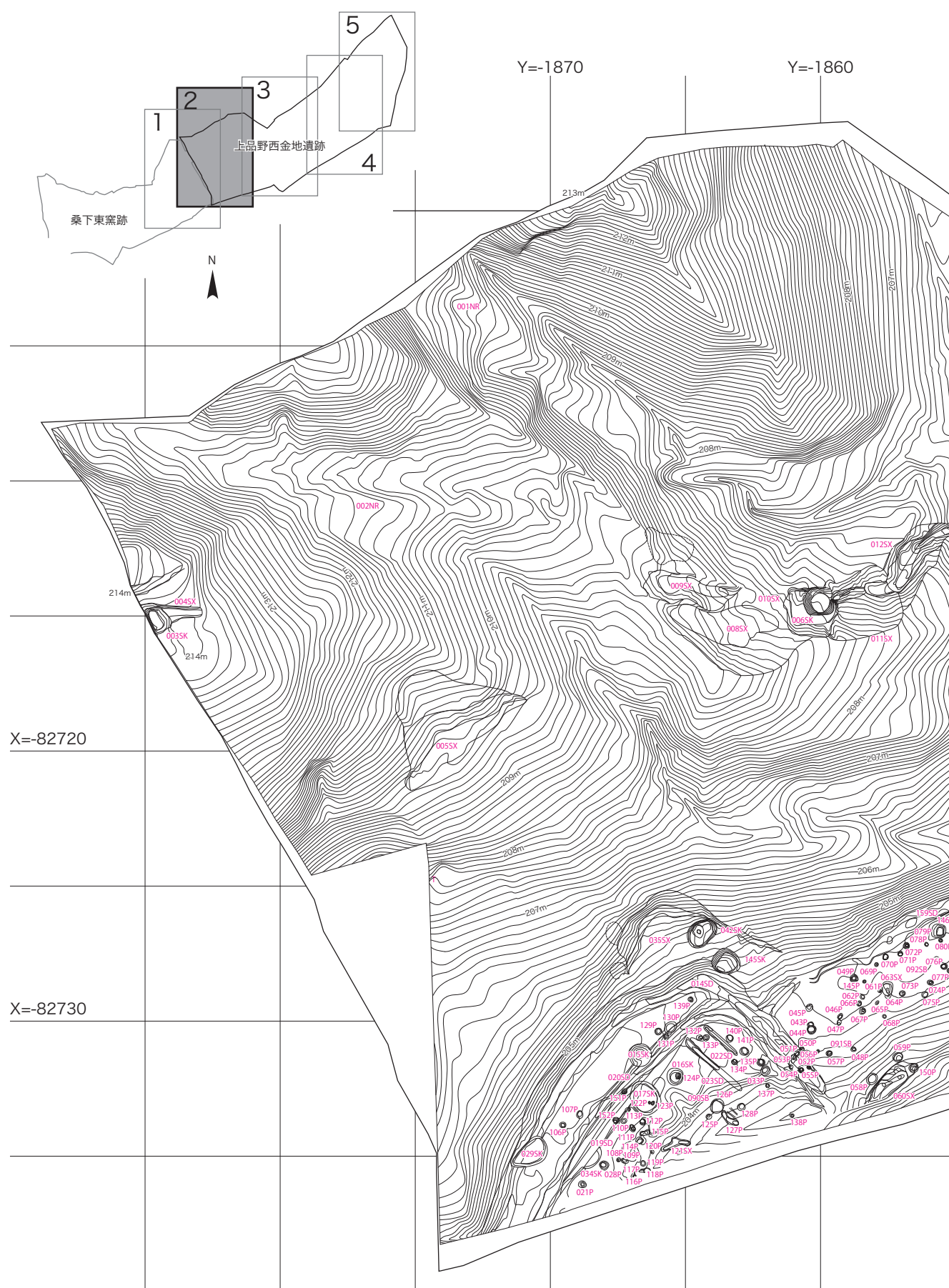


第11図 調査区土層断面 (1:200)

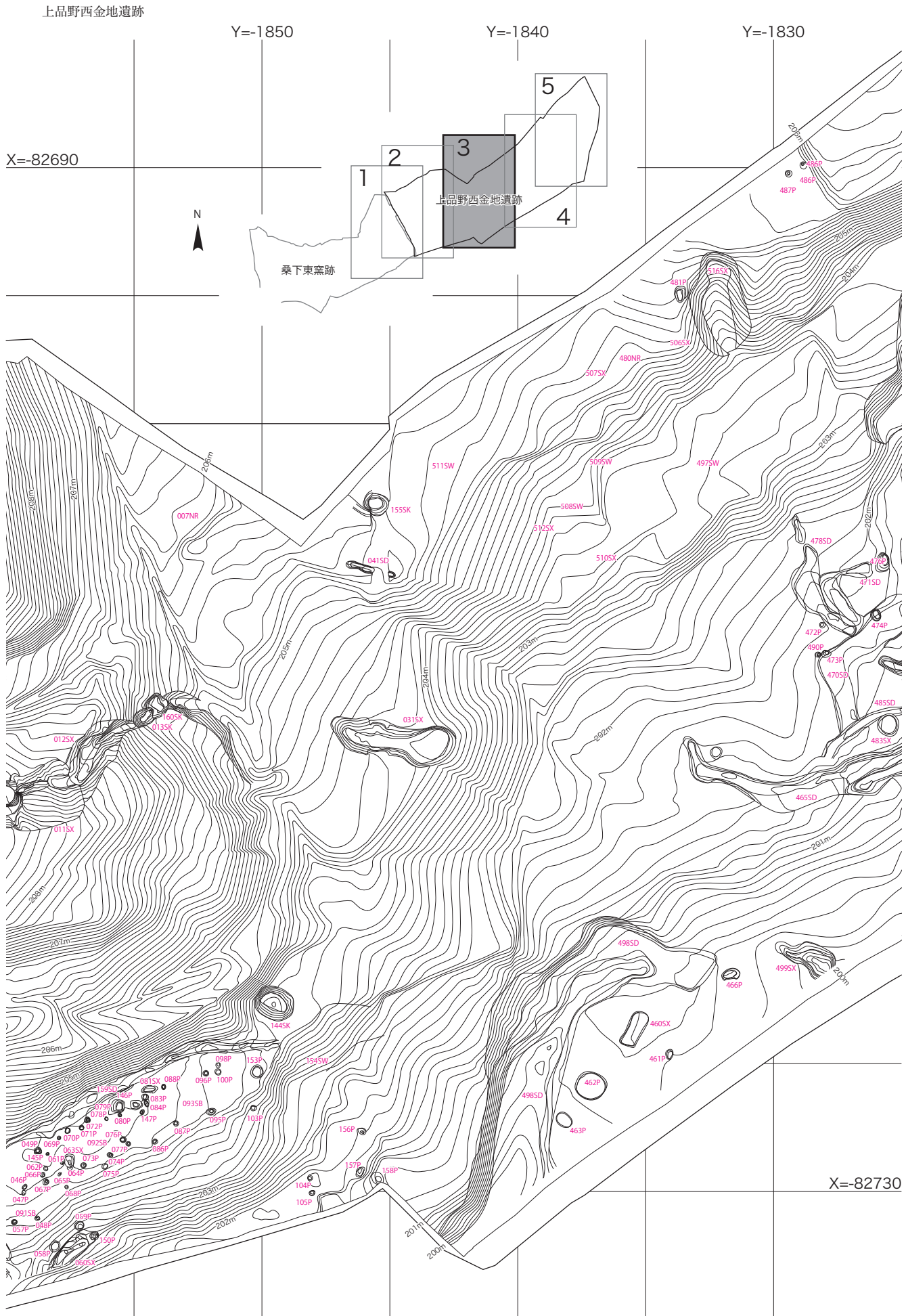
上品野西金地遺跡



第12図 桑下東窯跡B区基本遺構図 (1:200)



第13図 基本遺構図1 (1:200)



(2) 縄文（弥生）時代の遺構

縄文（弥生）時代の遺構として、水野川に面した低地部分において貯蔵穴等を検出した（第7図）。その他、ごく少ないが、石器、土器が出土した。有舌尖頭器

中央部の南斜面から続く平坦面の基盤層上において、縄文時代草創期のチャート製の有舌尖頭器（1）が出土した。

倒木痕282SX

水野川に近い低地部分、調査区東端において検出した土坑状の落ち込みである（第17図）。砂層中で正確な形状を把握することが難しく、形状そのものも不安定である。倒木痕の可能性ある。縄文時代中期前半の土器（2）が出土した。

貯蔵穴205P

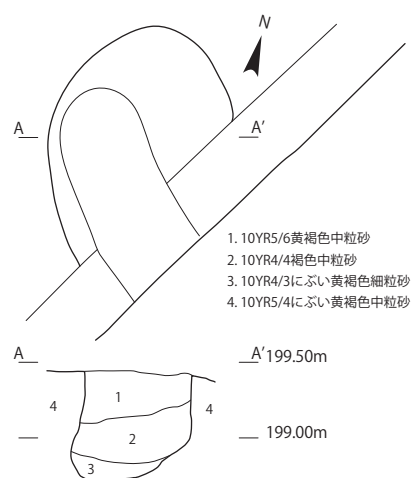
丘陵裾近く、水野川に向かって緩やかに傾斜する落ち込み281NR近辺において検出した（第18図）。土坑内からはアカガシとイチイガシ、アラカシ、ツクバネガシのドングリ類が検出され（第5章（3）を参照）、種実の年代は縄文時代後期中葉の年代を示したことから（第5章（1）を参照）、土坑はドングリ類の貯蔵を目的とした低湿地型の貯蔵穴と推定される。平面形は長径約75cm、短径約65cmの楕円形、断面形は検出面からの深さ約35cmの円筒形を呈する（第19図）。土坑内から土器は出土していないが、土坑内からはクリ材が出土した。クリ材は年代測定の結果、種実と同様、縄文時代後期中葉の年代を示した（第5章（1）を参照）。ドングリ類は貯蔵穴底面に平面的に広がって検出され、木の葉も多く混じっていた。このことから、ドングリ類は土坑底面に取り残された状態を示していると推定される。また、土坑内には石材（花崗岩）が落ち込んだ状態で検出された。石材は蓋の重し、または不慮の埋没時の目印として利用されたものが土坑の蓋の腐朽などによって、土坑内に落ち込んだと推測される（第19図）。なお、土坑に接してモミ属の杭が基盤層中に突き刺さった状態で検出されたが、年代測定の結果、この杭材は後述の501Pと同時期、弥生時代中期後葉の年代を示した。

貯蔵穴201P

205Pの斜面側に並列して検出された（第18図）。平面形は長径約75cm、短径約65cmの楕円形、断面形は検出面からの深さ約35cmの円筒形を呈する（第19図）。ごく少量であるが、ツクバネガシのドングリ類が検出され（第5章（3）を参照）、種実の年代は縄文時代後期中葉の年代を示したことから（第5章（1）を参照）、205Pと同様の貯蔵穴と推定される。土坑内から土器は出土していない。

貯蔵穴206P

緩斜面のより下位において検出された（第18図）。平面形は長径約85cm、短径約75cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは約15cmとごく浅い（第19図）。種実等は



第17図 倒木痕282SX (1:50)

概要

縄文時代草創期

縄文時代中期前半

縄文時代後期中葉
ドングリ類

クリ材

縄文時代後期中葉

石材

モミ属の杭

弥生時代中期後葉

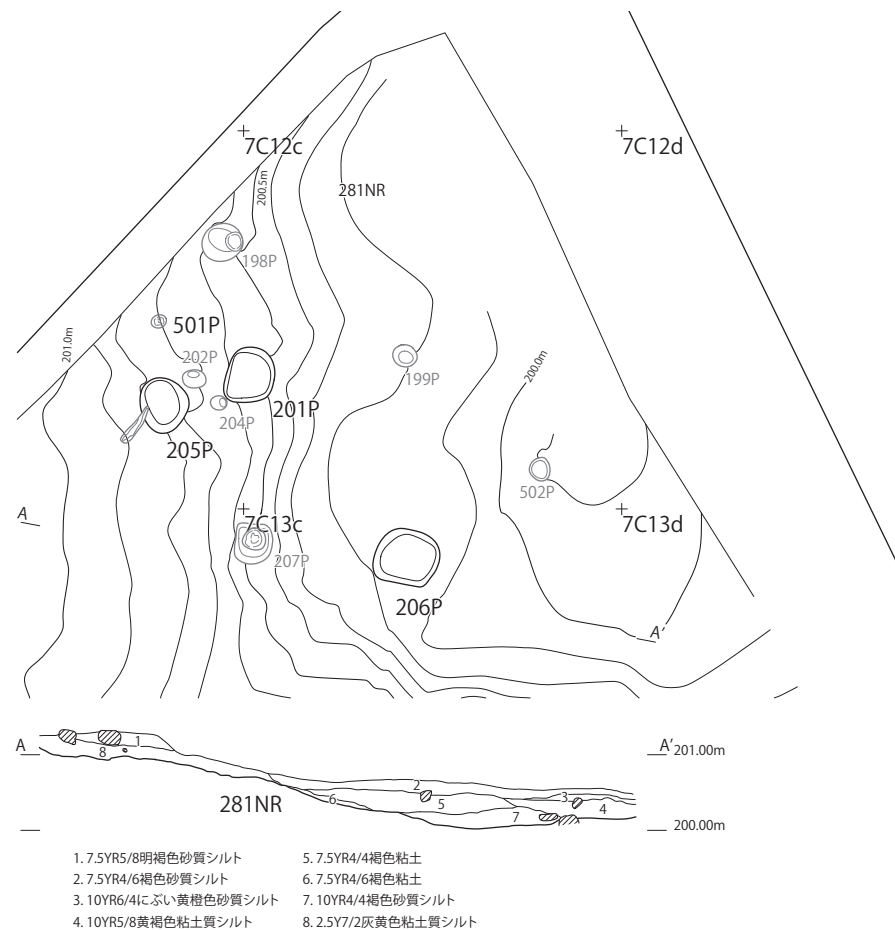
縄文時代後期中葉
ドングリ類

検出されていないが、土坑の形状や埋土の類似から、205P と 201P と同様の貯蔵穴の可能性はある。土坑内から土器は出土していない。

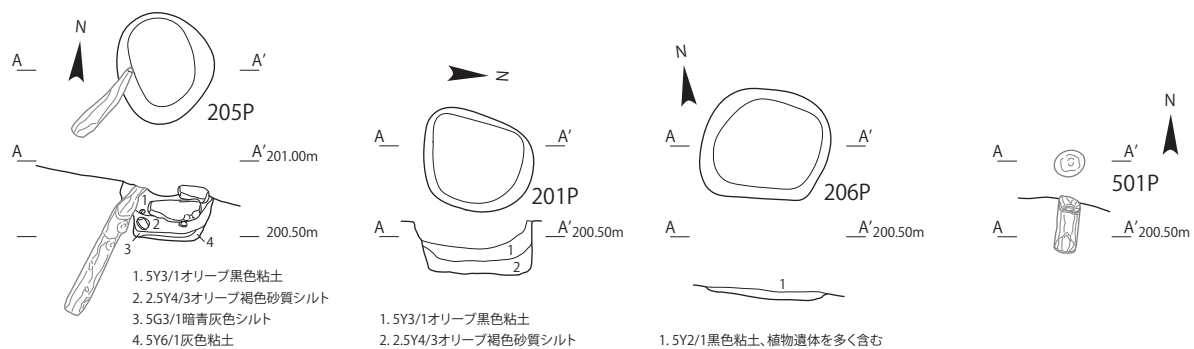
柱根501P

弥生時代中期後葉

基盤層中にモミ属の柱根が打ち込まれた状態で検出されたもので（第 19 図）、柱根の年代は 205P に接して突き刺さった状態で検出されたモミ属の杭材と同様、弥生時代中期後葉の年代を示した（第 5 章（3）を参照）。



第18図 貯蔵穴の分布と周辺の土層断面（1:100）



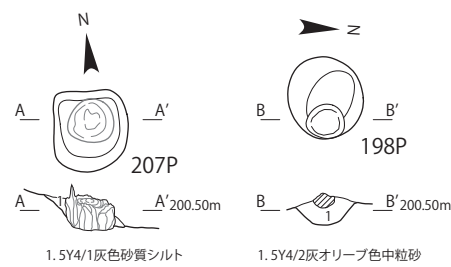
第19図 縄文（弥生）時代の貯蔵穴と柱根（1:50）

(3) 古代の遺構

古代の遺構として、水野川に面した低地部分において掘立柱建物（の柱穴）401SB、358SBを検出した（第7図）。なお、須恵器、灰釉陶器等の古代の遺物（3～13）も水野川に面した低地部分を中心に散在する。

掘立柱建物401SB

調査区北東部の水野川に面した緩傾斜面において、ヒノキの柱根が遺存する柱穴 207P を検



第20図 401SB柱穴 (1:50)

出した（第20図左）。柱根は平安時代（9世紀後半～10世紀後半）の年代を示したことから（第5章（1）を参照）、柱穴は平安時代の掘立柱建物か柱列（401SB）を構成していたと推定される。他に根石を伴う柱穴 198P（第20図右）が建物（柱列）401SBに伴う可能性があるが、調査区の制約等もあって、建物の復原には至っていない。

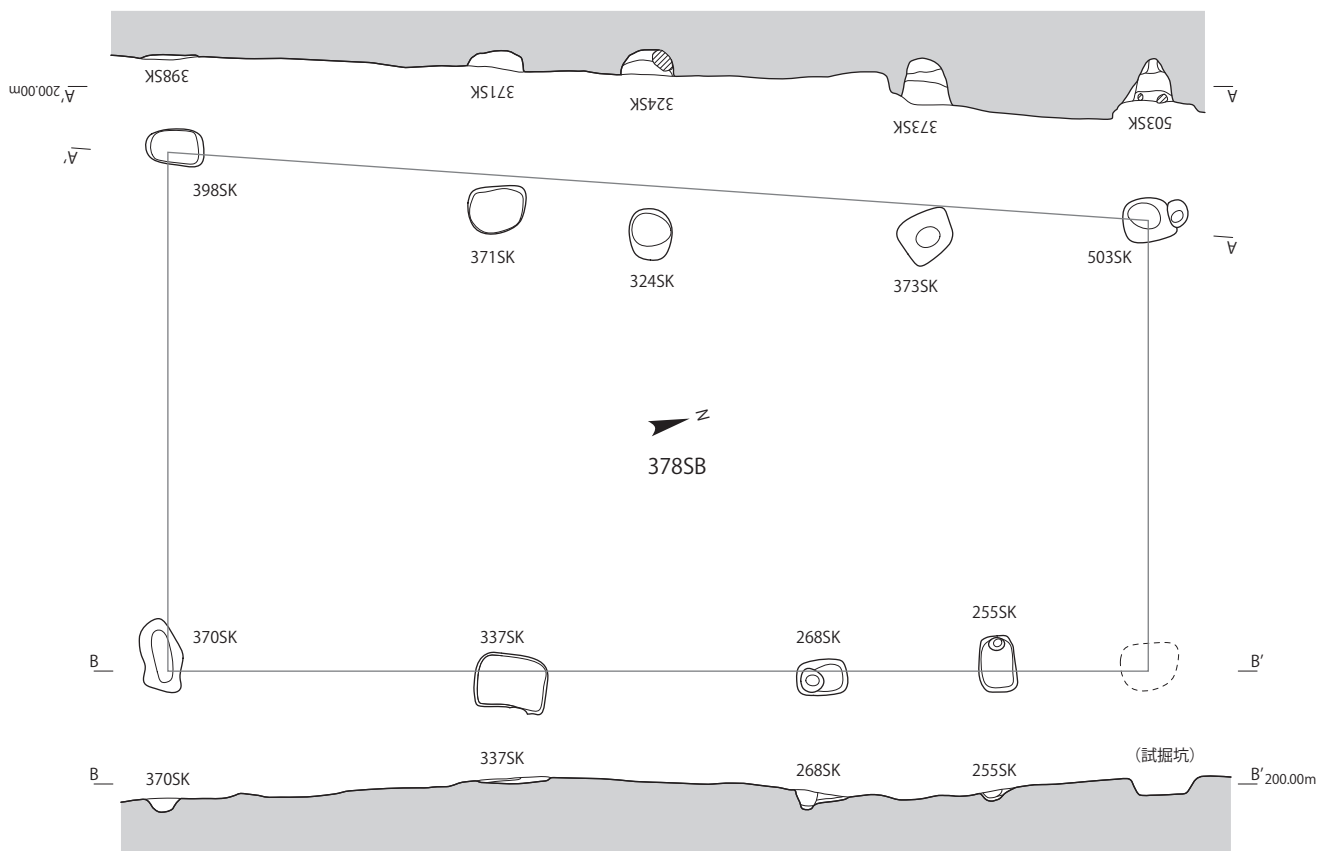
掘立柱建物378SB

柱間が不均一で復原にはやや難があるが、桁行4間（13.0m）・梁行1間（6.0～7.0m）のやや大型の側柱建物として復原した（第21図）。柱穴から遺物は出土していないが、柱掘方が方形を基調とすることから古代（平安時代）の掘立柱建物と推定した。

概要

古代の遺物分布

柱根



第21図 掘立柱建物378SB (1:100)

(4) 中世の遺構

概要

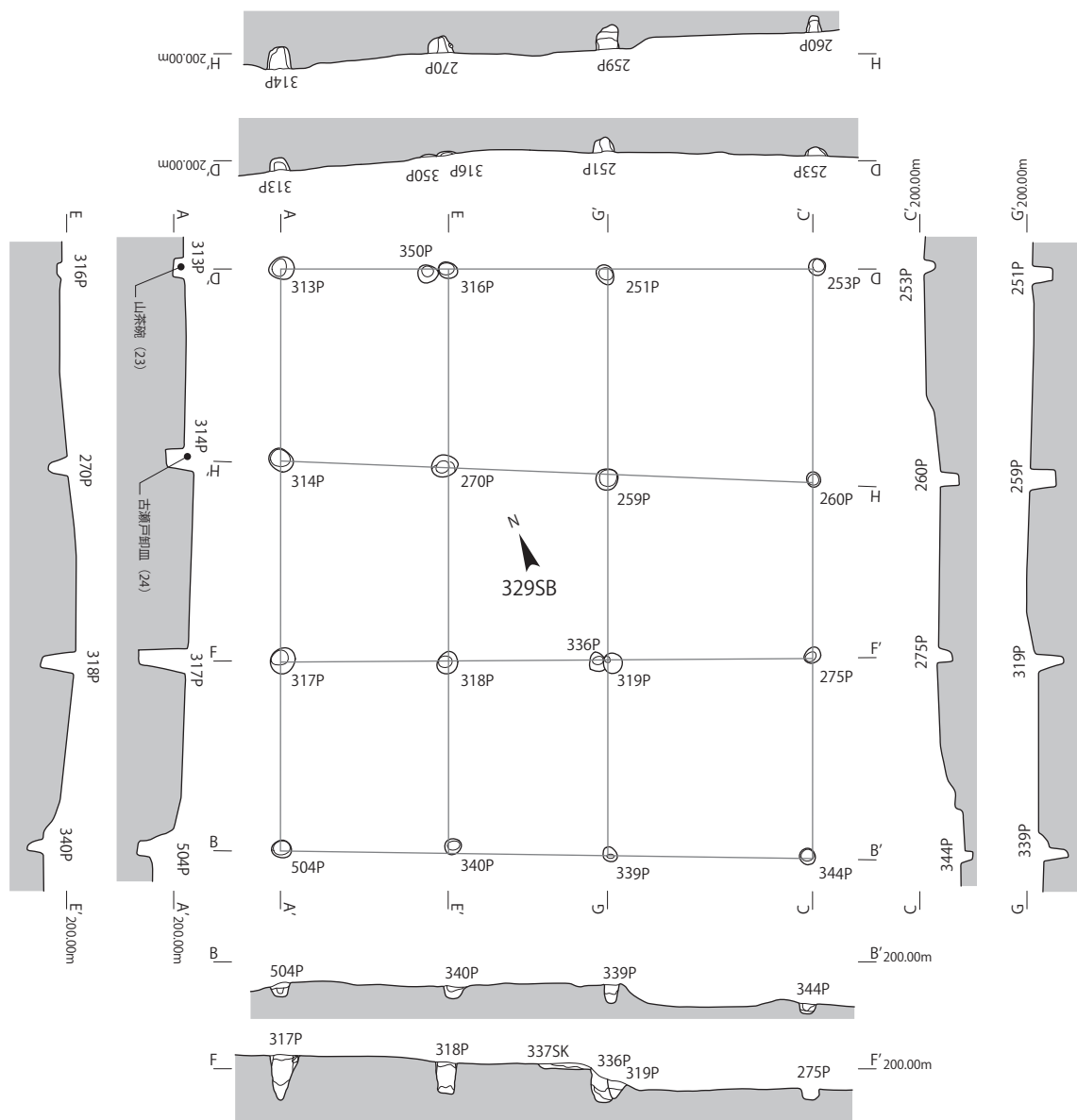
中世の遺構は、水野川に面した低地部分に展開する（第7図）。主要な遺構として、掘立柱建物 329SB、379SB、落ち込み（溝）311SX、400SD、419SD がある。なお、中世の山茶碗、古瀬戸陶器等の中世の遺物（14～45）も主として水野川に面した低地部分、掘立柱建物、落ち込み（溝）の周辺に分布する。

中世の遺物分布

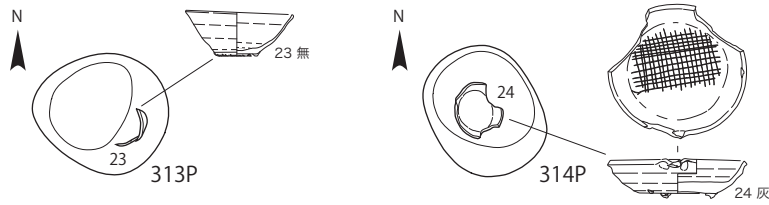
329SB

総柱建物

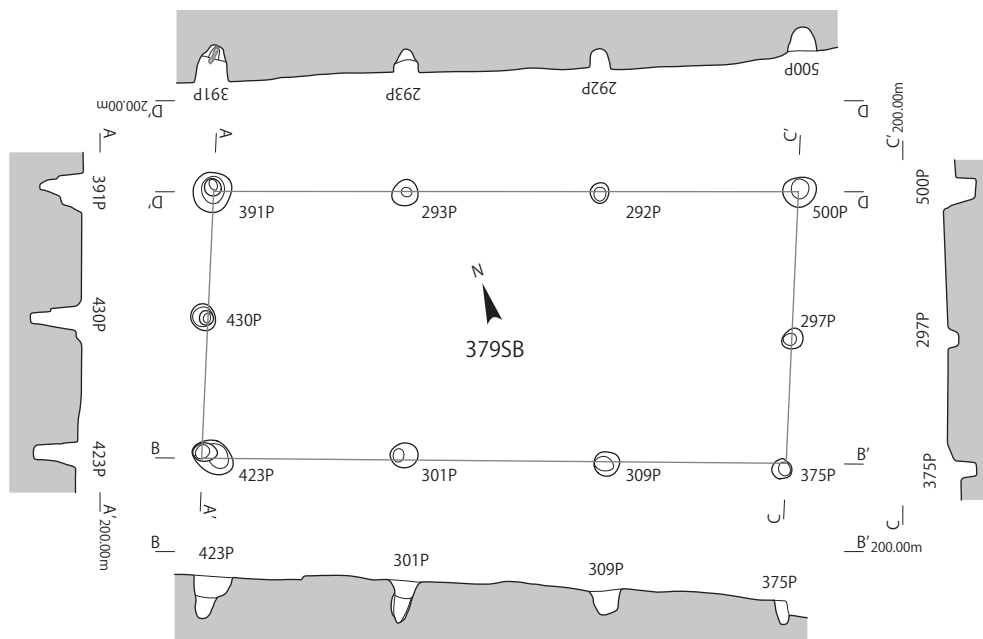
桁行 3 間（8.2m）・梁行 3 間（7.4m）の総柱建物で、建物の規模に比して柱穴は径 30cm 前後と小さい（第 22 図）。柱穴 313P の柱掘方に東濃型大畑大洞窯式の山茶碗（23）、314P に古瀬戸前Ⅲ・Ⅳ期の卸皿（24）が残されていた（第 23 図）。建物の年代はこれらの遺物から 13 世紀後半と推定される。



第22図 掘立柱建物329SB (1:100)

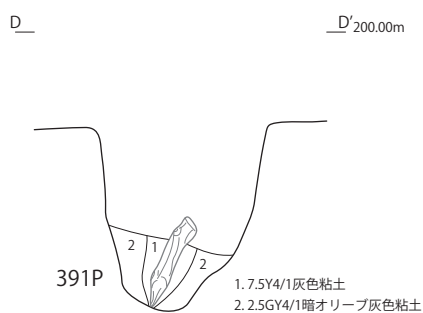


第23図 掘立柱建物329SB柱穴遺物出土状況 (1:20)



第24図 掘立柱建物379SB (1:100)

掘立柱建物379SB



第25図 掘立柱建物329SB柱根 (1:20)

桁行 3 間 (7.7m)・梁間 2 間 (3.5m) の側柱建物である (第 24 図)。柱穴 391P にカヤの柱根が遺存する (第 25 図)。柱根の径は 5 cm 前後と細い。周囲の浅い溝状の落ち込み 311SX・400SD・419SD に尾張型第 7 型式の山茶碗など 13 世紀後半を主体とする遺物 (14～22) がややまとまって包含されていることから、建物もそれと前後する時期と推定される。

側柱建物

落ち込み

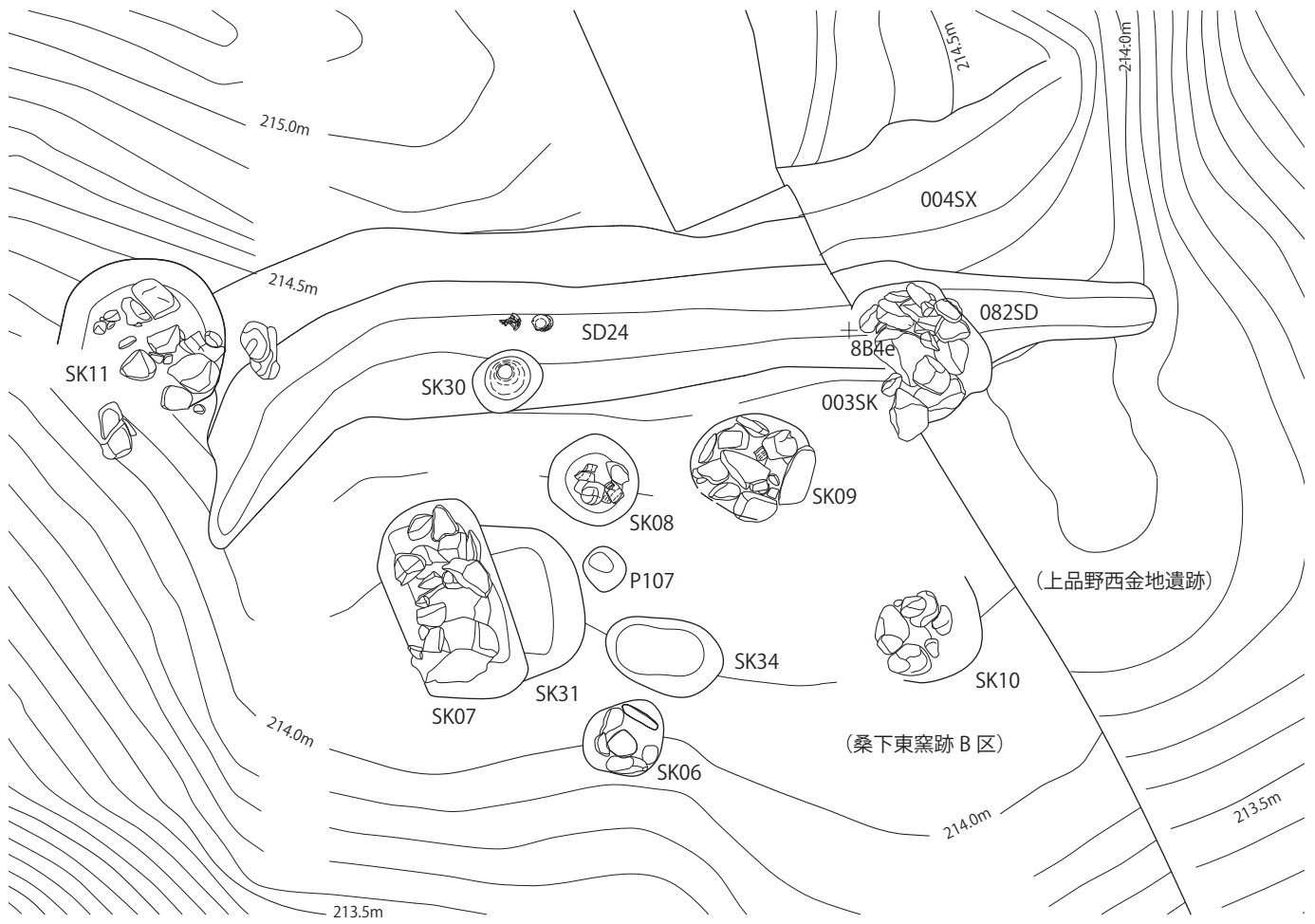
小結

建物の配置、遺物の内容等から、329SB と 379SB は同時に併存していた可能性が高いと考えられる。出土遺物の量は相対的に少ないことも勘案すると、これらの建物から構成される中世集落は比較的短期間に機能したのであろう。

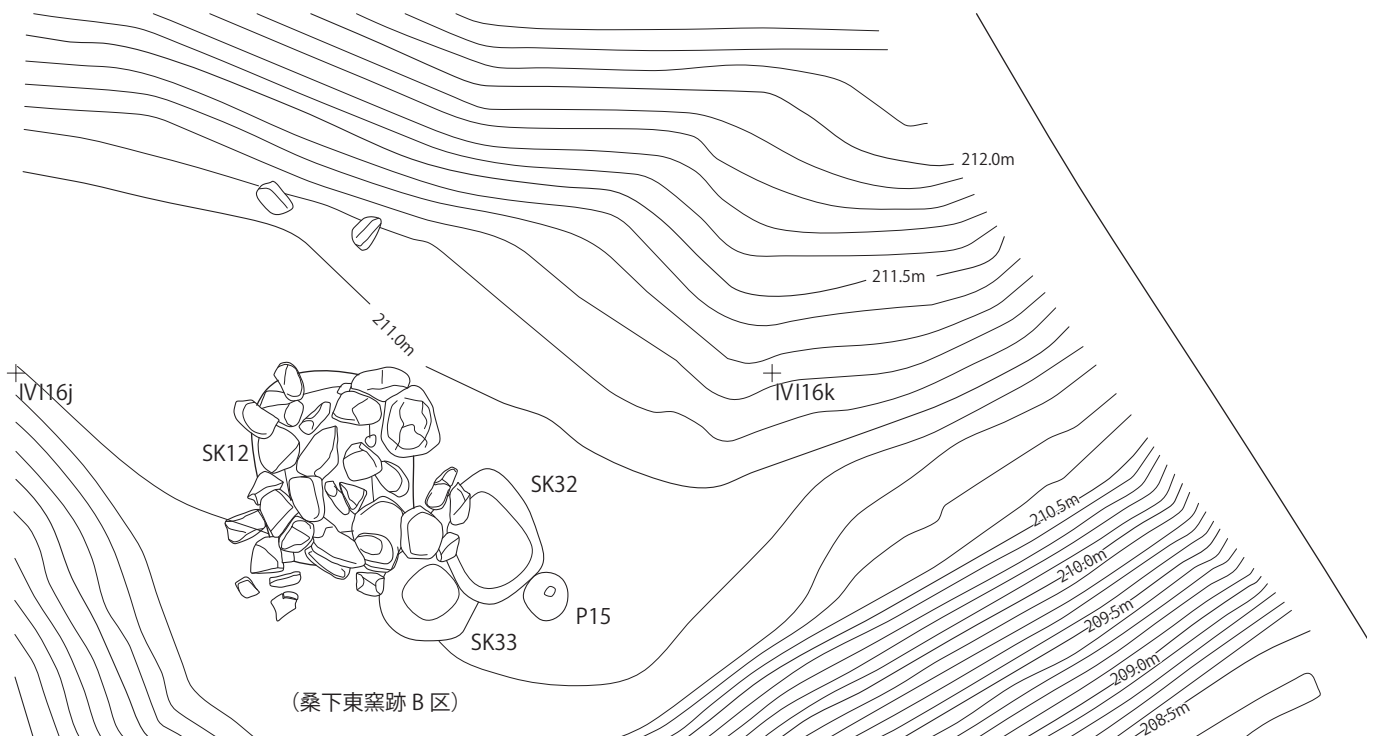
短期間の集落

(5) 戦国時代・近世の遺構

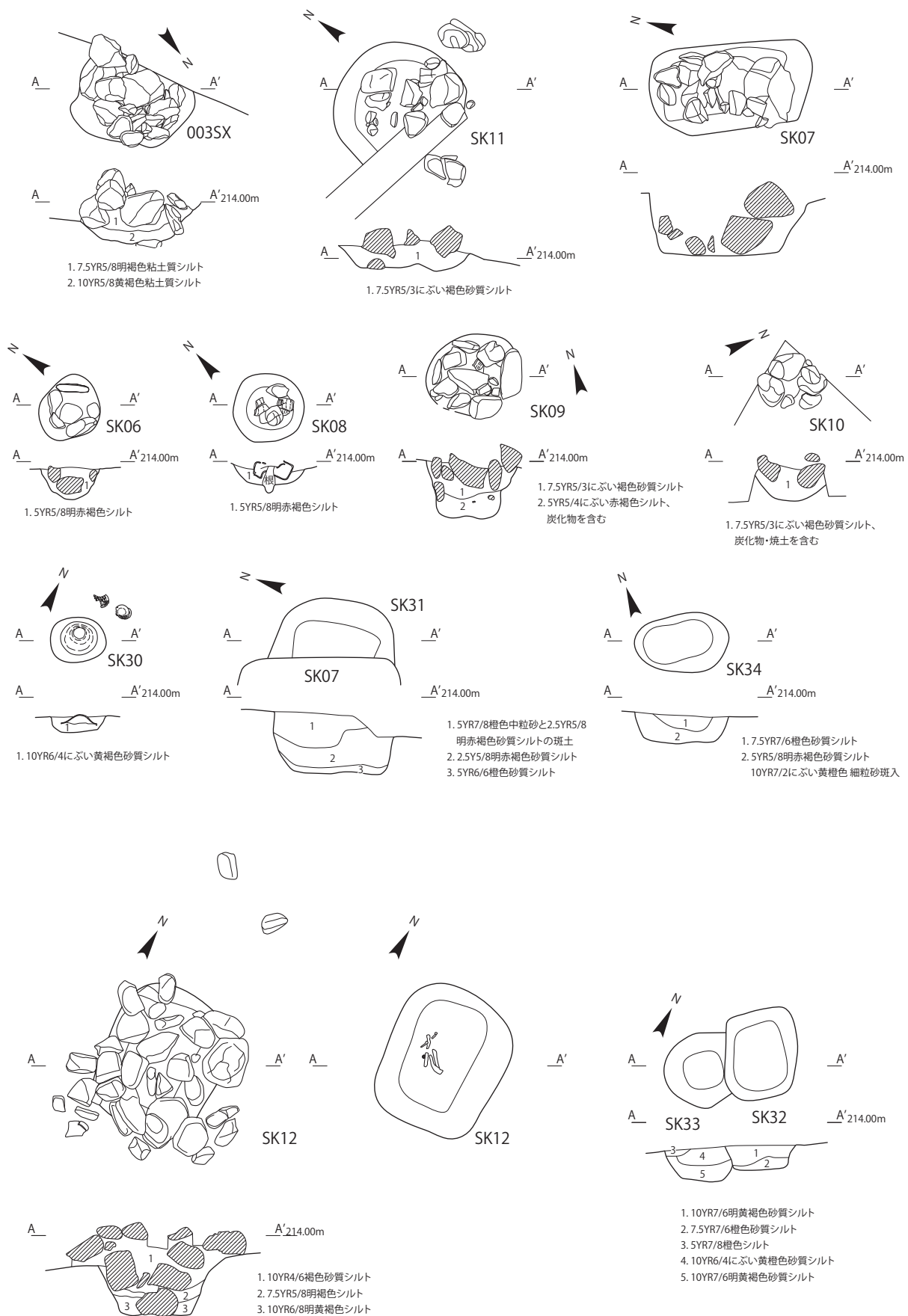
概要	戦国時代・近世の遺構として、丘陵や斜面の平坦面を中心として分布する土坑・集石（墓）群、西部の丘陵下位の平坦面に展開する区画溝と掘立柱建物群、中央部の斜面の造成面と集石（石組・石列）がある。また、中央部の斜面には大窯期前半の大量の遺物を包含する堆積層・整地層を確認した（第7図）。 平坦面004SXと土坑（墓）群
平坦面と溝	004SX は桑下東窯跡B区から上品野西金地遺跡に連続する丘陵上位（標高 214m 付近）の平坦面で、丘陵側は溝 SD24（桑下東窯跡B区）・082SD（上品野西金地遺跡）によって画される（第26図）。平坦面には土坑 SK11・SK30・SK08・SK09・SK07・SK31・SK34・SK10・SK06（桑下東窯跡B区）、003SK（上品野西金地遺跡）が分布する。また、その下位（標高 211m 付近）にも土坑 SK12・SK32・SK33（桑下東窯跡B区）を伴う平坦面がある（第27図）。
集石土坑	SK11・SK08・SK09・SK07・SK10・SK06・003SK・SK12 は拳大から人頭大の花崗岩を伴う集石土坑である（第28図）。SK08 においては、筒形容器 2 個体（1292・1293）が合口の状態で、SK30 においては、完形の播鉢（1295）が伏せられた状態で検出された。004SX の北東隅付近の丘陵側法面においては、火葬骨を納めた焼成後底部穿孔の耳付水注（73）が正位の状態で出土した。SK12 の集石の下位においては、人骨、煙管、寛永通宝の六文銭（M-9～M-11）が出土した。これら一部に集石を伴う土坑は土坑墓と考えられ、平坦面 004SX の土坑（墓）群は古瀬戸後Ⅳ期から大窯期前半、その下位の平坦面の土坑墓（群）は近世に帰属すると推定される。 平坦面005SX
やや曖昧な平坦面	上品野西金地遺跡西部丘陵中位（標高 210m 付近）のやや曖昧な平坦面で、基盤に由来する赤褐色・褐色のシルトが堆積していた（第29図）。土坑（墓）は伴わない。内耳鍋（71）、匣鉢（72）、天目茶碗（135）、縁釉挟み皿（268）、桶 A（663）が出土した。 平坦面035SXと土坑042SK・145SK
遺物集積	035SX は西部丘陵下位（標高 205m 付近）の平坦面で、丘陵は竪穴状に掘削されている（第30図）。平坦面においては古瀬戸後Ⅳ期から大窯期前半の遺物集積と土坑 042SK・145SK が検出された。遺物集積は法量が近似する鉄釉縁釉小皿 4 個体（46～49）、端反皿（50・51）、灯明皿（52・53）、天目茶碗（54）、山茶碗（55）、有耳壺（56）、徳利（57）、灰釉小壺（58）、播鉢Ⅰ類（59・60）、釜（61～63）、甕（64）、土師器内耳鍋（65・66）、匣鉢蓋（67）、挟み皿（68）、匣鉢（69）等によって構成される。なお、甕（64）は南斜面 480NR 出土において出土した甕の破片と接合した。042SK は巨礫を据えた周囲に塊石が集積する集石土坑で、塊石の下位は粘土で薄く覆われていた。145SK に集石は認められなかったが、下位の平坦面の掘削時に欠失した可能性もある。 集石土坑（墓）群491SK・492SK・493SK
巨礫を据えた土坑	遺跡中央の斜面南東隅付近（標高 201m 付近）の平坦面においては、巨礫を中心に据えた土坑 491SK・492SK・493SK が検出された（第31・32図）。これらの土坑に明確に伴う遺物は認められなかった。なお、平坦面上位には丘陵を竪穴状に掘削した 514SX が
大窯期前半	



第26図 平坦面004SXと土坑（墓）群（1:50）



第27図 004SX下位の平坦面と土坑（墓）群（1:50）

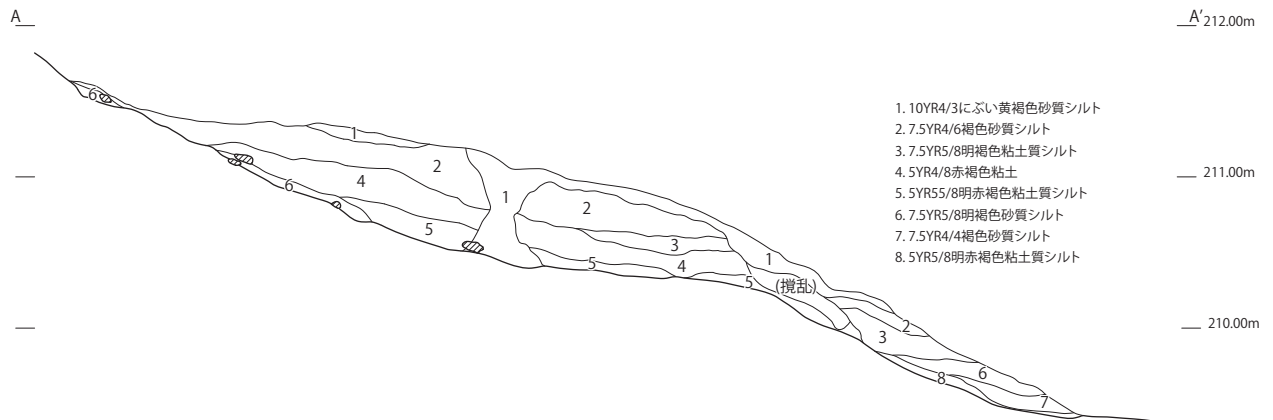


第28図 平坦面004SXの土坑（墓）（1:50）

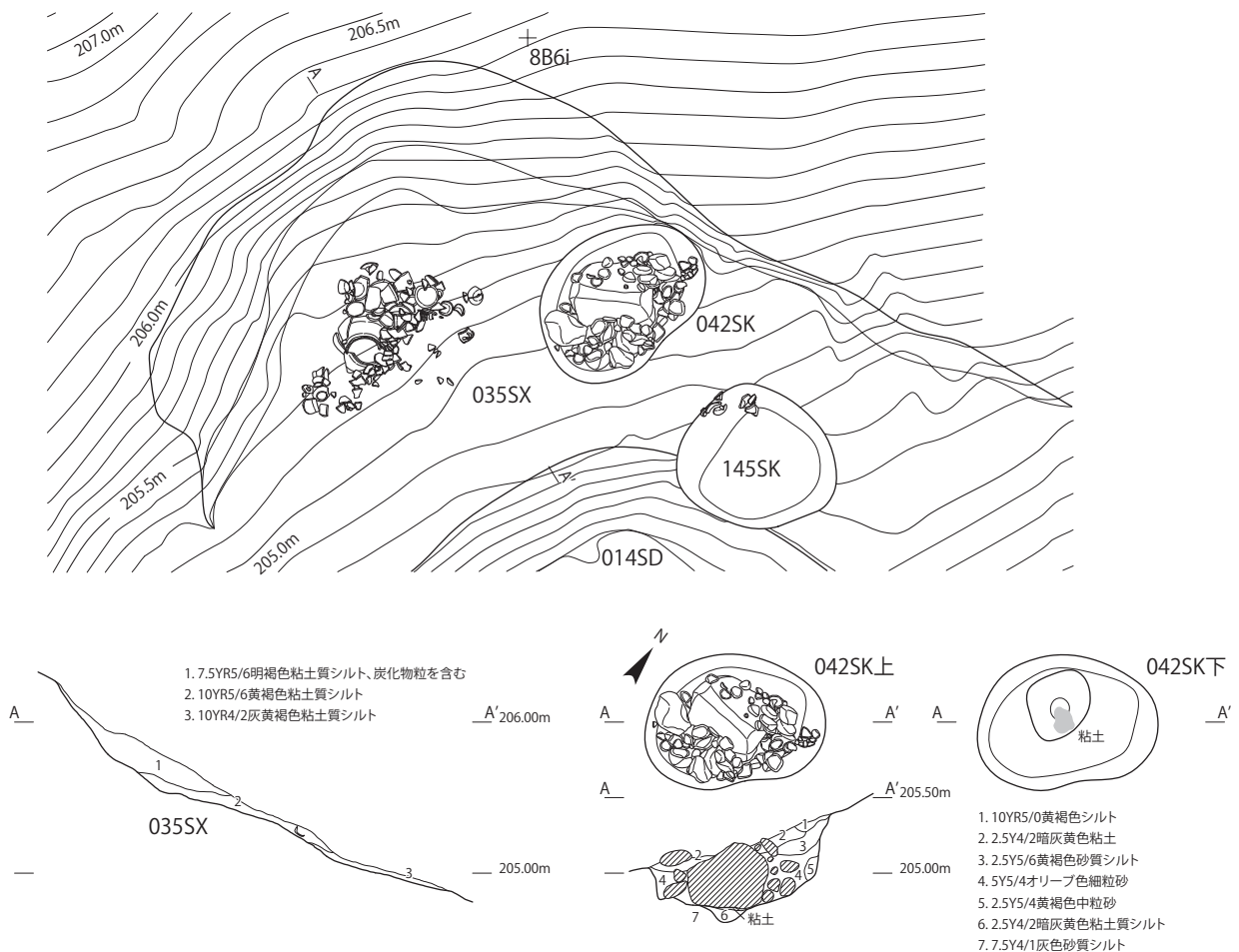
位置し、514SXの北西隅においては古瀬戸後Ⅳ期から大窯期前半の耳付水注（74）が正位の状態で出土した。004SX、035SXに類似する514SXがこれらの集石土坑群に関連するものとすれば、これらの土坑群を大窯期前半の土坑墓群として理解することも可能であろう。さらに、集石土坑群下位の落ち込み415SXにおいては、83点の銭貨（渡来銭1165～1240）が集中して出土した（第31図・32図）。銭貨は六文銭として、5、6枚が重なった状態で出土したものも含まれるが、他は小範囲に散在して出土した。また、付近に埋納容器としての使用を窺わせる陶器、木製品は認められなかった。

銭貨の集中出土

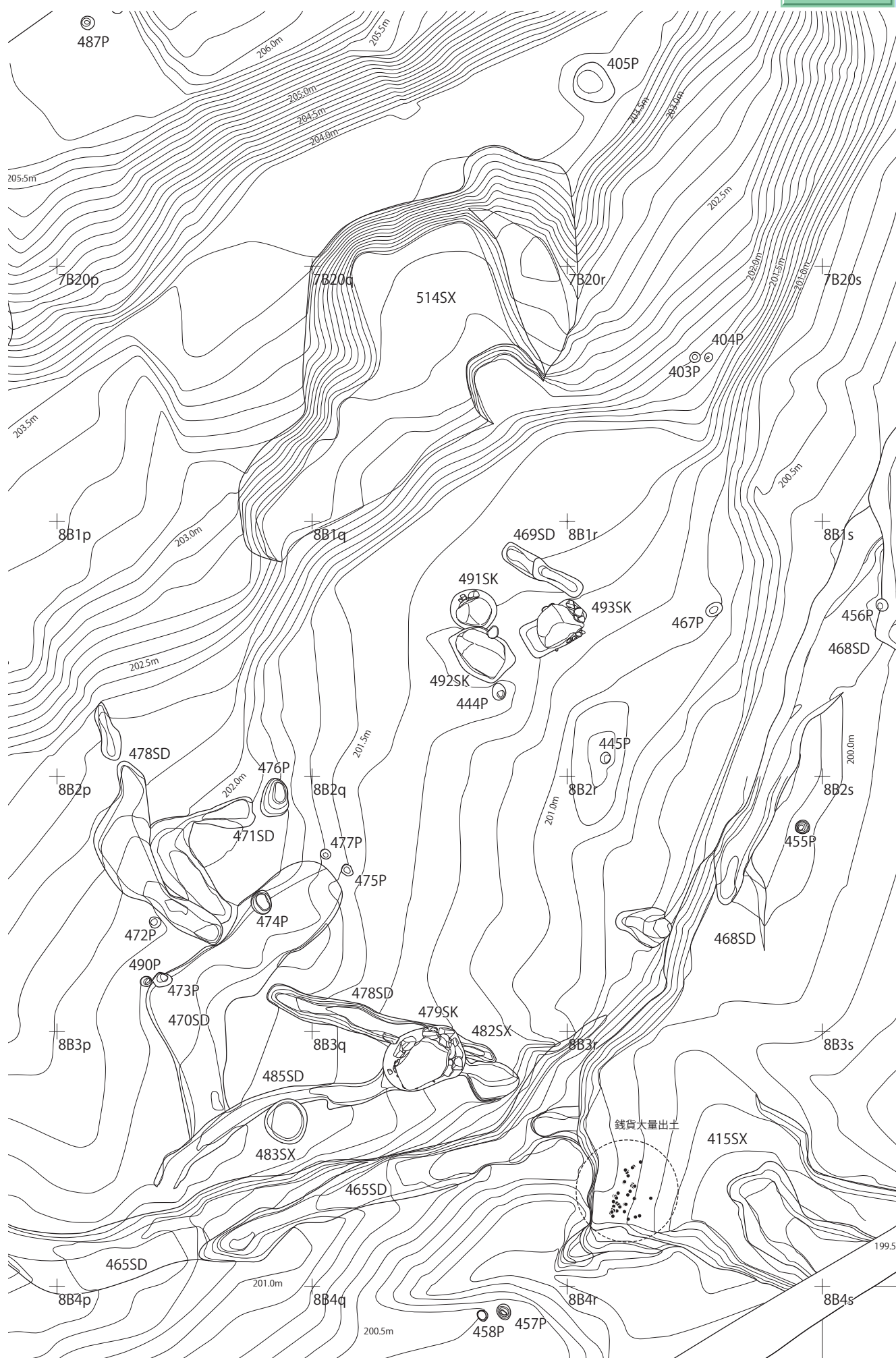
六文銭



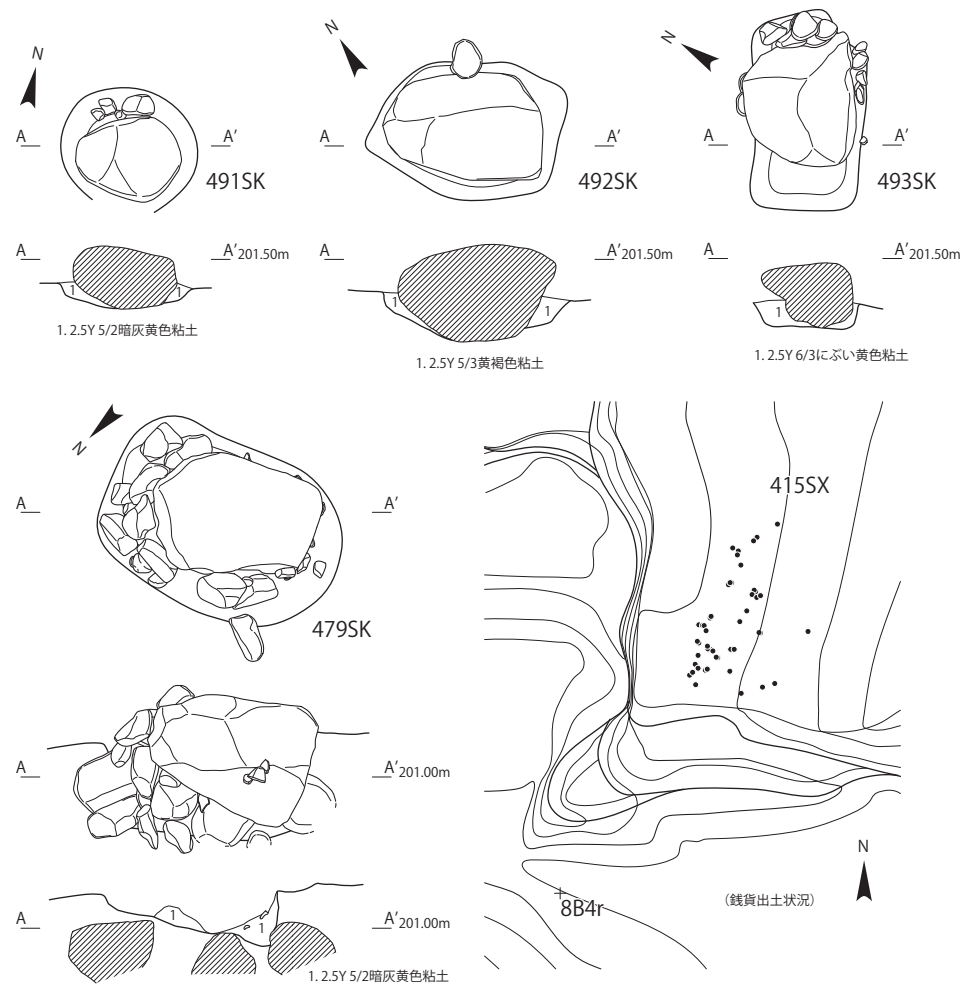
第29図 平坦面005SX土層断面（1:50）



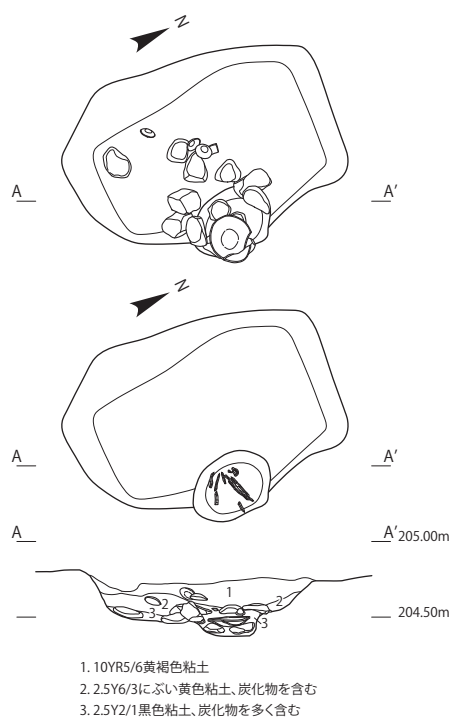
第30図 平坦面035SXと土坑（墓）042SK・145SK（1:50）



第31図 斜面南東隅付近の集石土坑（墓）群（1:100）



第32図 斜面南東隅付近の集石土坑（墓）・銭貨出土状況（1:50）



第33図 土坑（墓）513SX（1:50）

土坑（墓）513SX

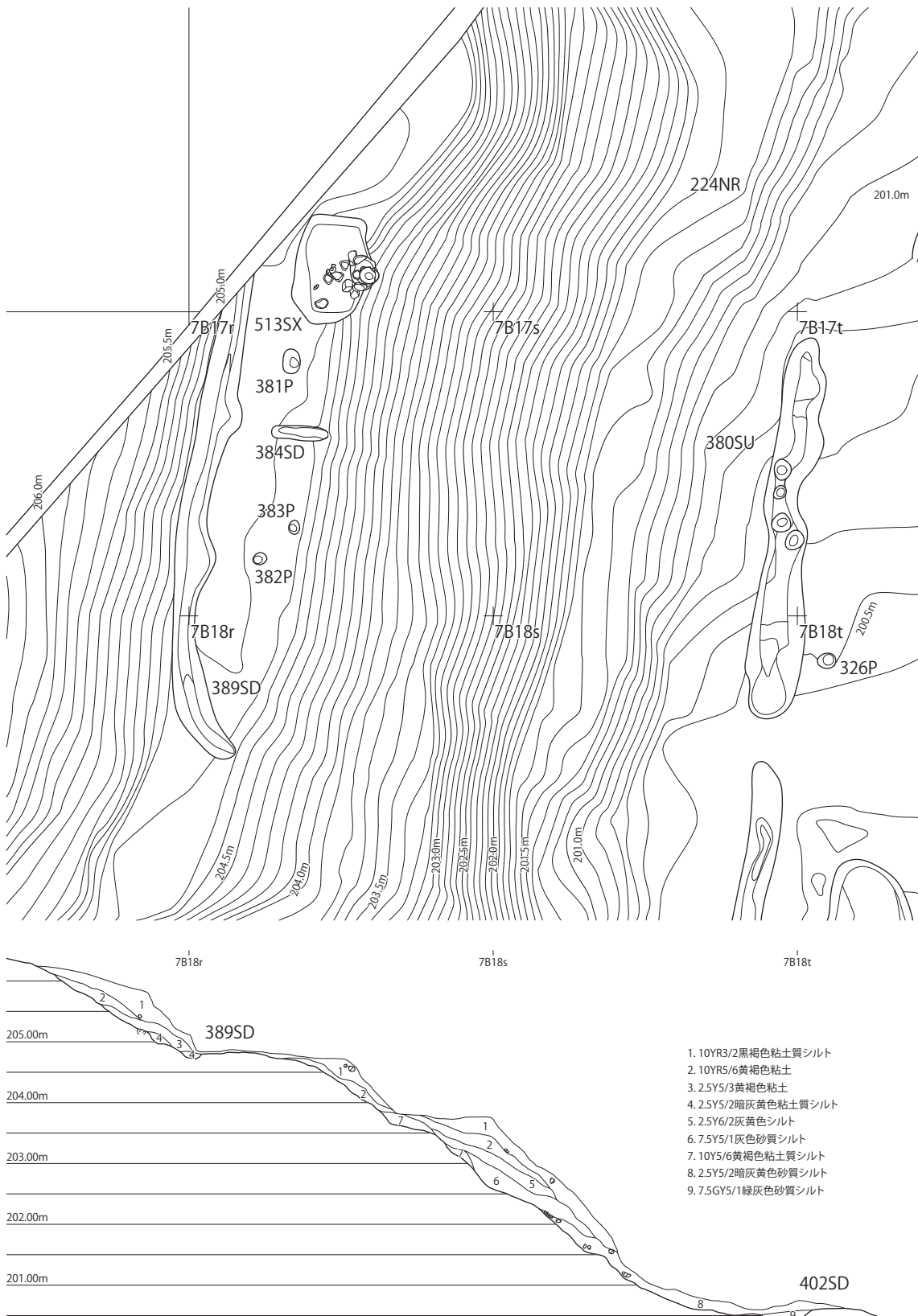
513SX は東向き斜面の上位の平坦面（標高 205m 付近）において検出された土坑（墓）で、平坦面の丘陵側は溝 389SD によって画される（第 34 図）。平坦面の斜面側は後世に大きく開削されているので、遺跡西部丘陵上位の平坦面 004SX のように、本来の平坦面はさらに広く、多くの土坑が群在していた可能性がある。

513SX は土坑の長軸方向をほぼ南北方向として、土坑東辺中央には小土坑状の掘り込みがある。小土坑状の掘り込みには石が集積され、ほぼ完形の播鉢（76）が正位で据えられていた。その周囲には腰折皿（77）、端反皿（78）、山茶碗（79）が上位から転落したような状態で出土した。播鉢の下位にはクリ、クスノキ科、ヒサカキの炭化した枝材が並べ置かれた状態で残されていた（第 33 図）。

平坦面と溝

遺物出土状況

炭化した枝材



第34図 土坑（墓）513SXと周囲の平坦面（1:100）

斜面の包含層と遺物集積

遺跡中央の丘陵斜面の堆積層には大窯期前半の残存状況が良好な遺物が大量に包含されていた。また、南斜面 480NR や東斜面の幾つかの地点（南斜面の遺物集積 516SU、東斜面の遺物集積 330SU・380SU など）においては、巨礫を含む礫を混じえながら大量に遺物が集積した状態で検出された（第 35・36・37 図）。調査時には斜面の堆積層中に包含される遺物については、層位に応じて遺物を取り上げ、遺物集積については可能な限り出土状況を記録するように努めたが、斜面の堆積層の下位から近世の遺物が少なからず出土し、330SU・380SU などの遺物集積にも近世の遺物が混在することから、層位や出土状況から一括性を保証することは難しいことが調査の過程で判明した。加えて、壺・甕類、鉢類などの大型製品を中心とする出土遺物の多くには、かなり広範囲で接合関係が認められることも遺物が相互に混在する状況にあったことを示す。

斜面の堆積層中に大量に包含された遺物や遺物集積には、焼成不良品や匣鉢、トチンなどの窯道具類が多く含まれていたことから、丘陵上に存在する窯体に伴う遺物である可能性も考慮される。特に東斜面は遺物の集積状況が灰原の産状にも類似していた。しかし、丘陵上に窯体は確認されていないこと、南斜面 480NR の堆積層は灰色を基調とするシルト・粘土で、層中に炭や灰がほとんど含まれないこと（第 38 図）、焼成不良品や窯道具

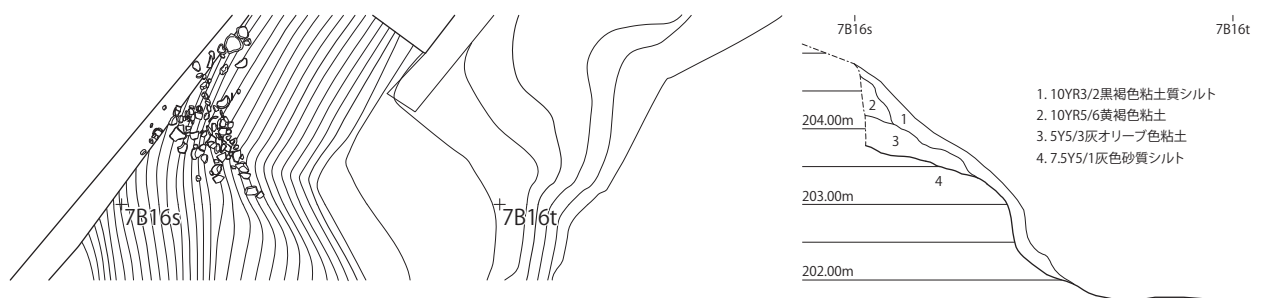
包含層

遺物集積

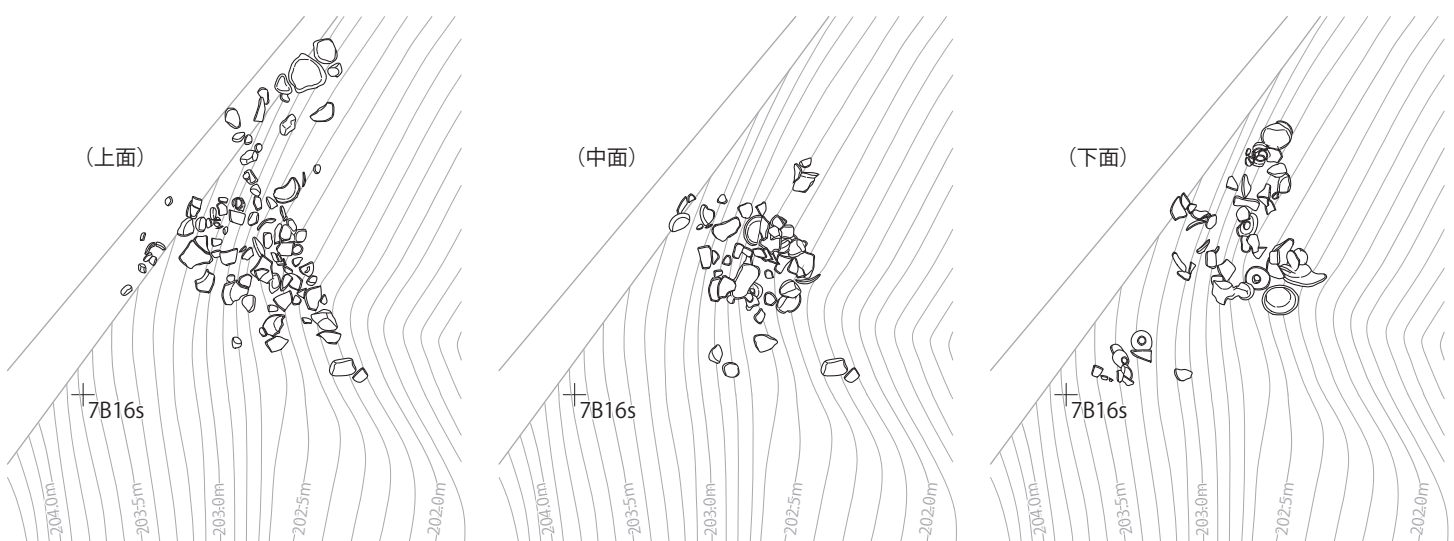
近世遺物の混在

接合関係

窯道具類の出土

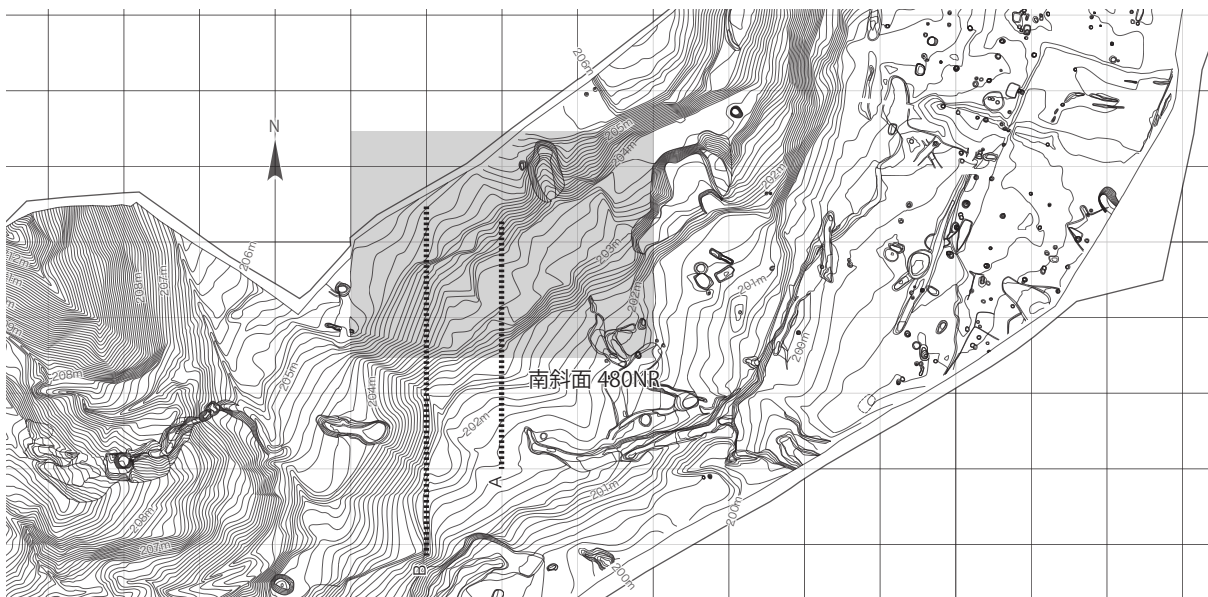
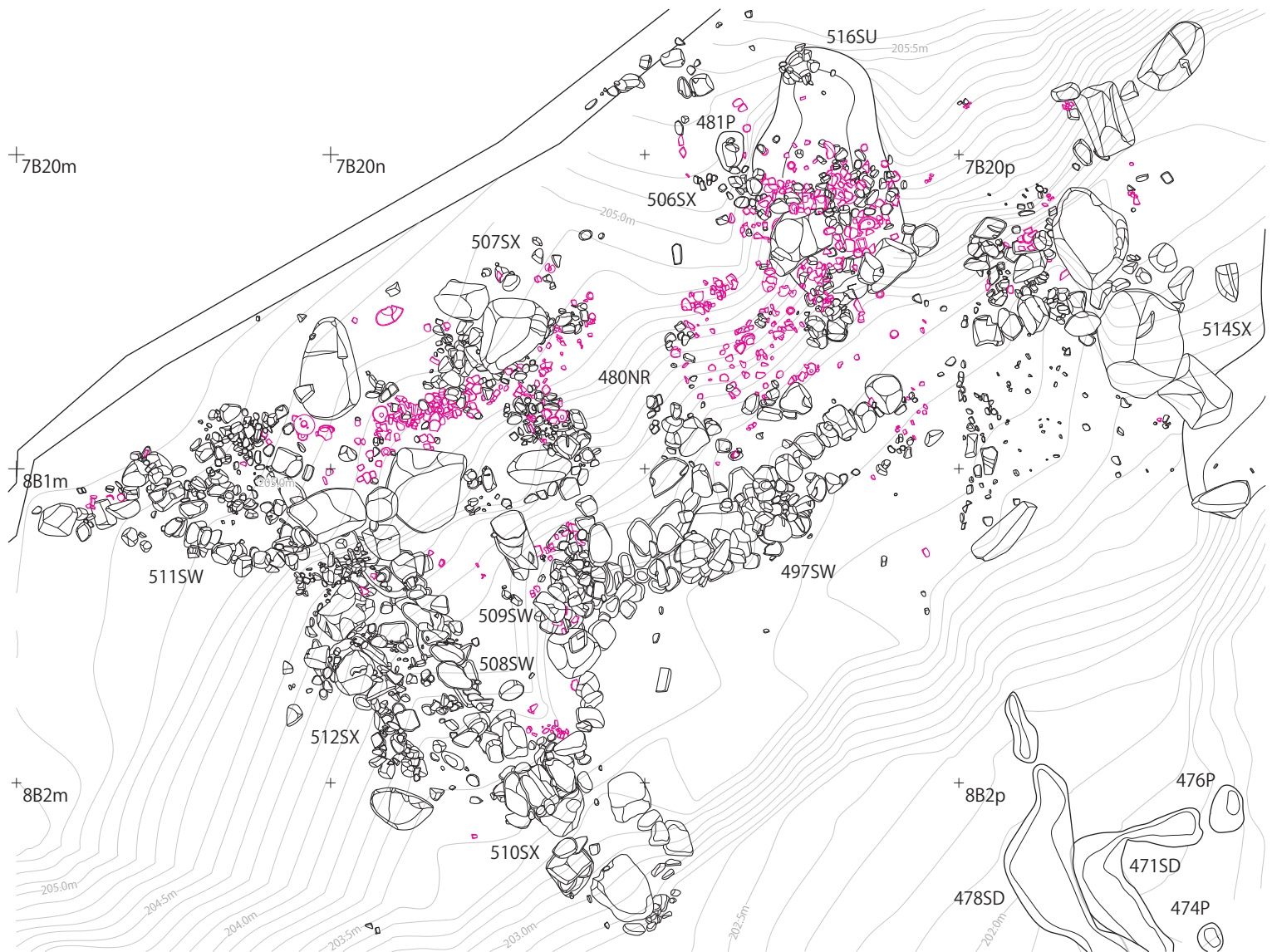


第35図 東斜面遺物集積330SU (1:100)

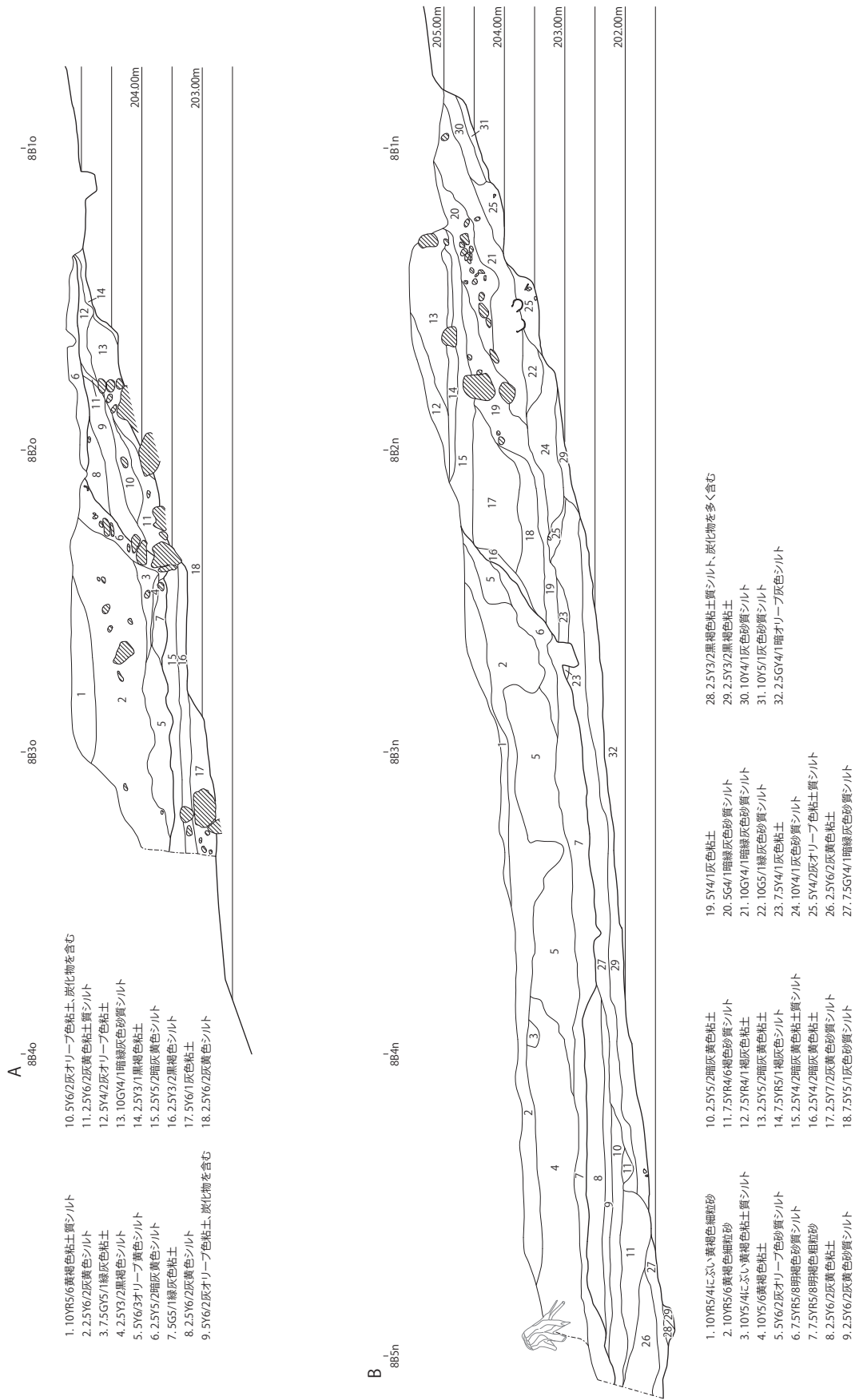


第36図 東斜面遺物集積330SU遺物出土状況 (1:50)

上品野西金地遺跡

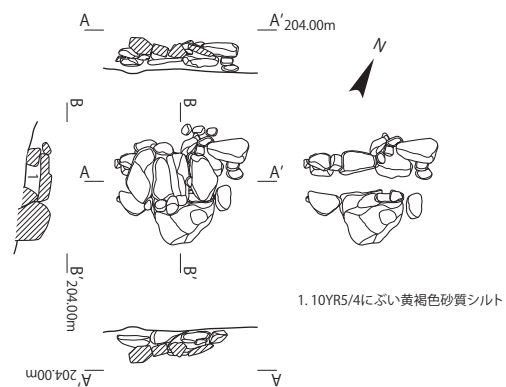


第37図 南斜面480NR遺物出土状況 (1:100)



第38図 南斜面480NR土層断面（1:100）

類が出土する一方で、窯壁や焼台など、窯体の構造物はほとんど出土しないことなどは、これらの遺物が灰原に伴うとする理解を難しくしている。また、個体の残存状況が良好であることから、遺物が斜面を流出して灰原から著しく遊離した（灰原の末端に包含された）ことを想定することも難しい。なお、南斜面上位の一画には、火葬骨を納めた完形の茶壺（796）が巨礫に接して正位の状態で出土した（範囲確認調査 T11 において出土し、発掘調査時に出土状況を改めて精査した）。



第39図 暗渠510SX (1:50)

茶壺の出土

東斜面の遺物集積

東斜面においては、表土下から遺物が大量に包含され、遺物が集積する地点（330SU・380SU）も検出された。東斜面の下位から斜面裾の堆積層中（224NR）にも遺物が散乱し、これらの出土遺物間においても、かなり広範囲に及ぶ接合関係が認められた。

造成面と集石（石組・石列）

石組・石列

南斜面の下位には集石（石組・石列）506SX・507SX・510SX・512SX・514SX・497SW・508SW・509SW・511SWを確認したが、部分的な崩壊と斜面の湧水等の悪条件もあって、地業や構造物の詳細を正確に把握することは困難であった。大局的には斜面を掘削して、平坦面を造成し、丘陵側に石垣状の石積み 497SW・509SW、それに対して直交する方向に石組溝 508SW・512SX・510SX を構築したものと把握される（第 37 図）。なお、510SX は石組の暗渠である（第 39 図）。造成面の石組・石列が構築された時期は、大窯期前半の大量の遺物に混在する近世の遺物によって示されるものと思われるが、大窯期後半以降、登窯第 1 段階（第 1 小期から第 4 小期）を主体として、登窯第 3 段階（第 8 小期から第 11 小期）までの各時期の遺物が出土していることから、17 世紀に石組や石垣が構築され、その後、幾度か修復されながら、19 世紀に最終的に造成面が埋没したと推測される。

石組の暗渠

大窯期前半の遺物包含層の成因

地滑りによる崩落

前記の大窯期前半の遺物の包含状況、造成面と集石（石組・石列）の構築状況などを整合的に理解すれば、近世の造成面に石組溝、石積みが構築され、斜面の上位に集積された状態で埋没していた大窯期前半の遺物が地滑りによって崩落し、近世の造成面を埋没させたと推測される。また、火葬骨を納めた茶壺（796）の出土状況から、斜面には古瀬戸後 IV 期から大窯期前半の墓地も点在し、近世の造成面と同時に埋没、流出した可能性もある。

遺物集積

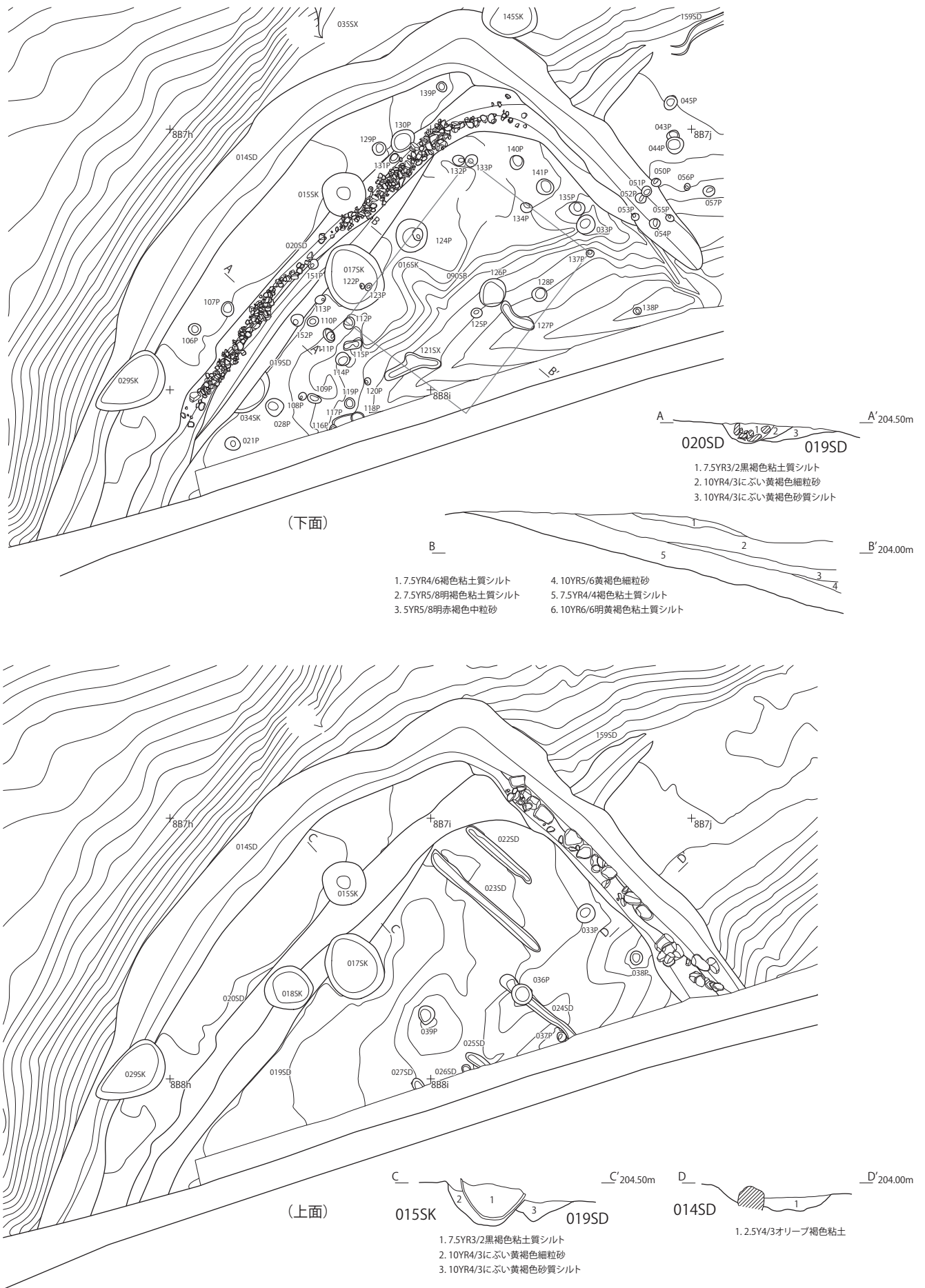
個体の残存状況が良好な大窯期前半の遺物が大量に集積された過程については、遺物の構成内容の特質、隣接する桑下東窯跡を含めた遺跡周辺の諸状況を踏まえて、第 5 章において改めて考察を加えることとする。

平坦面、溝 014SD・019SD・020SD と建物 090SB

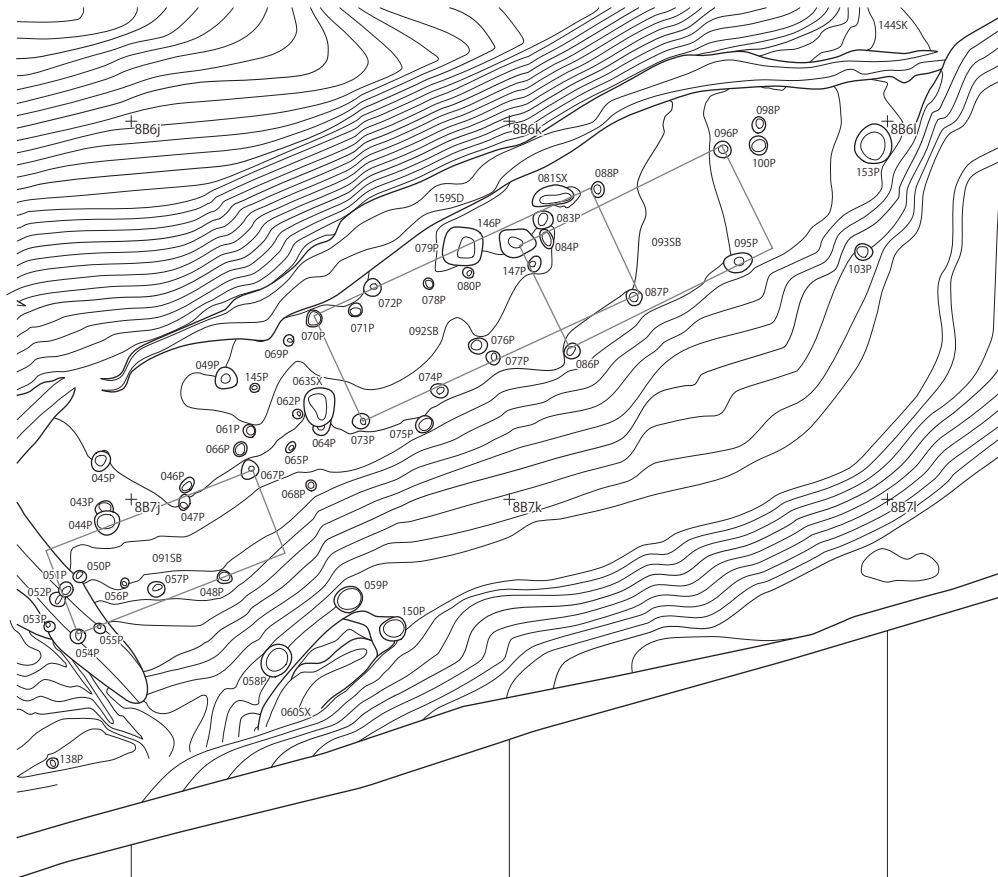
平坦面と溝

丘陵下位の斜面を掘削、造成した平坦面において掘立柱建物 090SB を検出した（第 40 図）。平坦面は溝 014SD・019SD・020SD によって区画される。下面の 020SD は 019SD を再掘削した溝で、溝内には大量の礫と遺物が廃棄されていた。019SD の廃絶後、

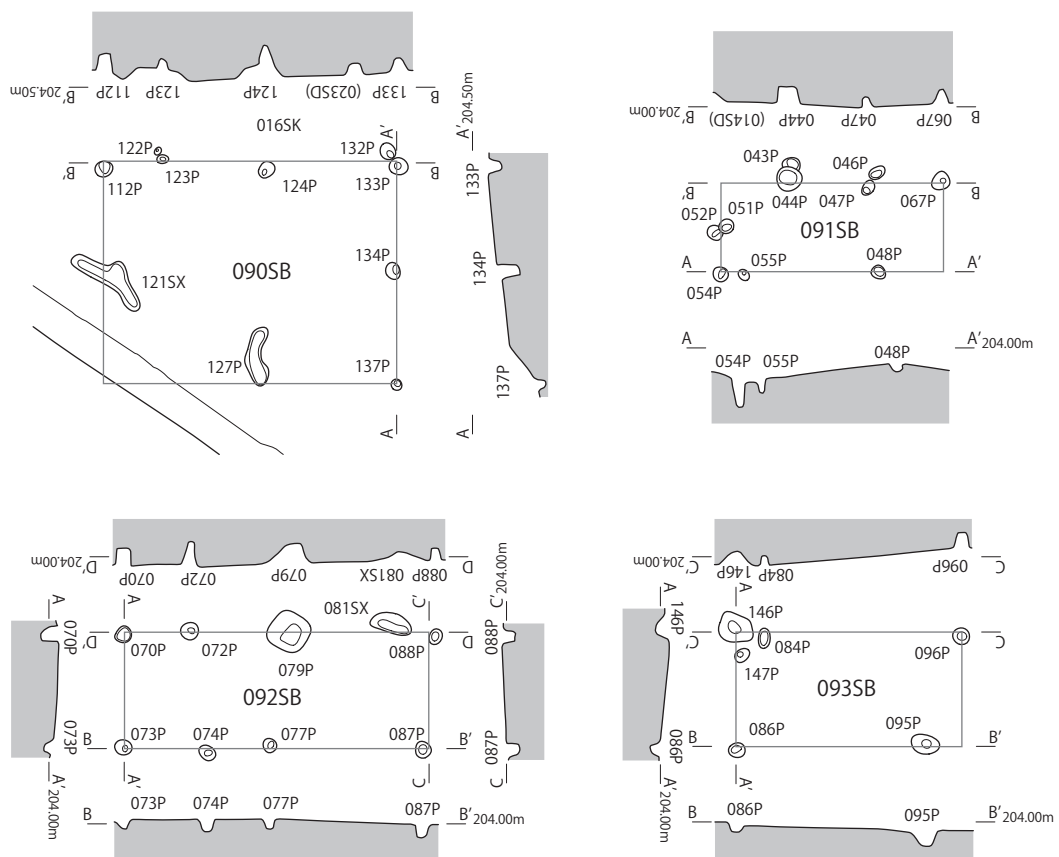
第3章 遺構



第40図 丘陵下位の平坦面1 (平面1:100/土層断面1:50)



第41図 丘陵下位の平坦面2 (1:100)



第42図 丘陵下位の掘立柱建物 (1:100)

上面の014SDが掘削され、平坦面が拡張されたと推測される。常滑赤物甕を埋設した土坑015SKは上面の014SDによる区画に伴う。掘立柱建物090SBは、桁行2間(3.9m)以上・梁間2間(2.4m)以上の側柱建物として復原した(第42図)。下面において検出したが、019SD・020SDにやや近接することから、上面に伴う可能性もある。溝や平坦面周辺においては、大窯期前半の遺物も出土しているが、上面の015SKに埋設された常滑赤物甕から、平坦面と建物は近世に帰属すると考えられる。

平坦面、溝159SDと建物091SB・092SB・093SB

溝159SDに区画された平坦面において掘立柱建物091SB・092SB・093SBを検出した(第41図)。平坦面の斜面側は流出し、北西側は後世に構築された石垣154SWによって失われている。掘立柱建物については、不確定な要素もあるが、091SBを桁行3間(3.0m)・梁間2間(1.15m)以上、092SBを桁行4間(4.0m)・梁間1間(1.5m)以上、093SBを桁行1間(3.0m)・梁間1間(1.5m)以上の側柱建物として復原した(第42図)。平坦面周辺に遺物はほとんど出土していないが、溝や建物は近世に帰属すると推定した。

桑下東窯跡B区井戸SE01・SD01

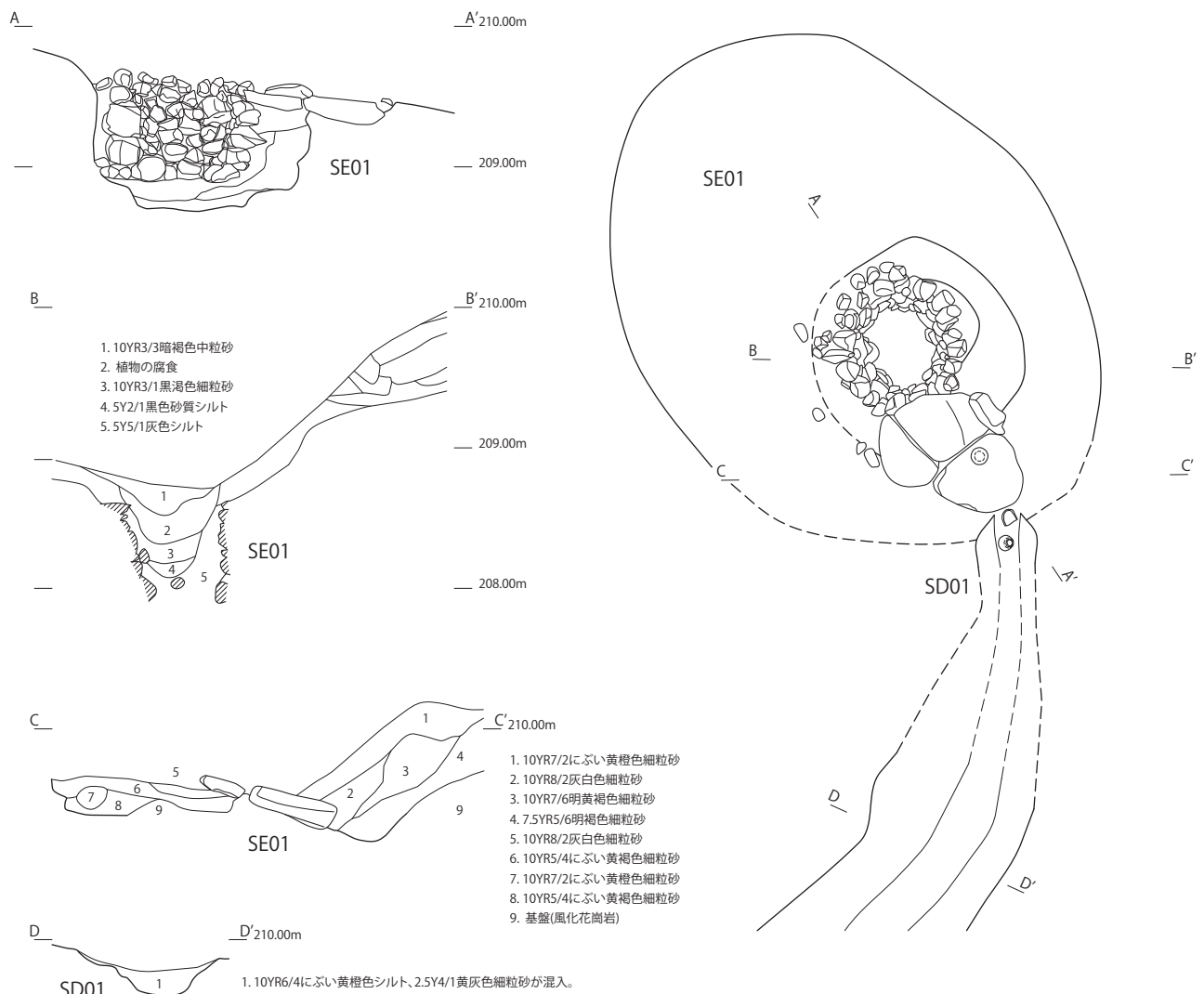
SE01は桑下東窯跡B区の丘陵中位の西向き斜面(標高210m付近)において検出した近世の石組井戸で、溝SD01が接続する(第43図)。SE01からは天目茶碗、灰釉丸碗、鉄釉徳利(1325～1327)が出土した。

掘立柱建物

平坦面と溝

掘立柱建物

近世の石組井戸



第43図 桑下東窯跡B区井戸SE01 (1:50)

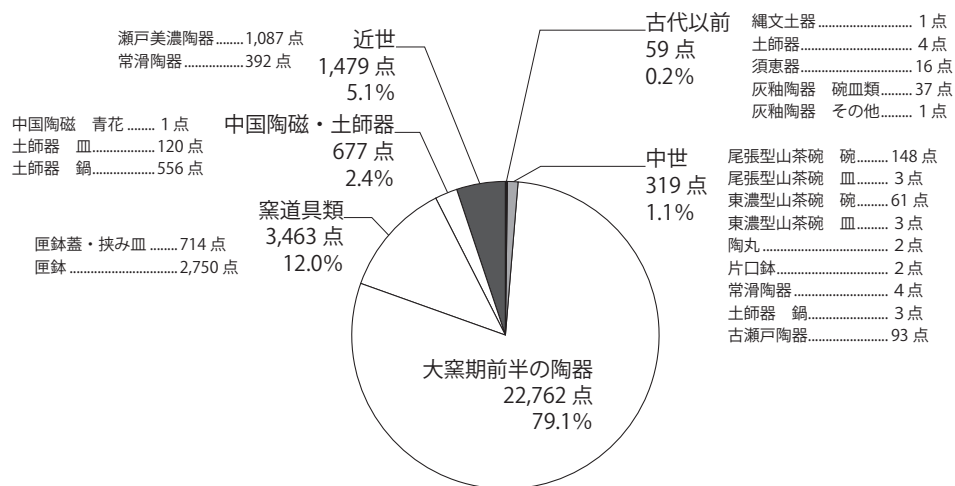
第4章 遺物

(1) 概要

出土土器・陶磁器

構成

上品野西金地遺跡においては、縄文土器、古代の土師器・須恵器・灰釉陶器、中世の無釉陶器・施釉陶器・土師器、戦国時代と近世以降の施釉陶器・土師器等、合計 28,759 点（接合前破片数）の土器・陶磁器が出土した。内訳は、中世以前の土器・陶磁器が 378 点（約 1 %）、戦国時代の土器・陶磁器が 26,902 点（約 94 %）、近世の土器・陶磁器が 1,479 点（約 5 %）で、圧倒的に多いのは（窯道具類を除く）大窯期前半の陶器、22,762 点（約 79 %）である（第 44 図）。



第44図 上品野西金地遺跡出土遺物の構成

(2) 古代以前の遺物

縄文時代の遺物（1・2）

有舌尖頭器

縄文時代の遺物として、有舌尖頭器（1）、縄文土器（2）がある（第 45 図）。

有舌尖頭器（1）は、端部が若干欠損している以外は、ほぼ完器に近い状態で出土した。柳又型あるいはそれに類似するものと考えられる。身部中央に向かって、最長 1 cm を超える連続した剥離（並行剥離）が認められ、一部斜状を呈する部分もある。石材はチャート製で、現存で長さ 5.18cm・幅 2.27cm・最大厚 0.69cm・重量 5.6g をはかる。

縄文土器

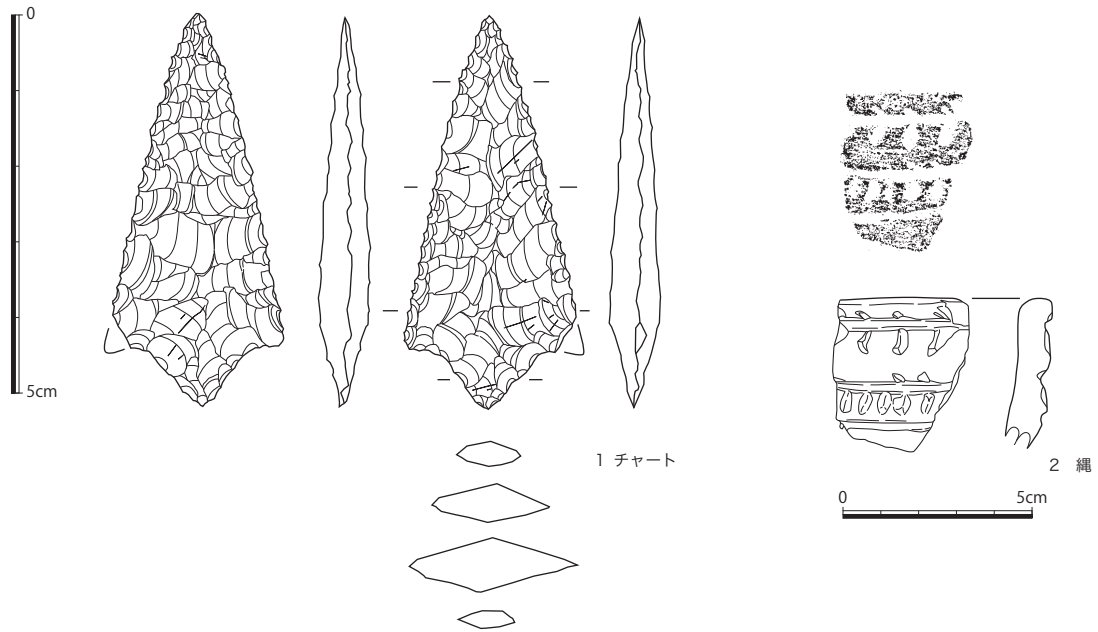
縄文土器（2）は平行して横走る沈線に、羽状の刺突を加える。中期前半に相当すると思われる。

古代の土師器・須恵器・灰釉陶器（3～13）

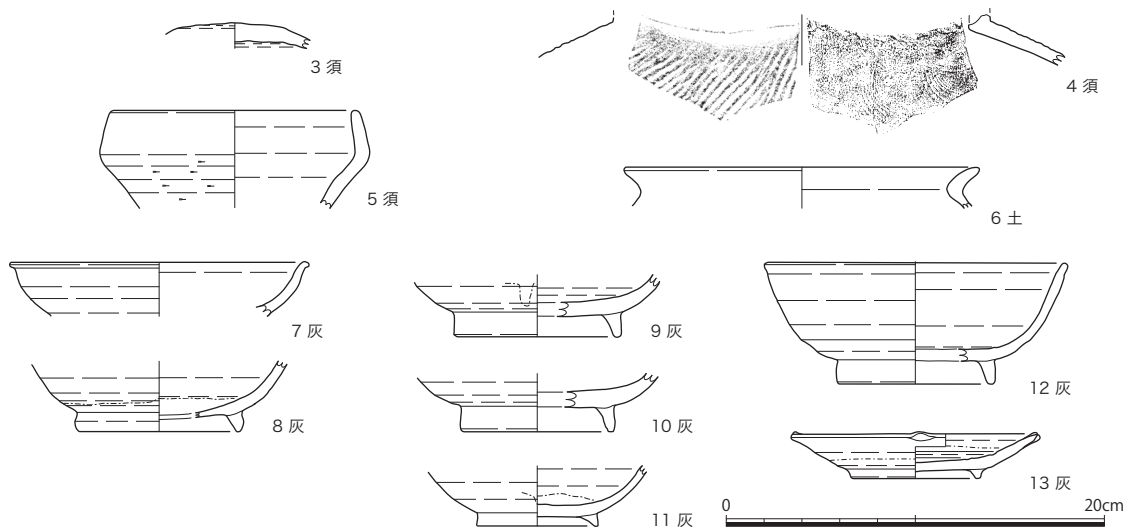
須恵器・土師器

灰釉陶器

調査区内から出土した須恵器には蓋杯（3）、甕（4）、その他袋状の容器（5）、土師器には甕（6）がある（第 46 図）。灰釉陶器には碗（7～12）、皿（13）がある（第 46 図）。碗は黒笹 90 号窯式（7・8）、折戸 53 号窯式（9）、東山 72 号窯式（10～12）に相当する。皿（13）は輪花皿で、東山 72 号窯式に相当する。



第45図 縄文時代の遺物 (1:1/1:2)



第46図 古代の遺物 (1:4)

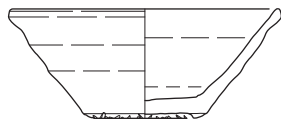
(3) 中世の遺物

中世の山茶碗・施釉陶器・土師器 (14～45)

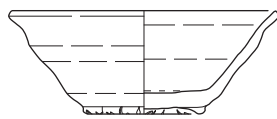
掘立柱建物とその周辺を中心として、尾張型第7型式 (14～18・21)、東濃型明和窯式 (20)、大畑大洞窯式 (23) の山茶碗、片口鉢 (22)、古瀬戸前Ⅲ・Ⅳ期の卸皿 (24)、土師器伊勢型鍋 (19) が出土している (第47図)。

その他、調査区東部の低地部分を中心として、若干の山茶碗 (25～31)、陶丸 (32・33)、古瀬戸製品 (34～44)、土師器羽釜 (45) が出土している (第47図)。古瀬戸製品としては、前Ⅲ・Ⅳ期の四耳壺 (34)、合子蓋 (35)、卸皿 (36)、後Ⅲ・Ⅳ期の折縁深皿 (37)、柄付片口 (40)、瓶子 (41)、花瓶 (42～44)、後Ⅳ期古の平碗 (38)、後Ⅳ

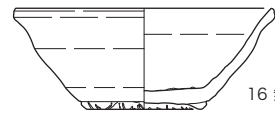
400SD・419SD (14~19)



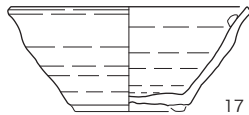
14 無



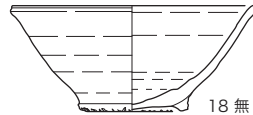
15 無



16 無



17 無



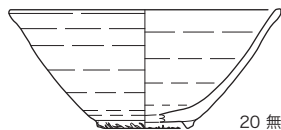
18 無

314P (24)

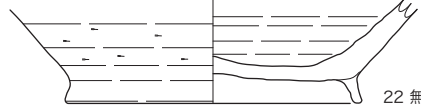


19 土

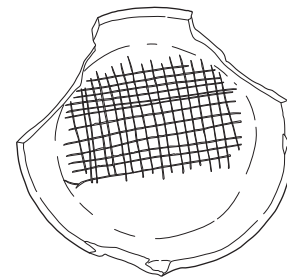
311SX (20~22)



20 無

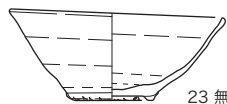


22 無

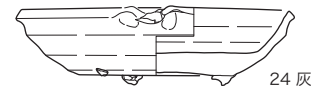


21 無

313P (23)

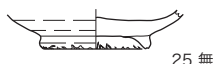


23 無

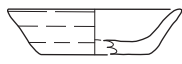


24 灰

その他 (25~45)



25 無



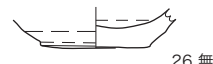
27 無



30 無



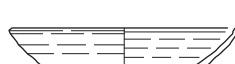
32 無



26 無



28 無



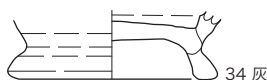
31 無



33 無



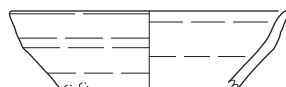
29 無



34 灰



35 灰



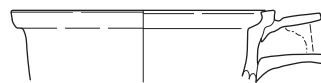
38 灰



39 灰



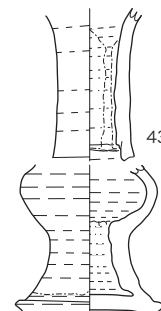
36 灰



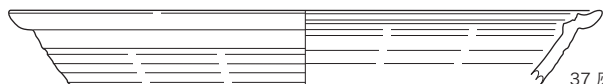
40 灰



41 灰



43 灰



37 灰



42 灰



45 土

0 20cm

第47図 中世の遺物 (1:4)

期新の縁釉小皿 (39) などがある。なお、39を除く縁釉小皿、腰折皿、その他古瀬戸後IV期新に相当するとされる製品については、大窯期前半の陶器に含めた。

（４）戦国時代の遺物

大窯期前半の遺物（46～1049）

出土した戦国時代の遺物の大部分は大窯期前半の陶器（第48・49図）で、その他窯道具類と若干の中国陶磁、土師器皿、土師器鍋がある。これらの遺物について、破片数と個体数の集計を行った（第1・2表）。破片数は接合前破片数、個体数は底部が二分の一以上残存する個体を集計した最小個体数である。なお、破片数と個体数は、各地点、各遺構単位で集計したが、離れた遺構間や地点間で接合する個体も少なくなく、各遺構単位の集計結果は厳密なものではない。

破片数・個体数

遺構出土遺物

遺構出土遺物のごく少ない。代表的な出土遺構として、遺物集積035SX、平坦面（竪穴状遺構）005SX・004SX・514SX、柱穴505P、土坑（墓）513SXがある（第50・51図）。

035SX（46～70）

大窯期前半（古瀬戸後Ⅳ期新から大窯第1段階）の陶器として、鉄釉縁釉小皿（46～49）、端反皿（50・51）、灯明皿（52・53）、天目茶碗（54）、山茶碗（55）、有耳壺（56）、德利（57）、灰釉小壺（58）、播鉢Ⅰ類（59・60）、釜（61～63）、甕（64）、その他、土師器内耳鍋（65・66）、窯道具類として、匣鉢蓋（67）、挟み皿（68）、匣鉢（69）がある（第50・51図）。鉄釉縁釉小皿（46～49）は器高2.0cm、口径4.8cm、底径2.0cm前後で、器高が相対的に低い。端反皿（50）は器壁が全体に薄く、体部下位は丸みをもつ。有耳壺は体部外面から口縁部内面に掛けて鉄釉を施すが、口縁端部の釉は拭い取られる。甕（64）は南斜面007NR・480NRの遺物集積の破片が接合する。匣鉢蓋（67）は灯明皿に転用されている。

接合関係

035SXの遺物群は縁釉小皿が相対的に多い点、端反皿に高台周辺を露胎とするもの（51）が含まれる点など、古瀬戸後Ⅳ期新から大窯第1段階の中間的な様相を示す。

古瀬戸後Ⅳ期新
大窯第1段階

005SX（71・72・268）

大窯期前半の陶器として内耳鍋（71）、天目茶碗（135）、縁釉挟み皿（268）、桶A（663）、窯道具類として匣鉢（72）がある（第51図）。

004SX（73）・514SX（74）

004SX出土の耳付水注（73）は底部に径0.8cmの小円孔を焼成後に穿孔する（第51図）。体部下半に錆釉、体部上半に鉄釉を施す。底部は糸切痕未調整とする。内部には火葬骨が残されていた。514SX出土の耳付水柱（74）は両耳を貼花文で装飾し、鉄釉を施す（第51図）。底部は糸切痕未調整とする。

焼成後穿孔

火葬骨

貼花文

505P（75）

筒形香炉（75）は底部付近を除く外面と内面の口縁部付近に鉄釉を施す（第51図）。底部は糸切痕未調整とする。

513SX（76～79）

ほぼ完形の播鉢Ⅰ類（76）、腰折皿（77）、端反皿（78）、尾張第12型式の山茶碗（79）がある（第51図）。播鉢（76）の底部内面は「一」字状に櫛目を施す。

古瀬戸後Ⅳ期新

513SXの遺物群は全体として、古瀬戸後Ⅳ期新から大窯第1段階の中間的な様相を示す。

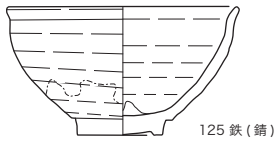
大窯第1段階

上品野西金地遺跡

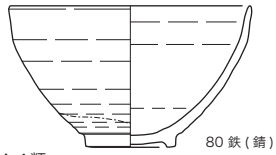
【碗類】

[天目茶碗]

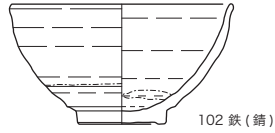
A 1 類



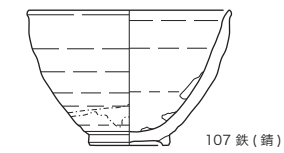
A 2 類



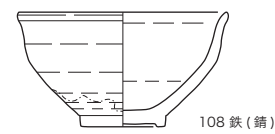
A 3 類



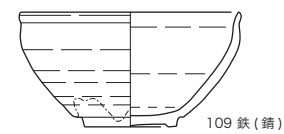
A 4 類



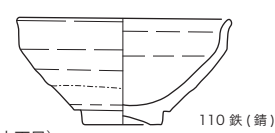
A 5 類



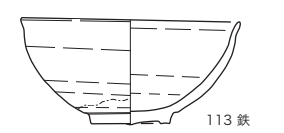
A 6 類



B 類



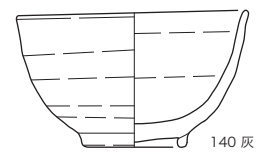
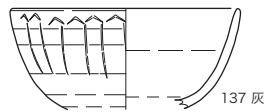
C 類



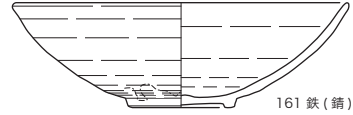
(小天目)



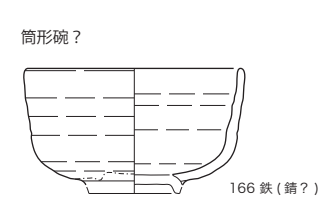
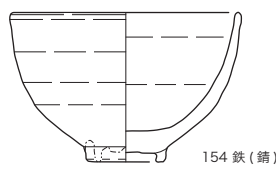
[丸碗]



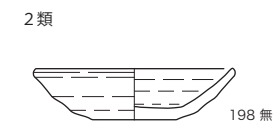
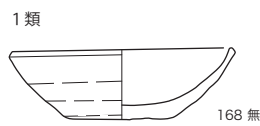
[平碗]



[その他碗類]

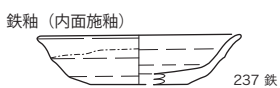
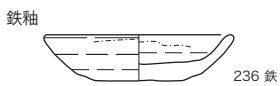
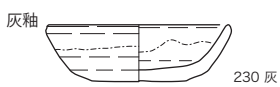


[山茶碗]

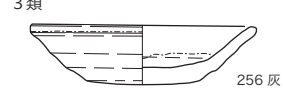


【皿類】

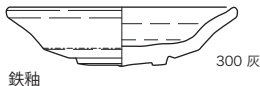
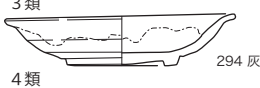
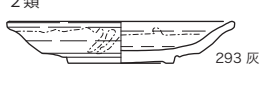
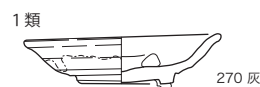
[縁釉小皿]



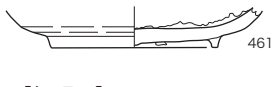
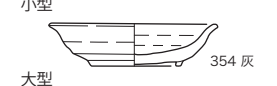
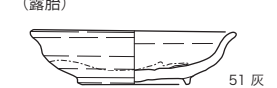
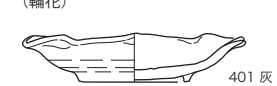
[縁釉挟み皿]



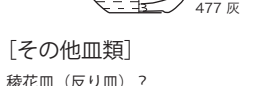
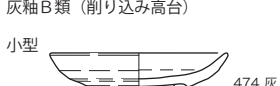
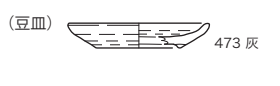
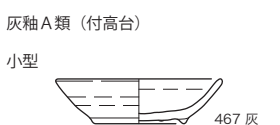
[腰折皿]



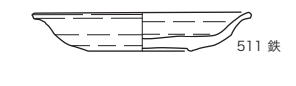
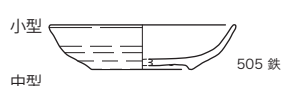
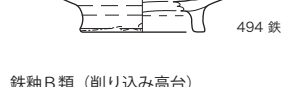
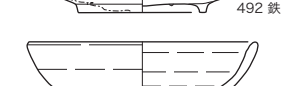
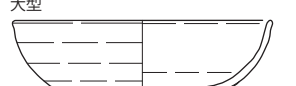
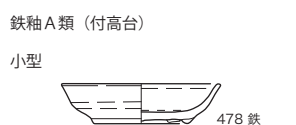
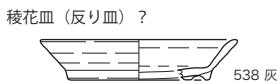
[端反皿]



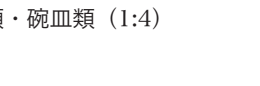
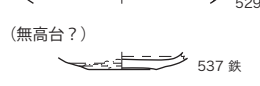
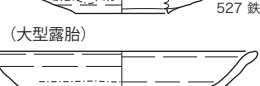
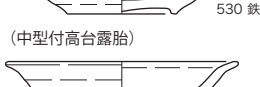
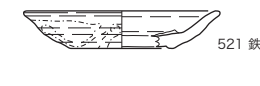
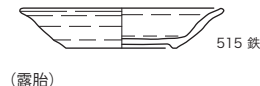
[丸皿]



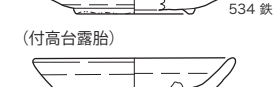
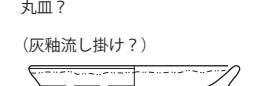
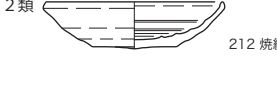
[その他皿類]



[稜皿]

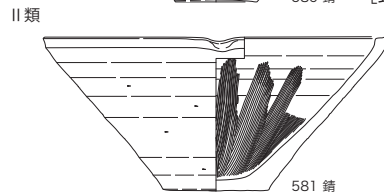
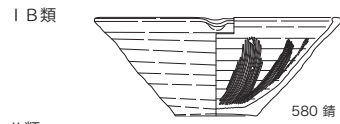
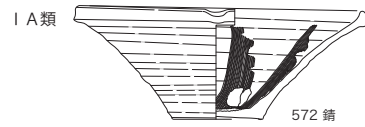


[灯明皿]

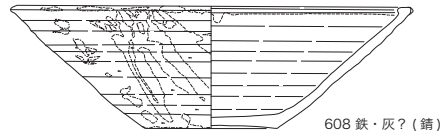


【鉢類・桶】

【搥鉢】



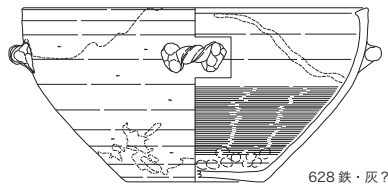
【鉢A】



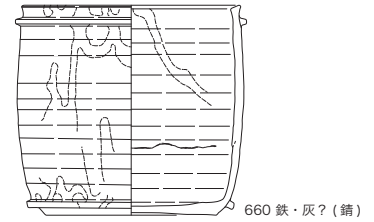
【鉢B】



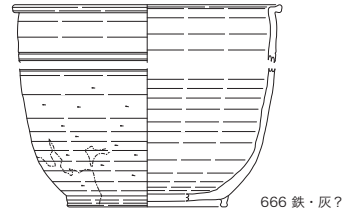
【鉢C】



【桶A】



【桶B】



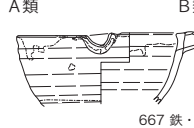
【浅鉢】



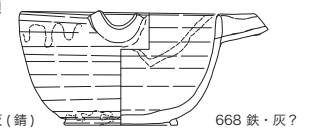
【小鉢】



【片口】

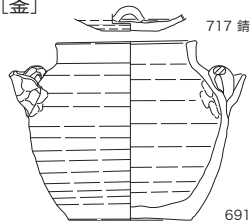


B類

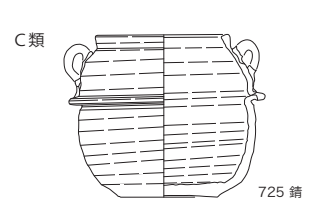
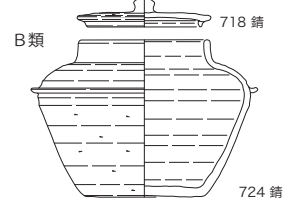
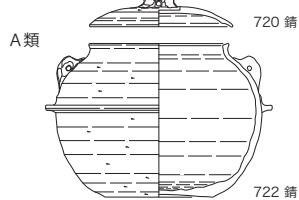


【鍋・釜類】

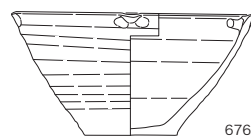
【釜】



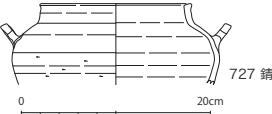
【茶釜】



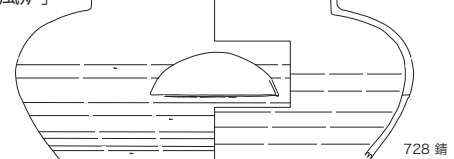
【内耳鍋】



D類

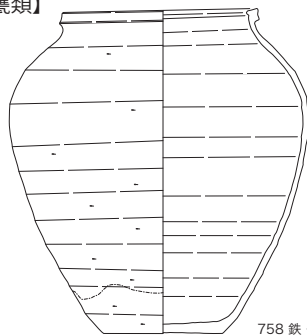


【風炉】

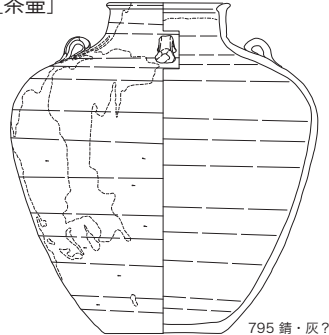


【壺・甕類】

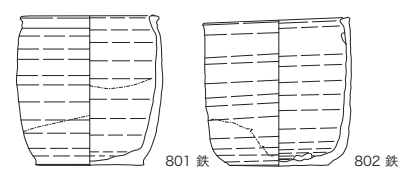
【甕】



【茶壺】

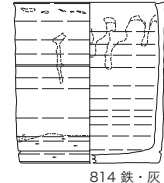


【有耳壺 (筒形容器)】 A類

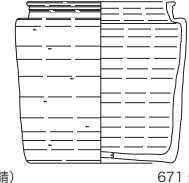


802 鉄

【筒形容器】 B類



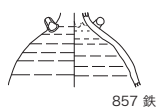
(焼締)



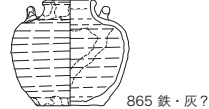
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



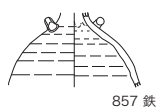
【茶入】



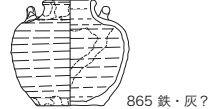
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



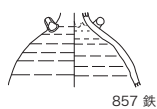
【茶入】



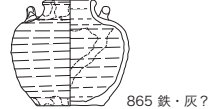
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



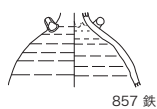
【茶入】



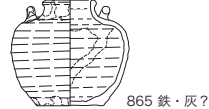
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



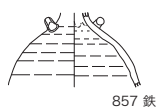
【茶入】



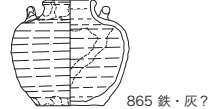
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



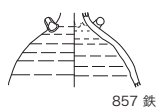
【茶入】



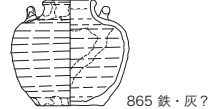
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



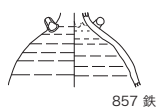
【茶入】



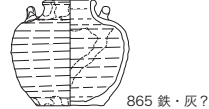
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



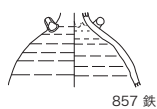
【茶入】



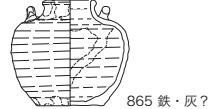
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



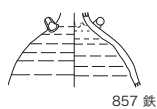
【茶入】



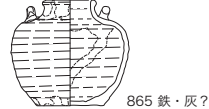
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



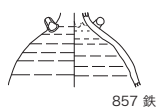
【茶入】



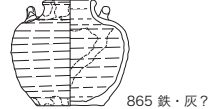
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



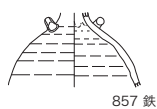
【茶入】



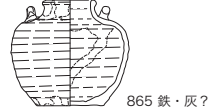
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



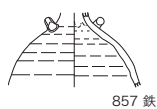
【茶入】



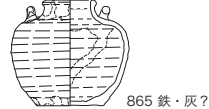
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



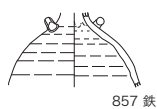
【茶入】



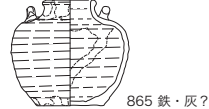
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



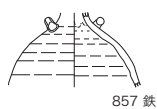
【茶入】



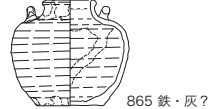
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



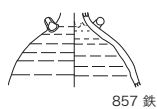
【茶入】



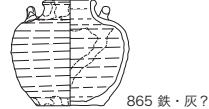
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



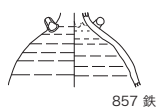
【茶入】



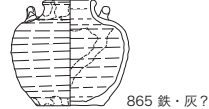
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



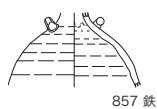
【茶入】



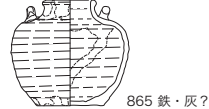
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



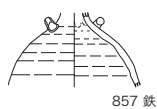
【茶入】



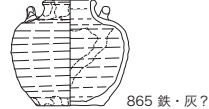
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



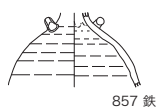
【茶入】



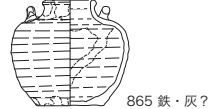
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



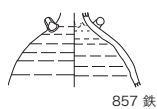
【茶入】



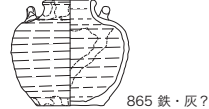
【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】



【小壺】



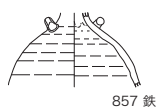
【茶入】



【德利】



【双耳德利】



【双耳壺】

上品野西金地遺跡

第1表 大窯期前半遺物集計表1（破片数）

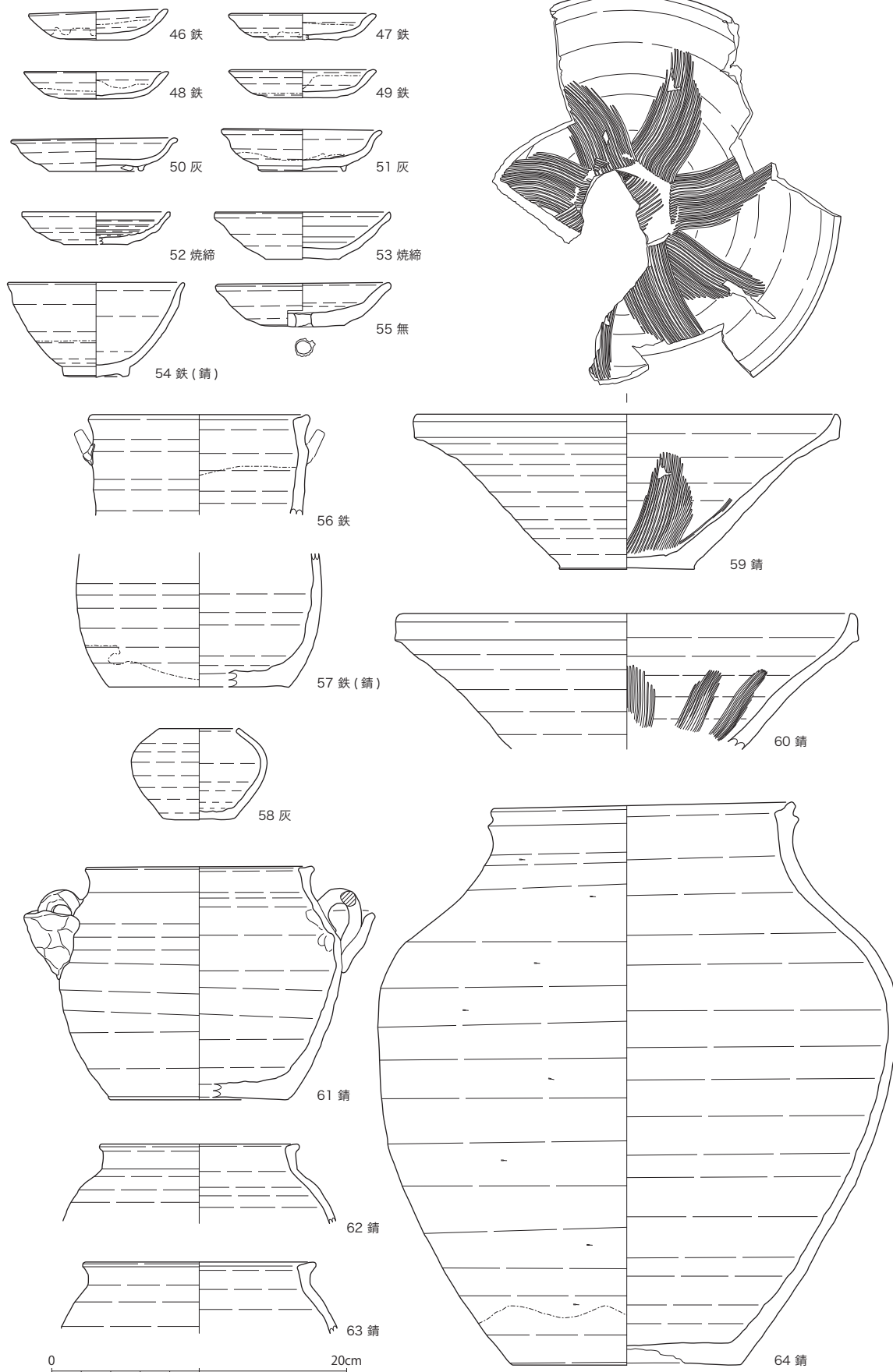
器種／遺構			480NR	007NR	東斜面	035SX	513SX	415SX	その他	計							
碗類	天目茶碗	天目茶碗	656	65	329	7	0	43	439	1539	6.8%	1547	6.8%	1764	7.7%		
		小天目	0	0	5	0	0	0	2	7	0.0%						
	丸碗	丸碗	78	0	40	0	0	9	63	190	0.8%	200	0.9%				
		丸碗（蓮弁文）	10	0	0	0	0	0	0	10	0.0%						
	その他	平碗	3	1	3	0	0	0	2	9	0.0%	17	0.1%				
		筒形碗	1	0	0	0	0	0	0	1	0.0%						
その他		2	1	1	0	0	0	3	7	0.0%							
山茶碗			317	4	126	7	1	14	107	576	2.5%	576	2.5%	576	2.5%		
灯明皿			76	6	56	2	0	2	88	230	1.0%	230	1.0%	230	1.0%		
皿類	緑釉小皿	灰釉緑釉小皿	0	0	11	0	0	0	2	13	0.1%	44	0.2%	4193	18.4%		
		鉄釉緑釉小皿	1	0	3	23	0	0	4	31	0.1%						
		緑釉挟み皿	388	5	146	1	0	7	247	794	3.5%					794	3.5%
		腰折皿	724	4	15	0	1	7	42	793	3.5%					793	3.5%
	端反皿	端反皿	1279	68	406	8	4	49	517	2331	10.2%	2331	10.2%				
		丸皿	灰釉丸皿	18	2	3	0	0	0	13	36	0.2%	149			0.7%	
	灰釉丸皿（ソギ）		1	6	1	0	0	0	1	9	0.0%						
	鉄釉丸皿		55	2	26	0	0	3	18	104	0.5%						
	稜皿	稜皿	9	1	3	0	0	2	9	24	0.1%	29	0.1%				
		稜皿（露胎）	1	2	0	0	0	0	2	5	0.0%						
	その他	鉄釉端反皿	鉄釉端反皿	18	1	2	0	0	6	4	31	0.1%	53			0.2%	
			その他	7	0	3	0	0	3	0	13	0.1%					
			鉄釉稜花皿	7	0	0	0	0	0	0	7	0.0%					
			灰釉稜花皿（反り皿）	2	0	0	0	0	0	0	2	0.0%					
鉢・盤類	揃鉢	揃鉢	2971	313	2552	38	11	115	2898	8898	39.1%	8898	39.1%	9538	41.9%		
		鉢A・B	164	3	119	0	0	3	40	329	1.4%						
		鉢C	45	13	75	4	0	3	29	169	0.7%						
		浅鉢	37	7	46	0	0	1	13	104	0.5%						
		中・小型鉢	15	0	0	0	0	0	1	16	0.1%						
		片口	21	0	0	0	0	0	1	22	0.1%						
鍋・釜類	内耳鍋		279	47	437	2	0	33	353	1151	5.1%	3042	13.4%	3042	13.4%		
	釜		485	68	632	20	0	80	481	1766	7.8%						
	茶釜		23	9	51	1	0	7	20	111	0.5%						
	釜・土瓶の蓋		6	0	4	0	0	0	3	13	0.1%						
	風炉		1	0	0	0	0	0	0	1	0.0%						
灯明具	燭台		41	1	48	0	0	3	30	123	0.5%	136	0.6%	136	0.6%		
	灯籠		13	0	0	0	0	0	0	13	0.1%						
壺・甕類	甕		481	51	465	41	0	28	432	1498	6.6%	1498	6.6%	3203	14.1%		
	茶壺		395	4	88	0	0	2	152	641	2.8%	641	2.8%				
	筒形容器・德利	有耳壺・筒形容器	135	11	28	4	0	2	37	217	1.0%	931	4.1%				
		德利（瓶）	254	20	220	8	0	13	200	715	3.1%						
	その他壺類	双耳壺	12	0	5	0	0	0	0	17	0.1%	31	0.1%				
		口広有耳壺	4	0	6	0	0	0	0	10	0.0%						
		四耳壺	0	0	4	0	0	0	0	4	0.0%						
	小壺など	小壺・耳付水注	11	0	2	13	0	0	14	40	0.2%	40	0.2%				
		茶入	8	0	3	0	0	0	7	18	0.1%	18	0.1%				
	その他	桶	桶	1	0	29	0	0	1	2	33	0.1%	44			0.2%	
			焼締筒形容器	10	0	1	0	0	0	0	11	0.0%					
その他	宗教具	花瓶	7	0	3	0	0	0	0	10	0.0%	75	0.3%	80	0.4%		
		仏餉具	4	0	4	0	0	0	9	17	0.1%						
		香炉	7	13	9	0	0	1	16	46	0.2%						
		狛犬	1	1	0	0	0	0	0	2	0.0%						
	その他	水滴	1	0	0	0	0	2	0	3	0.0%	5	0.0%				
		瓦	1	0	0	0	0	0	1	2	0.0%						
計			9086	729	6010	179	17	439	6302	22762							

土師器	土師器皿									120	17.8%	676
	土師器鍋									556	82.2%	
窯道具類	匣鉢蓋・挟み皿	222	24	247	3	1	15	202	714	20.6%	3463	
	匣鉢	736	176	715	19	0	44	1059	2749	79.4%		

第2表 大窯期前半遺物集計表2（個体数）

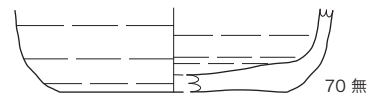
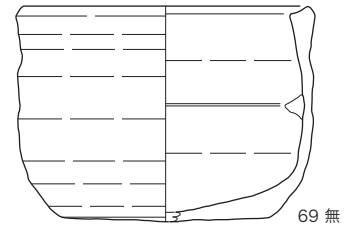
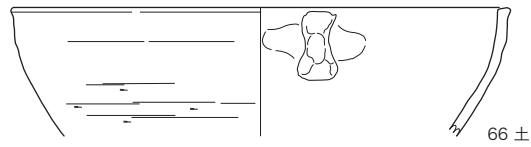
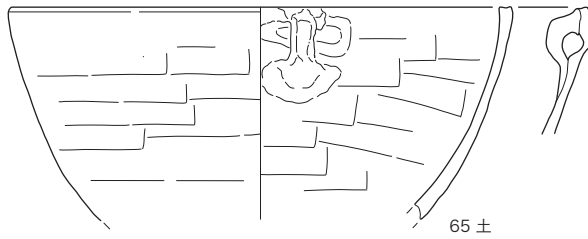
器種／遺構			南斜面	東斜面	035SX	513SX	415SX他	その他	計						
碗類	天目茶碗	輪高台	63	29	1	0	3	22	118	11.7%	125	12.4%	153	15.2%	
		内反り高台	4	0	0	0	0	3	7	0.7%					
	小天目・小杯		0	2	0	0	0	1	3	0.3%	3	0.3%			
	丸碗		13	5	0	0	2	1	21	2.1%	21	2.1%			
	平碗		0	0	0	0	0	1	1	0.1%	1	0.1%			
	その他		1	1	0	0	0	1	3	0.3%	3	0.3%			
山茶碗			23	10	1	1	2	2	39	3.9%	39	3.9%	39	3.9%	
灯明皿			16	1	0	0	1	4	22	2.2%	22	2.2%	22	2.2%	
皿類	緑釉小皿	灰釉	0	0	0	0	0	2	2	0.2%	8	0.8%	479	47.5%	
		鉄釉	0	0	4	0	0	2	6	0.6%					
			75	14	0	0	1	3	93	9.2%	93	9.2%			
	腰折皿	灰釉	113	1	0	1	1	2	118	11.7%	119	11.8%			
		鉄釉	1	0	0	0	0	0	1	0.1%					
	端反皿	中	152	33	1	1	4	8	199	19.7%	223	22.1%			
		中	輪花皿	1	0	0	0	0	0	1					0.1%
			露胎	0	0	1	0	0	0	1					0.1%
		小	18	3	0	0	0	1	22	2.2%					
	丸皿	灰釉	付高台	3	0	0	0	0	3	0.3%	26	2.6%			
			削り込み高台	2	0	0	0	0	2	0.2%					
		鉄釉	小	6	1	0	0	1	8	0.8%					
			付高台	中	6	3	0	0	0	9					0.9%
				大	2	0	0	0	0	2					0.2%
			削り込み高台	0	2	0	0	0	2	0.2%					
	稜皿		2	0	0	0	0	1	3	0.3%	3	0.3%			
	鉄釉端反皿		1	0	0	0	0	1	2	0.2%	2	0.2%			
	その他		3	1	0	0	0	1	5	0.5%	5	0.5%			
	鉢・盤類	播鉢	I A 類	77	29	2	1	3	8	120	11.9%	158			15.7%
I B 類			16	4	0	0	0	1	21	2.1%					
II 類			10	4	1	0	0	2	17	1.7%					
鉢		A	6	3	0	0	0	1	10	1.0%	27	2.7%			
		B	3	1	0	0	0	1	5	0.5%					
		C	3	1	0	0	0	0	4	0.4%					
		浅鉢	3	2	0	0	0	0	5	0.5%					
中・小型鉢		2	0	0	0	0	0	2	0.2%						
片口		1	0	0	0	0	0	1	0.1%						
鍋・釜類	内耳鍋	11	2	0	0	0	1	14	1.4%	50	5.0%	50	5.0%		
	釜	18	11	0	0	0	0	29	2.9%						
	茶釜	1	2	0	0	0	0	3	0.3%						
	釜・土瓶の蓋	2	1	0	0	0	1	4	0.4%						
灯明具	燭台	3	0	0	0	0	0	3	0.3%	3	0.3%	3	0.3%		
壺・甕類	甕	6	1	1	0	0	1	9	0.9%	9	0.9%	63	6.2%		
	茶壺	4	0	0	0	0	0	4	0.4%	4	0.4%				
	有耳壺・筒形容器		11	0	0	0	0	1	12	1.2%	12			1.2%	
	徳利	徳利	9	7	0	0	2	1	19	1.9%	21			2.1%	
		双耳徳利	2	0	0	0	0	0	2	0.2%					
	その他壺類	双耳壺	1	0	0	0	0	0	1	0.1%	11			1.1%	
		小壺・耳付水注	5	1	1	0	0	3	10	1.0%					
	茶入		3	1	0	0	0	0	4	0.4%	4			0.4%	
桶		0	2	0	0	0	0	2	0.2%	2	0.2%				
その他	宗教具	花瓶	1	1	0	0	0	0	2	0.2%	13	1.3%	15	1.5%	
		仏餉具	4	1	0	0	0	0	5	0.5%					
		香炉	2	0	0	0	0	3	5	0.5%					
		狛犬	1	0	0	0	0	0	1	0.1%					
	水滴		1	0	0	0	0	1	2	0.2%	2	0.2%			
計			711	180	13	4	19	82	1009						
土師器	土師器皿		2	2	0	0	0	0	4						
窯道具類	挟み皿		33	36	0	0	1	6	76	33.8%	76	33.8%	225		
	匣鉢蓋		20	10	0	0	0	2	32	14.2%	32	14.2%			
	匣鉢	小	37	21	0	0	4	8	70	31.1%	117	52.0%			
		中	23	14	1	0	1	0	39	17.3%					
		大	4	4	0	0	0	0	8	3.6%					

035SX-1 (46~64)

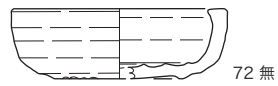
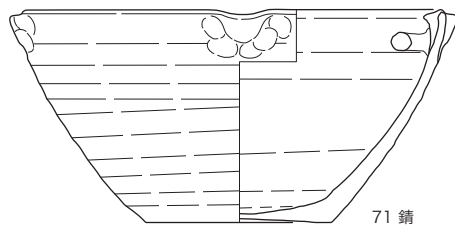


第50図 遺構出土遺物1 (1:4)

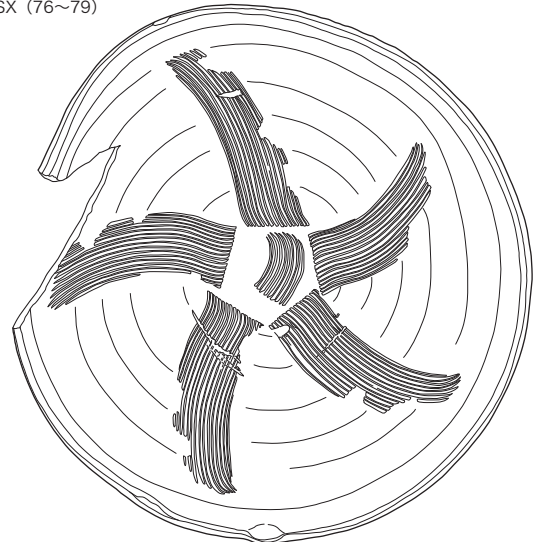
035SX-2 (65~70)



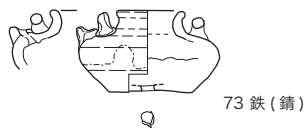
005SX (71・72)



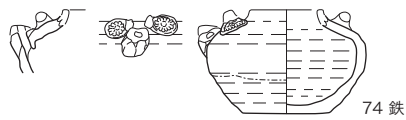
513SX (76~79)



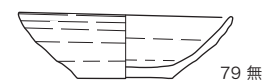
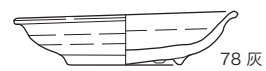
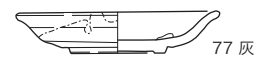
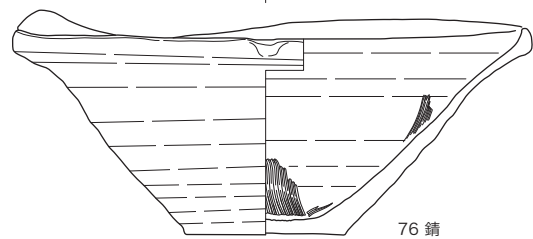
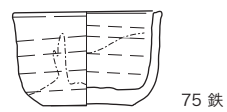
004SX (73)



514SX (74)



505P (75)



0 20cm

第51図 遺構出土遺物2 (1:4)

遺構外出土遺物

器種分類	明確な遺構に伴わない遺物については、器種別(第48・49図)に資料を提示する。その際、およその出土地点に応じて、丘陵の南向き斜面(007NR・480NR)周辺に集積、散在していた遺物群を「南斜面007NR・480NR」、東向き斜面の遺物集積(330SU・380SU)を中心として、集積、散在していた遺物群を「東斜面330SU・380SU」、調査区内にやや不安定な状況下で包含されていた遺物群を「その他」として便宜的に区分した。
南斜面	
東斜面	
その他	

碗類

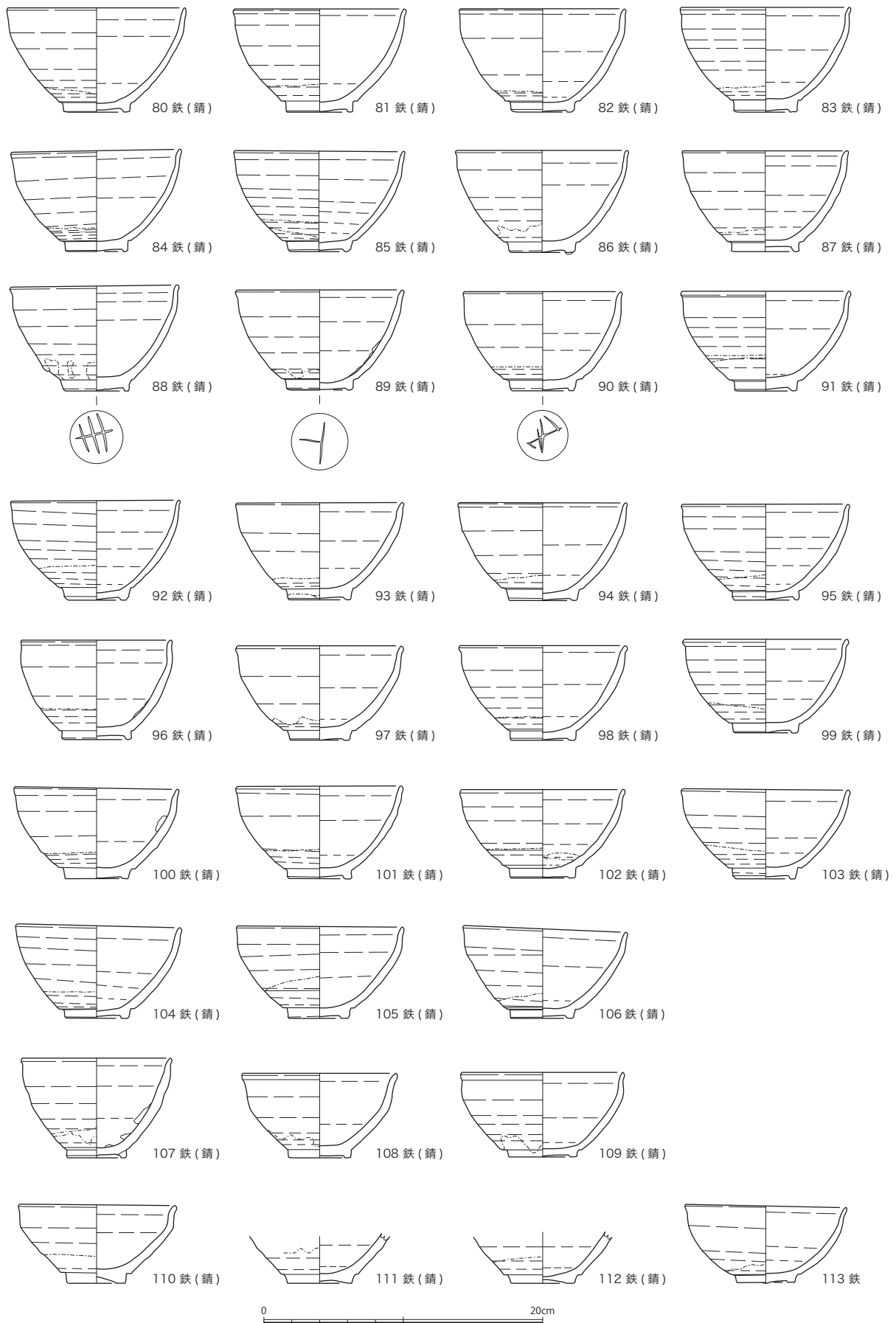
天目茶碗・小天目(80～136)

A類	天目茶碗・小天目には削り出し輪高台のA類(80	第52図 天目茶碗の形式構成 <table><tr><th>種類</th><th>個体数</th><th>割合</th></tr><tr><td>A類</td><td>117</td><td>93.6%</td></tr><tr><td>B類</td><td>7</td><td>5.6%</td></tr><tr><td>C類</td><td>1</td><td>0.8%</td></tr></table>	種類	個体数	割合	A類	117	93.6%	B類	7	5.6%	C類	1	0.8%
種類	個体数		割合											
A類	117		93.6%											
B類	7		5.6%											
C類	1	0.8%												
B類	～109・114～132・136)と内反り高台のB類(110													
C類	～112・134)がある。(最小)個体数による集計では、A類が117個体(93.6%)と多く、B類は7個体(5.6%)とごく少ない(第52図)。いずれも高台周辺を錆釉で化粧掛けし、鉄釉を施す。その他、高台周辺を露胎とするC類(113)がある(第53・54図)。													
A1類	削り出し輪高台のA類は、器形と法量から、器高6.8cm、口径12.0cm、高台径4.5cm前後で、口縁部先端が屈曲するA1類(125)、器高7.4cm、口径12.0cm、高台径4.6cm前後で、体部が上方に強く立ち上がるA2類(80～88・114～116・126・127)、器高6.8cm、口径11.8cm、高台径4.6cm前後で、器高がやや低いA3類(89～106・117～121・128・129)、器高7.0cm、口径10.8cm、高台径4.4cm前後で、器高に対して口径が小さいA4類(107)、器高6.0cm、口径11.5cm、高台径4.5cm前後で、器高が低いA5類(108・122・123・130～133)、器高6.0cm、口径11.5cm、高台径4.8cm前後で、器高が低く、高台径が大きいA6類(109)に大別される。107は付高台の可能性がある。													
A2類														
A3類														
A4類														
A5類														
A6類														
使用痕跡	なお、内反り高台のB類(110～112・134)には使用痕跡が認められるものが多い。およそA1類が古瀬戸後IV期新、A2類が大窯第1段階前半、A3・A4・A5・A6類が大窯第1段階後半、B類とC類が大窯第2段階に相当する。													

丸碗(137～160)

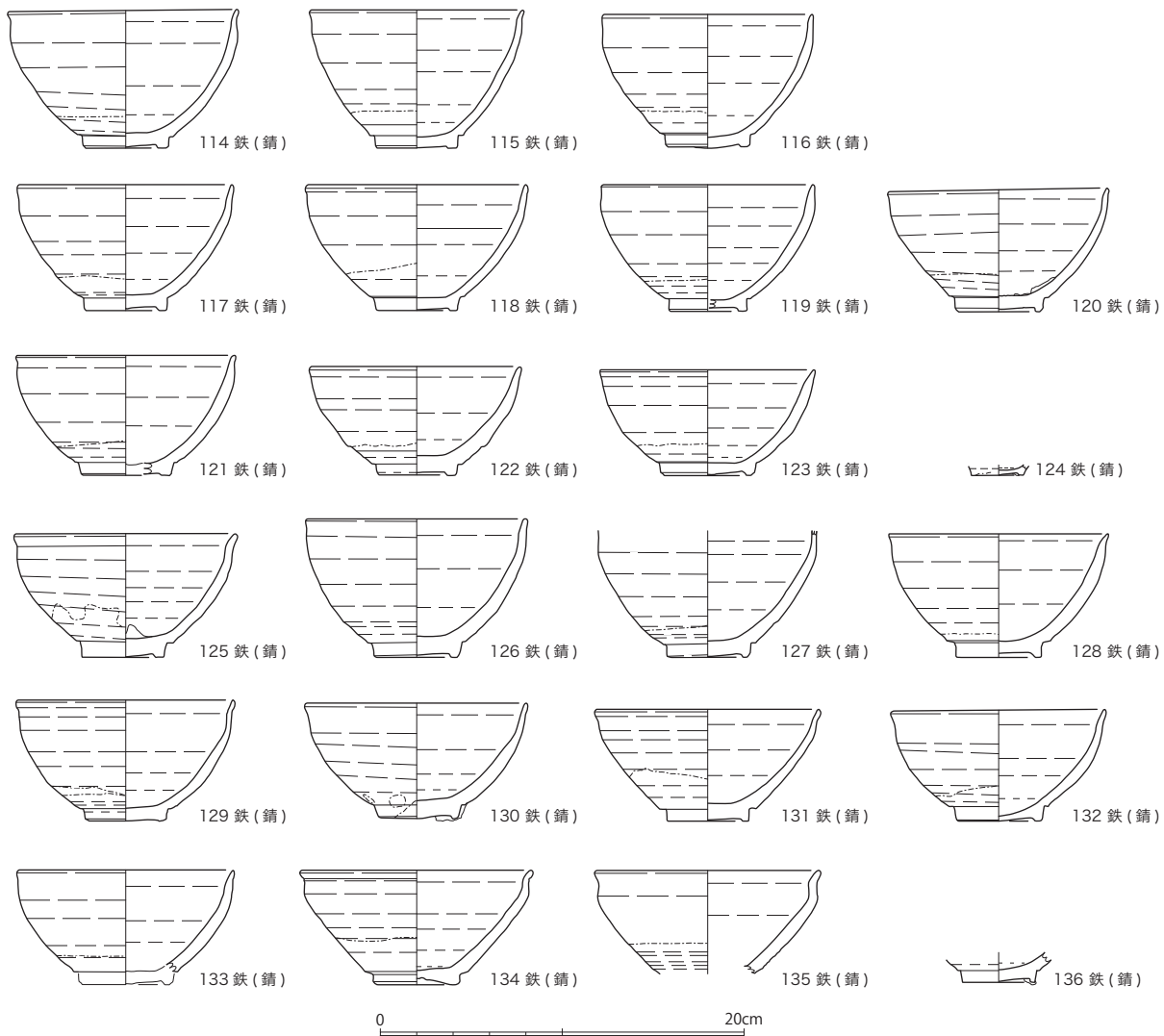
印花文(蓮弁文)	付高台で内外面全面に灰釉を施す(第55図)。体部外面に鉤形の印花文(蓮弁文)を押印するもの(137・138)、断面長方形の高い高台を付し底部内面に印花文(菊花)を押印するもの(139)がわずかにある。器形と法量から、器高6.8cm、口径11.8cm、高台径5.6cm前後で、高台が断面長方形の1類(140～142)、器高6.2cm、口径11.4cm、高台径5.6cm前後で、高台が高い断面長方形か断面方形の2類(143～146・149～151)、器高5.6cm、口径11.4cm、高台径5.6cm前後で、高台がやや低く丸みをもつ3類(147・148・152・153)に大別される。
付高台	その他、付高台で鉄釉を施した碗(154～160)がある(第55図)。口径12.0cm、器高8.0cm、高台径4.2cm前後の高台径が小さいもの(154)と、高台径6.0cm前後のもの(155～160)がある。高台はいずれもやや丸みをもつ断面方形で、154・160は高台周辺を錆釉で化粧掛けし、156～159は高台周辺を露胎とする。

南斜面 007NR・480NR (80~113)



第53図 天目茶碗1 (1:4)

東斜面 330SU・380SU (114~124) その他 (125~136)



第54図 天目茶碗 2 (1:4)

平碗 (161~165)

鉄釉

焼締製品?

削り出し高台で鉄釉を施すA類(161~163)と、やや不確実であるが、焼締のB類(164・165)がある(第55図)。A類には高台周辺を錆釉で化粧掛けするもの(161・162)と高台周辺を露胎とするもの(163)がある。

筒形碗 (166)

大窯期後半?

不確実であるが、体部が直立気味の形状の碗を筒形碗とした(第55図)。付高台で錆釉?に鉄釉を施す。大窯期前半の遺物群に含めたが、大窯第3段階に相当する可能性もある。

山茶碗 (164~198)

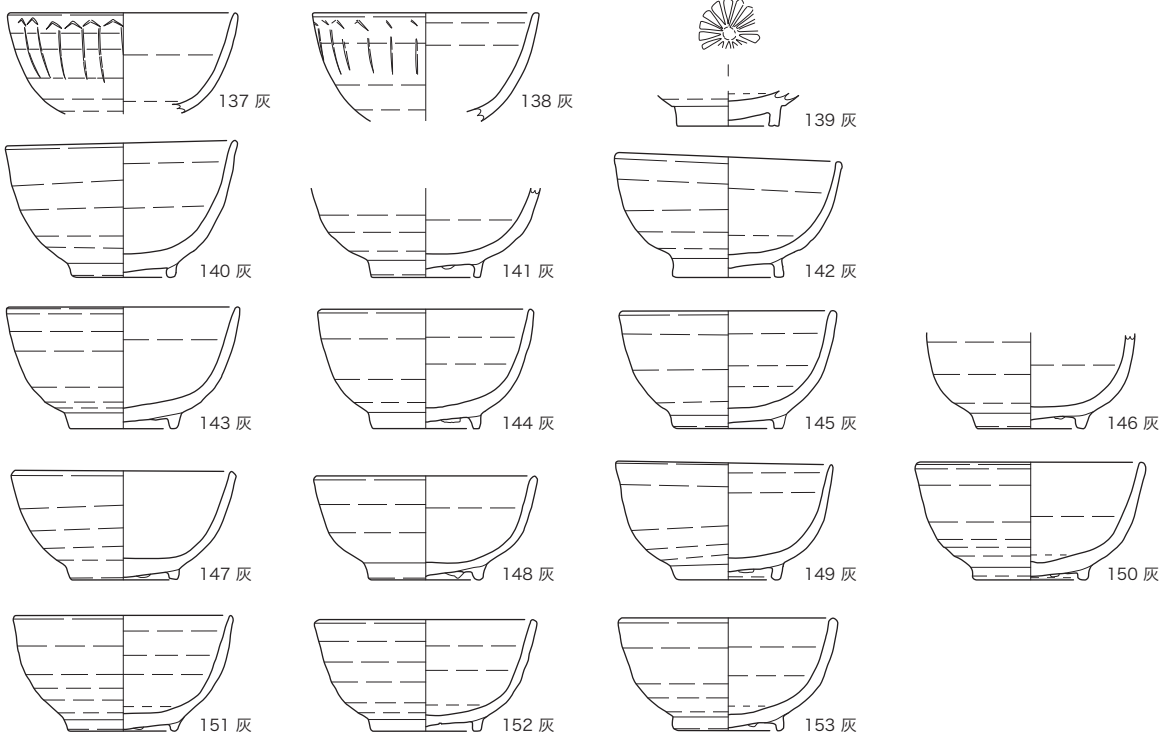
尾張型第12型式

1類

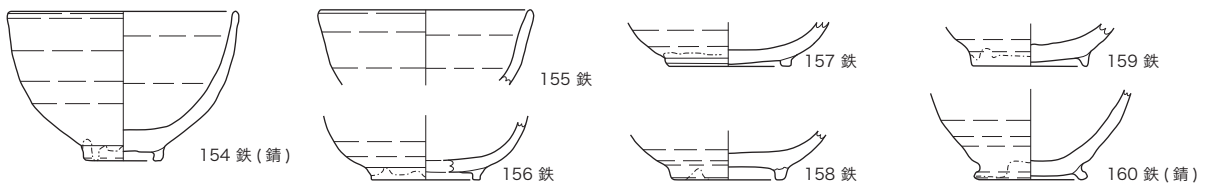
2類

尾張型第12型式に相当する無釉の山茶碗で、器高3.6cm、口径11.6cm、底径5.6cm前後の1類(167~187・190・194・195)、器高2.8cm、口径11.0cm、底径5.2cmの2類(188・189・191~193・196~198)がある。1類は灰白色で軟質、2類はやや硬質のものが多い。また、1類は南斜面、2類は東斜面に集中して出土している。

南斜面 007NR・480NR (137~148) 東斜面 330SU・380SU (149・150) その他 (151~153)



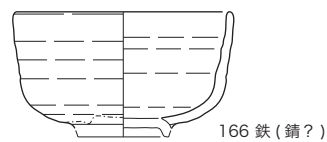
東斜面 330SU・380SU (154) 南斜面 007NR・480NR (155~157) その他 (158~160)



東斜面 330SU・380SU (161・165) 南斜面 007NR・480NR (162・164) その他 (163)

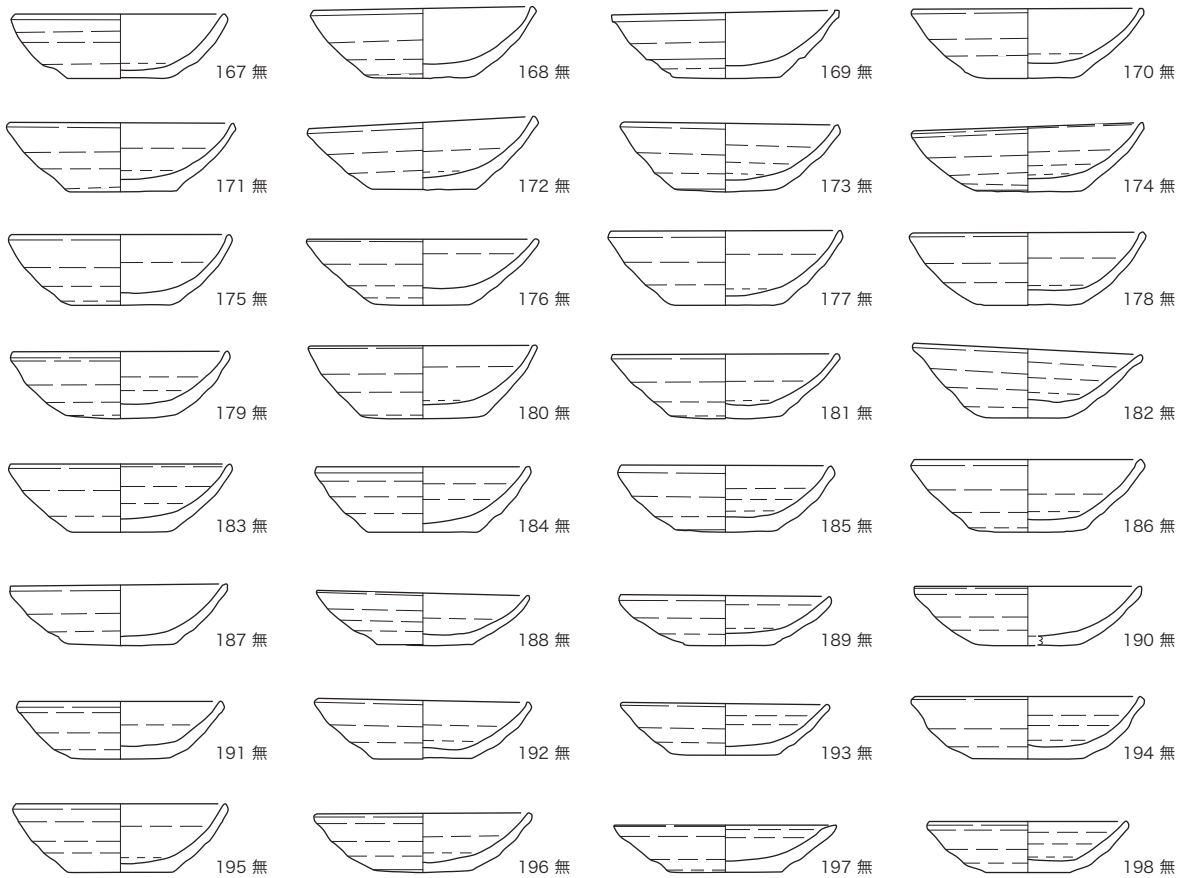


南斜面 007NR・480NR (166)

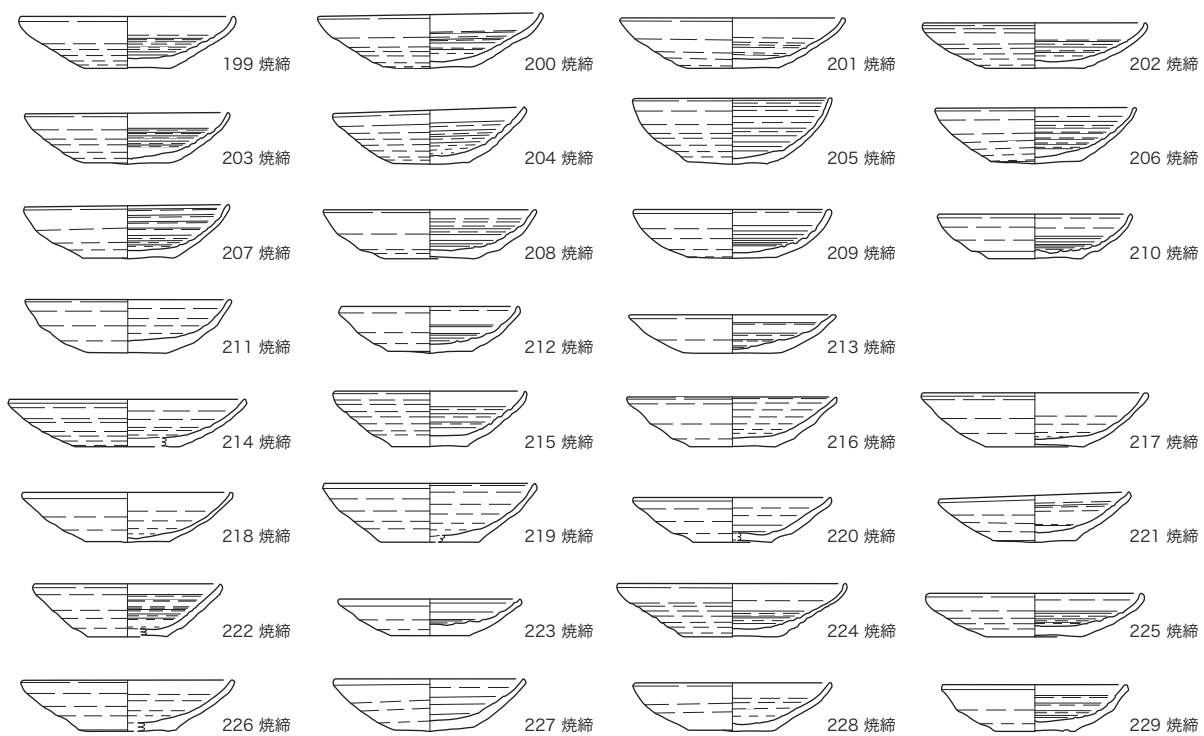


第55図 丸碗・平碗・その他碗類 (1:4)

南斜面 007NR・480NR (167~190) 東斜面 330SU・380SU (191~198)



南斜面 480NR (199~213) 東斜面 330SU・380SU (214~221) 南斜面 007NR (222・223) その他 (224~229)



0 20cm

第56図 山茶碗・灯明皿 (1:4)

皿類

灯明皿（199～229）

無釉で、内面に多条沈線がめぐる 1 類（199～206・214～216・222・224～227）、同心円状の小突線がめぐる 2 類（207～213・217～221・223・228・229）がある（第 56 図）。1 類は器高 2.7cm、口径 10.9cm、底径 4.6cm 前後、2 類は器高 2.6cm、口径 9.8cm、底径 5.0cm 前後のものが多い。

無釉

1 類

2 類

緑釉小皿（230～237）

糸切痕未調整で、口縁部の内外面に灰釉を施すもの（230～234）と鉄釉を施すもの（235・236）がある（第 57 図）。器高 2.6cm、口径 9.8cm、底径 5.0cm 前後のものが多い。内面全面に鉄釉を施し、底部外面周辺を露胎とする糸切り痕未調整の小皿（237）も緑釉小皿に含めた。

灰釉

鉄釉

緑釉挟み皿（238～269）

糸切痕未調整で、口縁部の内外面に施釉する（第 57 図）。体部外面にピン痕があるものが多く、挟み皿として使用されたことが分かる。また、見込みに輪ドチ（の痕跡）が残るものがある（240・241・263）。器形と法量からは、器高 2.4cm、口径 11.5cm、底径 5.4cm 前後とやや小さく、器壁が均一に薄い 1 類（238～241・258～264・268）、器高 2.4cm、口径 12.8cm、底径 5.8cm 前後で、口径に対して器高が低い 2 類（242～245・265・269）、器高 2.9cm、口径 12.2cm、底径 5.8cm 前後とやや大きく、底部が厚い 3 類（246～257・266・267）に大別される。

ピン痕

輪ドチ（の痕跡）

1 類

2 類

3 類

腰折皿（270～300）

削り出し輪高台で、口縁部の内外面に施釉する（第 57 図）。鉄釉を施す 296 を除いて、いずれも灰釉を施す。全体に器壁が薄く口縁部が外反するものと、厚手で口縁部が外折するものがある。法量からは、器高 2.5cm、口径 10.4cm、底径 5.0cm 前後のやや小さい 1 類（270～292）、器高 2.5cm、口径 11.8cm、底径 5.8cm 前後のやや大きい 2 類（294・295・297・299）、器高 2.0cm、口径 11.4cm、底径 5.5cm 前後で、口径に対して器高が低い 3 類（293・298）に大別され、その他、全体に厚手で大振りな 4 類（300）がある。鉄釉を施した 296 は全体に器壁が薄く体部下位に丸みをもつ。器高 2.2cm、口径 11.0cm、底径 4.7cm で、口径に対して器高がやや低い。体部外面にピン痕があるもの、底部内面に輪ドチ（小環）、体部外面に輪ドチ（大環）を挟むもの、底部内面、高台にトチンを 3、4 個挟むものが多い、挟み皿として使用されていたことが分かる。

灰釉

1 類

2 類

3 類

4 類

鉄釉

ピン痕

輪ドチ

端反皿（301～466）

付高台で口縁部先端付近が外反する（第 58～60・62 図）。高台周辺を露胎とする 338・434 を除いて内外面全面に灰釉を施すが、多くは灰釉が定着しなかったか、輪ドチが釉着した焼成不良品である。匣鉢詰めには 303、307 のように無釉の挟み皿を使用するが、305 は腰折皿、438 は緑釉小皿を挟み皿として使用している。底部内面には印花文を押印するものが多い（360～419・442～450・462～466）。意匠は菊花 8 弁（360～380・406・442～446・462～464）、菊花 10 弁（381～383・407）、菊花 12 弁（384～391）、菊花 16 弁（392～398・447・448・465）、重菊（399・402・449）、梅 4 弁（450）、梅 8 弁（408～410）、片喰（411）、丸菱（412）、花菱（413～415）、葉（416

灰釉

焼成不良品

匣鉢詰め

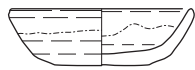
印花文

菊花

梅

片喰など

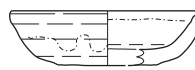
東斜面 330SU・380SU (230~232・235・236) その他 (233・234・237)



230 灰



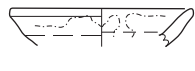
231 灰



232 灰



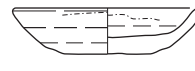
233 灰



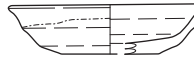
234 灰



235 鉄

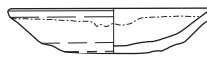


236 鉄

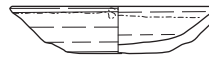


237 鉄

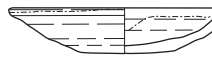
南斜面 007NR・480NR (238~257) 東斜面 330SU・380SU (258~267) その他 (268・269)



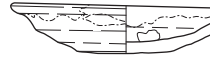
238 灰



239 灰



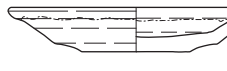
240 灰



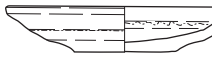
241 灰



242 灰



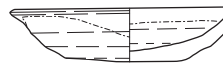
243 灰



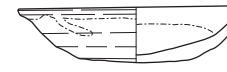
244 灰



245 灰



246 灰



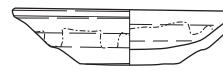
247 灰



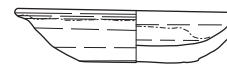
248 灰



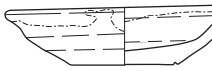
249 灰



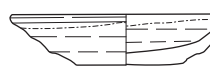
250 灰



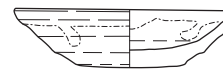
251 灰



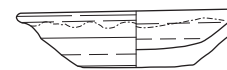
252 灰



253 灰



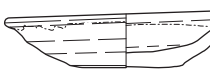
254 灰



255 灰



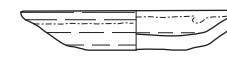
256 灰



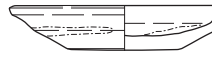
257 灰



258 灰



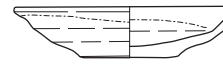
259 灰



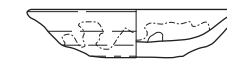
260 灰



261 灰



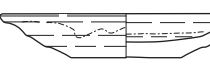
262 灰



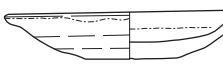
263 灰



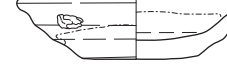
264 灰



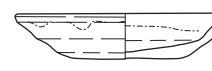
265 灰



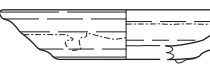
266 灰



267 灰

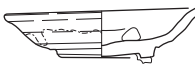


268 灰

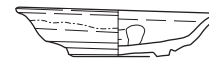


269 灰

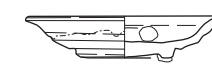
南斜面 007NR・480NR (270~296) 東斜面 330SU・380SU (297・298) その他 (299・300)



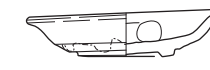
270 灰



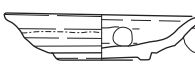
271 灰



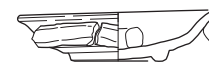
272 灰



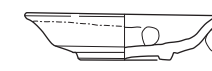
273 灰



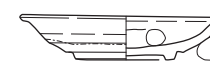
274 灰



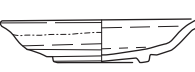
275 灰



276 灰



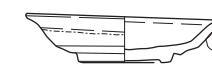
277 灰



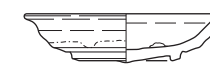
278 灰



279 灰



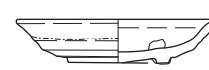
280 灰



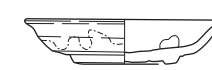
281 灰



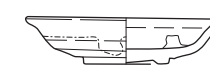
282 灰



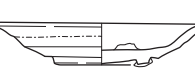
283 灰



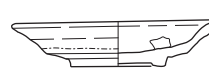
284 灰



285 灰



286 灰



287 灰



288 灰



289 灰



290 灰



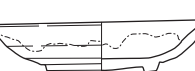
291 灰



292 灰



293 灰



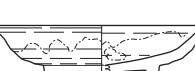
294 灰



295 灰



296 鉄



297 灰



298 灰



299 灰

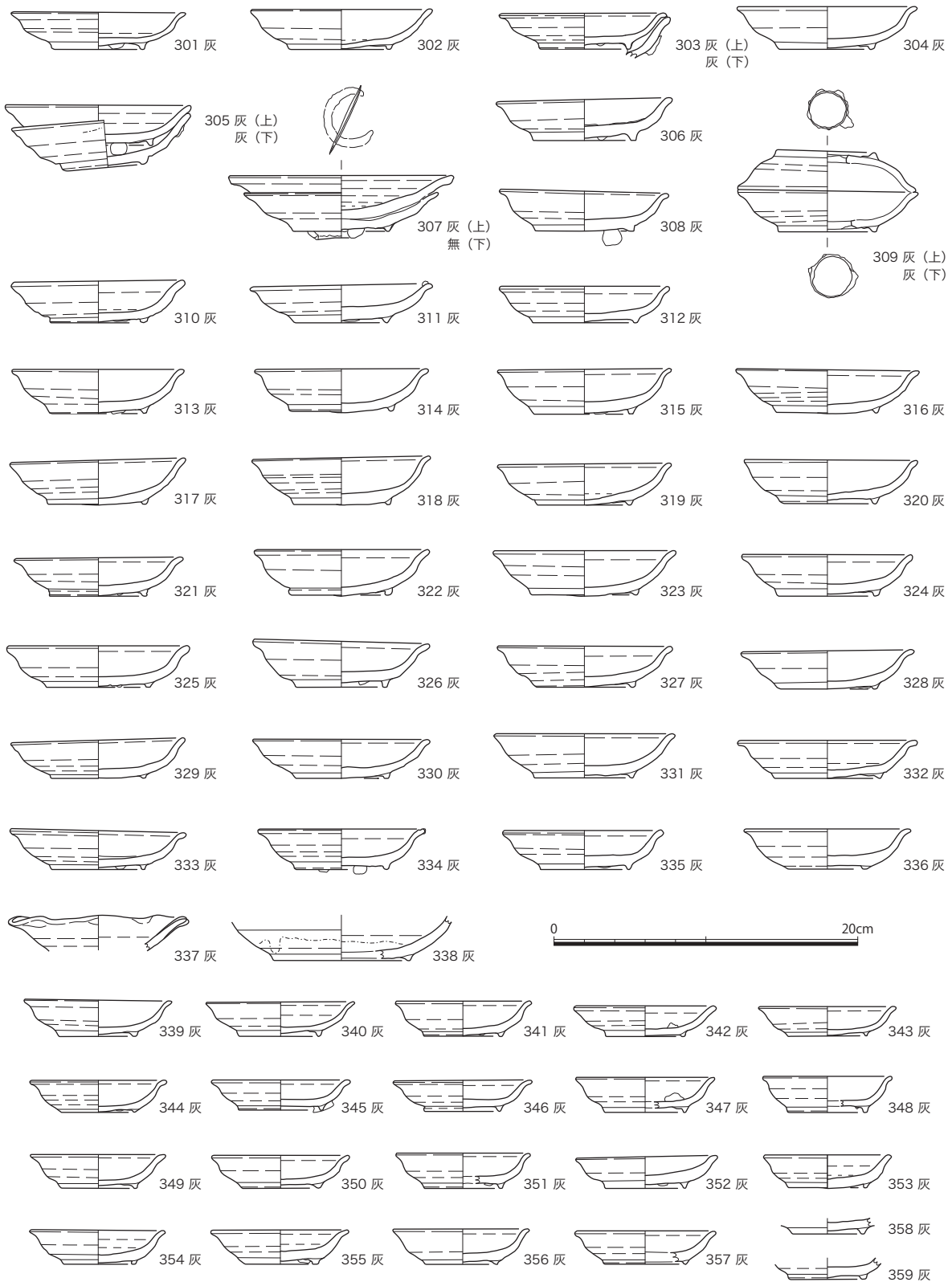


300 灰

0 20cm

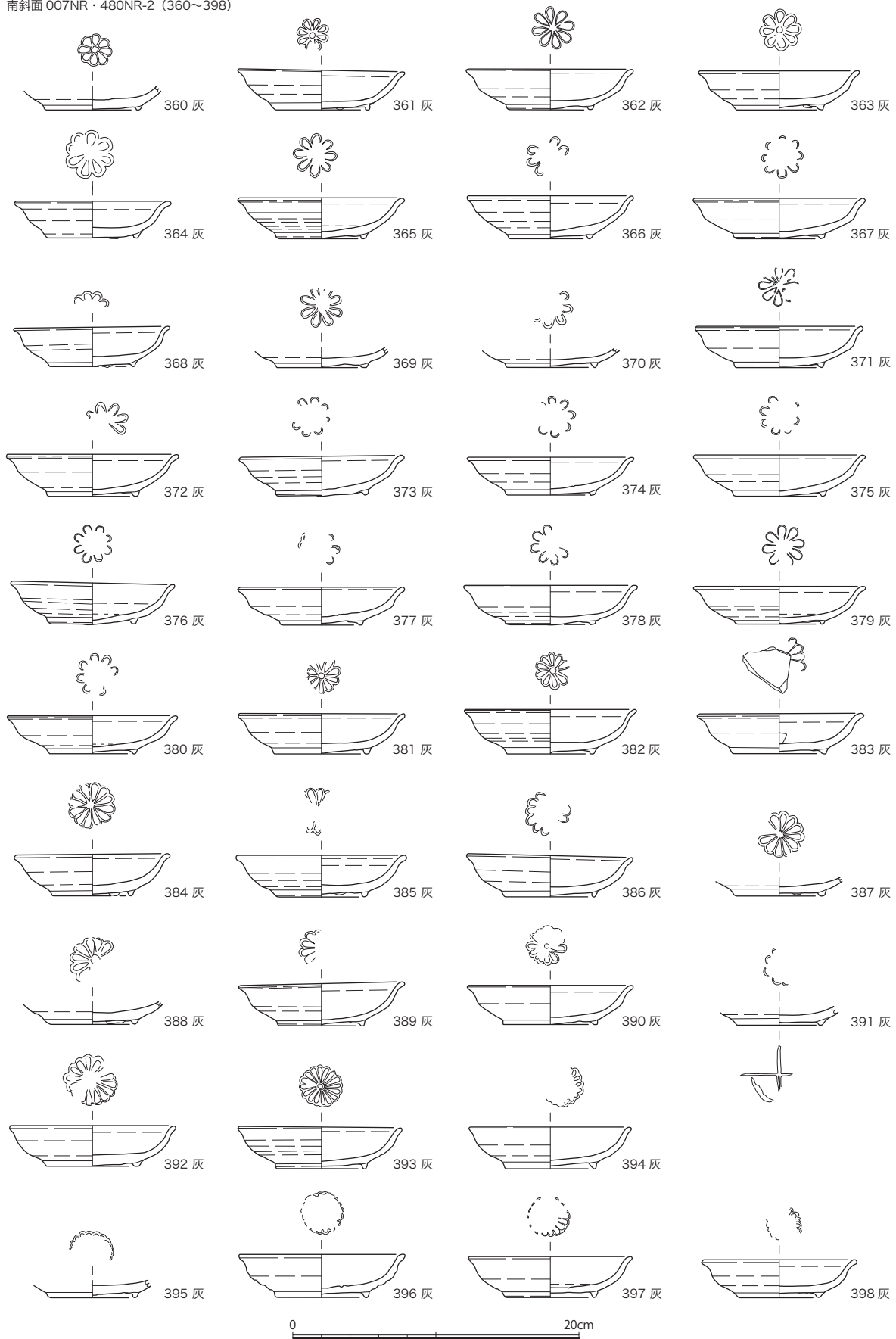
第57図 縁釉小皿・縁釉挟み皿・腰折皿 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-1 (301~359)



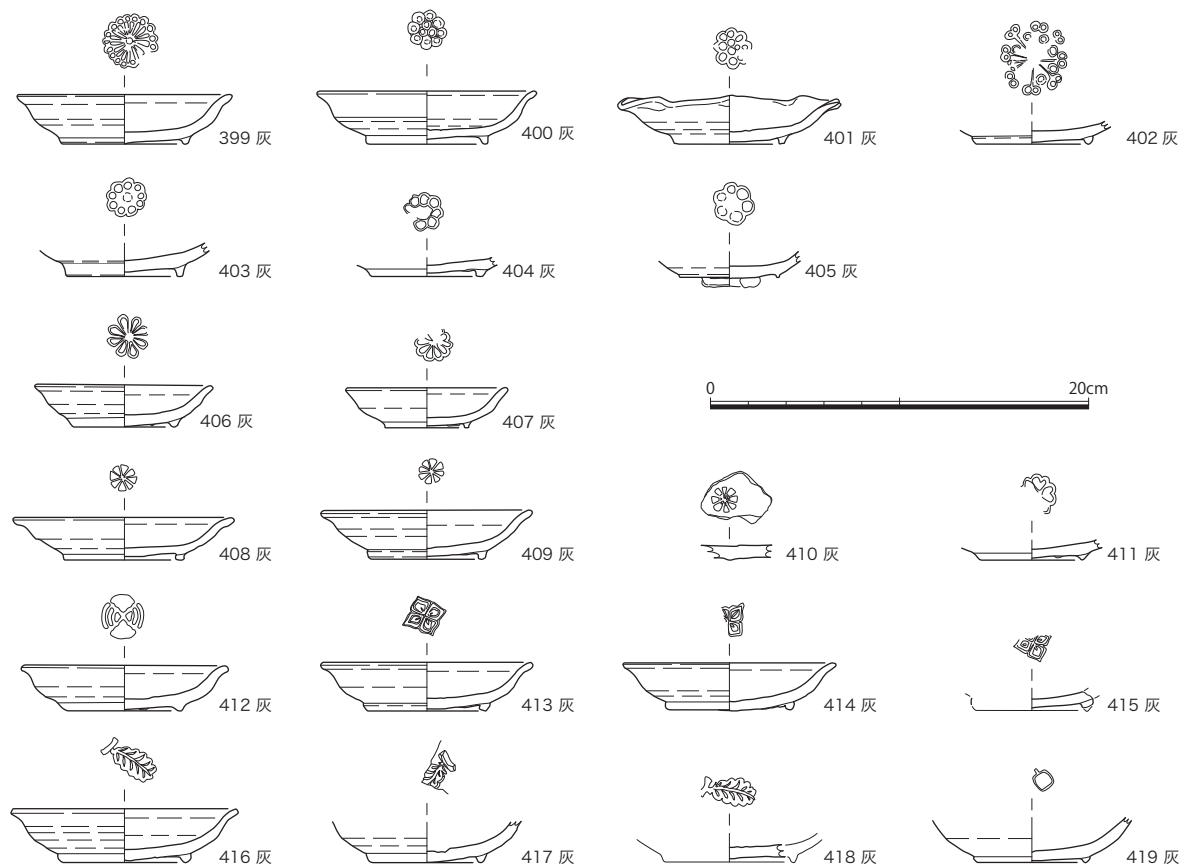
第58図 端反皿1 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-2 (360~398)

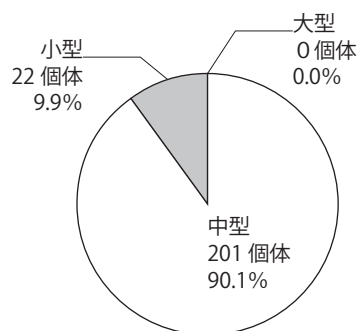


第59図 端反皿 2 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-3 (399~419)



第60図 端反皿3 (1:4)



第61図 端反皿の形式構成

～418)、糸巻 (419) などが認められる。

法量からは、器高 2.8cm、口径 11.4cm、高台径 6.2cm 前後（口径 10cm 以上）の中型 (301 ～ 337・360 ～ 405・408 ～ 434・443 ～ 459・462 ～ 465)、器高 2.2cm、口径 8.7cm、高台径 5.1cm 前後（口径 10cm 以下）の小型 (339 ～ 359・406・407・435 ～ 442・460・466) に明瞭に区分される。ごくわずかに高台径 9.0cm 前後の大型 (338・461) もあるが、明確ではない（丸皿の可能性もある）。なお、

338 は底部内面の釉が拭い取られる。（最小）個体数による集計では、中型が 201 個体 (90.1%)、小型が 22 個体 (9.9%) で、両者の比率はおおよそ 9 : 1 である（第 61 図）。さらに器形からは、全体に器壁が薄く、体部下位に丸みをもつもの (301 ～ 304・339 ～ 349・420 ～ 423 など) と底部付近の器壁が厚いものに大別され、相対として前者が古相と考えられる。印花文を押印したものは前者の器形が多い。

その他、特殊な個体として、同形同大の端反皿 2 個体を口縁部合口の状態で釉着させ、上下の底部に焼成後穿孔を施したもの (309)、口縁部を輪花とする輪花皿 (337・401) がある。前者は類例がなく、用途も不明である。

中型

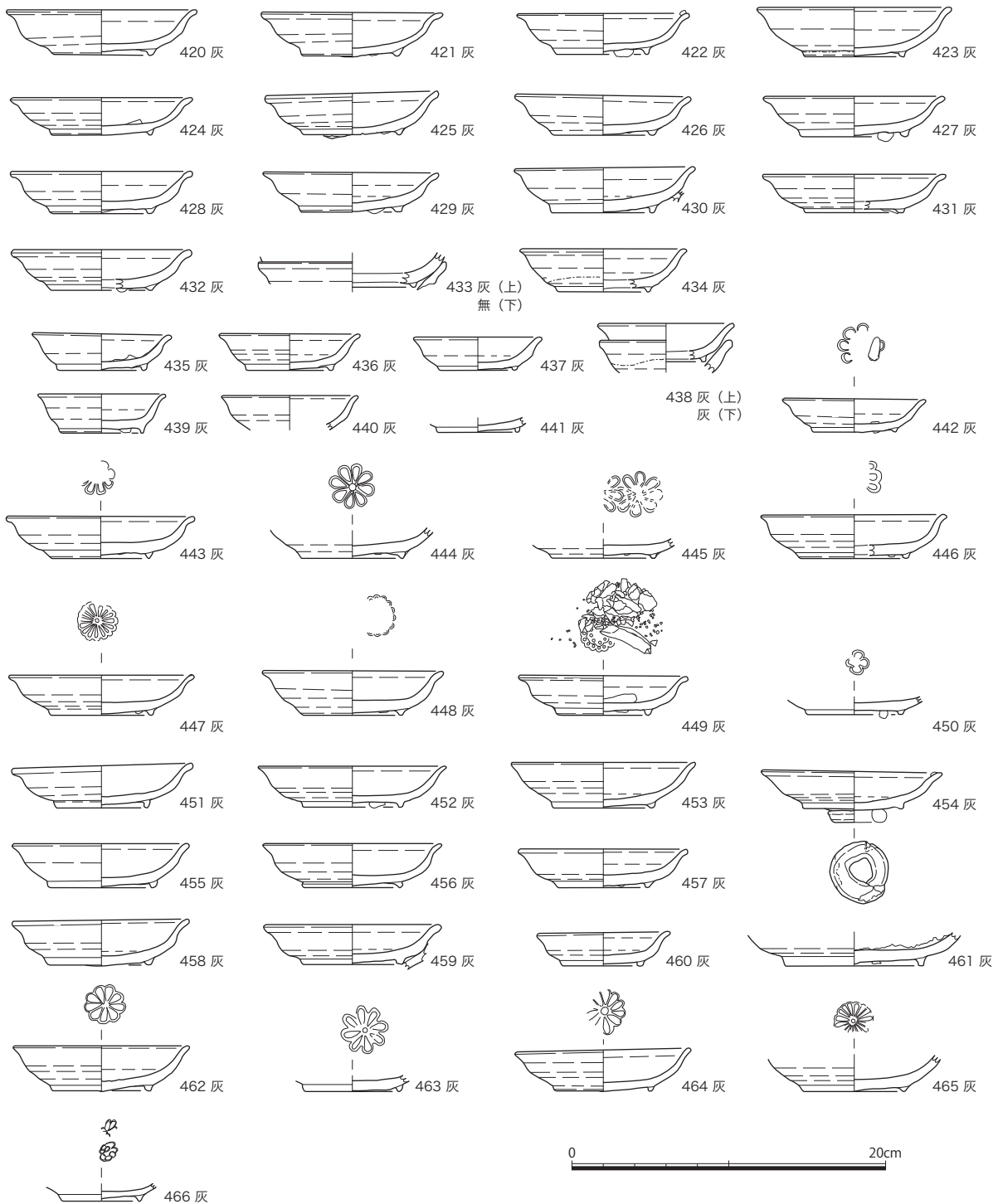
小型

大型

合口の釉着

輪花皿

東斜面 330SU・380SU (420~450) その他 (451~466)



第62図 端反皿4 (1:4)

丸皿（467～514）

灰釉、鉄釉を内外面全面に施す（第63図）。各々に付高台のA類と削り込み高台のB類の両者がある。

灰釉丸皿A類は法量から、器高2.4cm、口径9.0cm、高台径5.2cm前後（口径10cm以下）の小型（467～469）、器高2.4cm、口径11.5cm、高台径6.5cm前後（口径10cm以上）の中型（470～472）に明瞭に区分される。その他、器高1.3cm、口径7.2cm、高台径4.3cmのより小型で著しく扁平なもの（473）がある。小型は器壁が薄く、体部が直線的である。いずれも底部内面に印花文を押印する。意匠は菊花8弁（467）、菊花16弁（468）、半菊葉立花（469）などがある。中型は器壁がやや厚く、体部に丸みをもつ。470の体部内面には丸ノミ状工具による刻文（ソギ）が入れられている。刻文（ソギ）が入れられた灰釉丸皿は9点（接合前破片数）で、灰釉丸皿36点中の25.0%を占める。

灰釉丸皿B類は法量から、器高1.8cm、口径9.2cm、高台径5.2cm前後（口径10cm以下）の小型（474）、高台径6.0cm前後の中型（475・476）に区分される。その他、器高1.5cm、口径5.4cm、高台径3.2cmのいわゆる豆皿（477）がある。477の底部内面には印花文を押印する。

鉄釉丸皿A類は法量から、器高2.2cm、口径8.6cm、高台径5.0cm前後（口径10cm以下）の小型（478～483・498・499・509）、器高2.6cm、口径11.6cm、高台径6.1cm前後（口径10cm以上）の中型（484～491・500～504）、器高4.5cm、口径13.4cm、高台径6.8cm前後（口径13cm以上）の大型（492・493）に明瞭に区分される。小型は器壁が薄く、体部が直線的で、高台先端が尖る。482・483は底部内面に印花文（菊花8弁）を押印する。中型は全体に器壁が薄く、体部に丸みをもつもの（484～486・500～502）と、器壁がやや厚く体部中位に稜があるもの（488・489・503・504）の両者がある。高台は低い断面三角形形状を呈する。485・486は内面のトチンを含めて鉄釉を施すもので、類例がない。487・502は底部内面に印花文（菊花8弁）を押印する。その他、器高4.5cm、口径12.0cm、高台径6.4cm前後で高い高台を付すもの（494・495）がある。体部は丸みをもつ。高台内を露胎とするが、鉄釉丸皿A類に含めた。

鉄釉丸皿B類は法量から、器高2.3cm、口径11.4cm、高台径7.0cm前後（口径10cm以上）の中型（496・506～508・511～514）、器高2.3cm、口径9.7cm、高台径5.4cm前後（口径10cm以下）の小型（497・505）に区分される。器形からは、体部中位に稜があるもの（498・512）と口縁部が強く外反するもの（511）に区分される。

なお、端反皿、丸皿等に押印された印花文については、正射画像（オルソ画像）を作成し、付属のCDに画像データを添付した。

稜皿（515～522）

高台内の削り込みが浅い削り込み高台で、体部下位が直線的に立ち上がり、口縁部が外反する皿を稜皿とした（第63図）。内外面全面に鉄釉を施すが（515～520）、高台周辺を露胎とするもの（521・522）も含めた。法量からは、器高2.2cm、口径10.0cm、高台径5.6cm前後のもの（515～517・519）、器高2.7cm、口径10.6cm、高台径5.9cm前後のやや大振りなもの（518・520）に区分される。大窯第2段階に相当し、全体に器壁が薄い515・520が古相と考えられる。

A類

B類

灰釉丸皿A類

小型

中型

印花文

刻文（ソギ）

灰釉丸皿B類

小型・中型・豆皿

鉄釉丸皿A類

小型

中型

大型

印花文

トチンの施釉

印花文

高い高台

鉄釉丸皿B類

中型

小型

正射画像の作成

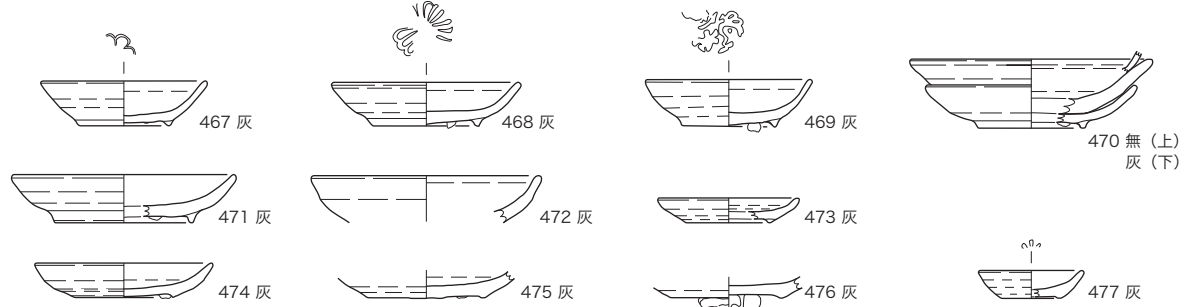
削り込み高台

鉄釉

大窯第2段階

南斜面 007NR・480NR (467~474・477)

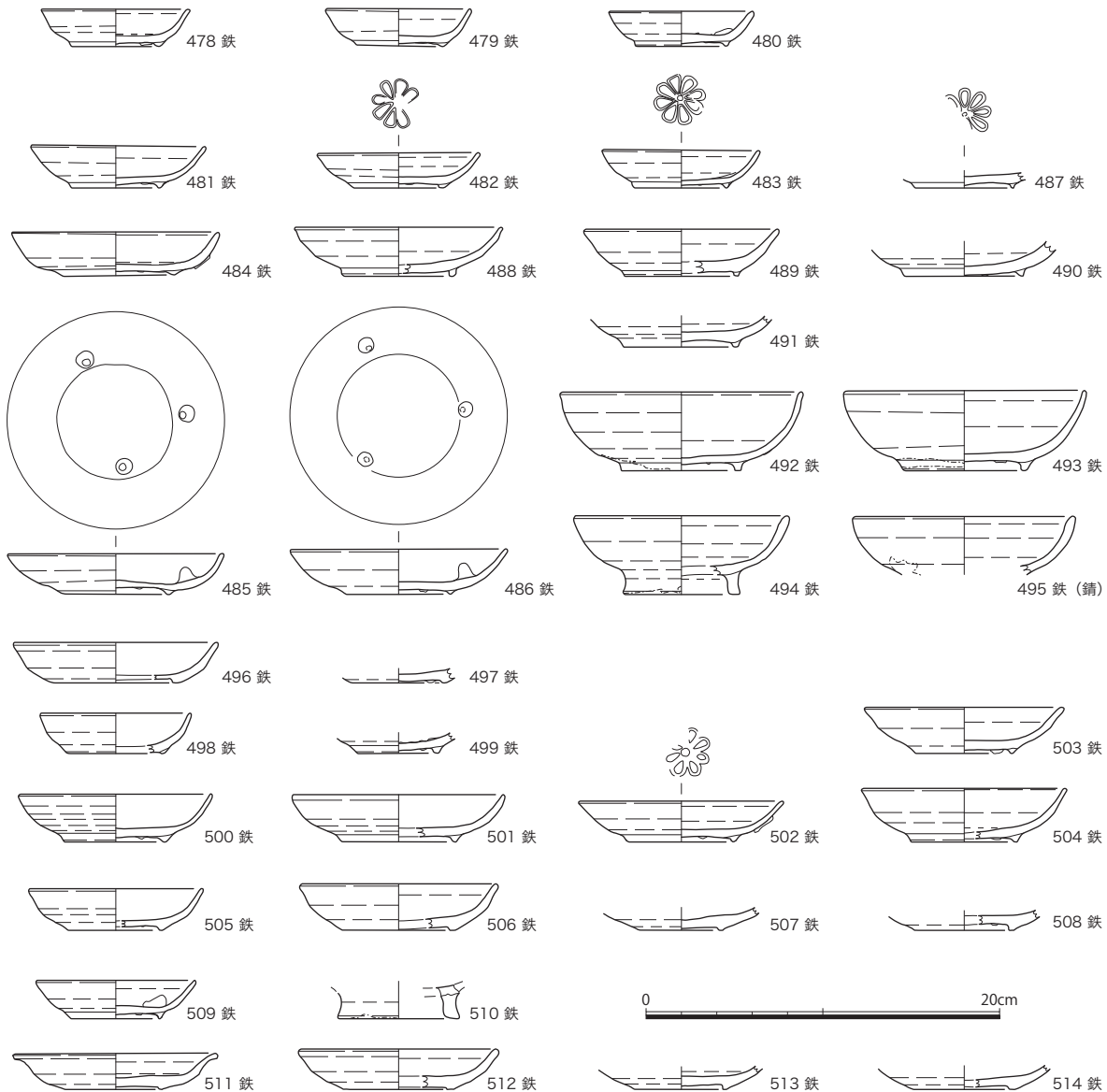
東斜面 330SU・380SU (475・476)



南斜面 007NR・480NR (478~497)

東斜面 330SU・380SU (498~508)

その他 (509~514)



その他 (515・521)

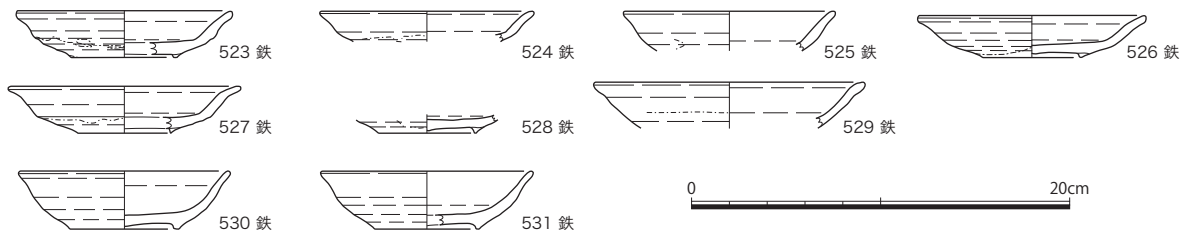
南斜面 007NR・480NR (516~519・522)

東斜面 330SU・380SU (520)

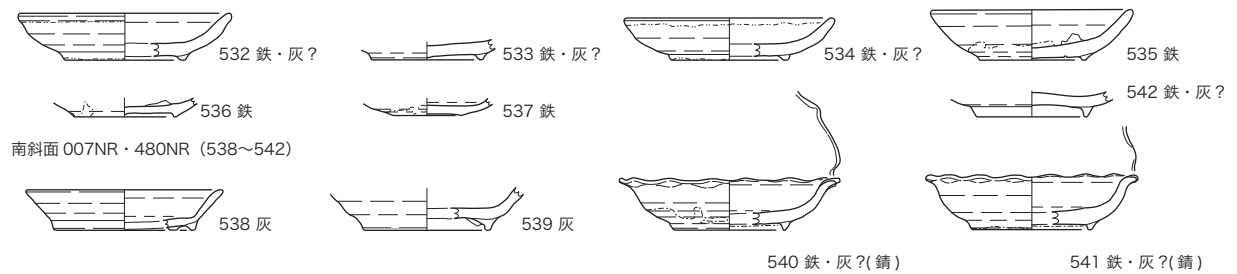


第63図 丸皿・稜皿 (1:4)

南斜面 007NR・480NR (523～529) その他 (530) 東斜面 330SU・380SU (531)



南斜面 007NR・480NR (532・533・536・537) 東斜面 330SU・380SU (534) その他 (535)



第64図 その他皿類 (1:4)

その他皿類 (523～542)

その他、分類上、不確定な要素を含む皿がある (第 64 図)。

523～531 は口縁部が外反し、端反皿あるいは稜皿に類似する鉄釉を施す皿で、ここでは端反皿としたが、灰釉を施す大多数の端反皿とは別個に扱った。523～529 は(高台内の削り込みが浅い削り込み高台にも類似する)低い付高台で、高台周辺を露胎とする。器高 2.4cm、口径 11.5cm、高台径 5.2cm 前後のもの (523～528) と口径 14.0cm 前後のやや大振りなもの (529) がある。530・531 は削り込み高台で、内外面全面に鉄釉を施す。器高 3.1cm、口径 11.0cm、高台径 5.7cm 前後で、法量からは稜皿や他の端反皿とは明確に区別される。

端反皿か稜皿

532～534 は付高台の丸皿で、光沢がない褐色の鉄釉?を内外面全面に施し、灰黄色の灰釉?を流し掛けする。全体に器壁がやや厚く、体部は丸みをもち、断面三角形の低い高台を付す。535 は高台周辺を露胎とする鉄釉丸皿で、内面も部分的に露胎とする。(高台内の削り込みが浅い削り込み高台にも類似する)低い高台を付す。法量は前者が器高 2.4cm、口径 10.9cm、高台径 6.2cm 前後、後者が器高 2.7cm、口径 10.5cm、高台径 5.6cm で、丸皿A類の小型と中型の中間的な法量を示す。536 は削り込み高台の鉄釉丸皿であるが、高台周辺を露胎とする。537 は底部を削り込み無高台とする鉄釉丸皿とした。器壁が薄く、精緻な作りである。

丸皿

538・539 は体部が外反する器形から稜花皿(反り皿)とした。内外面全面に灰釉を施す。

稜花皿(反り皿)

540・541 は口縁部先端を波状に切り出した皿で、稜花皿とした。高台周辺に錆釉、内外面に鉄釉を施し、灰釉を流し掛け?する。540 は器壁が薄く、541 はやや厚い。いずれも断面三角形の高台を付し、底部内面にごく低い突線がめぐる。542 は高台内を露胎とするが、釉調から鉄釉稜花皿に含めた。これらの鉄釉稜花皿は、釉調や底部内面の突線から大窯期後半?

鉄釉稜花皿

大窯期後半?

鉢・盤類

擂鉢 (543～602)

I 類

II 類

I A 類

I B 類

形式構成

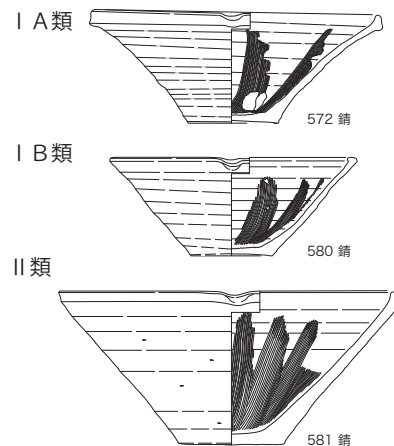
施釉・焼成

使用痕跡

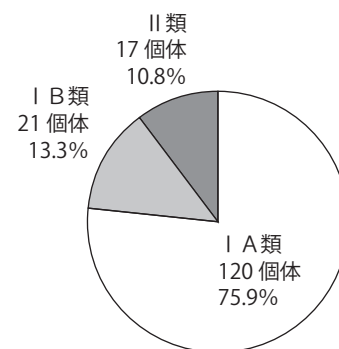
法量

内面に櫛目を施し、口縁部の一方に片口を付す擂鉢 (第 71 ～ 89 図) は、糸切痕未調整の I 類 (543 ～ 580・586 ～ 598・600)、体部から底部の外面に回転ヘラケズリを施す II 類 (581 ～ 585・599・601・602) に大別される。さらに I 類は体部内面の櫛目の間隔が広い I A 類 (543 ～ 576・586 ～ 597・600) とやや密な I B 類 (577 ～ 580・598) に区分される (第 65 図)。II 類は 602 を除いて体部内面の櫛目がかかなり密に施される。また、550・579・602 は体部内面の上位に横方向の櫛目を重ねている。(最小) 個体数による集計では、I A 類が 120 個体 (75.9%)、I B 類が 21 個体 (13.3%)、II 類が 17 個体 (10.8%) で、I 類と II 類の比率はおよそ 9 : 1 である (第 66 図)。いずれも内外面全面に錆釉を施し、団子トチを 4、5 個挟んで重ね焼きされている。なお、I B 類の 579 と II 類の 583 などに使用痕跡が認められるが、その他の多くはほとんど未使用の状態である。

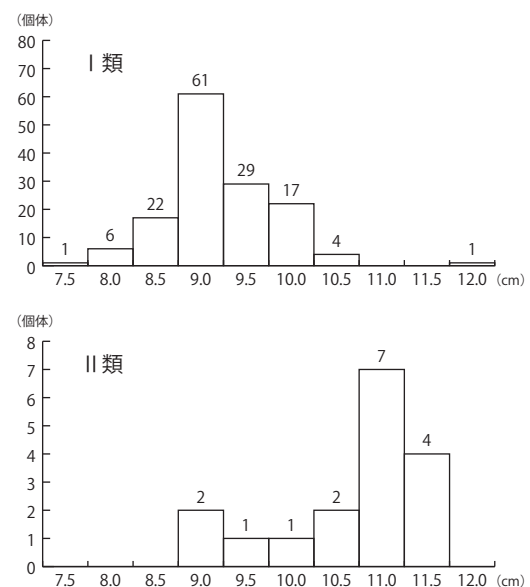
図化した個体の法量は、I 類が器高 8.8 ～ 12.5cm (平均 11.2cm)、口径 21.2 ～ 31.5cm (平均 28.3cm)、底径 7.8cm ～ 10.2cm (平均 9.1cm)、II 類が器高 14.7 ～ 16.4cm (平均 15.6cm)、口径 35.8 ～ 41.8cm (平均 38.2cm)、底径 9.2 ～ 11.6cm (平均 10.8cm) で、集計した個体の底径は、I 類の多くが底径 9 cm 前後である一方、II 類は底径 11cm 前後が多い (第 67 図)。つまり、両者は法量を異にする別形式として把握される。



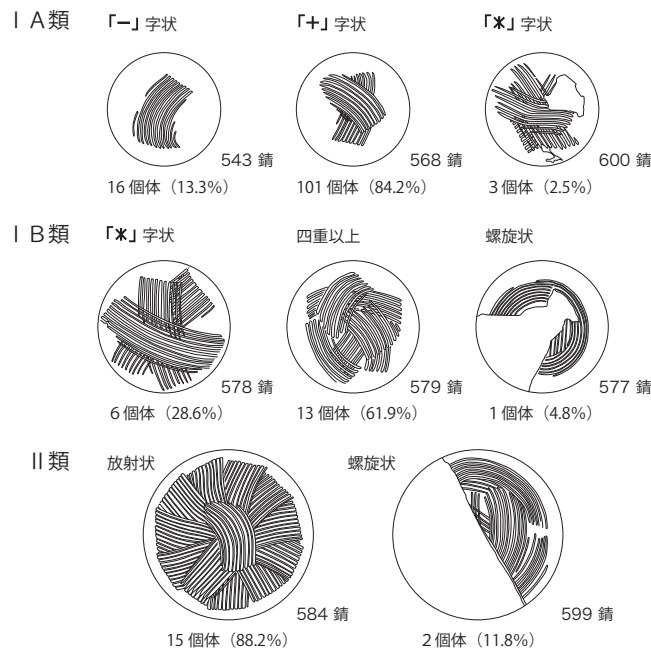
第65図 擂鉢の分類



第66図 擂鉢の形式構成



第67図 擂鉢の底径度数分布



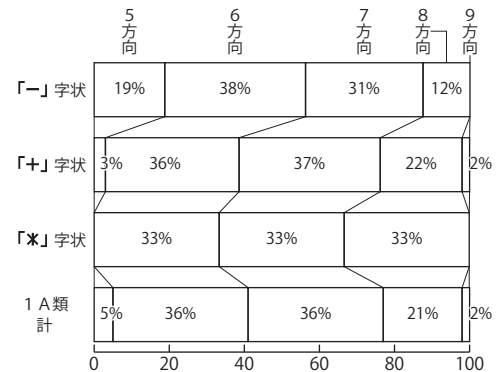
第68図 播鉢底部内面の櫛目の分類

Ⅰ A類の底部内面の櫛目は、「一」字状に施すもの(543～547)が16個体(13.3%)、「+」字状に施すもの(548・549・551～576・586～597)が101個体(84.2%)、「*」字状に施すもの(600)が3個体(2.5%)で、「+」字状に施すものが圧倒的に多い(第68図)。体部内面の櫛目は5方向から9方向までが認められ、5方向が6個体(5.0%)、6方向が43個体(36.7%)、7方向が44個体(36.7%)、8方向が25個体(20.8%)、9方向が2個体(1.7%)で、6方向か7方向が多い(第3表・第69図)。Ⅰ B類の底部内面の櫛目は「+」字状に施すものが1個体(4.8%)、「*」字状に施すもの(578)が6個体(28.6%)、四重以上に重ねるもの(579・580・598・602)が13個体(61.9%)、螺旋状に施すもの(577)が1個体(4.8%)で、四重以上に重ねるものが多い(第68図)。体部内面の櫛目は1個体(9方向)を除いて、いずれも10方向以上である。Ⅱ類の底部内面は放射状に充填されるものが多いが、螺旋状に充填するもの(599)が2個体(11.8%)ある(第68図)。

Ⅰ A類は口縁部の形状から、内側に緩やかに折り曲げられる1類(543・546～553・586・587・600)、断面三角形状で口縁端部に面をもつ2類(544・545・554～565・588～594)、断面三角形状で口縁端部下位がわずかに窪む3類(566～573・595・596)、縁帯を形成する4類(574・575・597)、縁帯を拡張する5類(576)に細分される(第70図)。口縁端部または縁帯の幅は1類が0.8～1.6cm(平均1.2cm)、2類が0.9～1.6cm(平均1.3cm)、3類が1.2～1.6cm(平均1.5cm)、4・5類が1.1～1.7cm(平均1.5cm)で、相対的に1・2類が古相で、3・4・5類が新相と考えられる。縁帯幅が1.7cmを計測する5類(576)のみ、大窯第2段階前半に対比される可能性があるが(大窯第2段階における播鉢Ⅰ類の縁帯幅は2.0cm前後とされる)、およそ1・2類が大窯第1段階前半、3・4・5類が大窯第1段階後半に対応する。また、底部内面に櫛目を「一」字状に施すもの、体部内面の櫛目が5方向のものは、口縁部形状が1・2類に対応することから(第4表)、これらは大窯第1段階前半を下限とする型式と考えられる。

第3表 播鉢Ⅰ A類の櫛目の相関

底部\体部	5方向	6方向	7方向	8方向	9方向	計
「一」字状	3	6	5	2	0	16
「+」字状	3	36	38	22	2	101
「*」字状	0	1	1	1	0	3
Ⅰ A類計	6	43	44	25	2	120



第69図 播鉢Ⅰ A類の櫛目の構成

Ⅰ A類内面の櫛目

Ⅰ B類内面の櫛目

Ⅱ類内面の櫛目

口縁部形状の分類

Ⅰ A類

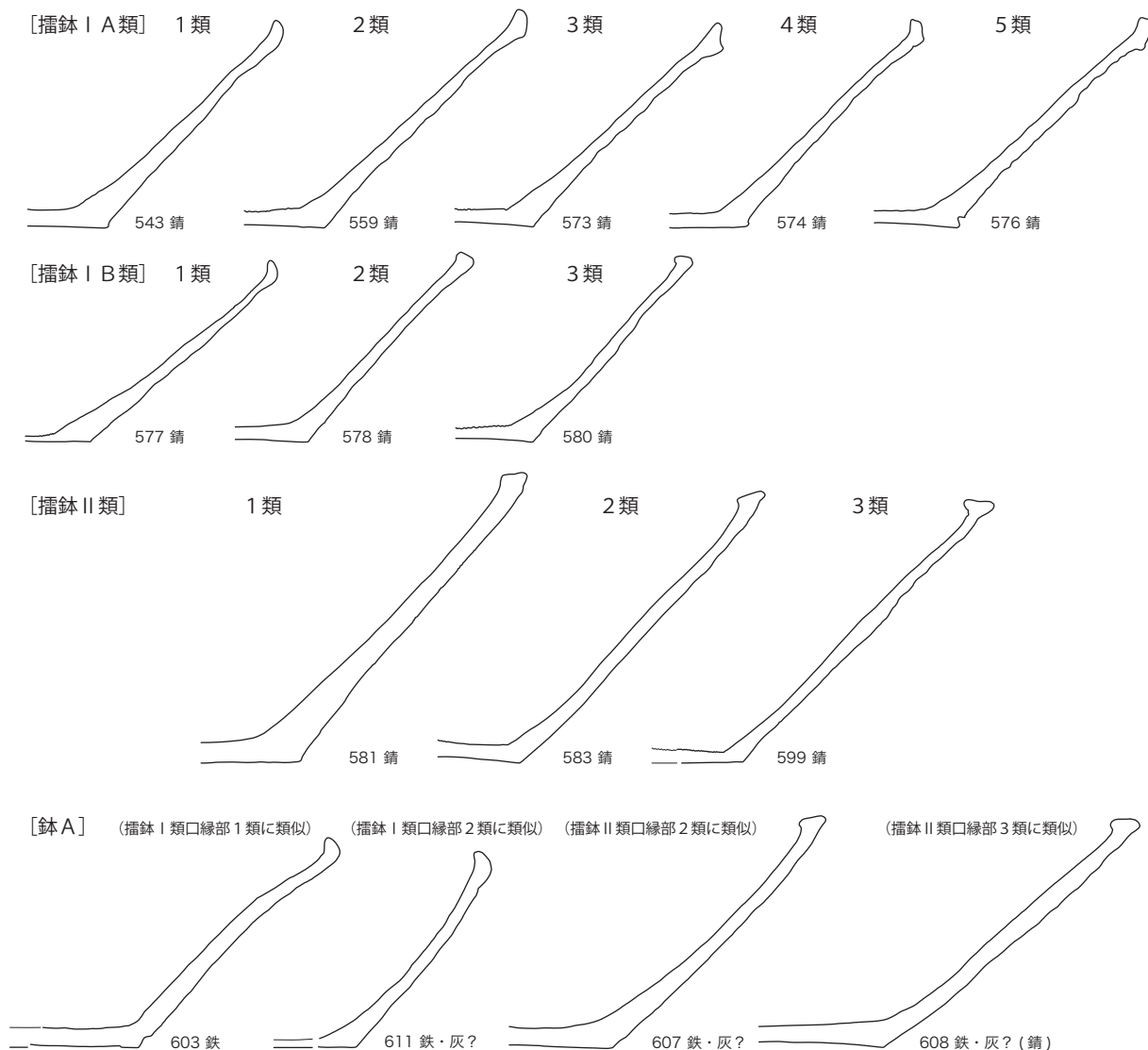
1類

2類

3類

4類

5類



第70図 鑢鉢の口縁部形状の分類 (1:4)

I B 類

1 類

2 類

3 類

I B 類は口縁部の形状から、内側に緩やかに折り曲げられる 1 類 (577)、断面三角形の 2 類 (578・579)、わずかに内側に折り返される 3 類 (580・583) に細分される (第 70 図)。1・2 類は I A 類の 1・2 類、3 類は II 類の口縁部にそれぞれ類似 (対応) する。口縁端部の幅は 1・2 類が 0.8～1.0cm (平均 0.9cm)、3 類が 1.0～1.1cm で、相対的に 1・2 類が古相、3 類が新相と考えられる。I A 類との対応からも、およそ 1・2 類が大窯第 1 段階前半、3 類が大窯第 1 段階後半に対応する。

II 類

1 類

2・3 類

鉢 A との関係

II 類は口縁部の形状から、口縁端部を拡張しない 1 類 (581)、内外に拡張する 2 類 (582～584・601)、拡張された面の上面が窪む 3 類 (585・599) に細分される (第 70 図)。2・3 類は後述する鉢 A (603～620) の口縁部形状に近く、法量や調整技法なども含めて鑢鉢 II 類と鉢 A が親和的な関係にあることを示す。口縁端部の幅は 1 類が 1.2cm、2 類が 1.4～1.8cm (平均 1.6cm) で、相対的に 1 類が古相、2 類が新相と考えられる。I B 類との対応から、大窯第 1 段階後半に II 類が派生 (分化) したと把握され、3 類 (585・599) は大窯第 2 段階前半に対応する可能性があるが、総体として大窯第 1 段階後半に対

応すると理解しておきたい。

櫛目の本数はⅠA類が8本から22本(120個体の平均16.0本)で16本前後が多い(第4表)。また、底部内面の櫛目を「一」字状に施すものは櫛目が8本から17本(16個体の平均14.1本)、「+」字状に施すものは10本から22本(101個体の平均16.3本)、「✱」字状に施すものは13本から20本(3個体の平均16.0本)で、18本以上は後二者に限られる。体部内面の櫛目を5方向に施すものは櫛目が11本から18本(6個体の平均14.5本)で、櫛目の本数が19本以上のものは6方向以上に施すものに限られる。およそ内面の櫛目の構成が古相を示す型式は櫛目の本数が少なく、新相を示す型式は多い傾向にある。一方、ⅠB類の櫛目の本数は8本から19本(21個体の平均14.2本)で15本前後が多く、Ⅱ類は8本から19本(17個体の平均13.3本)で14本前後が多い(第4表)。つまり、体部の内面の櫛目がより密に施されるものは、櫛目の本数がやや少ない傾向にある。

口縁部の形状との相関についても、やはり古相の1・2類は櫛目の本数が少なく、新相の3・4・5類は多い傾向が認められる(第4表)。

第4表 播鉢の櫛目の構成と本数との相関

—ⅠA類の口縁部形状と底部内面の櫛目との相関—

底部\口縁部	1類	2類	3類	4・5類	計	緑帯幅
「一」	2	3	0	0	5	1.0cm
「+」	5	19	11	4	39	1.4cm
「✱」	1	0	0	0	1	1.1cm
計	8	22	11	4	45	1.3cm

—ⅠA類の口縁部形状と体部内面の櫛目との相関—

方向\口縁部	1類	2類	3類	4・5類	計	緑帯幅
5方向	0	1	0	0	1	1.1cm
6方向	2	6	2	1	11	1.3cm
7方向	5	13	6	2	26	1.4cm
8方向	1	2	2	1	6	1.3cm
9方向	0	0	1	0	1	1.5cm
計	8	22	11	4	45	1.3cm

※「緑帯幅」は口縁端部幅(緑帯幅)の平均値

—ⅠA類の口縁部形状と櫛目の本数との相関—

本数\口縁部	1類	2類	3類	4・5類	計	緑帯幅
10本	1	0	0	0	1	1.3cm
11本	0	0	0	0	0	-
12本	1	1	0	0	2	1.4cm
13本	4	1	0	0	5	1.2cm
14本	0	1	1	0	2	1.4cm
15本	1	5	2	1	9	1.4cm
16本	2	6	3	1	12	1.2cm
17本	1	2	1	2	6	1.4cm
18本	0	2	1	0	3	1.4cm
19本	0	1	0	0	1	1.5cm
20本	1	1	0	0	2	1.3cm
21本	1	2	3	1	7	1.6cm
計	12	22	11	5	50	1.3cm
平均	14.9本	16.4本	17.3本	17.2本	16.3本	

—櫛目の本数と形式・ⅠA類底部内面の櫛目との相関—

本数\底部	ⅠA類			ⅠB類	Ⅱ類	計
	「一」	「+」	「✱」			
8本	1	0	0	1	1	3
9本	0	0	0	0	1	1
10本	0	1	0	1	1	3
11本	3	2	0	2	1	8
12本	0	3	0	0	1	4
13本	1	10	1	4	3	19
14本	3	9	0	2	4	18
15本	1	12	1	6	1	21
16本	5	22	0	3	3	33
17本	2	13	0	2	0	17
18本	0	7	0	0	0	7
19本	0	6	0	0	1	7
20本	0	3	1	0	0	4
21本	0	11	0	0	0	11
22本	0	2	0	0	0	2
計	16	101	3	21	17	158
平均	14.1本	16.3本	16.0本	14.2本	13.3本	15.5本

—櫛目の本数とⅠA類の体部内面の櫛目の方向との相関—

本数\体部	5方向	6方向	7方向	8方向	9方向	計
8本	0	1	0	0	0	1
9本	0	0	0	0	0	0
10本	0	0	1	0	0	1
11本	1	2	0	2	0	5
12本	0	0	1	2	0	3
13本	0	7	2	3	0	12
14本	3	1	5	2	1	12
15本	0	9	5	0	0	14
16本	1	7	13	5	1	27
17本	0	5	7	3	0	15
18本	1	3	2	1	0	7
19本	0	2	2	2	0	6
20本	0	3	1	0	0	4
21本	0	3	5	3	0	11
22本	0	0	0	2	0	2
計	6	43	44	25	2	120
平均	14.5本	15.9本	16.3本	16.3本	15.0本	16.0本

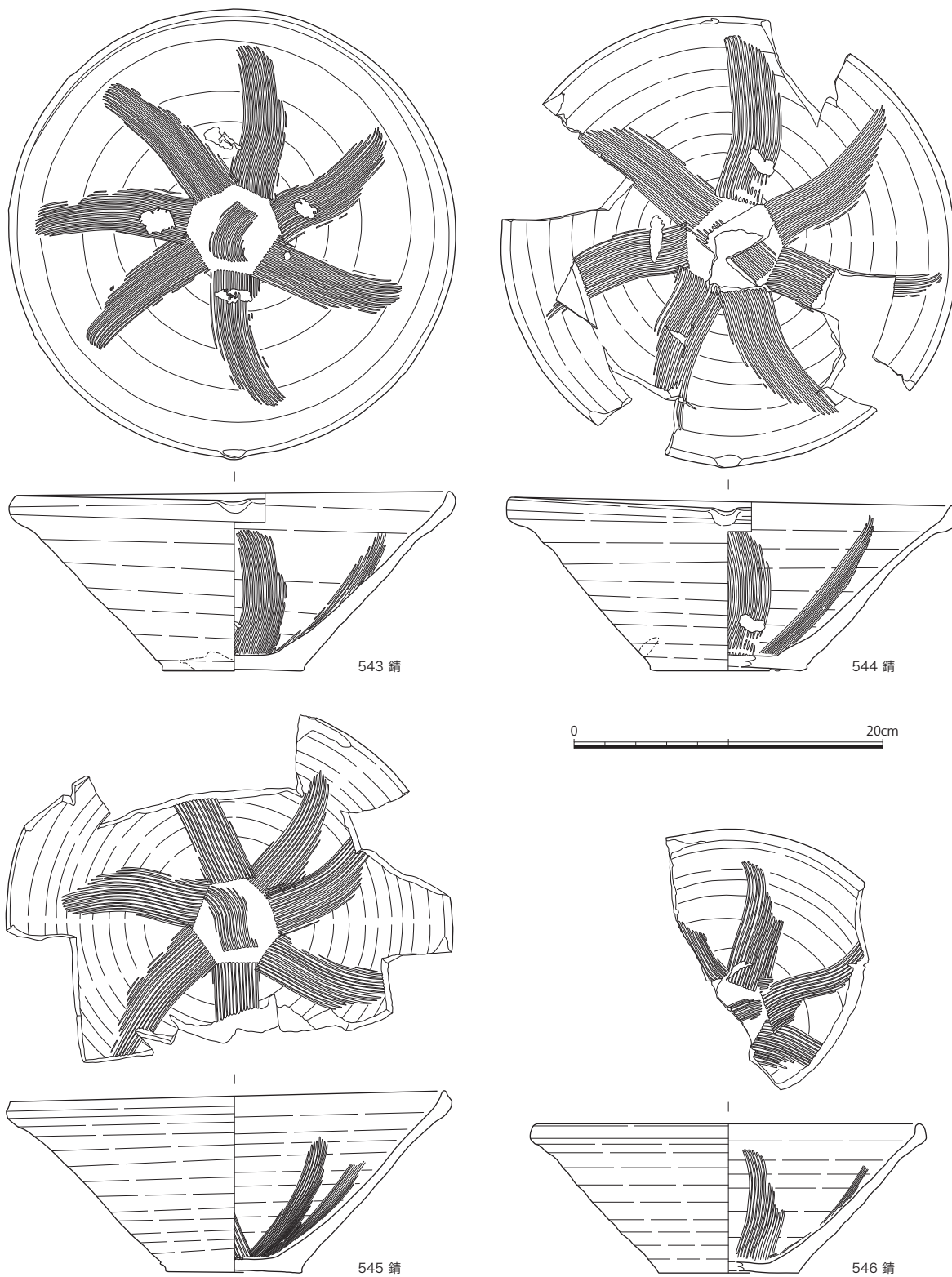
櫛目の本数

底部内面の櫛目

体部内面の櫛目

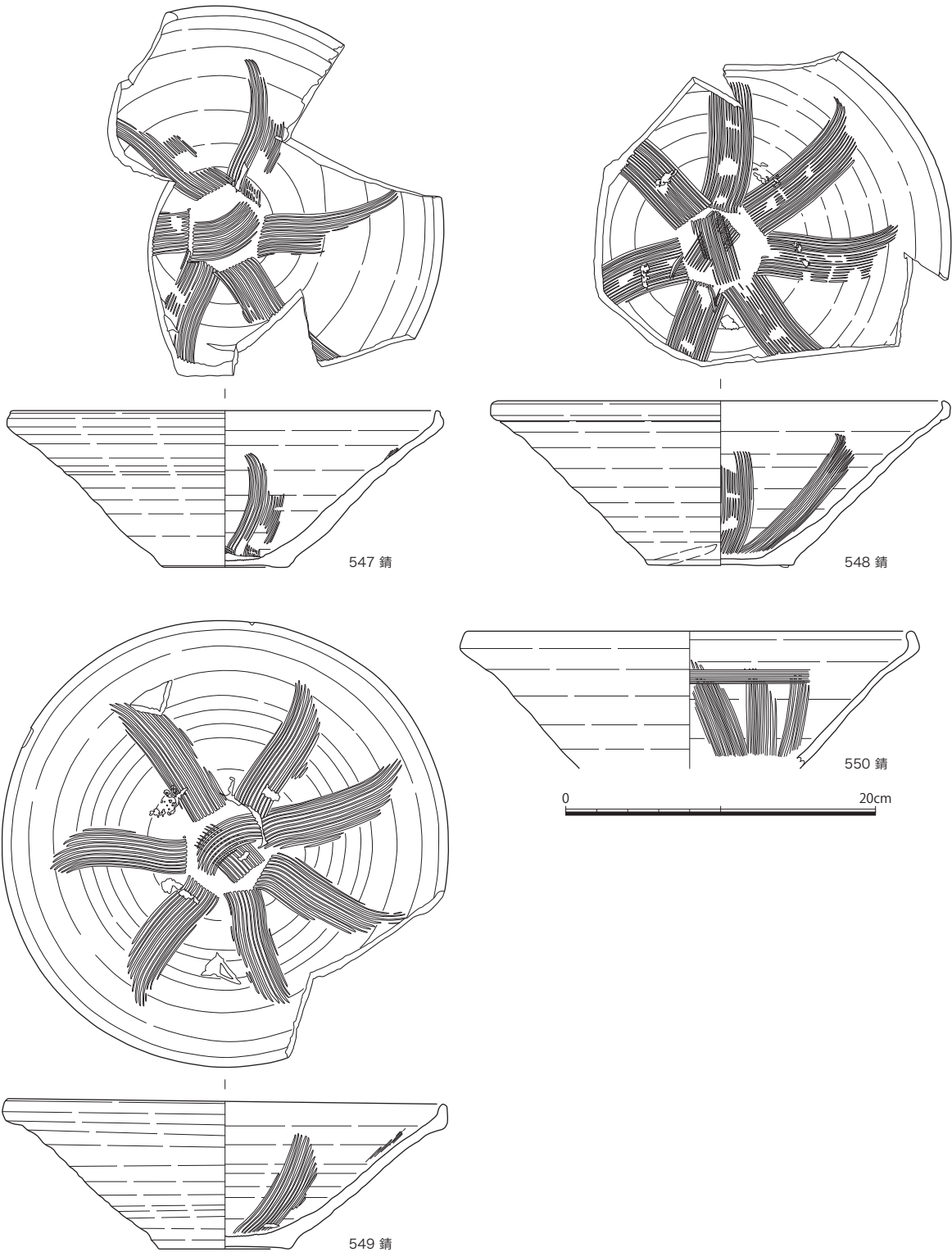
口縁部の形状

南斜面 007NR・480NR-1 (543~546)



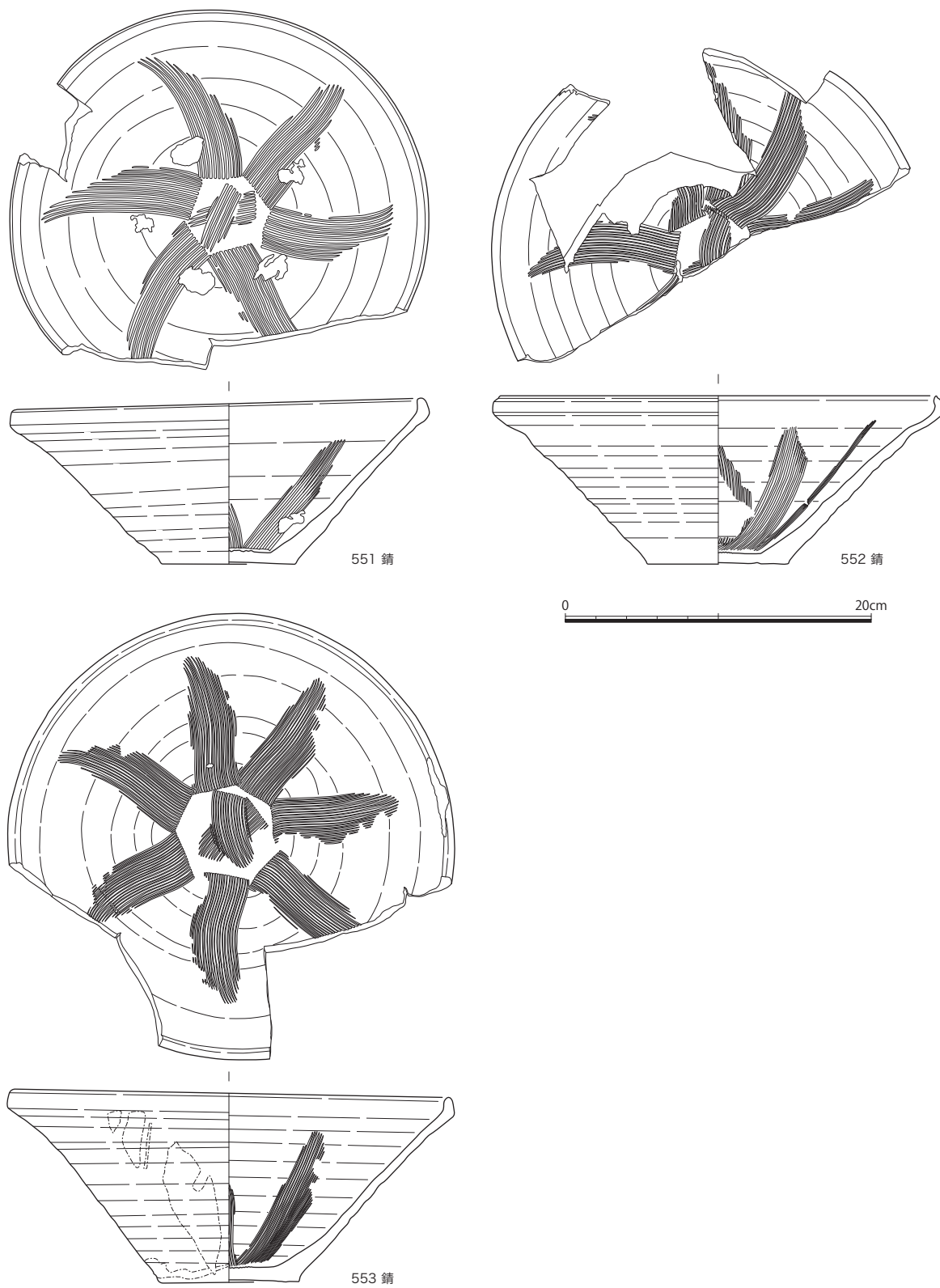
第71図 鐺鉢1 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-2 (547~550)



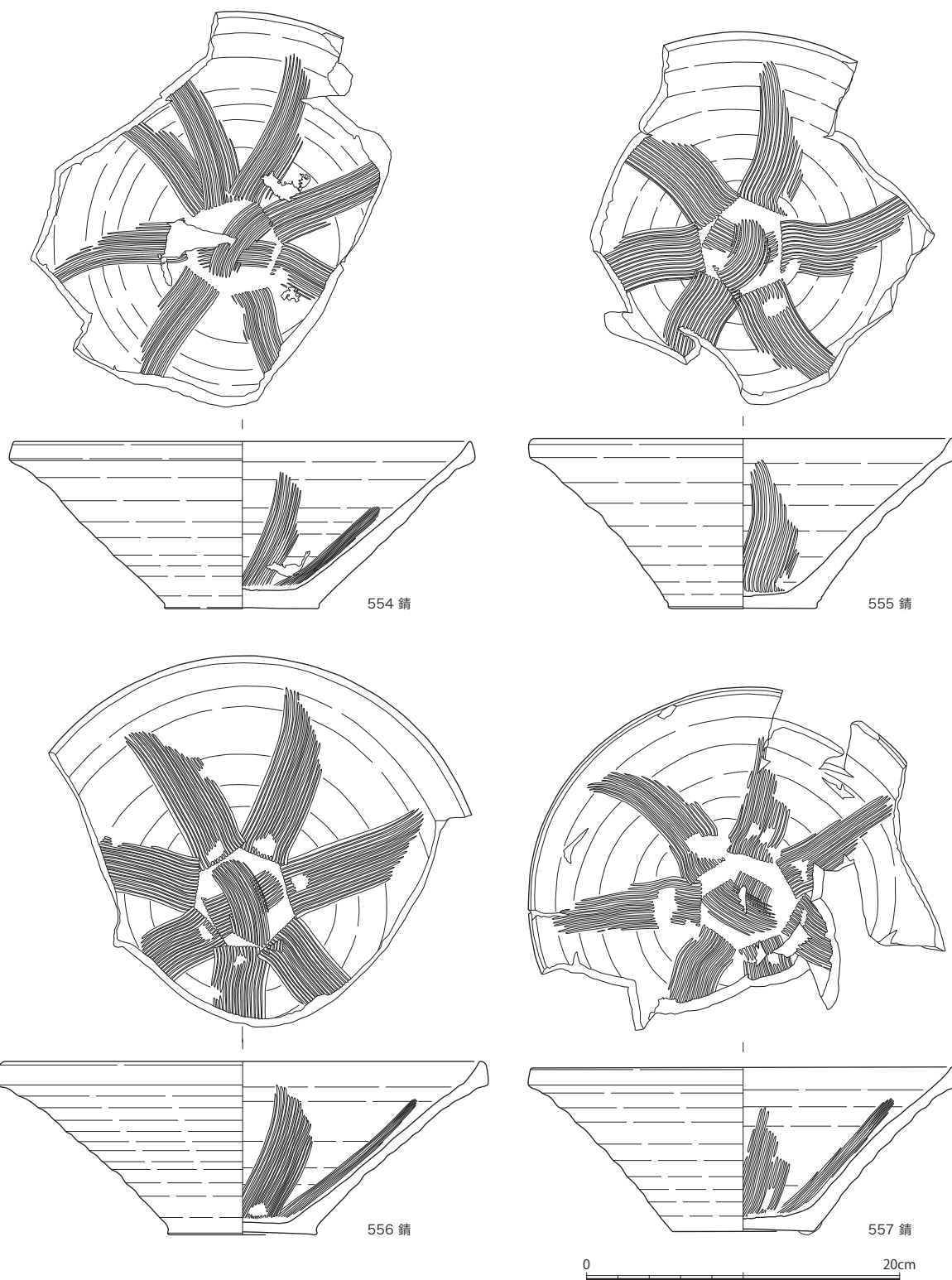
第72図 挿鉢2 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-3 (551~553)



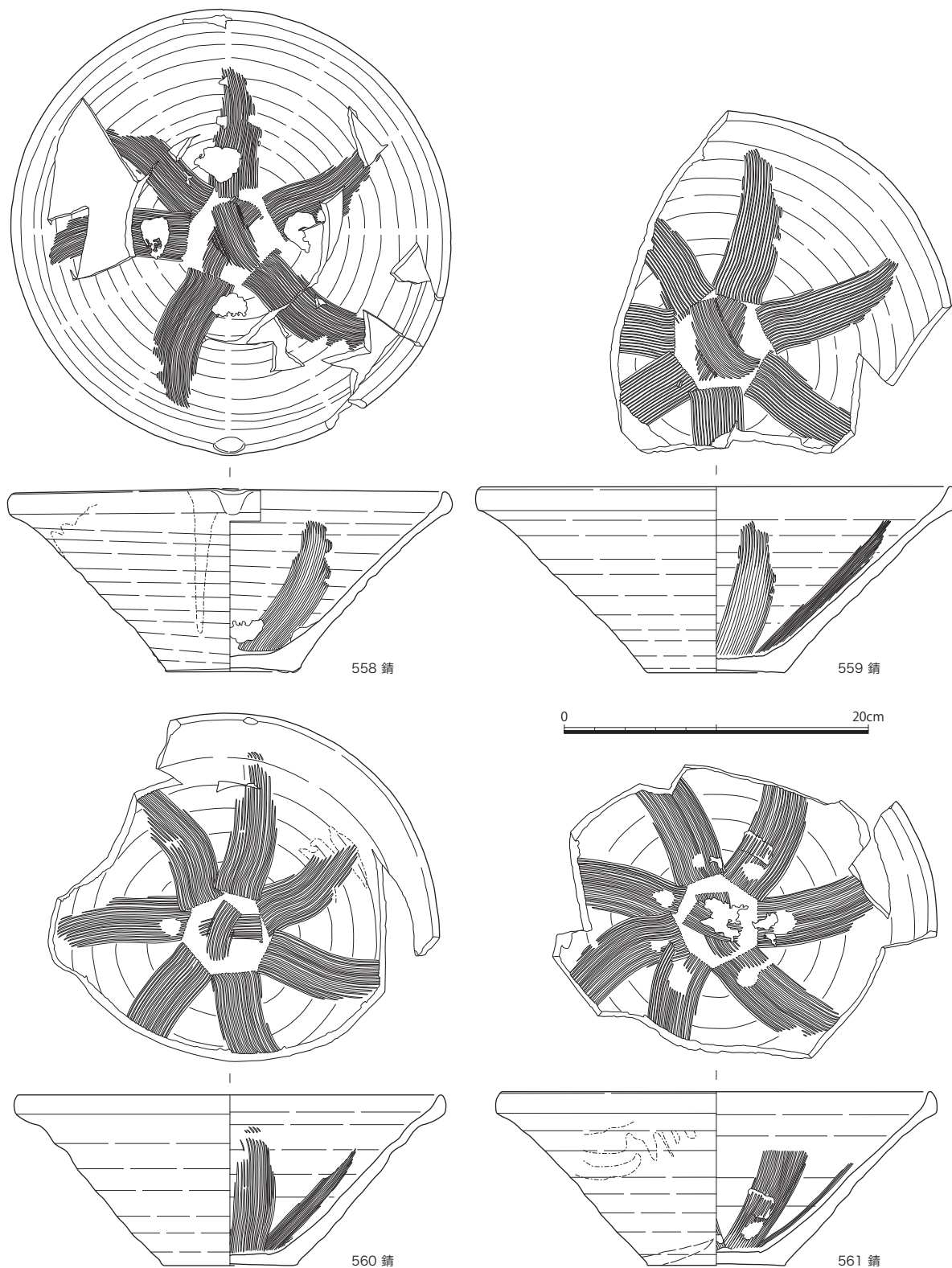
第73図 播鉢3 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-4 (554~557)

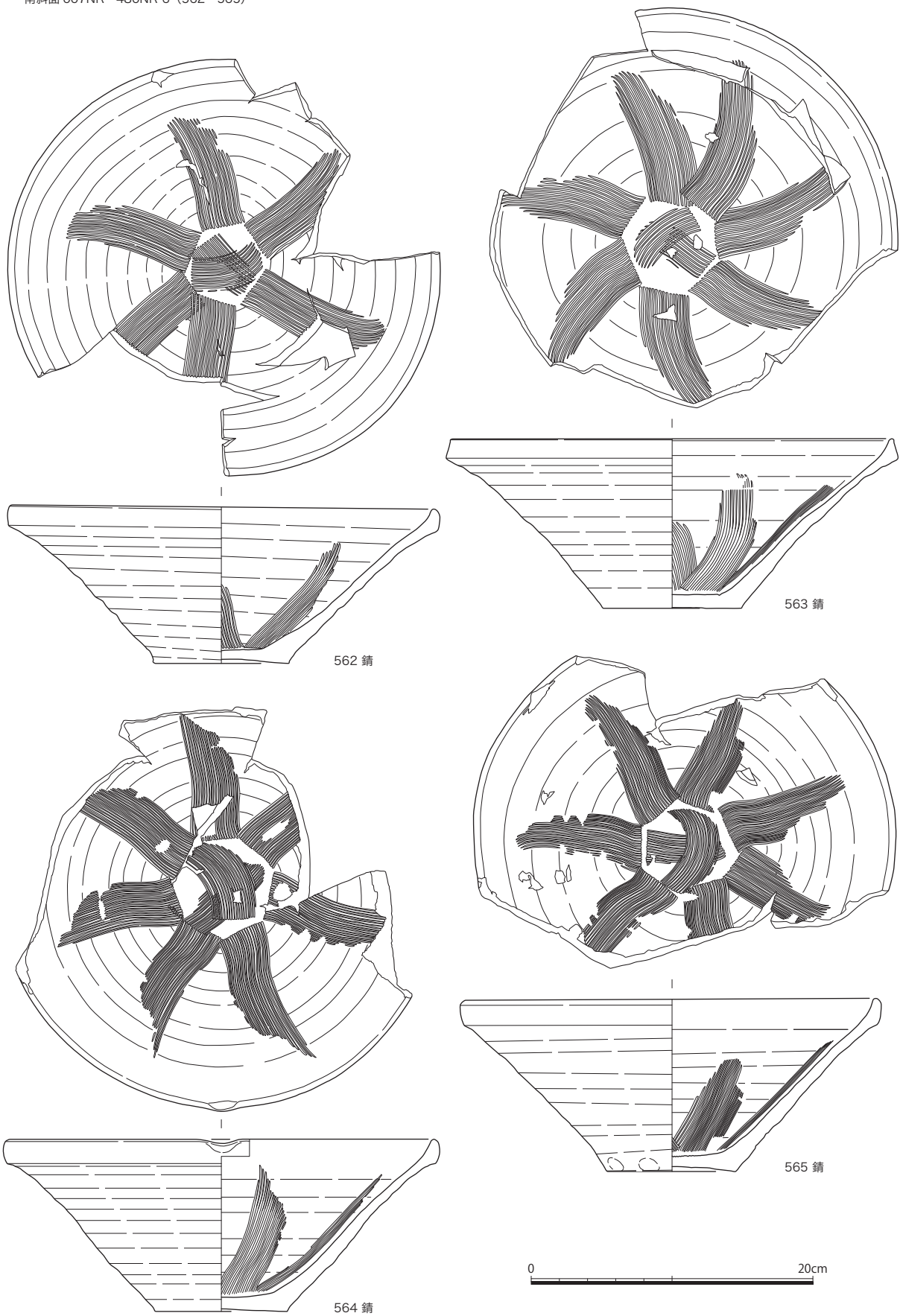


第74図 播鉢4 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-5 (558~561)

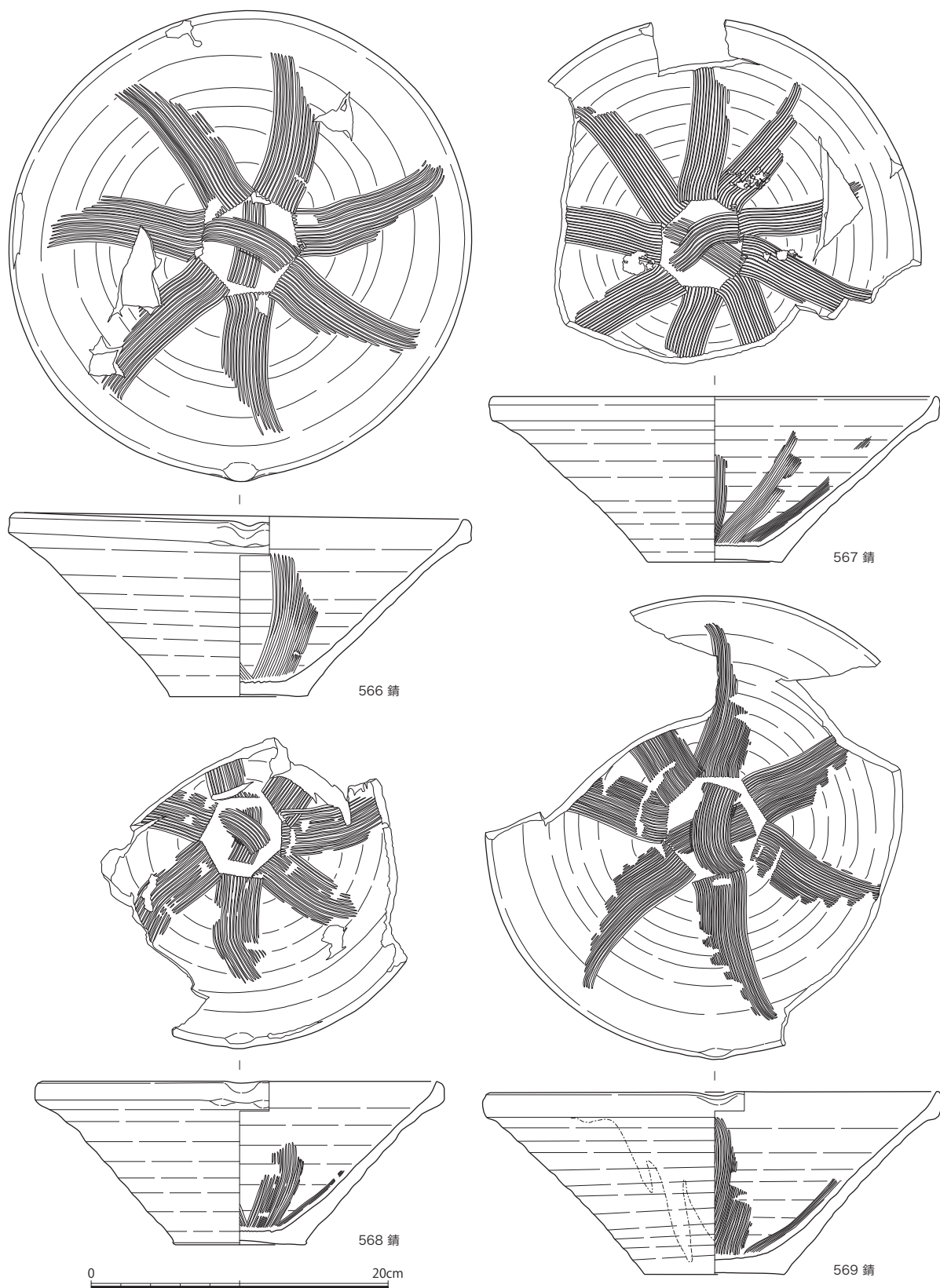


南斜面 007NR・480NR-6 (562~565)



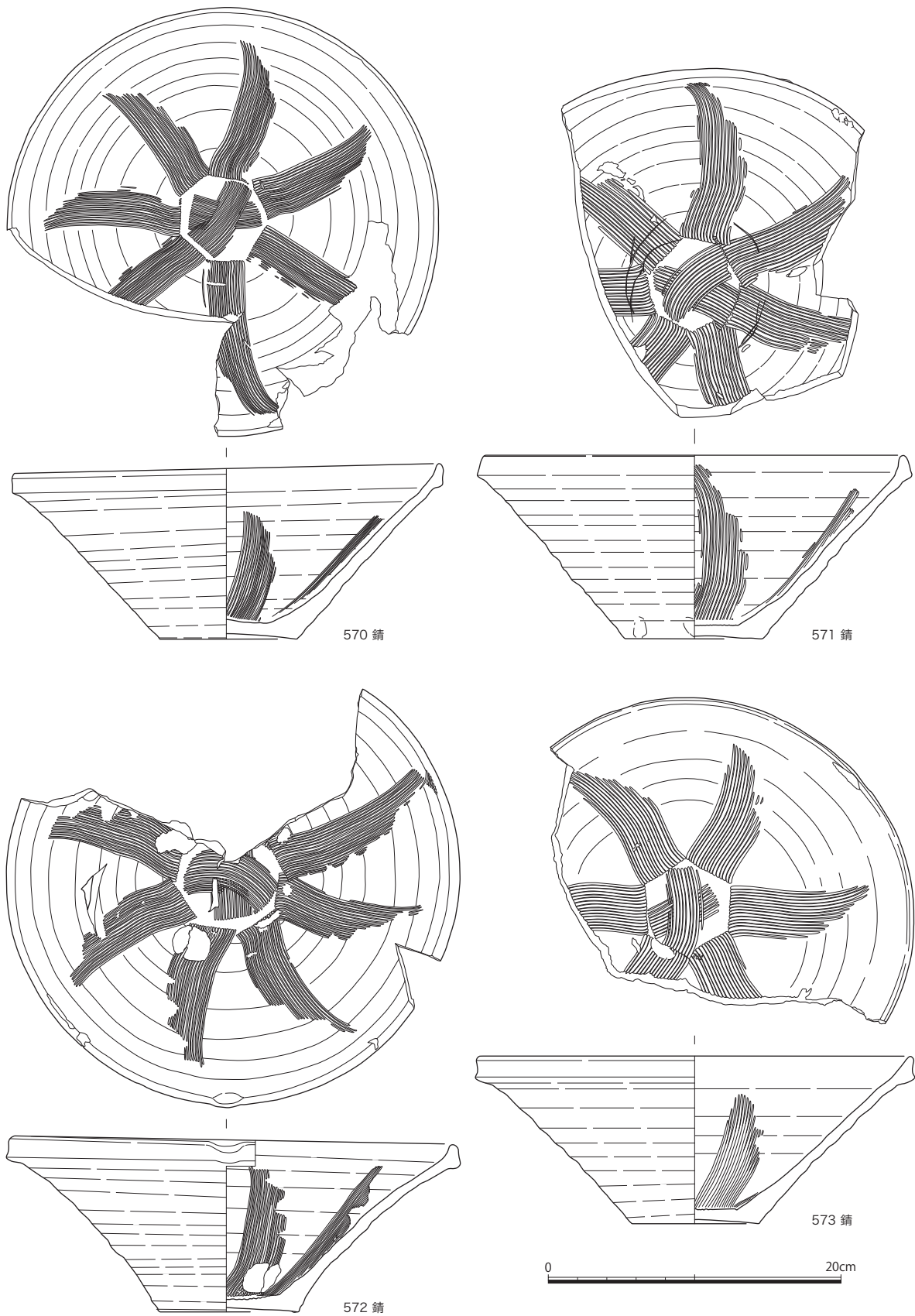
第76図 挿鉢6 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-7 (566~569)



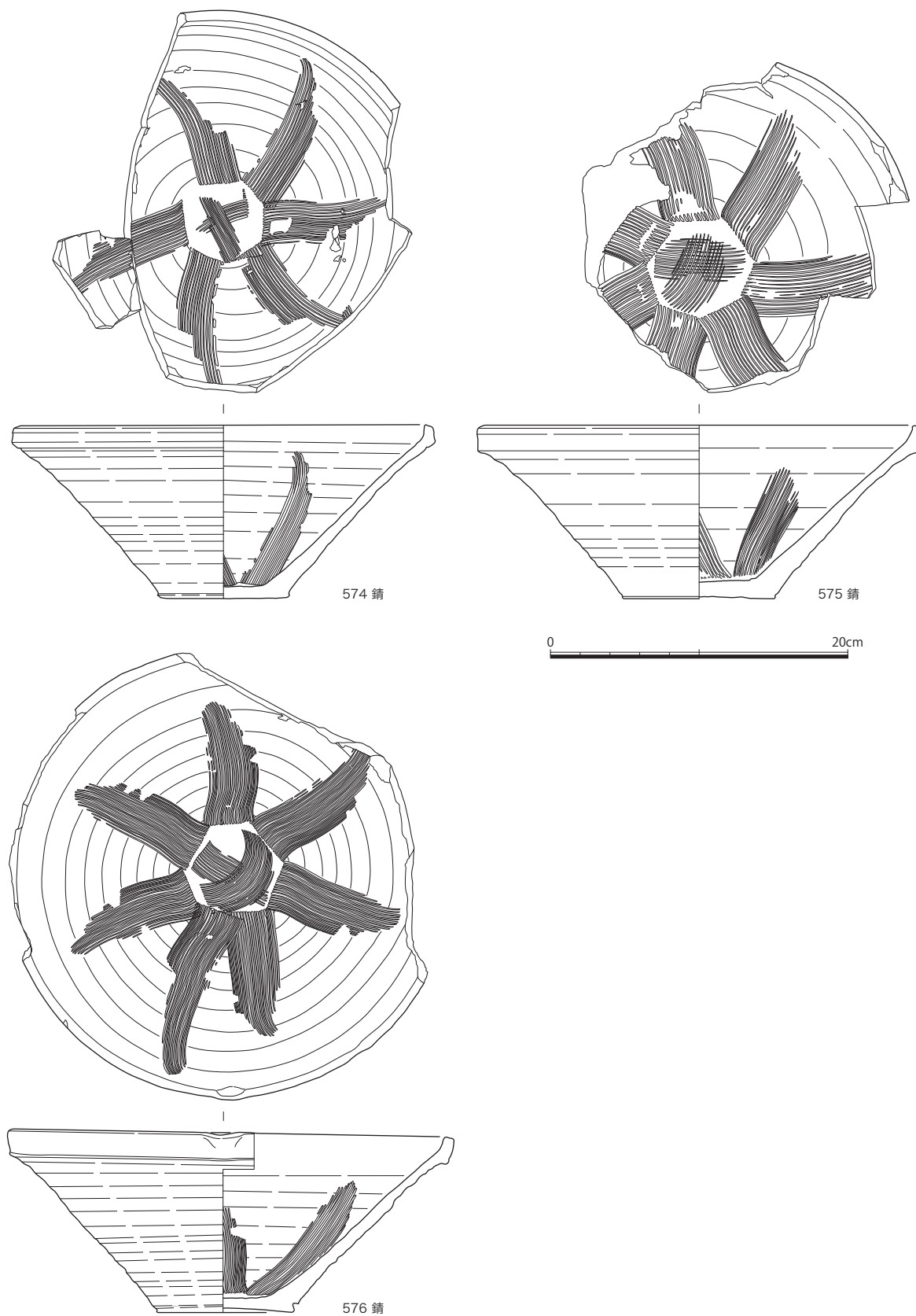
第77図 鐺鉢7 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-8 (570~574)



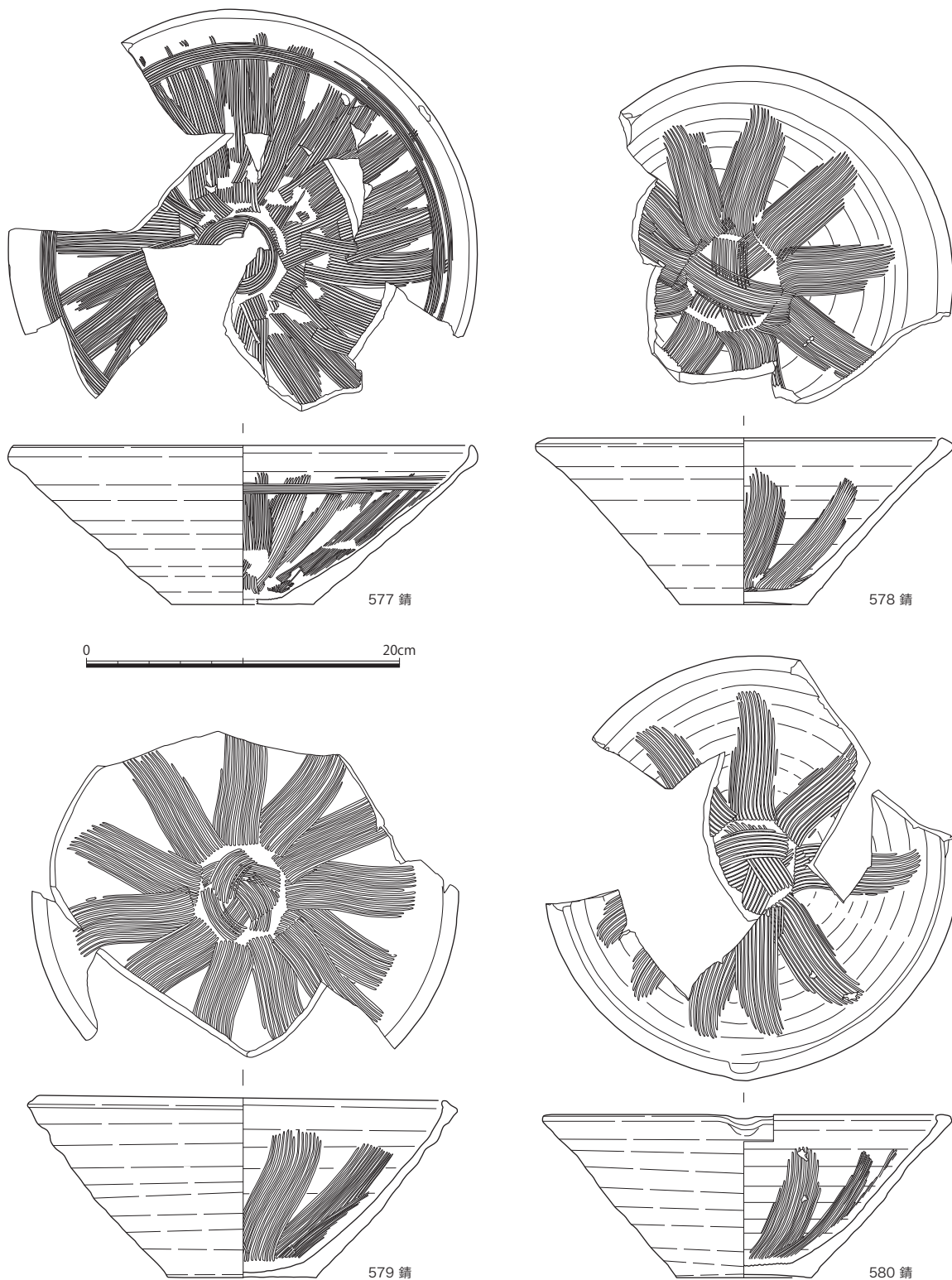
第78図 挿鉢8 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-9 (574~576)



第79図 播鉢9 (1:4)

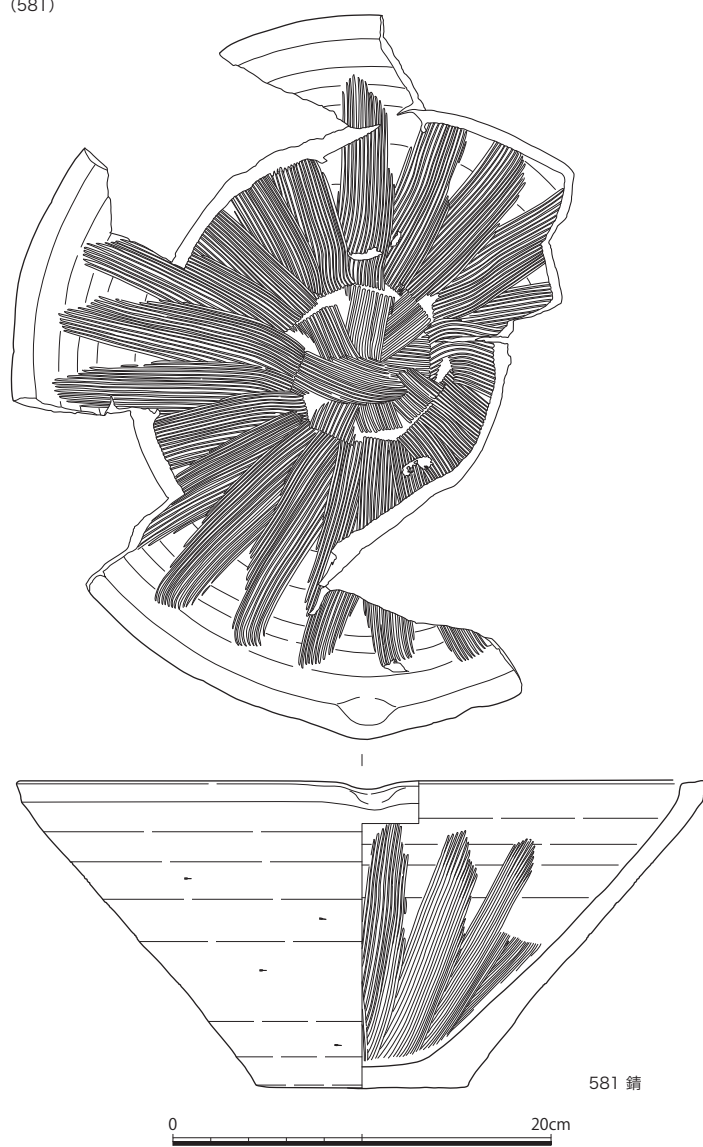
南斜面 007NR・480NR-10 (577~580)



第80図 播鉢10 (1:4)

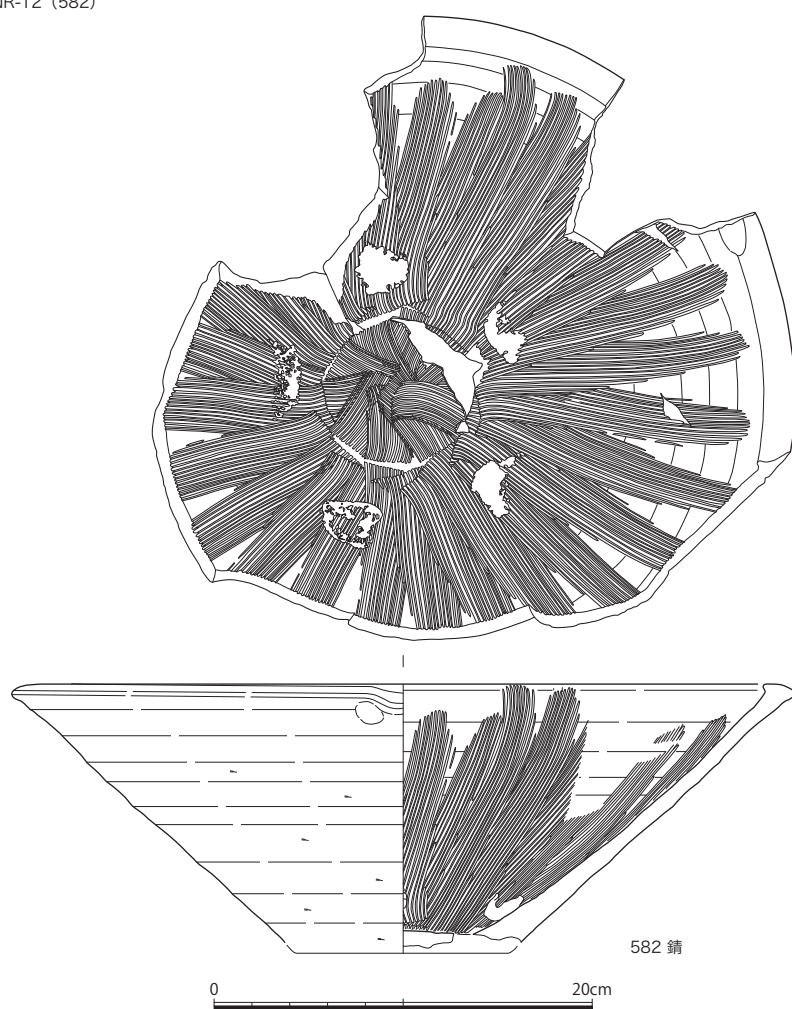
上品野西金地遺跡

南斜面 007NR・480NR-11 (581)



第81図 挿鉢11 (1:4)

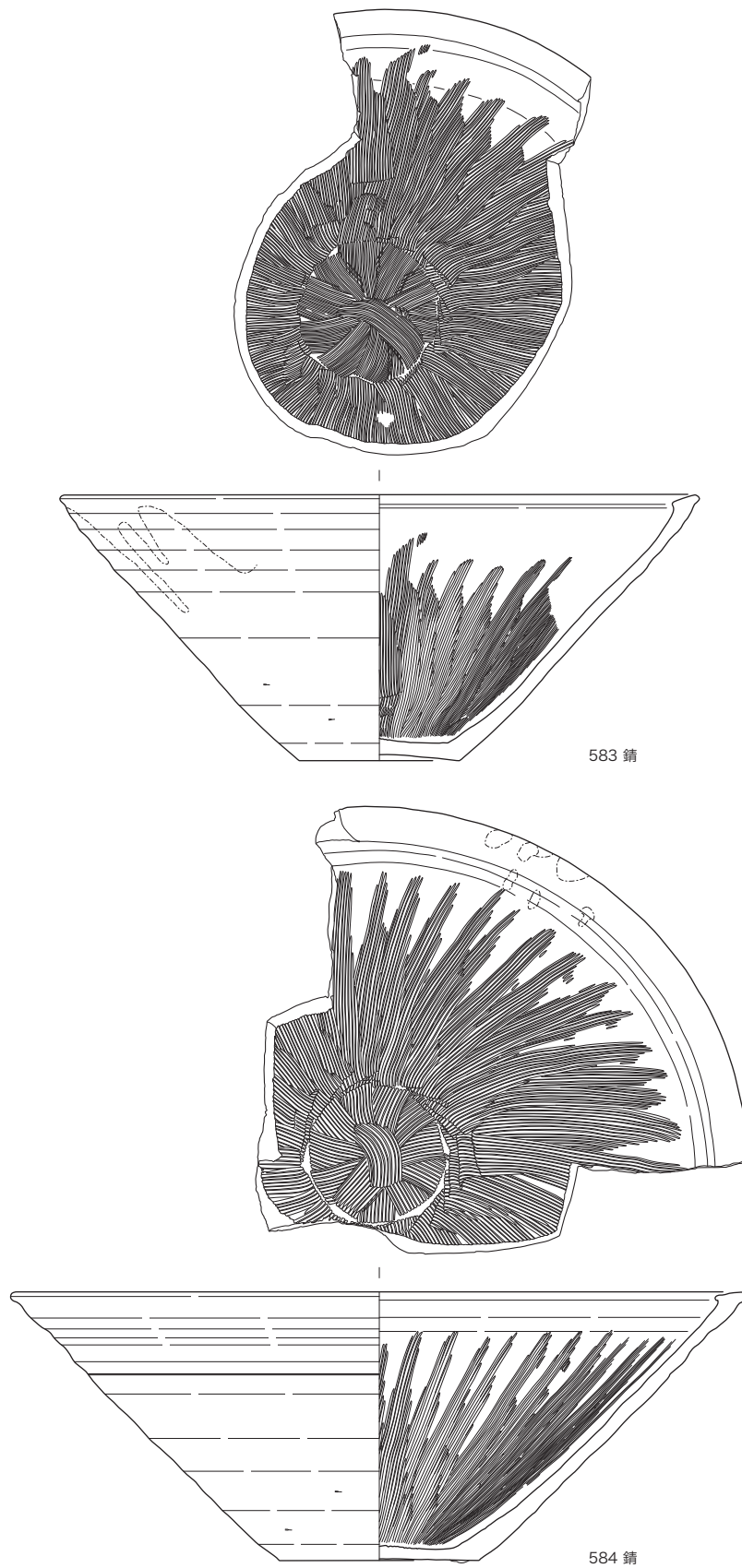
南斜面 007NR・480NR-12 (582)



第82図 鐺鉢12 (1:4)

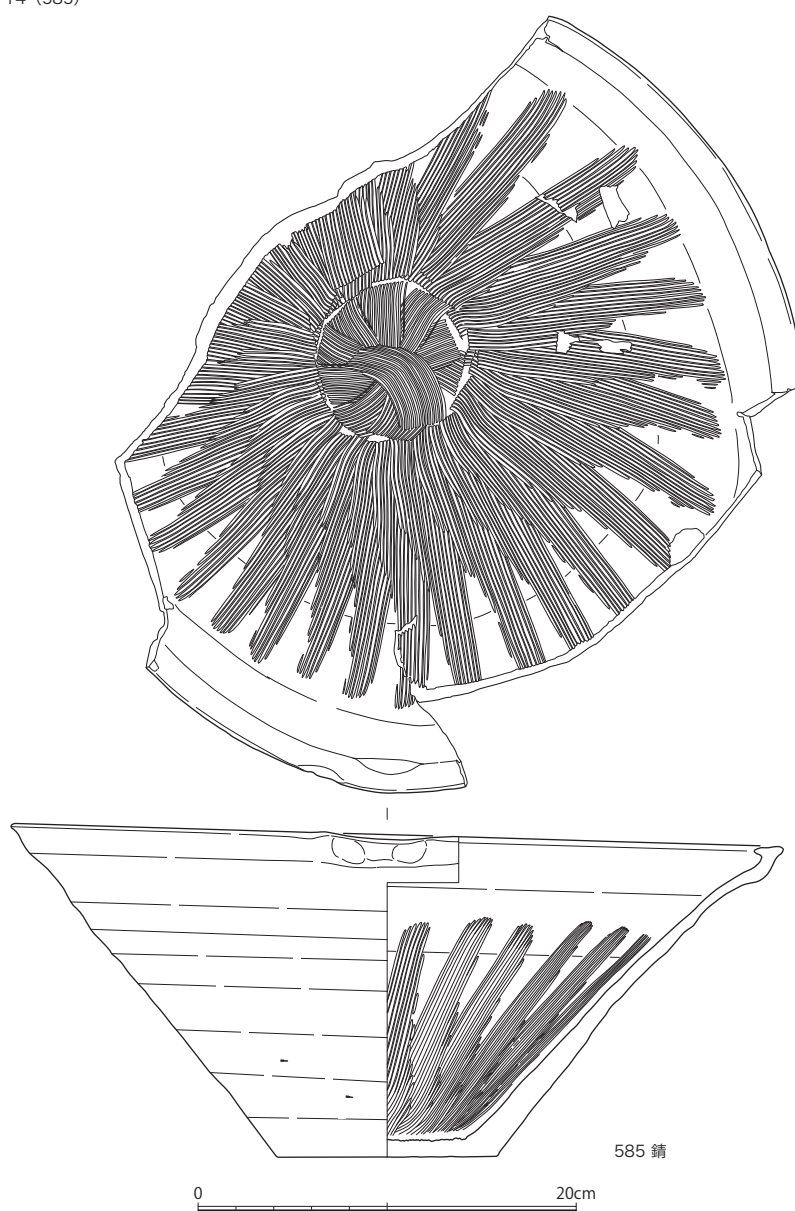
上品野西金地遺跡

南斜面 007NR・480NR-13 (583・584)



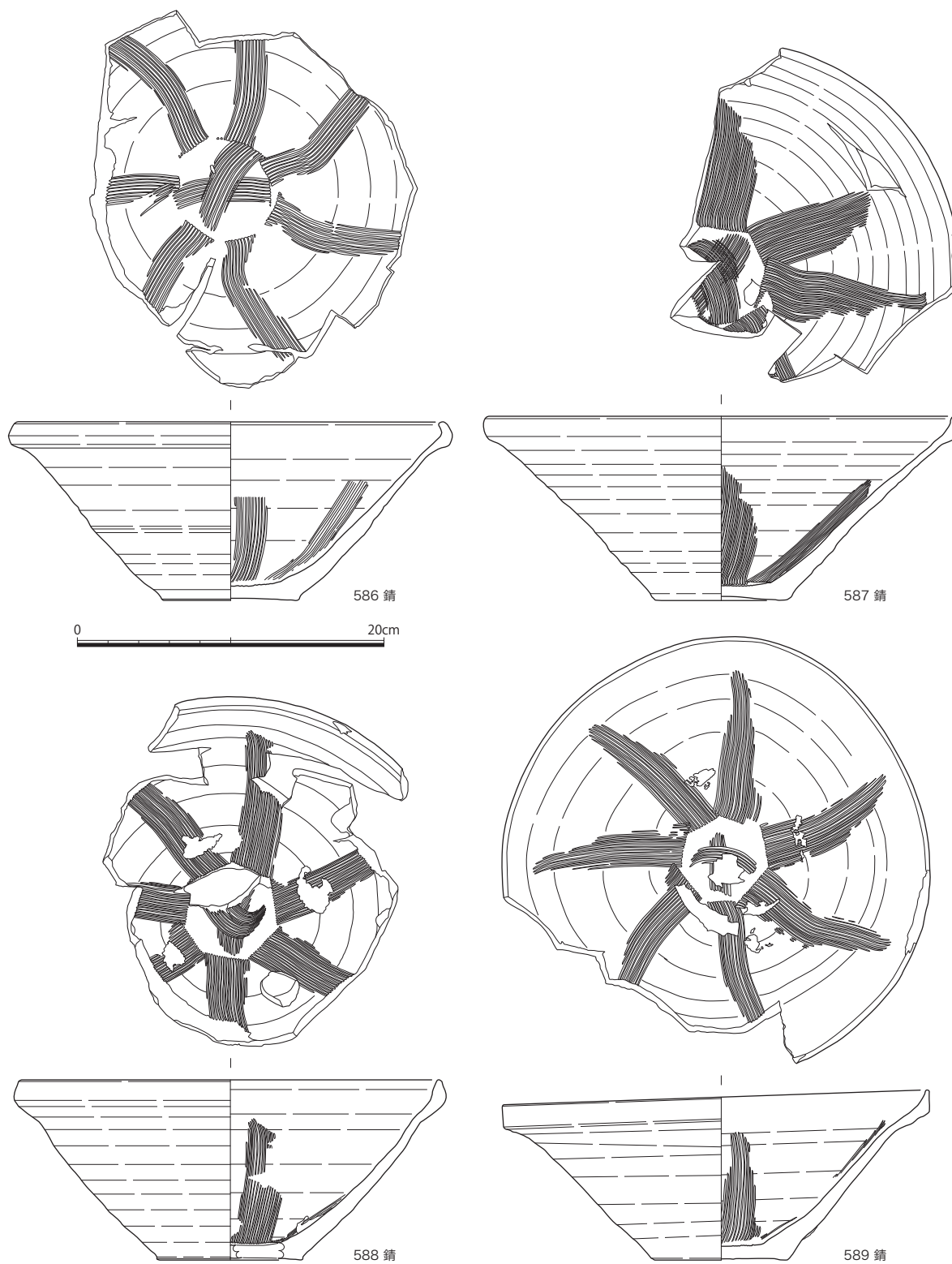
第83図 挿鉢13 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-14 (585)



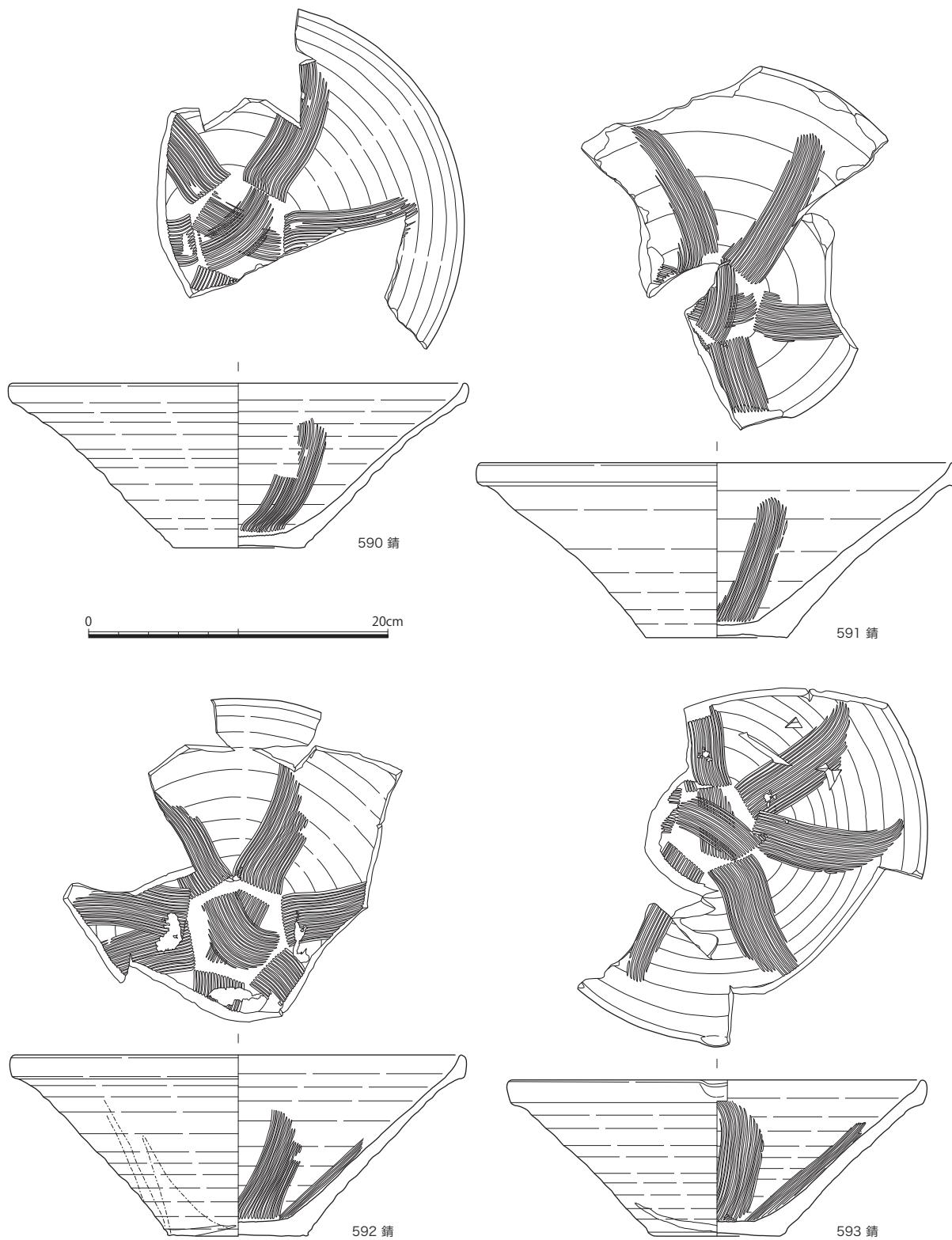
第84図 搦鉢14 (1:4)

東斜面 330SU・380SU-1 (586~589)



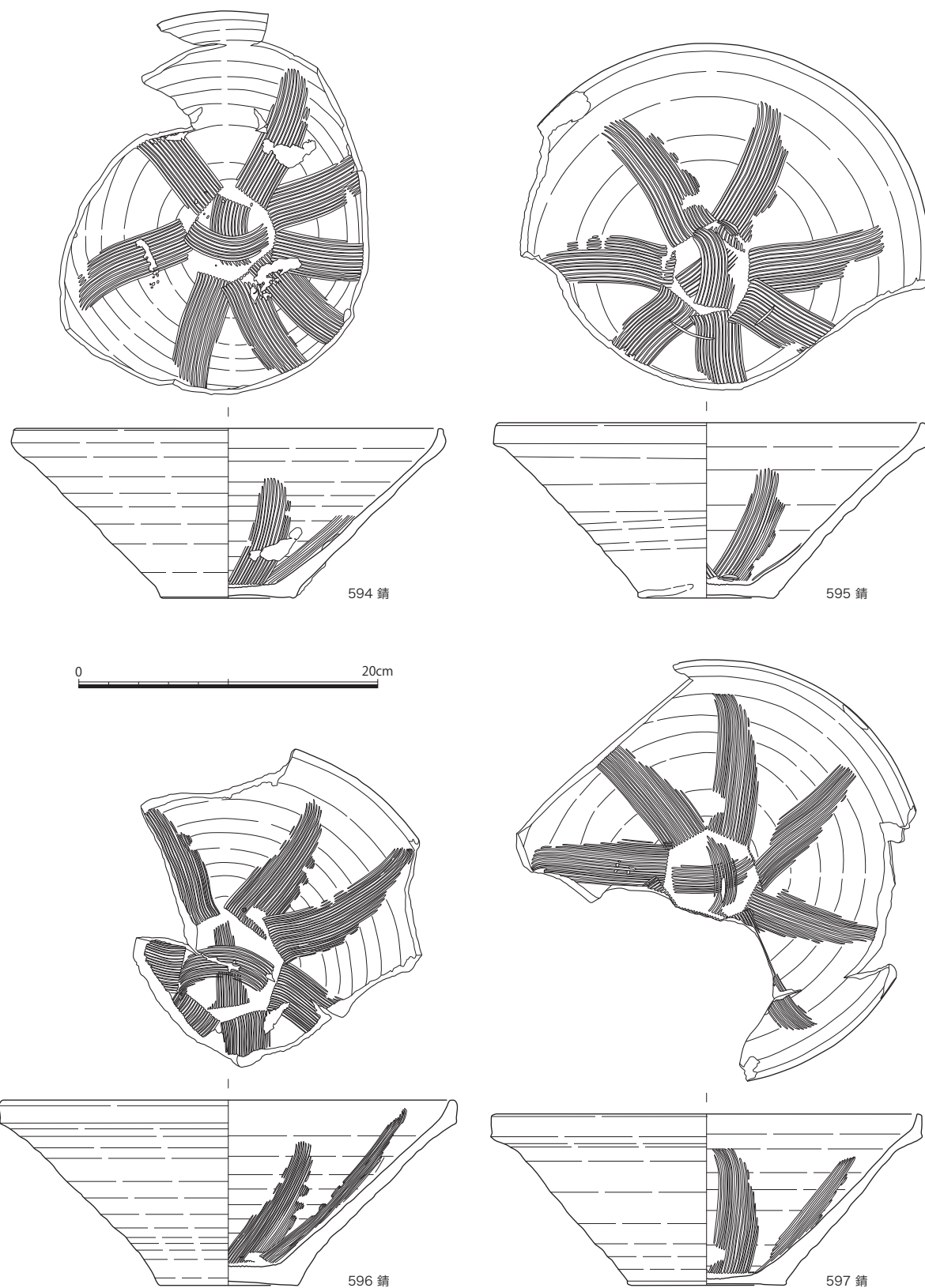
第85図 播鉢15 (1:4)

東斜面 330SU・380SU-2 (590~593)



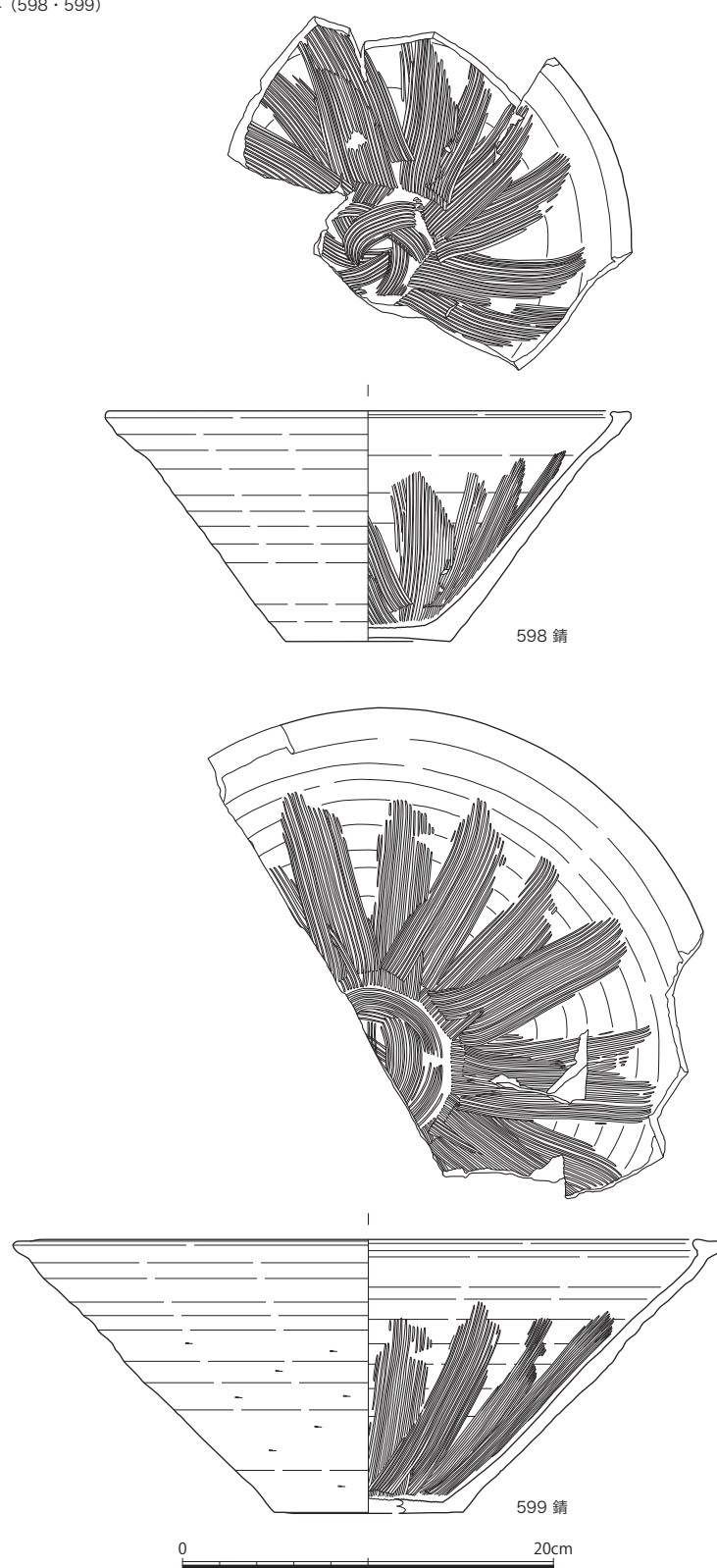
第86図 掘鉢16 (1:4)

東斜面 330SU・380SU-3 (594~597)



第87図 播鉢17 (1:4)

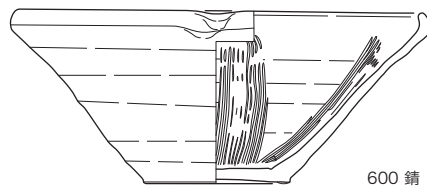
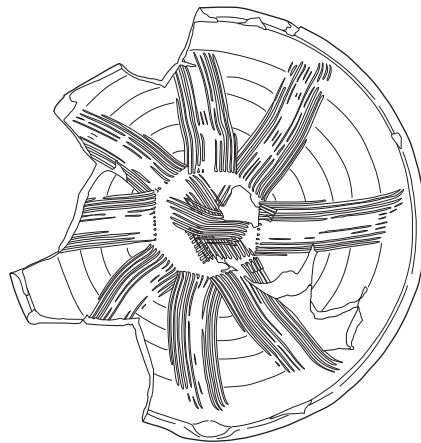
東斜面 330SU・380SU-4 (598・599)



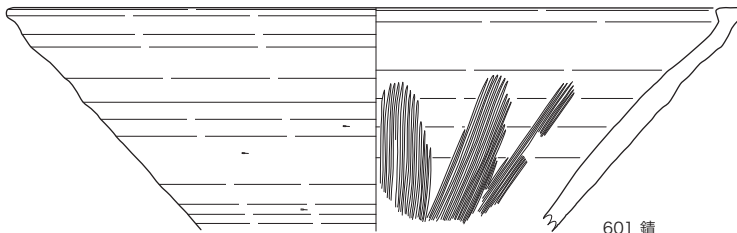
第88図 播鉢18 (1:4)

上品野西金地遺跡

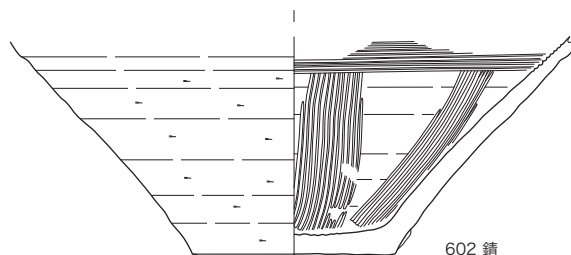
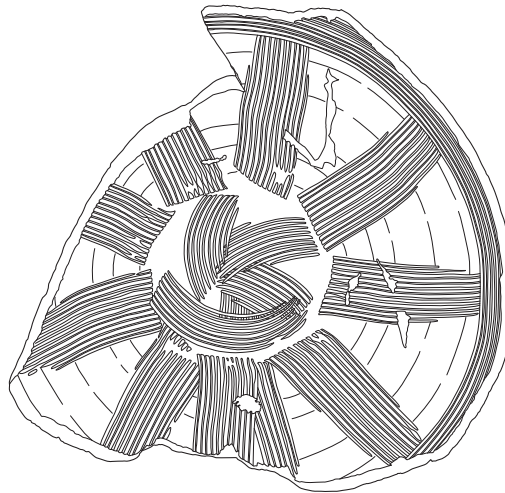
その他 (600~602)



600 鏡



601 鏡



602 鏡

第89図 挿鉢19 (1:4)

その他鉢類 (603～659)

挿鉢を除く鉢類は、体部が直線的な鉢A (603～620)、体部が内彎する有高台の鉢B (621～627)、著しく深く、握りを加えた把手を付す鉢C (手水鉢、628～643)、無高台平底で、体部から口縁部にかけて内彎する浅鉢 (菓子器、644～655) に大別し、その他の小型の鉢を小鉢 (656～659) とした (第90～95図)。

鉢A (603～620) は口縁部の一方に片口を付すもの (604・609・611・617) が多いが、片口がないもの (607) もある (第90・91図)。法量からは、器高12.4cm、口径37.5cm、底 (高台) 径13.6cm 前後の大型 (603～608・614・618～620)、器高10.5cm、口径30.2cm、底径10.2cm 前後の中型 (609・610・613・616・617)、器高10.8cm、口径23.5cm、底径9.4 cm 前後の小型 (611・612・615) に区分される。施釉方法からは、底部 (高台) 周辺の内外面を露胎とする1類 (609・619)、底部 (高台) 周辺の外面を露胎とする2類 (603・604・610・611・613～615・617・620)、底部外面周辺を鎔釉で化粧掛けする3類 (607)、底部を含めた内外面全面を施釉する4類 (608) に細分される。釉薬は603・609は鉄釉、618は鎔釉を施すが、それ以外は光沢がない褐色の鉄釉?を施し、灰黄色の灰釉?を流し掛けする。底部は高台内の削り込みが浅い削り出し高台とするもの (603・620)、平底で低い三足を付すもの (609・610・613・614・619)、平底のもの (604・607・608・611・615・617) がある。体部から底部の外面には回転ヘラケズリが施されるものが多いが、609・615は回転糸切痕を残す。口縁部は内側に緩やかに折り曲げられるもの (603・609) が1類・2類、断面三角形のもの (611) が2類、内側または内外に拡張されるもの (604～608・612～613・615～618) が2類・3類・4類と対応する。1類は古瀬戸後期の直縁大皿からの系譜関係が類推され、古瀬戸後IV期新から大窯第1段階前半に相当すると考えられる。また、大型の2類・3類・4類は法量と器形、調整が挿鉢II類に類似する。603の底部内面には団子トチを挟んで重ね焼きされた痕跡、607の体部外面下位には甕と重ねて焼成された痕跡が残る。なお、615と同一個体と思われる体部下位の破片の内面には「日」字状の線刻がある。

鉢B (621～627) は光沢がない褐色の鉄釉?を施し、灰黄色の灰釉?を流し掛けするもの (621～625) と鎔釉を施すもの (626・627) に区分される (第92図)。前者は口径23.8cm 前後、高台径12.4cm 前後で、相対的な深さから、器高12.4cm 前後の深いもの (621・627) と、器高7.1cm 前後の浅いもの (622・623)、施釉方法から、鉢Aと同様、高台外面の周辺または高台内を露胎とする2類 (621・624・625)、底部外面周辺を鎔釉で化粧掛けする3類 (623)、高台内を含めた内外面全面を施釉する4類 (622) に細分される。高台は622のみ付高台で、それ以外は底部内面の削り込みが浅い削り出し高台である。口縁部は内側に拡張されるもの (621・622) と拡張されないもの (623・626・627) がある。

鉢C (手水鉢、628～643) は器高19.5cm、口径32.4cm、底 (高台) 径14.2 前後の大型で、口径に比して底 (高台) 径が小さいもの (628～635・637～643)、口径22cm 程度の中型で、口径に対して底径が大きいもの (636) に区分される (第92～94図)。前者は底部外面 (高台) 周辺を除いて光沢がない (赤) 褐色の鉄釉?を施し、灰黄色の灰釉?を流し掛けする。後者は底部外面周辺を鎔釉で化粧掛けし、光沢がない褐色の鉄釉?を施

鉢A

大型

中型

小型

1類

2類

3類

4類

底部の形状

口縁部の形状

直縁大皿系

挿鉢II類

焼成

「日」字状の線刻

鉢B

器形

施釉

高台の形状

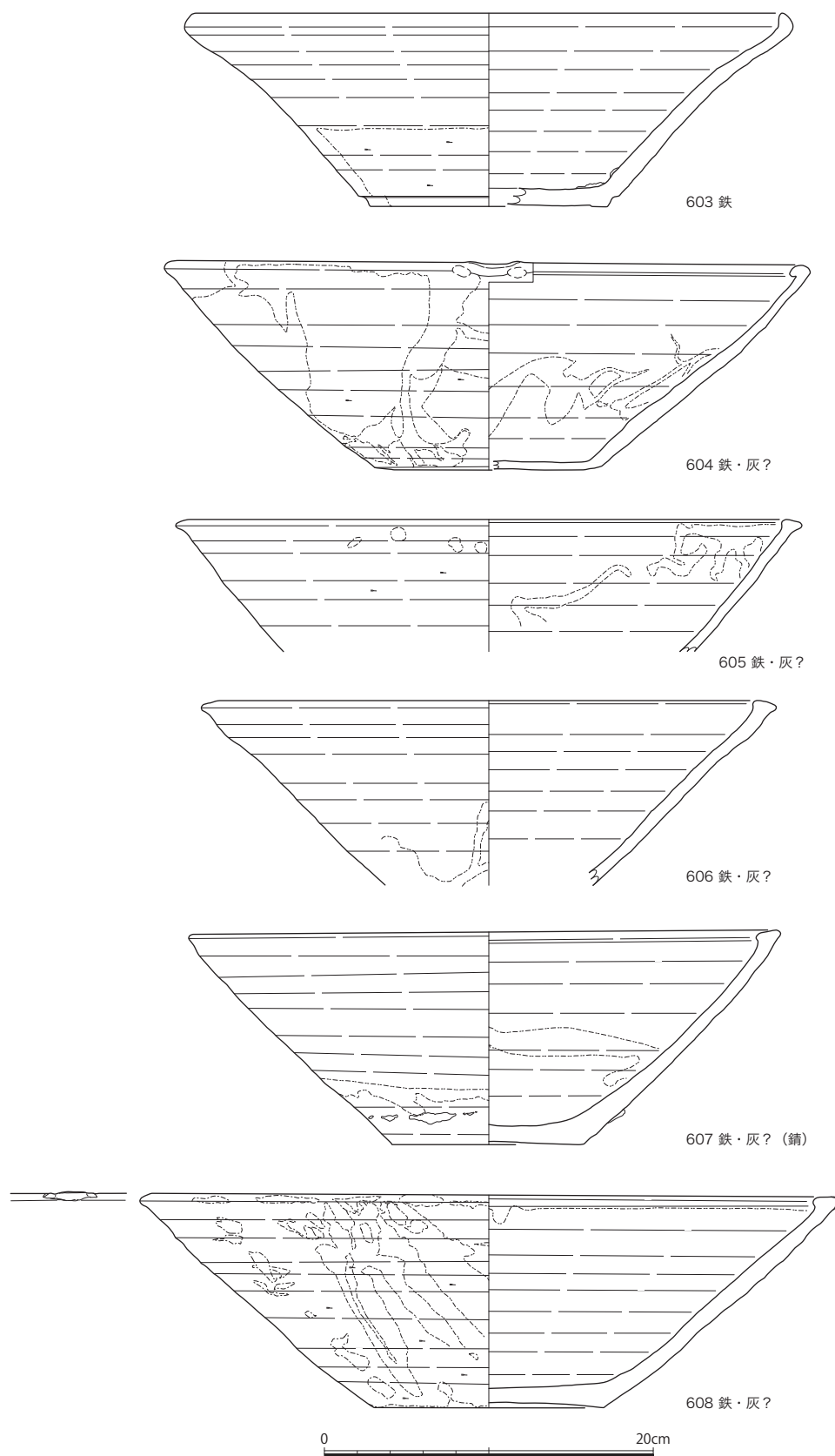
鉢C (手水鉢)

大型

中型

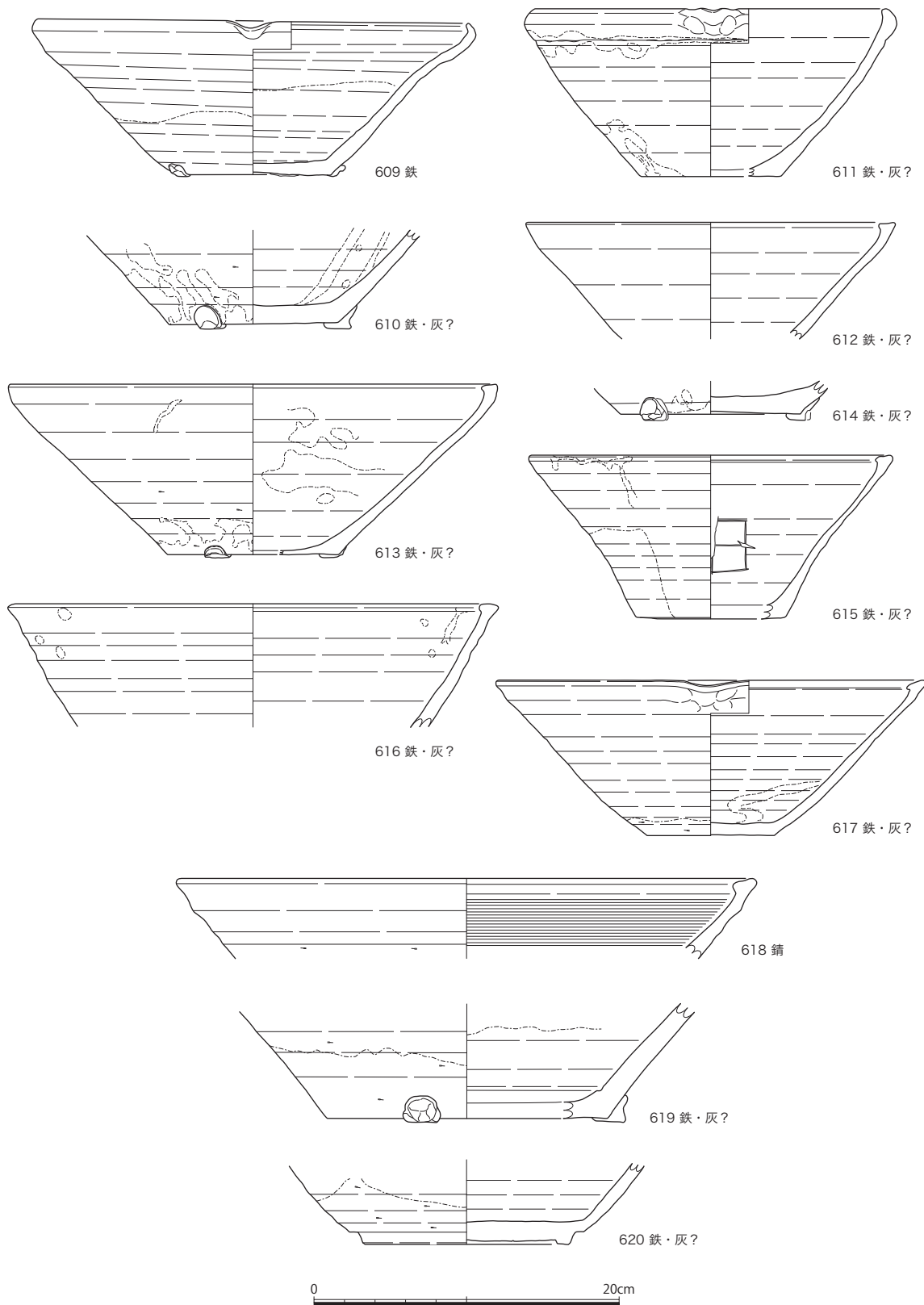
施釉

南斜面 007NR・480NR-1 (603~608)



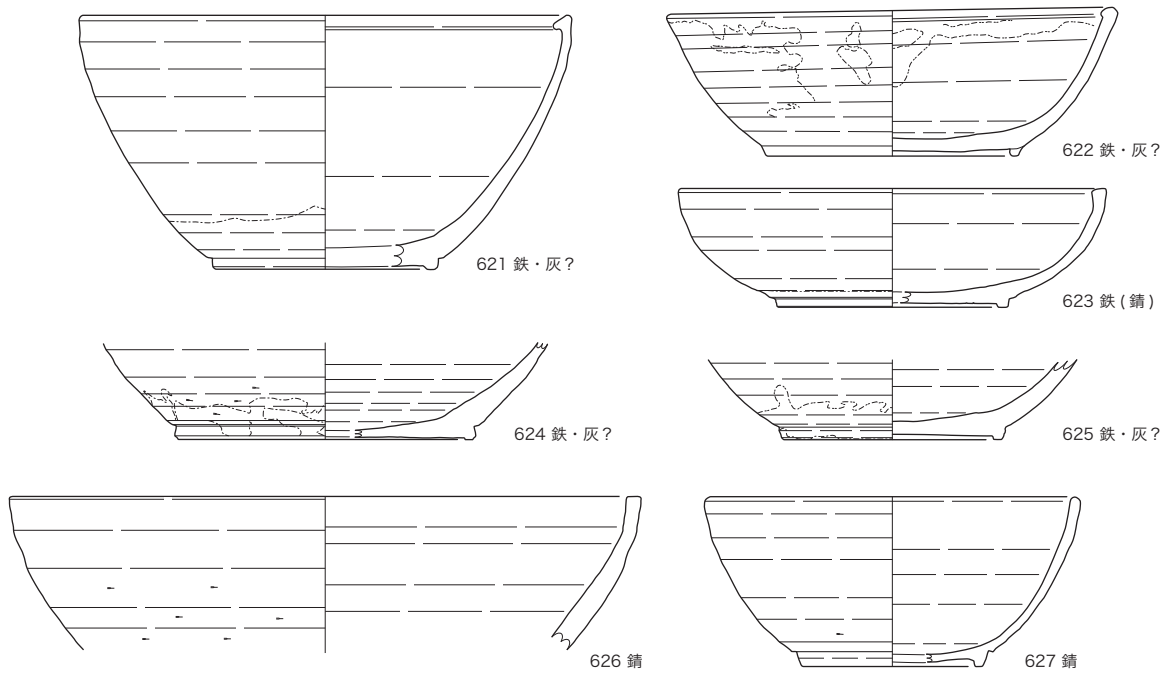
第90図 その他鉢類1-鉢A (1:4)

南斜面 007NR・480NR-2 (609~611) 東斜面 330SU・380SU (612~617) その他 (618~620)

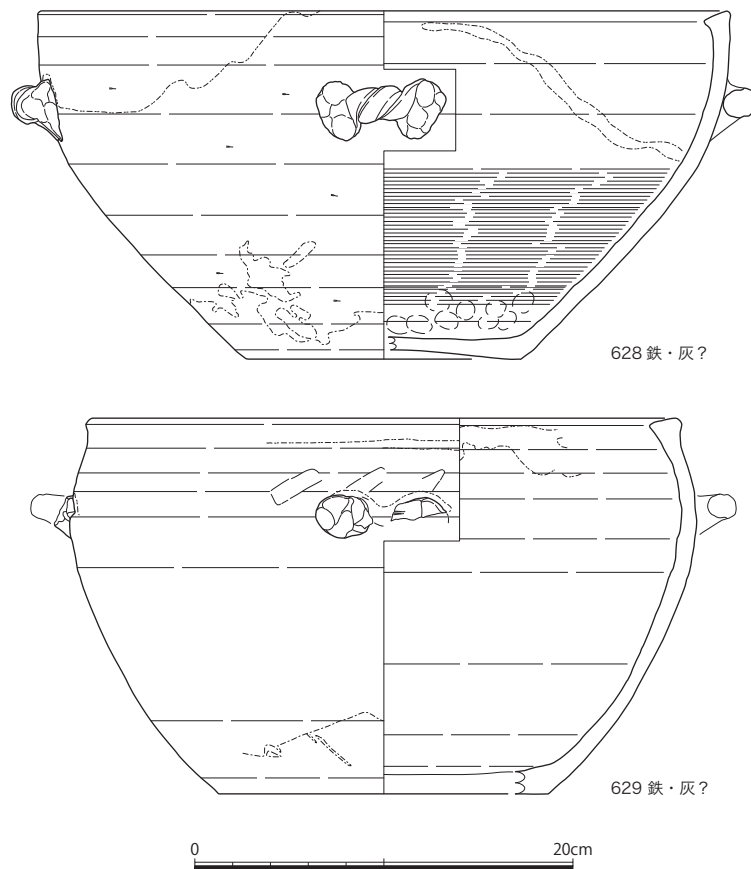


第91図 その他鉢類2-鉢A (1:4)

南斜面 007NR・480NR (621・622) 東斜面 330SU・380SU (623・624・627) その他 (625・626)

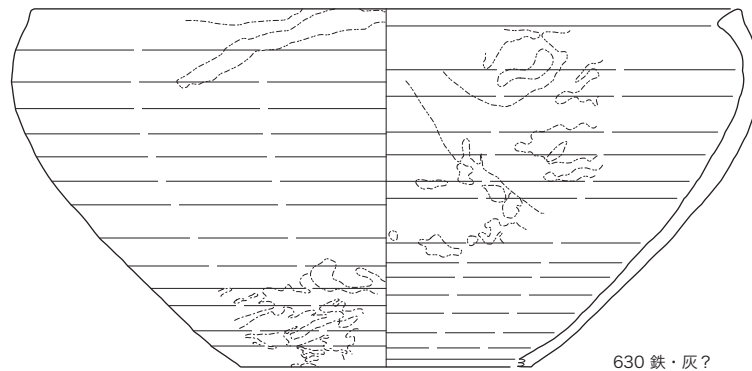


南斜面 007NR・480NR-1 (628・629)

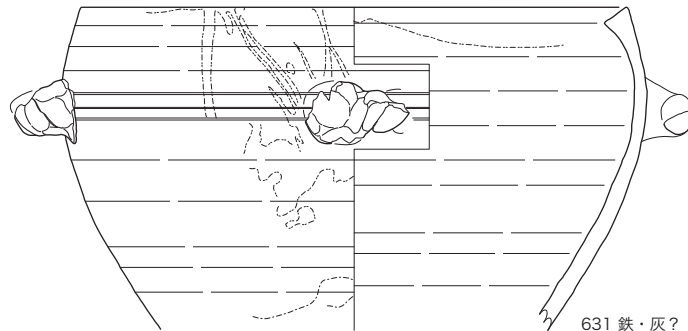


第92図 その他鉢類 3-鉢B・鉢C (1:4)

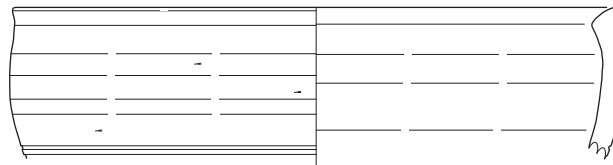
南斜面 007NR・480NR-2 (630~636)



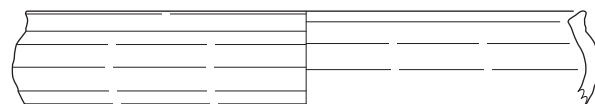
630 鉄・灰?



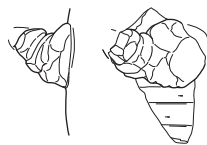
631 鉄・灰?



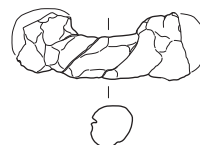
632 鉄・灰?



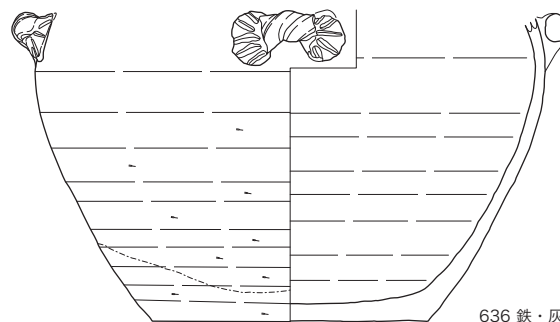
633 鉄・灰?



634 錆



635 鉄・灰?

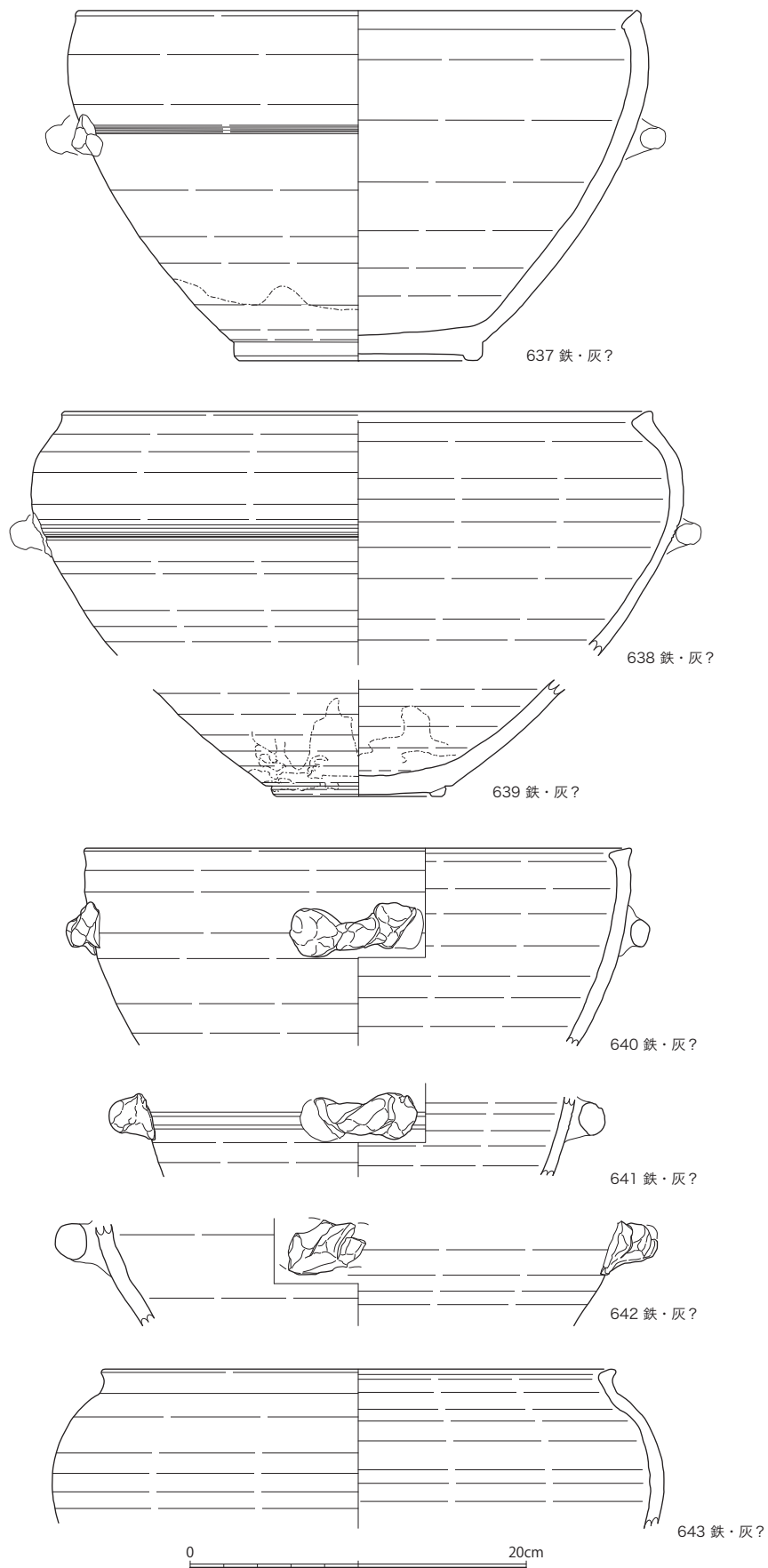


636 鉄・灰? (錆)

0 20cm

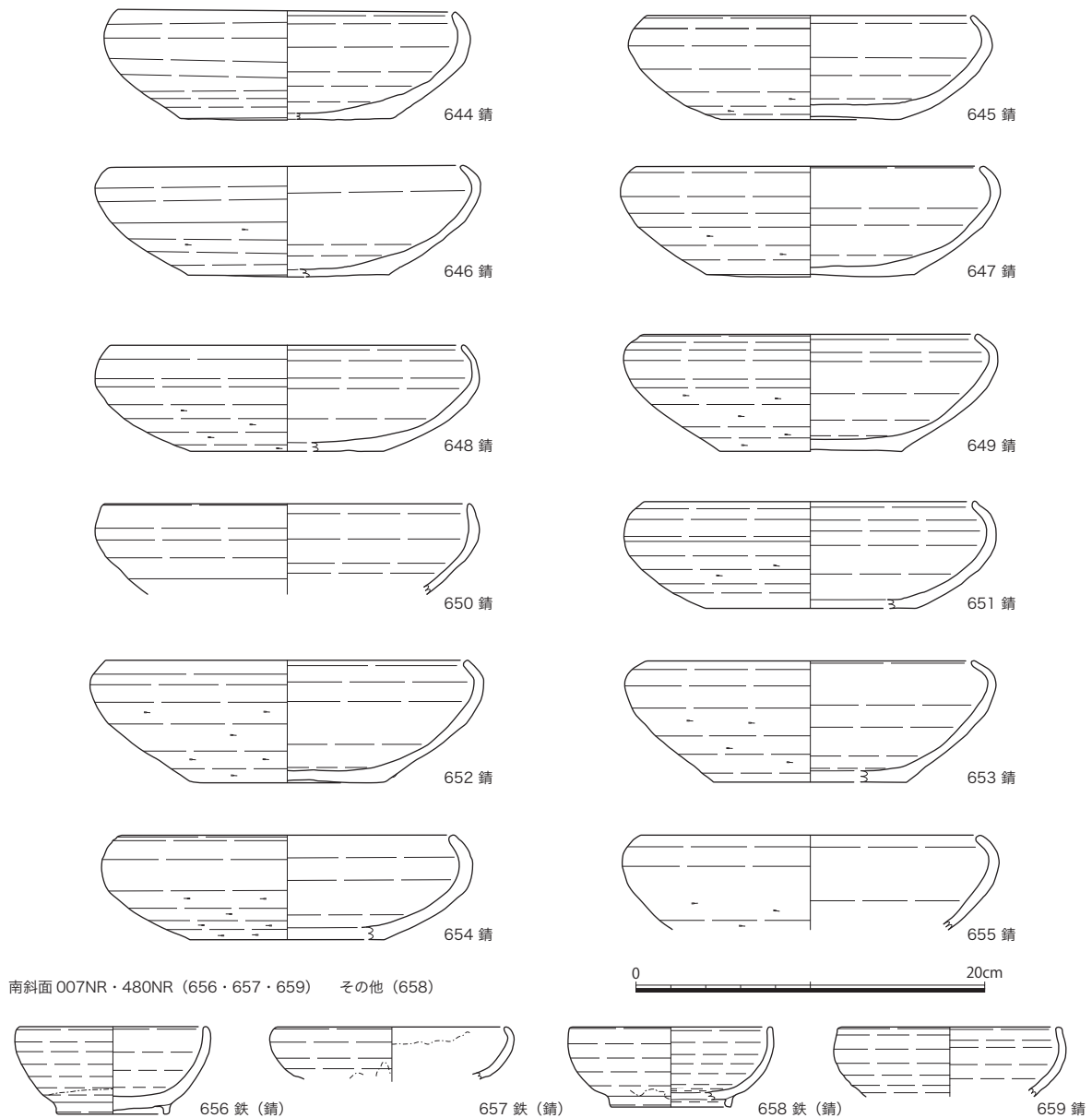
第93図 その他鉢類4-鉢C (1:4)

東斜面 330SU・380SU (637~642) その他 (643)



第94図 その他鉢類5-鉢C (1:4)

南斜面 007NR・480NR (644~647) 東斜面 330SU・380SU (648~655)



第95図 その他鉢類5-鉢C (1:4)

す。底部は平底のもの(628～630・636)、削り込み高台のもの(637)、付高台のもの(639)があるが、いずれも体部から底部の外面に回転ヘラケズリを施す。体部やや上位には左右一対の握りを加えた把手を横方向に付す。636の把手にはヘラによる放射状の刻みがある。

無高台平底で、口縁部が著しく内彎する器形の浅鉢(菓子器、644～655)は、器高6.5cm、口径19.6cm、底径11.2前後で、いずれも内外面全面に錆釉を施す(第95図)。良質な胎土を使用し、体部から底部の外面には回転ヘラケズリを施す。

その他小型の鉢は、付高台で、器高4.8cm、口径11.0cm、底径6.6cm前後のやや深いもの、口径12.8前後で、体部から口縁部が著しく内彎するものがある(第95図)。前者は碗(丸碗)、後者は皿(丸皿)に器形が類似するが、施釉の特徴が他の鉢類に共通す

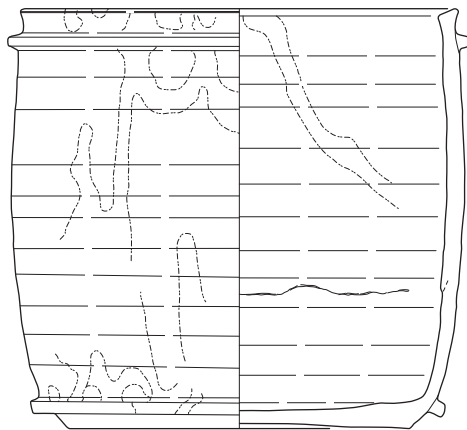
底部の形状

把手

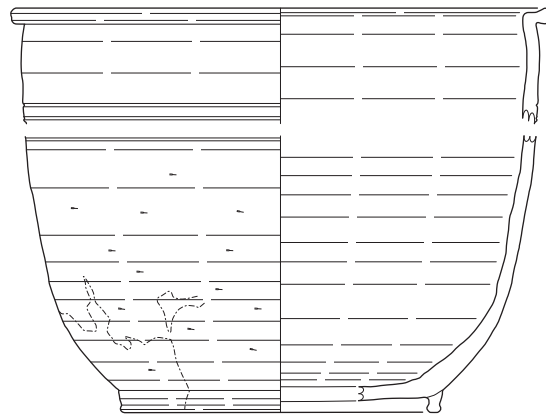
浅鉢(菓子器)

小鉢

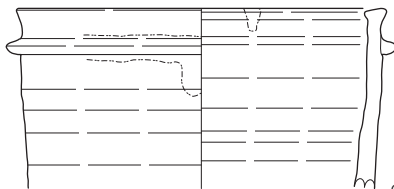
東斜面 330SU・380SU (660・664・666) 南斜面 007NR・480NR (661・667~670) その他 (662・663・665)



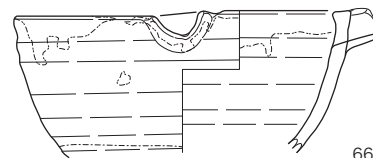
660 鉄・灰? (錆)



666 鉄・灰?



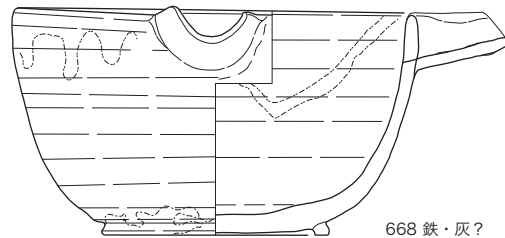
661 鉄・灰?



667 鉄・灰 (錆)



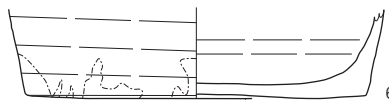
662 鉄・灰?



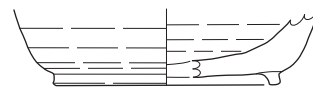
668 鉄・灰?



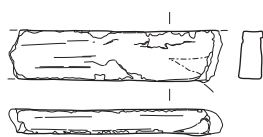
663 鉄・灰?



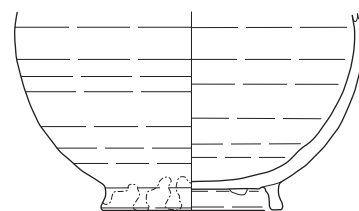
664 鉄・灰?



669 鉄・灰?

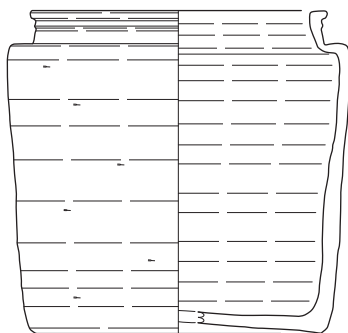


665 錆



670 鉄 (錆)

南斜面 007NR・480NR (671) その他 (672)



671 焼締



672 焼締

0 20cm

第96図 桶・片口・その他の容器 (1:4)

ることを重視して小鉢とした。656～658は高台周辺を錆釉で化粧掛けし、鉄釉を施す。659は内外面に錆釉を施す。

桶・片口・その他の容器（660～672）

桶（660～666）は寸胴の器形のもので、平底で木製桶からの転化が類推される桶A（660～665）と有高台で器形と法量が鉢C類に類似する桶B（666）がある（第96図）。いずれも体部から底部の外面に回転ヘラケズリを施す。

平底の桶Aには箍（タガ）を付すもの（660～663）に加えて、その表現を欠くもの（664）がある。後者は後述の筒形容器B類に類似するが、底径が著しく大きいことから桶Aに含めた。前者は底部外面周辺に錆釉の化粧掛け、内外面に光沢がない褐色の鉄釉？を施し、灰黄色の灰釉？を流し掛けする。後者は底部外面を露胎とする。なお、664は南斜面480NRなど、かなり広範囲に散乱した破片が接合した。不確実ながら、665は桶の把手とした。板状を呈し、錆釉を施す。

有高台の桶B（666）は付高台で、底部外面周辺を除く内外面に光沢がない赤褐色の鉄釉？を施し、灰黄色の灰釉？を流し掛けする。鉢C類と同様、握りを加えた把手が横方向に付されていたと思われる。

片口（667～669）は体部が半球形の鉢状で、口縁部の一方に樋状の注口を付す。口縁端部に面をもつ口径17.6cmのやや小振りなA類（667）と、口縁端部が細く収束する器高11.6cm、口径20.7cm、高台径11.8cm前後のやや大振りなB類（668・669）がある（第96図）。

A類は体部外面の下位に錆釉、内外面に鉄釉を施し、灰釉を流し掛けするが、口縁端部の釉は拭い取られる。B類は断面方形の高台を付す。高台を含めた内外面全面に赤褐色の鉄釉？を施し、黄灰色の灰釉？を流し掛けする。形状や釉調、胎土からA類は筒形容器（有耳壺）、B類は鉢B・桶Bとの系譜関係が類推される。670は球形で高い高台を付す中型の鉢で、片口の可能性がある。高台周辺を錆釉で化粧掛けし、内外面に鉄釉を施す。

その他、671・672は体部が筒状を呈する焼締製品である（第96図）。671は平底、672は削り込み高台で、いずれも体部から底部の外面に回転ヘラケズリを施す。大窯第3段階に相当する焼締製品（建水）の可能性もあるが、大窯期前半の遺物に含めた。

鍋・釜類

鍋（673～690）

内耳鍋（673～688）は口縁部の左右二方を押し広げて一对の紐状の横耳を付す（第97・98図）。689・690を除いて体部から口縁部が直線的で、古瀬戸後期の内耳鍋に特徴的な口縁部付近の屈曲は消失している。口縁端部は内側に緩やかに折り曲げられるものと内側に拡張されるものがある。底部外面は糸切痕未調整で、内外面全面に錆釉が施される。なお、後述の釜とは対照的に使用痕はほとんど認められない。明確ではないが、口径からおよそ25.5cm前後のもの（673～677）、22.2cm前後のもの（678～682・684～687）、18.9cm前後のもの（683・688）に大別される。

その他、689は口縁部から体部が内彎するもの、690は口縁部を有段状とするもので、鍋に含めた。内外面に錆釉を施す。

桶

桶A

桶の把手？

桶B

片口

A類

B類

焼締製品

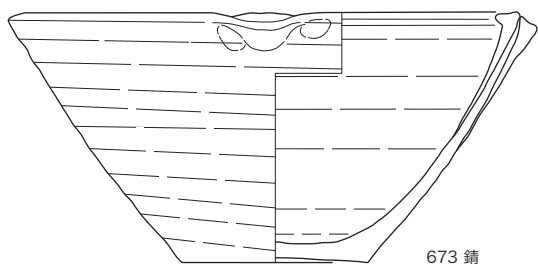
内耳鍋

使用痕跡

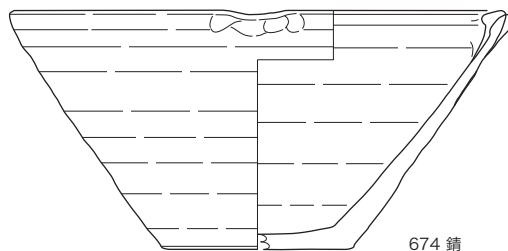
法量・器形

その他鍋

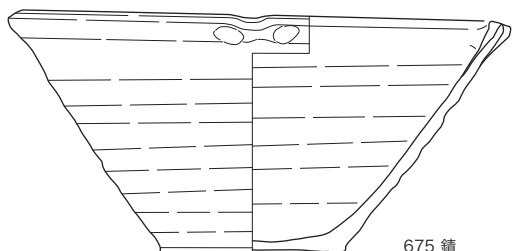
南斜面 007NR・480NR (673~683)



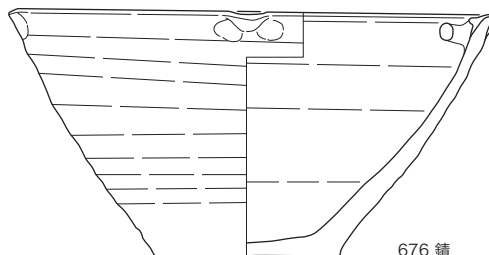
673 銅



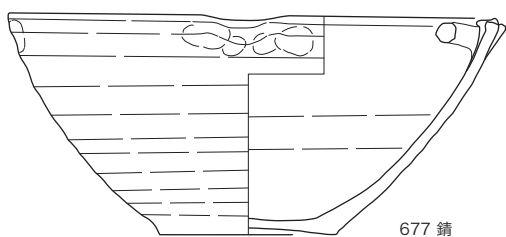
674 銅



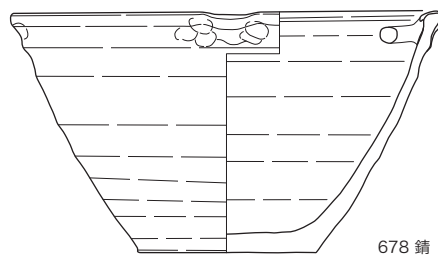
675 銅



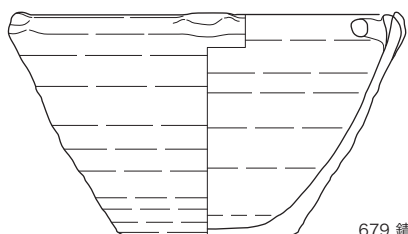
676 銅



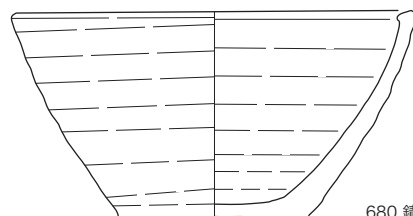
677 銅



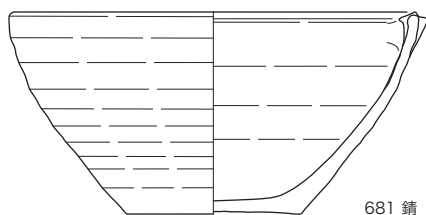
678 銅



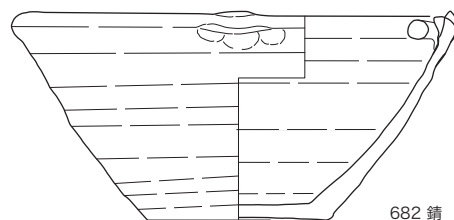
679 銅



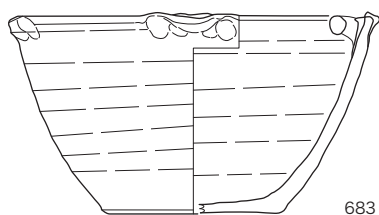
680 銅



681 銅



682 銅

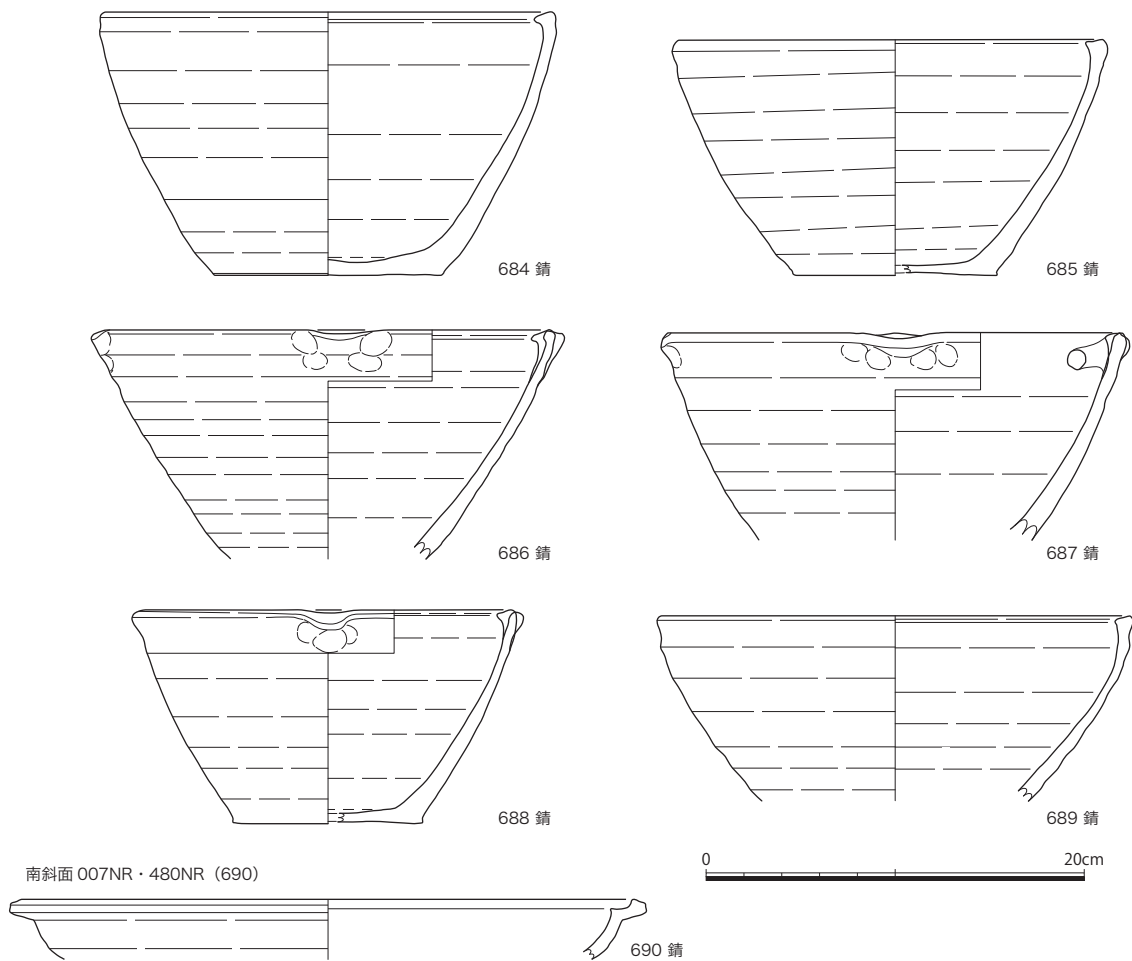


683 銅

0 20cm

第97図 鍋1 (1:4)

東斜面 330SU・380SU (684～688) その他 (689)



第98図 鍋 2 (1:4)

釜 (691～716)

釜 (691～716) は頸部から体部上半の左右二方に一对の紐状の縦耳と袋状の火覆いを付す (第 99～101 図)。口縁端部はわずかに内外に拡張される。底部外面は糸切痕未調整で、内外面全面に錆釉が施される。なお、内耳鍋とは対照的に、体部に著しくススが付着するもの (691・692・694・695 など) が少なくない。これらの付着物については、放射性炭素年代測定を実施した (第 5 章 (2) を参照)。法量は口径 14.2cm 前後、底径 12.0cm 前後で、大部分が器高 18.4cm 前後であるが、器高 14.6cm のやや扁平な個体 (698) もある。708 は釜の底部で外面に線刻がある。

釜・土瓶の蓋 (717～721)

釜か土瓶に伴う蓋 (717～721) は、皿状の器形に紐状の摘みを付した A 類 (717)、円板状の器形に乳頭状の摘みと下方に突出する返りを付した B 類 (718・719)、笠形の器形に指で摘んだ扁平な摘みを付した C 類 (720・721) がある (第 101・102 図)。A 類は釜に、B 類と C 類は後述する茶釜に伴うものと思われる。いずれも内外面全面に錆釉が施される。A 類の底部は糸切痕未調整とする。

使用痕跡

放射性炭素年代測定

法量・器形

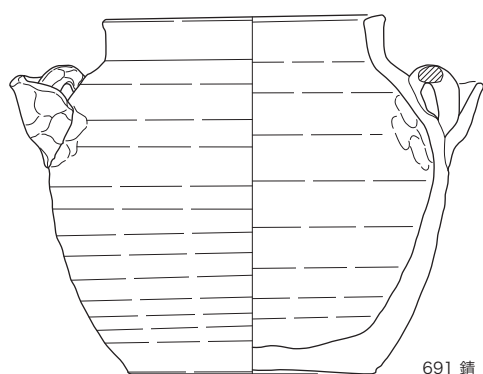
A 類

B 類

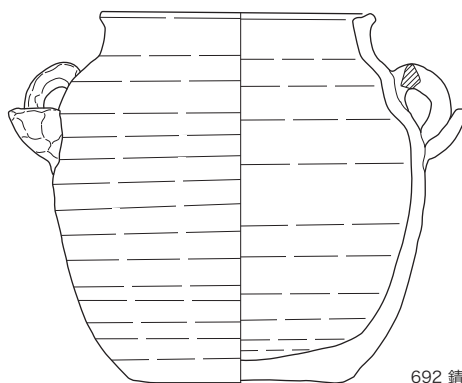
C 類

施釉・調整

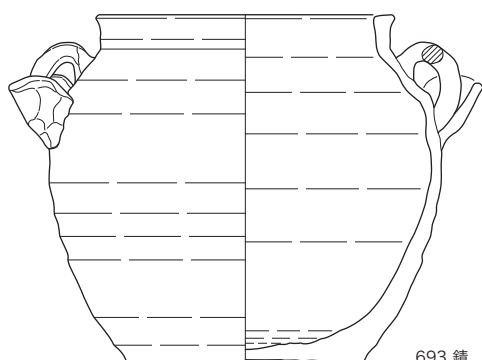
南斜面 007NR・480NR-1 (691~698)



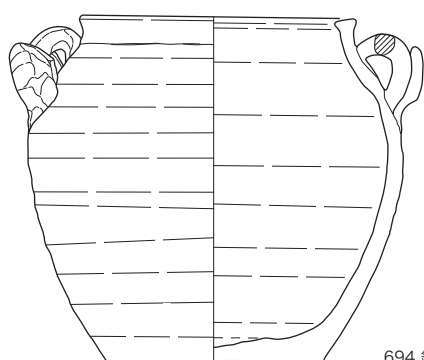
691 錆



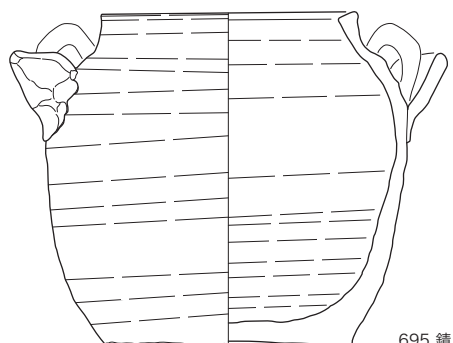
692 錆



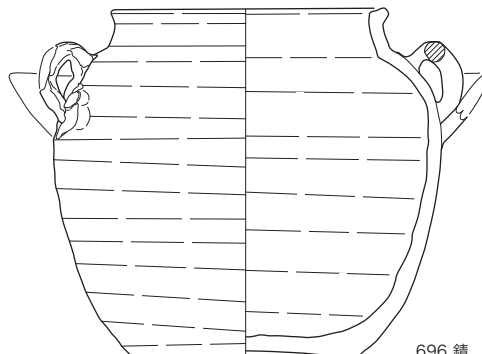
693 錆



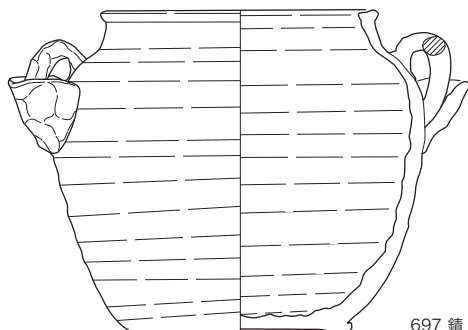
694 錆



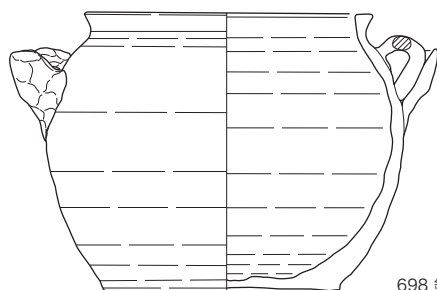
695 錆



696 錆



697 錆

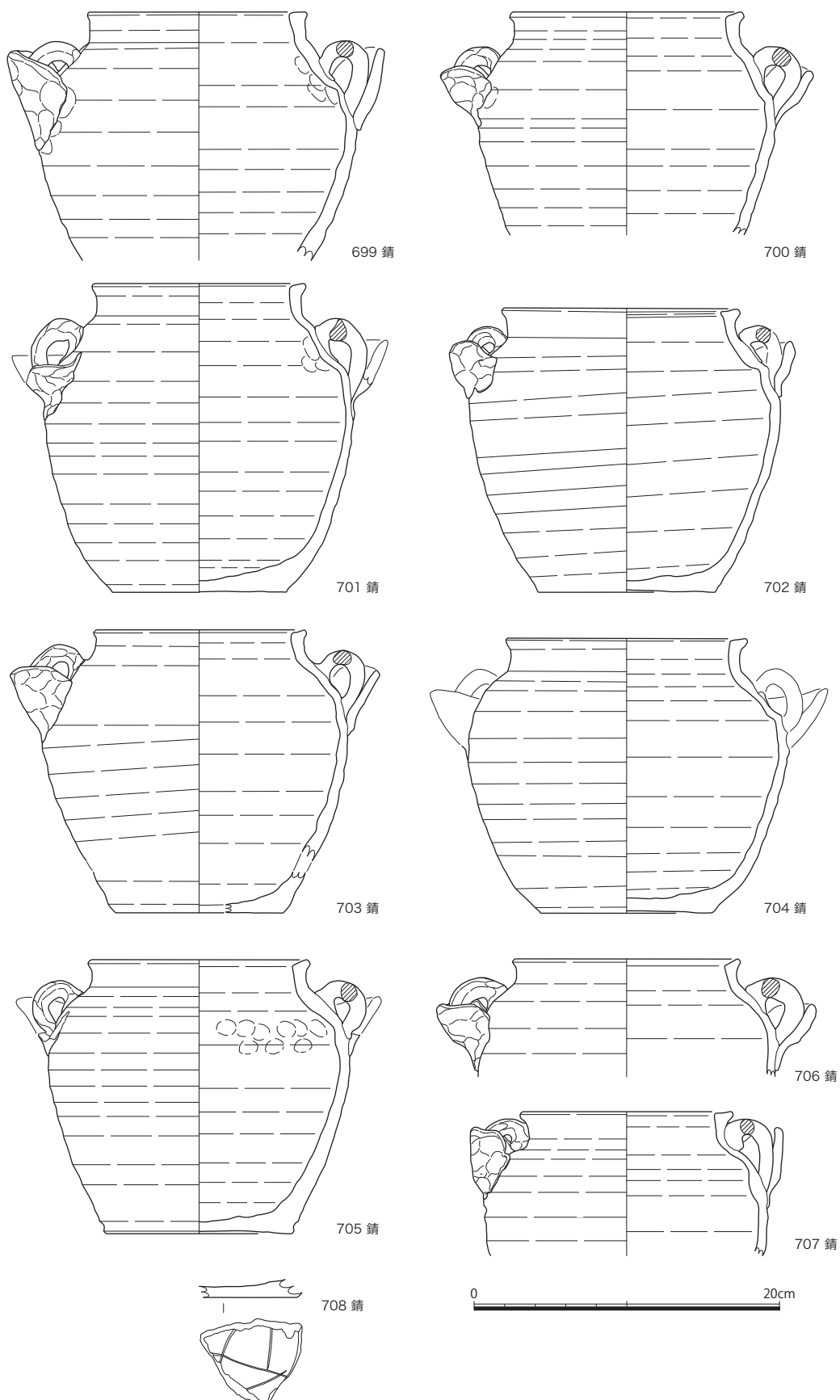


698 錆

0 20cm

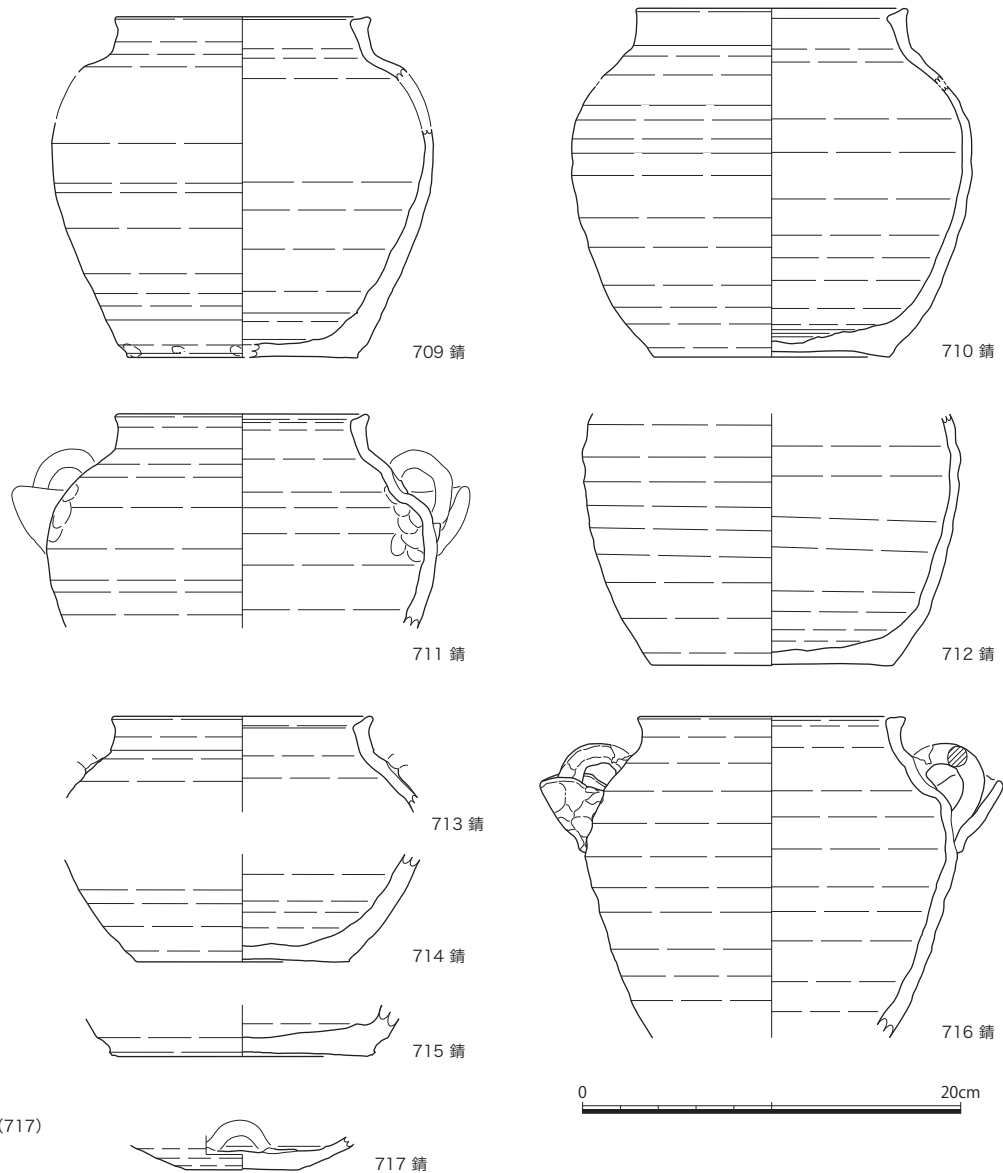
第99図 釜 1 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-2 (699・700) 東斜面 330SU・380SU-1 (701・702・704~708) その他 (703)



第100図 釜2 (1:4)

東斜面 330SU・380SU-2 (709~715) その他 (716)



その他 (717)

第101図 釜3 (1:4)

茶釜・風炉 (722~728)

茶釜A類

茶釜B類

茶釜C類

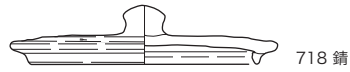
茶釜D類

茶釜 (722 ~ 727) は、体部が扁球形で口縁部が短く立ち上がる A 類 (722・723)、体部下位が直線的で口縁部が高く直立する B 類 (724)、体部が寸胴に近く口縁部が短く立ち上がる C 類 (725)、体部が扁球形で口縁部が高く直立する D 類 (726・727) がある (第 102 図)。A 類・C 類は体部中位に、B 類は体部やや上位に突帯を付す。A 類は指で摘んだ扁平な耳、C 類は紐状の縦耳、D 類は五角形の板状の耳を頸部直下の左右一対に付す。いずれも内外面全面に錆釉を施す。A 類・B 類・D 類は底部から体部の外面に回転ヘラケズリを施し、C 類は底部を糸切痕未調整とする。

風炉

体部に窓を切削したものを陶器製の風炉 (728) とした (第 102 図)。良質な胎土で、内外面に錆釉を施す。体部に回転ヘラケズリを施す。

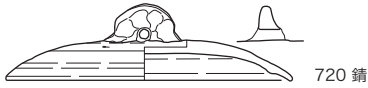
南斜面 007NR・480NR (718・719) 東斜面 330SU・380SU (720) その他 (721)



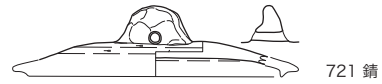
718 錆



719 錆

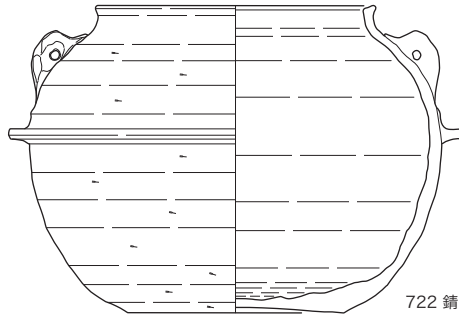


720 錆

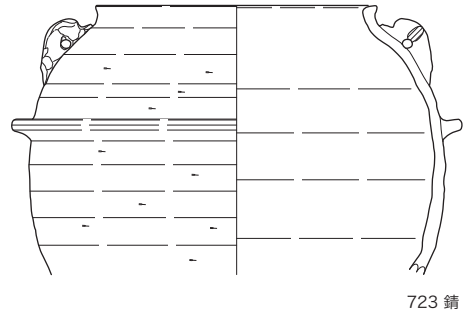


721 錆

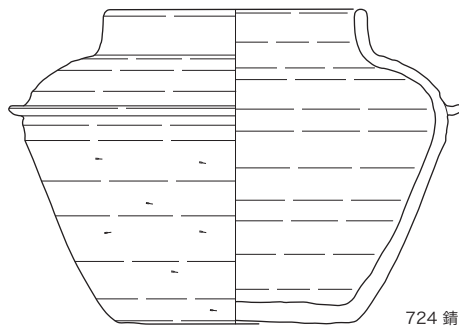
東斜面 330SU・380SU (722~725) 南斜面 007NR・480NR (726) その他 (727)



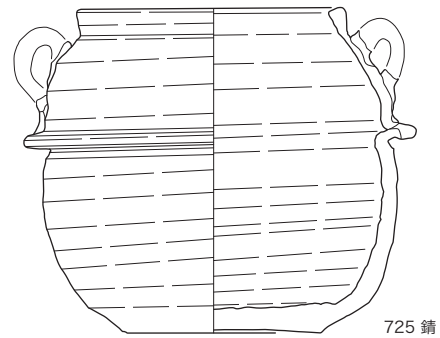
722 錆



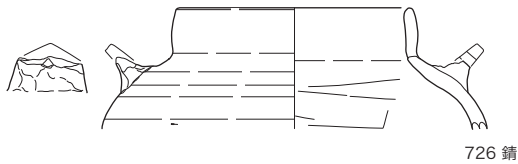
723 錆



724 錆



725 錆

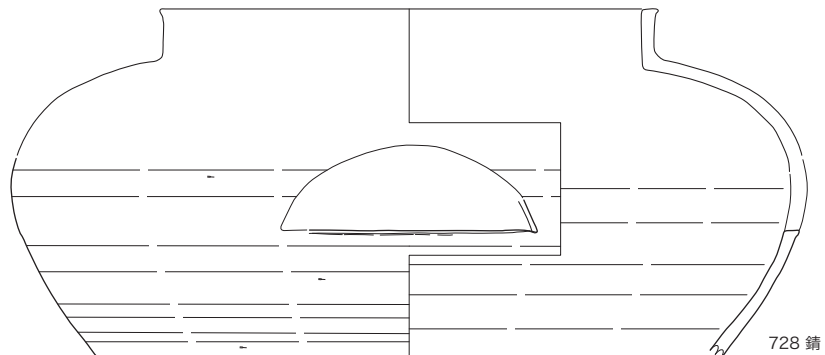


726 錆



727 錆

南斜面 007NR・480NR (728)



728 錆

0 20cm

第102図 茶釜・風炉 (1:4)

燭台・その他 (729~752)

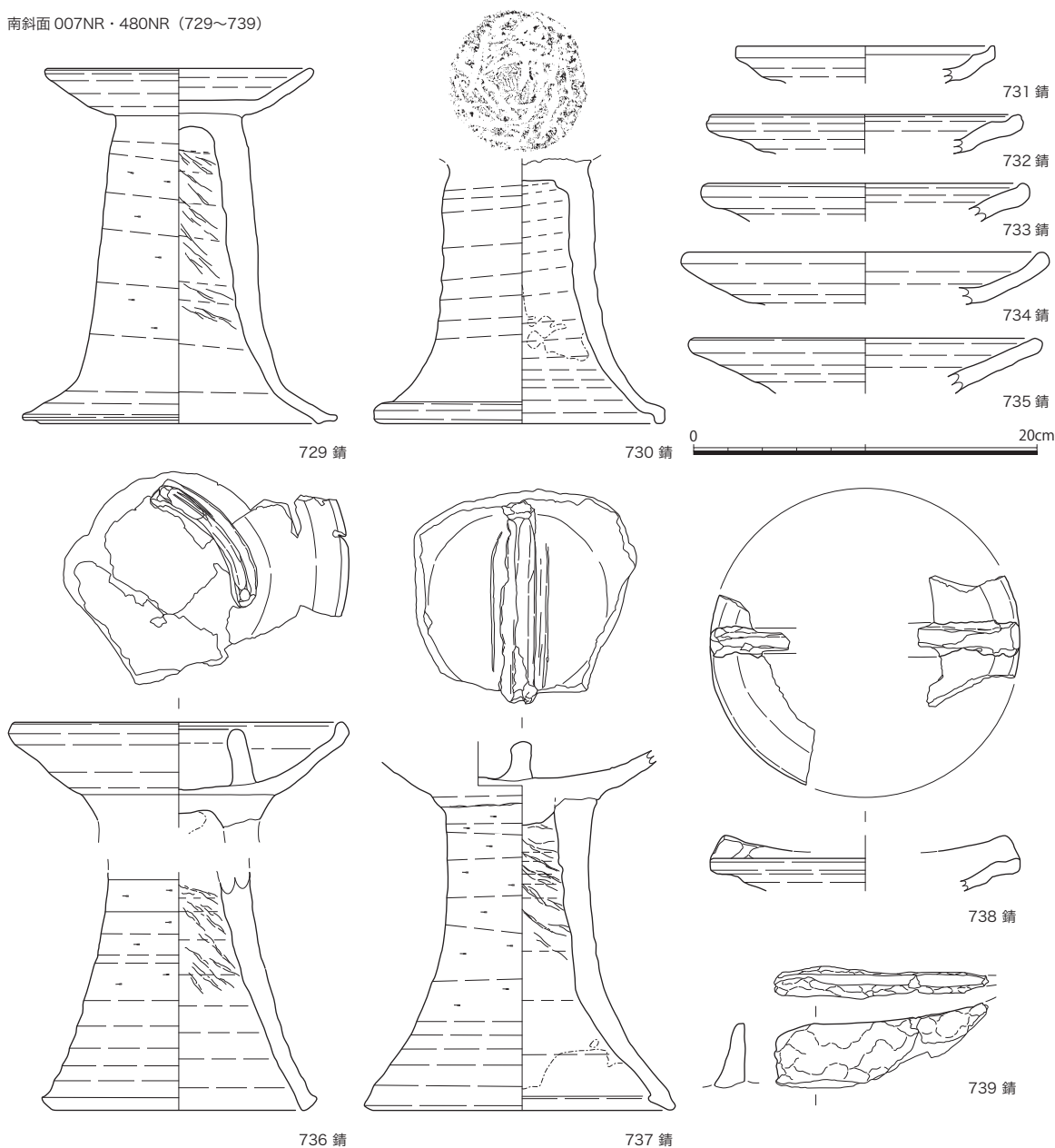
受皿部と脚部

燭台 (729 ~ 749) は浅い受皿部と高い脚部から構成される (第 103・104 図)。脚部内面の一部を除く内外面に錆釉を施すもの (729 ~ 748) がほとんどで、鉄釉を施すもの (749) はごく少ない。受皿部と脚部の接合は、細かい刻みを施して受皿部の底面と脚頂部の面を合わせる (脚頂部を閉じる) もの (729・730・736・743・748)、筒状の脚部を合わせる (脚頂部を閉じない) もの (737・740・744・745・747) がある。

受皿部

受皿部は仕切りがないもの (729・743・744)、同心円状の仕切りがあるもの (736・740)、「一」字状の仕切りがあるもの (737 ~ 739・745) があるが、灯火機能との関係は明確でない。受皿部にはススが付着するものも多いが、破断面にまで付着するものがある (729・734・736・737 など)。なお、743 の受皿部に付着した煤については、放射性

南斜面 007NR・480NR (729~739)



第103図 燭台 1 (1:4)

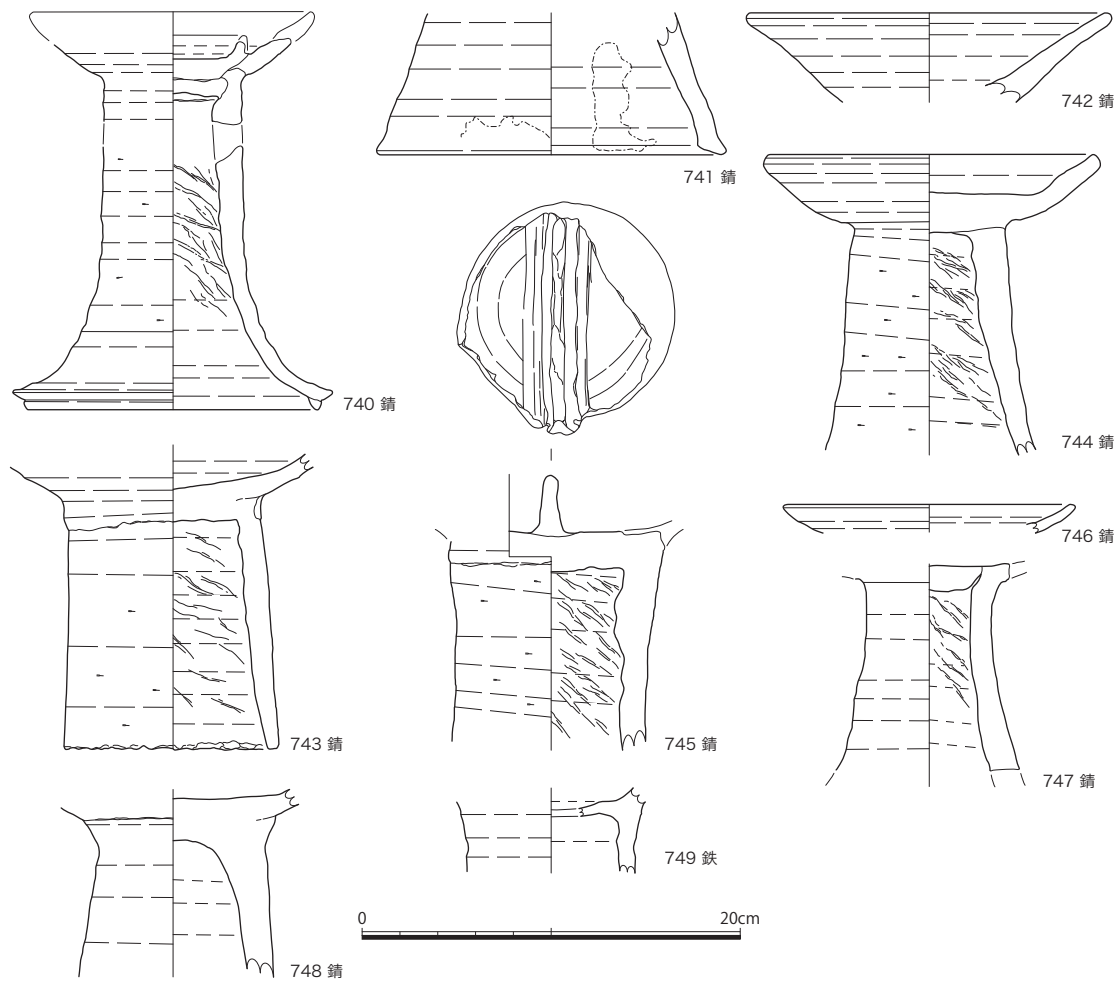
炭素年代測定を実施した（第5章（2）を参照）。

脚部は大きく外反する形状（729・730・737・740）、直線的に開く形状（736・脚部
741）、直立気味の形状（743）がある。脚部外面には回転ヘラケズリを施し、内面には成
形時の絞り痕を残すものが多い。743 は脚端部を未調整とする。

750 は縦方向の細長い窓を穿つ円筒状の器形で、内外面に薄い錆釉？を施す（第104図）。 灯籠？
外面は回転ヘラケズリを施す。窯道具の可能性もあるが、灯籠とした。

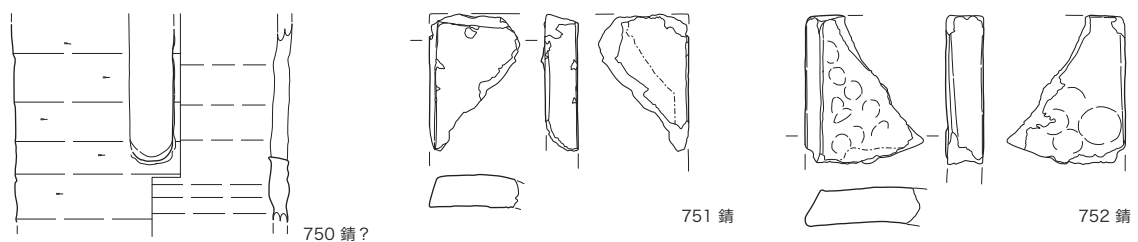
751・752 は錆釉を施した瓦であるが、大窯期後半以降に帰属する可能性もある（第 瓦？
104 図）。

東斜面 330SU・380SU（740～745・749） その他（746～748）



南斜面 007NR・480NR（750）

その他（751） 南斜面 007NR・480NR（752）



第104図 燭台2・灯籠・瓦（1:4）

壺・甕類

甕（753～784）

法量	甕は口径 19cm 程度の通有のものと口径 27cm 程度のやや大型のもの（757 など）がある（第 105 ～ 109 図）。底部外面周辺を除く内外面に光沢がない褐色の鉄釉？を施し、
施釉	灰黄色の灰釉？を流し掛けするものが多い。その他、底部を含めた内外面全面を施釉するもの（777）、錆釉を施すもの（780）がある。体部から底部の外面に回転ヘラケズリを施す。
口縁部の形状	口縁端部は内外に拡張され端部直下が突出するものが多い。その他、口縁端部が内外に拡張されるのみのもの（763）、端部が折り返されるだけのもの（764・780・781）がある。
印花文	755 は頸部の一方向に梅の印花文を押印する特徴的な個体である。

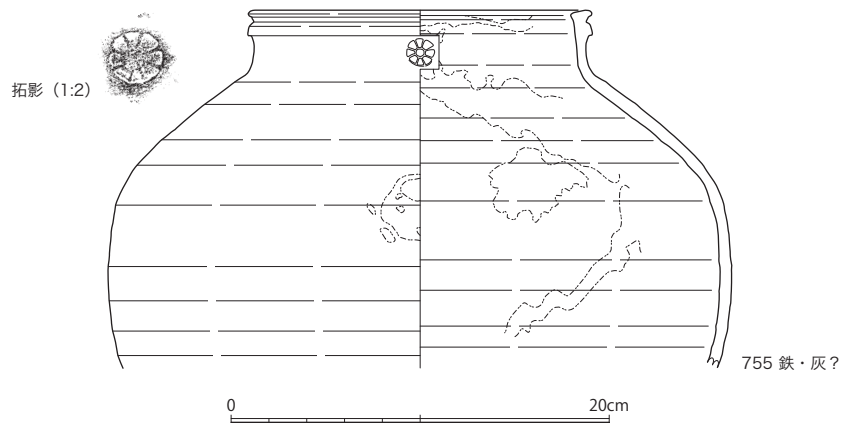
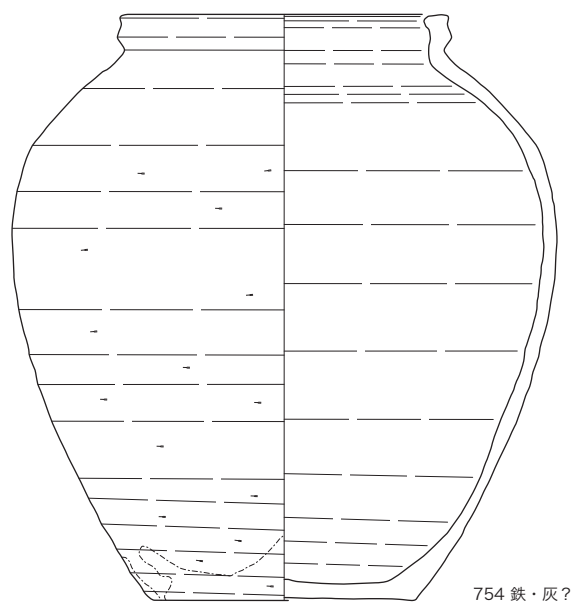
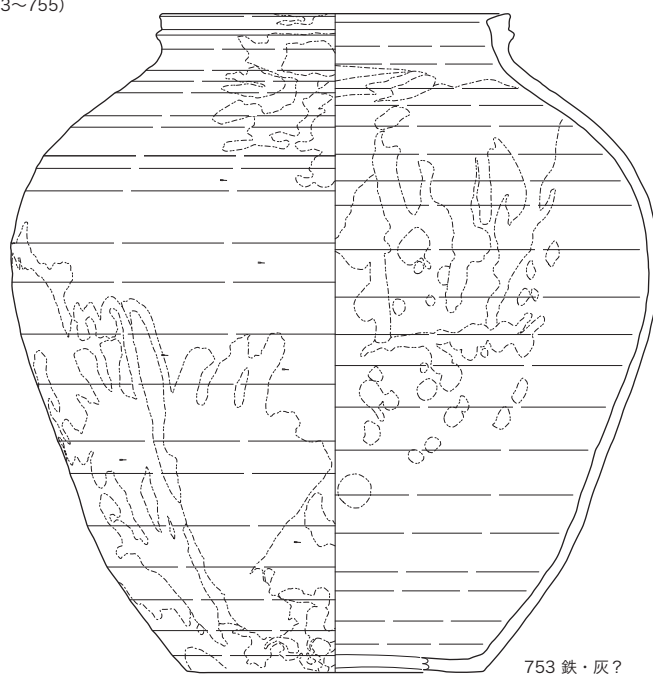
茶壺（785～798）

祖母懷土	茶壺（祖母懷茶壺）は、鉄分が多く含まれ可塑性に優れた祖母懷土を用いているが、「祖母懷」銘が認められる個体はない（第 110・111 図）。体部から底部の外面には丁寧な回転ヘラケズリが施され、器壁が薄く仕上げられている。法量からは、器高 36cm 程度の通有のものと器高 26cm 程度のやや小型のもの（786）に区分され、さらに三耳壺（785）と四耳壺（786 ～ 789・791・794 ～ 796）の両者がある。
法量	耳は振りを加えた縦耳（785 ～ 789）、振りを加えない縦耳（794・795）、横耳（796）がある。底部を含む外面から口縁部付近の内面にかけて錆釉（薄い鉄釉）を施し、体部上半を中心に灰色の灰釉？を流し掛けするものが多いが、錆化粧を施し、鉄釉を施釉するもの（793）、底部外面周辺を露胎とし、甕と同様の光沢がない褐色の鉄釉？に灰黄色の灰釉？を流し掛けするもの（794）がある。785・788・791 は四方（三方）の縦耳と交互に灰釉？が流し掛け（掛け分け）られている。なお、底部外面の釉を拭き取るもの（786・788）と拭き取らないもの（796）がある。口縁部は端部が内外に拡張されるものが多く、その他、玉縁状に折り返されるもの（790・793）、鰐状に引き出されるもの（796）がある。
三耳壺	
四耳壺	
振り・縦耳・横耳	
施釉	798 は体部上位に低い突帯を付す。796 は範囲確認調査時に T 11 より出土、採取したもので、容器内に火葬骨が遺存していた。
流し掛け？	
口縁部の形状	
火葬骨	

有耳壺・筒形容器（799～816）

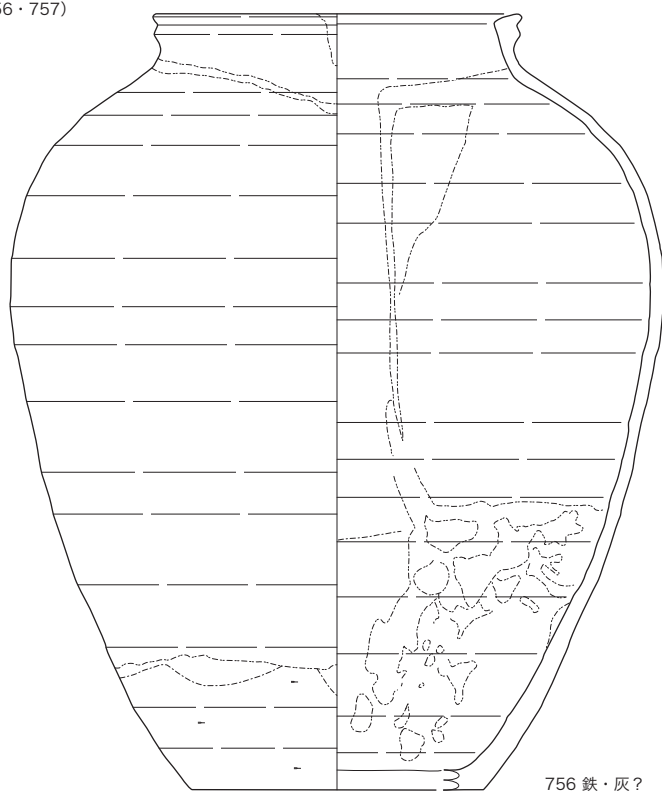
有耳壺	有耳壺（799 ～ 801・813）は頸部付近に左右一対の横耳を付すもので、頸部の括れはほとんど失われている（第 112 図）。底部付近の外面と口縁部付近から体部上位を除く内面を露胎として、内外面に鉄釉を施す。口縁端部の釉は拭き取られる（800）。底部は糸切痕未調整とする（801・813）。古瀬戸後Ⅳ期新段階に相当する。
筒形容器	（焼締製品の 671・672 を除く）筒形容器（802 ～ 812・814 ～ 816）は、糸切痕未調整で底部外面周辺を露胎とする A 類（802 ～ 812）、底部から体部外面にかけて回転ヘラケズリを施し、錆化粧に鉄釉を施す B 類（814 ～ 816）がある（第 112 図）。A 類は有耳壺からの系譜関係が類推されるもので、口縁端部の釉は拭き取られるものが多い。内面の底部や体部に団子トチが残されてるものが多く、口縁端部の重ね焼き痕から、同一器種を積み上げて焼成されたものと思われる。なお、805 の底部は打ち欠かれている。B 類は A 類と比較して精緻で、桶 A にも近い。814 は灰釉が流し掛けられる。
A 類	
B 類	
底部の打ち欠き	

南斜面 007NR・480NR-1 (753~755)

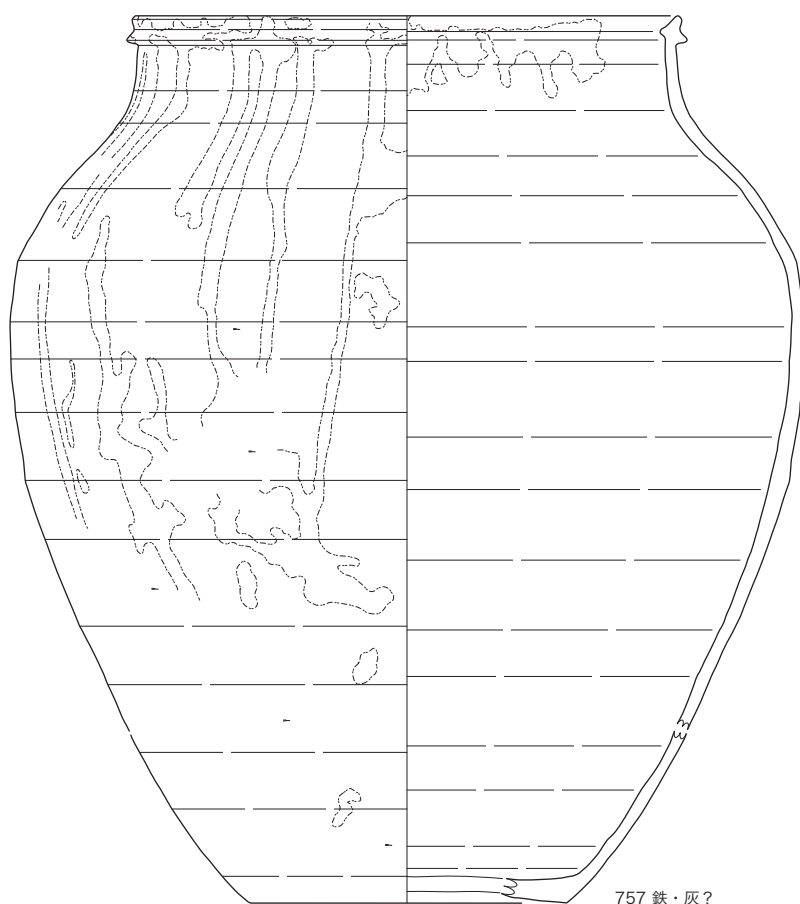


第105図 甕1 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-2 (756・757)



756 鉄・灰?

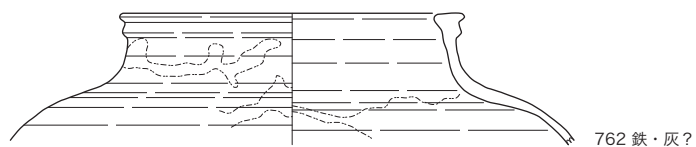
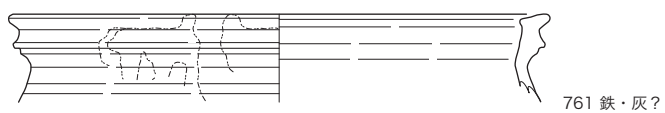
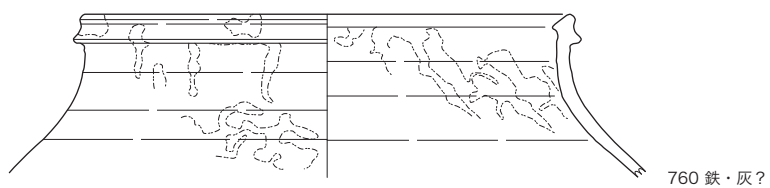
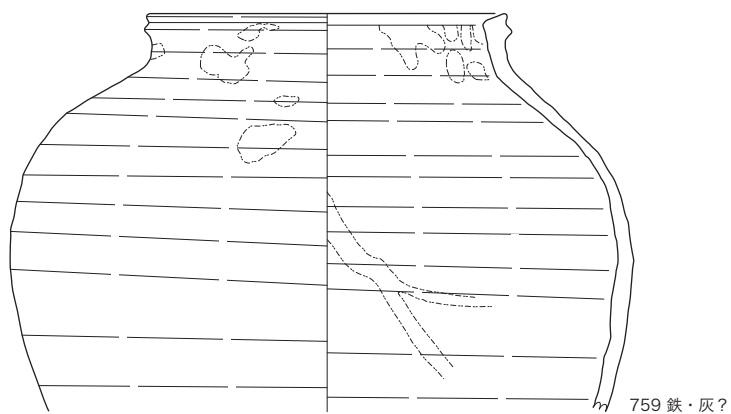
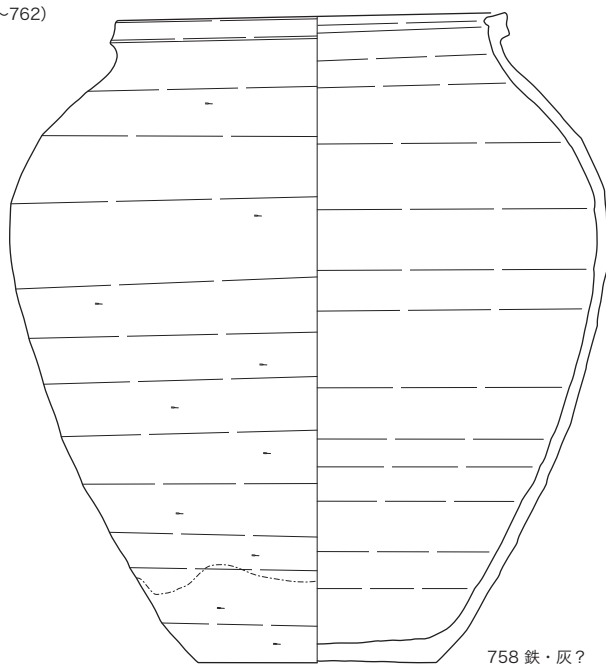


757 鉄・灰?

0 20cm

第106図 甕2 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-3 (758~762)

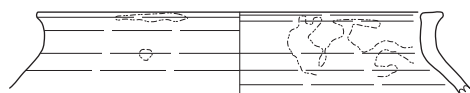


0 20cm

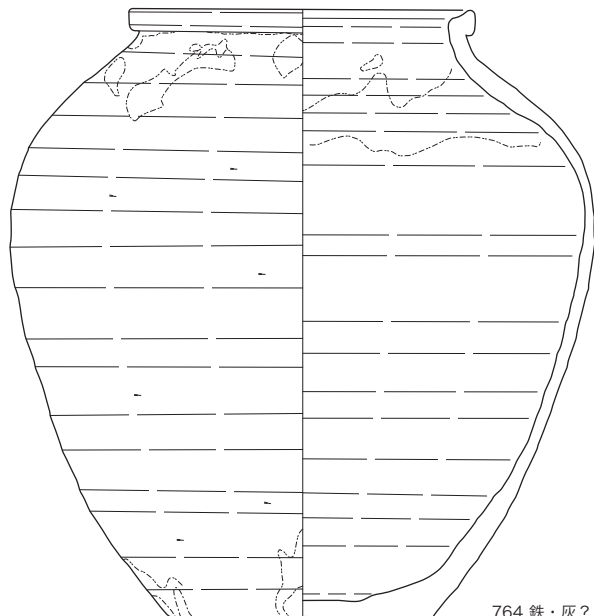
第107図 甕3 (1:4)

上品野西金地遺跡

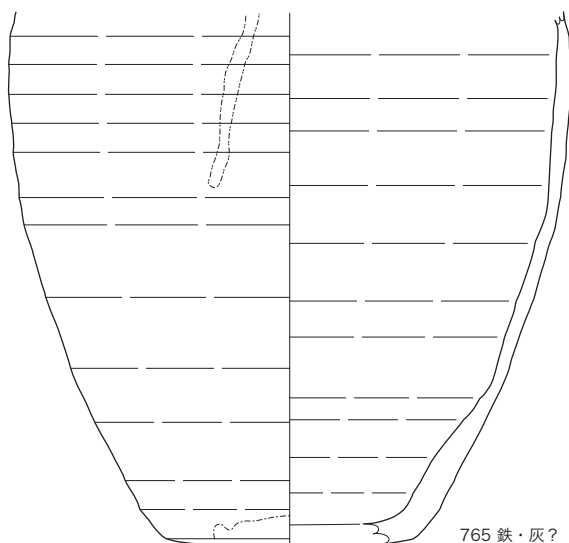
南斜面 007NR・480NR-4 (763~769)



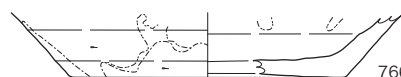
763 鉄・灰?



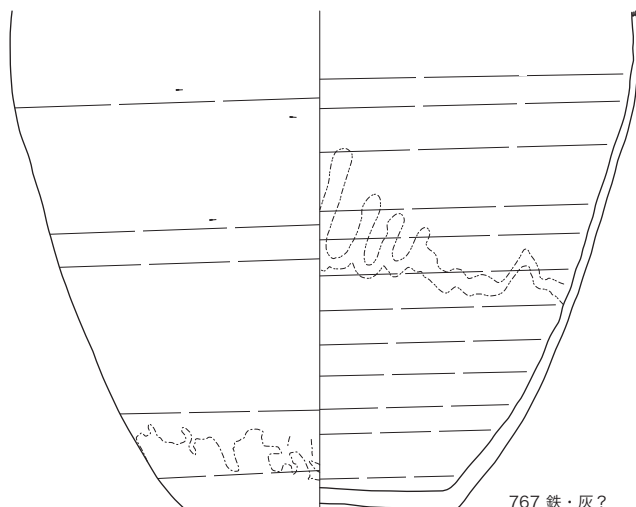
764 鉄・灰?



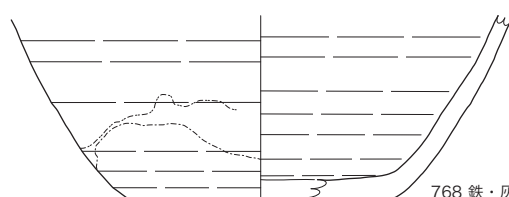
765 鉄・灰?



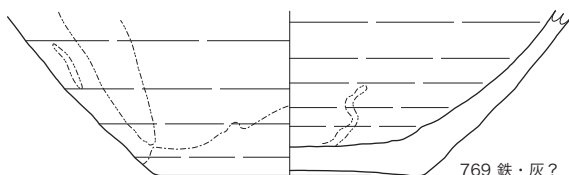
766 鉄・灰?



767 鉄・灰?



768 鉄・灰?

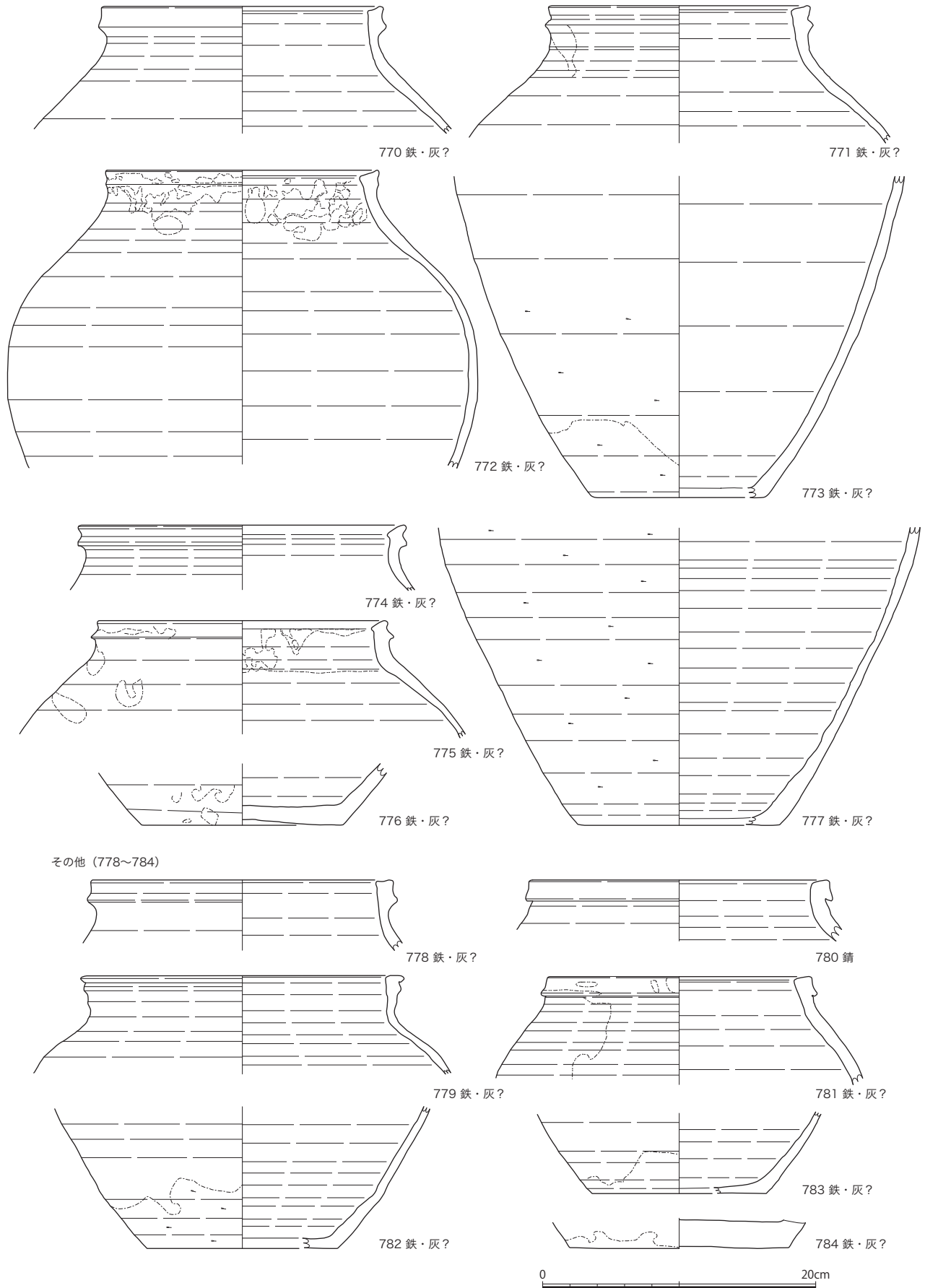


769 鉄・灰?

0 20cm

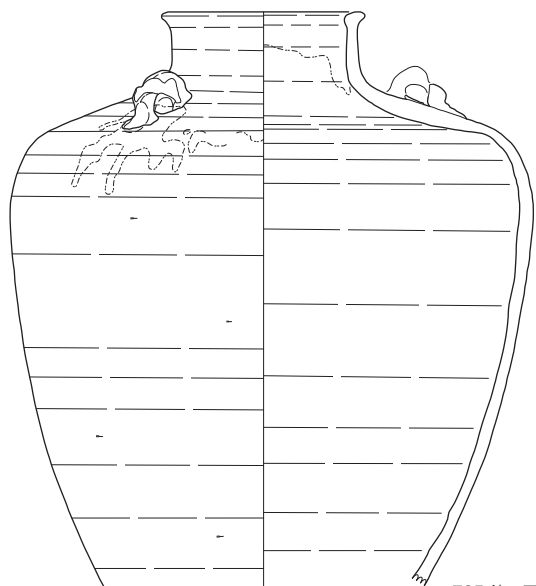
第108図 甕4 (1:4)

東斜面 330SU・380SU (770~777)

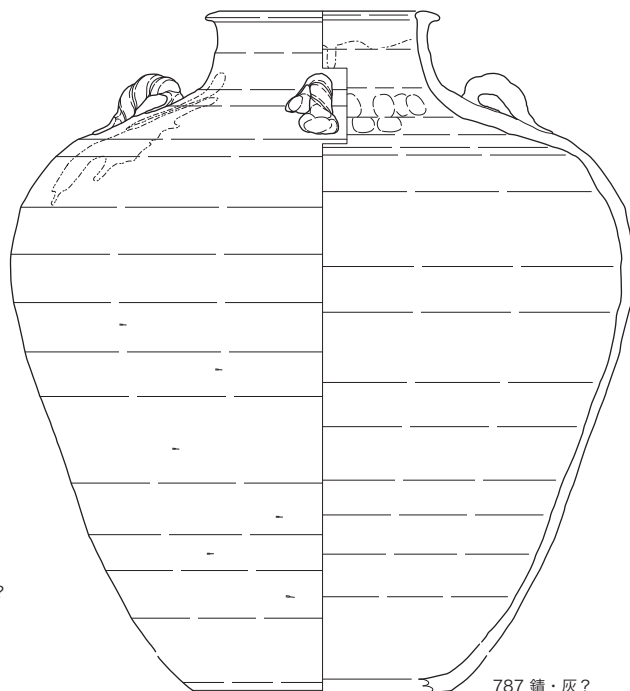


上品野西金地遺跡

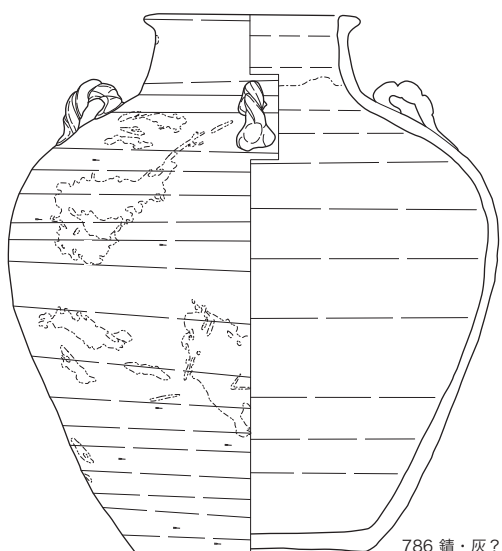
南斜面 007NR・480NR-2 (785~790)



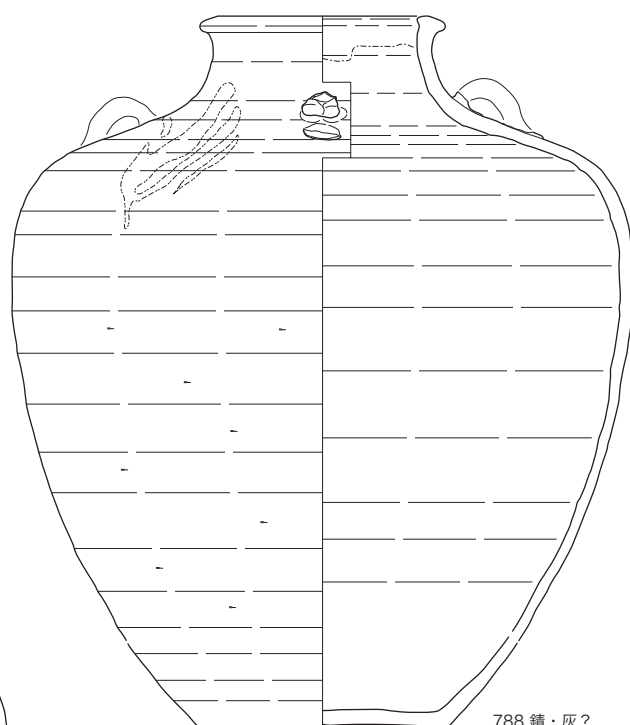
785 錆・灰?



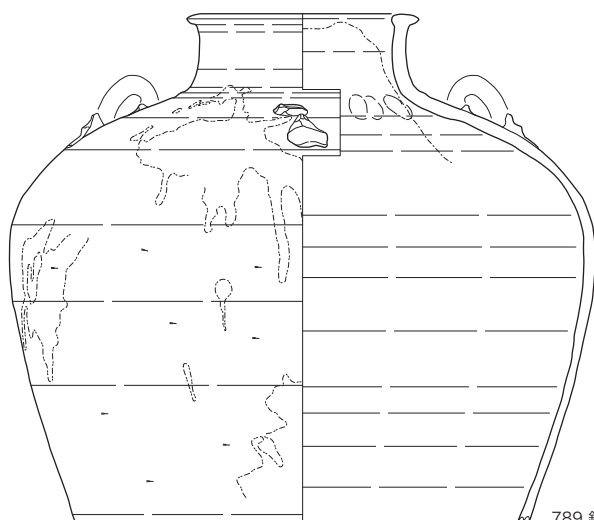
787 錆・灰?



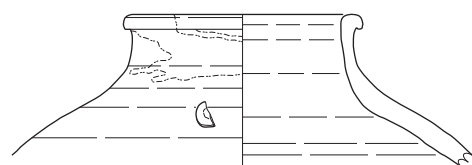
786 錆・灰?



788 錆・灰?



789 錆・灰?

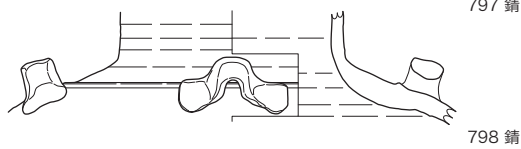
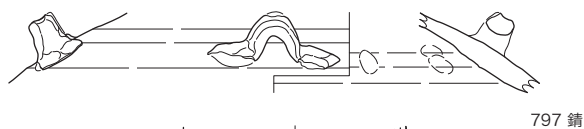
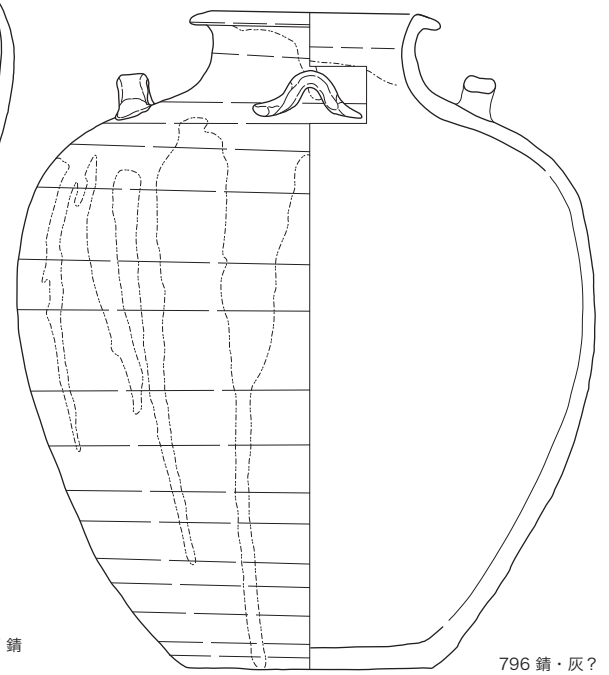
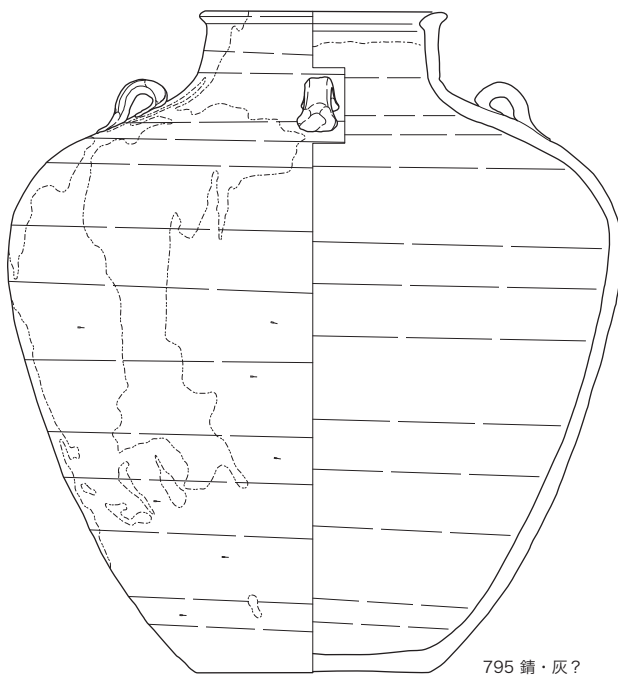
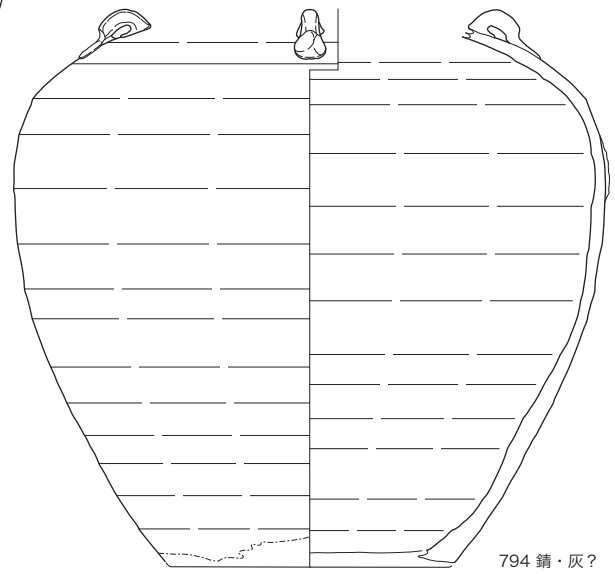
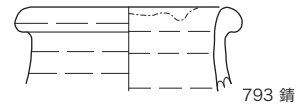
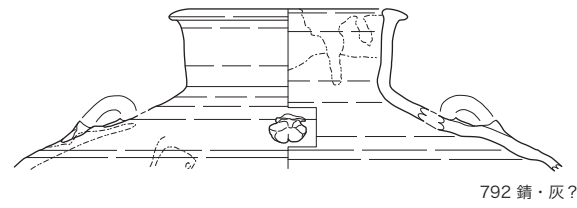
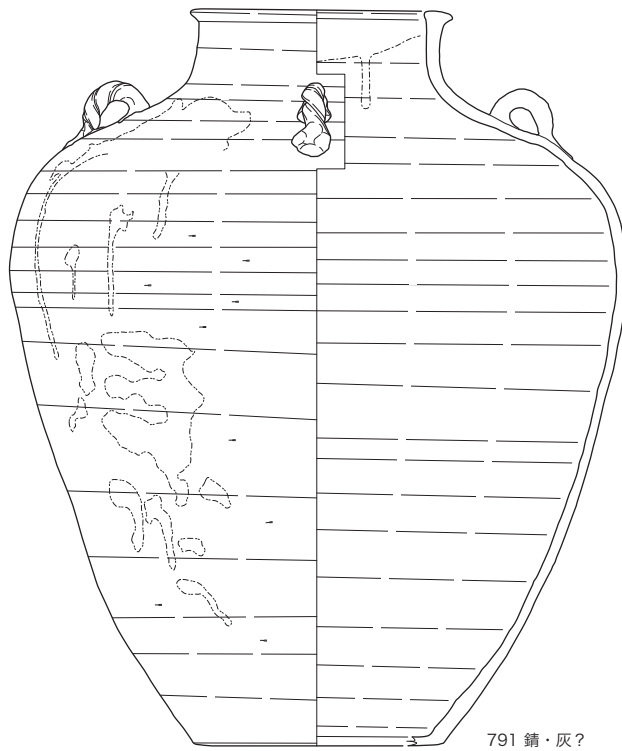


790 錆・灰?

0 20cm

第110図 茶壺1 (1:4)

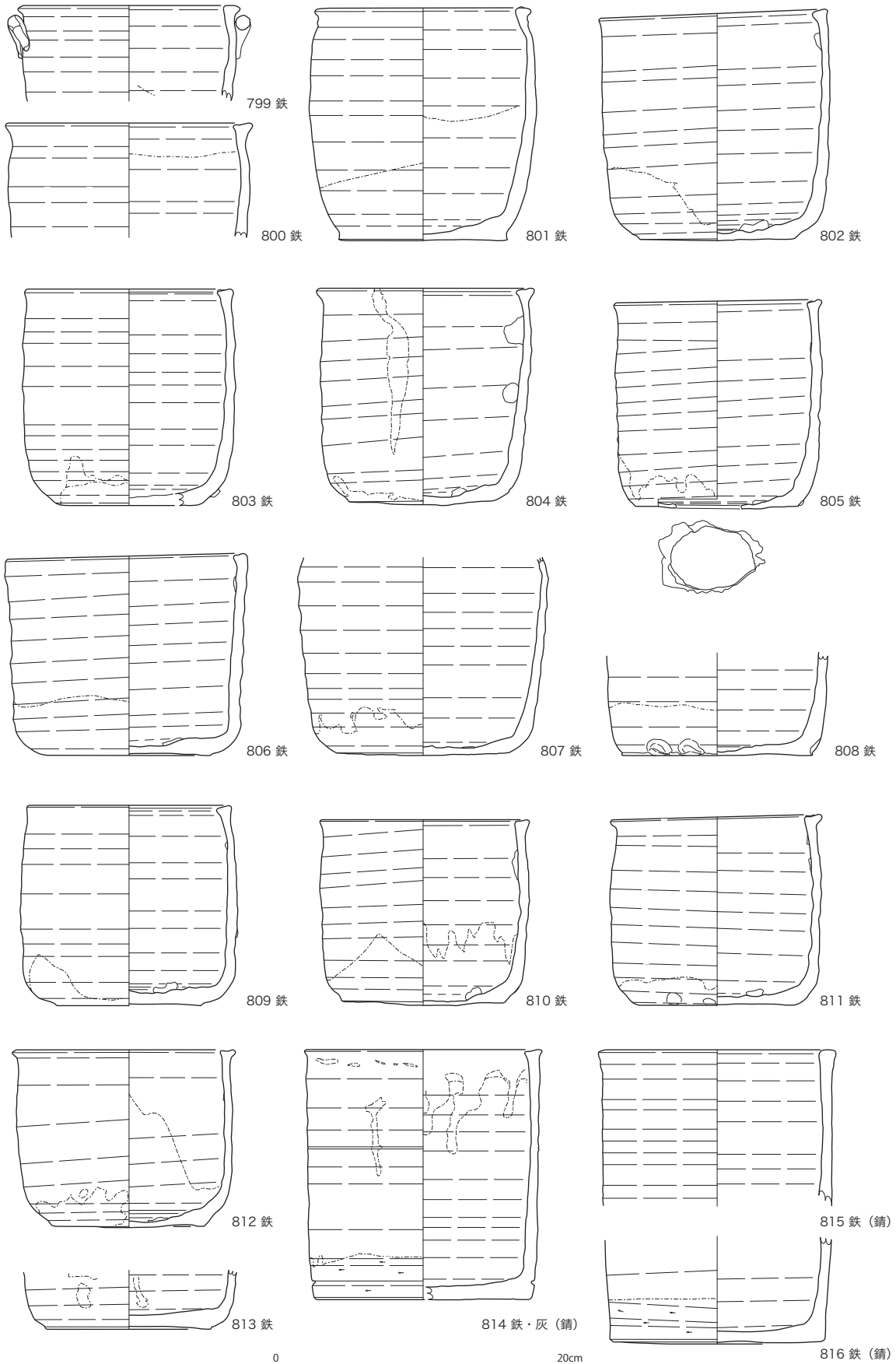
南斜面 007NR・480NR-2 (791・794~798) その他 (792・793)



0 20cm

第111図 茶壺2 (1:4)

その他 (799・807・813) 南斜面 007NR・480NR (800・802~806・808~812・814~816) 東斜面 330SU・380SU (801)



第112図 有耳壺・筒形容器 (1:4)

徳利・双耳徳利（817～861）

徳利（817～856）は平底で底部外面周辺を錆釉で化粧掛けし、鉄釉を施すA類（817～834・838～856）、平底で底部外面周辺を露胎とするB類（835・836）、削り込み高台で高台周辺を露胎とするC類（837）がある（第113・114図）。A類が大部分で、B類とC類はごく少ない。A類は口縁部が有段となるもの（817～819・838・849）と単純に外反するもの（820～822・825・839）がある。体部から底部の外面に回転ヘラケズリを施し、体部外面下位には筒形容器と重ね焼きした痕跡を残すものが多い。なお、856は小型で底部内面の削り込みが浅い削り込み高台とするが、徳利A類とした。B類は寸胴に近く、肩が張る器形で、底部は糸切痕未調整とする。C類はA類、B類と比較して法量が小さい。

A類

B類

C類

口縁部の形状

体部上位に左右一対の横耳を付す双耳徳利（857～861）は、体部から口縁部付近内面にかけて鉄釉を施すもの（857～860）に加えて、内外面に鉄釉を施すもの（861）がある（第114図）。前者は肩が張らないもの（857・858）と肩が張るもの（860）がある。良質な胎土を使用し、底部外面（859・860）は露胎で回転ヘラケズリを施すが、860は中央付近に糸切痕を残す。なお、858と859は同一個体の可能性がある。後者は双耳壺（862～868）に器形が類似するが、肩が張らない器形の特徴と釉調から双耳徳利に含めた。振りを加えた横耳を付す。

双耳徳利

その他壺類（862～880）

その他壺類として、双耳壺（862～868）、口広有耳壺（869・870）、四耳壺（871）、小壺・水滴・耳付水注（872～880）がある（第115図）。

体部上位に左右一対の横耳を付すもので、徳利と比較して底部が相対的に小さい器形のものを双耳壺（862～868）とした。大型で肩が張らないA類（862～864）と小型で肩が張るB類（865～868）がある。いずれも内外面に光沢がない褐色の鉄釉？を施し、灰黄色の灰釉？を流し掛けする。A類は口頸部が直立、あるいはわずかに内傾し、口縁端部は玉縁状に折り曲げられる。864の横耳には放射状の刻みがある。B類は口頸部が短く、口縁端部は玉縁状に肥厚する。底部外面付近は露胎で、糸切痕未調整とする。

双耳壺

A類

B類

口広有耳壺（869・870）は内外面全面に鉄釉を施す。四耳壺（871）は口縁部が玉縁状で、内外面に錆釉（薄い鉄釉）を施す。

口広有耳壺

小壺（872～875・879）は耳付水注の可能性があるもの（873～875・879）も含めた。水滴（876）、耳付水注（877・878）を含めて底部は糸切痕未調整とする。底部外面周辺を除く内外面に錆釉（872・878・879）、灰釉（873～875）、鉄釉（876・877）を施す。茶入（880～887）

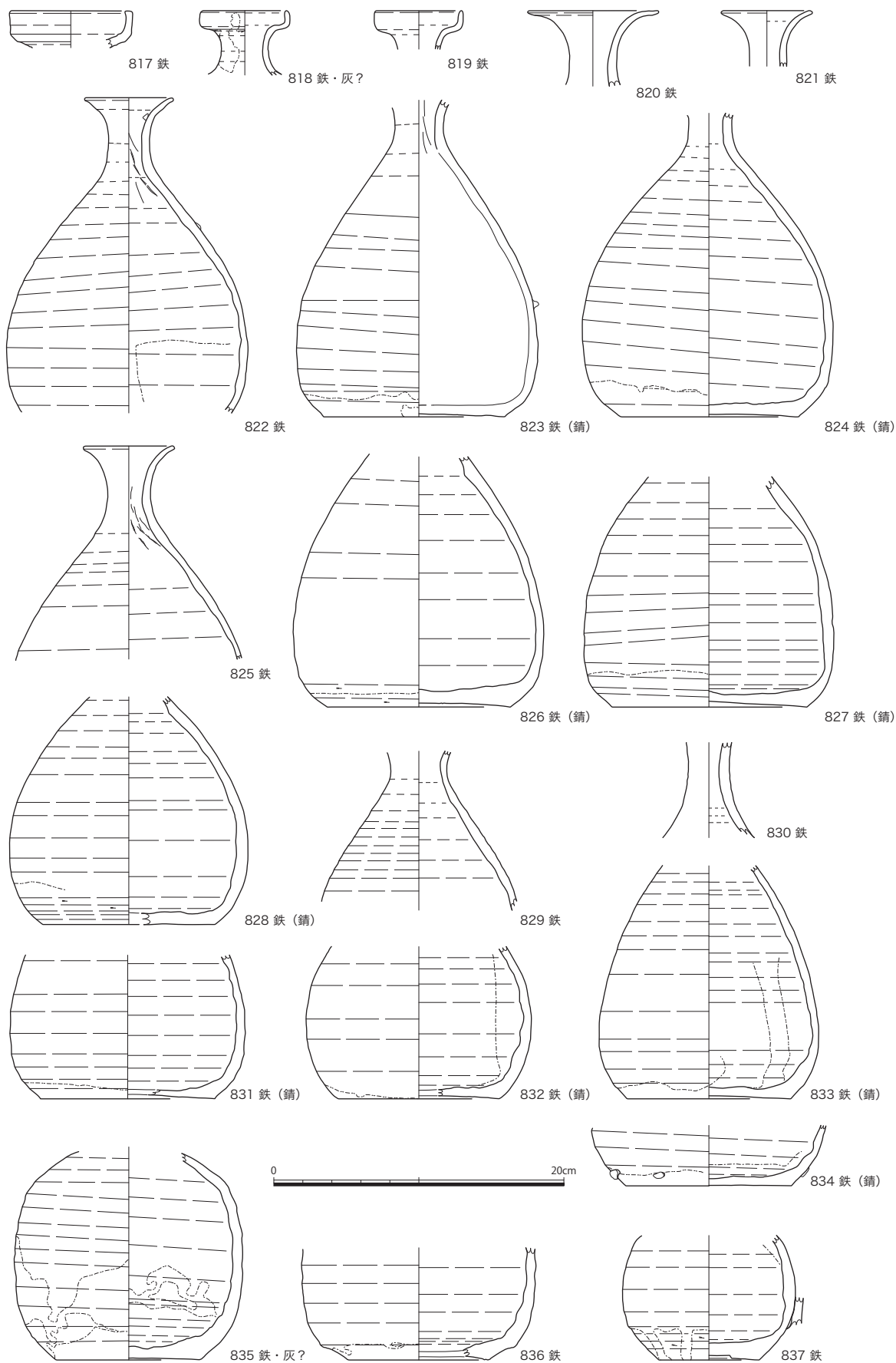
小壺

水滴・耳付水注

茶入（880～887）は大窯期後半以降のものとの区別が難しいが、相対的に精緻な個体を大窯期前半とした（第115図）。大海形または丸壺形（880）と芋子形または肩衝形（881～887）がある。底部は糸切痕未調整とする。底部外面周辺付近を除く内外面に鉄釉を施すもの（880・881・883～885）と口縁部付近を除く内面を露胎とするもの（882・886・887）がある。良質な胎土を使用した器壁がごく薄いもの（887など）も少なくない。

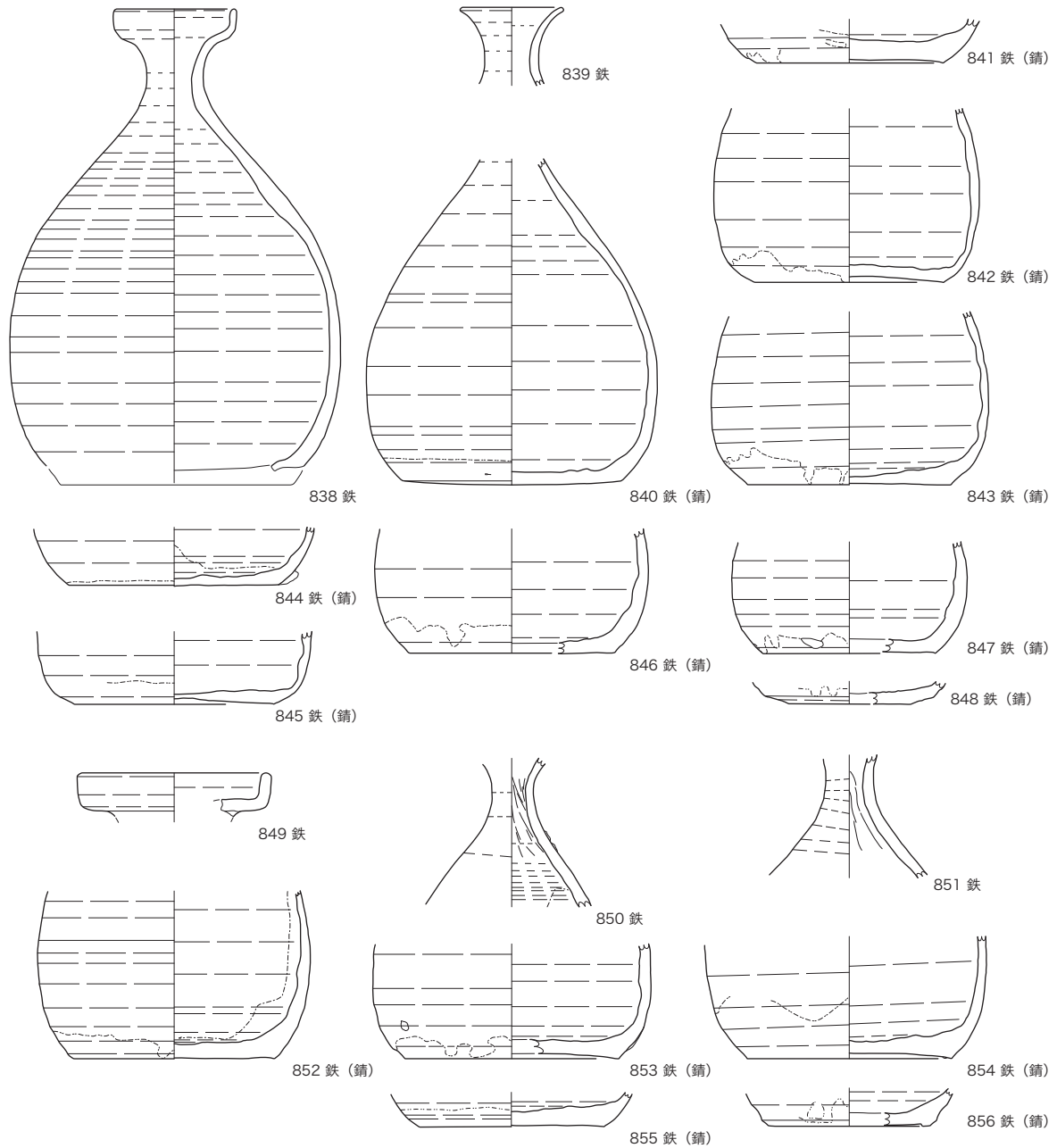
大海形・芋子形

南斜面 007NR・480NR (817~837)

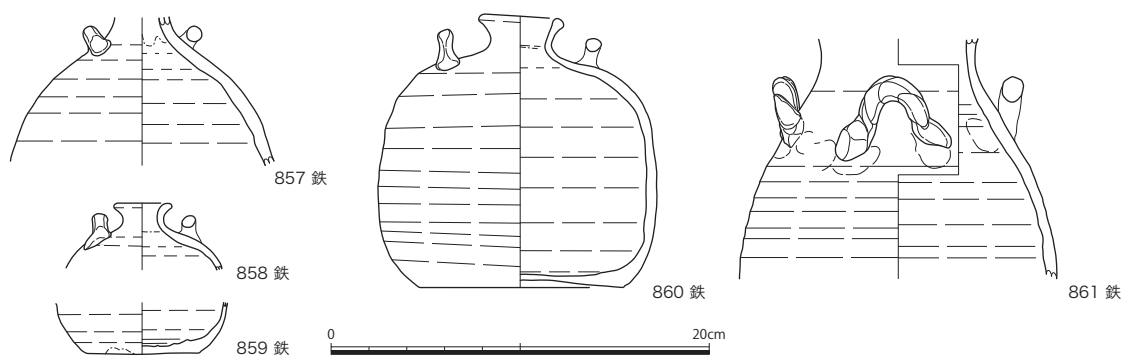


第113図 徳利 1 (1:4)

東斜面 330SU・380SU (838~848) その他 (849~856)



南斜面 007NR・480NR (857~860) 東斜面 330SU・380SU (861)

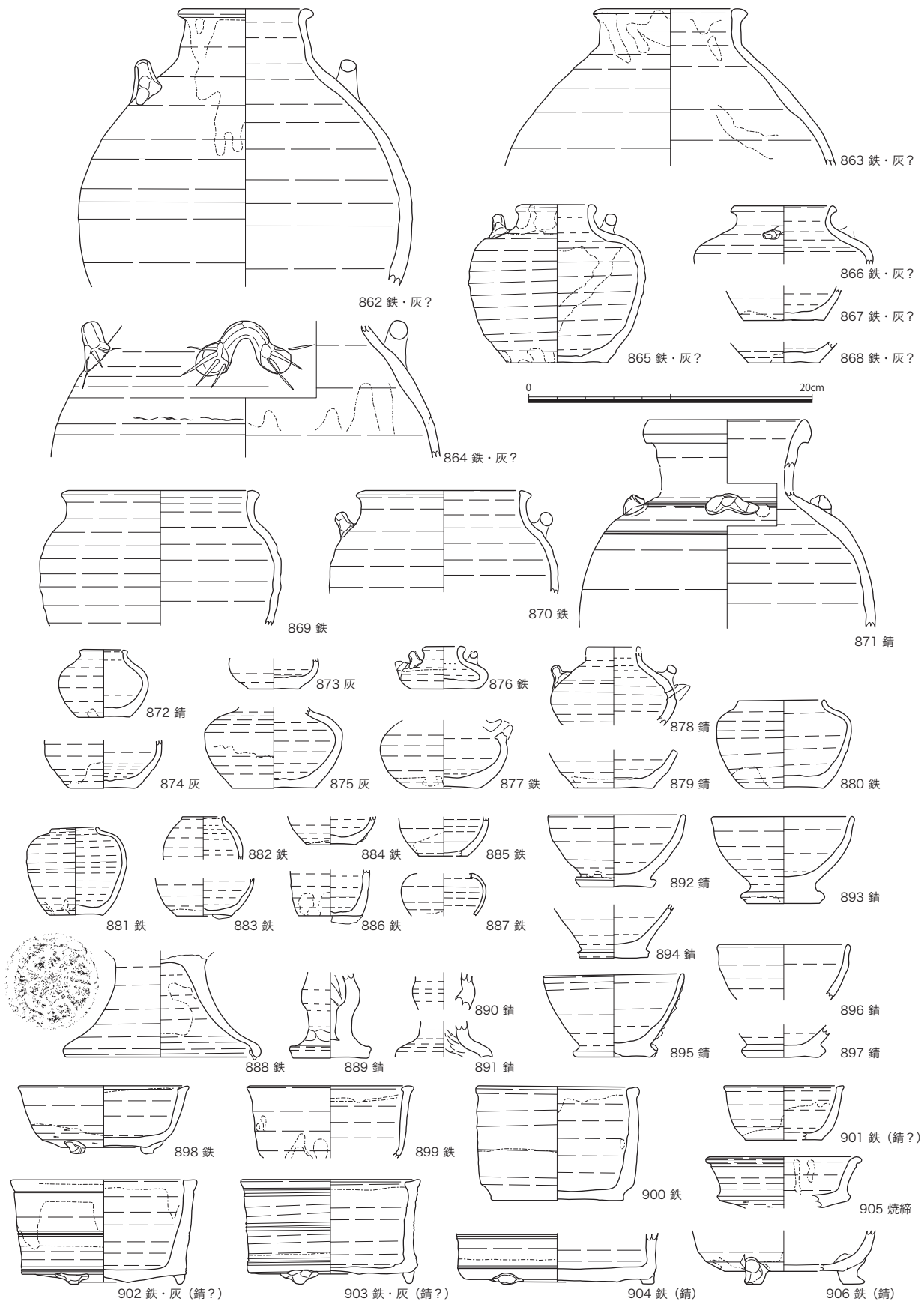


第114図 徳利2 (1:4)

上品野西金地遺跡

南斜面 007NR・480NR (862・865~868・869・872・874~878・881~884・886・888・892~894・901~903・905)

東斜面 330SU・380SU (863・870・871・879・880・885・889・890・895~897・906) その他 (864・873・887・891・898~900・904)



第115図 その他壺類・茶入・宗教具 (1:4)

宗教具・その他 (888～910)

宗教具として、花瓶 (888～891)、仏餉具 (892～897)、香炉 (898～906)、狛犬 (907・908) がある (第115・116図)。その他の製品として、動物形水滴がある (第116図)。

花瓶 (888～891) は大型、高脚で鉄釉を施したもの (888)、錆釉を施した小型仏花瓶 (889～891) がある。

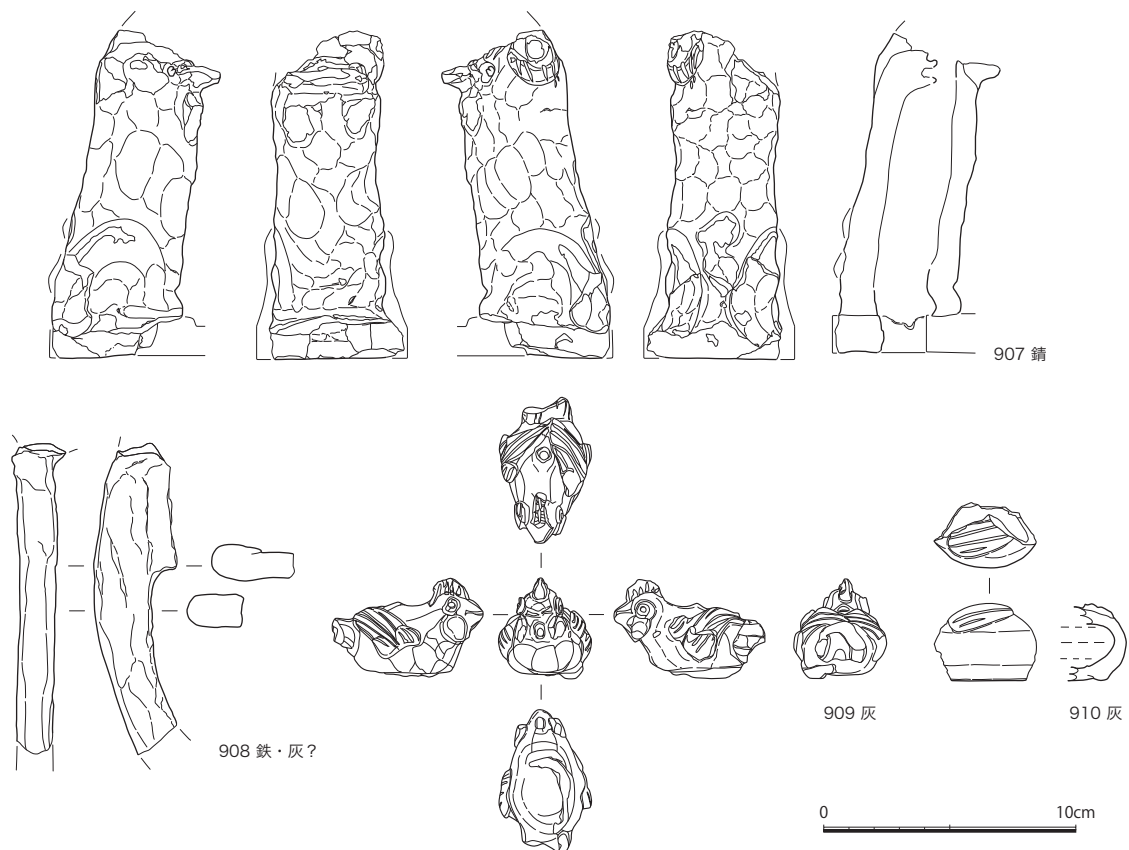
仏餉具 (892～897) はいずれも皿部分が退化、消失したもので、錆釉を施し、底部は糸切痕未調整とする。底部外面周辺を露胎とするもの (892・893・897) と全面施釉のもの (894・895) がある。

香炉 (898～906) は筒形香炉 (898～904)、袴腰形香炉 (905・906) がある。筒形香炉は三足を付すA類 (898・899)、平底のB類 (900・901)、三足を付し、体部の上・中・下段に沈線がめぐるC類 (902～904) がある。A類は体部から口縁部付近の内面まで鉄釉を施し、底部から体部外面にかけて回転ヘラケズリ調整を施す。B類は体部から口縁部付近の内面まで鉄釉を施し、底部を糸切痕未調整とする。C類は錆釉で化粧掛けし、鉄釉を施す。底部外面は回転ヘラケズリ調整を施す。袴腰形香炉は焼締製品でわずかに鉄釉が流れ掛かるのもの (905)、錆釉で化粧掛けし、鉄釉を施したもの (906) がある。

狛犬 (907・908) は台座から体軀部分と頭部の一部までが残るもの (907)、前肢部分と考えられるもの (908) がある。前者は内外面全面に錆釉、後者は内外面に光沢がない褐色の鉄釉?を施し、灰黄色の灰釉?を流し掛けする。

その他、動物を形象した水滴として、鶏形水滴 (909)、鳥 (水鳥) 形水滴がある。いずれも底部を除く外面全面に灰釉を施す。

南斜面 007NR・480NR (907・908) その他 (909・910)



第116図 狛犬・水滴 (1:3)

窯道具類 (911～1026)

輪ドチ・ピン・ツク

焼台

匣鉢蓋と挟み皿

窯道具類 (911～1026) として、輪ドチ (911～918)、ピン (919)、ツク (920)、焼台 (921)、匣鉢蓋 (922～929・947～954・974～976)、挟み皿 (930～946・955～973・977・978)、匣鉢 (979～1026) がある (第119～122図)。なお、匣鉢蓋と挟み皿については、口径13cm以上を匣鉢蓋、13cm以下を挟み皿として扱い、線刻等があるものを中心に図化した。

匣鉢蓋

匣鉢蓋 (922～929・947～954・974～976) は無釉、糸切痕未調整の皿形態で、計測可能な17個体の法量は、器高2.1～3.1cm (平均2.5cm)、口径13.2cm～15.0cm (平均14.0cm)、底径5.6～7.6cm (平均6.6cm) である (第119・120図)。後述する中型の匣鉢B類の蓋として使用されたものと思われる。

挟み皿

挟み皿 (930～946・955～973・977・978) は、無釉、糸切痕未調整で、計測可能な37個体の法量は、器高1.4～2.9cm (平均2.2cm)、口径10.2cm～13.0cm (平均11.8cm)、底径4.5～6.1cm (平均5.5cm) である (第119・120図)。多くが端反皿用の挟み皿として使用されたものと思われる。

匣鉢

匣鉢の分類

匣鉢の構成

匣鉢 (979～1026) は無釉、糸切痕未調整で、法量 (使用目的) から小型のA類 (979～997・1012～1017・1023～1026)、中型のB類 (998～1007・1018～1021)、大型のC類 (1008～1011・1022) に大別される (第121・122図)。(最小) 個体数による集計では、A類が70個体 (59.8%)、B類が39個体 (33.3%)、C類が8個体 (6.9%) で、A類とB類が9割以上を占める。

A類

A 1 類

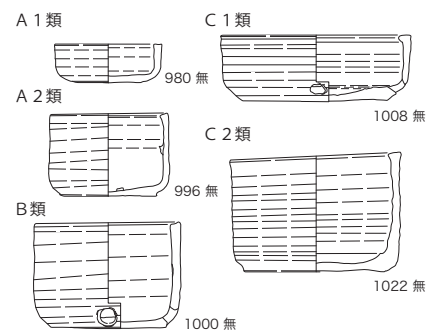
A類は器高が低いA 1類 (979～995・1012～1017・1023～1026) と器高が高いA 2類 (996・997) に細分される。A 1類の計測可能な33個体の法量は、器高3.4～6.8cm (平均4.7cm)、口径10.4cm～13.0cm (平均11.6cm)、底径5.0～8.4cm (平均6.5cm)、

A 2 類

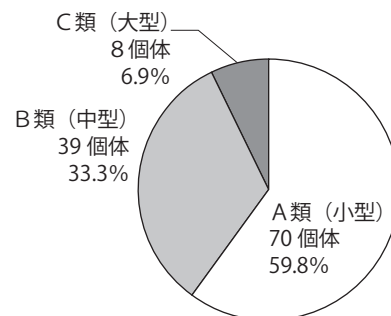
A 2類の計測可能な2個体の法量は、器高8.4～8.8cm (平均8.6cm)、口径11.6cm～12.2cm (平均11.9cm)、底径10.2～10.3cm (平均10.3cm) である。A 1類は底部内面に輪ドチを置いて小型の端反皿を単独で、A 2類は体部内面の三方に横ピンの痕跡が残るもの (996) は、挟み皿 (縁釉小皿) の上下で小型の端反皿を、横ピンの痕跡が残らないもの (997) は、小型の器種を単独で焼成したものと思われる。

B類

B類 (998～1007・1018～1021) の計測可能な22個体の法量は、器高8.9～11.4cm (平均10.4cm)、口径13.9cm～16.0cm (平均15.0cm)、底径10.9～14.0cm (平均12.1cm) で、体部内面の三方に横ピンの痕跡が残るもの (998～1001・1004・1018・1019・1021) は、横ピンで挟み皿を受け、その上下で中型の端反皿を、

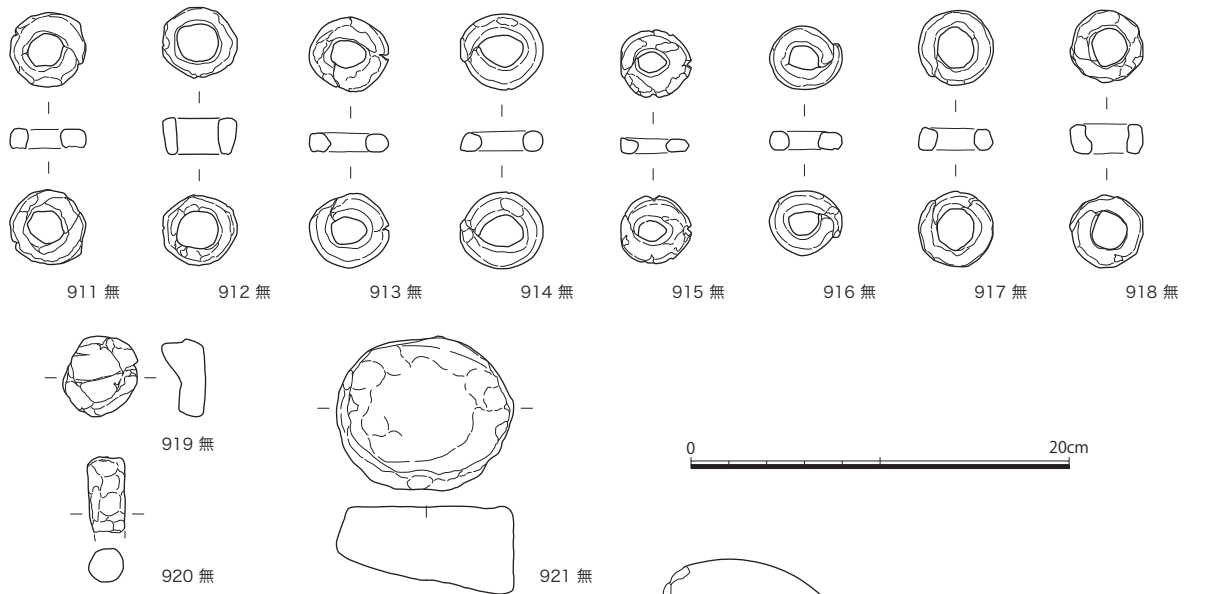


第117図 匣鉢の分類 (1:8)

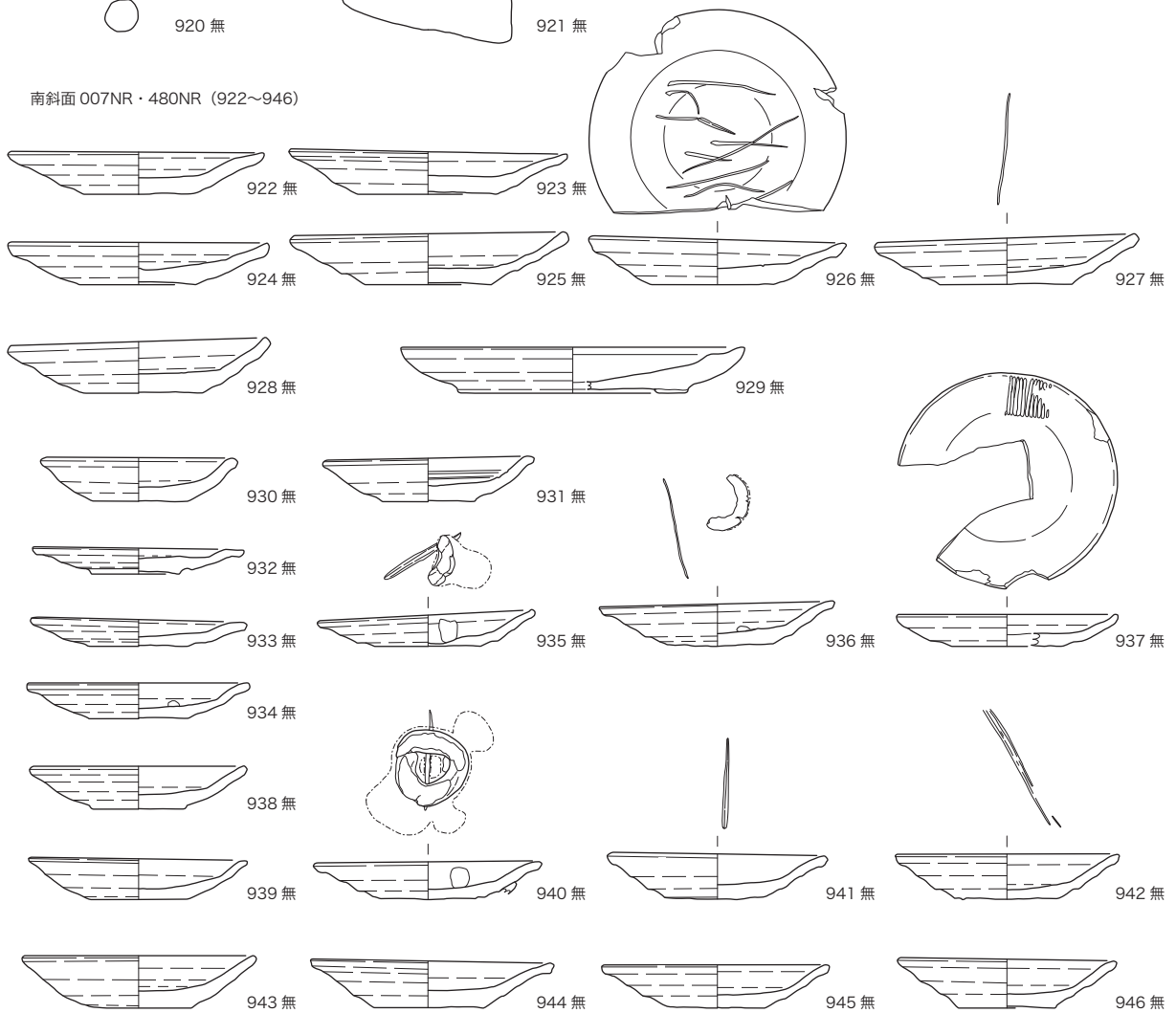


第118図 匣鉢の構成

南斜面 007NR・480NR (911~916・919~921) 東斜面 330SU・380SU (917・918)



南斜面 007NR・480NR (922~946)

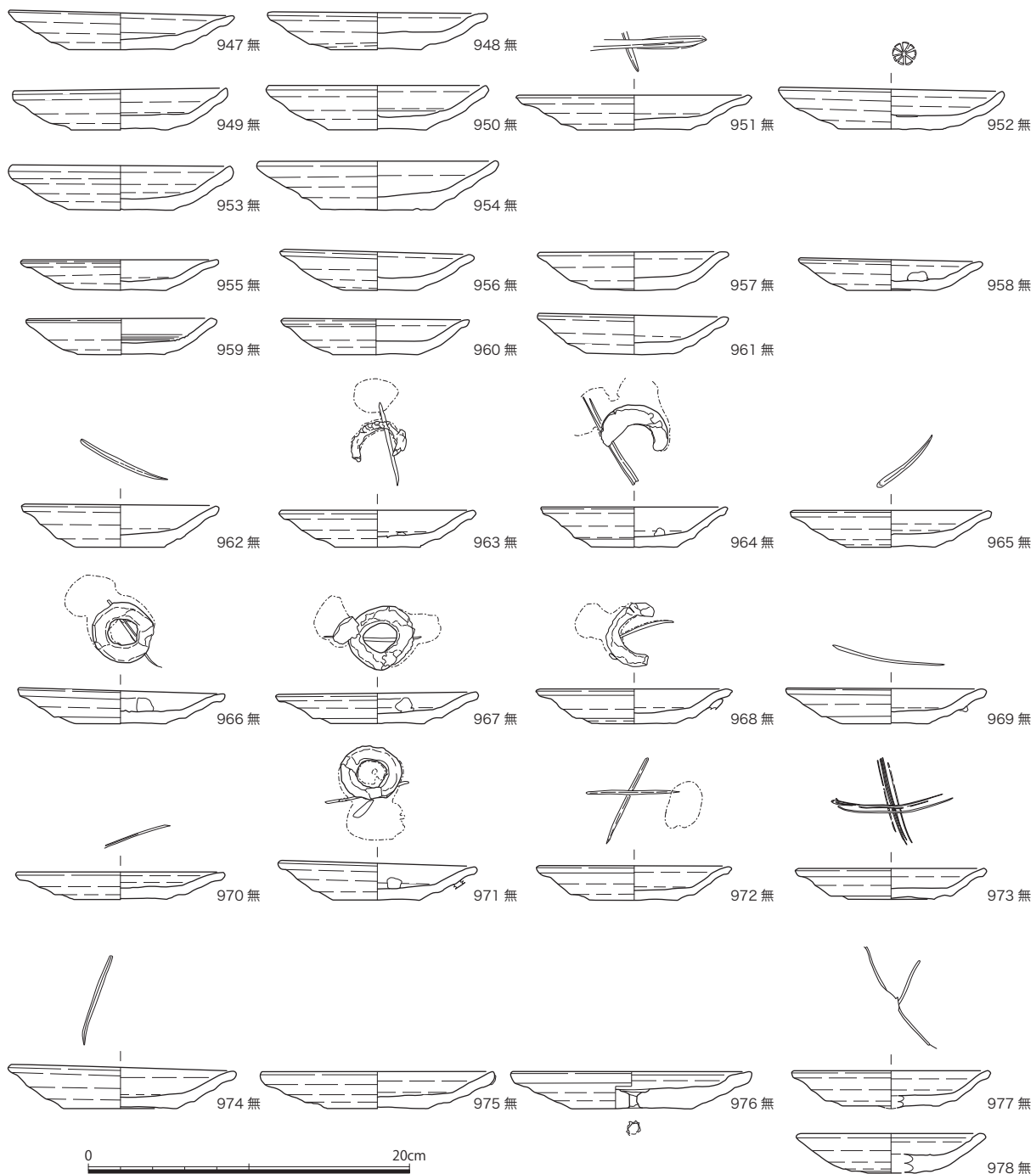


第119図 窯道具類 1 (1:4)

横ピンの痕跡が残らないもの（1002・1003）は、天目茶碗などを単独で焼成したものと思われる。

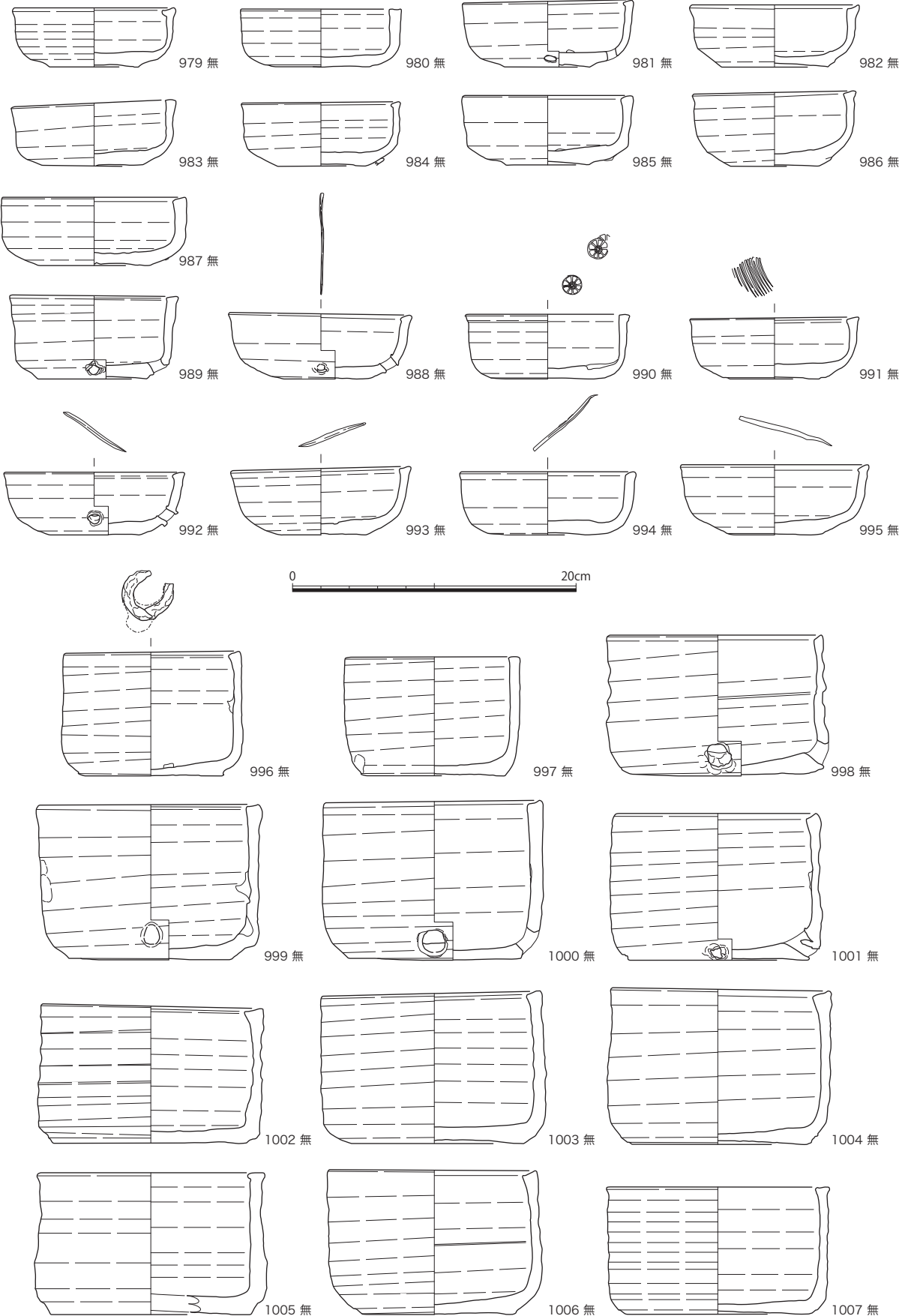
- C類 C類はさらに器高が低いC 1類（1008～1011）と器高が高いC 2類（1022）に細分される。C 1類の計測可能な4個体の法量は、器高7.1～9.0cm（平均7.9cm）、口径18.0cm～20.2cm（平均19.1cm）、底径13.6～18.0cm（平均15.7cm）、C 2類の計測可能な2個体の法量は、器高10.5～12.6cm（平均11.6cm）、口径17.9cm～18.0cm（平均18.0cm）、底径11.5～15.0cm（平均13.3cm）で、C 1類は大型の皿類などを、C 2類は天目茶碗と大型の皿類を上下に重ねて焼成したものと思われる。

東斜面 330SU・380SU（947～973） その他（974～978）



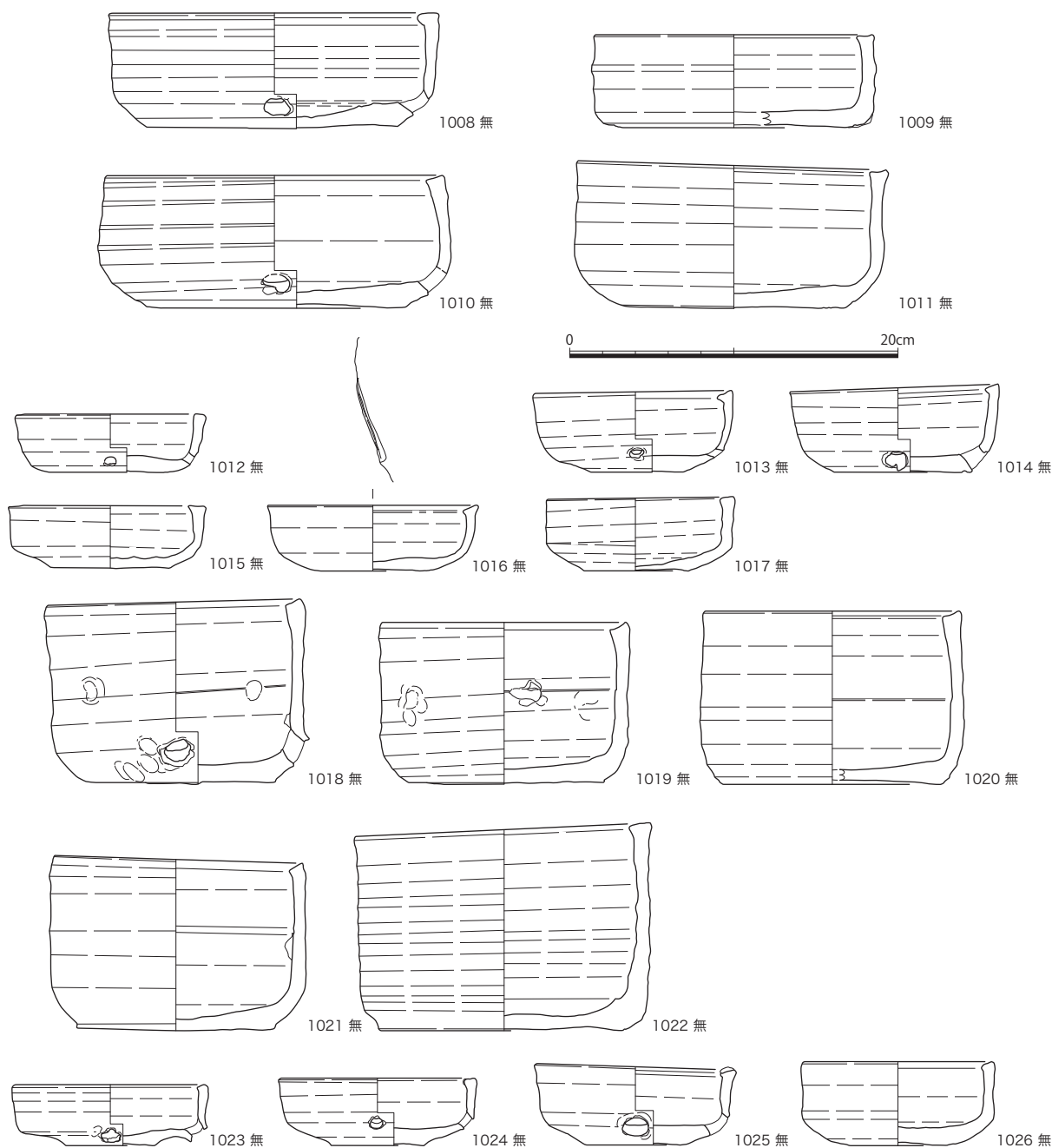
第120図 窯道具類2（1:4）

南斜面 007NR・480NR (979~1007)



第121図 窯道具類3 (1:4)

南斜面 007NR・480NR (1008～1011) 東斜面 330SU・380SU (1012～1022) その他 (1023～1026)



第122図 窯道具類4 (1:4)

土師器 (1027～1049)

土師器として土師器皿 (1027～1035) と土師器鍋 (1036～1049) がある (第123図)。

土師器皿

土師器皿 (1027～1035) はいずれもロクロ調整皿で、底部外面に回転糸切痕を残す。器高 2.5cm、口径 11.5cm、底径 5.4cm 前後で、底部がやや突出する形態のものが多い。

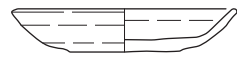
土師器鍋

土師器鍋 (1036～1049) は羽付鍋 (1036)、内耳鍋 (1037～1044・1046～1049)、茶釜 (1045) がある。顕著な使用痕跡が認められるものが多い。茶釜 (1045)

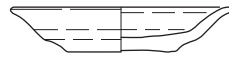
使用痕跡

は大窯期後半に併行する時期のものである可能性がある。

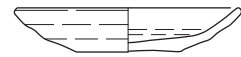
南斜面 480NR (1027~1030) 東斜面 330SU・380SU (1031~1034) 南斜面 007NR (1034・1035)



1027 土



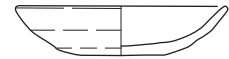
1028 土



1029 土



1030 土



1031 土



1032 土



1033 土



1034 土



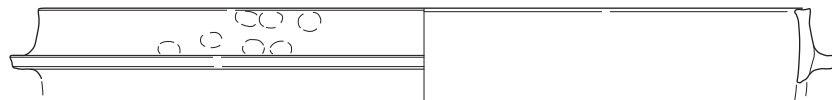
1035 土

南斜面 480NR (1036~1043)

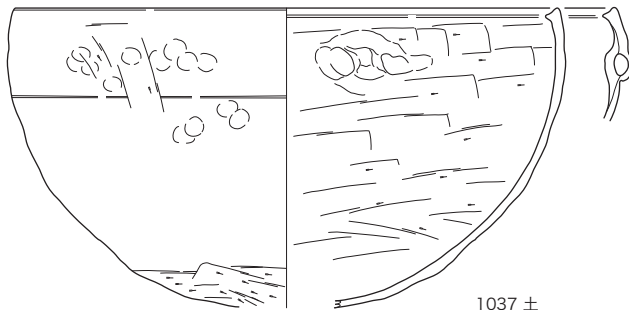
南斜面 007NR (1044・1045)

東斜面 330SU・380SU (1046)

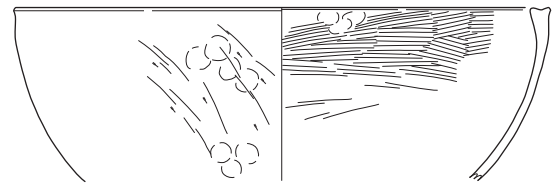
その他 (1047~1049)



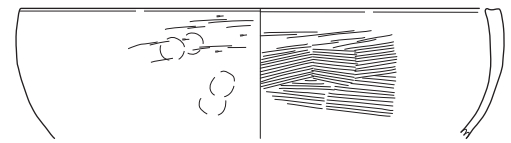
1036 土



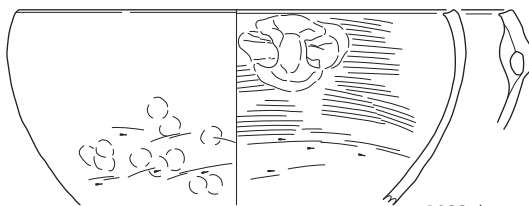
1037 土



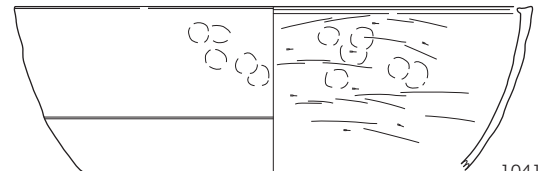
1039 土



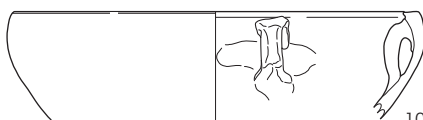
1040 土



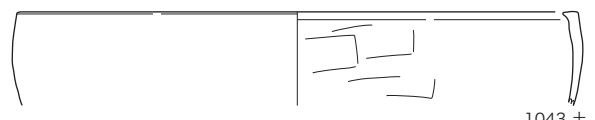
1038 土



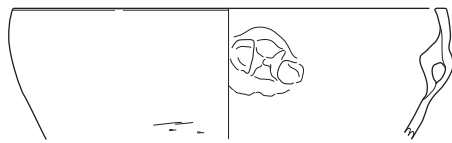
1041 土



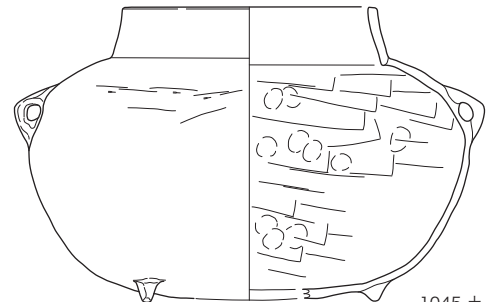
1042 土



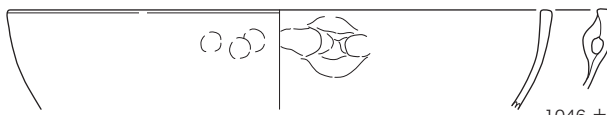
1043 土



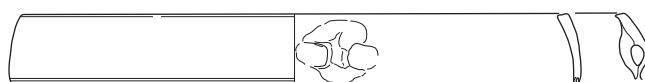
1044 土



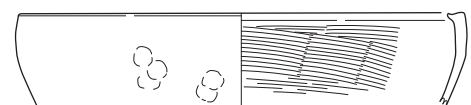
1045 土



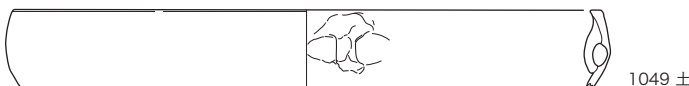
1046 土



1047 土



1048 土



1049 土

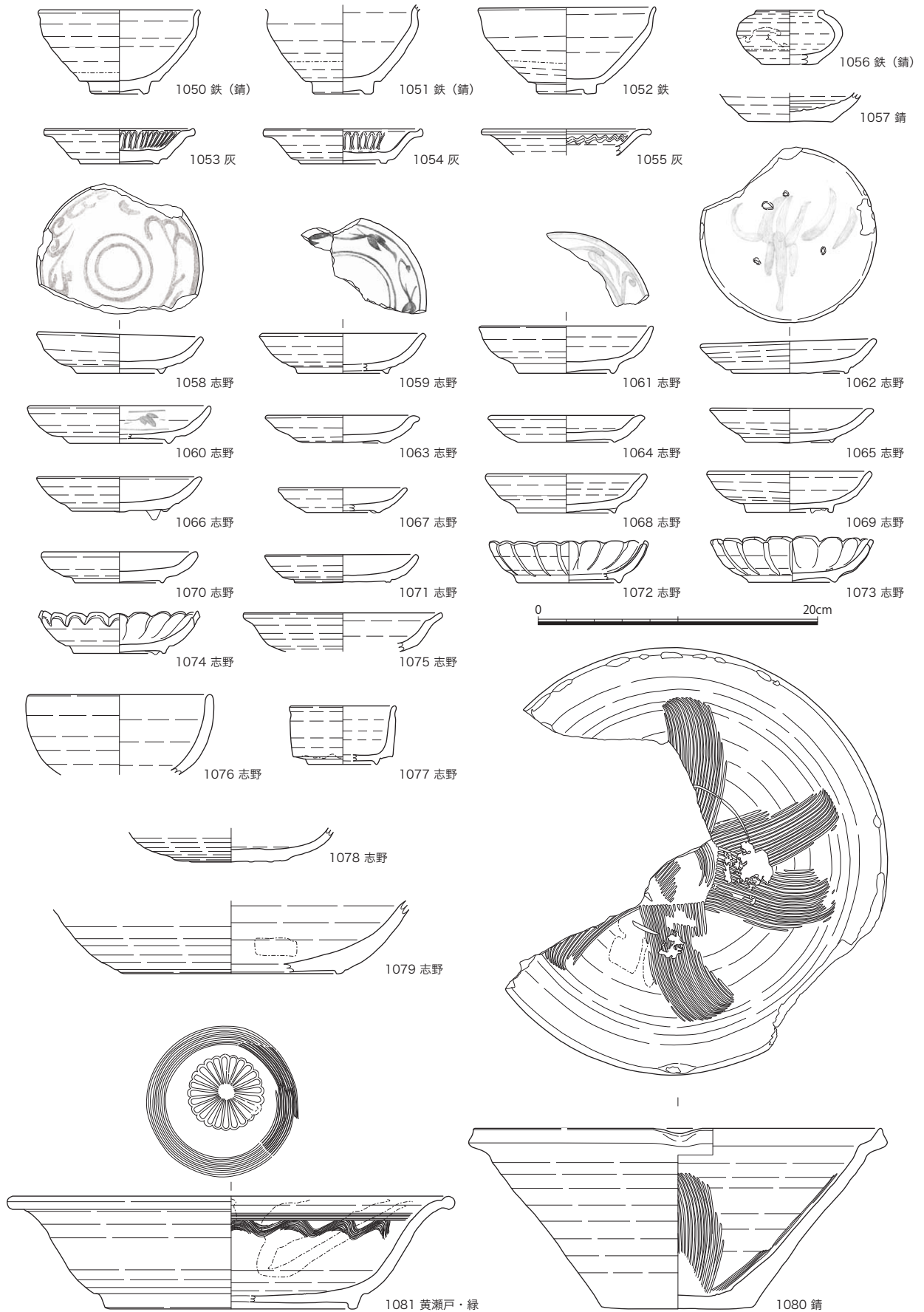
0 20cm

第123図 土師器皿・土師器鍋 (1:4)

(5) 近世の遺物

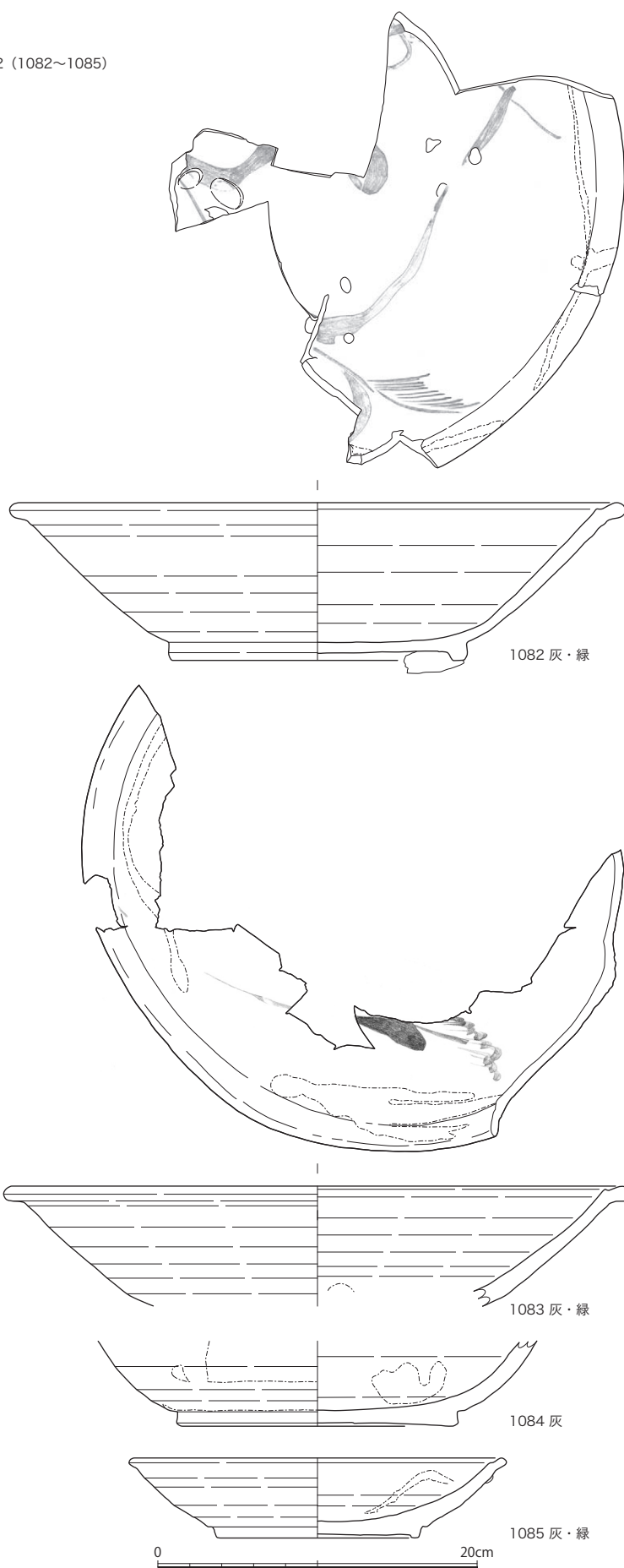
大窯期後半以降 出土状況	大窯期後半（第3段階）以降の遺物を近世の遺物とした（第124～128図）。これらは、南斜面や東斜面において、大量の大窯期前半の遺物に混在して出土した遺物が多く、「南斜面 007NR・480NR」、「東斜面 330SU・380SU」として掲載した。その他、近世の遺構や堆積層中から出土した遺物があるが、出土量は少ない。大窯期前半の遺物と比較して、使用痕跡が顕著に認められるものが多い。
南斜面	南斜面 007NR・480NR の遺物として、天目茶碗（1050～1052・1086～1088）、灰釉折縁皿（1053～1055）、茶入（1056）、錆釉灯明具（1057）、志野鉄絵丸皿（1058～1062）、志野丸皿（1063～1071）、灰釉菊皿（1072）、志野菊皿（1073・1074）、志野小型鉢（1075）、志野丸碗（1076）、志野小杯（1077）、志野鉢（1078・1079）、搦鉢（1080）、黄瀬戸鉢（1081）、鉄絵鉢（1082～1085）、灰釉丸碗（1089）、鉄釉筒形香炉（1090・1091）、鉄釉香炉（1092・1093）、鉄釉袴腰形香炉（1094・1095）、灰釉小杯（1096・1097）、土瓶蓋（1098）、鉄釉片口（1099）、鉄釉德利（1100）、鉄釉灯明具（1101）、鉄釉双耳鍋（1102）、灰釉土瓶（1103）、魚形水滴（1104）がある（第124～126図）。
石製品	石製品として掲載した花崗岩製の石臼（1105）も近世に帰属するものと思われる。天目茶碗（1050～1052）と茶入（1056）は大窯第3段階、灰釉折縁皿（1053～1055）は大窯第4段階後半で、志野鉄絵丸皿・丸皿（1058～1071）は大窯第4段階後半から登窯第3小期の各期、搦鉢（1080）は登窯第1小期に相当する。他は登窯第3・4小期の個体が多いが、鉄釉双耳鍋（1102）、灰釉土瓶（1103）など、登窯第3段階以降の個体も散見される。
東斜面	東斜面 330SU・380SU の遺物として、灰釉折縁皿（1106）、志野丸碗（1107）、志野丸皿（1108～1111）、志野鉢（1112）、鉄釉灯明皿（1113）、天目茶碗（1114・1115）、灰釉小鉢（1116）、鉄釉小杯（1117）、灰釉筒形香炉（1118）、鉄釉香炉（1119～1122）、鉄釉灯明具（1123）、鉄釉双耳小壺（1124）、鉄釉有耳壺（1125）、鉄釉筒形容器（1126）、灰釉花瓶（1127）、茶入（1128・1129）、鉄釉片口（1130～1132）、土師器焙烙（1133・1134）がある（第127図）。灰釉折縁皿（1106）、天目茶碗（1114・1115）、志野丸皿（1108～1111）、茶入（1128・1129）は大窯第4段階後半から登窯第1小期に帰属するが、その他、登窯第3段階までの各期の遺物が混在して出土している。
遺構出土遺物	近世の遺構出土遺物としては、小谷 002NR 出土の鉄釉丸碗（1135）、小谷 001NR 出土の志野丸皿（1136）、平場を画する溝 020SD 出土の鉄釉片口（1137）・天目茶碗（1138）、014SD 出土の灰釉筒形香炉（1139）が抽出される程度である（第128図）。その他、調査区各地点より、灰釉天目茶碗（1140）、天目茶碗（1141）、灰釉丸皿（1142）、志野丸皿（1143）、志野鉄絵丸皿（1144）、錆釉糸目土瓶（1145）、茶入（1146）、鉄釉銭甕（1147・1148）、灰釉德利（1149）、搦鉢（1150）が出土している（第128図）。鉄釉丸碗（1135）は大窯期後半に帰属する可能性があるが、搦鉢（1150）は登窯第9・10小期に相当し、登窯第3段階までの各期の遺物が認められる。
その他	

南斜面 007NR・480NR-1 (1050~1081)



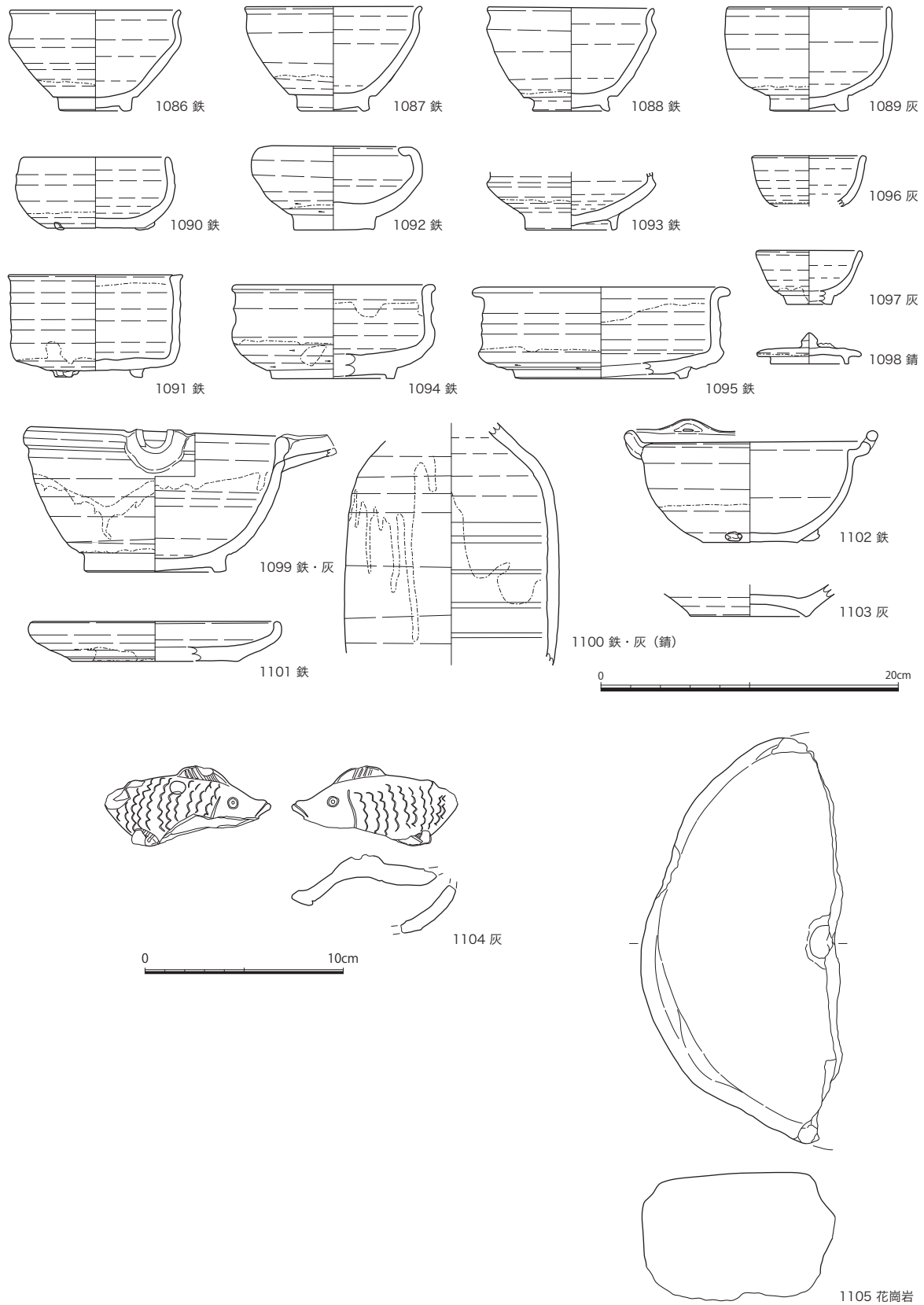
第124図 近世の遺物1 (1:4)

南斜面 007NR・480NR-2 (1082~1085)



第125図 近世の遺物 2 (1:4)

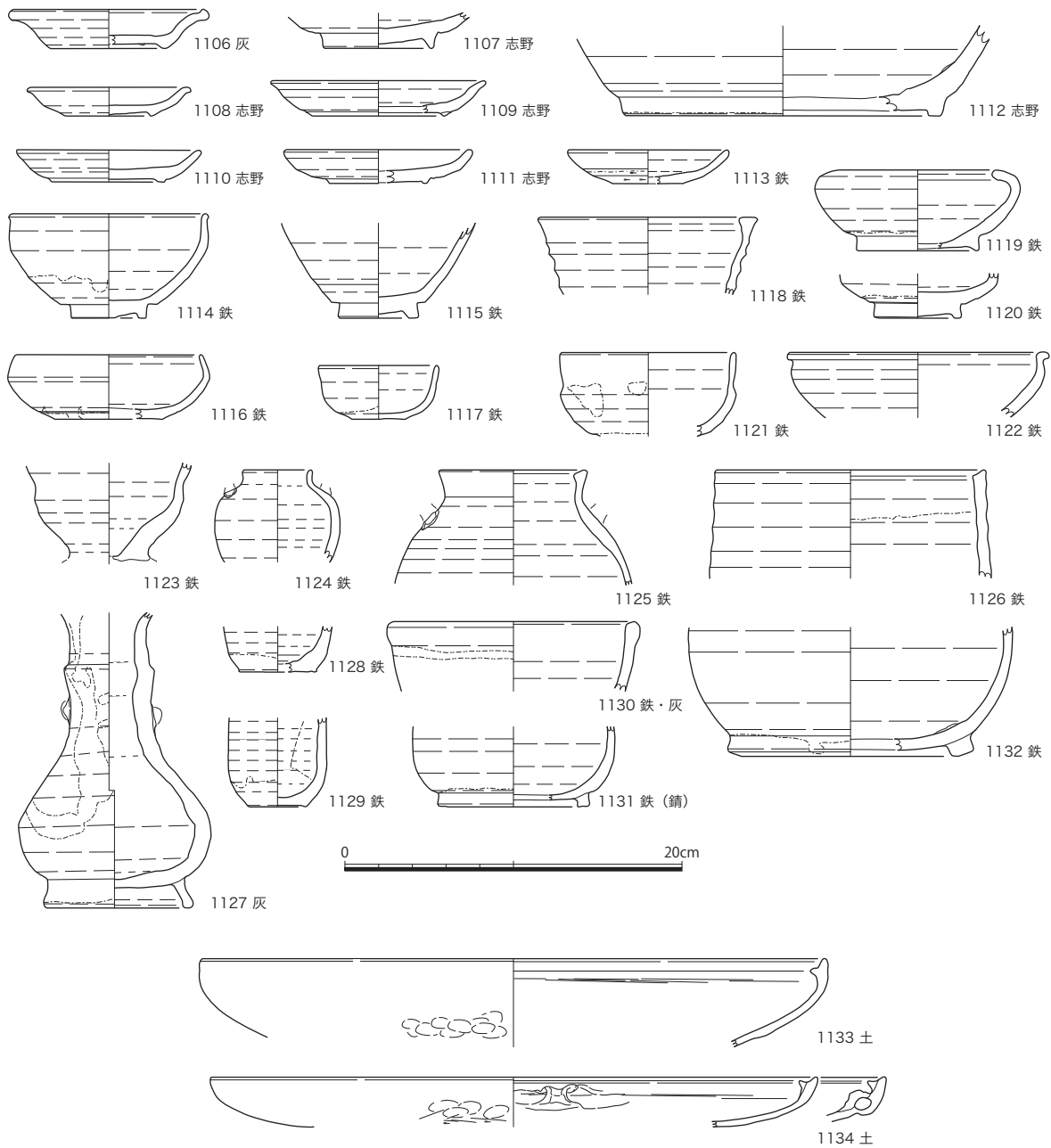
南斜面 007NR・480NR-3 (1086~1105)



第126図 近世の遺物3 (1:4/1:3)

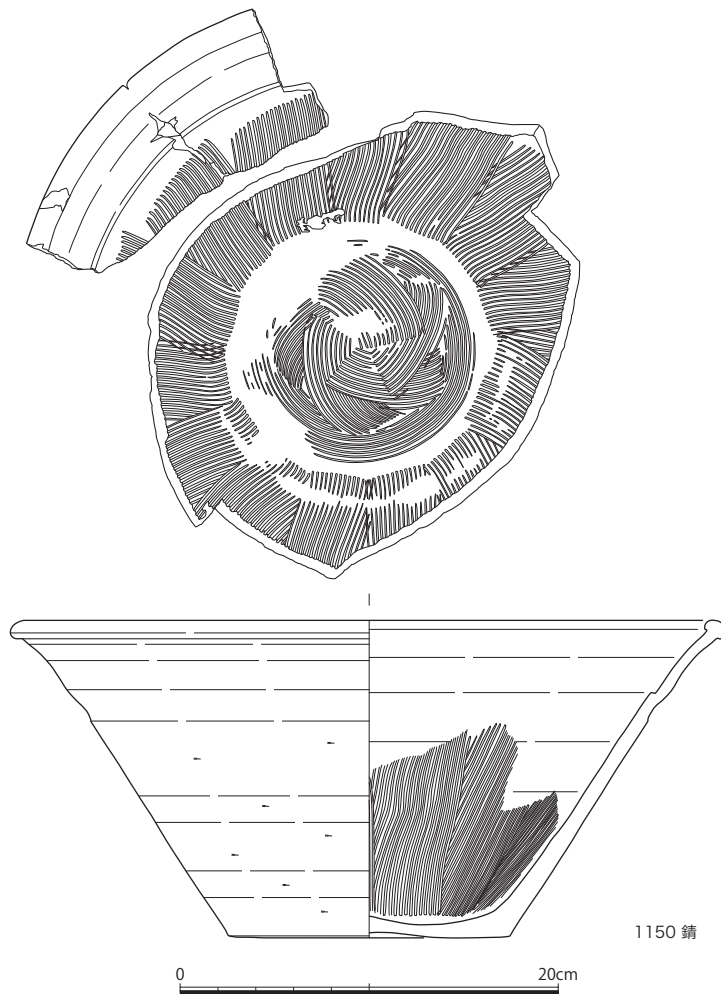
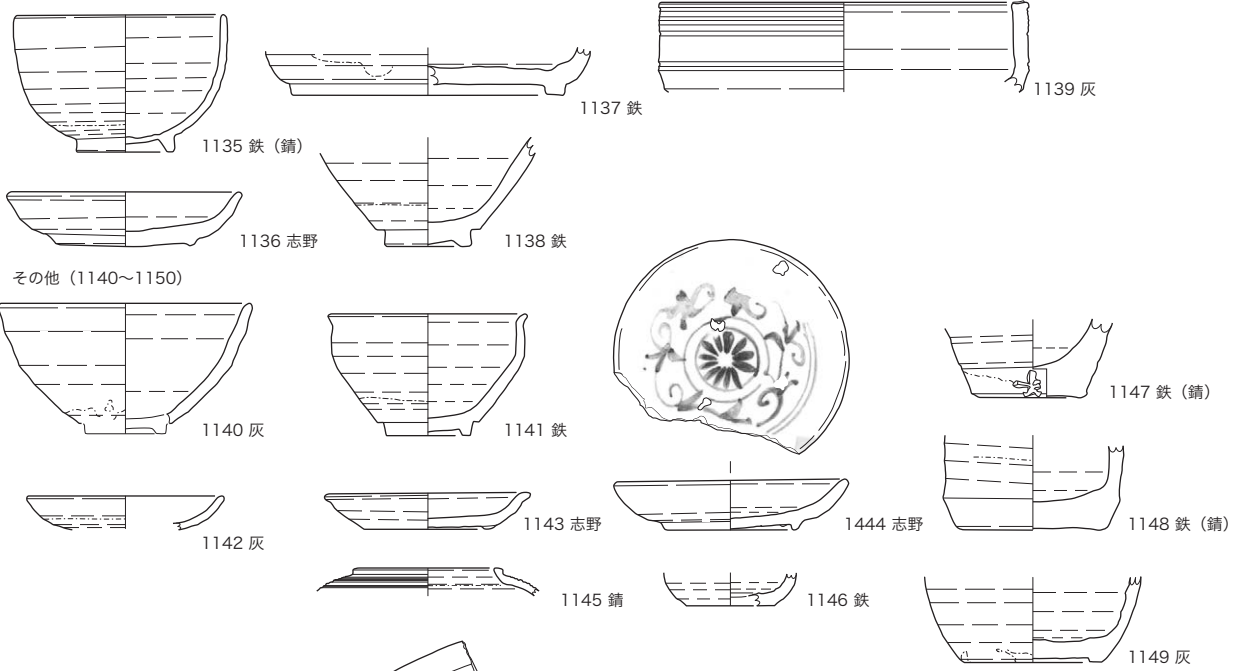
上品野西金地遺跡

東斜面 330SU・380SU (1106~1134)



第127図 近世の遺物4 (1:4)

002NR (1135) 001NR (1136) 020SD (1137・1138) 014SD (1139)



第128図 近世の遺物5 (1:4)

(6) 木製品

器種の構成

木製品として、柱根 (1151 ~ 1157)、下駄 (1158 ~ 1160)、木胎漆器類 (1161 ~ 1163) を図化した。横櫛 (1164) は木材の組織が観察されず、動物質の製品であると思われるが、ここに掲載した。未掲載の木製品を含めた樹種同定の結果と考察は第5章 (4) に掲載した。

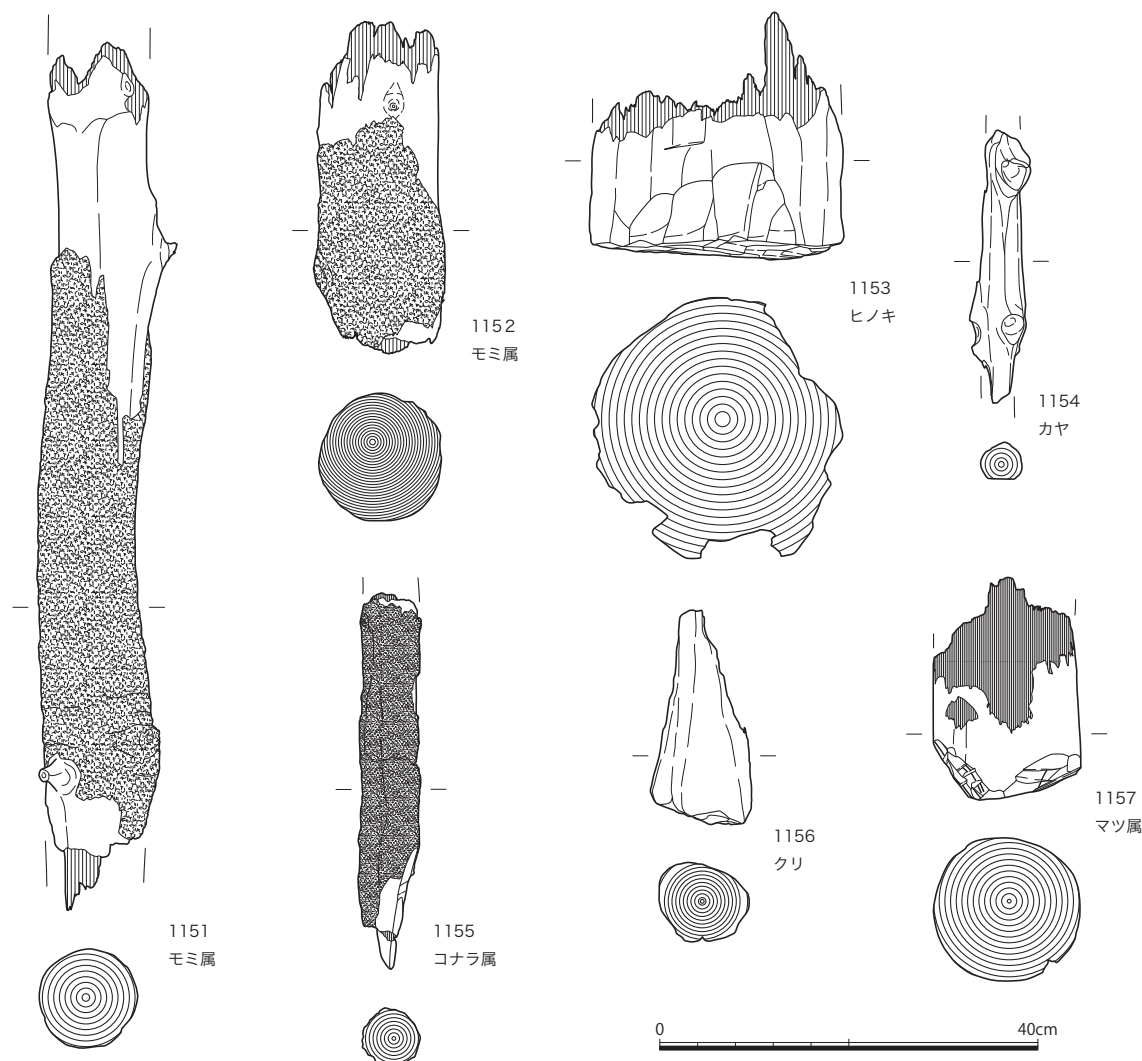
柱根

弥生時代中期後葉
平安時代

柱根 (1151 ~ 1157) は年代測定の結果 (第5章 (1)) を参照)、基盤層に直接打ち込まれた状態 (205P・501P) で検出された 1151・1152 が弥生時代中期後葉、柱穴 207P (401SB) に伴う 1153 が平安時代 (9 世紀後半 ~ 10 世紀後半) に帰属することが判明している。1151・1152 はいずれもモミ属の丸太材を利用している。1153 は径 30cm 近いヒノキの丸太材を利用したもので、底面には手斧等による加工痕が明瞭に観察される。1154 は中世 (13 世紀後半) の掘立柱建物 329SB の柱穴 391P に伴うもので、径 6 cm のカヤの丸太材を利用する。1155 ~ 1157 はいずれも南斜面 480NR において出土したもので、コナラ属、クリ、マツ属の丸太材を利用する。戦国時代・近世に帰属する。

中世

戦国時代・近世



第129図 木製品 1 (1:8)

下駄（1158～1160）は連葉下駄（1158）、差歯下駄（1159）、差歯下駄の歯（1160）がある。1158 は使用痕跡が明瞭に観察される。1158 はヒノキ、1159 はスギの柾目材、1160 はサワラ属の板目材を利用する。1158 は南斜面 480NR、1159・1160 は東斜面の周辺において出土したもので、戦国時代・近世に帰属するが、近世に帰属する可能性が高いと思われる。

下駄

近世

木胎漆器類（1161～1163）は 1161・1162 が外面に黒色漆、内面に赤色漆、1163 が内外面に赤色漆、高台内面に黒色漆を塗布する。1161 の体部外面、1163 の底部外面には赤色漆による施文がある。1161 はトチノキ、1162 はクリ、1163 はトネリコ属の材を横木取りする。1161・1162 は南斜面 480NR、1163 は大量の銭貨が検出された周囲（415SX）において出土したもので、戦国時代・近世に帰属するが、大塚期前半に帰属する可能性が高いと思われる。

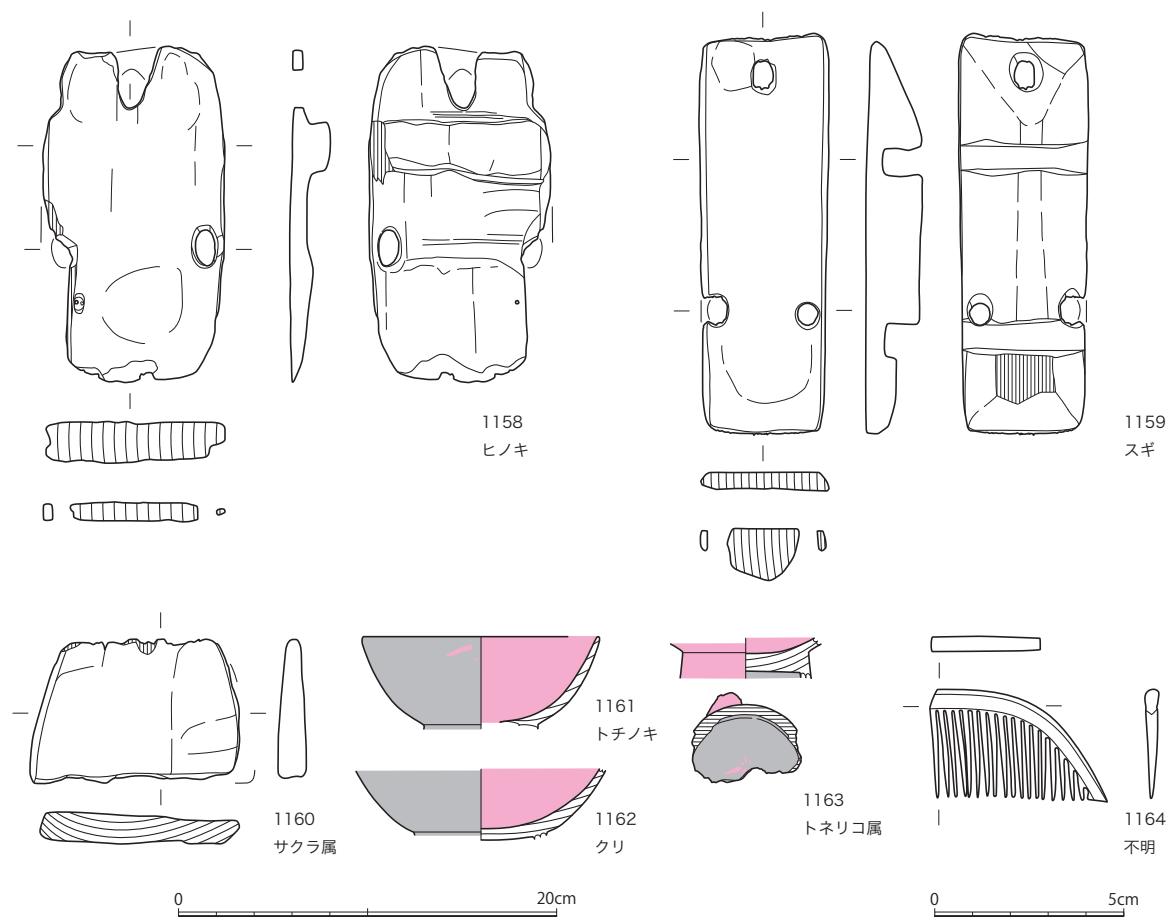
木胎漆器類

大塚期前半

横櫛（1164）は約半分を欠失するが、腐食はほとんど認められない。動物質の製品であると思われるが、動物の種は特定できていない。南斜面の南西裾付近の溝状の落ち込み 040SD において出土したもので、戦国時代・近世に帰属するが、近世に帰属する可能性が高いと思われる。

横櫛

近世



第130図 木製品2（1:4/1:2）

(7) 金属製品

銭貨（渡来銭）

415SX 遺跡からは、93 点の銭貨（1165～1244）が出土した。特に 415SX において 83 点（1165～1240）が集中して出土した点は注目される。その他、谷地形 001NR において、六文銭として出土した（1241・1242）。

銭種・書体

最古銭・最新銭

銭貨の構成

永楽通寶

皇宋通寶

元豊通寶

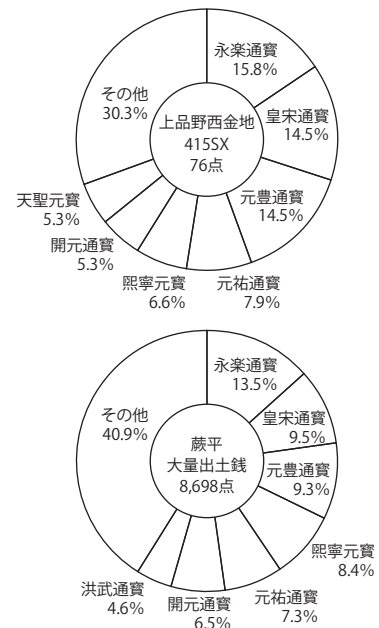
元祐通寶

熙寧元寶

開元通寶

天聖元寶

415SX 出土銭貨は、重なった状態で錆着したものなど 7 点を除く 76 点（1165～1239）の銭種の判読が可能で、銭種は 21 種、書体別で 33 種に及ぶ。最古銭は開元通寶、最新銭は宣徳通寶（遺跡内出土銭貨としても同じ）で、415SX 出土銭貨の構成は永楽通寶（1227～1237）が 12 点（15.8%）で最も多く、以下、皇宋通寶（1183～1193）、元豊通寶（1201～1211）が各 11 点（14.5%）、元祐通寶（1212～1217）が 6 点（7.9%）、熙寧元寶（1196～1200）が 5 点（6.6%）、開元通寶（1165～1168）、天聖元



第131図 銭種の構成の比較

寶（1179～1182）が各 4 点（5.3%）、祥符通寶（1173～1175）、天禧通寶（1176～1178）、紹聖元寶（1218～1220）が各 3 点（3.9%）、宋元通寶（1169・1170）、聖宋元寶（1222・1223）、宣徳通寶（1238・1239）が各 2 点（2.6%）、太平通寶（1171）、景德元寶（1172）、嘉祐通寶（1194）、治平通寶（1195）、元符通寶（1221）、大観通寶（1224）、政和通寶（1225）、景定元寶（1226）が各 1 点（1.3%）である（第 131 図）。

蕨平の大量出土銭

415SX 出土銭貨と同じく、最古銭を開元通寶、最新銭を宣徳通寶とする同時期の大量出土銭として、北設楽郡豊根村蕨平の大量出土銭がある。蕨平の大量出土銭は、鈴木公雄による大量出土銭の時期区分の 6 期に相当する。上品野西金地遺跡 415SX 出土銭貨と蕨平の大量出土銭の両者は、永楽通寶、皇宋通寶、元豊通寶の構成比が高く、5%以上の構成比を示す銭種（元祐通寶、熙寧元寶、開元通寶）もよく一致する。蕨平の大量出土銭でこれら銭種に次いで出土点数の多い洪武通寶は上品野西金地遺跡 415SX には含まれないが、同南斜面 480NR において 2 点（1243・1244）が出土している。また、蕨平の大量出土銭は、瀬戸窯産の鉄釉甕に伴うもので、銭貨が納められた容器の型式と上品野西金地遺跡において共伴する遺物群の型式も概ね一致する。

洪武通寶

銭貨の構成元素

鉛(Pb)の含有比率

出土銭貨の構成元素について、蛍光X線分析装置による定性、定量分析を実施し、鉛に対する銅の含有比率、主成分の銅（Cu）・錫（Sn）・鉛（Pb）に対する鉛の含有比率を比較した（第 5・6 表、第 132 図）。開元通寶は鉛の含有比率が相対的に高いが、宋元通寶～天聖元寶は低い水準にある。以降、皇宋通寶、嘉祐通寶～元豊通寶、元祐通寶～景定元寶に至るまで、徐々に鉛の含有比率が高くなる傾向を示すが、洪武通寶・永楽通寶・宣徳通寶は低く推移する。また、元祐通寶～聖宋元寶は、12 個体中の 10 個体（83.3%）、洪武通寶・永楽通寶・宣徳通寶は 15 個体中の 12 個体（80.0%）にヒ素（As）が検出された。

ヒ素(As)の検出

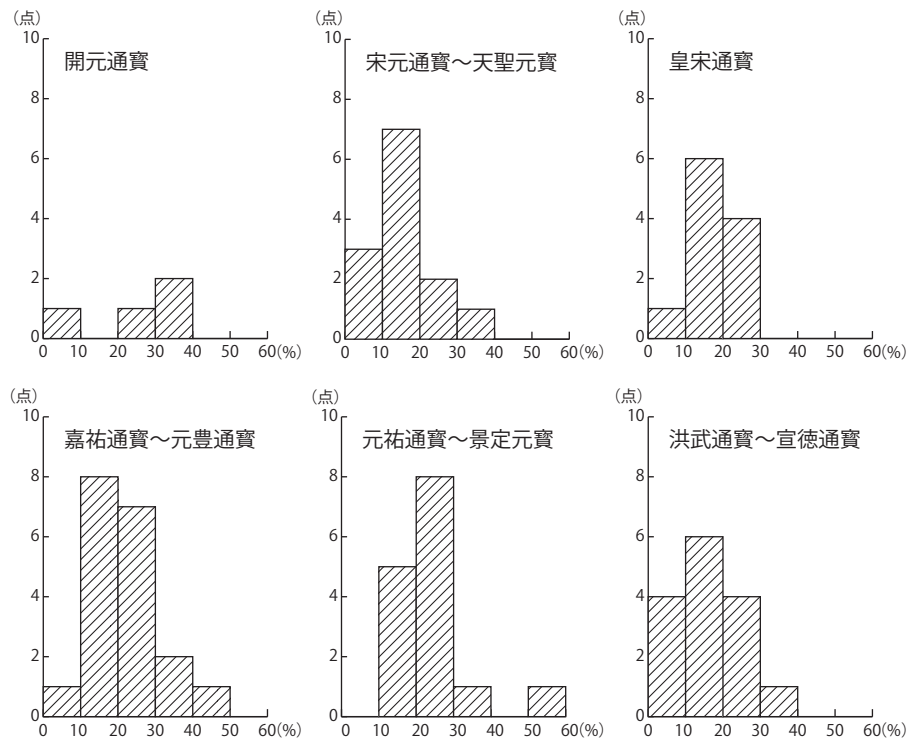
第5表 錢貨一覧表 1

番号	グリッド	遺構	取上	錢種	書体	時代	初鋳	Cu	Sn	Pb	As	三元比	Pb比	Cu	Sn	Pb	As	三元比	Pb比	比平均	備考
1165	8B3r	415SX	467	開元通寶	真書	唐	621	60.36	18.79	18.57		97.72	19.0%	41.85	15.26	40.82		97.93	41.7%	30.3%	
1166	8B3r	415SX	459	開元通寶	真書	唐	621	37.65	24.81	29.71		92.17	32.2%	37.35	28.22	31.54	As	97.11	32.5%	32.4%	
1167	8B3r	415SX	461	開元通寶	真書	唐	621	12.50	50.22	29.68		92.4	32.1%	11.47	62.27	18.45		92.19	20.0%	26.1%	星形
1168	8B3r	415SX	495	開元通寶	真書	唐	621	22.22	51.39	7.83		81.44	9.6%	43.88	43.74	5.21		92.83	5.6%	7.6%	
1169	8B3r	415SX	501	宋元通寶	真書	北宋	960	59.69	25.69	12.56		97.94	12.8%	70.40	19.24	9.09		98.73	9.2%	11.0%	
1170	8B3r	415SX	488	宋元通寶	行書	北宋	960	40.56	43.22	6.98		90.76	7.7%	34.34	58.34	4.23		96.91	4.4%	6.0%	
1171	8B3r	415SX	489	太平通寶	真書	北宋	976														
1172	8B3r	415SX	447	景德元寶	真書	北宋	1004	33.31	44.58	17.07		94.96	18.0%	32.22	46.48	16.97		95.67	17.7%	17.9%	
1173	8B3r	415SX	478	祥符通寶	真書	北宋	1008	70.45	21.54	5.31		97.3	5.5%	81.12	14.95	3.23		99.3	3.3%	4.4%	
1174	8B3r	415SX	481	祥符通寶	真書	北宋	1008	51.81	28.86	13.31		93.98	14.2%	62.30	22.44	13.49		98.23	13.7%	13.9%	
1175	8B3r	415SX	493	祥符通寶	真書	北宋	1008	57.65	24.78	11.08		93.51	11.8%	55.02	29.80	10.65		95.47	11.2%	11.5%	
1176	8B3r	415SX	450	天禧通寶	真書	北宋	1017	34.40	37.50	22.17		94.07	23.6%	36.67	30.43	17.98		85.08	21.1%	22.4%	
1177	8B3r	415SX	456	天禧通寶	真書	北宋	1017	17.75	38.44	32.60		88.79	36.7%	16.24	37.89	31.67		85.8	36.9%	36.8%	
1178	8B3r	415SX	464	天禧通寶	真書	北宋	1017	30.01	43.87	17.67	As	91.55	19.3%	26.31	36.77	17.88	As	80.96	22.1%	20.7%	
1179	8B3r	415SX	452	天聖元寶	真書	北宋	1023	39.61	33.74	15.37		88.72	17.3%	32.23	44.01	18.06		94.3	19.2%	18.2%	
1180	8B3r	415SX	474	天聖元寶	真書	北宋	1023	47.07	41.31	6.24		94.62	6.6%	50.84	35.24	10.51	As	96.59	10.9%	8.7%	
1181	8B3r	415SX	492	天聖元寶	真書	北宋	1023	35.87	36.89	17.50		90.26	19.4%	52.63	30.06	11.92		94.61	12.6%	16.0%	
1182	8B3r	415SX	478	天聖元寶	篆書	北宋	1023	55.64	26.22	15.63		97.49	16.0%	58.24	26.70	13.25		98.19	13.5%	14.8%	
1183	8B3r	415SX	465	皇宋通寶	真書	北宋	1039	42.16	31.43	20.15		93.74	21.5%	51.04	26.95	18.11		96.1	18.8%	20.2%	
1184	8B3r	415SX	491	皇宋通寶	真書	北宋	1039	26.38	45.95	20.85		93.18	22.4%	17.74	52.55	23.67		93.96	25.2%	23.8%	
1185	8B3r	415SX	496	皇宋通寶	真書	北宋	1039	37.00	40.53	18.74		96.27	19.5%	61.84	19.50	9.97	As	91.31	10.9%	15.2%	
1186	8B3r	415SX	500	皇宋通寶	真書	北宋	1039	45.21	33.74	16.56		95.51	17.3%	53.58	30.99	13.11		97.68	13.4%	15.4%	
1187	8B3r	415SX		皇宋通寶	真書	北宋	1039	11.45	68.01	13.58		93.04	15%	15.58	63.57	12.81		91.96	14%	14.3%	
1188	8B3r	415SX	470	皇宋通寶	篆書	北宋	1039	58.83	30.91	6.46		96.2	6.7%	68.78	24.86	4.20		97.84	4.3%	5.5%	
1189	8B3r	415SX	477	皇宋通寶	篆書	北宋	1039	53.49	24.11	11.00		88.6	12.4%	17.92	60.48	14.41	As	92.81	15.5%	14.0%	
1190	8B3r	415SX	478	皇宋通寶	篆書	北宋	1039	52.55	25.87	10.79	As	89.21	12.1%	66.43	15.77	16.19		98.39	16.5%	14.3%	
1191	8B3r	415SX	479	皇宋通寶	篆書	北宋	1039	71.41	18.40	9.41		99.22	9.5%	58.77	18.06	21.84		98.67	22.1%	15.8%	
1192	8B3r	415SX	497	皇宋通寶	篆書	北宋	1039	40.41	36.66	19.14		96.21	19.9%	25.08	48.07	21.62		94.77	22.8%	21.4%	
1193	8B3r	415SX	460	皇宋通寶	隸書	北宋	1039	6.71	64.35	23.42	As	94.48	24.8%	15.78	55.96	24.10	As	95.84	25.1%	25.0%	
1194	8B3r	415SX	479	嘉祐通寶	隸書	北宋	1056	22.33	39.49	32.25	As	94.07	34.3%	17.18	47.89	29.01	As	94.08	30.8%	32.6%	
1195	8B3r	415SX	446	治平通寶	隸書	北宋	1064	38.98	33.42	22.73	As	95.13	23.9%	53.29	26.75	17.15	As	97.19	17.6%	20.8%	穿孔
1197	8B3r	415SX	455	熙寧元寶	篆書	北宋	1068	36.73	42.53	16.43		95.69	17.2%	56.52	24.44	17.40		98.36	17.7%	17.4%	
1196	8B3r	415SX	482	熙寧元寶	真書	北宋	1068	42.74	34.42	14.34		91.5	15.7%	44.04	34.06	16.43		94.53	17.4%	16.5%	砂粒固着
1198	8B3r	415SX	473	熙寧元寶	篆書	北宋	1068	32.67	42.93	20.33	As	95.93	21.2%	27.56	44.39	23.74	As	95.69	24.8%	23.0%	
1199	8B3r	415SX	449	熙寧元寶	行書	北宋	1068	41.52	34.03	20.54		96.09	21.4%	43.51	30.85	22.18		96.54	23.0%	22.2%	
1200	8B3r	415SX	459	熙寧元寶	隸書	北宋	1068	79.69	7.97	9.17		96.83	9.5%	77.98	7.50	10.85	As	96.33	11.3%	10.4%	
1201	8B3r	415SX	439	元豐通寶	篆書	北宋	1078	36.09	32.60	23.89		92.58	25.8%	34.68	27.28	20.00		81.96	24.4%	25.1%	
1202	8B3r	415SX	445	元豐通寶	篆書	北宋	1078	50.36	37.76	6.10		94.22	6.5%	40.72	45.80	7.77	As	94.29	8.2%	7.4%	
1203	8B3r	415SX	487	元豐通寶	篆書	北宋	1078	42.09	41.99	8.73		92.81	9.4%	25.26	44.26	15.85		85.37	18.6%	14.0%	
1204	8B3r	415SX	498	元豐通寶	篆書	北宋	1078	35.89	38.56	20.19		94.64	21.3%	47.58	27.81	14.91		90.3	16.5%	18.9%	
1205	8B3r	415SX	457	元豐通寶	行書	北宋	1078	45.28	24.11	26.98		96.37	28.0%	54.01	20.33	23.26		97.6	23.8%	25.9%	
1206	8B3r	415SX	479	元豐通寶	行書	北宋	1078	61.22	19.61	16.52		97.35	17.0%	51.87	27.94	17.40		97.21	17.9%	17.4%	
1207	8B3r	415SX	483	元豐通寶	行書	北宋	1078	50.30	31.20	11.84		93.34	12.7%	35.49	38.97	17.01		91.47	18.6%	15.6%	
1208	8B3r	415SX	486	元豐通寶	行書	北宋	1078	14.29	65.46	12.56		92.31	13.6%	24.14	60.88	7.56		92.58	8.2%	10.9%	
1209	8B3r	415SX	489	元豐通寶	行書	北宋	1078	47.22	29.34	21.60		98.16	22.0%	36.83	34.45	24.85		96.13	25.9%	23.9%	
1210	8B3r	415SX	501	元豐通寶	行書	北宋	1078	62.71	15.01	20.58		98.3	20.9%	61.23	15.43	21.68		98.34	22.0%	21.5%	
1211	8B3r	415SX	502	元豐通寶	行書	北宋	1078	45.92	23.45	22.48		91.85	24.5%	40.83	23.44	33.27		97.54	34.1%	29.3%	
1212	8B3r	415SX	453	元祐通寶	真書	北宋	1086	77.27	11.58	9.79	As	98.64	9.9%	60.56	18.32	18.32		97.2	18.8%	14.4%	
1213	8B3r	415SX	468	元祐通寶	篆書	北宋	1086	63.17	15.67	14.99	As	93.83	16.0%	51.70	15.00	32.15		98.85	32.5%	24.2%	
1214	8B3r	415SX	472	元祐通寶	篆書	北宋	1086	30.13	34.75	29.01	As	93.89	30.9%	33.94	37.57	20.86		92.37	22.6%	26.7%	
1215	8B3r	415SX	490	元祐通寶	篆書	北宋	1086	20.14	51.18	23.06	As	94.38	24.4%	34.79	41.21	18.98	As	94.98	20.0%	22.2%	
1216	8B3r	415SX	471	元祐通寶	行書	北宋	1086	11.03	67.01	14.83	As	92.87	16.0%	54.09	33.64	8.90		96.63	9.2%	12.6%	
1217	8B3r	415SX	489	元祐通寶	行書	北宋	1086	30.60	54.04	13.42		98.06	13.7%	40.56	12.72	45.19		98.47	45.9%	29.8%	
1218	8B3r	415SX	476	紹聖元寶	篆書	北宋	1094	14.33	55.86	21.81	As	92	23.7%	14.89	45.47	24.24	As	84.6	28.7%	26.2%	
1219	8B3r	415SX	468	紹聖元寶	行書	北宋	1094	41.35	11.67	45.19		98.21	46.0%	19.93	5.47	71.63		97.03	73.8%	59.9%	
1220	8B3r	415SX	499	紹聖元寶	行書	北宋	1094	34.74	41.41	17.42	As	93.57	18.6%	47.06	31.64	16.13	As	94.83	17.0%	17.8%	
1221	8B3r	415SX	468	元符通寶	行書	北宋	1098	28.99	38.08	27.72	As	94.79	29.2%	36.99	29.85	29.08		95.92	30.3%	29.8%	
1222	8B3r	415SX	462	聖宋元寶	行書	北宋	1101	20.23	52.06	18.84		91.13	20.7%	24.05	50.76	17.12	As	91.93	18.6%	19.6%	
1223	8B3r	415SX	502	聖宋元寶	行書	北宋	1101	51.33	24.72	19.70		95.75	20.6%	57.29	22.39	17.50	As	97.18	18.0%	19.3%	
1224	8B3r	415SX		大觀通寶	真書	北宋	1107	23.56	45.28	23.34		92.18	25%	23.56	45.28	23.34		92.18	25%	25.3%	
1225	8B3r	415SX	454	政和通寶	隸書	北宋	1111	37.92	25.60	25.87		89.39	28.9%	40.01	29.63	25.06		94.7	26.5%	27.7%	

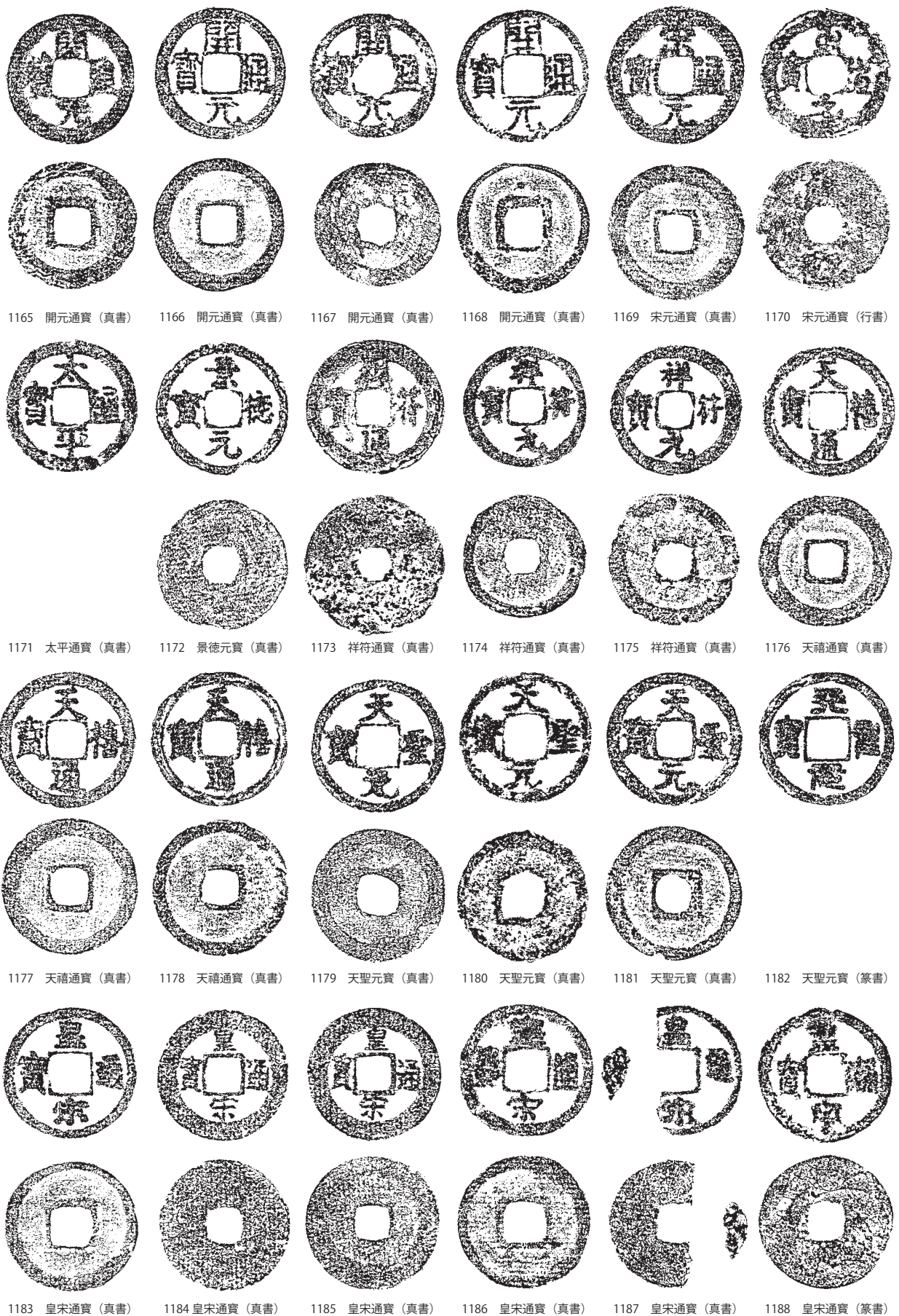
上品野西金地遺跡

第6表 錢貨一覧表2

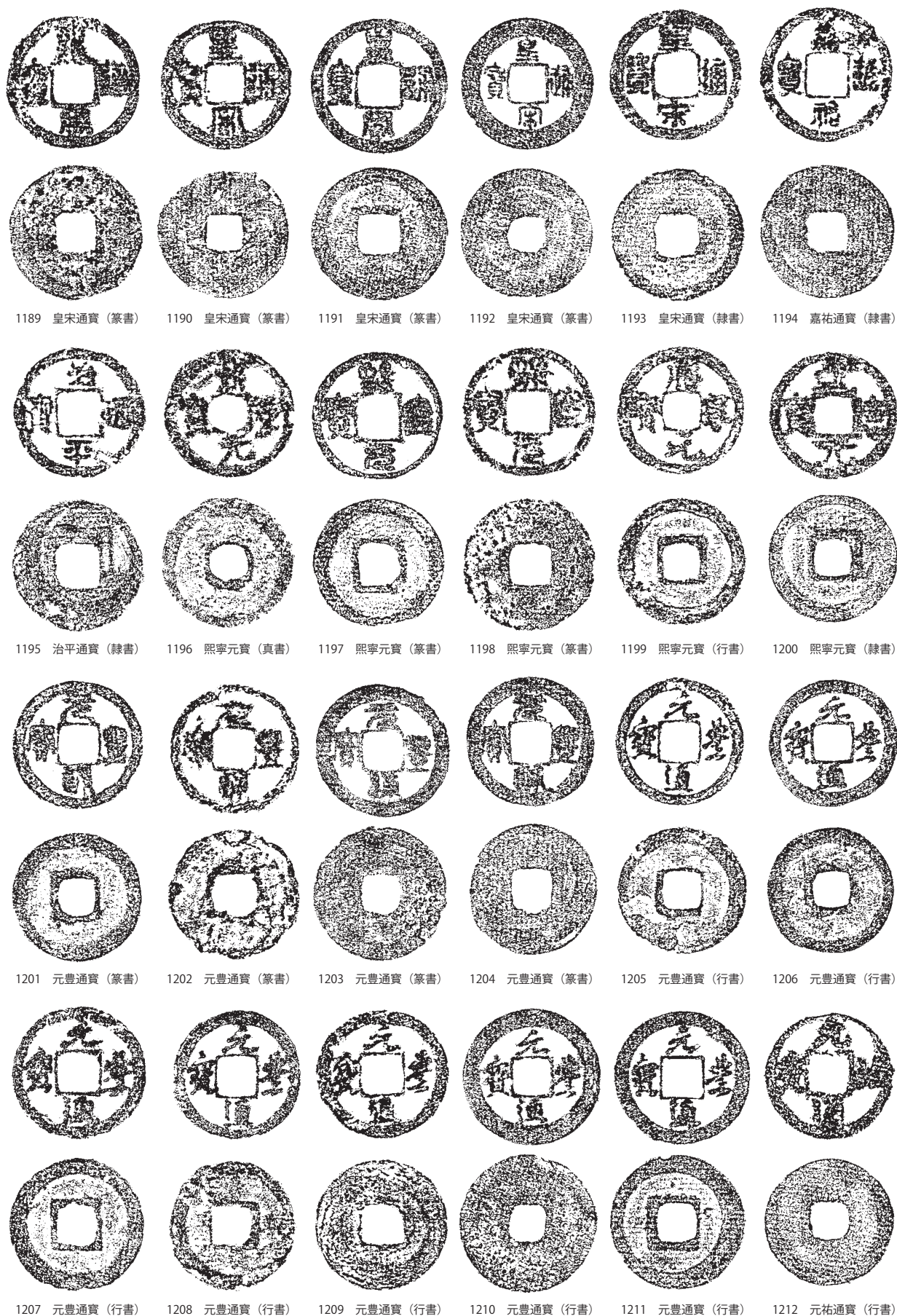
番号	グリッド	遺構	取上	錢種	書体	時代	初鋳	Cu	Sn	Pb	As	三元比	Pb比	Cu	Sn	Pb	As	三元比	Pb比	比平均	備考
1226	8B3r	415SX	453	景定元寶	真書	南宋	1260	62.40	5.51	30.55		98.46	31.0%	55.04	6.94	36.41		98.39	37.0%	34.0%	裏面に「=」
1227	8B3r	415SX	458	永樂通寶	真書	明	1408	24.29	45.86	23.13	As	93.28	24.8%	17.44	52.91	23.47		93.82	25.0%	24.9%	
1228	8B3r	415SX	463	永樂通寶	真書	明	1408	31.16	39.42	22.05	As	92.63	23.8%	24.50	47.33	20.09	As	91.92	21.9%	22.8%	
1229	8B3r	415SX	466	永樂通寶	真書	明	1408	59.19	18.86	11.22		89.27	12.6%	53.59	21.87	13.47	As	88.93	15.1%	13.9%	
1230	8B3r	415SX	468	永樂通寶	真書	明	1408	57.40	11.23	29.96		98.59	30.4%	56.51	10.72	31.40		98.63	31.8%	31.1%	
1231	8B3r	415SX	472	永樂通寶	真書	明	1408	57.42	19.38	21.44		98.24	21.8%	58.87	19.42	20.14	As	98.43	20.5%	21.1%	
1232	8B3r	415SX	475	永樂通寶	真書	明	1408	30.76	44.54	14.70	As	90	16.3%	28.50	45.06	17.41		90.97	19.1%	17.7%	
1233	8B3r	415SX	476	永樂通寶	真書	明	1408														
1234	8B3r	415SX	479	永樂通寶	真書	明	1408	68.25	15.00	15.02		98.27	15.3%	71.07	9.77	13.16		94	14.0%	14.6%	
1235	8B3r	415SX	480	永樂通寶	真書	明	1408	61.46	22.86	7.26		91.58	7.9%	66.73	23.21	6.53		96.47	6.8%	7.3%	
1236	8B3r	415SX	484	永樂通寶	真書	明	1408	72.43	17.79	7.10		97.32	7.3%	66.76	20.19	8.73	As	95.68	9.1%	8.2%	
1237	8B3r	415SX	485	永樂通寶	真書	明	1408	50.51	31.37	11.78		93.66	12.6%	45.17	34.28	13.84	As	93.29	14.8%	13.7%	
	8B3r	415SX	469	永樂通寶	真書	明	1408	67.03	14.37	11.55		92.95	12%	60.62	1.06		As	61.68	0%	6.2%	
1238	8B3r	415SX	448	宣德通寶	真書	明	1433	28.70	41.33	25.30	As	95.33	26.5%	38.41	32.49	24.10		95	25.4%	26.0%	
1239	8B3r	415SX	451	宣德通寶	真書	明	1433	52.72	22.17	12.49	As	87.38	14.3%	58.84	24.25	12.83		95.92	13.4%	13.8%	
1240	8B3r	415SX		錢種不明				14.19	57.55	15.21		86.95	17%	14.12	58.17	14.17		86.46	16%	16.9%	破片
1241	8B4i	001NR	2	熙寧元寶	真書	北宋	1068	19.09	30.05	39.92		89.06	44.8%	18.16	34.53	35.05		87.74	39.9%	42.4%	
1242	8B4i	001NR	2	元豐通寶	真書	北宋	1078														
1243	7B20o	480NR	559	洪武通寶	行書	明	1368	36.16	32.11	28.42	As	96.69	29.4%	43.93	26.52	27.21	As	97.66	27.9%	28.6%	
1244	7B20n	480NR	703	洪武通寶	隸書	明	1368	63.99	18.08	15.42	As	97.49	15.8%	59.73	25.37	12.34	As	97.44	12.7%	14.2%	
	8B3r	415SX	476	錢種不明																	錆着
	8B3r	415SX	476	錢種不明																	錆着
	8B3r	415SX	476	錢種不明																	錆着
	8B3r	415SX	476	錢種不明																	錆着
	8B3r	415SX	478	錢種不明																	錆着
	8B3r	415SX	478	錢種不明																	錆着
	8B4i	001NR	2	錢種不明																	錆着
	8B4i	001NR	2	錢種不明																	錆着
	8B4i	001NR	2	錢種不明																	錆着
	8B4i	001NR	2	錢種不明																	錆着
	8B3i	032SK	72	錢種不明																	錆着
	8B3i	032SK	72	錢種不明																	錆着



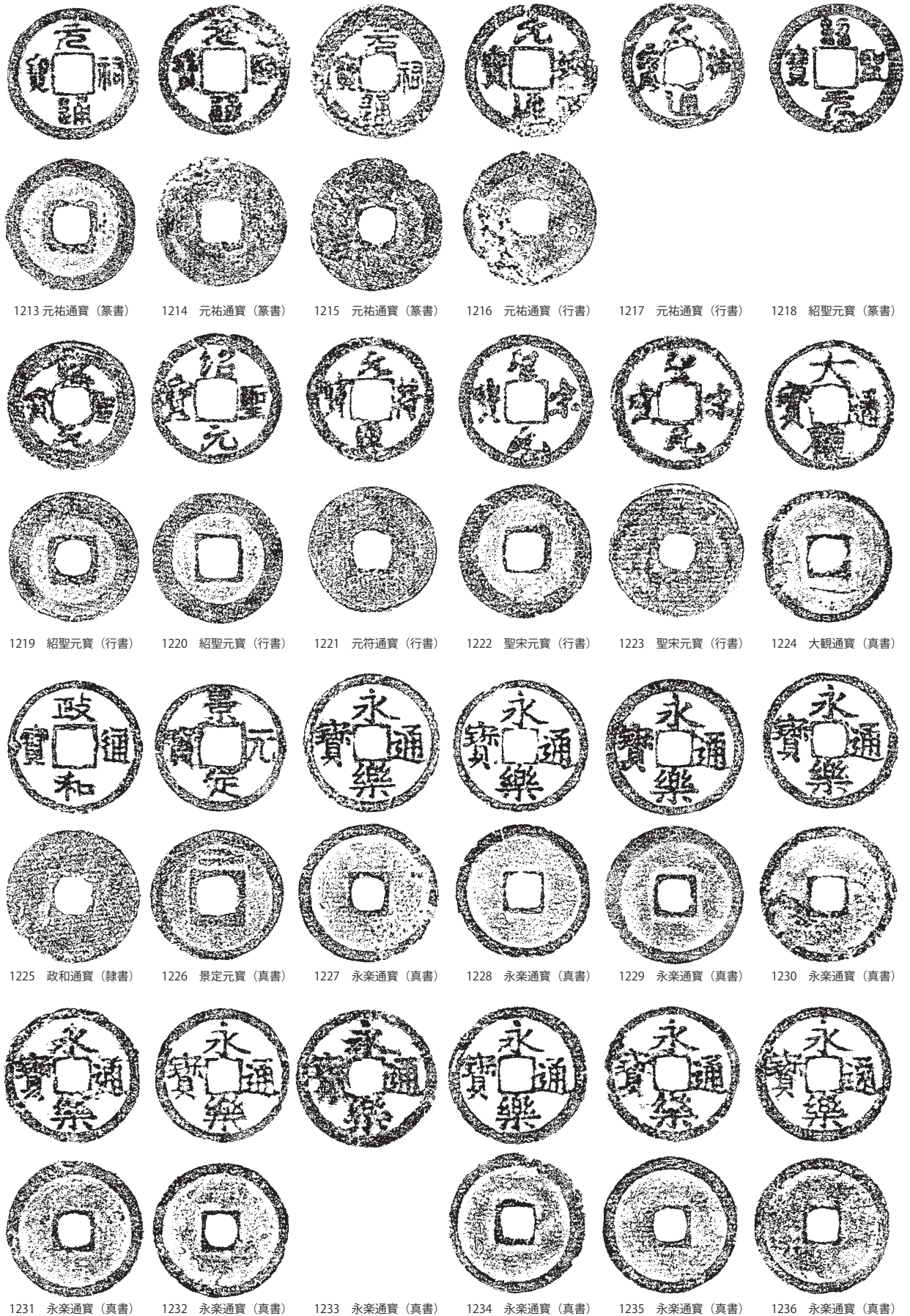
第132図 錢貨の構成元素の比較



第133図 錢貨1 (1:1)

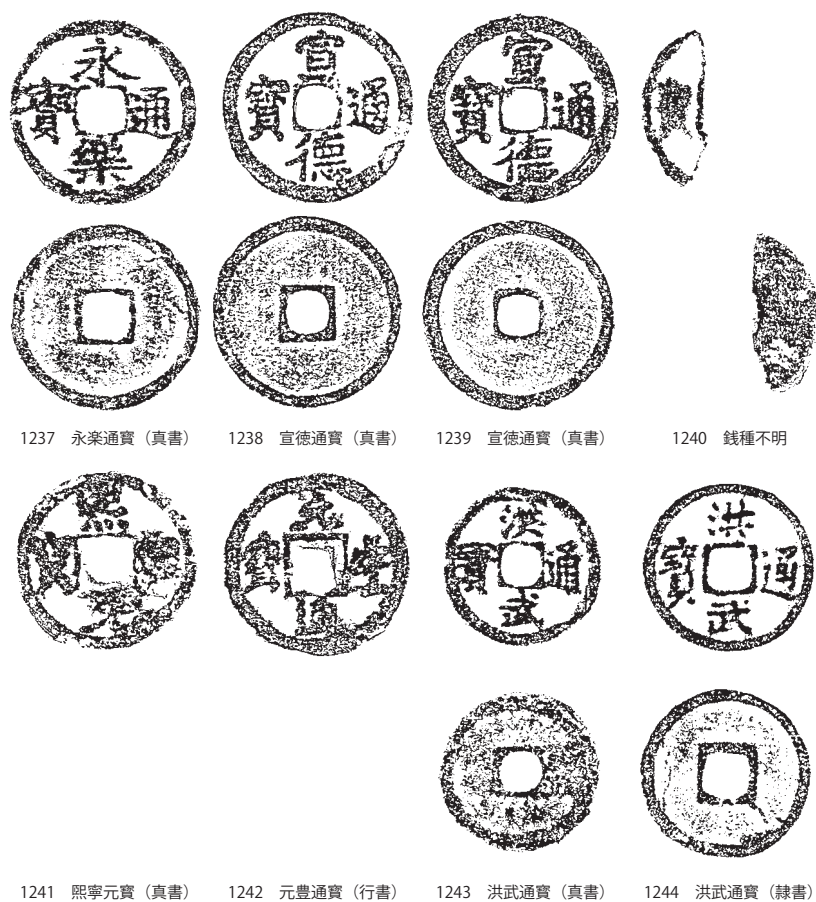


第134図 錢貨2 (1:1)



第135図 錢貨3 (1:1)

上品野西金地遺跡



第136図 銭貨4 (1:1)

文献

- 清水慎也2006「中世渡来銭にみられる所謂星形孔銭の検討—北宋の貨幣政策と銭貨の化学組成の検討—」『研究紀要』第21号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木公雄1999『出土銭貨の研究』財団法人東京大学出版会
- 鈴木正貴2012「蔵平出土の銭貨幣」『愛知県史研究』第16号 愛知県
- 高橋照彦2011「銭貨と土器からみた仁明朝」『仁明朝史の研究—承和転換期とその周辺—』思文閣出版

（８）桑下東窯跡B区の遺物

概要

桑下東窯跡B区においては、古代の土師器1点、須恵器1点、古瀬戸平碗4点、大窯期前半の陶器279点と窯道具類118点、戦国時代以降の土師器73点、近世瀬戸美濃陶器14点、合計490点（接合前破片数）の土器・陶磁器が出土した。その他、近世の銭貨等の金属製品が出土している。なお、報告に際しての遺物番号は、『桑下東窯跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第164集）からの通番とした。破片数で279点、個体数で32個体出土した大窯期前半の陶器は、壺・甕類（破片数で32.3%、個体数で21.9%）と皿類（破片数で21.1%、個体数で28.1%）の比率が高い（第7・8表）。

出土遺物

大窯期前半の陶器

遺構出土遺物（1291～1295）

大窯期前半の遺構出土遺物として、主に平坦面の土坑に伴う遺物がある（第137図）。

土坑出土遺物

SK07（1291）

1291は土坑SK07とその周囲から出土した木製桶を忠実に模した寸胴の桶Aで、箍（タガ）を刻みによって表現する。口縁部と体部から底部は接合しないが、およそ全形が判明する。体部外面から内面全面にかけて光沢がない褐色の鉄釉を施し、灰黄色の灰釉？を流し掛けするが、底部外面は露胎とする。体部から底部の外面に回転ヘラケズリを施す。

桶A

SK08（1392・1393）

1292・1293は土坑SK08において、合口の状態で出土した。いずれも糸切痕未調整で底部外面周囲を露胎とする筒形容器A類であるが、体部内面の中位以下は施釉しない。内外面に光沢がない褐色の鉄釉を施し、灰黄色の灰釉？を流し掛けするが、口縁端部の釉は拭い取られる。古瀬戸後IV期新から大窯第1段階前半に相当する。

合口の筒形容器

SK09（1294）

1294は擂鉢I A類で、口縁部の形状は断面三角形状の2類に分類される。なお、同一個体がSK07において出土している。大窯第1段階に相当する。

SK30（1295）

1295は土坑SK30において逆位の状態で出土した擂鉢I A類で、底部内面の櫛目は「＋」字状、体部内面の櫛目は7方向に施される。口縁部の形状は断面三角形状の2類に分類される。大窯第1段階に相当する。

逆位の擂鉢

遺構外出土遺物（1296～1324）

遺構外出土の大窯期前半の遺物として、天目茶碗（1296～1302）、灯明皿（1303）、端反皿（1304～1307）、端反皿か稜皿（1308・1309）、擂鉢（1310）、鉢A（1311）、鉢B（1312）、内耳鍋（1313・1314）、釜（1315）、手付鍋（1316）、筒形容器（1317・1318）、茶壺（1319）、桶（1320・1321）、片口（1322）、筒形香炉（1323・1324）がある（第137・138図）。

1296～1302は天目茶碗で、1296が体部が上方に強く立ち上がるA2類、1297・1298が器高がやや低いA3類、1299が器高が低いA5類、1300・1301が内反り高台のB類に分類される。B類は体部が直線的な形状を呈する。1300・1302は薄い錆釉を施す。1301は底部外面に平行する5条の直線を線刻する。

天目茶碗

上品野西金地遺跡

第7表 桑下東窯跡05B区大窯期前半遺物集計表（破片数）

器種／遺構		SK02	SK04	SK07	SK08	SK09	SK10	SK12	SK30	遺構外	計			
碗類	天目茶碗	1	0			2				23	26	9.3%	28	10.0%
	丸碗		0			1					1	0.4%		
	平碗		1								1	0.4%		
山茶碗		2					1			6	9	3.2%	9	3.2%
灯明皿			1	1						6	8	2.9%	8	2.9%
皿類	緑釉挟み皿									1	1	0.4%	59	21.1%
	腰折皿		1								1	0.4%		
	端反皿	2	6	2	1					40	51	18.3%		
	灰釉丸皿									1	1	0.4%		
	鉄釉端反皿									4	4	1.4%		
	鉄釉稜花皿									1	1	0.4%		
鉢・盤類	描鉢	20	2	6	4	3			1	6	42	15.1%	53	19.0%
	鉢A・B				1					5	6	2.2%		
	鉢C									2	2	0.7%		
	片口									3	3	1.1%		
鍋・釜類	内耳鍋	1								15	16	5.7%	24	8.6%
	釜	1								4	5	1.8%		
	手付鍋									2	2	0.7%		
	釜・土瓶の蓋									1	1	0.4%		
壺・甕類	甕									12	12	4.3%	90	32.3%
	茶壺	4								6	10	3.6%		
	有耳壺・筒形容器				23					20	43	15.4%		
	德利（瓶）							2		2	4	1.4%		
	小壺・耳付水注									5	5	1.8%		
	桶			12						4	16	5.7%		
その他	香炉									8	8	2.9%	8	2.9%
計		31	11	21	29	6	1	2	1	177	279			

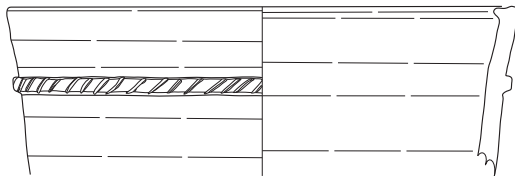
土師器	土師器皿	55								14	69			
	土師器鍋	1								3	4			
窯道具類	匣鉢蓋・挟み皿									31	31			
	匣鉢	4	2							81	87			

第8表 桑下東窯跡05B区大窯期前半遺物集計表（個体数）

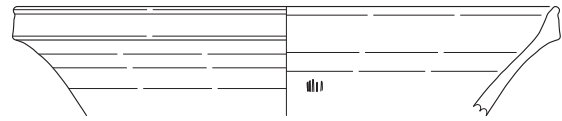
器種／遺構			SK02	SK07	SK08	SK30	遺構外	計			
碗類	天目茶碗	輪高台					3	3	9.4%	5	15.6%
		内反り高台					2	2	6.3%		
山茶碗							3	3	9.4%	3	9.4%
灯明皿				1			3	4	12.5%	4	12.5%
皿類	端反皿	大					1	1	3.1%	9	28.1%
		中					5	5	15.6%		
		小					2	2	6.3%		
		削り込み高台					1	1	3.1%		
鉢・盤類	描鉢	I A類				1	1	2	6.3%	2	6.3%
鍋・釜類							1	1	3.1%	1	3.1%
壺・甕類	有耳壺・筒形容器				2		1	3	9.4%	7	21.9%
	德利						1	1	3.1%		
	小壺・耳付水注						2	2	6.3%		
	桶			1				1	3.1%		
その他	香炉						1	1	3.1%	1	3.1%
計			0	2	2	1	27	32			

土師器	土師器皿		1					1			
窯道具類	挟み皿						2	2			
	匣鉢	小					5	5			
		中					4	4			

SK07 (1291)

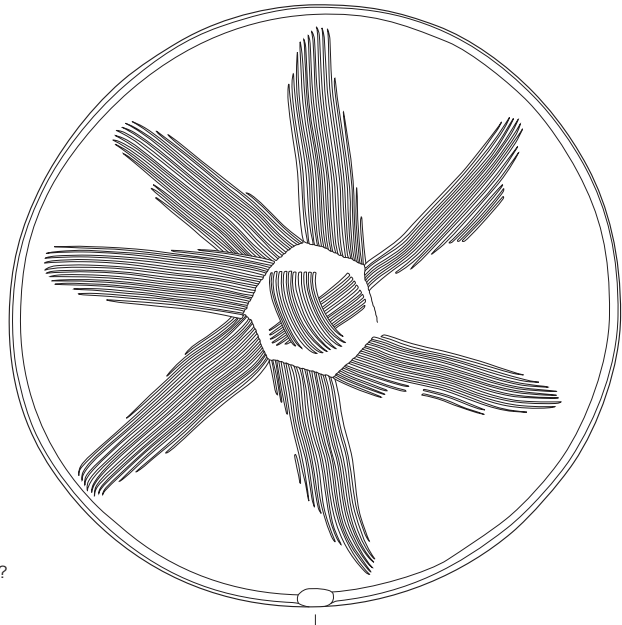


SK09 (1294)



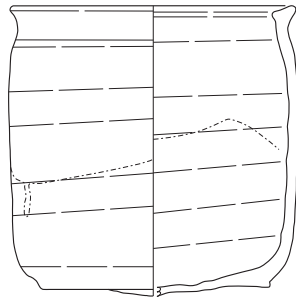
1294 錆

SK30 (1295)

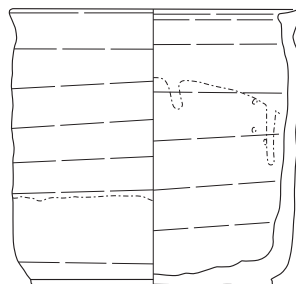


1295 錆

SK08 (1292・1293)

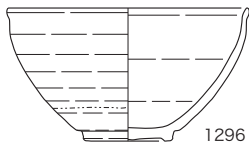


1292 鉄・灰?

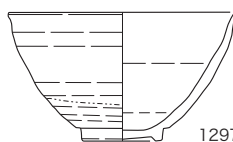


1293 鉄・灰?

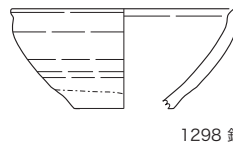
遺構外 (1296~1309)



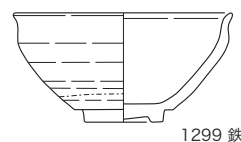
1296 鉄 (錆)



1297 鉄 (錆)



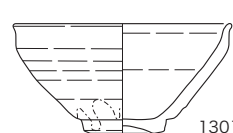
1298 鉄 (錆)



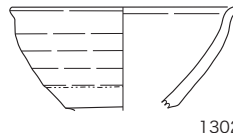
1299 鉄 (錆)



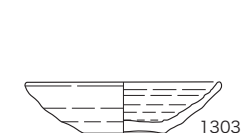
1300 鉄 (錆)



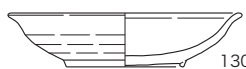
1301 鉄 (錆)



1302 鉄 (錆)



1303 焼締



1304 灰



1306 灰



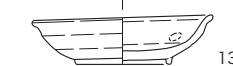
1307 灰



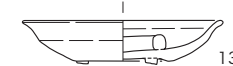
1308 鉄



1305 灰



1306 灰



1307 灰



1309 鉄

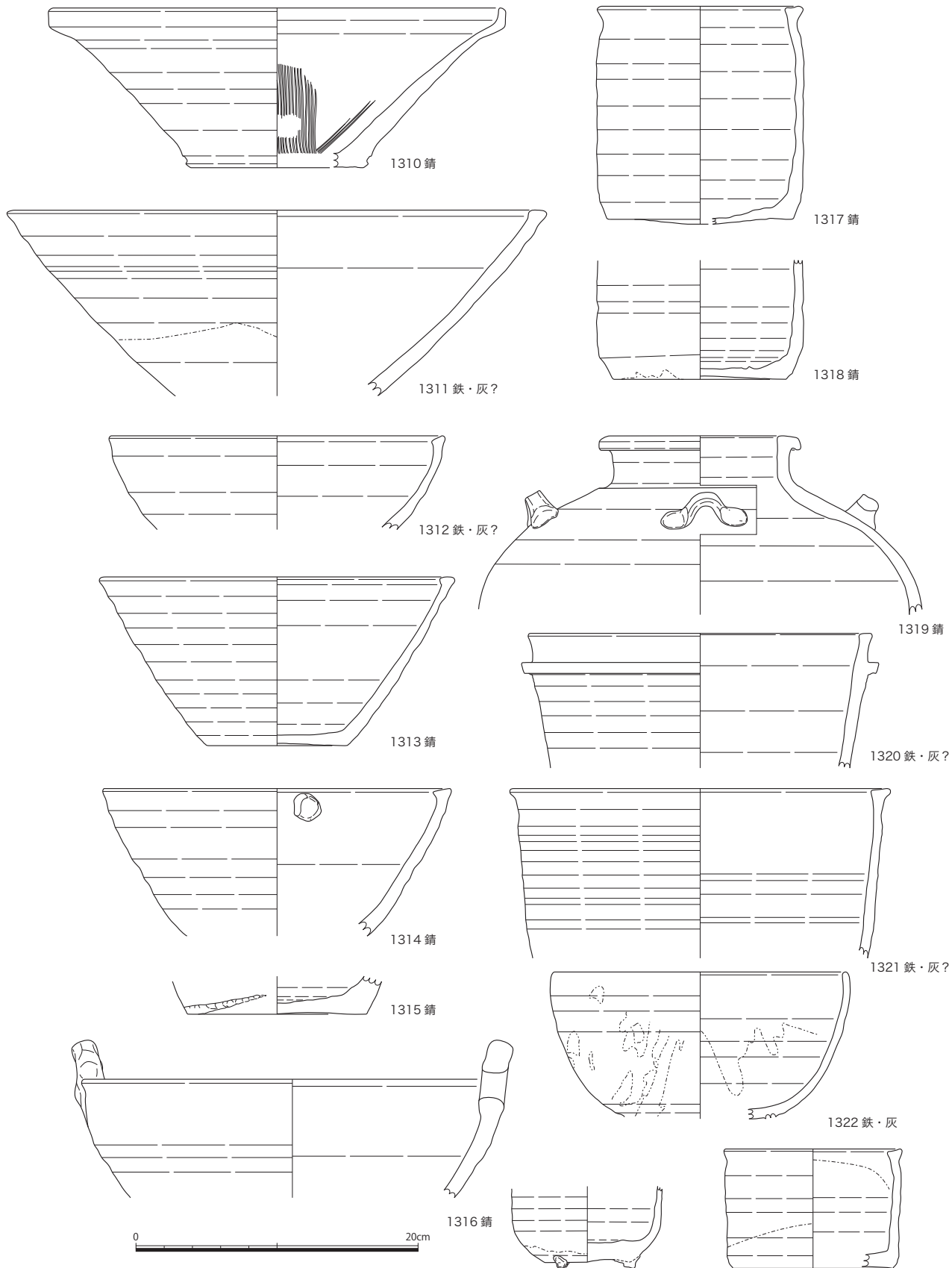
※遺物番号は『桑下東窯跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第164集)からの通番

0 20cm

第137図 桑下東窯跡B区の遺物1 (1:4)

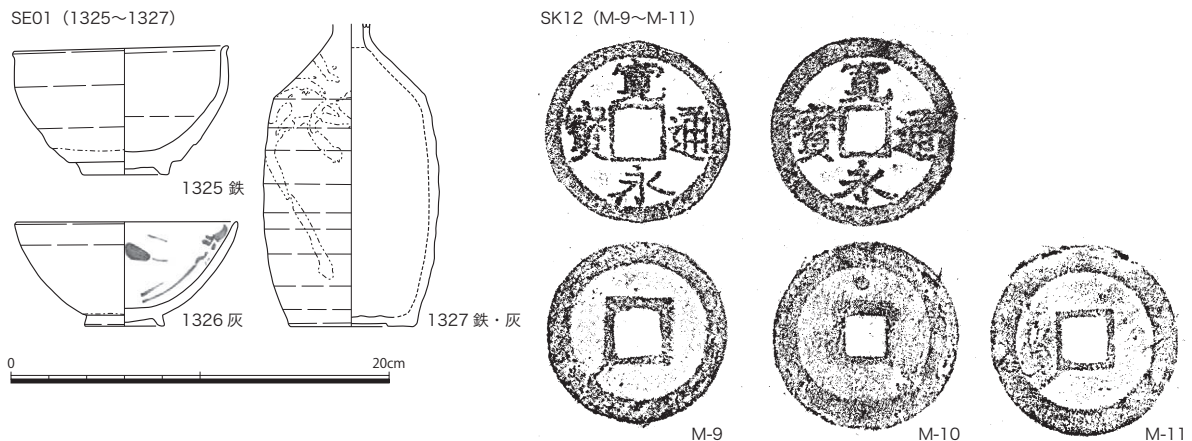
上品野西金地遺跡

遺構外 (1310~13)



※遺物番号は『桑下東窯跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第164集)からの通番

第138図 桑下東窯跡B区の遺物2 (1:4)



※遺物番号は『桑下東窯跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第164集）からの通番

第139図 桑下東窯跡B区の遺物3（1:4/1:1）

1303 は灯明皿2類で、内面に同心円状の突線がめぐる。1304～1307 は端反皿で、付高台の中型（1304・1305）と小型（1306）、削り込み高台の皿（1307）がある。1306 は菊花16弁の印花文を押印する。1307 の底部内面には二重の圈線がある。1308・1309 は口縁部の先端付近が外反する端反皿あるいは稜皿に類似する鉄釉を施す皿（その他皿類）で、1309 は高台周辺を露胎とする。1310 は擂鉢I A類で、口縁部の形状は内側に緩やかに折り曲げられる1類に分類される。古瀬戸後IV期新から大窯第1段階に相当する。1311 の鉢Aと1312 の鉢Bは内外面に光沢がない褐色の鉄釉を施し、灰黄色の灰釉？を流し掛けするが、1311 は体部外面下位を露胎とする。

皿類

1313・1314 は内耳鍋、1315 は釜、1316 は手付鍋で、いずれも内外面全面に錆釉を施す。1316 は体部外面に回転ヘラケズリを施す。

鍋・釜類

1317・1318 は糸切痕未調整の底部外面周囲を露胎とする筒形容器A類で、底部外面周囲を除く全面に錆釉を施す。大窯第1段階に相当する。1319 は茶壺（祖母懷茶壺）で、横耳を付す四耳壺である。口縁部は玉縁状に折り返される。外面に錆釉（薄い鉄釉）を施す。

壺類

1320・1321 は寸胴の桶A類で、1320 は箍（タガ）を表現するが、1321 はその表現を欠く。内外面に光沢がない褐色の鉄釉を施し、灰黄色の灰釉？を流し掛けする。1322 は半球形の器形のやや大振りな片口B類で、内外面に鉄釉を施し、灰釉を流し掛けする。

桶A

1323・1324 は筒形香炉で、いずれも外面と内面の一部に鉄釉を施し、底部を糸切痕未調整とする。1323 は低い三足を付す。

香炉

近世の遺物

SE01（1325～1327）

1325 は天目茶碗で高台周辺を露胎とする。1326 は灰釉丸碗、1327 は鉄釉徳利で、灰釉を流し掛けする。

SK12（M-9～M-11）

M-9～M-11 はSK12において出土した六文銭の寛永通寶で、M-11 は4枚が錆着した状態である。

六文銭の寛永通寶

第5章 分析・考察

(1) 出土木材・種実の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・安昭炫・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎・黒沼保子

はじめに

上品野西金地遺跡 愛知県瀬戸市に位置する上品野西金地遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料と方法

試料 測定試料の情報、調製データは第9表のとおりである。

試料は、205P から採取された生材3点（PLD-20351・20352・22824）と、同じく205P から採取された種実2点（PLD-20697・20698）、201P から採取された種実1点（PLD-22546）、207P から採取された生材1点（PLD-20695）、501P から採取された生材1点（PLD-20696）、513SX の最下層から採取された炭化材4点（PLD-20353～20356）、480NR（6層）から採取された炭化材1点（PLD-20357）の計13点である。材の部位は、513SX 採取の PLD-20353 が不明、207P 採取の PLD-20695 がおそらく辺材で、それ以外の全てが最終形成年輪である。

方法 試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

結果

第10表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代 ^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代（yrBP）の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正 暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、1

σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

考察

以下、遺構ごとに結果を整理する。年代測定結果と縄文時代の考古学的編年との対応関係については、小林（2008）と工藤（2012）を参照した。弥生時代の考古学的編年との対応関係については、赤塚（2009）を参照した。

205P の生材（PLD-20351）は、 ^{14}C 年代が 3450 ± 20 ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲（確率 95.4 %）が 1877-1841 cal BC(20.4%)、1825-1796 cal BC(9.3%)、1782-1690 cal BC(65.7%) であった。同じく 205P の生材（PLD-20352）は、 ^{14}C 年代が 3430 ± 25 ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲が 1872-1845 cal BC(6.8%)、1812-1803 cal BC(1.3%)、1776-1666 cal BC(87.3%) であった。これらは縄文時代後期中葉に相当する。同じく 205P の生材（PLD-22824）は、 ^{14}C 年代が 2060 ± 25 ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲が 166BC-19 cal BC(91.5%)、13calBC-1 cal AD(3.9%) であった。これは弥生時代中期高蔵式に相当する。

205P生材

一方、205P の種実は、ツクバネガシ（PLD-20697）の ^{14}C 年代が 3430 ± 20 ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲が 1871-1845 cal BC(5.8%)、1811-1804 cal BC(0.8%)、1776-1682 cal BC(88.9%)、アカガシ（PLD-20698）の ^{14}C 年代が 3405 ± 20 ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲が 1749-1635 cal BC(95.4%)、201P の種実は、ツクバネガシ（PLD-22546）の ^{14}C 年代が 3460 ± 25 ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲が 1880-1838 cal BC(26.9%)、1832-1732cal BC(58.8%)、1718-1693 cal BC(9.7%) であった。これらは縄文時代後期中葉に相当する。年代測定の結果から、205P の生材 2 点 (PLD-20351・20352) と 205P と 201P の種実は同時期の試料と考えられる。

205P・201P種実

501P の生材（PLD-20696）は、 ^{14}C 年代が 2050 ± 20 ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲が 159-136 cal BC(5.0%) および 114 cal BC - 4 cal AD (90.4%) であった。これは弥生時代中期高蔵式期に相当する。年代測定の結果から、501P の生材は、205P の生材 1 点 (PLD-22824) と同時期の試料と考えられる。

501P生材

207P の生材（PLD-20695）は、 ^{14}C 年代が 1135 ± 20 ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲が 876-979 cal AD(95.4%) であった。これは 9 世紀後半から 10 世紀後半で、平安時代に相当する。

207P生材

513SX 最下層の炭化材 4 点（PLD-20353～20356）は、 ^{14}C 年代が $370 \pm 20 \sim 305 \pm 20$ ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲が 1450～1649 cal AD に収まる。これは 15 世紀中頃～17 世紀中頃で、室町・江戸時代に相当する。

513SX炭化材

480NR の炭化材（PLD-20357）は、 ^{14}C 年代が 270 ± 20 ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲が 1523-1570 cal AD(26.5%)、1630-1665 cal AD(67.3%)、1785-1794 cal AD(1.7%) であった。これは 16 世紀前半から 18 世紀末で、室町・江戸時代に相当する。

480NR炭化材

第9表 測定試料と処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-20351	グリッド:7C12b 遺構:205P	試料の種類:生材(クリ) 試料の性状:最終形成年輪 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-20352	グリッド:7C12b 遺構:205P	試料の種類:生材(クリ) 試料の性状:最終形成年輪 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-20353	グリッド:7B16r 遺構:513SX	試料の種類:炭化材(クリ) 試料の性状:不明(破片) 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-20354	グリッド:7B16r 遺構:513SX	試料の種類:炭化材(クスノキ科) 試料の性状:最終形成年輪(枝材) 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-20355	グリッド:7B16r 遺構:513SX	試料の種類:炭化材(クスノキ科) 試料の性状:最終形成年輪(枝材) 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-20356	グリッド:7B16r 遺構:513SX	試料の種類:炭化材(ヒサカキ) 試料の性状:最終形成年輪(枝材) 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-20357	グリッド:8B1n 遺構:480NR	試料の種類:炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪(枝材) 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-20695	グリッド:7C13c 遺構:207P 1153(柱根)	試料の種類:生材(ヒノキ) 試料の性状:辺材? 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-20696	グリッド:7C12b 遺構:501P 1152(柱根)	試料の種類:生材(モミ属) 試料の性状:最終形成年輪 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-20697	グリッド:7C12b 遺構:205P	試料の種類:生の種実(ツクバネガシ) 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-20698	グリッド:7C12b 遺構:205P	試料の種類:生の種実(アカガシ) 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-22546	グリッド:7C12c 遺構:201P	試料の種類:生の種実(ツクバネガシ) 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-22824	グリッド:7C12b 遺構:205P 1151(柱根)	試料の種類:生材(モミ属) 試料の性状:最終形成年輪 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)

文献

赤塚次郎 (2009) 朝日遺跡標準層序の暦年代, 赤塚次郎編「朝日遺跡Ⅷ 総集編」; 134-137, 愛知県埋蔵文化財センター.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代, 小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」; 257-269, 同成社.

第10表 放射性炭素年代測定と暦年較正

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-20351	-24.86 $\pm$ 0.16	3449 $\pm$ 22	3450 $\pm$ 20	1867BC(14.6%)1848BC 1774BC(39.3%)1736BC 1713BC(14.4%)1695BC	1877BC(20.4%)1841BC 1825BC(9.3%)1796BC 1782BC(65.7%)1690BC
PLD-20352	-26.38 $\pm$ 0.20	3428 $\pm$ 23	3430 $\pm$ 25	1750BC(68.2%)1691BC	1872BC(6.8%)1845BC 1812BC(1.3%)1803BC 1776BC(87.3%)1666BC
PLD-20353	-21.63 $\pm$ 0.28	305 $\pm$ 21	305 $\pm$ 20	1522AD(52.4%)1574AD 1628AD(15.8%)1644AD	1497AD(1.4%)1504AD 1512AD(70.1%)1601AD 1616AD(23.9%)1649AD
PLD-20354	-24.64 $\pm$ 0.18	308 $\pm$ 19	310 $\pm$ 20	1523AD(53.6%)1573AD 1628AD(14.6%)1643AD	1513AD(72.4%)1601AD 1616AD(23.0%)1647AD
PLD-20355	-25.39 $\pm$ 0.17	372 $\pm$ 19	370 $\pm$ 20	1460AD(44.1%)1498AD 1505AD(6.5%)1512AD 1602AD(17.6%)1616AD	1450AD(65.8%)1523AD 1574AD(29.6%)1626AD
PLD-20356	-25.95 $\pm$ 0.18	330 $\pm$ 19	330 $\pm$ 20	1512AD(11.7%)1529AD 1544AD(43.0%)1601AD 1617AD(13.4%)1634AD	1488AD(76.2%)1604AD 1609AD(19.2%)1640AD
PLD-20357	-24.13 $\pm$ 0.17	270 $\pm$ 19	270 $\pm$ 20	1530AD(7.8%)1537AD 1635AD(60.4%)1660AD	1523AD(26.5%)1570AD 1630AD(67.3%)1665AD 1785AD(1.7%)1794AD
PLD-20695	-25.67 $\pm$ 0.18	1134 $\pm$ 18	1135 $\pm$ 20	890AD(12.4%)899AD 919AD(55.8%)962AD	876AD(95.4%)979AD
PLD-20696	-26.17 $\pm$ 0.17	2048 $\pm$ 19	2050 $\pm$ 20	93BC(55.8%)37BC 29BC(5.3%)21BC 11BC(7.1%)2BC	159BC(5.0%)136BC 114BC(90.4%)4AD
PLD-20697	-26.64 $\pm$ 0.20	3429 $\pm$ 20	3430 $\pm$ 20	1751BC(68.2%)1691BC	1871BC(5.8%)1845BC 1811BC(0.8%)1804BC 1776BC(88.9%)1682BC
PLD-20698	-28.71 $\pm$ 0.22	3403 $\pm$ 21	3405 $\pm$ 20	1741BC(68.2%)1685BC	1749BC(95.4%)1635BC
PLD-22546	-26.99 $\pm$ 0.20	3459 $\pm$ 23	3460 $\pm$ 25	1872BC(23.2%)1845BC 1813BC(7.7%)1802BC 1777BC(37.3%)1704BC	1880BC(26.9%)1838BC 1832BC(58.8%)1732BC 1718BC(9.7%)1693BC
PLD-22824	-27.37 $\pm$ 0.17	2061 $\pm$ 23	2060 $\pm$ 25	145BC(2.4%)141BC 111BC(65.8%)41BC	166BC(91.5%)19BC 13BC(3.9%)1AD

工藤雄一郎（2012）後氷期の考古編年と ^{14}C 年代. 旧石器・縄文時代の環境文化史, 212-229, 新泉社.
 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20, 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0_50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

(2) 土器付着物の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

藤根 久・伊藤 茂・安昭炫・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani

はじめに

上品野西金地遺跡

上品野西金地遺跡は、愛知県瀬戸市上品野町に所在する縄文時代、古代・中世、戦国・江戸時代の複合遺跡である。ここでは、戦国時代の遺構から出土した釜等（第 140 図）の土器付着物について加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料と方法

試料

測定試料は、各土器の付着物についてメス等を用いて必要量を採取した。各付着物は、

方法

調製した後（第 11 表）、加速器質量分析計（コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

結果

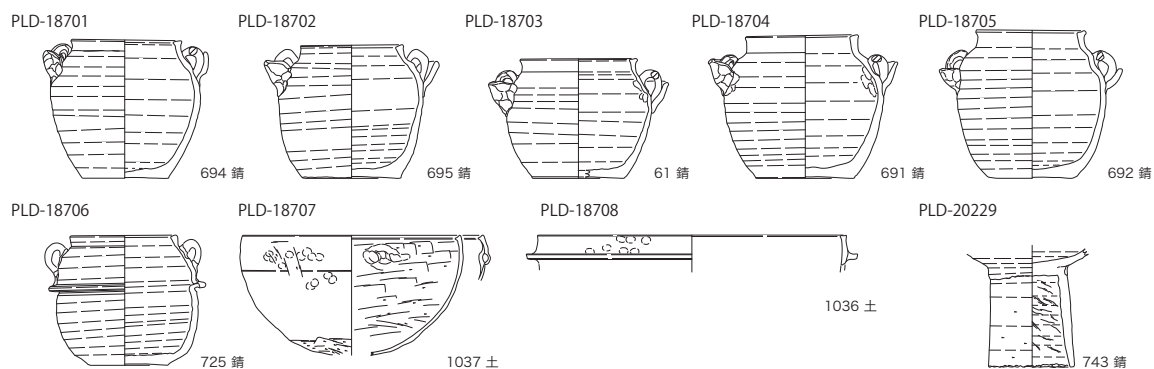
第 12 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代（yrBP）の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。



第140図 測定試料

第11表 測定試料と処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-18701	遺構:480NR(8B1m) 試料No.694	試料の種類:土器付着物 器種:釜 部位:体部下位外面	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.2N,塩酸:1.2N)
PLD-18702	遺構:480NR 層位:6層 試料No.695	試料の種類:土器付着物 器種:釜 部位:口縁部外面	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.2N,塩酸:1.2N)
PLD-18703	遺構:035SX(8B6h) 試料No.61	試料の種類:土器付着物 器種:釜 部位:体部下位外面	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.2N,塩酸:1.2N)
PLD-18704	遺構:480NR(8B1m) 層位:6層 試料No.691	試料の種類:土器付着物 器種:釜 部位:口縁部外面	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.2N,塩酸:1.2N)
PLD-18705	遺構:480NR(8B2m) 層位:6層 試料No.692	試料の種類:土器付着物 器種:釜 部位:体部外面	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.2N,塩酸:1.2N)
PLD-18706	遺構:506SX グリッド:7B20o 試料No.725	試料の種類:土器付着物 器種:羽釜 部位:体部中位外面	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.2N,塩酸:1.2N)
PLD-18707	遺構:480NR(7B20m) 層位:6層 試料No.1037	試料の種類:土器付着物 器種:土師器内耳鍋 部位:体部下位外面	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.2N,塩酸:1.2N)
PLD-18708	遺構:480NR(8B1n) 層位:3～5層 試料No.1036	試料の種類:土器付着物 器種:羽付鍋 部位:口縁部外面	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.2N,塩酸:1.2N)
PLD-20229	遺構:330SU(7B15s) 試料No.743	試料の種類:土器付着物 器種:燭台 部位:杯部底面	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.2N,塩酸:1.2N)

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

考察

各試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。

いずれの試料も、付着していた土器は戦国時代（16世紀）の土器である。その結果を見ると、対象とした土器付着物の放射性炭素年代測定結果は、大きく4パターンの確率分布に区分される。

最も古い年代範囲を示したのは、480NRから出土した釜(695)の口縁部外側付着物(PLD-18702)で、 2σ 暦年代範囲において1459-1524 cal AD(50.7%)および1558-1632 cal AD(44.7%)であり、15世紀中頃から16世紀前半および16世紀中頃から17世紀前半の年代範囲を示した。

古い年代範囲

第12表 放射性炭素年代測定と暦年較正

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-18701 試料No.694	-26.37 $\pm$ 0.15	321 $\pm$ 18	320 $\pm$ 20	1521AD(8.8%)1531AD 1537AD(46.9%)1592AD 1620AD(12.4%)1635AD	1493AD(76.1%)1603AD 1615AD(19.3%)1643AD
PLD-18702 試料No.695	-26.64 $\pm$ 0.15	358 $\pm$ 18	360 $\pm$ 20	1471AD(43.1%)1520AD 1592AD(25.1%)1620AD	1459AD(50.7%)1524AD 1558AD(44.7%)1632AD
PLD-18703 試料No.61	-26.91 $\pm$ 0.14	309 $\pm$ 18	310 $\pm$ 20	1523AD(54.3%)1573AD 1629AD(13.9%)1642AD	1514AD(72.8%)1600AD 1616AD(22.6%)1646AD
PLD-18704 試料No.691	-26.37 $\pm$ 0.17	328 $\pm$ 15	330 $\pm$ 15	1515AD(11.0%)1529AD 1551AD(42.9%)1599AD 1618AD(14.3%)1633AD	1491AD(77.1%)1603AD 1613AD(18.3%)1639AD
PLD-18705 試料No.692	-25.32 $\pm$ 0.16	312 $\pm$ 15	310 $\pm$ 15	1523AD(56.2%)1572AD 1630AD(12.0%)1641AD	1514AD(74.1%)1600AD 1616AD(21.3%)1645AD
PLD-18706 試料No.725	-27.43 $\pm$ 0.15	326 $\pm$ 18	325 $\pm$ 20	1516AD(10.1%)1529AD 1540AD(44.8%)1597AD 1618AD(13.3%)1634AD	1491AD(76.6%)1603AD 1613AD(18.8%)1641AD
PLD-18707 試料No.1037	-26.58 $\pm$ 0.14	332 $\pm$ 18	330 $\pm$ 20	1499AD(1.7%)1502AD 1512AD(12.2%)1528AD 1553AD(40.1%)1601AD 1616AD(14.2%)1633AD	1486AD(95.4%)1639AD
PLD-18708 試料No.1036	-27.16 $\pm$ 0.17	332 $\pm$ 18	330 $\pm$ 20	1499AD(1.7%)1502AD 1512AD(12.2%)1528AD 1553AD(40.1%)1601AD 1616AD(14.2%)1633AD	1486AD(95.4%)1639AD
PLD-20229 試料No.743	-26.99 $\pm$ 0.23	297 $\pm$ 18	295 $\pm$ 20	1525AD(47.5%)1557AD 1632AD(20.7%)1645AD	1520AD(67.2%)1593AD 1619AD(28.2%)1649AD

新しい年代範囲

一方、新しい年代範囲を示したのは、330SU から出土した燭台 (743) の底部内面付着物 (PLD-20229) で、2 σ 暦年代範囲において 1520-1593 cal AD(67.2%) および 1619-1649 cal AD(28.2%) であり、16 世紀前半から末の年代範囲の確率が高い。

文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0_50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

（３）大型植物遺体

佐々木由香・バンドリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

はじめに

上品野西金地遺跡は、瀬戸市上品野町に位置し、品野盆地の北東、水野川北岸の丘陵上から水野川に面した低地部分にかけて立地する。低地部分の標高は約 200m である。ここでは低地部分の斜面の堆積物や遺構内から出土した大型植物遺体の同定を行い、当時の利用植物や植生について検討した。なお、試料の一部を用いて AMS 法による放射性炭素年代測定も行っている（同章（１）を参照）。

上品野西金地遺跡

大型植物遺体同定

放射性炭素年代測定

試料と方法

試料は、発掘調査中に目視で回収された大型植物遺体である。試料数は 17 試料で、1 試料あたり 1 点から数十点の種実が入っていた。試料は、表土とトレンチ内、205P、480NR、400SD、428SX、415SX、459SD、042SK、201P から出土した種実である。ピットである 205P はクリ材が検出されており、放射性炭素年代測定の結果、このクリ材はピット内の種実と同時期の縄文時代後期中葉であった。トレンチ内と谷状の地形（正確には斜面の堆積層）である 480NR、性格不明遺構の 428SX、415SX の時期は戦国時代から江戸時代、土坑の 042SK は戦国時代、溝の 400SD・459SD は中世（13 世紀後半）と推定されている。

205P

201P

480NR

400SD・459SD

同定および計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。オニグルミとモモは完形と破片に分け、さらに動物食痕をもつものは区別した。試料は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

結果

同定の結果、木本植物の針葉樹ではクロマツ球果と針葉樹球果の 2 分類群、広葉樹ではアカガシ果実と、イチイガシ果実、アラカシ果実、ツクバネガシ果実・未熟果・未熟殻斗、アカガシ・ツクバネガシ果実、モモ核、スモモ核の 7 分類群の計 9 分類群が得られた。この他に、科以下の同定ができなかった不明 A 種実が得られた。同定結果を第 13 表に示す。以下に、遺構ごとの出土傾向を記載する（不明は除く）。

トレンチ内（7B20p）：モモ核完形 2 点 that 得られた。うち 1 点には動物食痕がみられた。

205P：ツクバネガシ果実が多く、アカガシ・ツクバネガシ果実が少量、イチイガシとアラカシ、アカガシ果実がわずかに得られた。

480NR：モモ核完形 6 点、破片 4 点 that 得られた。完形にはすべて動物食痕がみられた。

400SD：モモ核破片が 1 点 that 得られた。

428SX：モモ核破片が 1 点 that 得られた。

415SX：モモ核完形が 2 点、針葉樹球果とスモモ核が各 1 点 that 得られた。モモ核のうち 1 点には動物食痕がみられた。

459SD：クロマツ球果が 1 点 that 得られた。

042SK：モモ核完形が 1 点 that 得られた。動物食痕がみられた。

201P：ツクバネガシ果実が 1 点、アカガシ・ツクバネガシ未熟果が 2 点と未熟殻斗が 1 点 that 得られた。

次に、産出した分類群について記載し、写真（写真8）を掲載して、同定の根拠とする。

(1)クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. 球果 マツ科

茶褐色で、狭卵形。種鱗はくさび形で、木質化しており、硬い。露出部は菱形状。長さ 39.4mm、幅 20.7mm。

(2)針葉樹 Conifer 球果

黒褐色で、円錐形。残存状態が悪く鱗片の観察はできないが、マツ属の可能性がある。長さ 15.1mm、幅 10.1mm。内部に種子が残存している。種子は淡黄色で上面観は楕円形、側面観は卵形。翼をもつ。長さ 4.0mm、幅 2.5mm。

(3)アカガシ *Quercus acuta* Thunb. 果実 ブナ科

暗褐色で、円柱状楕円体。上部は太く、先端はやや細くなる。臍の幅は果実幅の約 50%以上。果実頂部に輪状紋がみられ、果実から突出し、太い。突出部（首）は伏腕状。臍はやや膨らむ。長さ 17.3～24.5mm、幅 10.9～13.4mm。

(4)イチイガシ *Quercus gilva* Blume 果実 ブナ科

暗褐色で、側面観は楕円形～長楕円形。突出部（首）は円柱状ないし円錐状で輪状紋がある。柱頭はほとんど残存していない。臍は中央部がやや尖るものが多い。長さ 18.5mm、幅 12.2mm。

(5)アラカシ *Quercus glauca* Thunb. 果実 ブナ科

明褐色で、上面観は円形、側面観は広倒卵形。上部から幅広い円錐状の突出部（首）へと徐々に狭くなる。突出部の外にも輪状紋がある。柱頭は短い。臍の幅は果実幅の 1/2 未満と小さく、ほぼ平坦。長さ 14.7mm、幅 11.1mm 程度。

(6)ツクバネガシ *Quercus sessilifolia* Blume 果実 ブナ科

暗褐色で、円柱状楕円体。堅果上部は太い。臍の幅は果実幅の約 50%以上。突出部（首）はなだらかな円錐状。臍は膨らまない。長さ 16.9～18.6mm、幅 13.7～14.2mm 程度。破片等でアカガシとの区別が難しい一群はアカガシ-ツクバネガシとした。アカガシ-ツクバネガシの未熟殻斗には輪状紋があり、開口型。高さ 7.8mm、幅 11.1mm。

(7)モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科

黄褐色～茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先端が尖る。下端の着点は凹む。表面全体に不規則で深い溝状の凹孔がある。片側側面には縫合線をもつ稜がある。計測可能な 14 点の核の大きさは、長さ 23.0～30.5（平均 26.9）mm、幅 17.9～22.5（平均 19.9）mm、厚さ 10.7～18.4（平均 14.9）mm。

(8)スモモ *Prunus salicina* L. 核 バラ科

淡褐色で、上面観はやや扁平な両凸レンズ形、側面観は紡錘形。両側に縫合線があり、浅い溝が入る。表面は平滑。長さ 12.5mm、幅 10.5mm、厚さ 7.0mm。

(9)不明A Unkonwn A 種実

暗褐色で、破片だが球形か。表面には特徴的な構造等は見えない。残存長 13.2mm、幅 16.5mm。

考察

モモ
動物食痕

戦国・江戸時代の谷状地形である 480NR から出土した種実は、栽培植物で果樹のモモであった。これらのモモの中にはネズミ類によると考えられる動物食痕をもつものがあり、

点数も10点中6点と多かった。また、これらのモモ核の長さは2.3～3.0cm程度で、大きさの変異が大きかった。このほかにも、戦国・江戸時代の時期のトレンチ内採取試料、性格不明遺構である428SXと415SX、戦国時代の土坑である042SK、中世の溝である400SDからもモモが産出しており、完形が産出した遺構のモモには動物食痕をもつものが必ず含まれていた。モモの破片が産出した場合は、小片のため動物食痕かどうかの判断ができなかった。

中世の溝である459SDからはクロマツ球果が得られており、溝の傍にクロマツが生育していたと考えられる。

クロマツの生育

縄文時代後期中葉のピットである205Pからは、常緑樹であるアカガシとイチイガシ、アラカシ、ツクバネガシのドングリ類が共伴して出土した。なかでもツクバネガシが約30点と多かった。食用部位である果実のみが得られており、利用のために貯蔵されていた可能性がある。

ドングリ類の貯蔵

同じく縄文時代後期中葉のピットである201Pからは、ツクバネガシとアカガシ・ツクバネガシが得られた。ただし、アカガシ・ツクバネガシは未熟果や未熟殻斗が産出しているため、遺構周辺にアカガシもしくはツクバネガシが生育し、そこから自然の営力で果実等がピット内にもたらされた可能性が考えられる。

今回は調査中に目視で取り上げられた種実を検討したが、これら種実が出土した堆積物中には微小種実も良好に埋蔵されていると推定される。今後、堆積物中に含まれる種実をより細かく解析することにより、当時の植生や利用植物が明らかになると考えられる。

第13表 出土した大型植物遺体（括弧は破片を示す）

分類群	グリッド	7B16s	7B20p	7C12b	7C12b		7B20o	8B1m	8B1n	
	遺構	表土	トレンチ内	205P			480NR			
	時期	不明	戦国・江戸	縄文後期中葉			戦国・江戸			
試料番号		31	32	33	34	35	36	37	38	39
アカガシ	果実			1	1	2				
イチイガシ	果実				1 (1)					
アラカシ	果実						1			
ツクバネガシ	果実			3	1	20 (3)	5			
アカガシ・ツクバネガシ	果実					(14)				
モモ	核		2					1	1	3
スモモ	核									
不明A	種実								2	

分類群	グリッド	8B1n	8B2n	8B2s	8B2t	8B3r	8B4q	8B6i	7C12c
	遺構	480NR		400SD	428SX	415SX	459SD	042SK	201P
	遺物番号	-						216	-
	時期	戦国・江戸					中世	戦国	縄文後期中葉
試料番号		40	41	42	43	44	45	46	47
クロマツ	球果						1		
針葉樹	球果					1			
ツクバネガシ	果実								1
アカガシ・ツクバネガシ	未熟果								2
	未熟殻斗								1
モモ	核	1	(4)	(1)	(1)	2		1	
スモモ	核					1			



スケール 1:10mm, 2-15:5mm

写真8 出土した大型植物遺体

1.クロマツ球果(No.45)、2.針葉樹球果(No.44)、3.アカガシ果実(No.34、PLD-20698)、4.アカガシ果実(No.33)、5.イチイガシ果実(No.34)、6.アラカシ果実(No.36)、7.ツクパネガシ果実(No.33、PLD-20697)、8.ツクパネガシ果実(No.36)、9.アカガシ—ツクパネガシ未熟果(No.47)、10.アカガシ—ツクパネガシ未熟殻斗(No.47)、11.モモ核(No.32)、12.モモ核動物食痕(No.39)、13.モモ核動物食痕(No.40)、14.スモモ核(No.44)、15.不明A種実(No.38)

(4) 出土木製品および炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

はじめに

上品野西金寺遺跡は、瀬戸市上品野町に所在する。発掘調査では、縄文時代、古代・中世、戦国・江戸時代の遺構や遺物が確認されている。ここでは、出土した木製品・加工木および炭化材の樹種同定結果を報告する。

上品野西金地遺跡

試料と方法

試料は、漆器や柱材などの木製品および加工木 28 点と炭化材 7 点の合計 35 点である。炭化材で同一試料内に複数樹種が確認されたものは、試料番号の後ろに補助番号を設けた。

試料

木製品は、剃刀を用いて試料の 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロラルで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

方法

炭化材は、木取りの確認および径、年輪数の計測を行った後、手あるいはカッターナイフを用いて 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料を作製した。直径 1cm の真鍮製試料台に試料を両面テープで固定し、銀ペーストを塗布して乾燥させた後、金蒸着して走査型電子顕微鏡（日本電子㈱製 JSM-5900LV 型）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

炭化材

結果

樹種同定の結果、針葉樹はモミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、ヒノキ、アスナロ、カヤの 6 分類群、広葉樹はクリ、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節と呼ぶ）、ケヤキ、クスノキ科、ヒサカキ、サクラ属、トチノキ、トネリコ属シオジ節（以下、シオジ節と呼ぶ）の 8 分類群、分類群不明が 1 つあり、合計 15 分類群が確認された。また、No.21 の下駄は炭化していて切片が採取できず、樹種同定が行えなかったが、肉眼観察から針葉樹と推測された。

木製品・加工木では、針葉樹はモミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、ヒノキ、アスナロ、カヤの 6 分類群、広葉樹はクリ、コナラ節、ケヤキ、サクラ属、トチノキ、シオジ節の 6 分類群が確認された。炭化材では、針葉樹はマツ属複維管束亜属の 1 分類群、広葉樹はクリ、コナラ節、クスノキ科、ヒサカキの 4 分類群、不明 1 分類群が確認された。木製品・加工木と炭化材の樹種構成を第 15 表、器種別の樹種構成を第 16 表、結果の一覧を第 14 表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、顕微鏡写真を写真 9～11 に示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 写真 9 1a-1c(No.7)

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。放射組織にはじゅず状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 1～4 個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミ・シラベ・トドマツなど約 5 種ある。材は柔軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

(2) マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 写真 9 2a-2c(No.28-1)、3c(No.14)

第14表 樹種同定結果一覧

試料番号	遺物番号	グリッド	遺構	器種	樹種	木取り
1	1164	8B2l	040SD	横櫛	不明	不明
2	1160	7B18s	検出	下駄の歯	サクラ属	板目
3	1163	8B3q	検出	漆椀	トネリコ属シオジ節	横木
4		8B3r	検出	漆椀	トネリコ属シオジ節	不明
5		8B3r	415SX	漆椀	トチノキ	不明
6	1153	7C13c	207P	柱	ヒノキ	不明
7	1151	7C12b	205P	-	モミ属	不明
8	1152	7C12b	501P	柱	モミ属	丸木
9	1154	7C20a	391P	柱	カヤ	不明
10	1158	8B1n	480NR-6層	下駄	ヒノキ	柃目
11		8B1m	480NR-6層	底板	ヒノキ	追柃目
12		8B1n	480NR	折敷	ヒノキ	追柃目
13	1162	8B1n	480NR	漆椀	クリ	横木
14	1157	8B1m	480NR	柱	マツ属複雑管束亜属	丸木
15	1156	8B1m	480NR	柱	クリ	丸木
16	1155	8B1m	480NR	柱	コナラ属コナラ節	丸木
17	1161	8B1m	480NR-6層	漆椀	トチノキ	横木
18		8B1m	480NR-6層	板材	ヒノキ	板目
19		8B1m	480NR-6層	板材	スギ	板目
20		8B1n	480NR-3層	炭化材	マツ属複雑管束亜属	破片(約1cm角、1年輪)
21		8B3n	007NR下層	下駄	針葉樹?(炭化)	板目?
22		8B2n	007NR層	残欠	アスナロ	割材
23		7B16s	380SU	板	スギ	追柃目
24	1159	7B16t	検出	下駄	スギ	柃目
25		7C12b	205P	-	クリ	丸木
26		8B3r	413SW	漆椀	ケヤキ	不明
27		8B4q	459SD	残欠	スギ	板目
28-1		8B4q	459SD	炭化材	マツ属複雑管束亜属	半割?(直径:0.8cm、1年輪)
28-2		8B4q	459SD	炭化材	コナラ属コナラ節	丸木(直径:0.6cm、2年輪)
29		8B4r	459SD	残欠	ヒノキ	柃目
30		7C12b	205SK	-	クリ	丸木
48		7B16r	513SX	炭化材	クリ	破片(1.7×1.5cm、1年輪)
49		7B16r	513SX	炭化材	クスノキ科	丸木(直径:1.0cm、8年輪)
50		7B16r	513SX	炭化材	クスノキ科	丸木(直径:1.3cm、7年輪)
51		7B16r	513SX	炭化材	ヒサカキ	丸木(直径:1.0cm、8年輪)
52		8B1n	480NR-6層	炭化材	コナラ属コナラ節	丸木(直径:2.8cm、11年輪)

仮道管、垂直・水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側に向かって鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、韌性は大である。

(3) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 写真9 4a-4c(No.27)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に2個存在する。

スギは暖帯・温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で切削加工は容易、割裂性は大きい。

(4) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 写真9 5a-5c(No.6)、6c(No.29)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔はトウヒ型〜ヒノキ型で1分野に2個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性が大きく、耐朽性・耐湿性が著しく高く、狂いが少ない。

(5) アスナロ *Thujopsis dolabrata* Siebold et Zucc. ヒノキ科 写真9・10 7a-7c(No.22)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。樹脂細胞は晩材部に散在し、放射組織内にも豊富に樹脂を含む。分野壁孔は小型のスギ型〜ヒノキ型で、1分野に不揃いに3〜4個存在する。

アスナロは温帯に分布する常緑高木である。材は、加工性・割裂性は中庸だが、耐朽性・保存性が高い。

(6) カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 写真10 8a-8c(No.9)

仮道管と放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。仮道管壁に2本対のらせん肥厚がある。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に4個程度存在する。

カヤは宮城県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は木理直通で緻密、弾性・耐久力が強く水湿にも強い。

(7) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 写真10 9a-9c(No.25)、10a(No.48)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木である。材は耐朽性・耐湿性に優れ、保存性が高い。

(8) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 写真10 11a-11c(No.52)、

12a(No.16)

大型の道管が年輪のはじめに 1 列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と広放射組織の 2 種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で加工困難である。

(9) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 写真10 13a-13c(No.26)

大型の道管が年輪のはじめに 1 列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は 3～5 列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や溪畔によく生育する。材は重硬で狂いが無い。

(10) クスノキ科 *Lauraceae* 写真10・11 14a-14c(No.49)

やや小型の道管が単独ないし 2～4 個放射方向に複合して、まばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で 1～3 列幅である。

クスノキ科は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。クスノキを含むニッケイ属、タブノキ属、クロモジ属など 8 属がある。

(11) ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ科 写真11 15a-15c(No.51)

小径の角張った道管がほぼ単独で、均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で、40 段以上となる。放射組織は 1～4 列幅で、上下に直立もしくは方形細胞が数個連なる異性である。

ヒサカキは暖帯～亜熱帯に生育する常緑低木または小高木である。材の強さは中庸、割裂は困難である。

(12) サクラ属 (広義) *Prunus* s.l. バラ科 写真11 16a-16c(No.2)

やや小型の道管が単独あるいは斜め方向に数個複合して分布する散孔材である。道管に着色物質を含むこともある。道管の穿孔は単一である。放射組織は 1～7 列幅の異性である。

サクラ属は温帯に生育する落葉または常緑の高木または低木である。サクラ属はさらにサクラ亜属、スモモ亜属、モモ亜属、ウワズミザクラ亜属などに分類され、25 種がある。木材組織からはモモとバクチノキ以外は識別困難なため、この 2 種を除いたサクラ属とする。

(13) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 写真11 17a-17c(No.17)

やや小型の道管が単独もしくは数個放射方向に複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列で、すべて平伏細胞で構成される同性である。接線断面において放射組織が層界状に配列する。

トチノキは温帯から暖帯に分布する落葉高木で、やや湿り気のある肥沃な土地の深い谷間や中腹の緩傾斜地によく生育する。材は柔らかく緻密であるが、保存性は低い。

(14) トネリコ属シオジ節 *Fraxinus* sect. *Fraxinaster* モクセイ科 写真11 18a-18c(No.3)

年輪のはじめに大型の道管が数列並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁の小道管が単独もしくは放射方向に2～3個複合して散在する。道管の穿孔は単一である。放射組織は1～3列幅の同性である。

シオジ節は温帯に分布する落葉高木で、シオジとヤチダモがある。材はやや重硬で強く、粘りがあり、加工性・保存性は中庸である。

(15) 不明 写真11 19a-19b(No.1)

木材組織がみられず、同定には至らなかった。

第15表 出土材の樹種構成

まとめ

分類群/器種	木製品	炭化材	計
モミ属	2		2
マツ属複雑管束亜属	1	2	3
スギ	4		4
ヒノキ	6		6
アスナロ	1		1
カヤ	1		1
針葉樹?	1		1
クリ	4	1	5
コナラ属コナラ節	1	2	3
ケヤキ	1		1
クスノキ科		2	2
ヒサカキ		1	1
サクラ属	1		1
トチノキ	2		2
トネリコ属シオジ節	2		2
不明	1		1
計	28	8	36

木製品では、下駄はスギとヒノキが確認され、炭化していた試料は針葉樹と思われる。下駄の歯はサクラ属であった。一般に、下駄には身近で手に入りやすいスギやヒノキの針葉樹が用いられることが多く、本遺跡の利用傾向とも一致する（島地・伊東，1988）。また、下駄の歯にはケヤキなどの堅硬な樹木を用いる傾向がある（山田，1993）。本遺跡の下駄の歯に用いられていたサクラ属も比較的重硬で靱性のある材であるため、下駄の歯としても適材と思われる。

横櫓は木本やタケ類などにみられる植物組織が観察出来なかったため、植物由来ではない素材である可能性が高い。

漆碗にはクリ、ケヤキ、トチノキ、シオジ

下駄

下駄の歯

横櫓

漆碗

第16表 器種別の樹種構成

分類群/器種	下駄		漆碗	折敷	柱	底板	板	板材	残欠	炭化材	不明	計
	横櫓	台 歯										
モミ属					1						1	2
マツ属複雑管束亜属					1					2		3
スギ		1					1	1	1			4
ヒノキ		1		1	1	1		1	1			6
アスナロ									1			1
カヤ					1							1
針葉樹?		1										1
クリ			1		1					1	2	5
コナラ属コナラ節					1					2		3
ケヤキ			1									1
クスノキ科										2		2
ヒサカキ										1		1
サクラ属			1									1
トチノキ				2								2
トネリコ属シオジ節				2								2
不明	1											1
計	1	3	1	6	1	6	1	1	2	3	3	36

節が用いられていた。クリ、ケヤキ、シオジ節の材は重硬なため加工困難であるが、韌性があるため薄手の木地にも適しており、特にケヤキは優品に使用される傾向がある（橋本，1979）。また、トチノキは軽軟で加工容易な材であり、原材を大量に入手できるため、ブナと並んで最も一般的な漆器木地である。

柱材 柱材はモミ属、マツ属複維管束亜属、ヒノキ、カヤ、クリ、コナラ節であった。針葉樹は割裂性が大きいため加工容易なものが多いが、広葉樹のクリとコナラ節は重硬で加工が困難である。ただ、いずれも大径木になる樹木であり、耐久性に優れた材であるため、柱材としても有用である。

板状の木製品 折敷と底板はヒノキ、板材はヒノキとスギ、残欠はスギ、ヒノキ、アスナロ、器種不明木材はモミ属とクリであった。板状の木製品・加工木には針葉樹が多くみられた。針葉樹は全般に木理直通で割裂しやすく、製材加工がしやすいためと思われる。

炭化材 炭化材は、マツ属複維管束亜属、クリ、コナラ節、クスノキ科、ヒサカキであった。形状は、クリとマツ属複維管束亜属は破片のため不明であったが、他は丸木が多く、半割も丸木が割れたものである可能性がある。丸木および半割の材は、直径が3cm以下と細いため、枝材と思われる。いずれも常緑樹林帯に分布する樹木で、本遺跡周辺の元来の自然植生と一致する。マツ属複維管束亜属、クリ、コナラ節は二次林的要素の強い樹木で、遺跡周辺には二次林が存在した可能性もあるが、炭化材の分析点数が少ないため、周辺植生を検討するには花粉分析等、ほかの分析と比較する必要がある。

文献

- 橋本鉄男（1979）ものと人間の文化史31 ろくろ，444p，法政大学出版局。
 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，259p，雄山閣出版。
 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史－，植生史研究特別第1号，242p，日本植生史学会。

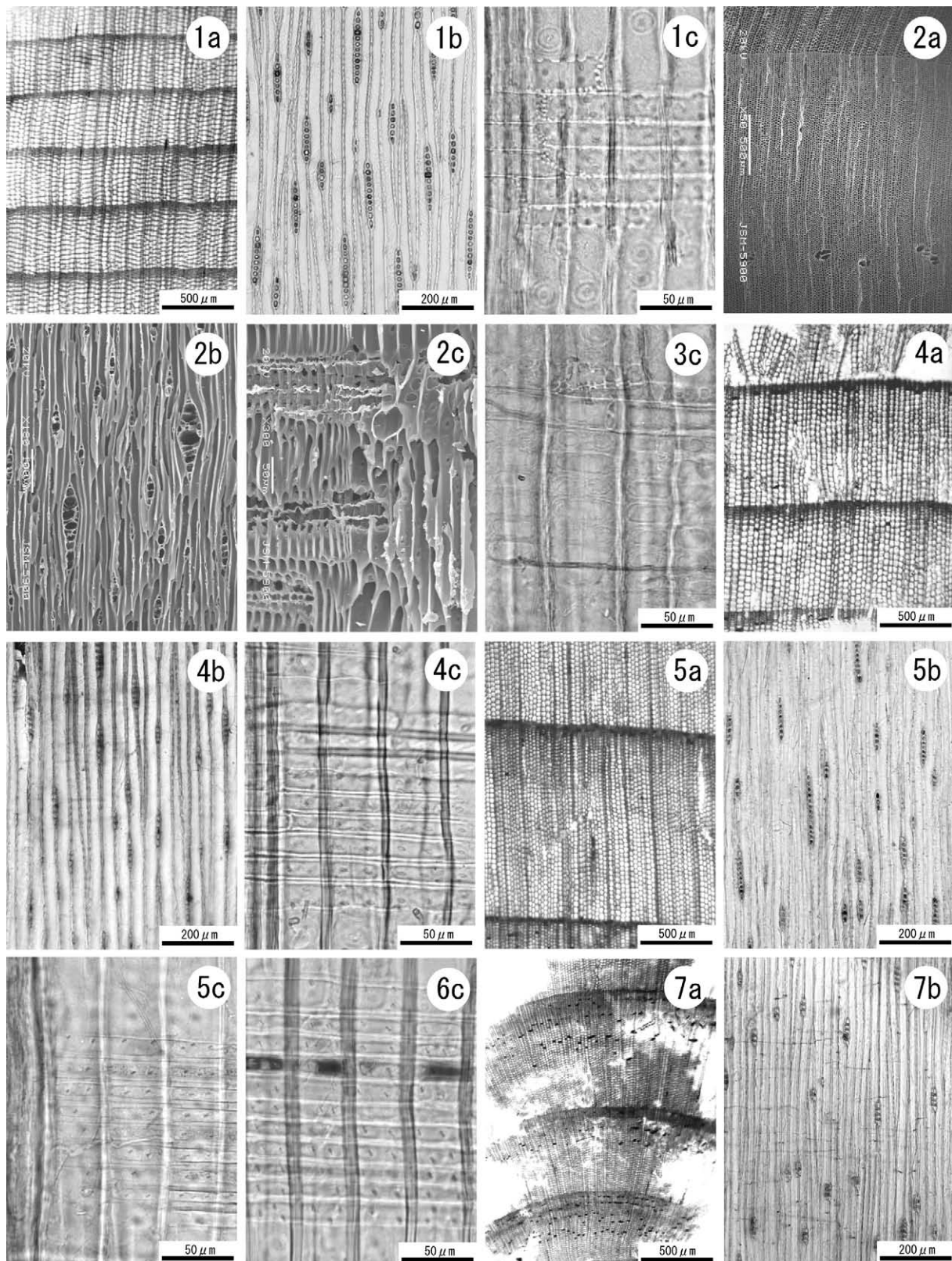


写真9 出土材の顕微鏡写真(1)

1a-1c.モミ属 (No.7)、2a-2c.マツ属複維管束亜属 (No.28-1)、3c.マツ属複維管束亜属 (No.14)、4a-4c.スギ (No.27)、
5a-5c.ヒノキ (No.6)、6c.ヒノキ (No.29)、7a-7b.アスナロ (No.22)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

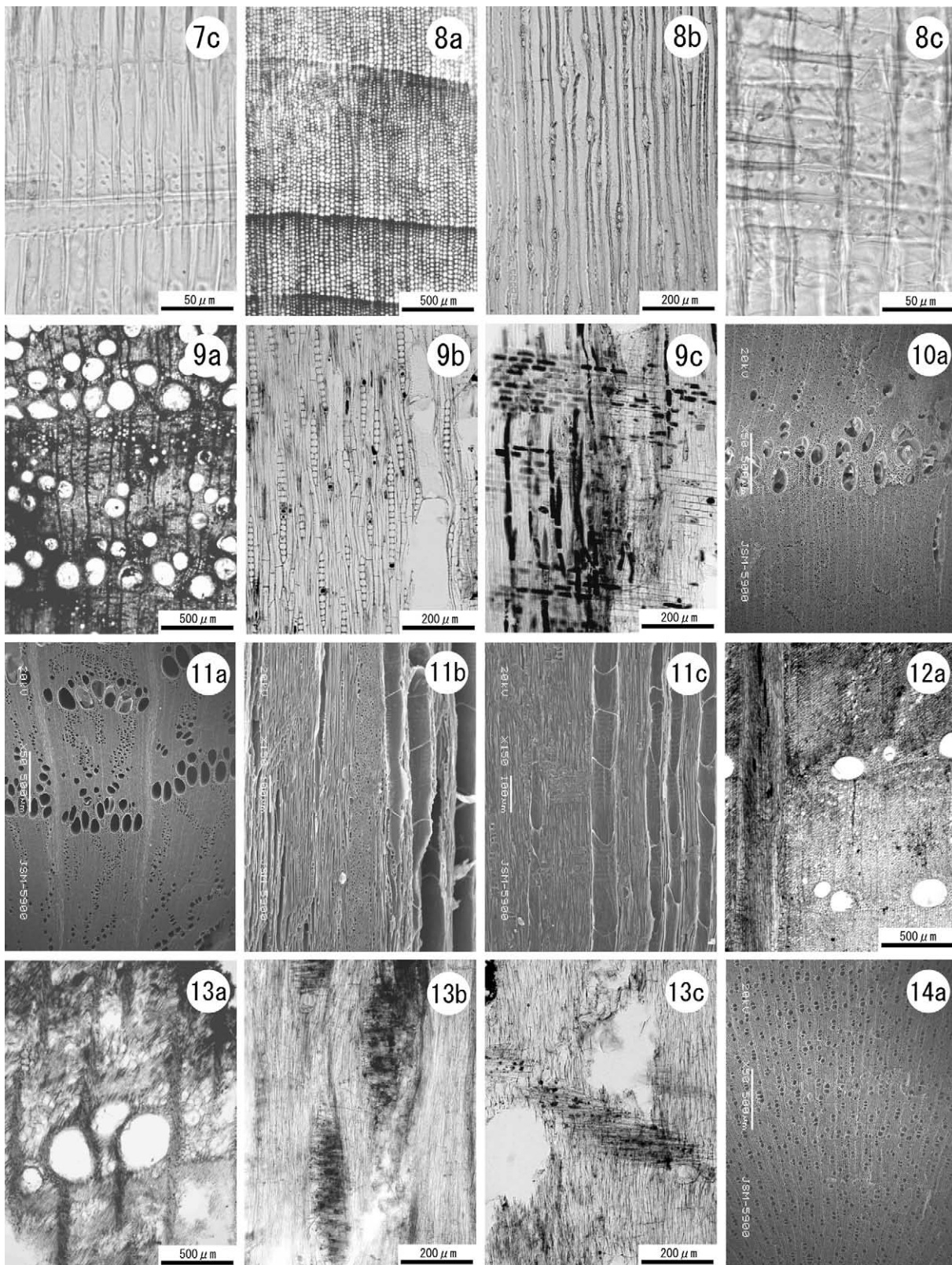


写真 10 出土材の顕微鏡写真 (2)

7c.アスナロ (No.22)、8a-8c.カヤ (No.9)、9a-9c.クリ (No.25)、10a.クリ (No.48)、11a-11c.コナラ属コナラ節 (No.52)、12a.コナラ属コナラ節 (No.16)、13a-13c.ケヤキ (No.26)、14a.クスノキ科 (No.49)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

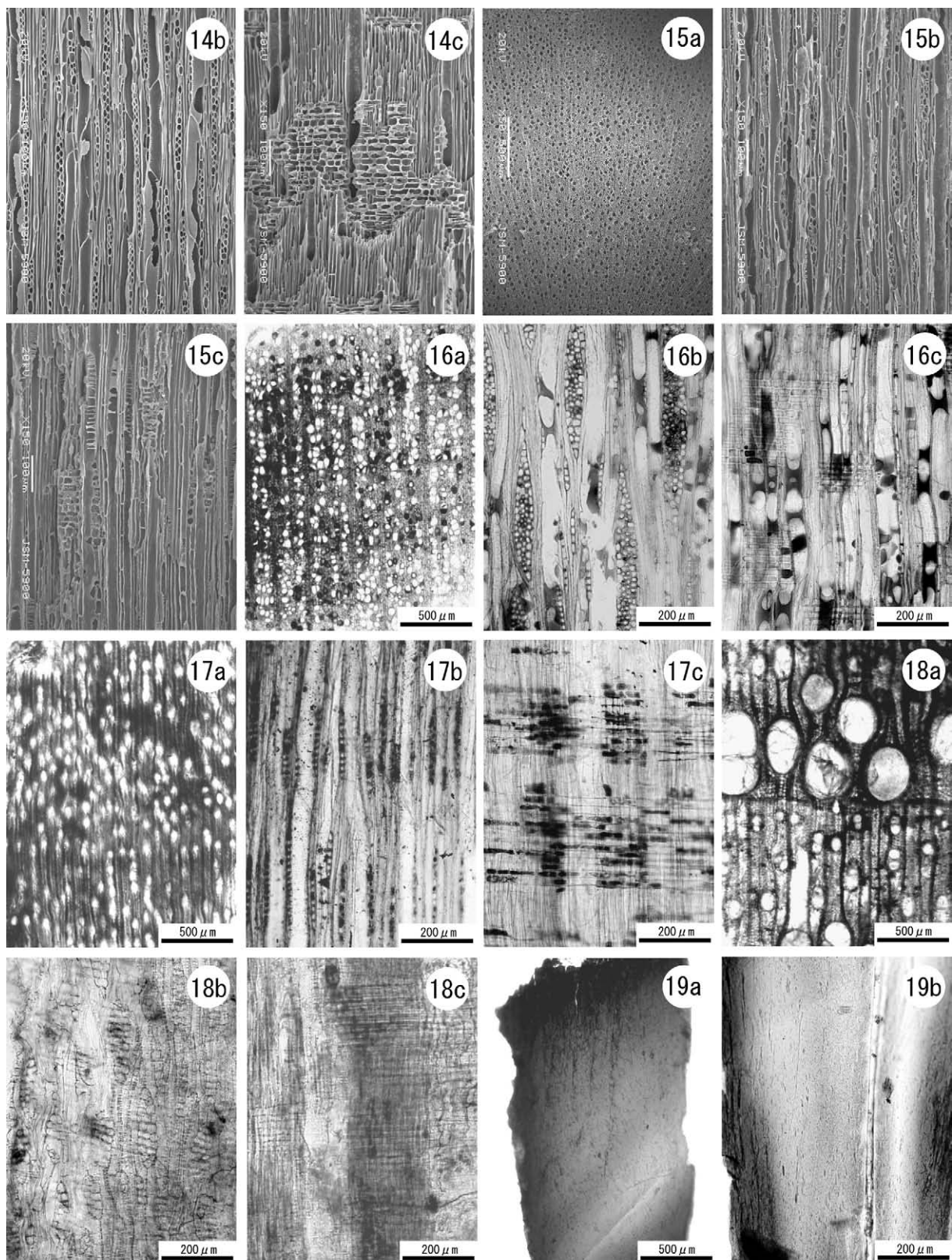


写真 11 出土材の顕微鏡写真 (3)

14b-14c.クスノキ科 (No.49)、15a-15c.ヒサカキ (No.51)、16a-16c.サクラ属 (No.2)、17a-17c.トチノキ (No.17)、
18a-18c.トネリコ属シオジ節 (No.3)、19a-19b. 不明 (No.1)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

(5) 品野盆地周辺の後期旧石器時代から縄文時代草創期の石器群

川添和暁

品野盆地周辺

品野盆地周辺（第141図）では、各遺跡から後期旧石器時代から縄文時代草創期にかけての石器群が、近年、調査・採集されている（第142・143図）。愛知県内において当該時期の石器資料が最もまとまっている地域の一つとして、注目される。

上品野遺跡

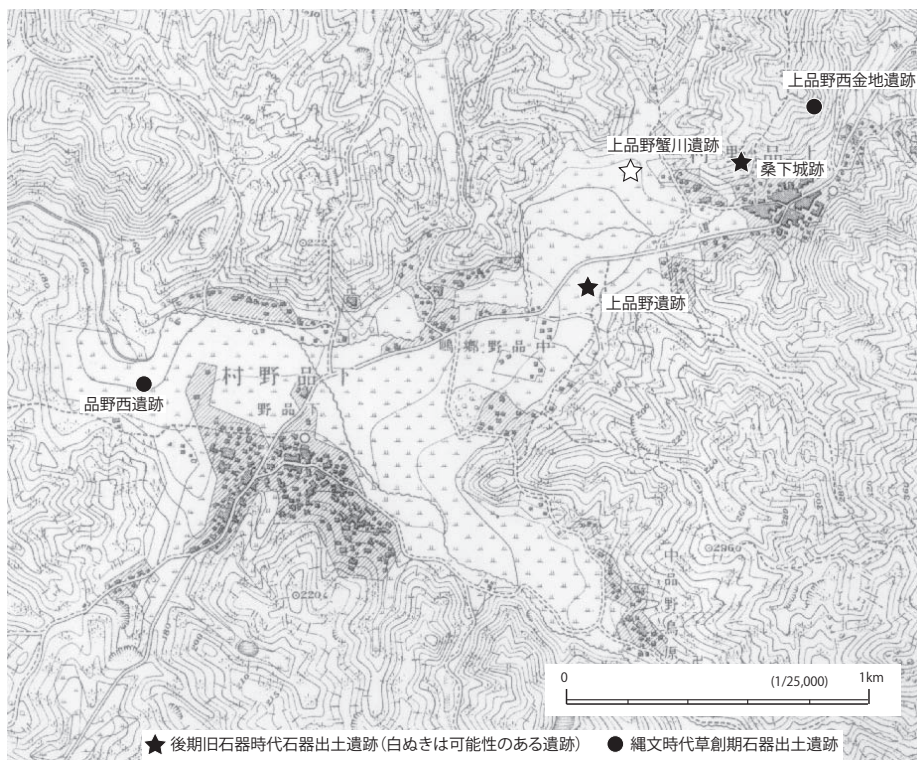
最も古相を示す遺跡は、上品野遺跡出土の石器群である。この中でも、1の台形様石器や3の局部磨製石斧に代表されるように、『愛知県史』でのI期に相当する（齊藤ほか2001）。ここでは図示していないが、剥片・石核類も多数出土しており、原石から剥片を作出する様子を示す接合資料も存在する。使用石材はチャートが主体であり、その他、下呂石・サヌカイト・黒曜石・流紋岩の出土がある。また、上品野遺跡では、5の小型のナイフ形石器、6の石刃の可能性のある縦長剥片など、III期に属する石器群も若干含まれている。上品野遺跡は丘陵末端部に位置する（川添編2005）。

桑下城跡

7・8は桑下城跡から出土した細石核で、7がチャート製・8が下呂石製である。これらは戦国期に曲輪に改変された地点内から出土しており、その他同時期の石器群の所在は不明である。当地は丘陵中腹の平場であり、活動の場の選地を示す事例としても注目できるよう（小澤編2013）。

上品野蟹川遺跡

この他、上品野蟹川遺跡02Ba区からも、後期旧石器時代に属する可能性のある石器群が出土している。当調査区は、河道に向かう丘陵末端に位置しており、これらの石器群は基盤層付近で出土したようである（武部編2008）。



第141図 関連遺跡位置図（明治24年陸地測量部作成二万分の一地形図「瀬戸」より）

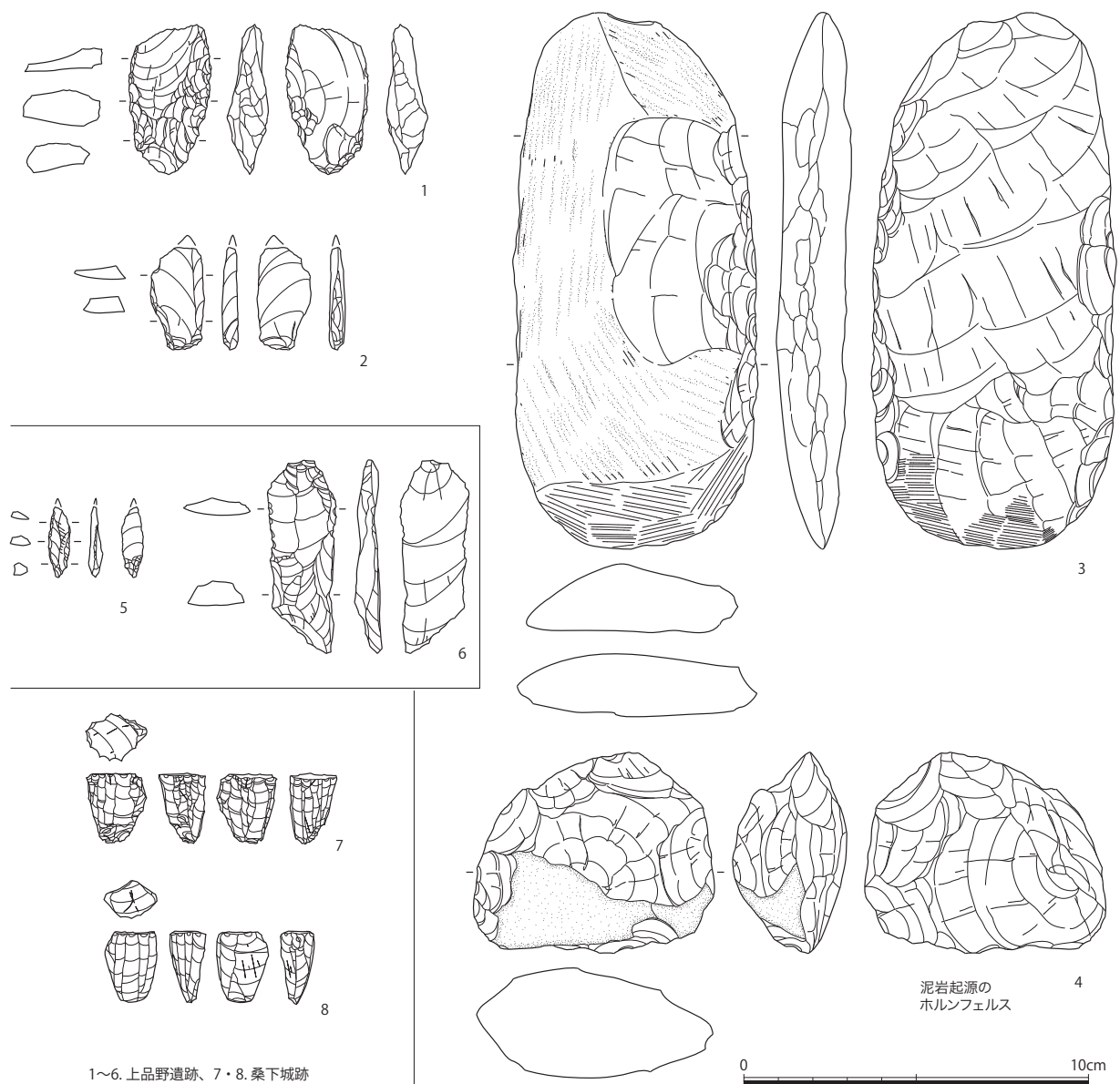
一方、縄文時代草創期の石器群がまとまって出土した事例として、品野西遺跡の資料群（10～15）がある。凹地を中心として有舌尖頭器のほか、木葉形尖頭器・ノッチ・搔器・局部磨製石斧、その他剥片がまとまって出土した。この資料群でもチャートの使用が主体であるが、流紋岩の使用が引き続き認められる（岡本編 1997）。

品野西遺跡

一方、上品野西金地遺跡出土資料（9）は丘陵斜面地からの単独出土資料であり、品野西遺跡資料群とは異なる出土状況である。先学による言及のあるように（白石 1989・2001）、有舌尖頭器の出土状況としては西金地遺跡での出土状況の方が圧倒的多数を占めている。品野盆地周辺では、今後もこのような状態で出土する資料が見つかる可能性が高い。

上品野西金地遺跡

品野盆地周辺は、このように後期旧石器時代から縄文時代草創期の石器群が散在的に出土しており、各時期の石器群の様相が明らかになりつつある。器種や石材の使用状況、そ



1～6. 上品野遺跡、7・8. 桑下城跡

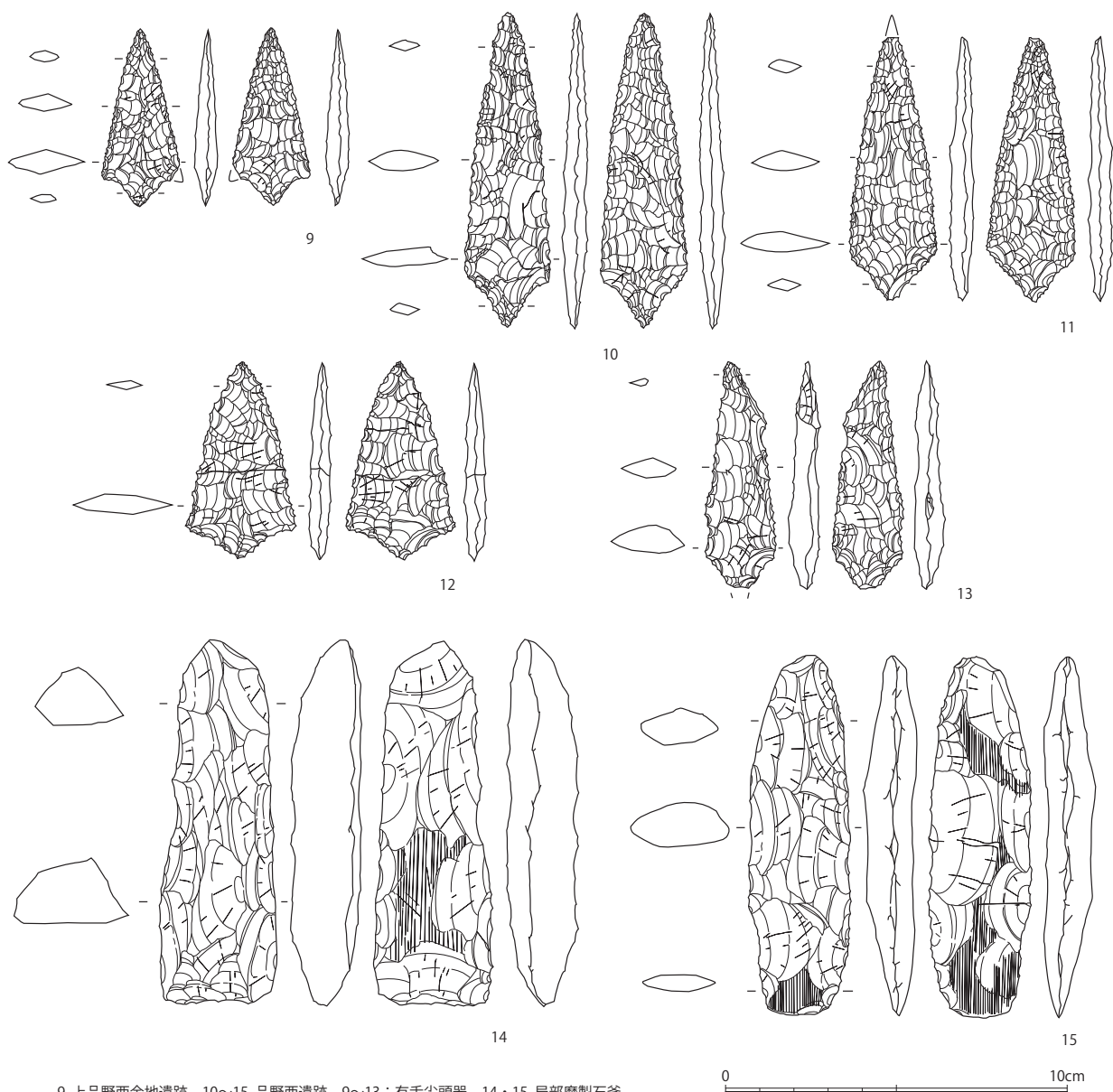
1・2：台形様石器、3：局部磨製石斧、4：礫器、5：ナイフ形石器、6：縦長剥片、7・8：細石核【1・5～7. チャート、2・8. 下呂石、3・4. ホルンフェルス】

第142図 品野盆地周辺の後期旧石器時代石器（1:2）

の出土状況およびその差異などを総合することによって、活動の様相に言及する研究が待たれるところである。

文献

岡本直久編,1997『品野西遺跡』瀬戸市埋蔵文化財センター
 小澤一弘編,2013『桑下城跡』愛知県埋蔵文化財センター
 川添和暁編,2005『上品野遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
 齊藤基生ほか,2001『愛知県史 資料編1 旧石器・縄文』愛知県
 白石浩之,1989『旧石器時代の石槍』東京大学出版会
 白石浩之,2001『石槍の研究―旧石器時代から縄文時代初頭にかけて―』東京 アム・プロモーション
 武部真木編,2008『上品野蟹川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター



9. 上品野西金地遺跡、10～15. 品野西遺跡、9～13：有舌尖頭器、14・15. 局部磨製石斧
 【9・10・12・13. チャート、11. 流紋岩、14・15. 安山岩】

第143図 品野盆地周辺の縄文時代草創期石器 (1:2)

（6）縄文時代の貯蔵穴

上品野西金地遺跡の水野川に面した丘陵縁辺の緩傾斜面において、ドングリ類の貯蔵穴201P・205P・206Pが検出された。貯蔵穴は種実の年代測定の結果、縄文時代後期中葉に帰属することが判明している。東海地域において検出されている貯蔵穴はいずれも低湿地型（水ノ江2007）で、中期後半には検出例が確実に認められ、後・晩期に著しく増加する（川添他2005、鷺坂他2011）。また、検出例は多くないが、上品野遺跡を例として、弥生時代中期後葉までの例が確認される。

上品野西金地遺跡の貯蔵穴において検出された種実は、ツクバネガシを主体とするアカガシ亜属のみである。水野川対岸の上品野遺跡において検出された4基の貯蔵穴は、96SK90のみコナラ亜属が優勢で、他の3基の土坑はアカガシ亜属が圧倒的に優勢である（第17表）。他の東海地域における縄文時代後期の事例については、清須市朝日遺跡（渡辺1989）や岩倉市西北出遺跡（渡辺1972）等、平野部の遺跡がコナラ亜属が優勢で、上品野西金地遺跡や上品野遺跡等、内陸から山間地の遺跡はアカガシ亜属が優勢となる傾向がある。また、縄文時代後期におけるクルミ、クリの利用はごく低調なようで、クルミ、クリの検出例が多い中期後半や晩期とは対照的である。ただし、上品野西金地遺跡においてクリの果実は未検出ながら、205Pにおいてクリ材が出土している。時期による堅果類と木材の利用形態の差異など、今後の検討課題としておきたい。

上品野西金地遺跡においては、中期前半の土器、縄文時代の石鏃と剥片がわずかに出土したのみで、縄文時代後期中葉の遺構・遺物は未検出である。上品野地区の他の遺跡を含めても、貯蔵穴以外の縄文時代の遺構は未検出で、縄文時代後期中葉の土器についても上品野蟹川遺跡でごくわずかな出土が確認される程度である。貯蔵穴群と集落域の関係については不明な点が多く、その解明については今後の調査に期待するところが大きい。

低湿地型
縄文時代中期後半
縄文時代後・晩期
弥生時代中期後葉

上品野遺跡

朝日遺跡
西北出遺跡

クルミ、クリ

縄文土器・石器

文献

川添和暁他2005『上品野遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第132集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
水ノ江和同2007「低湿地型貯蔵穴」『縄文時代の考古学5 なりわいー食料生産の技術ー』同成社
鷺坂有吾他2011『寺部遺跡』豊田市埋蔵文化財調査報告書第45集 豊田市教育委員会
渡辺誠1972「縄文時代における植物質食料採集活動の研究」『古代文化』第24巻第5・6号 財団法人古代学協会
渡辺誠1989「朝日遺跡縄文時代貯蔵穴出土の植物遺体」『年報 昭和63年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

第17表 上品野西金地遺跡と上品野遺跡の貯蔵穴の種実

遺跡・遺構 分類群		上品野西金地遺跡				上品野遺跡							
		205P		201P		96SK84		96SK85		96SK90		96SK91	
コナラ属	コナラ亜属					57		9	(10)	445		18	(10)
	アカガシ亜属	35	(18)	4		894	(5)	55	(36)	184		109	(43)
コナラ属計		35	(18)	4		1242	(353)	64	(200)	784	(110)	127	(107)

() は破片数

(7) 古代・中世の遺構・遺物

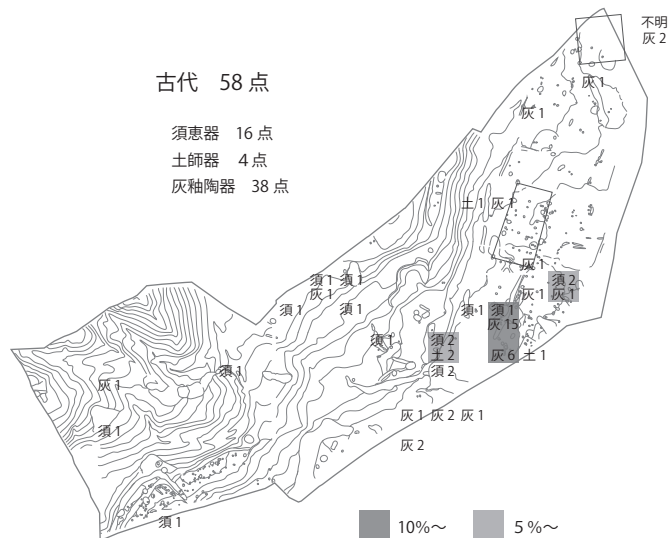
古代の遺構

古代の遺構として、水野川に面した低地部分において、掘立柱建物（を構成する柱穴）を検出した。遺構・遺物はごく少ないが、須恵器・土師器は丘陵部分から低地部分にかけて分散して分布する傾向が認められるのに対して、灰釉陶器は低地部分、特に調査区南東端付近に集中して出土する（丘陵部分はほとんど分布しない）傾向がある（第144図）。このような出土

遺物出土分布

古代 58 点

須恵器 16 点
土師器 4 点
灰釉陶器 38 点



第144図 古代の遺物出土分布

古代から中世へ

分布の傾向からも、低地部の利用と安定した集落の形成は平安時代以降と考えられる。また、平安時代における遺跡の展開は中世への連続性を示すものであろう。

中世の遺構

中世の遺構として、水野川に面した低地部分において集落に関連する遺構を検出した。出土遺物から、中世集落は尾張型第7型式（東濃型明和窯式）、古瀬戸前Ⅲ・Ⅳ期の13世紀後半を中心として機能したと考えられる。中心の建物は、桁行3間（8.2m）・梁行3間（7.4m）のやや大型の総柱建物329SBで、上品野遺跡において検出された総柱建物がよく類似する。なお、上品野遺跡97BSB11と98ASB13は古代、10世紀後半の建物とされるが、構造の類似から中世に帰属する可能性をも考慮して比較の対象とした。上品野遺跡の建物は97BSB11のみ桁桁4間・梁行4間でやや規模が大きいが、他はいずれも桁桁3間・梁行3間で、西金地遺跡329SBと同様の規模である。これらの建物の柱穴の径は総じて小さい。上品野遺跡の中世集落は尾張型第6型式から第7型式にかけて機能したとされることから、13世紀には水野川を対峙して展開する上品野西金地遺跡と上品野遺跡が密接に関連しながら推移していたと考えられる。

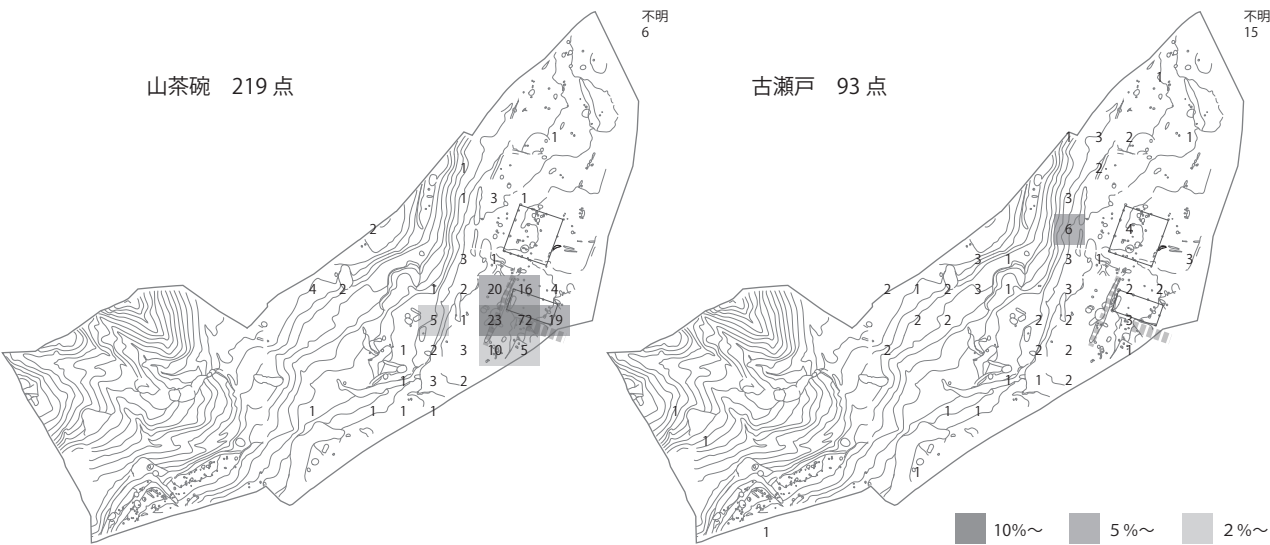
遺物出土分布

中世の遺物は多くが検出遺構から出土したこともあって出土量は少ないが、低地部分を中心に分布し、丘陵や斜面からはほとんど分布しない（第145図）。この傾向は後述する大窯期前半の陶器の出土分布とは明らかに異なる。このことから、中世と大窯期前半で遺跡における土地の利用形態が大きく変化していることが読み取れる。

遺物組成

出土遺物の組成については、山茶碗の出土量が突出して多い落合橋南遺跡Ⅱを除いた盆地内の一般的な傾向を示す。つまり、山茶碗が7割前後、古瀬戸が3割前後で、常滑陶器や土師器、中国陶磁の比率はいずれも1%前後とごく少ない（第18表）。山茶碗は尾張型が多く、すでに指摘されているように、12世紀から14世紀は尾張型が多く（上品野西金地遺跡・上品野遺跡・落合橋南遺跡）、14世紀以降は東濃型が増加する（上品野蟹川遺跡）という当地域の傾向にも合致する。

尾張型と東濃型



第145図 中世の遺物出土分布

第18表 品野盆地における中世集落の遺物組成

		上品野西金地遺跡		上品野遺跡		上品野蟹川遺跡Ⅰ		上品野蟹川遺跡Ⅱ		落合橋南遺跡Ⅰ		落合橋南遺跡Ⅱ	
山茶碗	尾張型碗	148	46.4%	1617	58.4%	3095	33.4%	413	24.8%	2675	41.1%	20604	97.4%
	尾張型皿	3	0.9%					69	4.1%	203	3.1%		
	東濃型碗	61	19.1%	799	28.9%	3426	36.9%	353	21.2%	1577	24.2%		
	東濃型皿	3	0.9%					63	3.8%	271	4.2%		
	陶丸	2	0.6%					0	0.0%	14	0.2%		
	片口鉢	2	0.6%					4	0.2%	35	0.5%		
古瀬戸陶器		93	29.2%	294	10.6%	2636	28.4%	734	44.1%	1639	25.2%	270	1.3%
常滑陶器		4	1.3%	0	0.0%	23	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	45	0.2%
土師器鍋		3	0.9%	58	2.1%	69	0.7%	28	1.7%	96	1.5%	148	0.7%
輸入陶磁		0	0.0%	0	0.0%	12	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	37	0.2%
計		319		2768		9277		1664		6510		21162	

以上のように、上品野西金地遺跡は遺構・遺物の両面から品野盆地における中世集落の典型例であることを示した。また、低地に立地した集落は比較的短期間で廃絶し、大窯期前半に周辺が大規模に開発される状況とは明確な断絶がある。

中世集落

文献

瀬戸市教育委員会1990『上品野遺跡』
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1997『落合橋南遺跡Ⅰ』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第14集
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1998『上品野蟹川遺跡』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第16集
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1998『落合橋南遺跡Ⅱ』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第17集
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1999『上品野蟹川遺跡Ⅱ』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第21集
財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター2005『上品野遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第132集
財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター2008『上品野蟹川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第142集

(8) 桑下東窯跡・上品野西金地遺跡の土坑墓

はじめに

土坑墓の検出 桑下東窯跡から上品野西金地遺跡に連続する丘陵付近には土坑墓と推定される土坑が散在する。人骨等が遺存した例は希少で、土坑墓として認定するには不確実なものも多いが、桑下東窯跡においてすでに報告された事例（桑下東窯跡A・C・D・E区）、本報告において改めて報告した事例（同B区）を含めて基礎的な整理を果たしておきたい（第19表）。

土坑墓の分布

分布域の設定 桑下東窯跡から上品野西金地遺跡にかけて分布する土坑墓について、地形を単位とした分布域を設定する（第146図）。墓群Aは桑下東窯跡の窯体SY01背後に展開する工房群周辺（桑下東窯跡D・E区）の丘陵縁辺に分布する土坑墓群である。墓群Bは桑下東窯跡と上品野西金地遺跡を隔てる谷地形内（桑下東窯跡C区）に分布する土坑墓群である。墓群Cは上品野西金地遺跡の西半部の丘陵（桑下東窯跡B区を含む）周辺に分布する土坑墓群である。墓群Dは上品野西金地遺跡の丘陵東斜面周辺に分布する土坑墓群である。墓群C、墓群Dはさらに丘陵の上位、中位、下位の分布域に細分することも可能である。これら土坑墓群は丘陵斜面に小規模な平坦面を造成し、丘陵側に区画溝を配して設定される場合が多い。

土坑墓群の形態と構成

土坑墓の分類 土坑墓は集石を伴う土坑墓、花崗岩の巨礫が据えられた土坑墓、素掘りの土坑墓に大別される。平面形は隅円方形と円形がある。集石を伴う土坑墓は、桑下東窯跡C区SK44において銭貨等が伴うこと、上品野西金地遺跡003SK付近において出土した焼成後底部穿孔を施した耳付水注（73）の容器内に火葬骨が残されていたことを根拠として土坑墓の可能性が高いと判断した。花崗岩の巨礫を伴う土坑は桑下東窯跡A区、墓群Dの下位を中心に分布するが、遺物をほとんど伴わないことから、土坑墓として積極的に認定することは難しい。後者には耳付水注（74）が出土した平坦面514SXが近接することも勘案して、土坑墓と推定した。素掘りの土坑墓は、六文銭が出土した桑下東窯跡A区SK34（渡来銭）、桑下東窯跡B区SK12（寛永通寶）の事例を参考として認定した。加えて、完形の遺物を伴う桑下東窯跡B区SK08、同SK30、上品野西金地遺跡513SXを素掘りの土坑墓とした。

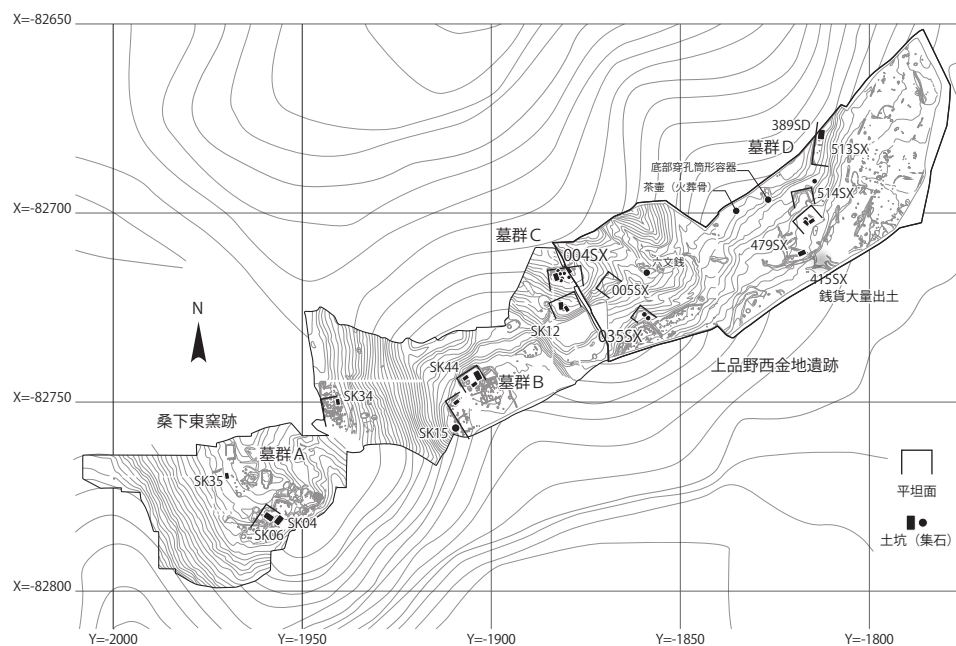
品野西遺跡の「中世墓」

品野盆地西端の品野西遺跡においては、15世紀から16世紀前半、古瀬戸後期から大窯第1段階を主体とする「中世墓」群が調査、報告されている。その成果は桑下東窯跡・上品野西金地遺跡の土坑墓の理解に不可欠である。

土坑墓・火葬施設 品野西遺跡の「中世墓」群は土坑墓（火葬・土葬）、火葬施設、火葬施設墓で構成される。火葬施設墓 なお、火葬施設墓は火葬施設を埋葬施設としても利用する葬法とされている。一方、桑下東窯跡・上品野西金地遺跡においては、炭化材が残された土坑墓として上品野西金地遺跡513SXがあるものの、検出された土坑はいずれも被熱した痕跡が認められず、火葬施設、あるいは火葬施設墓の存在は全く確認されない。土葬が主体であった可能性もあるが、平坦面004SX出土の耳付水注（73）内、南斜面480NRの遺物集積中に混在して出土した茶壺（796）内には火葬骨が確認されているので、葬法を確定することは難しい。一方、

第19表 桑下東窯跡・上品野西金地遺跡の土坑墓

墓群	遺跡・調査区	遺構	法量 (m)			平面形	集石等	出土遺物
			長軸	短軸	深さ			
墓群 A	桑下東窯跡 E 区	SK35	0.9	0.7	0.6	隅円方形	花崗岩巨礫	志野小碗（大窯 4 後半）・播鉢
	桑下東窯跡 E 区	SK04	2.3	1.7	0.75	隅円方形	花崗岩巨礫	
	桑下東窯跡 E 区	SK06	1.7	1.3	0.5	隅円方形	花崗岩巨礫	
	桑下東窯跡 A 区	SK34	1.2	0.92	0.75	隅円方形		六文銭（開元通寶 1・皇宋通寶 1・不明 4）・鉄滓
墓群 B	桑下東窯跡 C 区	SK15	1.6	1.5	0.35	円形	集石	
	桑下東窯跡 C 区	SK21	0.75	0.7	0.1	隅円方形	礫	
	桑下東窯跡 C 区	SK28	1.0	0.8	0.25	隅円方形		
	桑下東窯跡 C 区	SK44	1.0	0.7	0.2	隅円方形	集石	熙寧元寶 1・聖宋元寶 1・無文銭 1・端反皿（大窯 1）
	桑下東窯跡 C 区	SK48	-	-	-	隅円方形		窯道具
墓群 C	桑下東窯跡 B 区	SK06	0.5	0.35	0.3	円形	集石	
	桑下東窯跡 B 区	SK07	1.5	0.8	0.55	隅円方形	集石	鉄釉桶・播鉢（大窯 1・SK09 と同一）
	桑下東窯跡 B 区	SK08	0.6	0.6	0.2	円形	集石	鉄釉筒形容器 2（後Ⅳ期～大窯 1）
	桑下東窯跡 B 区	SK09	0.8	0.7	0.5	円形	集石	播鉢（大窯 1・SK07 と同一）
	桑下東窯跡 B 区	SK10	-	-	0.35	不明	集石	
	桑下東窯跡 B 区	SK11	1.2	1.2	0.2	円形	集石	
	桑下東窯跡 B 区	SK30	0.5	0.4	0.3	円形	集石	播鉢（大窯 1）
	上品野西金地遺跡	003SK	1.1	-	0.4	隅円方形	集石	平坦面 004SX に鉄釉耳付水注（後Ⅳ期～大窯 1）
	桑下東窯跡 B 区	SK12	1.3	1.0	0.7	隅円方形	集石	六文銭（寛永通寶）・煙管・人骨
	桑下東窯跡 B 区	SK32	0.8	0.7	0.4	隅円方形		
	桑下東窯跡 B 区	SK33	0.7	-	0.6	円形		
	上品野西金地遺跡	042SK	1.2	0.9	0.7	楕円形	花崗岩巨礫	平坦面 035SX に遺物集積（後Ⅳ期～大窯 1）
	上品野西金地遺跡	145SK	1.1	1.0	0.2	円形		平坦面 035SX に遺物集積（後Ⅳ期～大窯 1）
墓群 D	上品野西金地遺跡	491SK	0.9	0.8	0.2	円形	花崗岩巨礫	
	上品野西金地遺跡	492SK	1.3	0.9	0.3	隅円方形	花崗岩巨礫	
	上品野西金地遺跡	493SK	1.3	0.7	0.2	隅円方形	花崗岩巨礫	
	上品野西金地遺跡	479SK	1.6	1.1	0.3	隅円方形	花崗岩巨礫	
	上品野西金地遺跡	405P	0.9	0.7	0.7	円形		
	上品野西金地遺跡	513SX	1.8	1.4	0.5	隅円方形	炭化材	播鉢 1・腰折皿 1・端反皿 1・山茶碗 1（後Ⅳ期～大窯 1）



第146図 土坑墓の分布 (1:2,000)

品野西遺跡の「中世墓」群においては、土坑内に礫が敷かれる事例は認められるが、桑下東窯跡・上品野西金地遺跡の集石、花崗岩の巨礫を伴う「土坑墓」は確認されていない。

土坑墓の時期と変遷

遺物の伴出 土坑墓は遺物を伴うことが少なく、時期の推定は困難な事例が多いが、桑下東窯跡B区SK08は筒形容器2個体(1292・1293)が合口の状態で、同SK30は播鉢(1295)が逆位で、上品野西金地遺跡513SXは播鉢(76)が正位で、その周囲に腰折皿(77)、端反皿(78)、山茶碗(79)が出土した。また、墓群C上位の平坦面004SXと墓群Dの平坦面514SXにおいては耳付水注(73・74)、上品野西金地遺跡042SK・145SKが配される墓群C下位の平坦面035SXには遺物集積(46～70)が伴う。なお、古瀬戸後期の四耳壺や瓶子等、「中世墓」に蔵骨器として頻繁に利用される古瀬戸の器種は出土していない。

時期 これらの土坑墓または平坦面には、桑下東窯跡と上品野西金地遺跡の出土遺物の主体を占める大窯第1段階の遺物を伴いつつも、桑下東窯跡B区SK08の筒形容器(1292・1293)、上品野西金地遺跡513SXの播鉢(76)と腰折皿(77)、同035SXの縁釉小皿(46

変遷 ～49)と有耳壺(56)等、古瀬戸後Ⅳ期新の遺物を伴う場合が少なくない。上品野西金地遺跡514SXの耳付水注(74)、480NRの遺物集積の茶壺(796)についても、古瀬戸後Ⅳ期に相当する可能性がある。桑下東窯跡A区SK34は多数のロクロピットを伴う工房群の下層において検出されていることから、遺跡周辺は古瀬戸後Ⅳ期から大窯第1段階にかけて、土坑墓群から桑下東窯跡の操業に関連する遺構群に変遷したと推測される。この推測に従うなら、土坑墓群に桑下東窯跡の操業に従事した工人が埋葬されたと単純に解釈することは困難となる。

大窯期後半以降 近世 その他、花崗岩の巨礫を伴う桑下東窯跡E区SK34は大窯第4段階後半の志野小碗、墓群C中位の桑下東窯跡B区SK12は寛永通寶の六文銭(M-9～M-11)が出土していることから、大窯の操業後も遺跡周辺の丘陵斜面には断続的に土坑墓が配されたことが明らかとなっている。これらは近世の上品野村絵図の山中に記された「をはか」に相当する可能性も考慮される。

小結

桑下城跡 桑下東窯跡から上品野西金地遺跡に連続する丘陵に分布する土坑墓については、同じ丘陵に連続する桑下城跡、あるいは付近の菩提寺との関連を含めた考察も必要である。いずれにせよ、これらの土坑墓は品野西遺跡の「中世墓」群を含めて、中世から近世にかかる墓地の構成、葬法の転換を検討する重要な資料として評価される。

文献

- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1997『品野西遺跡』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第13集
 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1998『市内遺跡調査報告Ⅰ』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第20集
 岡本直久2001「中世後期の火葬墓～品野西中世墓の位置付け～」『研究紀要』第9輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
 公益財団法人愛知県教育スポーツ・振興財団愛知県埋蔵文化財センター2011『桑下東窯跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第164集

（9）上品野西金地遺跡と大窯期前半の遺物

組成

桑下東窯跡と小金山窯跡との比較 上品野西金地遺跡においては、窯体、明らかな灰原などは確認されず、大量に出土した大窯期前半の遺物群は、同時期に操業した桑下東窯跡との関係が推測される。そこで、遺跡の性格を理解する一助として、大窯期前半の遺物の組成を比較検討する。

桑下東窯跡

上品野西金地遺跡の遺物には、調理具や蔵骨器としての使用が明らかなものも含まれること、遺跡の丘陵斜面は大窯期後半以降も継続して利用されている形跡があること等、窯跡出土遺物と直接比較することには問題もあるが、斜面の堆積層中から混在して出土した大量の遺物を出土状況や使用状況に応じて客観的に分離することは難しく、ここでは遺構出土遺物を含めた遺跡出土遺物総体を比較した。

桑下東窯跡との比較に際しては、(接合前) 出土破片数を利用した(第20表・第147図)。対象としたのは桑下東窯跡から出土した24,725点の遺物で、上品野西金地から出土した22,762点の遺物と出土点数も近く、検討には好都合である。同時に、大窯第1段階の標識窯である小金山窯跡とも組成を比較した(第21表・第147図)。小金山窯跡との組成の比較に際しては、出土個体数を利用した。対象とした出土個体数は上品野西金地遺跡が1,009個体、小金山窯跡が242個体である。

小金山窯跡

器種組成 上品野西金地遺跡は尾張型第12型式の山茶碗を含めた碗類が約1割(10.3%)、灯明皿を含めた皿類が約2割(19.4%)を占める。桑下東窯跡の碗類は約1割(9.4%)で、上品野西金地遺跡と近い比率を示す一方で、皿類は約4割を占める(43.8%)。小金山窯跡との比較においても、上品野西金地遺跡の碗類は約2割(19.0%)で、小金山窯跡(22.7%)と大きくは変わらないが、皿類については、上品野西金地遺跡の約5割(49.7%)に対して、小金山窯跡は約7割(67.8%)を占め、やはり2割程度の差がある。

碗皿類

また、碗皿類以外の器種は上品野西金地遺跡の破片数が約7割(70.3%)、個体数が約3割(31.3%)を占める。これは、桑下東窯跡の破片数が約5割(47.0%)、小金山窯跡の個体数が約1割(9.5%)を示す碗皿類以外の器種の比率とは大きく異なる。

碗皿類以外の器種

碗皿類以外の各器種については、上品野西金地遺跡の鉢・盤類、鍋・釜類、壺・甕類のいずれの比率も、桑下東窯跡と小金山窯跡を凌駕する。挿鉢を主要な品目とする鉢・盤類は、上品野西金地遺跡が全体の約4割(41.9%)に対して桑下東窯跡が約3割(33.3%)という差であるが、鍋・釜類は上品野西金地遺跡の13.4%に対して桑下東窯跡は6.6%、壺・甕類は14.1%に対して7.0%で、両者の比率には約2倍の開きがある。小金山窯跡との比較においても、鉢・盤類は上品野西金地遺跡の18.3%に対して小金山窯跡は5.8%、壺・甕類は6.2%に対して2.9%で、やはり2倍から3倍の開きが認められる。鍋・釜類については、上品野西金地遺跡の50個体(5.0%)の出土に対して、小金山窯跡では1個体(0.4%)の出土である。

鉢・盤類

鍋・釜類

壺・甕類

以上、上品野西金地遺跡はほぼ同時期に操業した桑下東窯跡や小金山窯跡と比較して、皿類の比率が相対的に低い一方、鉢・盤類、鍋・釜類、壺・甕類といった碗皿類以外の大

小結

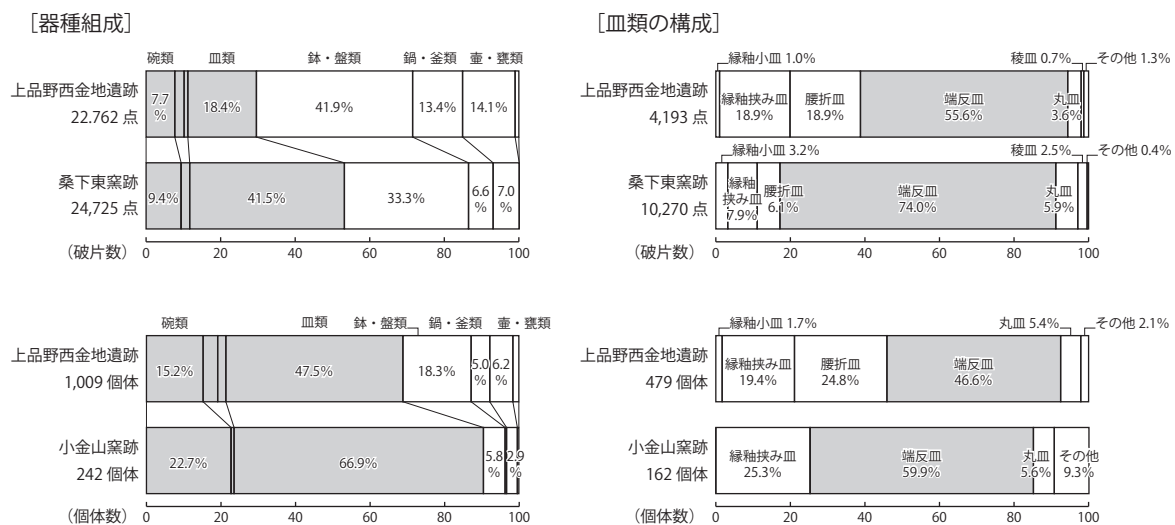
上品野西金地遺跡

第20表 上品野西金地遺跡と桑下東窯跡の組成の比較（接合前破片数）

器種／遺構			上品野西金地遺跡				桑下東窯跡							
碗類	天目茶碗	天目茶碗	1539	6.8%	1547	6.8%	1764	7.7%	1903	7.7%	2270	9.4%		
		小天目	7	0.0%					16	0.1%				
	丸碗	丸碗	190	0.8%	200	0.9%			336	1.4%				
		丸碗（蓮弁文）	10	0.0%										
	その他	平碗	9	0.0%	17	0.1%			15	0.1%				
		筒形碗	1	0.0%										
その他		7	0.0%											
山茶碗			576	2.5%	576	2.5%	576	2.5%	0	0.0%	0	0.0%		
灯明皿			230	1.0%	230	1.0%	230	1.0%	565	2.3%	565	2.3%		
皿類	緑釉小皿	灰釉緑釉小皿	13	0.1%	44	0.2%	4193	18.4%	329	1.3%	10270	41.5%		
		鉄釉緑釉小皿	31	0.1%					812	3.3%				
	緑釉挟み皿	794	3.5%	794	3.5%	627			2.5%					
	腰折皿	793	3.5%	793	3.5%	7598			30.7%					
	端反皿	端反皿	2331	10.2%	2331	10.2%			604	2.4%				
	丸皿	灰釉丸皿	36	0.2%	149	0.7%			256	1.0%				
		灰釉丸皿（ソギ）	9	0.0%										
		鉄釉丸皿	104	0.5%										
	稜皿	稜皿	24	0.1%	29	0.1%			44	0.2%				
		稜皿（露胎）	5	0.0%										
	その他	鉄釉端反皿	31	0.1%	53	0.2%								
その他		13	0.1%											
鉄釉稜花皿		7	0.0%											
灰釉稜花皿（反り皿）		2	0.0%											
鉢・盤類	搦鉢	搦鉢	8898	39.1%	8898	39.1%	9538	41.9%	8115	32.8%	8226	33.3%		
	鉢・片口	鉢A・B	329	1.4%	640	2.8%			75	0.3%				
		鉢C	169	0.7%					29	0.1%				
		浅鉢	104	0.5%					7	0.0%				
		中・小型鉢	16	0.1%					0	0.0%				
		片口	22	0.1%										
鍋・釜類	内耳鍋		1151	5.1%	3042	13.4%	3042	13.4%	343	1.4%	1635	6.6%		
	釜		1766	7.8%					1269	5.1%				
	茶釜		111	0.5%					23	0.1%				
	釜・土瓶の蓋		13	0.1%					0	0.0%				
	風炉		1	0.0%					8	0.0%				
灯明具	燭台		123	0.5%	136	0.6%	136	0.6%	0	0.0%				
	灯籠		13	0.1%					0	0.0%				
壺・甕類	甕		1498	6.6%	1498	6.6%	3203	14.1%	173	0.7%	1743	7.0%		
		茶壺		641	2.8%	641			2.8%	106			0.4%	
	筒形容器・德利	有耳壺・筒形容器		217	1.0%	931			4.1%	264			1.1%	
		德利（瓶）		715	3.1%					531			2.1%	
	その他壺類	双耳壺		17	0.1%	31			0.1%	574			2.3%	
		口広有耳壺		10	0.0%									
	小壺など	四耳壺		4	0.0%	40			0.2%	11			0.0%	
		小壺・耳付水注		40	0.2%					75			0.3%	
	茶入			18	0.1%	18			0.1%	9			0.0%	
		その他	桶		33	0.1%			44	0.2%			0	0.0%
			焼締筒形容器		11	0.0%							0	0.0%
		その他	宗教具	花瓶		10			0.0%	75			0.3%	80
仏餉具				17	0.1%	0	0.0%							
香炉				46	0.2%	6	0.0%							
狛犬				2	0.0%									
その他	水滴			3	0.0%	5	0.0%	2	0.0%					
	瓦			2	0.0%									
計			22762						24725					
土師器	土師器皿		120	17.8%	676				0	104				
	土師器鍋		556	82.2%					104					

第21表 上品野西金地遺跡と小金山窯跡の組成の比較（個体数）

器種／遺構				上品野西金地遺跡				小金山窯跡															
碗類	天目茶碗	輪高台	118	11.7%	125	12.4%	153	15.2%	44	18.2%	44	18.2%	55	22.7%									
		内反り高台	7	0.7%																			
	小天目・小杯		3	0.3%	3	0.3%			3	1.2%	3	1.2%											
	丸碗		21	2.1%	21	2.1%			7	2.9%	7	2.9%											
	平碗		1	0.1%	1	0.1%			1	0.4%	1	0.4%											
	その他		3	0.3%	3	0.3%			0	0.0%	0	0.0%											
山茶碗			39	3.9%	39	3.9%	39	3.9%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%									
灯明皿			22	2.2%	22	2.2%	22	2.2%	2	0.8%	2	0.8%	2	0.8%									
皿類	緑釉小皿	灰釉	2	0.2%	8	0.8%	479	47.5%	41	16.9%	0	0.0%	162	66.9%									
		鉄釉	6	0.6%																			
	緑釉挟み皿		93	9.2%	93	9.2%			0	0.0%	41	16.9%											
	腰折皿	灰釉	118	11.7%	119	11.8%			0	0.0%	0	0.0%											
		鉄釉	1	0.1%																			
	端反皿	中		199	19.7%	223			22.1%		84	34.7%			97	40.1%							
		中	輪花皿	1	0.1%																		
			露胎	1	0.1%																		
		小		22	2.2%						13	5.4%											
	丸皿	灰釉	付高台		3	0.3%					26	2.6%			0	0.0%							
			削り込み高台		2	0.2%									5	2.1%							
		鉄釉	小	8	0.8%	2			0.8%														
				付高台	中	9			0.9%	1					0.4%								
			大		2	0.2%			0	0.0%													
			削り込み高台		2	0.2%			1	0.4%													
			稜皿		3	0.3%			3	0.3%					0	0.0%	0	0.0%					
			鉄釉端反皿		2	0.2%			2	0.2%					0	0.0%	0	0.0%					
	その他		5	0.5%	5	0.5%			15	6.2%	15	6.2%											
	鉢・盤類	播鉢	I A類	120	11.9%	158			15.7%		185	18.3%			14	5.8%	14	5.8%	14	5.8%			
			I B類	21	2.1%																		
			II類	17	1.7%																		
		鉢	A	10	1.0%	27			2.7%						0	0.0%	0	0.0%					
			B	5	0.5%																		
			C	4	0.4%																		
		浅鉢		5	0.5%																		
		中・小型鉢		2	0.2%																		
	片口		1	0.1%																			
	鍋・釜類	内耳鍋		14	1.4%	50			5.0%	50	5.0%	0			0.0%	0	0.0%	1	0.4%				
釜		29	2.9%	0	0.0%		0	0.0%															
茶釜		3	0.3%	1	0.4%		1	0.4%															
釜・土瓶の蓋		4	0.4%	0	0.0%		0	0.0%															
灯明具			燭台	3	0.3%	3	0.3%	3	0.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%								
壺・甕類	甕		9	0.9%	9	0.9%	63	6.2%	0	0.0%	0	0.0%	7	2.9%									
	茶壺		4	0.4%	4	0.4%			0	0.0%	0	0.0%											
	有耳壺・筒形容器		12	1.2%	12	1.2%			0	0.0%	0	0.0%											
	徳利	徳利	19	1.9%	21	2.1%			0	0.0%	0	0.0%											
		双耳徳利	2	0.2%																			
	その他	双耳壺	1	0.1%	11	1.1%			3	1.2%	3	1.2%											
		壺類	小壺・耳付水注	10					1.0%														
	茶入		4	0.4%	4	0.4%			4	1.7%	4	1.7%											
	桶		2	0.2%	2	0.2%			0	0.0%	0	0.0%											
	その他	宗教具	花瓶	2	0.2%	13			1.3%	15	1.5%	0			0.0%	0	0.0%	1	0.4%				
仏餉具			5	0.5%	1		0.4%	1				0.4%											
香炉			5	0.5%	0		0.0%	0				0.0%											
狛犬			1	0.1%	0		0.0%	0				0.0%											
水滴		2	0.2%	2	0.2%	0	0.0%	0	0.0%														
計							1009									242							



第147図 桑下東窯跡と小金山窯跡との組成の比較

陶器の使用

型の器種の比率が相対的に高いことを出土破片数と出土個体数の両者から示した。また、組成の差が最も顕著な器種は鍋・釜類で、壺・甕類がそれに次ぐ。この出土比率の差については、先述のように、窯跡とは異なり、鍋・釜類や壺・甕類が調理具や蔵骨器として使用、消費されたことを幾らか反映している可能性も考えられる。つまり、遺跡が窯跡と密接に関係しながら、これらの器種を使用、消費する状況にあったことを示す。

皿類の構成 前段の上品野西金地遺跡と桑下東窯跡、小金山窯跡の組成の比較において、皿類の出土比率が異なることを示した。併せて皿類の構成を比較する（第147図）。

端反皿

上品野西金地遺跡、桑下東窯跡、小金山窯跡のいずれも端反皿の比率が最も高く、破片数で上品野西金地遺跡が55.6%、桑下東窯跡が74.0%、個体数で上品野西金地遺跡が46.6%、小金山窯跡で59.9%、つまり、前者で6～7割前後、後者で5～6割前後を占める。上品野西金地遺跡における端反皿の比率は桑下東窯跡と小金山窯跡と比較して相対的に低いが、その一方、上品野西金地遺跡は腰折皿の出土比率が破片数で18.9%、個体数で24.8%で、桑下東窯跡の6.1%（破片数）、小金山窯跡の0%（個体数）と比較して高い。その他、丸皿は上品野西金地遺跡が破片数3.6%、個体数5.4%で、桑下東窯跡の破片数5.9%（破片数）、小金山窯跡の個体数5.6%と、（桑下東窯跡における出土比率がやや高いが）大きくは変わらない。稜皿については、上品野西金地遺跡は破片数で0.7%、個体数で0.6%と1%に満たないが、桑下東窯跡は2.5%（破片数）とやや高い出土比率を示す。

腰折皿

丸皿

稜皿

小結

以上、皿類の構成については、上品野西金地遺跡、桑下東窯跡、小金山窯跡のいずれも端反皿が皿類の主要な生産品目である点が共通し、大窯第1段階の組成の特徴をよく示す。その一方、上品野西金地遺跡において腰折皿の出土比率が相対的に高い点、桑下東窯跡において丸皿と稜皿の出土比率がやや高い点は、遺跡、窯跡が操業した時期差の問題を反映している可能性が考えられるが、これらの問題については、より詳細な検討が必要である。いずれにせよ、上品野西金地遺跡と桑下東窯跡、小金山窯跡において認められた皿類の構成に共通する側面は、前段において確認した碗皿類以外の器種の出土比率の差、遺跡の性差をより鮮明とするものであろう。

出土分布

出土遺物総体の組成の検討に続いて、主要な器種について、破片数による出土分布を示し、各器種の出土傾向を把握する（第148～151図）。

出土分布によって、多くの器種が南斜面と東斜面、斜面の南東裾（415SX）付近に集中して出土することが改めて確認されるが、詳細には南斜面により集中して出土する器種と、南斜面と東斜面、さらにその周辺にやや分散して出土する器種に大別される。この傾向について、遺物の集中が最も顕著な南斜面480NRの5m四方のグリッド、6グリッド分（150㎡）における各器種の出土比率を「集積率」として算出した。

「集積率」が高い器種は灯明皿を除く碗皿類と茶壺、有耳壺・筒形容器といった壺類で、4割から5割を示す。後述する縁釉挟み皿を除くと、最も高率を示す器種は茶壺である（53.2%）。一方、「集積率」が低い器種は搦鉢、内耳鍋、釜、甕、燭台、灯明皿といった雑器類が中心で、2～3割程度である。後述する縁釉小皿を除くと、最も低率を示す器種が釜（24.7%）で、内耳鍋がそれに次ぐ（25.5%）。特に使用痕跡が最も顕著に認められる釜は5m四方のグリッド、1グリッド分（25㎡）の出土点数が全体の10%以上に達するグリッドが認められないことから、改めて分散して出土する傾向が確認される。

挟み皿や匣鉢といった窯道具類も分散して出土する傾向を示し、1グリッド分（25㎡）の出土点数が全体の10%以上に達するグリッドは認められない。翻って、製品と比較して窯道具類が分散して出土する傾向は、窯跡における出土の傾向とは異なるようにも思われる。つまり、製品各器種が例外なく廃棄の対象とはならなかったことを示唆する。なお、窯業生産とは無関係な土師器鍋、近世瀬戸・美濃陶器の出土傾向も後者の出土傾向に類似する。

以上の出土傾向の把握から、「集積率」が高い器種はより限定された目的で遺跡に存在する可能性、つまり、製品流通の側面がより密接に関係していた可能性が推測される。一方、「集積率」が低い器種には、製品流通の側面に加えて、遺跡内における使用、消費の側面が反映されている可能性がある。あるいは「集積率」が器種の集積の度合い、つまり、製品の管理状況の一端を反映しているとすれば、前者はより管理の度合いが高く、後者は低いことをも示す。この差は広域流通陶器としての側面を有する器種と、主として領国内または近国を流通する陶器としての側面の差に反映されていることも興味深い。

一方、出土分布がごく限定される器種として、縁釉小皿、腰折皿がある。縁釉小皿は平坦面035SXの遺物集積に出土がほぼ限定され、腰折皿は南斜面の遺物集積516SUに出土が集中する。腰折皿の「集積率」は78.7%で、特に集中する南斜面480NRの3グリッド分の75㎡中に86.0%、1グリッド分の25㎡中に54.1%が出土する。両器種は古瀬戸後IV期新における生産品目で、縁釉小皿は出土状況から大窯期前半における窯業生産とは無関係である（先行する土坑墓に関連する）ことが類推されることからすると、腰折皿の出土状況についても、ごく限定された生産状況の一端が反映されている可能性がある。

以上の出土分布の傾向の把握から、遺跡は窯業生産に密接に関係しながら、同時にそれらを使用、消費する性格も併せ持っていたことが理解される。また、その両側面は明確に分離することが難しいことをも示す。

出土傾向の把握

「集積率」

壺類

雑器類

釜

窯道具類

土師器鍋

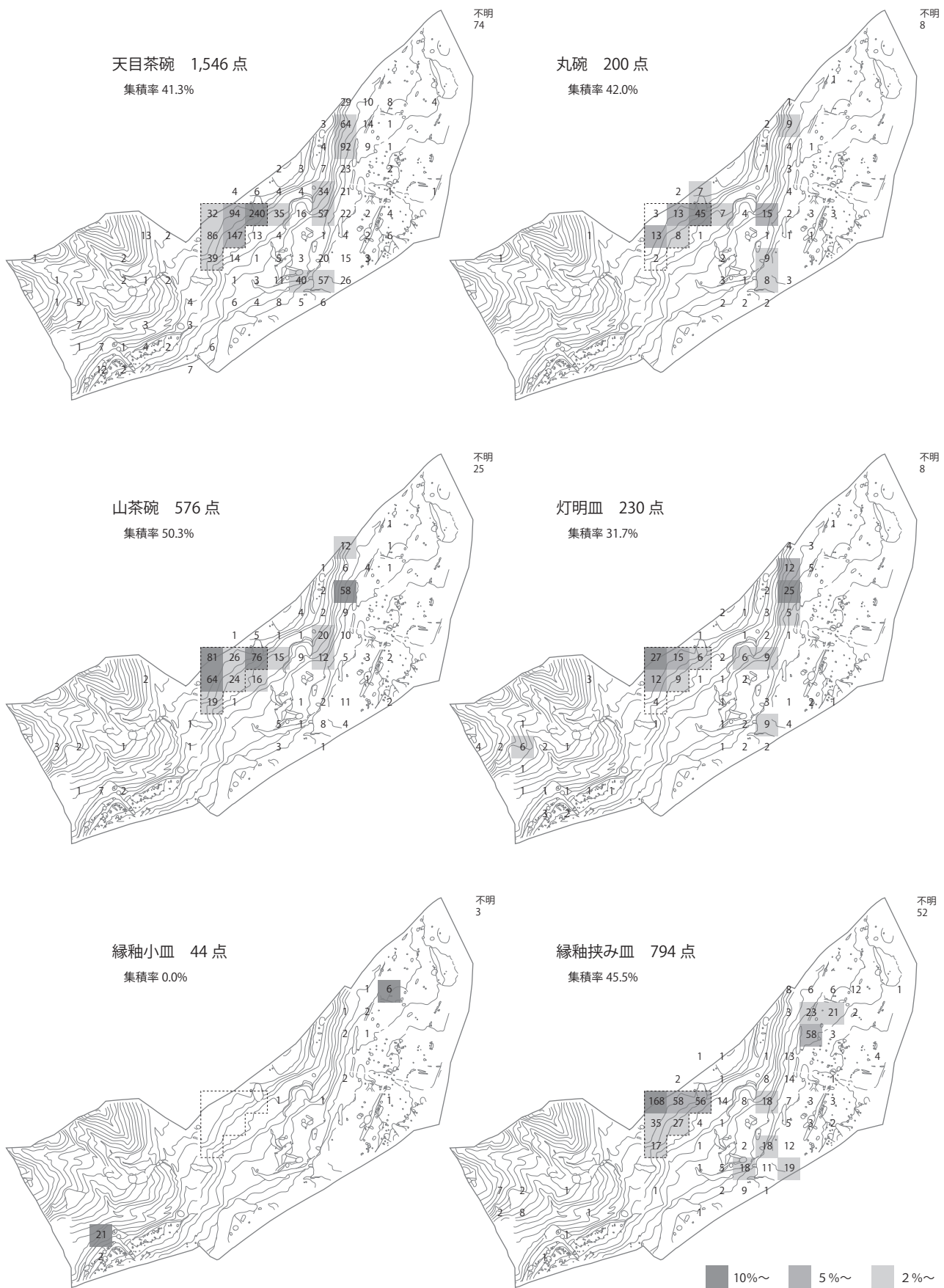
近世

「集積率」の背景

縁釉小皿・腰折皿

小結

上品野西金地遺跡

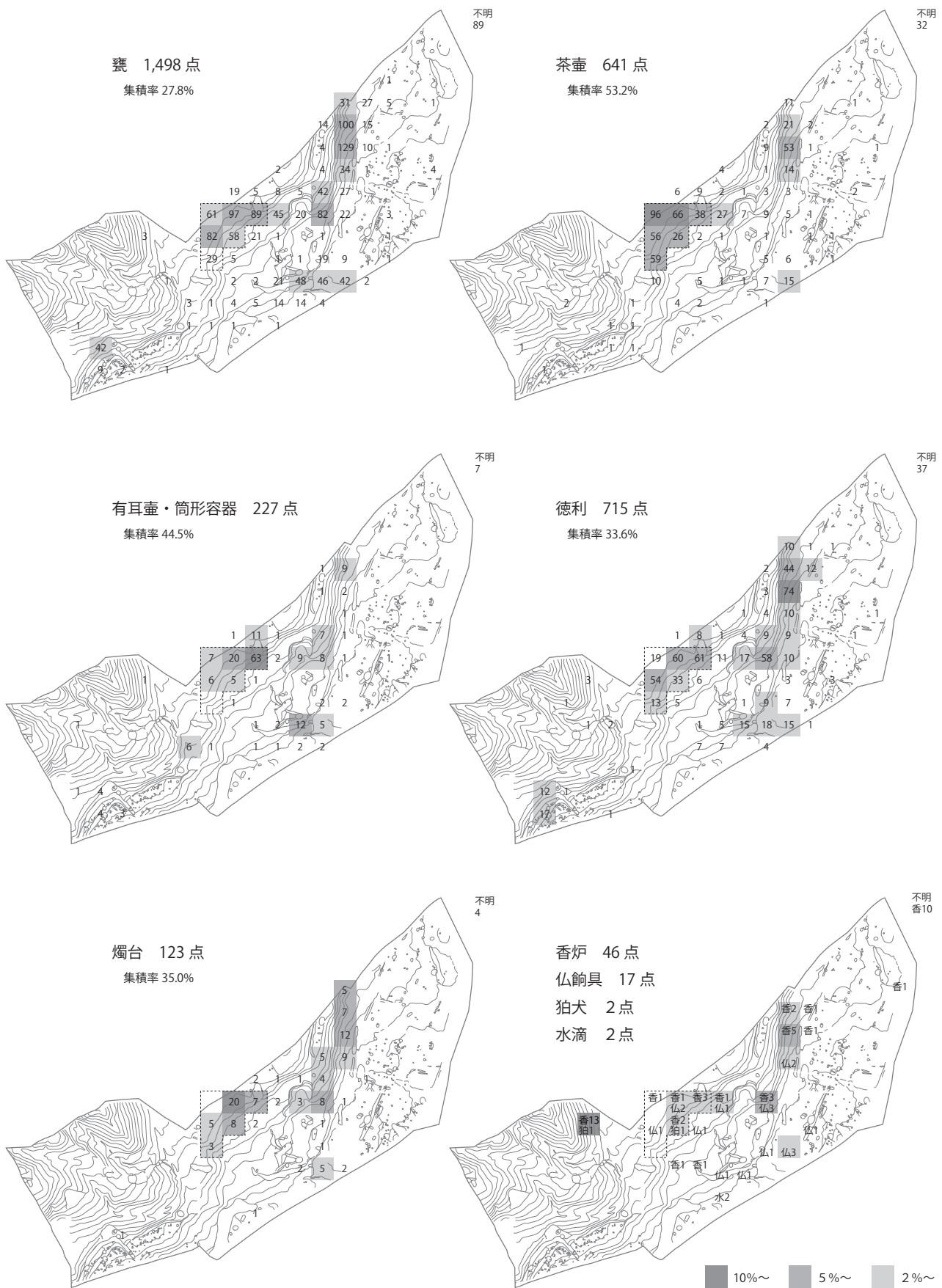


第148図 遺物出土分布 1

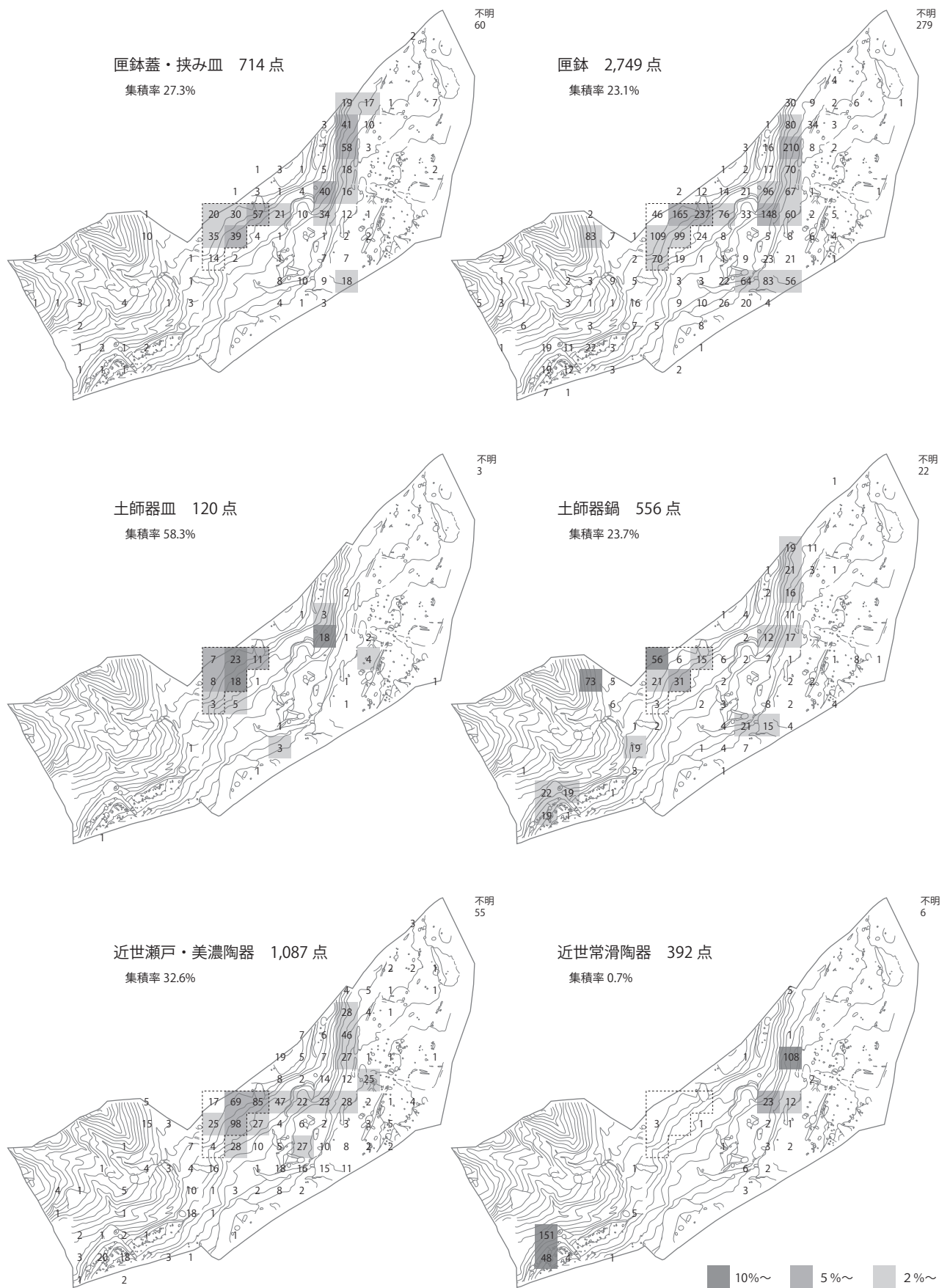


第149図 遺物出土分布 2

上品野西金地遺跡



第150図 遺物出土分布 3



第151図 遺物出土分布4

編年的考察

大窯第1段階
桑下東窯跡の操業

上品野西金地遺跡において出土した大窯期前半の遺物は、組成の検討などを通じて、改めて大窯第1段階を主体とすること、つまり、桑下東窯跡の操業と密接に関係する可能性が高いことを示した。一部の古瀬戸後Ⅳ期新に対比される個体については、先行する土坑墓群に関連する可能性、大窯第2段階に対比される個体については、桑下東窯跡操業後における丘陵の継続利用に関連する可能性を考慮する必要があるが、出土遺物総体は桑下東窯跡の資料を含めて大窯第1段階の標識的な資料として評価することが可能である。

古瀬戸後Ⅳ期新

しかし、桑下東窯跡においては古瀬戸後Ⅳ期新に比定された個体が少なからず含まれている。このことは桑下東窯跡における古瀬戸後Ⅳ期新における操業と上品野西金地遺跡出土遺物の編年的な評価、あるいは古瀬戸後期様式から大窯への転換の理解にも関係する。

桑下東窯跡において古瀬戸後Ⅳ期新に比定されている報告書掲載遺物は、平碗1点、天目茶碗5点、腰折皿23点、縁釉小皿1点、直縁大皿等の鉢・盤類6点、擂鉢18点で、古瀬戸後Ⅳ期新から大窯第1段階に比定されている釜20点、その他の器種6点を含めたとしても、古瀬戸後Ⅳ期に普遍的に組成する平碗や縁釉小皿が著しく少なく、古瀬戸後Ⅳ期新の組成とは著しく異なる。擂鉢についても、古瀬戸後Ⅳ期の諸窯には口縁部内面に突起が形成されるものが普遍的に含まれるが（藤澤2002・2008）、桑下東窯跡において古瀬戸後Ⅳ期新とされた擂鉢は、いずれも口縁部が折り返されるか上方に伸びるもので、口縁部内面に突起が形成されるものは含まれていない。また、上品野西金地遺跡においても口縁部内面に突起が形成される擂鉢の出土は基本的には認められない。

つまり、桑下東窯跡において、形式的に先行する属性を考慮して古瀬戸後Ⅳ期新に比定された擂鉢の多くは、全体の組成と擂鉢の構成を重視すれば大窯第1段階への比定が妥当であると考えられる。上品野西金地遺跡出土の擂鉢について、各属性の相関関係を検討した結果、底部内面の櫛目と口縁部の形状によって擂鉢が古相と新相に細分される可能性を示したが、これらの古相の一群も同様に大窯第1段階として理解するのが妥当であろう。

腰折皿

また、古瀬戸後Ⅳ期新に編年される腰折皿については、上品野西金地遺跡に比較的多く組成するが、前段の出土分布の検討から、限定的な生産状況が反映されている可能性が考慮される。桑下東窯跡においても、腰折皿は窯体SY01背後の工房群として利用されたE区に27点中の18点が出土し、特に丘陵縁辺に出土が集中する傾向がある。端反皿の挟み皿として腰折皿を使用する例が端的に示すように、大窯第1段階に腰折皿が伴うことは十分に想定されるが、同段階における主要な生産品目ではなく、他の生産品目と区別されることは確かであろう。

小結

以上、桑下東窯跡と上品野西金地遺跡の窯業生産に関係する大窯期前半の遺物は、基本的に古瀬戸後Ⅳ期新の遺物を含まず、大窯第1段階を主体とすることを改めて確認した。同時に、古瀬戸後Ⅳ期新から大窯第1段階における編年上の問題を指摘した。特に擂鉢は大窯の他の器種と比較して使用期間が短く、ある程度普遍的に出土することから、城館等、消費地における年代決定の有力な指標とされることが多い（藤澤1991）。今後も、生産地における編年研究のより一層の深化が必要であろう。

大窯製品の流通と上品野西金地遺跡

上品野西金地遺跡における大窯期前半の遺物について、編年的考察を通じて遺物の帰属時期が桑下東窯跡の操業時期と一致すること、同時期の窯跡の組成との比較を通じて、器種の偏向性が認められること、出土分布の検討を通じて、製品流通の側面が反映されていた可能性を示した。つまり、桑下東窯跡において生産された大窯期前半の陶器が流通する過程において、一定の目的に応じて製品が遺跡の近辺に集積されたことが類推される（第152図）。

ところで、下品野の加藤新右衛門が所蔵する永禄6年（1563）の瀬戸宛信長制札は、織田信長の尾張国統一期における領国内の経済政策の一環によって発給されたもので、尾張領国統一以前、大窯第3段階前半以前の「瀬戸物」流通の一端が記されている（安野1987、藤澤1992）。制札は東日本を中心として広域流通する陶器に対して、「国中往反」する「瀬戸物」の流通を保証したもので、制札には「瀬戸物」集積と流通に関与した「諸郷商人」の存在が認められる。

桑下東窯跡の操業
器種の偏向性
製品流通の側面

瀬戸宛信長制札

諸郷商人

制札	瀬戸
一 瀬戸物之事、諸郷商人国中往反不可有違乱事、	
一 当郷出合之白俵并塩あい物以下出入不可有違乱、次当日横道商馬停止之事、	
一 新儀諸役・郷質・所質不可取之事、	
右条々、違反之輩在之者、速可成敗者也、仍下知如件、	
永禄六年十二月 日 (信長花押)	

大窯製品の流通については、その出土状況から、天目茶碗・小皿類・搦鉢を主要品目とする関東地方南部から滋賀県東部・三重県の第一次流通圏、主要品目から搦鉢が脱落する北海道南部から中国地方東部の第二次流通圏、大窯製品が少ない中国地方以西の第三次流通圏に区分して理解されている（藤澤1993）。前段において示したように、上品野西金地遺跡は同時期に操業した大窯第1段階の窯跡と比較して、搦鉢を主体とする鉢・盤類、鍋・釜類、壺・甕類の比率が高く、特に鍋・釜類の出土比率の差が顕著であった。陶器の鍋・釜類は同時期の城館や集落遺跡で大量に消費される土師器鍋と競合することから、その流通圏は大窯製品の第一次流通圏よりもさらに狭かったことは容易に推測される。つまり、鍋・釜類は「国中往反」する「瀬戸物」であったと考えられる。

大窯瀬品の流通

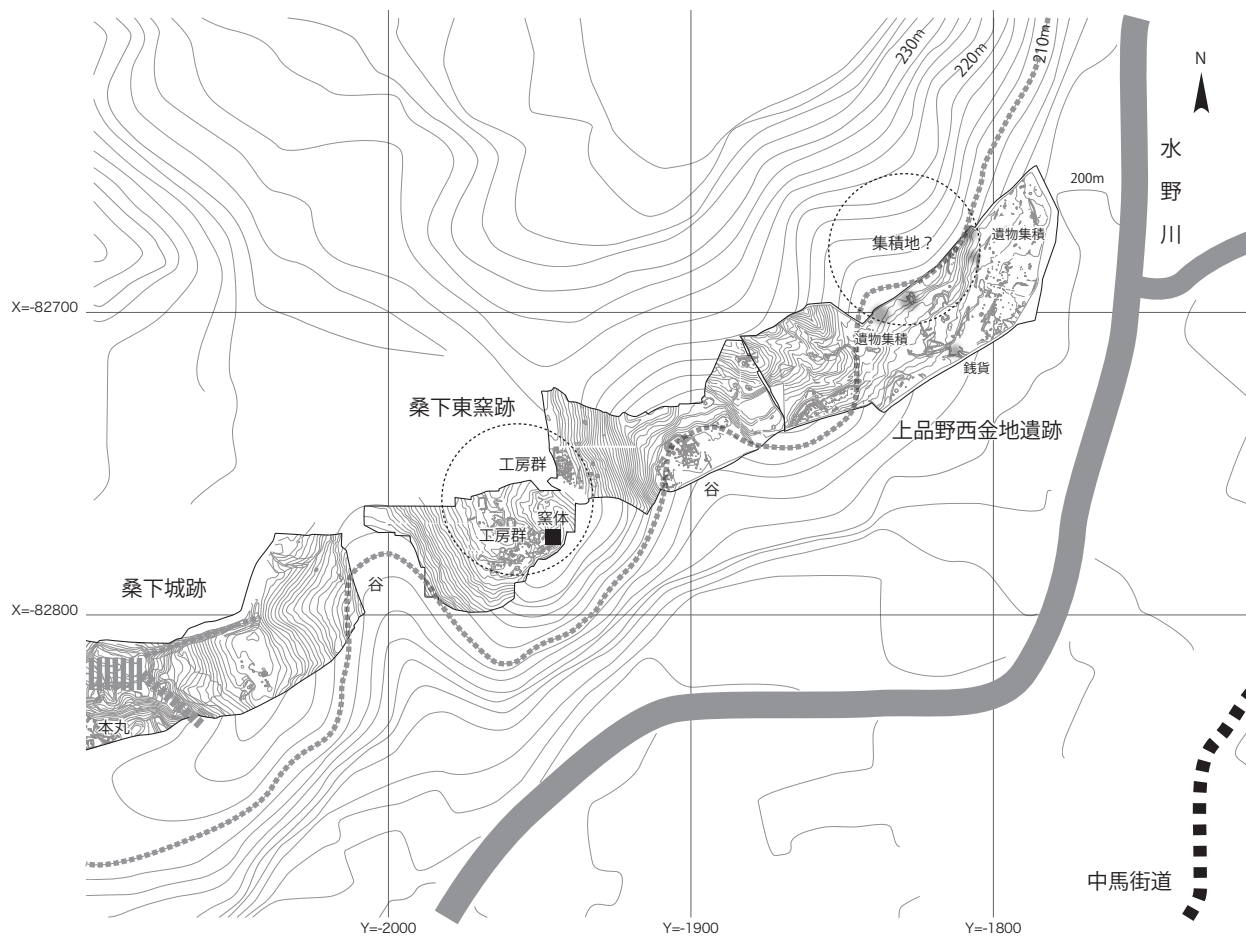
国中往反

また、鍋・釜類（特に釜）は、使用痕跡が明瞭なものが少なからず含まれ、出土傾向（『集積率』）から製品としての管理の度合いが相対的に低いと考えられることは、「白俵并塩あい物以下」を商う市場において調理された食料も商われたと推測されていること（安野1987）に関連する可能性が想起される。加えて、「商馬」を所有する商人の存在は、遺跡が中馬街道に近いことにも符合し、上品野西金地遺跡415SXにおいて大量に出土した銭貨は、土坑墓に関連する可能性もあるが、あるいは、遺跡付近において生産、集積された「瀬戸物」の商取引に関係する可能性もある。

鍋・釜類
白俵并塩あい物
商馬
出土銭貨

以上に推測したように、上品野西金地遺跡において大量に出土した大窯期前半の陶器が、陶器の集積地に関係する遺物であるとすれば、遺跡と遺物は「制札」にみる「国中往反」

小結



第152図 桑下東窯跡と上品野西金地遺跡の位置関係（1:2,500）

桑下城・品野城

する「瀬戸物」流通、その流通に関与した「諸郷商人」と桑下東窯跡における陶器生産の関係を具体的に考察する絶好の資料として評価することが可能であろう。さらには、桑下城・品野城の在地領主による陶器生産者と「諸郷商人」、それを介在する「問屋」の組織化、つまり、問屋制的支配の実体に議論を発展させることも不可能ではないようにも思われる。

文献

- 藤澤良祐1991「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社
 藤澤良祐1992「大窯期工人集団の史的考察—瀬戸・美濃系大窯を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集
 藤澤良祐1993「大窯製品の流通圏」『瀬戸市史』陶磁史篇四 瀬戸市
 藤澤良祐2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
 藤澤良祐2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
 安野眞幸1987「瀬戸楽市令と商人宿—永禄六年の瀬戸宛信長文書の分析—」『文化紀要』第26号 弘前大学教養部

- 瀬戸市1993『瀬戸市史』陶磁史篇四
 公益財団法人愛知県教育スポーツ・振興財団愛知県埋蔵文化財センター2011『桑下東窯跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第164集
 考古学フォーラム2012『考古学フォーラム』21 桑下東窯跡と鉢下城跡-戦国期における大窯生産のすがた-

第6章 まとめ

上品野西金地遺跡

上品野西金地遺跡は品野盆地北東部、水野川右岸の低地部分から丘陵斜面に立地する遺跡で、今回の発掘調査の結果、縄文時代、古代、中世、戦国時代・近世に及ぶ複合遺跡であることが明らかとなった。以下、各時代の調査成果を列記する。

縄文時代

丘陵斜面裾付近の基盤層直上において縄文時代草創期の有舌尖頭器が1点出土した。石器は品野盆地周辺における同時期の石器群を構成する一資料である。

環境

複合遺跡

有舌尖頭器

水野川に面した緩傾斜面においてドングリ類を貯蔵した縄文時代後期中葉の低湿地型の貯蔵穴を検出した。貯蔵穴はさらに周辺に群集している可能性がある。上品野遺跡の縄文・弥生時代の貯蔵穴を含めたこれらの遺構は、低地を利用した食料生産活動の展開を示す。また、古植生の復原にも有意な情報を提供する。

貯蔵穴

古代・中世

水野川に面した低地部分に掘立柱建物を中心に構成される集落を確認した。周辺の上品野遺跡、上品野蟹川遺跡を含め、平安時代以降、盆地内には安定した集落が形成されるようになる。中世にも低地における集落形成は継続する一方、周辺の丘陵では窯業生産が本格化する。窯業生産の興隆と中世集落の動態との関係、丘陵と低地の土地利用の差配、窯業地としての景観変化の過程等、今後に検討すべき課題は多い。

古代集落

中世集落

戦国時代・近世

中世末以降、桑下東窯跡から連続する丘陵一帯には（集石）土坑墓群が散在する。前後して、丘陵一帯は桑下城跡の築城、桑下東窯跡の操業によって大規模に開発される。上品野西金地遺跡においても、桑下東窯跡で生産され、付近に集積されていた可能性が高い大窯期前半の陶器が大量に出土した。出土した陶器は器種も豊富で、残存状況も良好であることから、大窯期前半における編年と様式研究、古瀬戸後期様式から大窯への質的転換の内容にかかる研究に資する点が多い。特に、器種組成、出土状況の観点からは、大窯製品の流通に対しても多くの示唆を与えるものとした。桑下城跡、桑下東窯跡を含めた一連の遺跡における遺構・遺物は、いわゆる織豊期以前における在地領主と陶器（「瀬戸物」）生産・流通の諸関係、その具体像に接近する唯一無二の成果である。

（集石）土坑墓群

大窯期前半の陶器

近世には、丘陵斜面は平坦面が造成され、屋敷地、耕作地、墓地として利用されるようになる。同時に、戦国時代・近世を通じて斜面は断続的に崩壊、流出し、大窯期前半の大量の陶器を埋没させることとなった。

近世の屋敷地など

上品野地区における発掘調査

上品野西金地遺跡と桑下城跡の調査報告書の刊行をもって、平成8年度から17年間に及んで継続した東海環状自動車道建設、国道363号線道路改良工事に伴う瀬戸市上品野地区における発掘調査は完結することとなった。発掘調査の成果は多大ではあるが、それらは地域史の一断面に過ぎない。今後、他の歴史資料を含めた地形環境史、生活・景観史、政治・経済・産業流通史の構築が求められよう。

発掘調査の完結

上品野西金地遺跡

番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
1	有舌先頭器			459SD	長5.18	幅2.27	厚0.69	-	-		チャート製
2	縄文土器			282SX	-	-	*3.8	1	0		縄文時代中期前半
3	須恵器蓋杯蓋（杯）			検出	-	-	*1.4	0	0		
4	須恵器甕			415SX	-	-	*2.7	0	0		
5	須恵器鉢？			413SW	12.6	-	*5.2	1	0		
6	土師器甕			検出	18.6	-	*2.2	1	0		
7	灰釉陶器碗			検出	15.6	-	*2.8	1	0	灰釉	黒笹90号窯式
8	灰釉陶器碗			195SD	-	8.6	*3.8	0	4	灰釉	黒笹90号窯式
9	灰釉陶器碗			419SD	-	8.6	*3.3	0	3	灰釉	折戸53号窯式
10	灰釉陶器碗			421SX	-	7.8	*3.1	0	1	灰釉	東山72号窯式
11	灰釉陶器碗			400SD	-	6.4	*3.2	0	7	灰釉	東山72号窯式
12	灰釉陶器碗			415SX	15.6	8.1	6.4	1	3	灰釉	東山72号窯式
13	灰釉陶器輪花皿			418P	13.0	6.8	2.5	4	12	灰釉	東山72号窯式
14	山茶碗			419SD	14.0	5.3	5.8	8	11	無釉	尾張型第7型式
15	山茶碗			400SD	13.9	6.0	5.5	2	12	無釉	尾張型第7型式
16	山茶碗			400SD	13.6	6.0	5.3	6	7	無釉	尾張型第7型式
17	山茶碗			検出	12.5	-	*5.2	7	8	無釉	尾張型第7型式
18	山茶碗			検出	12.9	5.7	5.6	3	6	無釉	尾張型第7型式
19	土師器伊勢型鍋			419SD	23.6	-	*1.6	1	0		13世紀前半
20	山茶碗			311SX	14.2	5.0	6.3	2	2	無釉	東濃型明和窯式
21	山茶碗小皿			311SX	7.9	4.3	1.9	11	12	無釉	尾張型第7型式
22	片口鉢			311SX	-	15.6	*5.6	0	4	無釉	尾張型第7型式
23	山茶碗			313P	11.2	4.4	4.4	10	12	無釉	東濃型大畑大洞窯式
24	卸皿			314P	14.1	8.0	4.0	7	12	灰釉	古瀬戸前Ⅲ・Ⅳ期
25	山茶碗			検出	-	5.6	*2.1	0	12	無釉	尾張型第4型式
26	山茶碗			480NR	-	5.8	*2.2	0	12	無釉	尾張型第9型式
27	山茶碗小皿			480NR	9.0	5.8	2.4	3	4	無釉	尾張型第5型式
28	山茶碗小皿			表土	8.8	-	*1.8	2	0	無釉	尾張型第6型式
29	山茶碗小皿			東斜面	8.0	4.6	1.4	3	4	無釉	東濃型明和窯式
30	山茶碗			007NR	11.7	3.2	3.1	4	3	無釉	東濃型大洞東
31	山茶碗			検出	11.7	5.6	3.1	3	11	無釉	東濃型脇之島
32	陶丸			検出	長2.4	幅2.3	高2.3	12	12	無釉	重12.7g
33	陶丸			検出	長2.2	幅2.1	高2.2	12	12	無釉	重11.4g
34	四耳壺			東斜面	-	10.0	*3.6	0	7	灰釉	古瀬戸前Ⅲ・Ⅳ期
35	合子蓋			480NR	-	2.3	1.3	0	12	灰釉	古瀬戸前Ⅲ・Ⅳ期
36	卸皿			480NR	-	12.0	*2.7	0	1	灰釉	古瀬戸前Ⅲ・Ⅳ期
37	折縁深皿			検出	31.2	-	*4.9	2	0	灰釉	古瀬戸後Ⅲ・Ⅳ期
38	平碗			東斜面	14.5	-	*4.2	3	0	灰釉	古瀬戸後Ⅳ期古
39	縁釉小皿			314P	9.0	5.8	2.3	5	2	灰釉	古瀬戸後Ⅳ期新
40	柄付片口			480NR	13.8	-	*3.8	1	0	灰釉	古瀬戸後Ⅲ期
41	瓶子			400SD	5.2	-	*2.9	2	0	灰釉	古瀬戸後Ⅲ・Ⅳ期
42	花瓶			検出	-	7.4	*4.1	0	11	灰釉	古瀬戸後Ⅲ・Ⅳ期
43	花瓶			480NR	-	-	*8.0	0	0	灰釉	古瀬戸後Ⅲ・Ⅳ期
44	花瓶			506SX	-	7.0	*7.9	0	11	灰釉	古瀬戸後Ⅲ・Ⅳ期
45	土師器羽釜			162SW	21.0	-	*3.5	1	0		14世紀前半
46	縁釉小皿			035SX	9.3	5.1	2.1	9	12	鉄釉	
47	縁釉小皿			035SX	9.5	4.6	1.8	6	6	鉄釉	
48	縁釉小皿			035SX	9.6	5.0	1.9	3	6	鉄釉	
49	縁釉小皿			035SX	9.6	4.6	1.9	4	6	鉄釉	
50	端反皿		中型	035SX	11.0	6.3	2.3	5	11	灰釉	底外輪ドチ
51	端反皿（露胎）		中型	035SX	10.5	5.7	2.7	11	11	灰釉・露胎	
52	灯明皿		1類	035SX	9.9	4.3	2.2	6	6	焼締	
53	灯明皿		2類	035SX	11.8	5.0	3.2	2	5	焼締	
54	天目茶碗		A 3類	035SX	11.8	4.4	6.4	4	12	鉄釉・錆釉	
55	山茶碗		1類	035SX	11.7	5.8	3.0	11	12	無釉	焼成後底部穿孔
56	有耳壺			035SX	14.5	-	*6.3	3	0	鉄釉	口端釉拭い・重ね焼き痕
57	徳利			035SX	-	12.2	*9.0	0	3	鉄釉・錆釉	
58	小壺			035SX	5.4	5.0	6.2	6	12	灰釉	
59	槽鉢		I A 3類	035SX	28.4	9.1	10.5	5	9	錆釉	
60	槽鉢		I A 4類	035SX	30.2	-	*9.2	4	0	錆釉	
61	釜			035SX	15.2	11.9	15.8	4	6	錆釉	外面スス
62	釜			035SX	13.2	-	*5.4	3	0	錆釉	
63	釜			042SK	15.3	-	*4.8	3	0	錆釉	
64	甕			035SX	20.2	15.5	38.1	11	7	錆釉	
65	土師器内耳鍋			035SX	26.4	-	*11.3	2	0		外面スス
66	土師器内耳鍋			042SK	26.4	-	*6.8	3	0		
67	匣鉢蓋			035SX	14.9	7.4	1.9	4	3	無釉	内外面スス（灯明皿に転用）
68	挟み皿			035SX	13.2	6.0	2.3	5	6	無釉	外面スス
69	匣鉢		B類	035SX	15.0	11.0	11.4	6	7	無釉	体内ビン痕・底内輪ドチ、外面スス
70	匣鉢		B類	035SX	-	12.0	*4.3	0	6	無釉	
71	内耳鍋			005SX	21.7	9.8	11.2	9	12	錆釉	外面スス
72	匣鉢			005SX	11.1	6.8	3.7	3	4	無釉	
73	耳付水注			004SX	3.4	4.4	4.4	12	12	鉄釉・錆釉	
74	耳付水注			514SX	-	4.6	*5.2	0	12	鉄釉・露胎	底外使用痕
75	筒形香炉			505P	7.7	4.8	5.0	10	12	鉄釉・露胎	
76	槽鉢		I A 2類	513SX	26.8	8.5	10.9	11	12	錆釉	
77	腰折皿			513SX	10.4	5.0	2.2	11	12	灰釉*	底内トチン3個
78	端反皿		中型	513SX	11.4	6.0	2.8	9	12	灰釉	底外輪ドチ
79	山茶碗		2類	513SX	11.1	5.0	3.2	11	12	無釉	
80	天目茶碗		A 2類	480NR	12.7	4.7	7.5	2	12	鉄釉*・錆釉	
81	天目茶碗		A 2類	480NR	12.1	4.8	7.4	7	12	鉄釉*・錆釉	
82	天目茶碗		A 2類	480NR	11.8	4.6	7.4	1	12	鉄釉・錆釉	
83	天目茶碗		A 2類	480NR	11.8	4.6	7.5	4	12	鉄釉*・錆釉	

遺物一覧表

番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (1/2)	底部 残存 (1/2)	施釉 *焼成不良	備考
84	天目茶碗	A 2 類		480NR	12.0	4.4	7.3	7	12	鉄釉・鎔釉	
85	天目茶碗	A 2 類		480NR	12.0	4.5	7.2	11	12	鉄釉*・鎔釉	
86	天目茶碗	A 2 類		007NR	12.1	4.6	7.3	2	12	鉄釉・鎔釉	
87	天目茶碗	A 2 類		480NR	11.7	4.8	7.2	2	7	鉄釉・鎔釉	
88	天目茶碗	A 2 類		007NR	11.9	4.7	7.6	10	12	鉄釉・鎔釉	
89	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.8	4.8	7.2	5	12	鉄釉・鎔釉	線刻、内面窯ゴミ
90	天目茶碗	A 3 類		007NR	11.2	4.6	7.1	0	11	鉄釉・鎔釉	線刻
91	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.9	4.5	7.2	2	11	鉄釉*・鎔釉	
92	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.9	4.6	7.1	10	12	鉄釉*・鎔釉	
93	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.8	4.5	6.9	11	11	鉄釉*・鎔釉	
94	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.8	4.9	7.0	10	12	鉄釉・鎔釉	
95	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.8	4.7	6.9	6	12	鉄釉・鎔釉	
96	天目茶碗	A 3 類		480NR	10.7	5.0	7.1	3	7	鉄釉・鎔釉	
97	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.7	4.3	6.8	2	12	鉄釉・鎔釉	
98	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.8	4.7	6.8	2	12	鉄釉*・鎔釉	
99	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.6	4.6	6.7	4	11	鉄釉*・鎔釉	
100	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.6	4.5	6.4	9	12	鉄釉・鎔釉	内面窯ゴミ
101	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.7	4.6	6.6	10	12	鉄釉*・鎔釉	
102	天目茶碗	A 3 類		検出	11.6	4.6	6.4	4	11	鉄釉*・鎔釉	
103	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.8	4.4	6.4	11	12	鉄釉*・鎔釉	
104	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.6	4.6	6.5	11	12	鉄釉*・鎔釉	
105	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.7	4.4	6.5	11	12	鉄釉*・鎔釉	
106	天目茶碗	A 3 類		480NR	11.5	4.5	6.2	10	12	鉄釉*・鎔釉	
107	天目茶碗	A 4 類		480NR	10.6	4.4	7.1	5	6	鉄釉・鎔釉	付高台？
108	天目茶碗	A 5 類		480NR	11.0	4.5	6.0	7	10	鉄釉・鎔釉	
109	天目茶碗	A 6 類		480NR	11.5	4.8	6.1	2	12	鉄釉・鎔釉	
110	天目茶碗	B 類		007NR	11.0	4.0	5.6	11	12	鉄釉・鎔釉	内反り高台
111	天目茶碗	B 類		007NR	-	4.5	*4.6	0	10	鉄釉・鎔釉	内反り高台
112	天目茶碗	B 類		480NR	-	4.6	*3.7	0	6	鉄釉・鎔釉	内反り高台・底外使用痕
113	天目茶碗 (露胎)	C 類		480NR	11.5	4.2	5.4	2	10	鉄釉・露胎	
114	天目茶碗	A 2 類		380SU	12.5	4.6	7.6	11	11	鉄釉*・鎔釉	
115	天目茶碗	A 2 類		表土	11.6	4.4	7.6	0	12	鉄釉・鎔釉	
116	天目茶碗	A 2 類		表土	11.5	4.6	7.3	3	9	鉄釉・鎔釉	
117	天目茶碗	A 3 類		380SU	11.7	4.5	6.9	3	12	鉄釉*・鎔釉	
118	天目茶碗	A 3 類		東斜面	12.0	4.5	6.9	1	11	鉄釉*・鎔釉	
119	天目茶碗	A 3 類		東斜面	11.6	4.2	7.0	3	5	鉄釉*・鎔釉	
120	天目茶碗	A 3 類		330SU	12.0	4.8	6.8	12	12	鉄釉・鎔釉	内面窯ゴミ
121	天目茶碗	A 3 類		東斜面	12.0	5.0	6.6	3	5	鉄釉・鎔釉	
122	天目茶碗	A 5 類		東斜面	11.5	4.2	6.0	2	7	鉄釉・鎔釉	
123	天目茶碗	A 5 類		東斜面	11.7	5.2	5.8	5	7	鉄釉*・鎔釉	
124	小天目	A 類		東斜面	-	2.8	*0.6	0	12	鉄釉・鎔釉	
125	天目茶碗	A 1 類		検出	12.0	4.5	6.8	11	11	鉄釉・鎔釉	内面窯ゴミ・底外刳殻匠痕
126	天目茶碗	A 2 類		415SX	11.9	4.7	7.6	7	12	鉄釉*・鎔釉	
127	天目茶碗	A 2 類		020SD	-	4.5	*7.0	0	12	鉄釉・鎔釉	
128	天目茶碗	A 3 類		検出	12.0	4.6	6.8	4	9	鉄釉・鎔釉	
129	天目茶碗	A 3 類		検出	11.7	4.4	6.6	2	12	鉄釉*・鎔釉	
130	天目茶碗	A 5 類		415SX	12.0	4.2	6.4	7	8	鉄釉・鎔釉	底外トチン
131	天目茶碗	A 5 類		020SD	12.1	4.5	6.1	2	11	鉄釉・鎔釉	
132	天目茶碗	A 5 類		415SX	11.6	4.7	6.1	3	12	鉄釉*・鎔釉	
133	天目茶碗	A 5 類		485SD	11.8	-	*5.6	11	0	鉄釉・鎔釉	
134	天目茶碗	B 類		表土	12.5	4.7	6.3	2	12	鉄釉*・鎔釉	内反り高台
135	天目茶碗	B 類？		005SX	12.0	-	*5.3	5	0	鉄釉・鎔釉	
136	小天目	A 類		検出	-	4.0	*1.7	0	12	鉄釉・鎔釉	
137	丸碗 (蓮弁文)			480NR	11.9	-	*5.3	5	0	灰釉	
138	丸碗 (蓮弁文)			480NR	11.8	-	*5.7	3	0	灰釉	
139	丸碗 (印花文)			480NR	-	5.4	*1.9	0	4	灰釉*	
140	丸碗	1 類		516SU	12.0	5.5	7.2	7	12	灰釉・露胎	
141	丸碗	1 類		480NR	-	5.7	*4.7	0	7	灰釉	
142	丸碗	1 類		516SU	11.5	5.7	6.1	7	11	灰釉・露胎	
143	丸碗	2 類		480NR	12.0	5.5	6.3	4	9	灰釉*	
144	丸碗	2 類		480NR	11.0	5.6	6.3	3	11	灰釉・露胎	底外輪ドチ
145	丸碗	2 類		480NR	11.1	5.6	6.2	8	12	灰釉・露胎	
146	丸碗	2 類		480NR	-	5.7	*5.0	0	12	灰釉	
147	丸碗	3 類		516SU	11.4	5.6	5.7	5	12	灰釉	底外輪ドチ
148	丸碗	3 類		480NR	11.5	5.7	5.5	7	12	灰釉・露胎	底外輪ドチ
149	丸碗	2 類		東斜面	11.3	5.5	6.1	8	12	灰釉	底外輪ドチ
150	丸碗	2 類		東斜面	11.8	6.1	6.2	4	12	灰釉*	底外輪ドチ
151	丸碗	2 類		415SX	11.4	5.6	6.1	4	12	灰釉	底外輪ドチ
152	丸碗	3 類		表土	11.3	5.9	5.7	3	11	灰釉*	
153	丸碗	3 類		432SD	11.1	5.4	6.0	2	11	灰釉*	底外輪ドチ
154	丸碗？			東斜面	11.9	4.2	7.9	1	10	鉄釉*・鎔釉	
155	丸碗？			480NR	11.2	-	*4.0	3	0	鉄釉	
156	丸碗？			480NR	-	5.8	*3.4	0	4	鉄釉・露胎	
157	丸碗？			007NR	-	6.3	*2.3	0	7	鉄釉・露胎	
158	丸碗？			試掘	-	6.0	*2.6	0	3	鉄釉・露胎	
159	丸碗？			検出	-	6.1	*2.3	0	6	鉄釉・露胎	
160	丸碗？			表土	-	6.0	*4.8	0	7	鉄釉・鎔釉	
161	平碗	A 類		東斜面	17.6	5.6	5.6	3	5	鉄釉・鎔釉	外面窯ゴミ
162	平碗	A 類		試掘	-	5.2	*2.1	0	12	鉄釉・鎔釉	
163	平碗	A 類		検出	-	4.8	*0.8	0	4	鉄釉・露胎	
164	平碗	B 類		試掘	13.2	-	*5.1	3	0	焼締	
165	平碗	B 類		東斜面	14.6	-	*3.9	3	0	焼締	
166	筒形碗？			480NR	11.2	-	*6.2	2	0	鉄釉・鎔釉？	

上品野西金地遺跡

番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
167	山茶碗	1	類	試掘	11.0	5.4	3.4	9	12	無釉	
168	山茶碗	1	類	480NR	11.7	5.5	3.8	6	12	無釉	
169	山茶碗	1	類	480NR	11.8	5.8	3.6	5	12	無釉	
170	山茶碗	1	類	480NR	12.1	5.3	3.7	9	12	無釉	
171	山茶碗	1	類	480NR	11.7	5.7	3.7	10	12	無釉	
172	山茶碗	1	類	480NR	11.8	5.6	3.9	11	12	無釉	
173	山茶碗	1	類	480NR	11.3	5.5	3.4	10	12	無釉	
174	山茶碗	1	類	480NR	12.0	5.8	3.7	6	11	無釉	
175	山茶碗	1	類	480NR	11.5	5.2	3.8	2	12	無釉	
176	山茶碗	1	類	480NR	12.1	5.2	3.5	4	12	無釉	
177	山茶碗	1	類	480NR	12.1	6.0	4.0	3	12	無釉	
178	山茶碗	1	類	480NR	12.1	5.5	3.9	8	12	無釉	
179	山茶碗	1	類	480NR	11.3	5.7	3.6	4	12	無釉	
180	山茶碗	1	類	480NR	11.9	5.8	3.9	9	12	無釉	
181	山茶碗	1	類	480NR	11.8	5.9	3.4	2	12	無釉	
182	山茶碗	1	類	480NR	12.0	4.0	3.3	5	12	無釉	
183	山茶碗	1	類	480NR	11.6	5.2	3.6	2	12	無釉	
184	山茶碗	1	類	480NR	11.2	5.9	3.4	4	12	無釉	
185	山茶碗	1	類	480NR	11.0	5.4	3.5	11	11	無釉	
186	山茶碗	1	類	480NR	11.9	6.2	3.8	8	12	無釉	
187	山茶碗	1	類	480NR	11.4	5.8	3.3	10	12	無釉	
188	山茶碗	2	類	480NR	11.2	5.0	2.6	9	12	無釉	
189	山茶碗	2	類	480NR	11.0	4.8	2.6	8	12	無釉	外面スス
190	山茶碗	1	類	検出	11.9	5.5	3.1	6	6	無釉	
191	山茶碗	2	類	東斜面	10.7	5.2	3.1	5	11	無釉	
192	山茶碗	2	類	東斜面	11.0	5.2	3.0	7	12	無釉	
193	山茶碗	2	類	380SU	10.8	5.4	2.7	9	12	無釉	
194	山茶碗	1	類	380SU	11.9	5.8	3.3	2	12	無釉	外面スス
195	山茶碗	1	類	東斜面	11.0	5.5	3.6	1	12	無釉	
196	山茶碗	2	類	東斜面	11.2	5.3	3.1	1	9	無釉	
197	山茶碗	2	類	東斜面	11.7	6.0	2.5	3	6	無釉	
198	山茶碗	2	類	東斜面	10.4	4.5	2.7	4	6	無釉	
199	灯明皿	1	類	480NR	11.2	4.6	2.8	6	12	焼締	
200	灯明皿	1	類	480NR	11.2	4.3	2.9	7	12	焼締	
201	灯明皿	1	類	480NR	11.6	4.9	2.7	6	12	焼締	
202	灯明皿	1	類	480NR	11.7	5.2	2.4	7	12	焼締	
203	灯明皿	1	類	480NR	10.6	4.6	2.7	5	12	焼締	
204	灯明皿	1	類	480NR	10.1	4.1	2.1	12	12	焼締	
205	灯明皿	1	類	480NR	10.4	4.2	3.5	4	9	焼締	
206	灯明皿	1	類	480NR	10.4	4.7	2.9	7	12	焼締	
207	灯明皿	2	類	480NR	10.7	4.8	2.8	7	12	焼締	
208	灯明皿	2	類	480NR	11.2	5.0	2.5	6	9	焼締	
209	灯明皿	2	類	480NR	10.2	4.6	2.6	1	12	焼締	
210	灯明皿	2	類	480NR	10.1	4.9	2.4	4	11	焼締	
211	灯明皿	2	類	480NR	10.8	4.2	2.8	3	7	焼締	
212	灯明皿	2	類	480NR	9.3	4.4	2.5	1	12	焼締	
213	灯明皿	2	類	480NR	10.8	5.0	2.0	2	4	焼締	
214	灯明皿	1	類	東斜面	12.4	5.5	2.5	5	6	焼締	
215	灯明皿	1	類	検出	10.0	4.0	2.9	5	6	焼締	
216	灯明皿	1	類	380SU	11.0	4.5	2.6	3	5	焼締	
217	灯明皿	2	類	東斜面	11.7	5.2	2.9	2	4	焼締	
218	灯明皿	2	類	検出	10.8	4.5	2.6	4	6	焼締	
219	灯明皿	2	類	224NR	11.1	5.1	3.1	4	6	焼締	
220	灯明皿	2	類	東斜面	10.3	4.1	2.4	3	5	焼締	
221	灯明皿	2	類	330SU	9.9	4.6	2.7	8	11	焼締	
222	灯明皿	1	類	007NR	9.8	4.2	2.8	8	4	焼締	
223	灯明皿	2	類	007NR	9.5	4.2	1.9	1	4	焼締	
224	灯明皿	1	類	表採	12.0	4.7	2.8	3	12	焼締	
225	灯明皿	1	類	162SW	11.1	5.1	2.3	3	11	焼締	
226	灯明皿	1	類	432SD	11.0	5.2	2.7	2	5	焼締	
227	灯明皿	1	類	検出	9.9	4.2	2.8	6	12	焼締	
228	灯明皿	2	類	検出	10.3	4.5	2.6	10	12	焼締	
229	灯明皿	2	類	表土	9.8	4.3	2.4	1	8	焼締	
230	縁釉小皿			224NR	9.4	5.0	3.0	7	12	灰釉*	
231	縁釉小皿			224NR	9.8	5.4	2.8	6	12	灰釉*	
232	縁釉小皿			224NR	10.2	5.2	2.9	2	2	灰釉	
233	縁釉小皿			162SW	10.2	5.1	2.9	2	3	灰釉	
234	縁釉小皿			検出	9.5	-	*2.0	2	0	灰釉	
235	縁釉小皿			380SU	9.6	4.8	2.4	4	6	鉄釉	
236	縁釉小皿			224NR	9.8	4.6	2.5	2	6	鉄釉	
237	縁釉小皿			表土	10.5	5.1	2.6	3	9	鉄釉	
238	縁釉挟み皿	1	類	480NR	10.8	5.2	2.4	8	12	灰釉	
239	縁釉挟み皿	1	類	480NR	11.1	5.5	2.5	8	12	灰釉	
240	縁釉挟み皿	1	類	480NR	11.8	5.0	2.4	9	12	灰釉	ビン痕・底内輪ドチ
241	縁釉挟み皿	1	類	480NR	11.7	5.1	2.4	9	12	灰釉	底内輪ドチ
242	縁釉挟み皿	2	類	480NR	12.4	5.3	2.3	12	12	灰釉	ビン痕
243	縁釉挟み皿	2	類	007NR	13.1	5.7	2.4	5	12	灰釉	ビン痕
244	縁釉挟み皿	2	類	480NR	12.4	5.4	2.4	6	12	灰釉	ビン痕
245	縁釉挟み皿	2	類	480NR	12.5	6.4	2.5	9	12	灰釉	
246	縁釉挟み皿	3	類	480NR	12.0	6.0	2.9	11	12	灰釉	ビン痕
247	縁釉挟み皿	3	類	480NR	12.5	5.9	3.0	8	12	灰釉	
248	縁釉挟み皿	3	類	480NR	12.2	6.8	3.1	7	8	灰釉	
249	縁釉挟み皿	3	類	480NR	11.5	5.8	2.8	7	12	灰釉	

番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
250	緑釉挟み皿	3 類		480NR	11.8	5.3	2.8	9	12	灰釉	
251	緑釉挟み皿	3 類		480NR	12.4	6.2	2.7	10	12	灰釉	ビン痕
252	緑釉挟み皿	3 類		480NR	12.2	5.4	3.2	6	11	灰釉	ビン痕
253	緑釉挟み皿	3 類		480NR	11.9	5.6	2.7	8	12	灰釉	
254	緑釉挟み皿	3 類		480NR	11.9	5.7	3.0	10	12	灰釉	ビン痕
255	緑釉挟み皿	3 類		480NR	12.0	5.9	3.1	6	12	灰釉	
256	緑釉挟み皿	3 類		480NR	11.6	6.0	3.1	8	12	灰釉	
257	緑釉挟み皿	3 類		007NR	12.2	6.0	3.0	7	12	灰釉	
258	緑釉挟み皿	1 類		検出	11.9	5.8	2.1	6	9	灰釉	ビン痕
259	緑釉挟み皿	1 類		東斜面	11.8	5.4	2.1	4	12	灰釉	ビン痕
260	緑釉挟み皿	1 類		330SU	11.3	5.8	2.4	4	10	灰釉	
261	緑釉挟み皿	1 類		表土	11.6	5.4	2.7	5	8	灰釉*	
262	緑釉挟み皿	1 類		380SU	11.9	5.2	2.7	7	12	灰釉	ビン痕
263	緑釉挟み皿	1 類		東斜面	11.1	5.0	2.5	4	12	灰釉	ビン痕・底内輪ドチ
264	緑釉挟み皿	1 類		表土	11.5	6.0	2.4	1	10	灰釉	
265	緑釉挟み皿	2 類		330SU	13.1	5.9	2.3	3	7	灰釉	ビン痕
266	緑釉挟み皿	3 類		380SU	12.8	4.9	2.6	8	12	灰釉	外面スス
267	緑釉挟み皿	3 類		380SU	12.4	6.1	3.2	11	12	灰釉	ビン痕
268	緑釉挟み皿	1 類		005SX	11.1	5.7	2.5	11	11	灰釉	ビン痕
269	緑釉挟み皿	2 類		415SX	12.9	7.6	2.6	3	2	灰釉	底外重ね焼き痕
270	腰折皿	1 類		480NR	10.0	5.0	2.6	9	12	灰釉	底外トチン・底内輪ドチ
271	腰折皿	1 類		480NR	10.4	5.3	2.2	6	12	灰釉	底内輪ドチ
272	腰折皿	1 類		516SU	10.1	5.1	2.2	9	12	灰釉	底外トチン3個・底内輪ドチ
273	腰折皿	1 類		516SU	10.2	5.0	2.5	9	12	灰釉	底内輪ドチ
274	腰折皿	1 類		480NR	10.2	5.0	2.4	7	12	灰釉	体外輪ドチ大・底内輪ドチ
275	腰折皿	1 類		516SU	10.3	5.0	2.7	11	12	灰釉	体外輪ドチ大・底内輪ドチ
276	腰折皿	1 類		516SU	10.3	4.9	2.4	9	12	灰釉	体外輪ドチ大・底内輪ドチ
277	腰折皿	1 類		516SU	10.9	5.3	2.3	8	11	灰釉	体外輪ドチ大・底内輪ドチ
278	腰折皿	1 類		480NR	10.4	5.0	2.3	8	12	灰釉*	ビン痕・底内輪ドチ
279	腰折皿	1 類		480NR	10.1	5.0	2.3	7	12	灰釉	底外トチン3個・底内輪ドチ
280	腰折皿	1 類		480NR	10.3	4.9	2.2	11	12	灰釉	体外輪ドチ大・底内輪ドチ
281	腰折皿	1 類		506SX	10.5	5.6	2.6	4	12	灰釉	底内輪ドチ
282	腰折皿	1 類		506SX	10.8	5.2	2.0	4	12	灰釉	底内トチン3個
283	腰折皿	1 類		480NR	10.5	5.3	3.0	10	7	灰釉	底内外面トチン4個
284	腰折皿	1 類		516SU	10.4	5.4	2.3	8	12	灰釉	底内トチン3個
285	腰折皿	1 類		516SU	10.4	4.5	2.4	10	12	灰釉	底内トチン3個
286	腰折皿	1 類		516SU	10.7	5.0	2.2	10	12	灰釉	底外トチン3個・底内輪ドチ
287	腰折皿	1 類		480NR	10.8	5.0	2.4	8	12	灰釉	底内トチン3個
288	腰折皿	1 類		480NR	10.4	4.6	2.4	7	12	灰釉	底内輪ドチ
289	腰折皿	1 類		480NR	10.5	5.0	2.2	11	12	灰釉	底内輪ドチ
290	腰折皿	1 類		516SU	10.1	4.9	2.3	11	12	灰釉	底内トチン3個
291	腰折皿	1 類		516SU	10.5	5.2	2.2	10	12	灰釉	底内トチン3個
292	腰折皿	1 類		480NR	10.8	5.8	2.1	6	7	灰釉	底内輪ドチ・体外端反皿釉着
293	腰折皿	3 類		506SX	11.7	5.5	2.2	6	12	灰釉	ビン痕
294	腰折皿	2 類		516SU	11.9	5.8	2.7	11	12	灰釉	ビン痕
295	腰折皿	2 類		516SU	12.0	5.8	2.7	7	12	灰釉	ビン痕
296	腰折皿			480NR	11.0	4.7	2.2	9	12	鉄釉	底内輪ドチ？
297	腰折皿	2 類		東斜面	11.4	6.0	2.6	3	5	灰釉	
298	腰折皿	3 類		東斜面	11.2	5.5	1.8	6	10	灰釉	ビン痕・底内輪ドチ
299	腰折皿	2 類		432SD	11.8	5.7	2.4	2	12	灰釉	底内輪ドチ
300	腰折皿	4 類		表土	11.9	4.7	3.1	3	7	灰釉*	
301	端反皿	中型		480NR	10.9	5.9	2.4	8	8	灰釉	底外輪ドチ
302	端反皿	中型		480NR	11.6	6.8	2.7	9	12	灰釉*	
303	端反皿	中型		試掘	10.6	5.8	2.4	5	11	灰釉	底外輪ドチ
303	腰折皿			試掘	11.1	-	*2.8	2	0	灰釉	
304	端反皿	中型		480NR	11.5	6.2	2.8	8	12	灰釉*	
305	端反皿	中型		480NR	12.0	7.2	2.6	4	10	灰釉	底外輪ドチ
305	腰折皿			480NR	11.6	5.6	3.1	1	4	灰釉	ビン痕
306	端反皿	中型		480NR	11.2	6.8	2.8	10	12	灰釉	底外輪ドチ・内面窯ゴミ
307	端反皿	中型		480NR	12.5	6.3	2.7	1	7	灰釉	底外輪ドチ
307	挟み皿			480NR	14.5	-	-	5	12	無釉	底内輪ドチ・線刻
308	端反皿	中型		506SX	10.8	6.5	2.5	7	12	灰釉	底外輪ドチ
309	端反皿 (色見？)	中型		480NR	11.7	6.4	2.6	12	12	灰釉	
309	端反皿 (色見？)	中型		480NR	11.6	6.4	2.5	12	12	灰釉	
310	端反皿	中型		480NR	11.1	6.3	2.8	11	12	灰釉*	
311	端反皿	中型		480NR	11.5	6.1	2.6	10	12	灰釉	底外輪ドチ
312	端反皿	中型		試掘	10.9	6.8	2.4	2	8	灰釉	
313	端反皿	中型		480NR	10.8	6.4	2.9	3	12	灰釉	底外輪ドチ
314	端反皿	中型		480NR	11.0	6.8	2.8	6	12	灰釉*	
315	端反皿	中型		480NR	11.1	6.5	3.0	6	12	灰釉	底外輪ドチ
316	端反皿	中型		480NR	11.8	6.7	2.3	9	12	灰釉*	
317	端反皿	中型		480NR	11.3	6.5	3.0	12	12	灰釉*	
318	端反皿	中型		480NR	11.5	6.4	3.2	10	12	灰釉*	
319	端反皿	中型		480NR	11.1	6.1	2.7	8	12	灰釉*	
320	端反皿	中型		480NR	11.2	6.1	2.9	10	12	灰釉*	
321	端反皿	中型		480NR	10.7	6.4	2.6	6	12	灰釉*	
322	端反皿	中型		480NR	11.1	6.7	3.0	8	12	灰釉*	
323	端反皿	中型		480NR	11.7	6.9	3.0	9	12	灰釉*	
324	端反皿	中型		480NR	11.0	6.7	2.7	8	12	灰釉*	
325	端反皿	中型		480NR	11.7	6.9	2.7	6	11	灰釉	底外輪ドチ
326	端反皿	中型		480NR	11.4	6.0	2.8	7	12	灰釉	底外輪ドチ
327	端反皿	中型		480NR	11.2	6.6	2.7	10	12	灰釉	底外輪ドチ
328	端反皿	中型		480NR	11.0	6.6	2.6	7	12	灰釉	底外輪ドチ

上品野西金地遺跡

番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
329	端反皿	中型		480NR	11.3	6.2	2.7	5	11	灰釉*	
330	端反皿	中型		480NR	11.4	6.1	2.7	6	12	灰釉*	
331	端反皿	中型		007NR	11.5	6.5	2.9	7	12	灰釉*	底外輪ドチ
332	端反皿	中型		007NR	11.3	7.0	2.5	6	8	灰釉*	底外輪ドチ
333	端反皿	中型		試掘	11.3	6.0	2.4	11	12	灰釉	底外輪ドチ
334	端反皿	中型		試掘	10.7	6.2	2.7	1	12	灰釉	底外輪ドチ
335	端反皿	中型		試掘	10.2	5.9	2.6	11	12	灰釉	底外輪ドチ
336	端反皿	中型		480NR	10.7	5.2	2.6	1	12	灰釉*	
337	端反輪花皿	中型		検出	-	-	*2.3	2	0	灰釉	
338	端反皿？（露胎）	大型？		480NR	-	9.0	*3.0	0	2	灰釉・露胎	底内釉拭い
339	端反皿	小型		480NR	9.5	5.2	2.3	6	12	灰釉*	
340	端反皿	小型		480NR	9.5	5.2	2.3	11	12	灰釉*	
341	端反皿	小型		480NR	8.7	5.2	2.3	3	6	灰釉	底外輪ドチ
342	端反皿	小型		表土	9.0	5.2	2.0	12	12	灰釉	底外輪ドチ痕・内面窯ゴミ
343	端反皿	小型		480NR	8.7	5.2	2.0	12	12	灰釉	内面窯ゴミ
344	端反皿	小型		480NR	8.7	4.9	2.1	2	10	灰釉	底外輪ドチ
345	端反皿	小型		480NR	8.8	4.6	2.0	4	6	灰釉	底外陶器釉着
346	端反皿	小型		試掘	8.9	4.9	2.0	8	12	灰釉	
347	端反皿	小型		480NR	9.0	5.4	2.3	6	7	灰釉	
348	端反皿	小型		480NR	8.3	5.1	*2.4	6	6	灰釉	底外輪ドチ
349	端反皿	小型		480NR	8.7	5.0	2.2	8	10	灰釉*	
350	端反皿	小型		480NR	8.9	5.1	2.2	8	12	灰釉*	
351	端反皿	小型		480NR	8.5	5.1	2.3	2	6	灰釉	底外輪ドチ
352	端反皿	小型		480NR	9.0	5.3	2.4	7	12	灰釉	底外輪ドチ
353	端反皿	小型		480NR	8.1	5.1	2.1	11	12	灰釉*	
354	端反皿	小型		480NR	8.5	4.7	2.2	6	11	灰釉*	
355	端反皿	小型		480NR	8.9	4.8	2.3	7	12	灰釉	底外輪ドチ
356	端反皿	小型		480NR	8.8	4.8	2.3	2	8	灰釉*	
357	端反皿	小型		480NR	9.2	5.2	2.2	4	6	灰釉	
358	端反皿	小型		検出	-	4.8	*1.0	0	9	灰釉	
359	端反皿	小型		480NR	-	5.0	*1.4	0	10	灰釉*	
360	端反皿（印花文）	中型		480NR	-	6.4	*1.6	0	11	灰釉*	
361	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.4	6.6	2.7	9	11	灰釉	
362	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.4	5.9	2.8	5	11	灰釉*	
363	端反皿（印花文）	中型		480NR	10.4	6.0	2.8	1	7	灰釉	底外輪ドチ
364	端反皿（印花文）	中型		480NR	10.5	6.2	2.6	5	12	灰釉	底外輪ドチ・内面重ね焼き痕
365	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.3	6.2	2.8	1	12	灰釉*	
366	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.3	5.6	3.0	4	7	灰釉*	
367	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.7	6.2	2.8	3	11	灰釉*	
368	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.9	5.9	*2.8	7	12	灰釉	底外輪ドチ
369	端反皿（印花文）	中型		480NR	-	6.2	*1.4	0	11	灰釉*	
370	端反皿（印花文）	中型		480NR	-	6.2	*1.3	0	11	灰釉*	
371	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.4	6.2	2.9	3	12	灰釉*	
372	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.8	6.3	2.9	4	11	灰釉*	
373	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.2	5.3	2.8	3	12	灰釉*	
374	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.2	6.2	2.6	4	11	灰釉*	
375	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.6	6.4	2.9	5	8	灰釉*	
376	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.1	6.2	2.8	7	11	灰釉*	
377	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.3	5.7	2.7	6	11	灰釉*	
378	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.8	6.2	2.8	3	9	灰釉*	
379	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.5	6.2	2.6	4	11	灰釉*	
380	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.6	6.0	2.7	3	12	灰釉*	
381	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.4	6.7	2.8	4	12	灰釉*	
382	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.7	6.0	3.1	3	12	灰釉*	
383	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.3	6.4	2.8	9	11	灰釉	底外輪ドチ・内面窯ゴミ
384	端反皿（印花文）	中型		007NR	10.5	5.4	2.9	8	12	灰釉	底外輪ドチ・内面重ね焼き痕
385	端反皿（印花文）	中型		007NR	11.6	6.4	2.9	3	11	灰釉	底外輪ドチ
386	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.4	6.2	2.8	8	12	灰釉*	
387	端反皿（印花文）	中型		480NR	-	6.0	*1.3	0	7	灰釉	底外輪ドチ
388	端反皿（印花文）	中型		480NR	-	5.9	*1.6	0	11	灰釉	底外輪ドチ
389	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.3	5.9	3.1	10	12	灰釉*	
390	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.3	6.6	2.7	6	11	灰釉*	
391	端反皿（印花文）	中型		007NR	-	6.0	*1.3	0	4	灰釉	底外線刻
392	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.4	6.4	2.8	1	11	灰釉*	
393	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.2	6.1	2.8	11	11	灰釉*	
394	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.0	6.2	2.9	4	12	灰釉*	
395	端反皿（印花文）	中型		480NR	-	6.0	*1.2	0	11	灰釉*	
396	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.4	6.3	3.0	2	12	灰釉*	
397	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.3	6.4	2.9	2	12	灰釉*	
398	端反皿（印花文）	中型		480NR	10.4	5.8	2.6	2	8	灰釉	底外輪ドチ
399	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.0	6.6	2.6	4	7	灰釉	
400	端反皿（印花文）	中型		検出	11.2	6.4	2.8	4	6	灰釉*	
401	端反輪花皿（印花文）	中型		516SU	11.1	5.8	2.4	5	11	灰釉*	
402	端反皿（印花文）	中型		試掘	-	5.9	*1.2	0	11	灰釉*	
403	端反皿（印花文）	中型		480NR	-	6.2	*1.7	0	12	灰釉*	
404	端反皿（印花文）	中型		480NR	-	5.8	*1.0	0	8	灰釉	
405	端反皿（印花文）	中型		480NR	-	5.3	*1.4	0	7	灰釉	底外輪ドチ
406	端反皿（印花文）	小型		007NR	9.1	5.6	2.3	10	11	灰釉	底外輪ドチ・内面窯ゴミ
407	端反皿（印花文）	小型		480NR	8.4	4.4	2.1	3	9	灰釉	底外輪ドチ
408	端反皿（印花文）	中型		480NR	11.3	6.3	2.2	3	12	灰釉*	
409	端反皿（印花文）	中型		516SU	10.8	6.0	2.6	5	12	灰釉*	底外輪ドチ
410	端反皿（印花文）	中型		480NR	-	-	*0.8	0	0	灰釉*	
411	端反皿（印花文）	中型		480NR	-	5.3	*1.0	0	9	灰釉	底外輪ドチ

遺物一覧表

番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
412	端反皿 (印花文)	中型		480NR	10.5	6.1	2.4	10	12	灰釉	
413	端反皿 (印花文)	中型		480NR	10.9	6.2	2.6	2	7	灰釉*	
414	端反皿 (印花文)	中型		480NR	11.0	6.6	2.5	5	6	灰釉*	
415	端反皿 (印花文)	中型		480NR	-	-	*0.8	0	0	灰釉*	
416	端反皿 (印花文)	中型		表土	11.7	6.5	2.8	2	4	灰釉*	
417	端反皿 (印花文)	中型		007NR	-	6.0	*2.2	0	4	灰釉*	
418	端反皿 (印花文)	中型		480NR	-	-	*0.8	0	0	灰釉*	
419	端反皿 (印花文)	中型		480NR	-	5.7	*2.4	0	4	灰釉*	
420	端反皿	中型		330SU	11.9	6.4	2.9	5	11	灰釉	底外輪ドチ
421	端反皿	中型		東斜面	11.4	6.2	2.8	8	10	灰釉	底外輪ドチ
422	端反皿	中型		検出	10.8	5.9	2.6	9	12	灰釉	底外輪ドチ・内面に重ね焼き痕
423	端反皿	中型		東斜面	11.9	6.4	3.2	1	11	灰釉	
424	端反皿	中型		東斜面	11.3	6.4	2.4	3	12	灰釉*	
425	端反皿	中型		東斜面	10.9	6.2	2.8	8	12	灰釉	底外輪ドチ
426	端反皿	中型		330SU	10.9	6.4	2.5	7	11	灰釉	底外輪ドチ
427	端反皿	中型		東斜面	11.2	6.9	2.6	1	12	灰釉	底外輪ドチ
428	端反皿	中型		東斜面	11.4	6.6	2.7	5	7	灰釉	底外輪ドチ
429	端反皿	中型		東斜面	11.0	6.4	2.5	10	12	灰釉	底外輪ドチ
430	端反皿	中型		380SU	11.2	6.6	2.9	3	12	灰釉	体外挟み皿釉着
431	端反皿	中型		東斜面	11.5	6.2	2.5	1	6	灰釉*	
432	端反皿	中型		330SU	11.2	6.3	2.6	5	7	灰釉	底外輪ドチ
433	端反皿	中型		東斜面	-	8.0	*2.2	0	2	灰釉	体外挟み皿釉着
433	挟み皿			東斜面	10.8	-	*2.3	2	0	無釉	
434	端反皿 (露胎)	中型		東斜面	10.2	5.9	2.7	3	3	灰釉・露胎	
435	端反皿	小型		東斜面	8.5	5.7	2.3	10	12	灰釉	内面窯ゴミ
436	端反皿	小型		380SU	8.7	5.6	2.3	1	5	灰釉*	
437	端反皿	小型		380SU	7.8	4.8	2.1	6	6	灰釉*	
438	端反皿	小型		東斜面	8.5	5.1	2.4	3	6	灰釉	
438	縁釉小皿			東斜面	8.2	-	2.1	1	0	灰釉	
439	端反皿	小型		表土	7.9	5.2	2.5	12	12	灰釉	底外輪ドチ
440	端反皿	小型		東斜面	8.5	-	*2.2	4	0	灰釉*	
441	端反皿	小型		東斜面	-	5.2	*0.9	0	6	灰釉*	
442	端反皿 (印花文)	小型		380SU	8.8	5.4	2.1	9	12	灰釉*	底外輪ドチ
443	端反皿 (印花文)	中型		東斜面	11.7	6.2	2.7	1	7	灰釉	底外輪ドチ
444	端反皿 (印花文)	中型		東斜面	-	6.4	*1.9	0	12	灰釉	底外輪ドチ
445	端反皿 (印花文)	中型		東斜面	-	6.6	*1.2	0	3	灰釉	底外輪ドチ
446	端反皿 (印花文)	中型		330SU	11.4	6.9	2.8	4	4	灰釉	底外輪ドチ
447	端反皿 (印花文)	中型		表土	11.6	6.4	2.6	4	11	灰釉	底外輪ドチ
448	端反皿 (印花文)	中型		330SU	11.3	6.3	2.8	10	12	灰釉	底外輪ドチ
449	端反皿 (印花文)	中型		東斜面	10.6	6.0	2.5	10	12	灰釉	底外輪ドチ・内面窯ゴミ
450	端反皿 (印花文)	中型		380SU	-	6.2	*1.1	0	8	灰釉	底外輪ドチ
451	端反皿	中型		465SD	11.3	5.8	2.8	4	11	灰釉*	
452	端反皿	中型		検出	11.8	6.3	2.6	5	12	灰釉	底外輪ドチ
453	端反皿	中型		211SK	11.6	6.2	2.9	3	5	灰釉*	
454	端反皿	中型		表採	11.2	6.4	2.3	5	12	灰釉	底外輪ドチ
455	端反皿	中型		415SX	10.9	6.6	2.8	11	12	灰釉*	
456	端反皿	中型		検出	11.0	6.2	2.8	2	8	灰釉*	
457	端反皿	中型		432SD	10.5	5.8	2.5	5	12	灰釉	底外輪ドチ
458	端反皿	中型		162SW	10.9	6.6	3.0	7	12	灰釉*	
459	端反皿	中型		162SW	11.0	6.3	2.5	7	8	灰釉	
459	縁釉挟み皿			162SW	-	-	*1.6	0	0	灰釉	
460	端反皿	小型		012NR	8.2	4.9	2.2	8	12	灰釉*	
461	端反皿 (丸皿?)	大型		485SD	-	8.8	*2.2	0	4	灰釉	内面窯ゴミ
462	端反皿 (印花文)	中型		020SD	10.9	6.3	2.9	2	11	灰釉*	
463	端反皿 (印花文)	中型		検出	-	6.1	*1.0	0	10	灰釉*	底外輪ドチ
464	端反皿 (印花文)	中型		検出	10.9	6.1	2.8	11	11	灰釉*	
465	端反皿 (印花文)	中型		465SD	-	6.4	*2.3	0	11	灰釉	底外輪ドチ
466	端反皿 (印花文)	小型		表土	-	5.0	*1.1	0	5	灰釉	
467	丸皿 (印花文)	A類小型		480NR	8.6	4.7	2.4	5	6	灰釉	底外輪ドチ
468	丸皿 (印花文)	A類小型		007NR	9.6	5.6	2.3	3	9	灰釉	底外輪ドチ
469	丸皿 (印花文)	A類小型		480NR	8.6	5.0	2.5	9	12	灰釉	底外輪ドチ
470	丸皿 (ソギ)	A類中型		007NR	10.9	5.7	2.3	6	8	灰釉	底外輪ドチ
470	丸皿 (ソギ)	A類中型		007NR	-	-	*1.0	0	0	灰釉	
470	挟み皿			007NR	12.8	-	2.9	3	8	無釉	
471	丸皿	A類中型		480NR	11.6	7.4	2.5	2	4	灰釉	底外輪ドチ
472	丸皿	A類中型		516SU	12.0	-	*2.5	7	0	灰釉	
473	丸皿 (豆皿)			480NR	7.2	4.3	1.3	3	6	灰釉	
474	丸皿	B類小型		007NR	9.2	5.2	1.8	5	6	灰釉	
475	丸皿	B類中型		東斜面	-	6.2	*1.4	0	7	灰釉	底外輪ドチ
476	丸皿	B類中型		東斜面	-	6.0	*1.2	0	10	灰釉	底外輪ドチ
477	丸皿 (豆皿)			480NR	5.4	3.2	1.5	2	5	灰釉	
478	丸皿	A類小型		480NR	8.2	4.8	2.2	7	12	鉄釉	底外輪ドチ
479	丸皿	A類小型		480NR	8.0	4.8	2.1	6	12	鉄釉	底外輪ドチ
480	丸皿	A類小型		480NR	8.0	5.2	2.0	10	12	鉄釉	
481	丸皿	A類小型		480NR	9.7	5.0	2.3	7	11	鉄釉	底外輪ドチ
482	丸皿 (印花文)	A類小型		480NR	9.0	5.0	2.0	8	12	鉄釉	底外輪ドチ
483	丸皿 (印花文)	A類小型		480NR	8.7	5.2	2.1	6	12	鉄釉	底外輪ドチ
484	丸皿	A類中型		480NR	11.6	6.1	2.5	11	12	鉄釉	底外輪ドチ・体外挟み皿釉着
485	丸皿	A類中型		480NR	12.1	5.9	2.3	10	12	鉄釉	底外輪ドチ・底内トチン3個
486	丸皿	A類中型		480NR	12.1	5.9	2.5	3	12	鉄釉	底外輪ドチ・底内トチン3個
487	丸皿 (印花文)	A類中型		480NR	-	5.5	*0.8	0	6	鉄釉	底外輪ドチ
488	丸皿	A類中型		007NR	11.6	6.2	2.8	3	7	鉄釉	
489	丸皿	A類中型		480NR	10.8	6.4	2.6	3	4	鉄釉	

上品野西金地遺跡

番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
490	丸皿	A類中型	表土	-	-	6.7	*2.0	0	12	鉄釉	底外輪ドチ
491	丸皿	A類中型	480NR	-	-	6.4	*1.8	0	9	鉄釉	底外輪ドチ
492	丸皿	A類大型	480NR	13.5	6.6	4.4	6	7	鉄釉	底外輪ドチ	
493	丸皿	A類大型	480NR	13.4	6.9	4.5	5	12	鉄釉	底外輪ドチ	
494	丸皿（露胎）	A類他	480NR	11.8	6.4	4.5	4	8	鉄釉・露胎		
495	丸皿（露胎）	A類他	480NR	12.2	-	*3.4	6	0	鉄釉・錆釉		
496	丸皿	B類中型	506SX	11.4	7.0	2.3	5	2	鉄釉		
497	丸皿	B類小型	480NR	-	5.4	*0.8	0	4	鉄釉	底外輪ドチ	
498	丸皿	A類小型	東斜面	8.4	5.6	2.3	0	3	鉄釉		
499	丸皿	A類小型	東斜面	-	4.6	*1.2	0	10	鉄釉	底外輪ドチ	
500	丸皿	A類中型	東斜面	10.8	5.7	2.7	5	12	鉄釉	底外輪ドチ	
501	丸皿	A類中型	380SU	11.8	6.6	2.7	2	6	鉄釉	底外輪ドチ	
502	丸皿（印花文）	A類中型	表土	11.4	5.9	2.3	2	9	鉄釉		
503	丸皿	A類中型	検出	11.0	5.6	2.6	2	8	鉄釉	底外輪ドチ	
504	丸皿	A類中型	東斜面	11.4	6.0	3.0	2	5	鉄釉	底外輪ドチ	
505	丸皿	B類小型	東斜面	9.7	5.3	2.3	3	8	鉄釉	底外輪ドチ	
506	丸皿	B類中型	表土	11.0	6.4	2.6	3	3	鉄釉		
507	丸皿	B類中型	東斜面	-	4.8	*1.3	0	12	鉄釉		
508	丸皿	B類中型	東斜面	-	5.6	*1.2	0	5	鉄釉	底外輪ドチ	
509	丸皿	A類小型	検出	8.9	5.0	2.2	4	12	鉄釉	底外輪ドチ・内面窯ゴミ	
510	丸皿（露胎）	A類他	415SX	-	6.8	*1.9	0	3	鉄釉・露胎		
511	丸皿	B類中型	表土	11.3	5.3	2.1	11	12	鉄釉		
512	丸皿	B類中型	459SD	11.0	6.2	2.3	3	4	鉄釉	底外輪ドチ	
513	丸皿	B類中型	表土	-	5.2	*1.3	0	12	鉄釉		
514	丸皿	B類中型	224NR	-	5.8	*1.4	0	3	鉄釉	底外輪ドチ	
515	稜皿		検出	10.4	5.9	2.1	6	7	鉄釉		
516	稜皿		480NR	9.8	5.4	2.3	4	3	鉄釉	底内外トチン	
517	稜皿		480NR	9.6	5.8	2.3	4	4	鉄釉	底内トチン	
518	稜皿		480NR	10.6	6.0	2.8	8	8	鉄釉	底内トチン・底外輪ドチ	
519	稜皿		413SW	9.9	5.2	2.0	5	11	鉄釉	底内外トチン3個	
520	稜皿		東斜面	10.6	5.8	2.5	6	6	鉄釉		
521	稜皿（露胎）		試掘	10.2	5.6	2.0	7	4	鉄釉・露胎		
522	稜皿（露胎）		007NR	10.4	-	*2.0	3	0	鉄釉・露胎		
523	端反皿か稜皿		480NR	11.4	5.4	2.5	0	4	鉄釉		
524	端反皿か稜皿		480NR	11.2	-	*1.6	4	0	鉄釉		
525	端反皿か稜皿		480NR	11.0	-	*2.1	2	0	鉄釉		
526	端反皿か稜皿		480NR	11.8	5.2	2.2	4	7	鉄釉*		
527	端反皿か稜皿		480NR	12.0	5.0	2.5	6	2	鉄釉*		
528	端反皿か稜皿		480NR	-	5.2	*1.0	0	5	鉄釉		
529	端反皿か稜皿		480NR	14.2	-	*2.4	2	0	鉄釉		
530	端反皿か稜皿		検出	11.0	5.9	3.1	5	12	鉄釉	底外輪ドチ	
531	端反皿か稜皿		表土	11.0	5.5	3.1	2	2	鉄釉		
532	丸皿		480NR	11.0	6.4	2.5	3	4	鉄釉・灰釉？	底外輪ドチ	
533	丸皿		480NR	-	5.9	*1.1	0	10	鉄釉・灰釉？		
534	丸皿		検出	10.8	6.2	2.3	3	8	鉄釉・灰釉？		
535	丸皿（露胎）		432SD	10.5	5.6	2.7	11	12	鉄釉	底内トチン1個	
536	丸皿（露胎）		480NR	-	5.4	*1.0	0	12	鉄釉	底内トチン3個	
537	丸皿（無高台）		480NR	-	3.6	*0.9	0	12	鉄釉・露胎		
538	稜花皿（反り皿）		検出	10.2	7.4	2.2	2	4	灰釉	底外輪ドチ	
539	稜花皿（反り皿）		検出	-	6.7	*2.3	0	3	灰釉	底外輪ドチ	
540	稜花皿		480NR	11.6	6.0	2.7	2	3	鉄釉・灰釉・錆釉？	底外輪ドチ	
541	稜花皿		480NR	11.2	6.4	2.9	1	4	鉄釉・灰釉・錆釉？	底外輪ドチ	
542	稜花皿		480NR	-	5.8	*1.3	0	4	鉄釉・灰釉・露胎		
543	擂鉢	I A 1 類	480NR	27.9	9.0	11.6	12	12	錆釉	内外面団子トチ	
544	擂鉢	I A 2 類	480NR	28.6	9.5	10.6	9	9	錆釉		
545	擂鉢	I A 2 類	480NR	28.1	8.8	11.8	3	12	錆釉		
546	擂鉢	I A 1 類	007NR	24.7	9.0	9.7	3	5	錆釉		
547	擂鉢	I A 1 類	506SX	27.3	8.3	10.1	5	11	錆釉		
548	擂鉢	I A 1 類	506SX	28.6	9.5	10.5	3	12	錆釉	内外面団子トチ	
549	擂鉢	I A 1 類	506SX	27.9	8.4	9.3	10	12	錆釉	内外面団子トチ	
550	擂鉢	I A 1 類	007NR	28.6	-	8.8	2	0	錆釉		
551	擂鉢	I A 1 類	480NR	26.4	8.7	10.9	7	12	錆釉	内外面団子トチ	
552	擂鉢	I A 1 類	007NR	28.5	9.3	11.0	4	6	錆釉		
553	擂鉢	I A 1 類	480NR	28.4	9.2	12.1	7	12	錆釉		
554	擂鉢	I A 2 類	480NR	29.1	9.7	10.6	2	9	錆釉		
555	擂鉢	I A 2 類	表土	26.6	9.5	10.9	2	12	錆釉		
556	擂鉢	I A 2 類	480NR	30.5	9.3	10.1	4	12	錆釉		
557	擂鉢	I A 2 類	007NR	26.8	9.0	10.5	4	10	錆釉		
558	擂鉢	I A 2 類	480NR	28.3	8.9	11.7	11	12	錆釉	内外面団子トチ	
559	擂鉢	I A 2 類	480NR	30.8	9.0	12.2	3	12	錆釉		
560	擂鉢	I A 2 類	480NR	28.0	8.6	11.2	4	12	錆釉		
561	擂鉢	I A 2 類	480NR	28.2	9.0	11.4	2	12	錆釉		
562	擂鉢	I A 2 類	480NR	30.0	9.5	11.0	8	12	錆釉		
563	擂鉢	I A 2 類	480NR	31.5	9.9	12.0	4	12	錆釉		
564	擂鉢	I A 2 類	480NR	30.1	9.4	12.2	5	12	錆釉		
565	擂鉢	I A 2 類	480NR	29.2	9.1	12.3	5	12	錆釉		
566	擂鉢	I A 3 類	480NR	30.3	9.3	11.9	12	12	錆釉		
567	擂鉢	I A 3 類	480NR	29.8	9.0	11.1	4	12	錆釉		
568	擂鉢	I A 3 類	試掘	26.6	9.0	11.0	3	11	錆釉		
569	擂鉢	I A 3 類	480NR	30.0	9.4	12.2	7	12	錆釉		
570	擂鉢	I A 3 類	480NR	29.0	9.4	12.0	8	12	錆釉		
571	擂鉢	I A 3 類	480NR	28.2	9.4	12.5	3	12	錆釉	内外面団子トチ	
572	擂鉢	I A 3 類	480NR	29.9	9.4	11.4	9	9	錆釉		

遺物一覧表

番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
573	擂鉢	I A 3 類		480NR	29.4	8.8	11.4	5	12	錆釉	
574	擂鉢	I A 4 類		480NR	27.3	8.5	11.6	3	12	錆釉	
575	擂鉢	I A 4 類		007NR	28.9	10.2	11.7	2	12	錆釉	
576	擂鉢	I A 5 類		480NR	29.1	9.1	11.8	6	12	錆釉	
577	擂鉢	I B 1 類		480NR	29.3	9.0	10.1	5	9	錆釉	
578	擂鉢	I B 2 類		480NR	25.2	8.3	10.6	6	12	錆釉	
579	擂鉢	I B 2 類		506SX	26.0	9.5	11.3	4	12	錆釉	内面使用痕
580	擂鉢	I B 3 類		007NR	24.6	8.6	10.4	9	7	錆釉	
581	擂鉢	II 1 類		480NR	36.1	11.3	16.3	5	12	錆釉	
582	擂鉢	II 2 類		480NR	38.5	-	*14.1	3	0	錆釉	内外面団子トチ
583	擂鉢	II 2 類		480NR	36.1	9.2	15.2	2	12	錆釉	内面使用痕
584	擂鉢	II 2 類		480NR	41.8	11.5	15.4	4	12	錆釉	
585	擂鉢	II 3 類		480NR	40.6	11.6	16.4	4	12	錆釉	
586	擂鉢	I A 1 類		東斜面	27.4	9.0	8.8	2	11	錆釉	
587	擂鉢	I A 1 類		東斜面	30.3	8.7	12.0	3	6	錆釉	
588	擂鉢	I A 2 類		東斜面	27.2	9.2	11.7	3	11	錆釉	内外面団子トチ
589	擂鉢	I A 2 類		380SU	27.7	8.7	11.0	9	12	錆釉	内外面団子トチ
590	擂鉢	I A 2 類		380SU	30.2	8.9	11.0	4	9	錆釉	
591	擂鉢	I A 2 類		東斜面	31.5	9.4	11.6	1	8	錆釉	
592	擂鉢	I A 2 類		東斜面	29.8	9.4	12.2	2	12	錆釉	
593	擂鉢	I A 2 類		東斜面	27.5	8.5	10.4	3	8	錆釉	
594	擂鉢	I A 2 類		東斜面	28.3	9.0	11.3	2	12	錆釉	
595	擂鉢	I A 3 類		東斜面	28.4	9.2	11.7	5	12	錆釉	
596	擂鉢	I A 3 類		380SU	30.0	9.4	12.4	2	11	錆釉	
597	擂鉢	I A 4 類		380SU	28.1	10.2	11.4	6	7	錆釉	
598	擂鉢	I B 3 類		380SU	26.4	9.0	12.4	2	6	錆釉	
599	擂鉢	II 3 類		380SU	35.8	10.2	14.7	4	6	錆釉	
600	擂鉢	I A 1 類		432SD	21.2	7.8	10.0	8	10	錆釉	内外面団子トチ
601	擂鉢	II 2 類		001NR	38.5	-	*11.2	2	0	錆釉	
602	擂鉢	II 類		007NR	-	10.8	*11.5	0	12	錆釉	内外面団子トチ
603	鉢A	大型 2 類		480NR	35.6	14.4	11.7	9	11	鉄釉・露胎	内面団子トチ
604	鉢A	大型 2 類		480NR	37.7	11.6	12.4	11	11	鉄釉・灰釉?・露胎	甕との重ね焼き痕
605	鉢A	大型		480NR	37.2	-	*8.0	4	0	鉄釉・灰釉?	
606	鉢A	大型		480NR	32.8	-	*10.3	6	0	鉄釉・灰釉?	
607	鉢A	大型 3 類		480NR	35.9	11.6	13.0	12	12	鉄釉・灰釉?・錆釉	甕との重ね焼き痕
608	鉢A	大型 4 類		480NR	41.3	14.0	12.2	7	12	鉄釉・灰釉?	底外釉拭い
609	鉢A	中型 1 類		480NR	28.1	10.3	10.0	11	10	鉄釉・露胎	
610	鉢A	中型 2 類		480NR	-	11.0	*5.5	0	12	鉄釉・灰釉?・露胎	
611	鉢A	小型 2 類		480NR	23.0	9.2	11.0	8	3	鉄釉・灰釉?・露胎	
612	鉢A	小型		東斜面	24.0	-	*7.6	8	0	鉄釉・灰釉?	
613	鉢A	中型 2 類		380SU	31.8	11.2	11.2	7	7	鉄釉・灰釉?・露胎	
614	鉢A	大型 2 類		東斜面	-	11.8	*2.6	0	12	鉄釉・灰釉?・露胎	
615	鉢A	小型 2 類		380SU	23.5	9.6	10.7	6	6	鉄釉・灰釉?・露胎	
616	鉢A	中型		380SU	30.8	-	*8.1	4	0	鉄釉・灰釉?	
617	鉢A	中型 2 類		東斜面	27.6	8.4	10.2	10	10	鉄釉・灰釉?・露胎	
618	鉢A	大型		検出	37.1	-	*5.2	12	0	錆釉	
619	鉢A	大型 1 類		検出	-	18.4	*7.5	0	4	鉄釉・灰釉?・露胎	
620	鉢A	大型 2 類		表採	-	13.3	*5.3	0	12	鉄釉・灰釉?・露胎	
621	鉢B	2 類		480NR	25.6	11.8	12.4	2	7	鉄釉・灰釉?・露胎	
622	鉢B	4 類		480NR	23.3	13.2	7.9	7	6	鉄釉・灰釉?	
623	鉢B	3 類		検出	22.3	12.1	6.3	4	6	鉄釉・錆釉	
624	鉢B	2 類		東斜面	-	15.8	*5.1	0	8	鉄釉・灰釉?・露胎	
625	鉢B	2 類		020SD	-	11.5	*4.2	0	7	鉄釉・灰釉?・露胎	
626	鉢B			表採	33.2	-	*8.1	1	0	錆釉	
627	鉢B			380SU	19.2	9.6	9.0	5	6	錆釉	
628	鉢C (手水鉢)			480NR	36.2	14.4	18.4	9	7	鉄釉・灰釉?・露胎	
629	鉢C (手水鉢)			480NR	30.6	17.4	19.8	4	2	鉄釉・灰釉?・露胎	
630	鉢C (手水鉢)			480NR	37.0	15.4	18.9	5	1	鉄釉・灰釉?・露胎	
631	鉢C (手水鉢)			480NR	28.8	-	*17.0	2	0	鉄釉・灰釉?・露胎	
632	鉢C (手水鉢)			007NR	31.7	-	*8.0	2	0	鉄釉・灰釉?	
633	鉢C (手水鉢)			007NR	29.3	-	*5.0	2	0	鉄釉・灰釉?	
634	鉢C (手水鉢)			007NR	-	-	*7.2	0	0	鉄釉・灰釉?	
635	鉢C (手水鉢)			480NR	-	-	-	0	0	鉄釉・灰釉?	
636	鉢C (手水鉢)			480NR	-	14.5	*16.0	0	12	鉄釉・灰釉?・錆釉	
637	鉢C (手水鉢)			東斜面	33.2	14.1	20.8	8	11	鉄釉・灰釉?・露胎	
638	鉢C (手水鉢)			380SU	34.8	-	*14.5	10	0	鉄釉・灰釉?	
639	鉢C (手水鉢)			東斜面	-	9.9	*6.9	0	8	鉄釉・灰釉?・露胎	
640	鉢C (手水鉢)			380SU	32.4	-	*11.7	1	0	鉄釉・灰釉?	
641	鉢C (手水鉢)			380SU	-	-	*4.7	0	0	鉄釉・灰釉?	
642	鉢C (手水鉢)			380SU	-	-	*6.0	0	0	鉄釉・灰釉?	
643	鉢C (手水鉢)			検出	30.0	-	*9.5	2	0	鉄釉・灰釉?	
644	浅鉢 (菓子器)			480NR	19.4	12.2	6.2	11	12	錆釉	
645	浅鉢 (菓子器)			480NR	18.6	10.2	5.9	5	7	錆釉	
646	浅鉢 (菓子器)			480NR	20.3	11.5	7.3	9	10	錆釉	
647	浅鉢 (菓子器)			480NR	19.8	12.0	6.3	6	5	錆釉	
648	浅鉢 (菓子器)			東斜面	20.2	11.2	6.1	1	3	錆釉	
649	浅鉢 (菓子器)			東斜面	19.0	10.4	6.7	5	7	錆釉	
650	浅鉢 (菓子器)			380SU	20.8	-	*5.2	2	0	錆釉	
651	浅鉢 (菓子器)			380SU	18.8	12.0	6.1	2	3	錆釉	
652	浅鉢 (菓子器)			東斜面	20.6	11.2	7.0	3	11	錆釉	
653	浅鉢 (菓子器)			検出	18.7	11.1	6.9	6	4	錆釉	
654	浅鉢 (菓子器)			表土	19.0	11.2	6.0	3	3	錆釉	
655	浅鉢 (菓子器)			表土	19.5	-	*5.4	5	0	錆釉	

上品野西金地遺跡

番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
656	小鉢			480NR	10.6	6.5	5.0	7	11	錆釉・鉄釉	
657	小鉢			480NR	11.4	6.8	4.6	5	1	鉄釉・錆釉	
658	小鉢			検出	13.0	-	*3.0	2	0	鉄釉・錆釉	
659	小鉢			480NR	12.6	-	*4.0	2	0	錆釉	
660	桶A			380SU	22.7	18.0	22.2	6	12	鉄釉・灰釉？・錆釉	
661	桶A			480NR	19.2	-	*9.5	2	0	鉄釉・灰釉？	
662	桶A			400SD	20.8	-	*2.2	1	0	鉄釉・灰釉？	
663	桶A			005SX	-	-	*3.0	0	0	鉄釉・灰釉？	
664	桶A（筒形容器）			380SU	-	17.9	*4.7	0	11	鉄釉・灰釉？・露胎	
665	桶（把手）？			465SD	-	-	-	0	0	錆釉	
666	桶B			330SU	27.9	16.9	*20.7	4	4	鉄釉・灰釉？・露胎	
667	片口	A類		480NR	20.7	11.8	11.6	11	11	鉄釉・灰釉・錆釉	口端釉拭い・重ね焼き痕
668	片口	B類		480NR	17.6	-	*7.6	7	0	鉄釉・灰釉？	
669	片口			480NR	-	11.8	*4.1	0	4	鉄釉・灰釉？	
670	鉢（片口）？			480NR	-	9.4	*15.5	0	11	鉄釉・錆釉	底外輪ドチ
671	筒形容器（建水）？			007NR	15.4	15.0	17.1	5	5	焼締	
672	筒形容器（建水）？			表土	-	15.0	*2.5	0	2	焼締	
673	内耳鍋			480NR	26.0	9.8	13.2	12	8	錆釉	外面スス
674	内耳鍋			480NR	25.7	10.2	12.6	7	4	錆釉	
675	内耳鍋			480NR	25.6	9.8	12.3	7	8	錆釉	外面スス
676	内耳鍋			480NR	24.8	9.8	12.8	9	7	錆釉	
677	内耳鍋			480NR	25.6	9.4	11.4	8	6	錆釉	
678	内耳鍋			480NR	22.4	9.4	12.8	4	9	錆釉	
679	内耳鍋			480NR	19.8	9.0	11.8	5	6	錆釉	
680	内耳鍋			480NR	20.8	10.1	11.0	3	12	錆釉	
681	内耳鍋			480NR	21.1	9.2	10.7	4	9	錆釉	
682	内耳鍋			506SX	22.6	9.8	11.0	10	12	錆釉	
683	内耳鍋			506SX	18.5	9.1	10.3	11	10	錆釉	
684	内耳鍋			380SU	23.4	12.0	13.9	3	4	錆釉	
685	内耳鍋			380SU	22.4	10.8	12.5	5	12	錆釉	
686	内耳鍋			380SU	23.4	-	*12.1	5	0	錆釉	
687	内耳鍋			330SU	24.0	-	*10.9	2	0	錆釉	
688	内耳鍋			380SU	19.2	10.0	11.3	7	8	錆釉	
689	鍋			試掘	24.7	-	*9.8	3	0	錆釉	外面スス
690	鍋			480NR	32.2	-	*3.2	2	0	錆釉	
691	釜			480NR	14.6	13.0	19.0	12	12	錆釉	外面スス
692	釜			480NR	14.2	11.0	19.5	8	12	錆釉	外面スス
693	釜			480NR	15.4	12.5	18.4	9	12	錆釉	
694	釜			480NR	14.2	11.4	18.1	12	12	錆釉	外面スス
695	釜			480NR	13.4	12.8	17.7	9	12	錆釉	外面スス
696	釜			480NR	14.3	12.0	18.4	11	12	錆釉	
697	釜			480NR	14.1	11.7	17.0	8	9	錆釉	
698	釜			480NR	15.0	12.5	14.6	10	12	錆釉	
699	釜			480NR	14.1	-	*16.2	12	0	錆釉	外面スス
700	釜			007NR	14.9	-	*14.6	11	0	錆釉	
701	釜			380SU	13.6	11.4	20.2	8	8	錆釉	
702	釜			330SU	15.0	11.6	18.5	10	10	錆釉	
703	釜			482SX	13.5	11.0	*17.6	11	2	錆釉	
704	釜			330SU	15.8	11.2	18.0	4	11	錆釉	
705	釜			380SU	14.0	12.2	17.9	11	8	錆釉	
706	釜			330SU	14.5	-	*7.6	5	0	錆釉	
707	釜			380SU	13.6	-	*9.4	5	0	錆釉	
708	釜			380SU	-	-	*1.1	0	0	錆釉	
709	釜			東斜面	13.3	12.2	*15.4	4	8	錆釉	
710	釜			東斜面	14.1	12.5	*18.2	0	9	錆釉	外面スス
711	釜			330SU	13.1	-	*11.3	10	0	錆釉	
712	釜			東斜面	-	12.8	*13.2	0	12	錆釉	外面スス
713	釜			東斜面	13.5	-	*5.1	3	0	錆釉	
714	釜			330SU	-	11.3	*6.6	0	10	錆釉	
715	釜			380SU	-	13.1	*2.7	0	7	錆釉	外面スス
716	釜			482SX	13.8	-	*17.0	6	0	錆釉	
717	釜・土瓶の蓋	A類		試掘	-	6.0	*1.7	0	6	錆釉	
718	釜・土瓶の蓋	B類		480NR	14.1	12.0	3.1	4	4	錆釉	
719	釜・土瓶の蓋	B類		480NR	12.4	8.9	*1.0	9	9	錆釉	
720	釜・土瓶の蓋	C類		東斜面	15.0	-	4.0	2	2	錆釉	
721	釜・土瓶の蓋	C類		検出	-	-	*3.2	0	0	錆釉	
722	羽釜	A類		東斜面	14.5	11.4	16.3	2	7	錆釉	外面スス
723	羽釜	A類		東斜面	14.7	-	*14.2	3	0	錆釉	
724	羽釜	B類		380SU	13.2	12.8	16.6	7	6	錆釉	
725	羽釜	C類		506SX	13.7	10.2	17.2	11	12	錆釉	外面スス
726	茶釜	D類		480NR	12.2	-	*6.4	3	0	錆釉	
727	茶釜	D類		162SW	15.8	-	*8.6	3	0	錆釉	
728	風炉			480NR	-	-	*10.5	0	0	錆釉	
729	燗台			480NR	15.3	16.2	20.6	3	10	錆釉	受皿部・破断面スス
730	燗台			480NR	-	16.2	*14.4	0	8	錆釉	接合沈線
731	燗台			480NR	15.0	-	*2.1	0	3	錆釉	破断面スス
732	燗台			480NR	18.0	-	*2.2	2	0	錆釉	
733	燗台			480NR	18.4	-	*2.2	1	0	錆釉	受皿部スス
734	燗台			480NR	20.8	-	*4.1	2	0	錆釉	受皿部・破断面スス
735	燗台			480NR	19.8	-	*3.2	0	1	錆釉	
736	燗台			480NR	19.0	14.4	*20.7	3	4	錆釉	受皿部・破断面スス
737	燗台			480NR	-	21.7	*17.5	0	11	錆釉・露胎	受皿部・破断面スス
738	燗台			480NR	17.5	-	*3.2	6	0	錆釉	

遺物一覧表

番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
739	燭台			480NR	-	-	-	0	0	錆釉	仕切り上面スス
740	燭台			東斜面	-	15.2	*18.3	0	2	錆釉	
741	燭台			380SU	-	18.0	*7.5	0	5	錆釉・露胎	
742	燭台			東斜面	18.8	-	*4.7	1	0	錆釉	生焼け 受皿部スス
743	燭台			330SU	-	10.8	*15.6	0	3	錆釉	
744	燭台			東斜面	17.1	-	*15.8	4	0	錆釉	
745	燭台			380SU	-	-	*14.5	0	0	錆釉	生焼け
746	燭台			試掘	15.0	-	*1.5	2	0	錆釉	
747	燭台			412SW	-	-	*10.9	0	0	錆釉・露胎	
748	燭台			415SX	-	-	*9.9	0	0	錆釉	受皿部スス
749	燭台			東斜面	-	-	*4.5	0	0	鉄釉*	
750	灯籠？			480NR	-	-	*10.5	0	0	錆釉？	
751	瓦			030SK	-	-	高1.7	-	-	錆釉・露胎	
752	瓦			480NR	-	-	高2.0	-	-	錆釉・露胎	
753	甕			480NR	18.3	15.6	34.7	11	5	鉄釉・灰釉？・露胎	
754	甕			480NR	16.7	14.0	30.9	3	12	鉄釉・灰釉？・露胎	頸外押印文
755	甕			480NR	17.5	-	*18.9	3	0	鉄釉・灰釉？	
756	甕			480NR	19.1	15.5	40.1	5	4	鉄釉・灰釉？・露胎	
757	甕			480NR	28.8	16.8	47.0	8	2	鉄釉・灰釉？・露胎	
758	甕			480NR	20.4	12.6	34.3	9	12	鉄釉・灰釉？・露胎	
759	甕			480NR	18.7	-	*21.0	11	0	鉄釉・灰釉？	
760	甕			480NR	25.6	-	*8.6	3	0	鉄釉・灰釉？	
761	甕			480NR	28.6	-	*4.6	3	0	鉄釉・灰釉？	
762	甕			007NR	17.8	-	*7.0	6	0	鉄釉・灰釉？	
763	甕			480NR	21.4	-	*4.6	3	0	鉄釉・灰釉？	
764	甕			480NR	17.9	13.8	32.0	12	12	鉄釉・灰釉？・露胎	
765	甕			480NR	-	13.0	*28	0	3	鉄釉・灰釉？・露胎	
766	甕			480NR	-	14.7	*3.4	0	8	鉄釉・灰釉？・露胎	
767	甕			480NR	-	14.4	*26.2	11	12	鉄釉・灰釉？・露胎	
768	甕			007NR	-	14.1	*9.6	0	6	鉄釉・灰釉？・露胎	
769	甕			480NR	-	14.2	*8.7	0	7	鉄釉・灰釉？・露胎	
770	甕			380SU	20.2	-	*9.3	9	0	鉄釉・灰釉？	
771	甕			380SU	18.5	-	*10.1	3	0	鉄釉・灰釉？	
772	甕			380SU	19.8	-	*21.8	10	3	鉄釉・灰釉？	
773	甕			330SU	-	12.6	*23.5	0	1	鉄釉・灰釉？・露胎	
774	甕			東斜面	23.5	-	*4.8	2	0	鉄釉・灰釉？	
775	甕			検出	20.8	-	*8.6	8	0	鉄釉・灰釉？	
776	甕			東斜面	-	14.7	*4.5	0	8	鉄釉・灰釉？・露胎	
777	甕			224NR	-	14.8	*21.8	0	6	鉄釉・灰釉？	
778	甕			326P	21.6	-	*5.2	3	0	鉄釉・灰釉？	砥具に転用
779	甕			東斜面	23.2	-	*7.3	2	0	鉄釉・灰釉？	
780	甕			465SD	21.4	-	*4.5	2	0	錆釉	
781	甕			482SX	18.9	-	*7.9	3	0	鉄釉・灰釉？	
782	甕			表採	-	14.0	*10.4	0	4	鉄釉・灰釉？・露胎	
783	甕			415SX	-	12.7	*6.0	0	4	鉄釉・灰釉？・露胎	
784	甕			001NR	-	16.0	*2.0	0	11	鉄釉・灰釉？・露胎	底外釉拭い
785	茶壺（祖母懷茶壺）			480NR	10.1	-	*30.4	11	0	錆釉・灰釉？・露胎	
786	茶壺（祖母懷茶壺）			480NR	9.7	12.2	25.8	11	12	錆釉・灰釉？・露胎	
787	茶壺（祖母懷茶壺）			480NR	10.8	13.6	33.8	11	3	錆釉・灰釉？・露胎	底外釉拭い
788	茶壺（祖母懷茶壺）			480NR	11.1	13.4	37.6	5	4	錆釉・灰釉？・露胎	
789	茶壺（祖母懷茶壺）			480NR	10.6	-	*26.4	10	0	錆釉・灰釉？・露胎	
790	茶壺（祖母懷茶壺）			480NR	11.6	-	*8.2	3	0	錆釉・灰釉？・露胎	
791	茶壺（祖母懷茶壺）			480NR	12.2	13.2	38.8	12	11	錆釉・灰釉？・露胎	
792	茶壺（祖母懷茶壺）			表土	10.4	-	*8.6	3	0	錆釉・灰釉？・露胎	
793	茶壺（祖母懷茶壺）			196SK	10.3	-	*4.4	2	0	錆釉・露胎	
794	茶壺（祖母懷茶壺）			480NR	-	-	*29.2	0	0	錆釉・灰釉？・露胎	
795	茶壺（祖母懷茶壺）			480NR	12.4	12.3	34.9	11	12	錆釉・灰釉？・露胎	
796	茶壺（祖母懷茶壺）			480NR	10.8	13.0	34.8	10	12	錆釉・灰釉？・露胎	底外釉拭い
797	茶壺（祖母懷茶壺）			480NR	-	-	*4.2	0	0	錆釉*・露胎	
798	茶壺（祖母懷茶壺）			表土	-	-	*6.0	0	0	錆釉・露胎	
799	有耳壺			検出	14.3	-	*6.5	1	0	鉄釉・露胎	口端重ね焼き痕
800	有耳壺			480NR	16.4	-	*8.8	2	0	鉄釉・露胎	
801	有耳壺（筒形容器）			東斜面	13.0	11.5	15.8	4	12	鉄釉・露胎	
802	筒形容器	A類		480NR	15.2	10.5	15.4	11	12	鉄釉・露胎	口端釉拭い・重ね焼き痕、内面団子トチ
803	筒形容器	A類		480NR	13.8	9.4	14.7	4	3	鉄釉・露胎	
804	筒形容器	A類		480NR	14.2	10.0	14.7	11	12	鉄釉・露胎	
805	筒形容器	A類		480NR	13.7	11.0	14.2	12	12	鉄釉・露胎	口端釉拭い・重ね焼き痕、内面団子トチ
806	筒形容器	A類		480NR	15.4	11.2	13.7	6	12	鉄釉・露胎	
807	筒形容器	A類		465SD	-	11.8	*13.4	0	5	鉄釉・露胎	
808	筒形容器	A類		007NR	-	13.0	*7.1	0	4	鉄釉・露胎	内面団子トチ
809	筒形容器	A類		480NR	13.5	9.7	13.6	4	12	鉄釉・露胎	
810	筒形容器	A類		506SX	13.9	11.1	12.6	12	9	鉄釉・露胎	
811	筒形容器	A類		506SX	14.1	10.6	13.0	9	12	鉄釉・露胎	口端釉拭い・重ね焼き痕、内面団子トチ
812	筒形容器	A類		480NR	14.7	10.2	12.0	5	10	鉄釉・露胎	
813	有耳壺	A類		020SD	-	11.3	*3.8	0	12	鉄釉・露胎	
814	筒形容器（桶）	B類		480NR	15.8	14.4	17.0	6	6	鉄釉・灰釉・錆釉	口端重ね焼き痕、内面団子トチ
815	筒形容器（桶）	B類		480NR	15.6	-	*9.6	6	0	鉄釉・錆釉	
816	筒形容器（桶）	B類		480NR	-	14.6	*7.1	0	11	鉄釉・錆釉	
817	徳利	A類		480NR	8.2	-	*2.6	3	0	鉄釉	
818	徳利	A類		480NR	5.7	-	*4.4	3	0	鉄釉・灰釉？	
819	徳利	A類		480NR	5.8	-	*2.6	4	0	鉄釉	
820	徳利	A類		480NR	8.9	-	*5.2	1	0	鉄釉	
821	徳利	A類		480NR	6.0	-	*3.8	11	0	鉄釉	

番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
822	德利	A類		480NR	5.9	-	*21.7	3	0	鉄釉・露胎	
823	德利	A類		480NR	-	12.4	*21.8	0	9	鉄釉・錆釉	
824	德利	A類		480NR	-	12.2	*14.9	0	12	鉄釉・錆釉	体外重ね焼き痕
825	德利	A類		480NR	6.0	-	*14.7	12	0	鉄釉	
826	德利	A類		480NR	-	12.6	*17.4	0	12	鉄釉・錆釉	
827	德利	A類		506SX	-	13.4	15.8	0	12	鉄釉・錆釉	
828	德利	A類		480NR	-	11.8	*15.7	0	6	鉄釉*・錆釉	
829	德利	A類		480NR	-	-	*10.4	0	0	鉄釉*	
830	德利	A類		480NR	-	-	*6.5	0	0	鉄釉	
831	德利	A類		480NR	-	12.0	*9.9	0	6	鉄釉・錆釉	
832	德利	A類		480NR	-	11.0	*10.5	0	5	鉄釉・錆釉・露胎	
833	德利	A類		480NR	-	11.2	*16.1	0	7	鉄釉*・錆釉・露胎	
834	德利	A類		480NR	-	11.4	*4.1	0	12	鉄釉・錆釉	体外重ね焼き痕
835	德利	B類		480NR	-	10.0	*14.2	0	12	鉄釉・灰釉?・露胎	
836	德利	B類		007NR	-	9.9	*7.7	0	3	鉄釉・露胎	
837	德利	C類		480NR	-	6.9	*8.6	0	7	鉄釉・露胎	体外陶器片釉着
838	德利	A類		380SU	6.9	-	*27.0	5	0	鉄釉	
839	德利	A類		東斜面	5.8	-	*4.6	2	0	鉄釉	
840	德利	A類		380SU	-	13.1	19.3	0	8	鉄釉*・錆釉	
841	德利	A類		東斜面	-	11.0	*2.6	0	7	鉄釉・錆釉	体外重ね焼き痕
842	德利	A類		380SU	-	11.2	*10.2	0	7	鉄釉・錆釉	
843	德利	A類		380SU	-	12.0	*10.2	0	12	鉄釉・錆釉	体外重ね焼き痕
844	德利	A類		東斜面	-	12.4	*3.4	0	8	鉄釉*・錆釉・露胎	体外重ね焼き痕
845	德利	A類		東斜面	-	11.8	*4.3	0	10	鉄釉*・錆釉	
846	德利	A類		東斜面	-	12.2	*7.3	0	11	鉄釉・錆釉	外面窯ゴミ
847	德利	A類		東斜面	-	10.2	*6.6	0	7	鉄釉・錆釉	
848	德利	A類		380SU	-	14.4	*1.3	0	2	鉄釉・錆釉	
849	德利	A類		検出	10.9	-	*2.6	2	0	鉄釉	
850	德利	A類		検出	-	-	*8.8	0	0	鉄釉	
851	德利	A類		060SW	-	-	*7.2	0	0	鉄釉	
852	德利	A類		表土	-	11.8	*9.9	0	6	鉄釉・錆釉	底外重ね焼き痕（皿類）
853	德利	A類		415SX	-	12.7	*6.8	0	8	鉄釉・錆釉	
854	德利	A類		表土	-	12.1	*7.2	0	12	鉄釉・錆釉	
855	德利	A類		020SD	-	11.0	*2.1	0	6	鉄釉・錆釉	
856	德利	A類		060SW	-	9.6	*2.3	0	2	鉄釉・錆釉	
857	双耳德利			480NR	-	-	*7.8	0	0	鉄釉・露胎	
858	双耳德利			480NR	2.7	-	*3.5	12	0	鉄釉・露胎	
859	双耳德利			480NR	-	6.0	*2.7	0	12	鉄釉・露胎	
860	双耳德利			480NR	3.3	10.7	14.2	12	12	鉄釉・露胎	
861	双耳德利			380SU	-	-	*12.6	0	0	鉄釉	
862	双耳壺	A類		480NR	8.6	-	*19.6	5	0	鉄釉・灰釉?	
863	双耳壺	A類		東斜面	9.5	-	*11.1	4	0	鉄釉・灰釉?	
864	双耳壺	A類		表土	-	-	*9.3	0	0	鉄釉・灰釉?	
865	双耳壺	B類		516SU	4.7	7.0	11.2	12	12	鉄釉・灰釉?・露胎	
866	双耳壺	B類		480NR	7.0	-	*4.1	2	0	鉄釉・灰釉?	
867	双耳壺	B類		480NR	-	5.7	*2.4	0	6	鉄釉・灰釉?・露胎	
868	双耳壺	B類		480NR	-	5.0	*1.5	0	6	鉄釉・灰釉?・露胎	
869	口広有耳壺			480NR	12.6	-	*9.5	2	0	鉄釉	
870	口広有耳壺			表土	11.0	-	*7.3	2	0	鉄釉	
871	四耳壺			380SU	11.0	-	*12.9	2	0	錆釉	
872	小壺			516SU	1.8	3.6	4.8	12	12	錆釉・露胎	
873	小壺（耳付水注）			検出	-	3.6	*2.2	0	10	灰釉*・露胎	
874	小壺（耳付水注）			480NR	-	4.7	*3.4	0	10	灰釉*・露胎	
875	小壺（耳付水注）			表土	-	5.8	*5.7	0	11	灰釉・露胎	
876	水滴			480NR	2.6	4.8	3.0	1	5	鉄釉・露胎	外面スス
877	耳付水注			検出	-	4.9	*4.4	0	12	鉄釉・露胎	底外使用痕
878	耳付水注			480NR	-	-	5.1	0	0	錆釉・露胎	
879	小壺（耳付水注）			東斜面	-	5.6	*2.7	0	7	錆釉・露胎	
880	大海茶入			330SU	6.0	5.5	6.2	8	12	鉄釉・露胎	
881	芋子茶入			516SU	3.3	3.7	6.2	8	12	鉄釉・露胎	
882	芋子茶入			480NR	2.9	-	*3.0	4	0	鉄釉・露胎	
883	芋子茶入			480NR	-	3.9	*2.7	0	12	鉄釉・露胎	底外陶器片釉着
884	芋子茶入			480NR	-	3.3	*2.0	0	12	鉄釉・露胎	底外陶器片釉着
885	芋子茶入			東斜面	-	3.5	*2.8	0	3	鉄釉・露胎	
886	芋子茶入			検出	-	4.4	*3.3	0	3	鉄釉・露胎	
887	芋子茶入			検出	-	-	*3.0	0	0	鉄釉・露胎	
888	花瓶	大型		480NR	-	13.5	*7.2	0	6	鉄釉・露胎	
889	花瓶	小型		東斜面	-	5.4	*5.8	0	12	錆釉	
890	花瓶	小型		380SU	-	-	*2.6	0	0	錆釉	
891	花瓶	小型		表探	-	-	*2.5	0	0	錆釉	
892	仏餉具			480NR	9.6	5.2	5.1	0	12	錆釉・露胎	
893	仏餉具			480NR	9.8	5.1	6.1	4	12	錆釉・露胎	
894	仏餉具			480NR	-	4.8	*3.8	0	8	錆釉	
895	仏餉具			東斜面	9.7	5.2	5.9	10	12	錆釉	外面窯ゴミ付着
896	仏餉具			東斜面	9.0	-	*4.0	2	0	錆釉	
897	仏餉具			東斜面	-	5.0	*2.3	0	12	錆釉・露胎	
898	筒形香炉			試掘	11.6	6.0	4.8	6	8	鉄釉・露胎	口端重ね焼き痕、底内輪ドチ
899	筒形香炉			465SD	11.0	-	*5.1	3	3	鉄釉・露胎	口端釉拭い
900	筒形香炉			表土	11.2	9.3	8.0	5	8	鉄釉・露胎	口端釉拭い・重ね焼き痕
901	筒形香炉			480NR	8.2	5.4	3.8	6	5	鉄釉・錆釉?・露胎	
902	筒形香炉			480NR	12.8	11.6	7.4	2	6	鉄釉・灰釉・錆釉?	口端釉拭い
903	筒形香炉			007NR	12.3	11.5	7.4	11	11	鉄釉・灰釉・錆釉?	口端釉拭い・重ね焼き痕
904	筒形香炉			表土	-	12.9	*3.6	0	3	鉄釉・錆釉	

番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
905	袴腰形香炉			480NR	10.4	-	*3.6	4	1	焼締	
906	袴腰形香炉			東斜面	-	8.4	*3.8	0	4	鉄釉・錆釉	内面窯ゴミ
907	狛犬			007NR	-	-	*12.9	-	-	錆釉	
908	狛犬（前肢）？			480NR	-	-	-	-	-	鉄釉・灰釉？	
909	鶏形水滴			459SD	長*8.1	幅5.0	高5.2	-	-	灰釉	
910	鳥形水滴			459SD	-	-	*3.0	-	-	灰釉	
911	輪ドチ			480NR	長4.0	幅3.9	高1.1	-	-	無釉	
912	輪ドチ			480NR	長4.0	幅3.7	高1.9	-	-	無釉	
913	輪ドチ			480NR	長4.2	幅4.0	高1.0	-	-	無釉	
914	輪ドチ			480NR	長4.3	幅4.0	高1.0	-	-	無釉	
915	輪ドチ			480NR	長3.7	幅3.5	高0.9	-	-	無釉	
916	輪ドチ			480NR	長3.9	幅3.4	高1.0	-	-	無釉	
917	輪ドチ			東斜面	長4.0	幅4.0	高1.1	-	-	無釉	
918	輪ドチ			東斜面	長3.9	幅3.9	高1.6	-	-	無釉	
919	ビン			480NR	長4.2	幅4.0	高2.3	-	-	無釉	
920	ツク			480NR	長*4.0	幅2.0	高1.8	-	-	無釉	
921	焼台			480NR	長9.3	幅8.0	高4.6	-	-	無釉	
922	匣鉢蓋			480NR	13.8	6.2	2.3	11	12	無釉	
923	匣鉢蓋			試掘	15.0	7.6	2.3	9	12	無釉	
924	匣鉢蓋			480NR	14.1	6.4	2.3	9	12	無釉	
925	匣鉢蓋			480NR	14.7	7.0	2.9	11	12	無釉	外面スス
926	匣鉢蓋（線刻）			007NR	13.7	6.7	2.3	8	12	無釉	
927	匣鉢蓋（線刻）			480NR	14.1	7.4	2.8	9	12	無釉	
928	匣鉢蓋			480NR	14.0	6.5	3.1	12	12	無釉	底内圏線、外面スス
929	匣鉢蓋			480NR	19.0	12.5	2.5	6	6	無釉	
930	挟み皿			007NR	10.2	5.3	2.4	11	12	無釉	底内輪ドチ
931	挟み皿			007NR	11.1	5.1	2.5	10	12	無釉	ビン痕・底内輪ドチ・圏線
932	挟み皿			480NR	11.4	4.9	1.4	11	12	無釉	底内輪ドチ
933	挟み皿			480NR	11.4	5.6	1.4	12	12	無釉	底内輪ドチ
934	挟み皿			007NR	12.0	5.4	2.0	4	12	無釉	ビン痕・底内輪ドチ
935	挟み皿（線刻）			480NR	11.7	5.8	2.0	12	12	無釉	底内輪ドチ
936	挟み皿			480NR	12.8	5.8	2.5	8	12	無釉	ビン痕・底内輪ドチ
937	挟み皿（線刻）			480NR	11.9	6.1	1.7	9	9	無釉	ビン痕・底内輪ドチ・体外端反皿軸着
938	挟み皿			506SX	11.6	5.1	2.4	7	12	無釉	底内輪ドチ
939	挟み皿			試掘	11.7	5.4	2.2	7	12	無釉	
940	挟み皿（線刻）			480NR	12.3	5.2	2.1	11	12	無釉	底内輪ドチ
941	挟み皿（線刻）			480NR	11.8	5.6	2.5	11	12	無釉	ビン痕・底内輪ドチ
942	挟み皿（線刻）			480NR	12.1	5.8	2.5	6	7	無釉	ビン痕・底内輪ドチ
943	挟み皿			東斜面	12.6	6.0	2.9	11	12	無釉	
944	挟み皿（匣鉢蓋？）			480NR	13.0	6.0	2.5	9	12	無釉	
945	挟み皿			480NR	12.1	5.4	2.4	8	12	無釉	底内輪ドチ
946	挟み皿			480NR	11.8	5.4	2.6	8	12	無釉	底内輪ドチ
947	匣鉢蓋			380SU	13.9	6.5	2.1	7	9	無釉	底内圏線
948	匣鉢蓋			東斜面	13.2	5.6	2.3	12	12	無釉	
949	匣鉢蓋			東斜面	13.2	6.0	2.6	11	12	無釉	
950	匣鉢蓋			380SU	13.5	6.1	2.8	6	12	無釉	底内突線
951	匣鉢蓋（線刻）			380SU	14.2	7.0	2.2	4	5	無釉	
952	匣鉢蓋（押印文）			東斜面	13.7	6.7	2.3	7	12	無釉	
953	匣鉢蓋			380SU	13.5	6.5	2.7	12	12	無釉	外面スス
954	匣鉢蓋			432SD	14.5	7.1	3.1	11	12	無釉	
955	挟み皿			380SU	12.0	5.8	1.9	11	12	無釉	底内輪ドチ
956	挟み皿			東斜面	11.5	4.5	2.2	9	12	無釉	
957	挟み皿			東斜面	11.3	5.4	2.4	12	12	無釉	ビン痕・底内輪ドチ
958	挟み皿			東斜面	11.1	5.6	1.8	9	12	無釉	底内輪ドチ
959	挟み皿			東斜面	11.0	5.5	2.3	8	12	無釉	ビン痕・底内輪ドチ・圏線
960	挟み皿			表土	11.4	5.3	2.1	8	11	無釉	
961	挟み皿			表土	11.8	5.5	2.3	10	12	無釉	底内輪ドチ
962	挟み皿（線刻）			330SU	11.8	5.5	2.5	10	12	無釉	底内輪ドチ
963	挟み皿（線刻）			東斜面	11.9	5.3	2.3	6	8	無釉	底内輪ドチ
964	挟み皿（線刻）			東斜面	11.4	5.4	2.5	2	11	無釉	底内輪ドチ
965	挟み皿（線刻）			表土	12.1	5.5	2.3	7	12	無釉	底内輪ドチ
966	挟み皿（線刻）			330SU	12.6	5.6	1.9	10	12	無釉	底内輪ドチ
967	挟み皿（線刻）			330SU	12.2	5.8	2.0	12	12	無釉	底内輪ドチ
968	挟み皿（線刻）			330SU	11.4	5.3	2.2	9	12	無釉	底内輪ドチ・体外端反皿軸着
969	挟み皿（線刻）			表土	12.2	5.4	2.1	9	12	無釉	底内輪ドチ・体外端反皿軸着
970	挟み皿（線刻）			表土	12.8	5.8	1.7	5	7	無釉	底内輪ドチ
971	挟み皿（線刻）			東斜面	11.9	5.2	2.1	7	12	無釉	底内輪ドチ・体外端反皿軸着
972	挟み皿（線刻）			東斜面	11.8	5.4	2.2	12	12	無釉	底内輪ドチ
973	挟み皿（線刻）			東斜面	11.5	5.4	1.9	3	11	無釉	
974	匣鉢蓋（線刻）			表採	13.8	7.0	2.3	12	12	無釉	
975	匣鉢蓋			432SD	14.4	6.2	2.3	4	12	無釉	
976	匣鉢蓋			表土	14.8	7.5	2.3	4	8	無釉	外面スス
977	挟み皿（線刻）			表土	12.0	5.9	2.2	5	6	無釉	
978	挟み皿			415SX	11.4	5.0	2.5	3	3	無釉	内面突線
979	匣鉢	A 1 類		480NR	11.2	6.3	4.2	6	12	無釉	
980	匣鉢	A 1 類		007NR	11.2	6.8	4.1	4	10	無釉	底内輪ドチ
981	匣鉢	A 1 類		480NR	11.8	6.0	4.7	10	12	無釉	底内輪ドチ
982	匣鉢	A 1 類		480NR	11.8	7.4	4.4	12	12	無釉	底内輪ドチ
983	匣鉢	A 1 類		480NR	11.2	7.0	4.7	10	12	無釉	底内輪ドチ
984	匣鉢（線刻）	A 1 類		480NR	10.9	6.0	4.5	10	12	無釉	底内輪ドチ・体外端反皿軸着
985	匣鉢	A 1 類		480NR	11.6	6.0	4.9	4	12	無釉	底内輪ドチ
986	匣鉢	A 1 類		480NR	11.2	6.3	5.3	5	12	無釉	
987	匣鉢	A 1 類		007NR	12.8	7.8	4.8	4	12	無釉	体外縁軸挟み皿軸着

上品野西金地遺跡

番号	器種	型式 分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
988	匣鉢（線刻）	A 1 類	480NR	12.6	6.0	4.5	9	12	無釉	底内輪ドチ
989	匣鉢	A 1 類	484SX	11.7	7.7	5.8	12	12	無釉	底内輪ドチ
990	匣鉢（押印文）	A 1 類	516SU	10.8	6.3	4.6	5	12	無釉	底内輪ドチ
991	匣鉢（線刻）	A 1 類	480NR	11.8	6.2	4.4	12	12	無釉	底内輪ドチ
992	匣鉢（線刻）	A 1 類	480NR	12.4	6.3	4.4	5	7	無釉	底内輪ドチ
993	匣鉢（線刻）	A 1 類	480NR	12.3	6.2	4.8	7	12	無釉	底内輪ドチ
994	匣鉢（線刻）	A 1 類	480NR	12.1	6.2	4.5	5	11	無釉	底内輪ドチ
995	匣鉢（線刻）	A 1 類	480NR	13.0	6.8	4.9	2	6	無釉	
996	匣鉢	A 2 類	480NR	12.2	10.3	8.8	12	12	無釉	体内ビン痕・底内輪ドチ
997	匣鉢	A 2 類	480NR	11.6	10.2	8.4	11	12	無釉	体内ビン痕なし・底内輪ドチ
998	匣鉢	B 類	007NR	14.8	12.8	9.9	10	12	無釉	体内ビン痕
999	匣鉢	B 類	480NR	15.4	11.5	10.9	9	12	無釉	体内ビン痕
1000	匣鉢	B 類	480NR	15.1	12.0	11.3	12	12	無釉	体内ビン痕
1001	匣鉢	B 類	480NR	13.9	12.6	10.3	11	12	無釉	体内ビン痕・底内輪ドチ
1002	匣鉢	B 類	480NR	15.4	13.6	9.6	9	12	無釉	体内ビン痕なし・底内輪ドチ
1003	匣鉢	B 類	480NR	14.9	12.3	10.7	7	12	無釉	体内ビン痕なし
1004	匣鉢	B 類	480NR	15.1	12.3	10.9	9	12	無釉	体内ビン痕・底内輪ドチ
1005	匣鉢	B 類	007NR	15.7	13.9	10.0	5	6	無釉	
1006	匣鉢	B 類	007NR	14.4	10.9	10.2	9	12	無釉	体内ビン痕なし
1007	匣鉢	B 類	007NR	15.6	12.5	8.9	6	6	無釉	
1008	匣鉢	C 1 類	480NR	19.5	15.2	7.1	11	11	無釉	底内輪ドチ
1009	匣鉢	C 1 類	007NR	16.8	14.0	5.7	2	6	無釉	
1010	匣鉢	C 1 類	480NR	20.2	15.8	8.1	4	10	無釉	底内輪ドチ
1011	匣鉢	C 1 類	480NR	18.7	13.6	9.0	10	12	無釉	底内輪ドチ
1012	匣鉢	A 1 類	東斜面	10.4	6.9	3.4	3	12	無釉	底内輪ドチ
1013	匣鉢	A 1 類	380SU	11.9	5.7	5.0	12	12	無釉	底内輪ドチ
1014	匣鉢	A 1 類	東斜面	12.6	8.4	5.4	2	12	無釉	底内輪ドチ
1015	匣鉢	A 1 類	東斜面	11.8	7.2	4.4	12	12	無釉	底内輪ドチ
1016	匣鉢（線刻）	A 1 類	東斜面	12.6	6.9	4.0	2	6	無釉	底内輪ドチ
1017	匣鉢	A 1 類	東斜面	11.2	6.4	4.5	8	12	無釉	
1018	匣鉢	B 類	330SU	15.4	11.5	11.2	12	12	無釉	体内ビン痕・底内輪ドチ
1019	匣鉢	B 類	380SU	14.8	11.9	9.7	12	12	無釉	体内ビン痕・底内輪ドチ
1020	匣鉢	B 類	東斜面	15.4	13.1	10.1	5	7	無釉	底内輪ドチ
1021	匣鉢	B 類	東斜面	15.0	12.0	10.4	9	12	無釉	体内ビン痕・底内輪ドチ
1022	匣鉢	C 2 類	東斜面	17.9	15.0	12.6	7	9	無釉	体内ビン痕なし
1023	匣鉢	A 1 類	013SX	11.5	5.5	3.7	5	5	無釉	底内輪ドチ
1024	匣鉢	A 1 類	465SD	11.7	5.7	4.1	10	12	無釉	底内輪ドチ
1025	匣鉢	A 1 類	415SX	11.9	6.0	4.6	9	12	無釉	底内輪ドチ
1026	匣鉢	A 1 類	415SX	11.3	5.9	5.1	1	7	無釉	底内輪ドチ
1027	土師器皿	ロクロ調整	480NR	11.8	5.8	2.2	3	7		
1028	土師器皿	ロクロ調整	480NR	11.6	5.8	2.4	2	12		
1029	土師器皿	ロクロ調整	480NR	11.8	5.6	2.2	2	4		
1030	土師器皿	ロクロ調整	480NR	11.8	5.4	2.6	2	6		
1031	土師器皿	ロクロ調整	東斜面	11.0	4.6	2.6	2	12		
1032	土師器皿	ロクロ調整	東斜面	11.4	5.2	2.9	1	7		
1033	土師器皿	ロクロ調整	東斜面	12.4	6.4	3.0	2	2		
1034	土師器皿	ロクロ調整	007NR	12.0	5.4	2.6	3	6		
1035	土師器皿	ロクロ調整	007NR	11.8	6.0	2.4	1	5		
1036	土師器羽付鍋		480NR	41.0	-	*3.9	3			外面スス
1037	土師器内耳鍋		480NR	28.6	-	*15.9	2			外面スス
1038	土師器内耳鍋		480NR	23.0	-	*10.3	3			外面スス
1039	土師器内耳鍋		480NR	28.2	-	*9.2	4			外面スス
1040	土師器内耳鍋		480NR	25.2	-	*6.8	2			外面スス
1041	土師器内耳鍋		480NR	27.2	-	*8.2	1			外面スス
1042	土師器内耳鍋		480NR	21.4	-	*5.7	2			
1043	土師器内耳鍋		007NR	29.6	-	*4.9	2			
1044	土師器内耳鍋		007NR	22.8	-	*6.9	2			外面スス
1045	土師器茶釜		007NR	13.2	-	15.5	7			外面スス
1046	土師器内耳鍋		330SU	28.6	-	*5.3	2			
1047	土師器内耳鍋		485SD	28.8	-	*3.7	3			外面スス
1048	土師器内耳鍋		415SX	23.6	-	*5.0	2			外面スス
1049	土師器内耳鍋		224NR	31.0	-	*4.3	4			外面スス
1050	天目茶碗		480NR	11.3	4.2	6.0	9	12	鉄釉・錆釉	大窯3前半
1051	天目茶碗		007NR	-	4.2	*6.3	0	11	鉄釉・錆釉	大窯3前半
1052	天目茶碗		480NR	12.5	4.2	6.2	3	12	鉄釉・露胎	大窯3後半
1053	灰釉折縁皿		480NR	10.6	5.6	2.5	4	6	灰釉	内面ソギ・底内釉剥ぎ、大窯4後半
1054	灰釉折縁皿		480NR	11.0	6.2	2.5	1	5	灰釉	内面ソギ・底内釉剥ぎ、大窯4後半
1055	灰釉折縁皿		480NR	11.8	-	*1.9	4	0	灰釉	内面波状文、大窯3
1056	茶入		480NR	4.8	4.0	3.9	5	4	鉄釉・錆釉	底外に使用痕
1057	錆釉灯明具		480NR	-	6.1	*2.1	0	10	錆釉	大窯4後半
1058	志野鉄絵丸皿		007NR	11.6	6.2	2.6	5	12	長石釉	大窯4後半
1059	志野鉄絵丸皿		480NR	11.4	2.9	6.5	3	3	長石釉	登窯第1小期
1060	志野鉄絵丸皿		480NR	12.8	7.2	2.7	1	3	長石釉	登窯第1小期
1061	志野鉄絵丸皿		試掘	12.3	6.9	3.3	3	6	長石釉	登窯第1小期
1062	志野鉄絵丸皿		480NR	12.2	8.2	2.5	10	11	長石釉	登窯第3小期
1063	志野丸皿		480NR	10.6	6.0	2.0	7	10	長石釉	大窯4後半
1064	志野丸皿		480NR	10.8	7.0	1.9	6	6	長石釉	大窯4後半
1065	志野丸皿		480NR	11.4	6.2	2.4	10	12	長石釉	大窯4校半
1066	志野丸皿		007NR	11.4	6.8	2.5	4	5	長石釉	底外トチン、大窯4後半
1067	志野丸皿		007NR	9.0	5.2	1.8	4	5	長石釉	登窯第1小期
1068	志野丸皿		007NR	11.4	7.0	2.8	4	12	長石釉*	登窯第1小期
1069	志野丸皿		480NR	11.4	6.2	2.9	12	3	長石釉	登窯第1小期
1070	志野丸皿		480NR	11.0	6.4	2.2	6	6	長石釉	登窯第3小期

遺物一覧表

番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
1071	志野丸皿			480NR	10.8	6.9	2.0	7	8	長石釉	登窯第3小期
1072	灰釉菊皿			007NR	11.0	7.1	3.0	1	2	灰釉	
1073	志野菊皿			007NR	11.6	6.3	3.1	5	8	長石釉	
1074	志野菊皿			007NR	11.1	6.6	3.0	4	6	長石釉	登窯第3小期
1075	志野鉢			480NR	14.2	-	*2.8	4	0	長石釉	
1076	志野丸碗			480NR	12.8	-	*5.7	3	0	長石釉	
1077	志野小杯			480NR	7.4	4.8	4.2	2	5	長石釉	登窯第3小期
1078	志野鉢			480NR	-	8.2	*2.4	0	7	長石釉	
1079	志野鉢			検出	-	16.0	*5.2	0	6	長石釉	
1080	擂鉢			480NR	29.0	11.0	12.9	9	6	錆釉	底外使用痕
1081	黄瀬戸鉢			480NR	31.2	18.0	8.1	3	3	黄瀬戸釉・緑釉	
1082	鉄絵鉢			480NR	37.4	18.4	9.9	4	7	灰釉・緑釉	
1083	鉄絵鉢			480NR	38.2	-	*7.2	6	2	灰釉・緑釉	登窯第3・4小期
1084	鉢			007NR	-	17.0	*5.3	0	5	灰釉	
1085	鉄絵鉢			480NR	23.0	12.6	5.0	3	6	灰釉・緑釉	
1086	天目茶碗			480NR	11.3	4.9	6.8	4	12	鉄釉・露胎	登窯第3小期
1087	天目茶碗			480NR	11.7	4.8	7.0	9	12	鉄釉・露胎	
1088	天目茶碗			480NR	11.0	5.2	6.9	6	12	鉄釉・露胎	
1089	灰釉丸碗			480NR	11.2	5.3	7.0	3	12	灰釉・露胎	登窯第3・4小期
1090	鉄釉筒形香炉			480NR	9.8	6.4	5.0	4	4	鉄釉・露胎	
1091	鉄釉筒形香炉			480NR	11.4	10.5	6.9	4	9	鉄釉・露胎	
1092	鉄釉香炉			480NR	8.4	5.5	5.6	8	12	鉄釉・露胎	登窯第5小期
1093	鉄釉香炉			480NR	-	6.0	*3.9	0	8	鉄釉・露胎	
1094	鉄釉袴腰形香炉			480NR	13.4	8.2	6.4	2	8	鉄釉・露胎	
1095	鉄釉袴腰形香炉			480NR	16.8	11.6	6.2	4	3	鉄釉・露胎	登窯第4小期
1096	灰釉小杯			480NR	7.6	-	*3.4	6	0	灰釉・露胎	
1097	灰釉小杯			480NR	6.8	3.0	3.6	6	3	灰釉・露胎	
1098	土瓶蓋			007NR	7.0	5.2	2.1	10	0	錆釉	外面窯ゴミ
1099	鉄釉片口			480NR	17.0	9.5	9.2	10	12	鉄釉・灰釉・露胎	
1100	鉄釉德利			480NR	-	-	*16.0	0	0	鉄釉・灰釉・錆釉	
1101	鉄釉灯明具			480NR	16.4	11.2	2.7	3	5	鉄釉	底外軸拭い
1102	鍋			480NR	14.4	6.4	7.5	10	12	鉄釉	
1103	灰釉土瓶			480NR	-	8.0	*2.2	0	12	灰釉	
1104	魚形水滴			480NR	長*8.4	幅3.1	高4.0	-	-	灰釉	外面スス
1105	石臼			480NR	長27.2	-	高8.5	-	-	灰釉	
1106	灰釉折縁皿（内壳皿）			表土	11.2	7.0	2.3	2	3	灰釉	
1107	志野丸碗			東斜面	-	6.5	*2.1	0	6	長石釉	登窯第1小期
1108	志野丸皿			東斜面	9.3	5.2	1.7	1	6	長石釉	
1109	志野丸皿			東斜面	12.3	7.8	2.1	2	2	長石釉	
1110	志野丸皿			表土	10.8	6.6	1.9	8	10	長石釉	大窯4後半
1111	志野丸皿			東斜面	10.8	5.8	2.0	4	5	長石釉	
1112	志野鉢			東斜面	-	18.6	*5.3	0	3	長石釉	
1113	鉄釉灯明皿			162SW	9.4	4.2	2.0	5	6	鉄釉・露胎	登窯第1小期
1114	天目茶碗			380SU	11.4	4.5	6.2	4	12	鉄釉・露胎	
1115	天目茶碗			東斜面	-	4.8	*5.6	0	12	鉄釉・露胎	
1116	灰釉小鉢			224NR	10.8	6.4	3.8	1	4	灰釉・露胎	登窯第1小期
1117	鉄釉小杯			380SU	6.8	3.1	3.2	2	5	鉄釉・露胎	
1118	灰釉筒形香炉			東斜面	12.6	-	*4.6	2	0	灰釉	
1119	鉄釉香炉			東斜面	9.4	7.2	4.8	4	3	鉄釉・露胎	登窯第4小期
1120	鉄釉香炉			東斜面	-	*5.2	*2.7	0	12	鉄釉・露胎	
1121	鉄釉香炉			東斜面	10.1	-	*5.0	1	0	鉄釉・露胎	
1122	鉄釉香炉			東斜面	15.2	-	*3.8	1	0	鉄釉・露胎	登窯第1小期
1123	鉄釉灯明具			東斜面	-	-	*5.8	0	4	鉄釉	
1124	鉄釉双耳小壺			東斜面	4.0	-	*5.4	2	0	鉄釉	
1125	鉄釉有耳壺			380SU	8.3	-	*6.8	5	0	鉄釉	登窯第1小期
1126	鉄釉筒形容器			東斜面	15.8	-	*6.4	2	0	鉄釉・露胎	
1127	灰釉花瓶			380SU	-	8.5	*17.5	0	6	灰釉・露胎	
1128	茶入			表土	-	4.6	*2.3	0	5	鉄釉・露胎	口端軸拭い
1129	茶入			東斜面	-	3.4	*5.3	0	11	鉄釉・露胎	
1130	鉄釉片口			東斜面	14.2	-	*4.1	3	0	鉄釉・灰釉	
1131	鉄釉片口			東斜面	-	8.9	*4.7	0	5	鉄釉・錆釉・露胎	登窯第1小期
1132	鉄釉片口			東斜面	-	12.8	*7.7	0	5	鉄釉・露胎	
1133	土師器焙烙			東斜面	37.0	-	*5.2	2			
1134	土師器焙烙			東斜面	36.2	-	*2.9	2			外面スス
1135	鉄釉丸碗			002NR	10.7	5.1	7.4	11	12	錆釉・鉄釉	
1136	志野丸皿			001NR	12.0	7.3	2.9	7	11	長石釉	
1137	鉄釉片口			020SD	-	14.4	*2.3	0	5	錆釉・露胎	大窯
1138	天目茶碗			020SD	-	4.6	*5.8	0	12	鉄釉・露胎	
1139	灰釉筒形香炉			014SD	19.2	-	*4.7	2	0	灰釉*	
1140	灰釉天目茶碗			表土	13.2	-	*6.4	4	0	灰釉・露胎	登窯第1小期
1141	天目茶碗			表土	10.3	4.5	6.4	5	10	鉄釉・露胎	
1142	灰釉丸皿			検出	10.4	-	*1.8	3	0	灰釉・露胎	
1143	志野丸皿			012NR	10.3	6.6	1.9	8	12	長石釉	登窯第1小期
1144	志野鉄絵丸皿			465SD	12.0	7.0	2.7	8	10	長石釉	
1145	錆釉糸目土瓶			表土	7.2	-	*1.5	3	0	錆釉	
1146	茶入			検出	-	4.6	*1.8	0	3	鉄釉・露胎	内面使用痕
1147	鉄釉錢匳			459SD	-	5.4	*4.2	0	12	鉄釉・錆釉	
1148	鉄釉錢匳			表土	-	8.0	*5.1	0	9	鉄釉・錆釉	
1149	灰釉德利			表土	-	7.2	*4.5	0	12	灰釉・露胎	内面使用痕
1150	擂鉢			031SX	36.5	14.9	16.8	3	12	錆釉	

上品野西金地遺跡

木製品									
番号	器種	木取り	遺構	法量 (cm) *残存			樹種	備考	
1151	柱根	丸太材	205P	長*91.8	幅12.4	高10.6	モミ属	年輪数25本	
1152	柱根	丸太材	501P	長*35.1	幅13.9	高13.5	モミ属	年輪数95本	
1153	柱根	丸太材	207P	長*26.2	幅27.0	高27.7	ヒノキ	年輪数98本	
1154	柱根	丸太材	391P	長*29.0	幅6.0	高3.9	カヤ		
1155	柱根	丸太材	480NR	長*39.8	幅6.5	高6.0	コナラ属コナラ節	年輪数15本	
1156	柱根	丸太材	480NR	長*22.7	幅10.8	高8.4	クリ		
1157	柱根	丸太材	480NR	長*23.5	幅15.5	高15.4	マツ属複雑管束亜属	年輪数25本	
1158	連歯下駄	柁目材	480NR	長*17.7	幅9.6	高2.2	ヒノキ	年輪数82本	
1159	差歯下駄	柁目材	検出	長21.2	幅6.9	高2.8	スギ	年輪数19本	
1160	差歯下駄の歯	板目材	東斜面	長7.6	幅11.0	高1.8	サクラ属	年輪数37本	
1161	木胎漆器類碗	横木取り	480NR	12.4	-	*4.9	トチノキ		
1162	木胎漆器類碗	横木取り	480NR	-	-	*3.8	クリ		
1163	木胎漆器類碗	横木取り	415SX	-	-	*2.1	トネリコ属シオジ節		
1164	横櫛		040SD	長*4.7	幅2.9	高0.4	不明		

金属製品 (1165～1244) 本文参照

桑下東窯跡B区											
番号	器種	型式	分類	遺構	口径 (cm)	底径／ 高台径 (cm)	器高 (cm) *残存	口縁 残存 (/12)	底部 残存 (/12)	施釉 *焼成不良	備考
1291	桶 A			SK07	27.0	19.8	-	2	12	鉄釉・灰釉?・露胎	
1292	筒形容器	A 類		SK08	14.8	12.0	15.4	11	12	鉄釉・灰釉?・露胎	口端釉拭い・重ね焼き痕
1293	筒形容器	A 類		SK08	15.1	12.7	14.6	12	12	鉄釉・灰釉?・露胎	口端釉拭い・重ね焼き痕
1294	甗鉢	1 A 2 類		SK09	29.0	-	*5.8	6	0	錆釉	
1295	甗鉢	1 A 2 類		SK30	31.6	10.2	13.1	12	12	錆釉	
1296	天目茶碗	A 2 類		検出	12.7	4.8	7.1	5	12	鉄釉*・錆釉	
1297	天目茶碗	A 3 類		検出	12.0	4.3	6.8	1	12	鉄釉*・錆釉	
1298	天目茶碗	A 3 類		SE01	11.8	-	*5.3	5	0	鉄釉*・錆釉	
1299	天目茶碗	A 5 類		検出	11.4	4.2	5.8	7	6	鉄釉*・錆釉	
1300	天目茶碗	B 類		検出	14.5	5.3	6.5	2	12	鉄釉・錆釉	内反り高台
1301	天目茶碗	B 類		検出	11.4	4.3	5.8	6	12	鉄釉・錆釉	内反り高台、線刻、底外トチン
1302	天目茶碗			検出	11.8	-	*5.4	6	0	鉄釉・錆釉	
1303	灯明皿	2 類		検出	10.2	4.2	5.8	6	12	焼締	
1304	端反皿	中型		SU01	12.4	6.2	2.8	5	7	灰釉*	
1305	端反皿	中型		検出	11.3	7.1	2.7	4	5	灰釉	底外輪ドチ
1306	端反皿	小型		検出	9.4	5.1	2.6	11	12	灰釉*	印花文
1307	端反皿 (削り込み高台)	中型		検出	10.4	5.2	2.3	4	12	灰釉	底内二重圏線、底内外輪ドチ
1308	端反皿			検出	12.0	5.4	2.8	1	5	鉄釉	
1309	端反皿			検出	10.6	4.8	2.2	5	5	鉄釉・露胎	
1310	甗鉢	1 A 1 類		検出	31.6	12.2	11.3	1	1	錆釉	
1311	鉢 A	大型 2 類		検出	37.0	-	*13.2	4	0	鉄釉・灰釉?・露胎	
1312	鉢 B			検出	23.6	-	*6.6	1	0	鉄釉・灰釉?	
1313	内耳鍋			検出	23.9	10.0	11.9	1	8	錆釉	
1314	内耳鍋			検出	24.6	-	*10.5	3	0	錆釉	
1315	釜			検出	-	12.6	*2.7	0	3	錆釉	
1316	手付鍋			検出	29.6	-	*11.2	2	0	錆釉	
1317	筒形容器	A 類		検出	14.0	13.2	15.4	7	6	錆釉・露胎	口端釉拭い・重ね焼き痕
1318	筒形容器	A 類		検出	-	12.2	*8.4	0	6	錆釉・露胎	
1319	茶壺			検出	14.3	-	*12.7	12	0	錆釉・露胎	
1320	桶 A			検出	24.4	-	*9.4	2	0	鉄釉・灰釉?	
1321	桶 A			検出	26.6	-	*12.0	2	0	鉄釉・灰釉?	
1322	片口	B 類		検出	20.8	-	10.4	1	0	鉄釉・灰釉	
1323	筒形香炉			検出	6.0	-	*5.6	0	12	鉄釉・露胎	
1324	筒形香炉			検出	12.4	11.4	8.5	3	3	鉄釉・露胎	
1325	天目茶碗			SE01	11.3	4.6	4.8	12	12	鉄釉・露胎	
1326	灰釉丸碗			SE01	11.7	4.2	5.5	12	12	灰釉	
1327	鉄釉徳利			SE01	-	6.4	*16.0	0	12	鉄釉・灰釉	
M-9	銭貨	寛永通寶		SK12							
M-10	銭貨	寛永通寶		SK12							
M-11	銭貨	寛永通寶		SK12							

写 真 図 版



上品野西金地遺跡調査区全景

上段：調査区中央部の斜面部分と調査区東部の低地部分

下段：調査区西部の丘陵部分



古代以前（縄文時代・平安時代）の遺構

上段：貯蔵穴検出状況

中段左：貯蔵穴205P断面 中段右：205Pドングリ類出土状況

下段左：貯蔵穴201P検出状況 下段右：柱穴207P（401SB）断面



中世の遺構

上段：掘立柱建物群の周辺

中段左：柱穴313P（329SB）検出状況

中段右：柱穴314P（329SB）遺物出土状況

下段左：柱穴270P（329SB）土層断面

下段右：柱穴391P（379SB）断面

上品野西金地遺跡



戦国時代・近世の遺構（西部の丘陵部分）

上段：平坦面004SX全景

下段：桑下東窯跡B区全景



(集石) 土坑 (墓) 1

上段左：集石土坑 (墓) 003SX検出状況 上段右：平坦面004SX遺物出土状況 (内部に火葬骨が遺存)
 中段左：桑下東窯跡B区土坑 (墓) SK08断面 中段右：桑下東窯跡B区土坑 (墓) SK30遺物出土状況
 下段左：桑下東窯跡B区集石土坑 (墓) SK12検出状況 下段右：桑下東窯跡B区SK12遺物出土状況



平坦面035SX

上段：平坦面035SX検出状況

中段：035SX遺物出土状況

下段左：集石土坑（墓）042SK検出状況 下段右：042SK断面



(集石) 土坑 (墓) 2

上段左：集石土坑 (墓) 491SK・492SK・493SK検出状況 上段右：集石土坑 (墓) 479SK断面

中段左：415SX遺物出土状況 中段右：415SX銭貨出土状況

下段左：土坑 (墓) 513SX遺物出土状況 下段右：513SX下面炭化材 (クリ・クスノキ科・ヒサカキ) 検出状況



東斜面遺物集積330SU

上段：東斜面全景

下段左：東斜面遺物集積330SU全景 下段右：330SU近景



東斜面遺物集積380SU・東斜面土層断面

上段：遺物集積380SU検出状況

中段：380SU遺物出土状況

下段：東斜面土層断面



南斜面480NR全景

大塚前半期の遺物が大量に出土した。



南斜面480NR集石全景・土層断面

上段：南斜面480NR集石検出状況

中・下段：480NR土層断面



南斜面480NR遺物出土状況

上段左：（祖母懷）茶壺（内部に火葬骨が遺存） 上段右：燭台
 中段左：鉢類・釜など 中段右：筒形容器・搗鉢など
 下段左：双耳徳利 下段右：鉄絵鉢



南斜面480NR集石（石積・石組）検出状況・南斜面007NR遺物出土状況

上段：集石506SXと石積497SW

中段左：石列512SX 中段右：497SW

下段左：石組暗渠510SX 下段右：南斜面007NR遺物出土状況（錆蝕狛犬）



丘陵下位の平坦面

上段：丘陵下位の平坦面全景

下段左：溝020SD遺物出土状況 下段右：掘立柱建物090SB・091SB・092SB・093SB



中世の遺物・戦国時代の遺構出土遺物

上品野西金地遺跡



戦国時代の遺構035SX出土遺物



77



78



76



79



513SX出土遺物

戦国時代の遺構513SX出土遺物

上品野西金地遺跡



85



88



93



94



100



101



103



104



105

大窯期前半の遺物 1 (天目茶碗 1)



大窯期前半の遺物 2 (天目茶碗 2)

上品野西金地遺跡



137



142



143



138



145



148



149



154



161



162



大窯期前半の遺物3（丸碗・平碗等）



168



170



171



172



185



188



204



206



221



228

大窯期前半の遺物4（山茶碗・灯明皿）



大窯期前半の遺物（縁釉小皿・縁釉挟み皿）



大窯期前半の遺物6（腰折皿）



大窯期前半の遺物 7 (端反皿 1)



大窯期前半の遺物 8（端反皿 2）



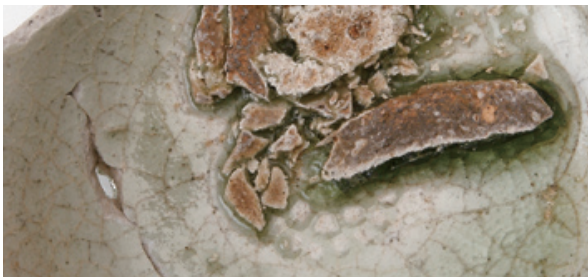
大窯期前半の遺物9（端反皿3）



442



447



449



464

大窯期前半の遺物10（端反皿4）



469



483



485

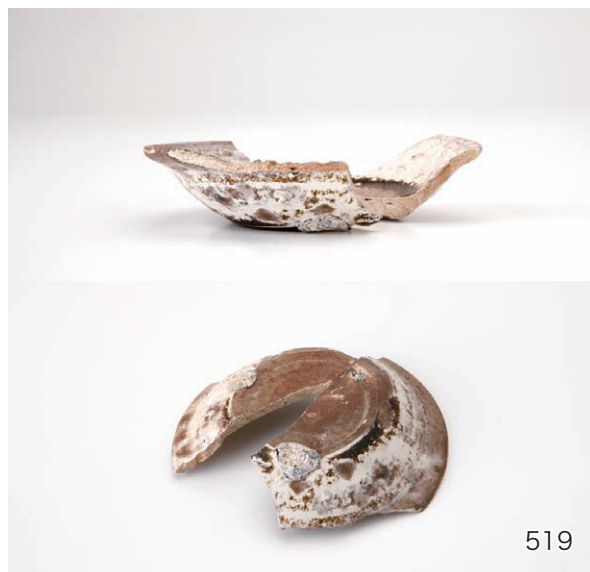


493

大窯期前半の遺物11（丸皿）



515



519



520



530



535



541

大窯期前半の遺物12（稜皿・その他皿類）



大窯期前半の遺物13（擂鉢1）



558



562



563



564

大窯期前半の遺物14（擂鉢2）

上品野西金地遺跡



大窯期前半の遺物15（擂鉢3）



大窯期前半の遺物16（擂鉢4）



589



595



600



602

大窯期前半の遺物17（擂鉢5）



603



604



607



608

大窯期前半の遺物18（鉢1）



609



613



615



615線刻



617

大窯期前半の遺物19（鉢2）



621



622



628



636

大窯期前半の遺物20（鉢3）

上品野西金地遺跡



大窯期前半の遺物21（浅鉢・その他鉢類）



大窯期前半の遺物22（その他の容器）

上品野西金地遺跡



大窯期前半の遺物23（内耳鍋）



大塚期前半の遺物24 (釜1)



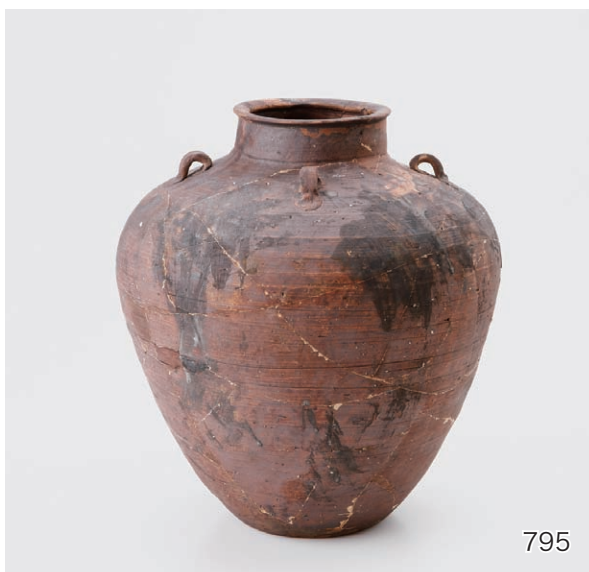
大窯期前半の遺物25（釜2・その他釜類）



大窯期前半の遺物26（燭台）



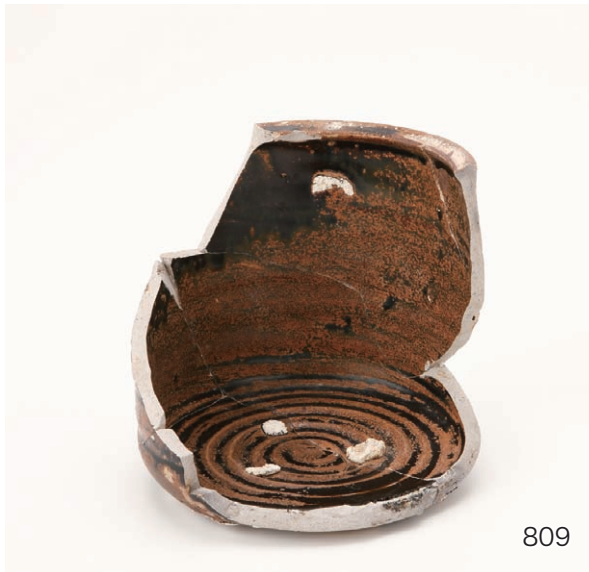
大窯期前半の遺物27（甕）



大窯期前半の遺物28（祖母懷茶壺）



大窯期前半の遺物29（有壺壺・筒形容器1）



大窯期前半の遺物30（有壺壺・筒形容器2）



822



823



824



826



827



837

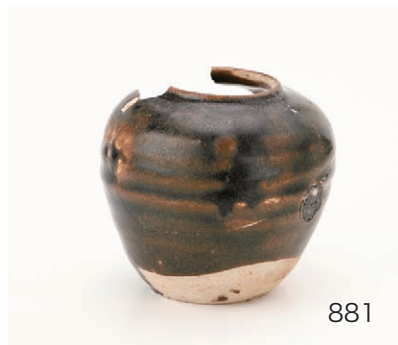
大窯期前半の遺物31（徳利1）



大窯期前半の遺物32（徳利2・双耳壺）



880



881



881~887



872



876



889



892



893



895



898



900



903



907



908



910



909

大窯期前半の遺物34（狛犬・水滴）



大窯期前半の遺物35（窯道具類1）



大窯期前半の遺物36（窯道具類2）

上品野西金地遺跡



近世の遺物 1





1



1105



1153



1153加工痕



1157加工痕



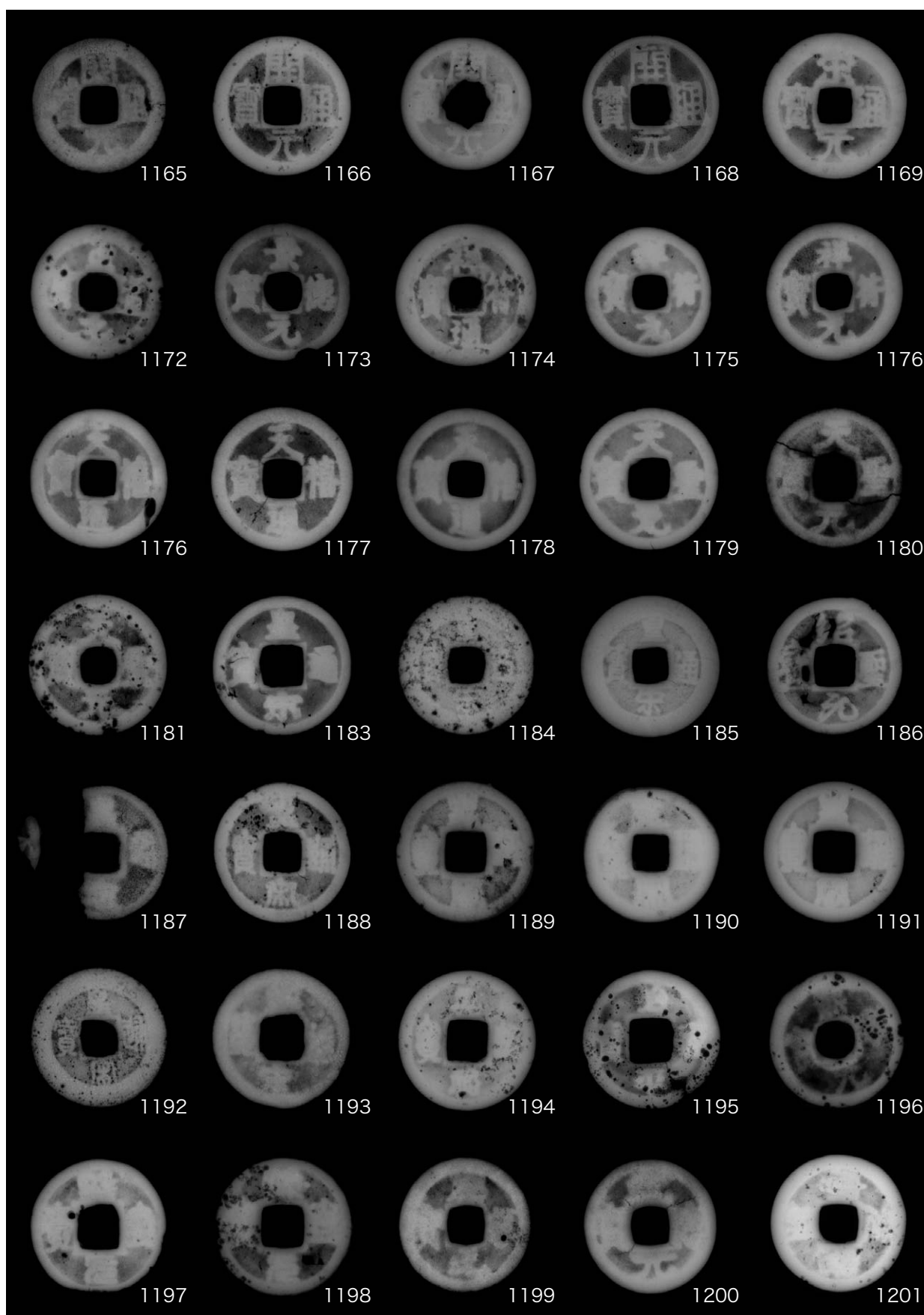
1158



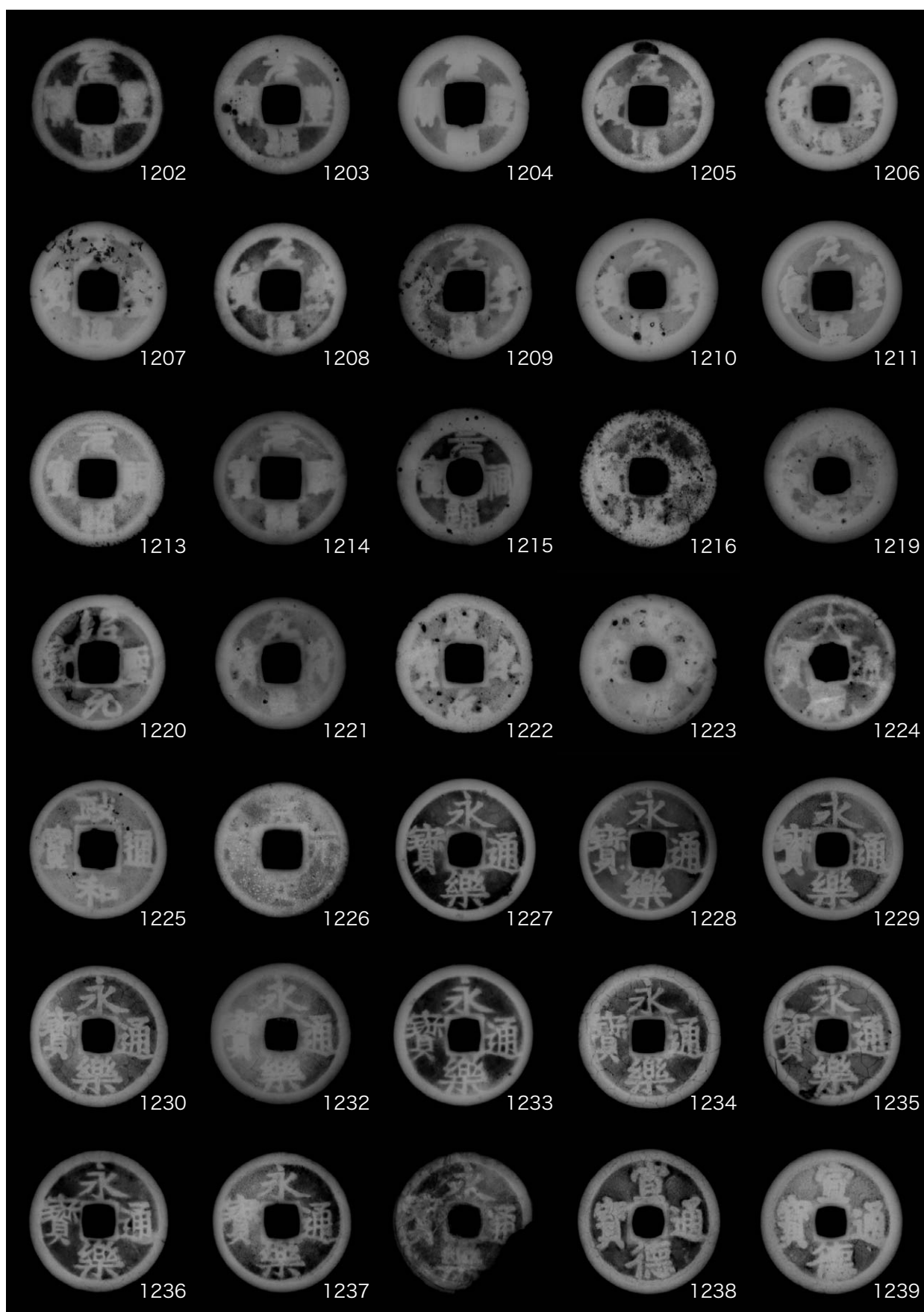
1159



1164



錢貨X線画像 1



錢貨X線画像 2

ふ り が な	かみしなのにしかねじいせき
書 名	上品野西金地遺跡
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第173集
編 著 者 名	早野浩二(編集)・川添和暁・パレオ・ラボAMS年代測定グループ・佐々木由香・バンダリ スタルジャン・黒沼保子
編 集 機 関	公益財団法人愛知県教育スポーツ・振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL 0567(67)4161
発 行 年 月 日	西暦2013年3月31日

ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみしなのにしかねじ 上品野西金地	あいちけんせとし 愛知県瀬戸市	23204	3710	35度	136度	1998.02.17 ～1998.03.01	100	一般国道
	かみしなのちょう 上品野町			10分 50秒	54分 01秒	2006.09.11 ～2007.03.27	3,400	363号線 道路改良 工事

所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上品野西金地 遺跡	集落	縄文時代 古代 中世 戦国時代 近世	貯蔵穴 掘立柱建物 掘立柱建物、溝 土坑、遺物集積 掘立柱建物	石器、縄文土器 土師器、須恵器、灰釉陶器 山茶碗、古瀬戸陶器 大窯陶器、銭貨 瀬戸美濃陶器、木製品	有舌尖頭器の出土 縄文時代の貯蔵穴の 検出 大窯期前半の陶器の 大量出土

文 書 番 号	発掘届出(10埋セ第62号・1998.2.27/18埋セ第10号・2006.5.17) 通知(10教文第61-3号・1998.3.17/18教生第625号・2006.6.22) 終了届・保管証・発見届(10埋セ第115号・1998.3.17/18埋セ第112号・2007.3.27) 鑑査結果通知(10教文第61-3号・1998.5.22/19教生第466号・2007.5.23)
---------	---

要 約	上品野西金地遺跡は、品野盆地北東に位置し、桑下城跡、桑下東窯跡から連続する丘陵斜面から低地にかけて立地する。丘陵斜面からは保存状態が良好な大窯期前半の陶器が大量に出土したことから、遺跡付近は周辺に流通する大窯陶器の集積地として利用されていたことが推測される。その他、縄文時代の貯蔵穴、古代・中世の掘立柱建物等を検出した。
-----	--

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第173集

上 品 野 西 金 地 跡

2013年 3 月31日

発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 株式会社サンメッセ

